月の輪遺跡群

1981

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第１集

月　の　輪　遺　跡　群

── 星山放水路建設に伴なう発掘調査報告書 ──

１　９　８　１

富　士　宮　市　教　育　委　員　会

序

月の輪遺跡群の発掘調査は星山放水路施設建設に伴なう事前調査として、昭和45年より47年の３ヶ年という長期間にわたって実施されました。発掘調査によって得られました貴重な資料は昭和47年に概略報告いたしましたが、それは莫大な資料の一握にすぎませんでした。

こうした間に、高度経済成長による開発の波は例外なく、この霊峰富士に代表される富士宮市にも押し寄せ、自然に満ちた人文環境もその装いも大きく変貌させようとしています。遠く我々の先祖が、自然に逆らうことなく、自然の恵みを大切にし、自然そのものを最大限に活用し、今日まで保ってきた美しい自然、すなわち歴史が一瞬にして帰らぬものとなってしまう現況には看過できないものがあり、このための万全な埋蔵文化財保護対策の再検討が急務となってきました。

このたびの、月の輪遺跡発掘調査報告書の刊行はそうした埋蔵文化財保護対策の一環であり、長い歴史のなかに培われた郷土富士宮の復原によって、次世代によって築かれるであろう調和ある未来社会への指標の提示でもあります。

ここに、本書を刊行できますことは、長期間にわたる発掘調査、さらには整理、執筆作業に携わっていただきました若林団長をはじめとする月の輪遺跡発掘調査団の皆様の御努力によるものであります。あわせて、発掘調査の遂行にあたって多大な御援助を賜りました星山区の歴代区長をはじめとする地元の皆様に対しまして深く感謝申し上げます。とともに我々も責務を果したという大きな喜びにたえません。

本書が本市のみならず、ひろく古代社会究明の資となり、学術研究の一助となることを切望いたし、発掘調査、ならびに整理、執筆作業に直接、関接に御指導、御尽力を賜わりました関係各位に対しまして、調査団ともども、深い感謝と敬意を表します。

昭和 56 年 3 月

富士宮市教育長　塩川隆司

例　　言

1．本書は、星山放水路建設工事にともなって昭和45年～47年に事前調査された、静岡県富士宮市星山地内の月の輪平遺跡・月の輪下遺跡・王藤内の塚、および黒田地内の南部谷戸遺跡、さらに昭和52年に緊急調査された月の輪上遺跡の発掘調査報告である。

2．調査主体は静岡県から委託された富士宮市教育委員会で、調査の中心になったのは富士宮市教育委員会から委託された月の輪遺跡発掘調査団である。調査にかかわる費用は、静岡県と富士宮市が負担した。報告書作成にかかわる費用については富士宮市が負担した。

3．本書の執筆は若林淳之・塩川隆司・植松章八・野村昭光・佐藤政次・湯川悦夫・加納俊介・平林将信・馬飼野行雄・渡井一信・渡辺康弘が担当した。それぞれ執筆者名を文末に記し文責を明らかにした。

4．遺構実測図の整理および清書は馬飼野・渡井が実施し、遺物の整理・実測は湯川・加納・呉地・鍵和田・渡辺が主体となり、土器類の清書は馬飼野が、石器類は渡辺が実施した。

5．写真撮影は主に植松が行い、平林が補佐した。遺物写真は馬飼野が担当し、伊藤昌光（富士宮市教育委員会嘱託）の協力を得た。

6．本書の編集は若林団長・中野国雄の指示のもとに、植松・馬飼野・渡井が担当した。なお、若干の文体・用語の統一をはかった。

　印刷出版に関する事務は富士宮市教育委員会があたった。

7．調査に関する資料は全て富士宮市教育委員会が保管している。

月　の　輪　遺　跡　群

目　　次

序
例　　言
序　　編
Ⅰ　発見と調査の経過・方法 …… 1
1．発見と調査に至る経過 …… 1
2．月の輪平・月の輪下・南部谷戸遺跡の調査の経過・方法 …… 2
3．月の輪上遺跡の発見と調査の経過 …… 4

Ⅱ　環　　境 …… 9
1．自然環境 …… 9
(1) 地　　形 …… 9
(2) 地　　質 …… 10
2．周辺の遺跡 …… 12
3．遺構と土層との関係 …… 16

本　　編
Ⅰ　月の輪平遺跡 …… 19
1．遺　　構 …… 19
(1) 住居址 …… 19
(2) 掘立柱建物址 …… 60
(3) 特殊遺構 …… 61
2．遺　　物 …… 63
(1) 土器類 …… 63
(2) 砥　　石 …… 105
(3) 鉄製品 …… 108
(4) 玉　　類 …… 109

Ⅱ　月の輪下遺跡 …… 109
1．遺　　構 …… 109
(1) 住居址および不定円形土坑 …… 109

(2) 集石遺構 ……114
2．遺　　物 ……115
(1) 土 器 類 ……115

Ⅲ 南部谷戸遺跡 ……118
1．遺　　構 ……118
(1) 住 居 址 ……118
(2) 方形周溝墓 ……122
(3) その他の遺構 ……126
2．遺　　物 ……127
(1) 土 器 類 ……127
(2) 石 器 類 ……132
(3) 玉　　類 ……132

Ⅳ 月の輪上遺跡 ……133
1．遺　　構 ……133
(1) 住 居 址 ……134
2．遺　　物 ……137
(1) 土 器 類 ……137

Ⅴ 縄文時代の遺物 ……139
1．土 器 類 ……139
2．石 器 類 ……142

Ⅵ 王藤内の塚 ……147
1．遺　　構 ……147
2．遺　　物 ……148
3．ま と め ……148

考 察 編
Ⅰ 月の輪遺跡群出土の土器 ……157
1．月の輪遺跡群出土土器の分類 ……157
2．出土土器の編年的位置 (1)－月の輪新について ……186
3．出土土器の編年的位置 (2)－月の輪古について ……204

Ⅱ　月の輪平遺跡の集落構成 ……214
1．遺構の分析 ……214
2．集落の分析 ……222
3．集落復原の検討 ……227
4．集落復原 ……229

Ⅲ　住居址床面の二重構造について ……232
1．発見とその構造 ……232
2．月の輪平・南部谷戸遺跡の二重構造 ……233
3．二重構造住居址の類例 ……233
4．ま　と　め ……238

Ⅳ　南部谷戸遺跡の方形周溝墓について ……241
1．本遺跡の方形周溝墓の特徴 ……241
2．東日本各地の方形周溝墓の概観 ……241
3．方形周溝墓の単位について ……246
4．方形周溝墓と住居址の重複関係について ……248
5．ま　と　め ……249

Ⅴ　古墳時代初頭期を中心とした遺跡分布 ……250
1．はじめに ……250
2．古墳時代初頭前後の遺跡 ……250
3．遺跡占地の各段階 ……251
4．遺跡群の生活範囲 ……253
5．ま　と　め ……255

Ⅵ　調査総括 ……257
1．月の輪遺跡群調査の成果について ……257
2．月の輪遺跡群の発掘を終えて ……260

挿　図　目　次

第 1 図　位置図 …… 1
第 2 図　月の輪平、月の輪下遺跡地形図 …… 3
第 3 図　地　形　図 …… 9
第 4 図　月の輪遺跡群東西断面図 …… 10
第 5 図　大宮断層図 …… 11
第 6 図　地　質　図 …… 11
第 7 図　周辺の遺跡 …… 13
第 8 図　月の輪遺跡群東西土層断面図 …… 17
第 9 図　第 1 号住居址実測図 …… 19
第 10 図　月の輪平遺跡全体図 …… 21
第 11 図　第 2 ・ 3 号住居址実測図 …… 23
第 12 図　第 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ・ 8 ・ 9 ・10・12号住居址実測図 …… 25
第 13 図　第11号住居址および第 1 号掘立柱建物址実測図 …… 27
第 14 図　第13・15・23・24・25・26・31・32・号住居址実測図 …… 29
第 15 図　第16・17・20・21・27・30号住居址実測図 …… 31
第 16 図　第17・18号住居址実測図 …… 32
第 17 図　第45・45号下住居址実測図 …… 34
第 18 図　第19・62号住居址実測図 …… 35
第 19 図　第63・65号住居址実測図 …… 36
第 20 図　第64・66号住居址実測図 …… 37
第 21 図　第22号住居址および第22号上掘立柱建物址実測図 …… 38
第 22 図　第56・57・59・60・61号住居址実測図 …… 39
第 23 図　第33・35・36号住居址実測図 …… 41
第 24 図　第37・38・39号住居址実測図 …… 43
第 25 図　第40・41号住居址実測図 …… 44
第 26 図　第42号住居址実測図 …… 45
第 27 図　第43・47号住居址実測図 …… 46
第 28 図　第44号住居址実測図 …… 47
第 29 図　第46・51・52・53・54・55号住居址実測図 …… 48
第 30 図　第48・49・50・67・68号住居址実測図 …… 49
第 31 図　第69号住居址および東端部ピット群実測図 …… 51

第 32 図　第70・71号住居址実測図 …… 52
第 33 図　第72・73・74号住居址実測図 …… 53
第 34 図　第75・78号住居址実測図 …… 55
第 35 図　第76・77号住居址実測図 …… 56
第 36 図　第79・80・81・82・82・84・85・86・87・88
・89・90・91号住居址実測図 …… 57
第 37 図　第１号特殊遺構 …… 60
第 38 図　第２号特殊遺構 …… 61
第 39 図　第３・４号特殊遺構 …… 62
第 40 図　土器実測図…… …… 87
第 41 図　土器実測図 …… 88
第 42 図　土器実測図 …… 89
第 43 図　土器実測図 …… 90
第 44 図　土器実測図 …… 91
第 45 図　土器実測図 …… 92
第 46 図　土器実測図 …… 93
第 47 図　土器実測図 …… 94
第 48 図　土器実測図 …… 95
第 49 図　土器実測図 …… 96
第 50 図　土器実測図 …… 97
第 51 図　土器実測図 …… 98
第 52 図　土器実測図 …… 99
第 53 図　土器実測図 ……100
第 54 図　土器実測図 ……101
第 55 図　土器実測図 ……102
第 56 図　土器実測図 ……103
第 57 図　土器実測図 ……104
第 58 図　砥石・鉄製品および玉類実測図 ……107
第 59 図　月の輪下遺跡全体図 ……110
第 60 図　第１号住居址および土壙群実測図 ……111
第 61 図　第２・４号住居址、不定円形土壙、
第７・８号集石および土壙群実測図 ……112
第 62 図　第５号住居址、第１・２・３・４・５
・６・９号集石および土壙群実測図 ……113

第 63 図　土器実測図 ……117
第 64 図　第１号住居址実測図 ……118
第 65 図　南部谷戸遺跡全体図 ……119
第 66 図　第２・３・４号住居址実測図 ……120
第 67 図　第５・６・７・８・９・10・11・12号住居址実測図 ……121
第 68 図　第１号方形周溝墓実測図 ……122
第 69 図　第２号方形周溝墓実測図 ……123
第 70 図　第３号方形周溝墓実測図 ……124
第 71 図　第４号方形周溝墓実測図 ……125
第 72 図　土器実測図 ……139
第 73 図　土器実測図 ……130
第 74 図　石器実測図 ……131
第 75 図　月の輪上遺跡全体図 ……133
第 76 図　第１・２号住居址実測図 ……134
第 77 図　第３・４号住居址実測図 ……135
第 78 図　土器実測図 ……138
第 79 図　縄文式土器拓影 ……139
第 80 図　石器実測図 ……143
第 81 図　石器実測図 ……144
第 82 図　石器実測図 ……145
第 83 図　甕Ａ・甕Ｄの器高と口径 ……159
第 84 図　甕Ａ・甕Ｄの細分 ……161
第 85 図　壺Ｃ・壺Ｄの細分 ……164
第 86 図　壺・高杯の文様拓影－１ ……176
第 87 図　壺・高杯の文様拓影－２ ……177
第 88 図　壺・甕の調整、施文拓影－１ ……178
第 89 図　壺・甕の調整、施文拓影－２ ……179
第 90 図　壺・甕の調整、施文拓影－３ ……180
第 91 図　器種分類図 ……183
第 92 図　住居址規模別分布図 ……214
第 93 図　住居址新旧関係図 ……216
第 94 図　火災住居址、炉を有する住居址分布図 ……217
第 95 図　柱穴、ならびに柱穴以外のピットを有する住居址分布図 ……219
第 96 図　住居址規模別分布図 ……223

第 97 図　住居址主軸方位図 ……227
第 98 図　最終末期存在可能住居址 ……230
第 99 図　3基本型模式図 ……233
第 100 図　遺跡分布図 ……254

挿　表　目　次

第 1 表　発掘調査経過一覧(1) …… 5
第 2 表　発掘調査経過一覧(2) …… 6
第 3 表　発掘調査経過一覧(3) …… 7
第 4 表　発掘調査経過一覧(4) …… 8
第 5 表　富士山の活動史（町田　洋） …… 11
第 6 表　土器一覧表 …… 63
第 7 表　土器一覧表 …… 64
第 8 表　土器一覧表 …… 65
第 9 表　土器一覧表 …… 66
第 10 表　土器一覧表 …… 67
第 11 表　土器一覧表 …… 68
第 12 表　土器一覧表 …… 69
第 13 表　土器一覧表 …… 70
第 14 表　土器一覧表 …… 71
第 15 表　土器一覧表 …… 72
第 16 表　土器一覧表 …… 73
第 17 表　土器一覧表 …… 74
第 18 表　土器一覧表 …… 75
第 19 表　土器一覧表 …… 76
第 20 表　土器一覧表 …… 77
第 21 表　土器一覧表 …… 78
第 22 表　土器一覧表 …… 79
第 23 表　土器一覧表 …… 80
第 24 表　土器一覧表 …… 81
第 25 表　土器一覧表 …… 82
第 26 表　土器一覧表 …… 83
第 27 表　土器一覧表 …… 84

第 28 表　土器一覧表 …… 85
第 29 表　土器一覧表 …… 86
第 30 表　集石遺構一覧表 ……114
第 31 表　土器一覧表 ……115
第 32 表　土器一覧表 ……116
第 33 表　土器一覧表 ……127
第 34 表　土器一覧表 ……128
第 35 表　土器一覧表 ……129
第 36 表　土器一覧表 ……137
第 37 表　縄文土器出土地点一覧表 ……141
第 38 表　石器計測表 ……146
第 39 表　月の輪平遺跡住居址一覧表 ……150
第 40 表　月の輪平遺跡住居址一覧表 ……151
第 41 表　月の輪平遺跡住居址一覧表 ……152
第 42 表　月の輪平遺跡住居址一覧表 ……153
第 43 表　月の輪平遺跡住居址一覧表 ……154
第 44 表　月の輪下遺跡住居址一覧表 ……155
第 45 表　南部谷戸遺跡住居址一覧表 ……155
第 46 表　南部谷戸遺跡住居址一覧表 ……156
第 47 表　南部谷戸遺跡方形周溝墓一覧表 ……156
第 48 表　月の輪上遺跡住居址一覧表 ……156
第 49 表　遺跡一覧表 ……211
第 50 表　遺跡一覧表 ……212
第 51 表　月の輪遺跡群出土土器組成表 ……213
第 52 表　住居址形状一覧表 ……216
第 53 表　住居址重複関係一覧表 ……226
第 54 表　住居址新旧関係表 ……226
第 55 表　月の輪平・南部谷戸遺跡住居址別床面構造一覧表 ……233
第 56 表　床面二重構造遺構時期別一覧表 ……239
第 57 表　遺跡占地群の各段階 ……252
第 58 表　遺跡分布表 ……253

図　版　目　次

図版第 1　月の輪平遺跡 (1)

A　遠　　景

図版第 2　月の輪平遺跡 (2)

A　調査前景（南B．Mより）

B　調査前景（南東より）

図版第 3　月の輪平遺跡 (3)

A　完掘全景（南中央より）

B　完掘全景（南中央より）

図版第 4　月の輪平遺跡 (4)

A　第1号住居址完掘

B　第1号住居址遺物出土状況－1

図版第 5　月の輪平遺跡 (5)

A　第1号住居址遺物出土状況－2

B　第1号住居址遺物出土状況－3

図版第 6　月の輪平遺跡 (6)

A　第2・3号住居址完掘

B　第2号住居址完掘

図版第 7　月の輪平遺跡 (7)

A　第4・5号住居址床面

B　第4・5号住居址掘り方

図版第 8　月の輪平遺跡 (8)

A　第7・11・23号住居址床面

B　第7・11・13・23号住居址完掘

図版第 9　月の輪平遺跡 (9)

A　第4・5・7・11・23号住居址床面

B　第4・5・7・11号住居址完掘

図版第 10　月の輪平遺跡 (10)

A　第8・9号住居址完掘

B　第8号住居址土器出土状況

図版第 11　月の輪平遺跡 (11)

A　第8号住居址張り出しピット

B　第9号住居址張り出しピット

図版第12　月の輪平遺跡 (12)
A　第12号住居址完掘
B　第13号住居址床面
図版第13　月の輪平遺跡 (13)
A　第13号住居址掘り方
B　第13号住居址内ピット
図版第14　月の輪平遺跡 (14)
A　第15・24号住居址床面
B　第15号住居址掘り方
図版第15　月の輪平遺跡 (15)
A　第17号住居址床面
B　第17号住居址掘り方
図版第16　月の輪平遺跡 (16)
A　第17号住居址出土小型丸底土器
B　第17号住居址出土高杯片
図版第17　月の輪平遺跡 (17)
A　第18号住居址床面、および炭化材出土状況
B　第18号住居址半掘状況
図版第18　月の輪平遺跡 (18)
A　第18号住居址炭化材出土状況－1
B　第18号住居址炭化材出土状況－2
図版第19　月の輪平遺跡 (19)
A　第18号住居址土器出土状況－1
B　第18号住居址土器出土状況－2
図版第20　月の輪平遺跡 (20)
A　第20号住居址床面
B　第20号住居址掘り方
図版第21　月の輪平遺跡 (21)
A　第22号住居址床面
B　第22号住居址掘り方
図版第22　月の輪平遺跡 (22)
A　第22号住居址内柱穴群
B　第22号住居址上層土器出土状況
図版第23　月の輪平遺跡 (23)

A　第23号住居址完掘
B　第26号住居址完掘
図版第24　月の輪平遺跡 (24)
A　第26・33・35・36号住居址掘り方
B　第32号住居址掘り方
図版第25　月の輪平遺跡 (25)
A　第33号住居址床面、および焼土出土状況
B　第33号住居址完掘
図版第26　月の輪平遺跡 (26)
A　第35・36号住居址完掘
B　第37・38・39号住居址完掘
図版第27　月の輪平遺跡 (27)
A　第40・41号住居址床面
B　第40・41号住居址掘り方
図版第28　月の輪平遺跡 (28)
A　第43号住居址床面
B　第43号住居址掘り方
図版第29　月の輪平遺跡 (29)
A　第45号住居址完掘（中央部第45号下住居址）
B　第46・52号住居址完掘
図版第30　月の輪平遺跡 (30)
A　第46・52・53号住居址完掘
B　第51・54・55号住居址完掘
図版第31　月の輪平遺跡 (31)
A　第47号住居址床面
B　第47号住居址掘り方
図版第32　月の輪平遺跡 (32)
A　第48～50・67・68号住居址床面
B　第48～50・67・68号住居址掘り方
図版第33　月の輪平遺跡 (33)
A　第48号住居址土器出土状況
B　第42・43・47・48号住居址完掘
図版第34　月の輪平遺跡 (34)
A　第56号住居址床面

B　第56号住居址土器出土状況
図版第35　月の輪平遺跡 (35)
A　第56・57・59・60・61号住居址床面
B　第56・57・59・60・61号住居址掘り方
図版第36　月の輪平遺跡 (36)
A　第57号住居址出土坩群
B　第59号住居址出土大型壺
図版第37　月の輪平遺跡 (37)
A　第60号住居址床面
B　第61号住居址床面
図版第38　月の輪平遺跡 (38)
A　第62号住居址焼土、炭火材出土状況
B　第62号住居址床面
図版第39　月の輪平遺跡 (39)
A　第62号住居住居址掘り方
B　第62号住居址土器出土状況
図版第40　月の輪平遺跡 (40)
A　第63号住居址床面
B　第64号住居址床面
図版第41　月の輪平遺跡 (41)
A　第65号住居址床面
B　第66号住居址床面
図版第42　月の輪平遺跡 (42)
A　第66号住居址掘り方
B　第69号住居址床面、および土器出土状況
図版第43　月の輪平遺跡 (43)
A　第69号住居址掘り方
B　第69号住居址土器出土状況
図版第44　月の輪平遺跡 (44)
A　第70号住居址掘り方
B　第71号住居址床面
図版第45　月の輪平遺跡 (45)
A　第72号住居址床面
B　第72号住居址掘り方

図版第46　月の輪平遺跡 (46)
A　第73号住居址床面
B　第73号住居址土器出土状況
図版第47　月の輪平遺跡 (47)
A　第75号住居址床面
B　第75号住居址掘り方、第78号住居址床面
図版第48　月の輪平遺跡 (48)
A　第76・77号住居址床面
B　第76・77号住居址掘り方
図版第49　月の輪平遺跡 (49)
A　第79～91号住居址床面
B　第79～91号住居址掘り方
図版第50　月の輪平遺跡 (50)
A　第79～81号住居址床面
B　第83号住居址床面
図版第51　月の輪平遺跡 (51)
A　第83・84・90号住居址掘り方
B　第84号住居址床面
図版第52　月の輪平遺跡 (52)
A　第84・85・86号住居址掘り方
B　第87・88号住居址掘り方
図版第53　月の輪平遺跡 (53)
A　第86号住居址床面
B　第87号住居址床面
図版第54　月の輪平遺跡 (54)
A　第89号住居址床面
B　第89号住居址掘り方
図版第55　月の輪平遺跡 (55)
A　掘立柱建物址（No－1）
B　東端部ピット群
図版第56　月の輪平遺跡 (56)
A　東端部ピット
B　中世土坑
図版第57　月の輪平遺跡 (57)

A　DⅡ－6グリッド出土特殊坩群
B　第1号住居址北側配石遺構
図版第58　月の輪下遺跡（1）
A　完掘全景－1
B　集石全景
図版第59　月の輪下遺跡（2）
A　完掘全景－2
B　第1～9号集石全景
図版第60　月の輪下遺跡（3）
A　第1号住居址完掘
B　第2号住居址完掘
図版第61　月の輪下遺跡（4）
A　不定円形土坑完掘
B　第4号住居址完掘
図版第62　月の輪下遺跡（5）
A　第1号集石、および第5号住居址床面
B　第2号集石
図版第63　月の輪下遺跡（6）
A　第3・4・5号集石
B　第6号集石
図版第64　月の輪下遺跡（7）
A　第7号集石
B　第8号集石
図版第65　月の輪下遺跡（8）
A　第9号集石
B　第2号住居址内集石
図版第66　月の輪下遺跡（9）
A　第9号中世土坑
B　第3・4・5・6・7・47号中世土坑
図版第67　月の輪下遺跡（10）
A　第22号中世土坑
B　第43・50号中世土坑
図版第68　南部谷戸遺跡（1）
A　調査前景－1

B　調査前景－2
図版第69　南部谷戸遺跡 (2)
A　方形周溝墓全景
B　第1・4号方形周溝墓全景
図版第70　南部谷戸遺跡 (3)
A　第2・3号方形周溝墓全景
B　第3号方形周溝墓内土坑
図版第71　南部谷戸遺跡 (4)
A　第3号方形周溝墓土層断面、および勾玉出土状況
B　第3号方形周溝墓南溝磨製石鏃出土状況
図版第72　南部谷戸遺跡 (5)
A　第4号方形周溝墓西溝土層断面状況
B　第4号方形周溝墓南溝
図版第73　南部谷戸遺跡 (6)
A　第4号方形周溝墓溝内状況
B　第4号方形周溝墓内土器出土状況
図版第74　南部谷戸遺跡 (7)
A　住居址完掘全景
B　第1～3号住居址完掘
図版第75　南部谷戸遺跡 (8)
A　第4号住居址床面
B　第4号住居址掘り方
図版第76　南部谷戸遺跡 (9)
A　第5号住居址床面
B　第5号住居址掘り方
図版第77　南部谷戸遺跡 (10)
A　第6・8号住居址掘り方
B　第12号住居址床面、および焼土露出状況
図版第78　南部谷戸遺跡 (11)
A　第12号住居址掘り方
B　第12号住居址土器出土状況
図版第79　月の輪上遺跡 (1)
A　調査前景
B　第1号住居址床面

図版第 80　月の輪上遺跡 (2)
A　第1号住居址掘り方
B　第2号住居址土器、および炭化材出土状況
図版第 81　月の輪上遺跡 (3)
A　第2号住居址炭火材、および掘り方状況
B　第2号住居址掘り方
図版第 82　月の輪上遺跡 (4)
A　第3号住居址掘り方
B　第4号住居址掘り方
図版第 83　王藤内の塚 (1)
A　調査前景
B　石組状況
図版第 84　王藤内の塚 (2)
A　完掘全景
B　人骨出土状況
図版第 85　出土遺物 (1)
図版第 86　出土遺物 (2)
図版第 87　出土遺物 (3)
図版第 88　出土遺物 (4)
図版第 89　出土遺物 (5)
図版第 90　出土遺物 (6)
図版第 91　出土遺物 (7)
図版第 92　出土遺物 (8)
図版第 93　出土遺物 (9)
図版第 94　出土遺物 (10)
図版第 95　出土遺物 (11)
図版第 96　出土遺物 (12)
図版第 97　出土遺物 (13)
図版第 98　出土遺物 (14)
図版第 99　出土遺物 (15)
図版第 100　出土遺物 (16)
図版第 101　出土遺物 (17)
図版第 102　出土遺物 (18)
図版第 103　出土遺物 (19)

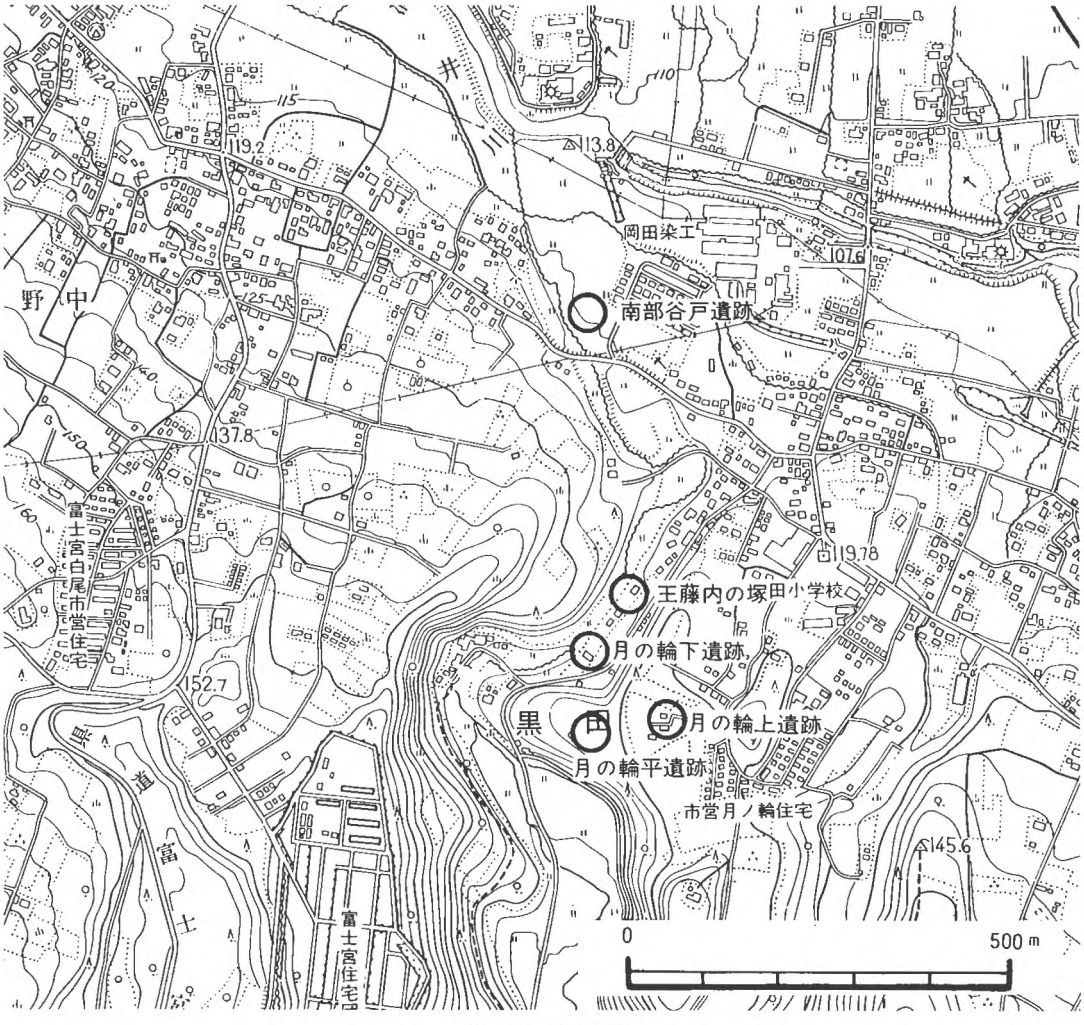
序　編

Ⅰ　発見と調査の経過・方法

1　発見と調査にいたる経過

本遺跡群の発見は，昭和初年にまでさかのぼる。昭和５年発行の『静岡県史』第一巻には，金石併用時代の遺跡として,「黒田区星山月の輪では縄文式土器・石器及び土師器も出るが，弥生式土器の坩や磨製石鏃が出てゐる」という記述がある。〝星山字月の輪〟の呼称が現在のどの遺跡を指しているかは明瞭にしがたいが，月の輪上か月の輪平遺跡のいずれかを指すものといえよう。よって，本遺跡群の発見も，市内の大遺跡のほとんどと同様に，昭和初年に活躍した，佐野武勇・佐野要吉らの岳南考古学会の活躍の成果としてよいものである。

第二次大戦後における，本遺跡群の再発見とより詳細な報告および公認は，昭和20年代後半に



第Ⅰ図　位置図

おける中野国雄の活動による。昭和29年の報文（中野　1954）では，富士郡の遺跡地名表を掲げるが，その弥生式文化遺跡として，黒田東部・黒田坂戸口上・仝五反田・仝東村・仝南部ヶ谷戸の諸遺跡があげられている。それらは，昭和36年発行の静岡県遺跡地名表（静岡県教育委員会1961）では，黒田五反田・黒田自証寺・星山月ノ輪・星山温泉場の４遺跡として整理されている。これを現在の遺跡名になおすと，黒田五反田はそのまま，黒田自証寺が南部谷戸遺跡，星山月の輪が月の輪上および月の輪平遺跡，星山温泉場が月の輪下遺跡ということになる。

ここに，富士山の大沢崩れからの流出土砂が潤井川を経て田子浦港に至り，港湾内に堆積してその機能を麻痺させることを防ぐ目的で星山放水路の施設が決まり，用地内の遺跡調査に着手したのが，昭和44年度に入ってからであった。市教育委員会が県教育委員会の指導を得て，遺跡分布調査を実施したのは，昭和44年５月26日で，調査にあたったのは若林淳之（静岡大学教授）・望月董弘（静岡市立登呂博物館）で，植松も同行した。この踏査によって，南部谷戸・月の輪下・月の輪平の３遺跡が改めて確認・命名されるとともに，事前調査の必要性が明らかとなった。

市教育委員会は関係諸機関と協議して，昭和44年度事業として月の輪平遺跡の予備調査を計画して，調査団長，若林淳之（静岡大学教授），主任調査員，中野国雄（修善寺中学校教諭），調査員，塩川隆司（東部教育事務所指導主事）・植松章八（県立吉原高校教諭）を委嘱した。こうして，44年から46年にかけて３次の調査が実施された。

ところが，昭和47年６月，当地を襲った集中豪雨は大沢崩れの土砂流を大量に潤井川に落し，それによって市内各所に未曽有の洪水をもたらした。このため，星山放水路は，にわかに潤井川のひきおこす洪水防止の目的でその施設を早めることになり，当初昭和53年度工事完成，昭和48年度調査完了の予定が，47年度夏期に調査終了するよう変更された。この方針が調査団に知らされたのは，第４次調査着手直前の47年７月22日であった。よって，調査体制再編強化の方策も得られないまま，とにかく方針を変更して調査の完了をめざすことになった。

以上が，星山放水路施設に伴う，月の輪平・月の輪下・南部谷戸遺跡をめぐる〝発見と調査にいたる経過〟の大要である。ここで，記述の便のため，月の輪上遺跡のそれについては，「３．月の輪上遺跡の発見と調査の経過」に一括して述べることにしたい。

２　月の輪平・月の輪下・南部谷戸遺跡の調査の経過・方法

本調査の経過は，第１～４表にその詳細を示したが，大要は次の通りである。

第１次調査　月の輪平遺跡予備調査……昭和44年12月21日～昭和45年３月４日（24日間）

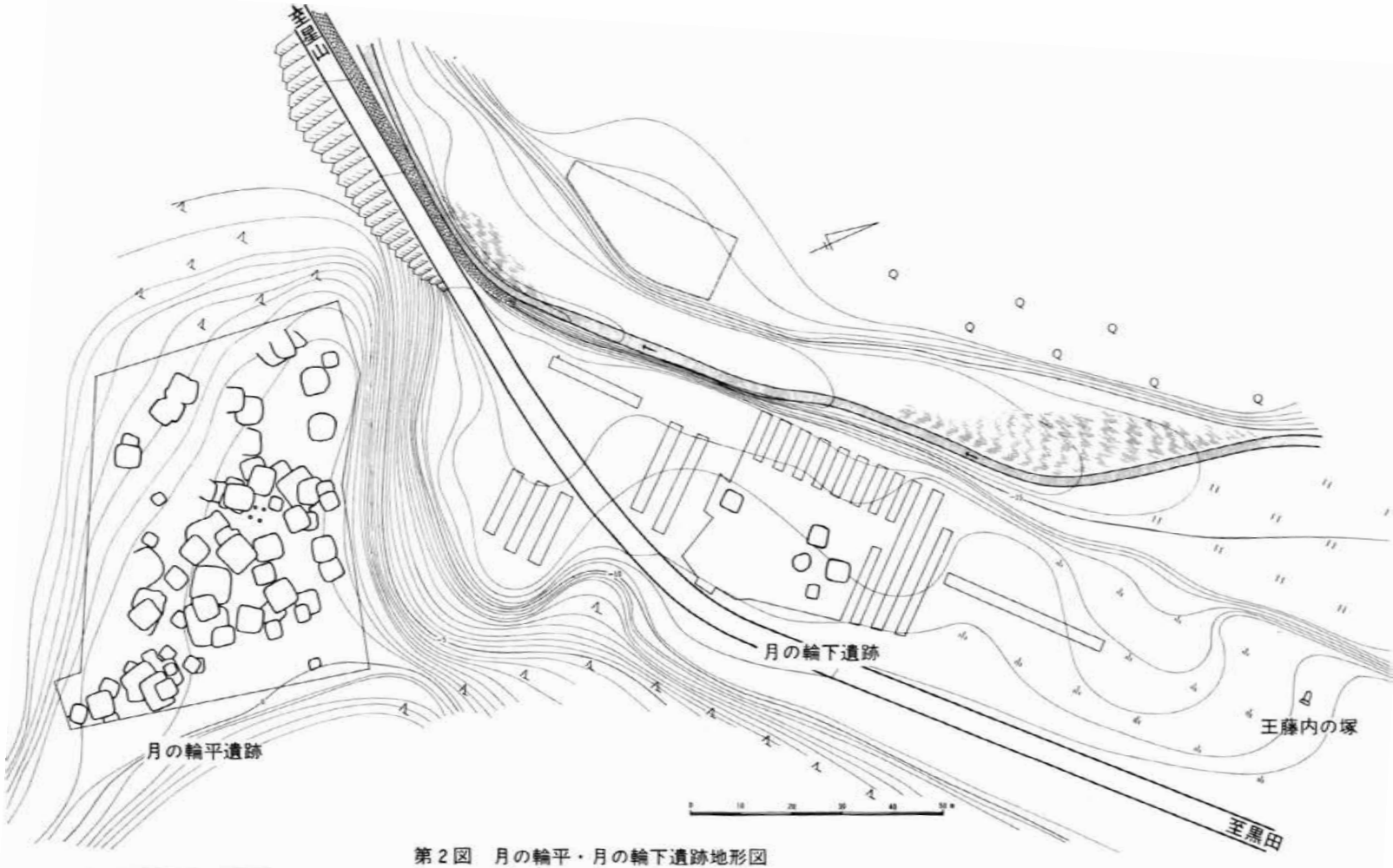
第２次調査　月の輪平遺跡本調査……昭和45年７月21日～９月６日

第３次調査　月の輪平遺跡本調査……昭和45年12月20日～昭和46年１月９日

第４次調査　月の輪平遺跡本調査・月の輪下遺跡予備調査……昭和46年７月26日～８月22日

第５次調査　月の輪平遺跡本調査・月の輪下遺跡本調査・南部谷戸遺跡本調査……昭和47年８月１日～９月７日

ここで，以上の内容を若干補足しつつ，調査の方法について述べよう。



第２図　月の輪平・月の輪下遺跡地形図

まず，グリッドの設定は，月の輪平・月の輪下遺跡では10×10m方眼，南部谷戸遺跡では3×3m方眼をその単位とした。この呼称は，西から東へA・B・C……列北から南へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……列として，たとえばAⅠ区・BⅠ区とした。また，10×10m方眼の場合には，必要に応じて，それを4分割して西北から東南の順番でa～b，同様に16分割して1～16とも呼んだ。具体的にはAⅠ－1区またはAⅠ－a区と表現することになる。

第1次と呼んだ月の輪平遺跡予備調査では，1グリッド内に，可能であれば2×2m方眼の試掘坑を2～4個所ほど設けることを原則として，総計76個所を調査してみた。その結果，用地内の全面に住居址群が存在することが確認でき，あわせて第1号住居址を完掘した。

本住居址群の調査における床面の二重構造の取り扱いについてもふれておこう。こうした特殊な構造の調査については，種々の工夫を試みたが，最終的には，住居址プランを確定した段階で，床面を抜いて掘り方底面にまで達する土層帯を掘り下げて検討する方法を採った。こうして確定した床面と掘り方は，複雑に重複しあう本住居址群においてもっとも正確を期し得る方法であったと思う。

3　月の輪上遺跡の発見と調査の経過

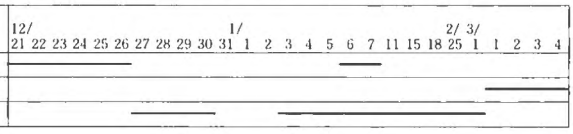
本遺跡における宅地造成工事の進行が発見されて，遺跡の破壊が明らかになったのは昭和52年3月初旬のことであった。発見者は，野村昭光静岡県文化財保護指導員で，その状況はただちに県教育委員会および市教育委員会に報告された。市教育委員会は，県教育委員会の指導のもとに，事業主体である若尾工務店と協議しつつ，現地踏査を実施して，その対処方法を検討した。

発見時の状況は，遺跡のほぼ中央部付近の約1000m²ほどに，6m巾道路と6区画からなる宅地を造成する目的で，すでに各区画のコンクリート境界が打ち上がり，それに伴う下水溝が完成し，各区画の地均しもほぼ完了して，水道管埋設のための巾1m前後の溝が道路の中央に掘り下げられていた。その結果，住居址その他の遺構の一部と推定し得る焼土や断面が認められる状況であった。市教育委員会はただちに工事の一時中止を要請するとともに，関係諸機関と協議しつつ，一部でも発掘調査を実施して記録保存すべき方向を決定した。

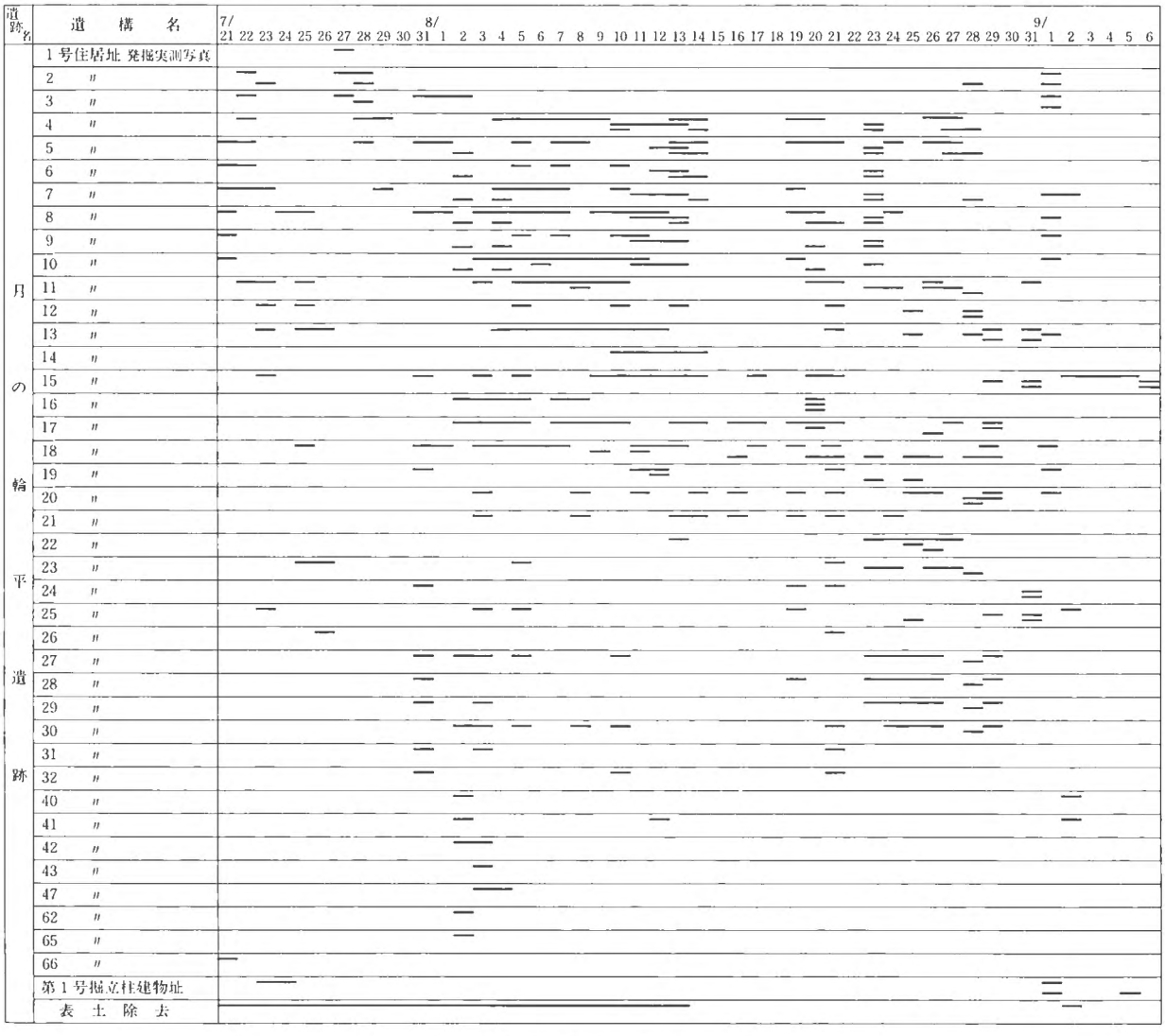
発掘調査は，市教育委員会が主体者となって，植松を担当者に委嘱し，昭和52年3月23日から4月6日まで15日間実施した。調査経過は第4表に詳細を示したので，ここでは概略を述べておく。

調査はまず遺構残存の有無を確認することから着手した。すなわち，道路の中心部に巾約1mで設けられた水道管埋設用溝をトレンチに転用して清掃し断面検討を試みるとともに，すでに包含層が除去されたと認められた南端の2区画を除く北より4区画の中心部に，東西方向で巾1mのトレンチを設定して遺構の有無を確認した。この結果，北端の2区画を中心に住居址の濃密な存在が明らかとなったが，他の区画および道路敷内では確認できなかった。発見された遺構は住居址4基を主体とするもので，うち2基が重複していた。4月6日には，すべての作業を完了して，調査を終了した。（植松）

第１次調査（月の輪平遺跡予備調査）――昭和44年～45年

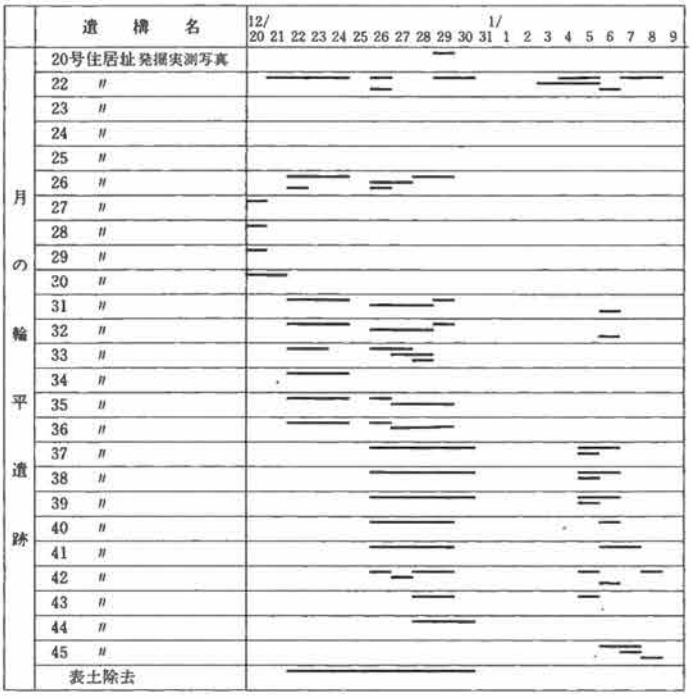


第２次調査――昭和45年

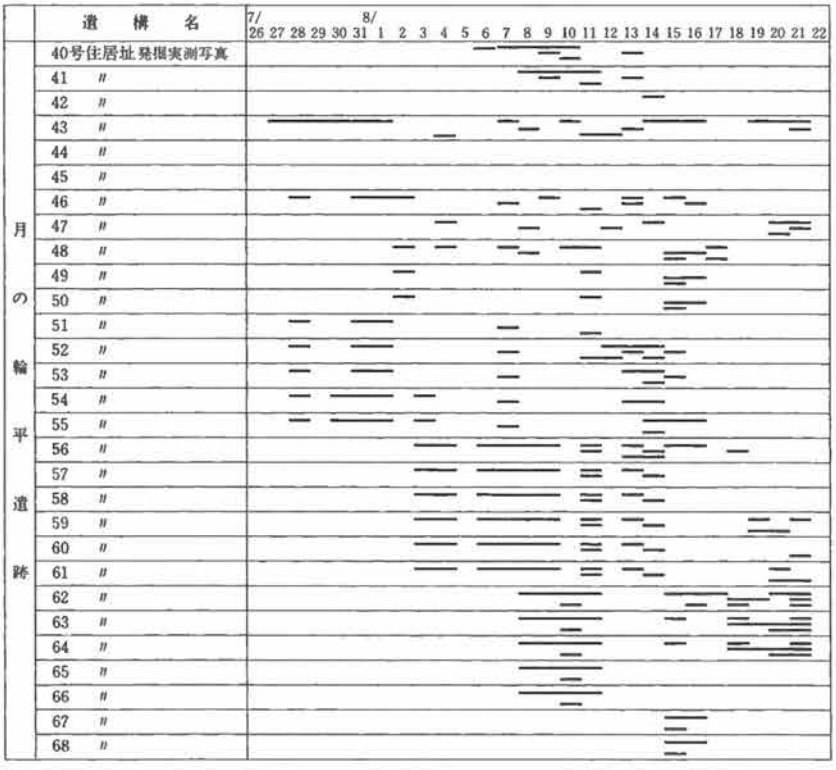


第１表　発掘調査経過一覧(1)

第３次調査――昭和45年～46年

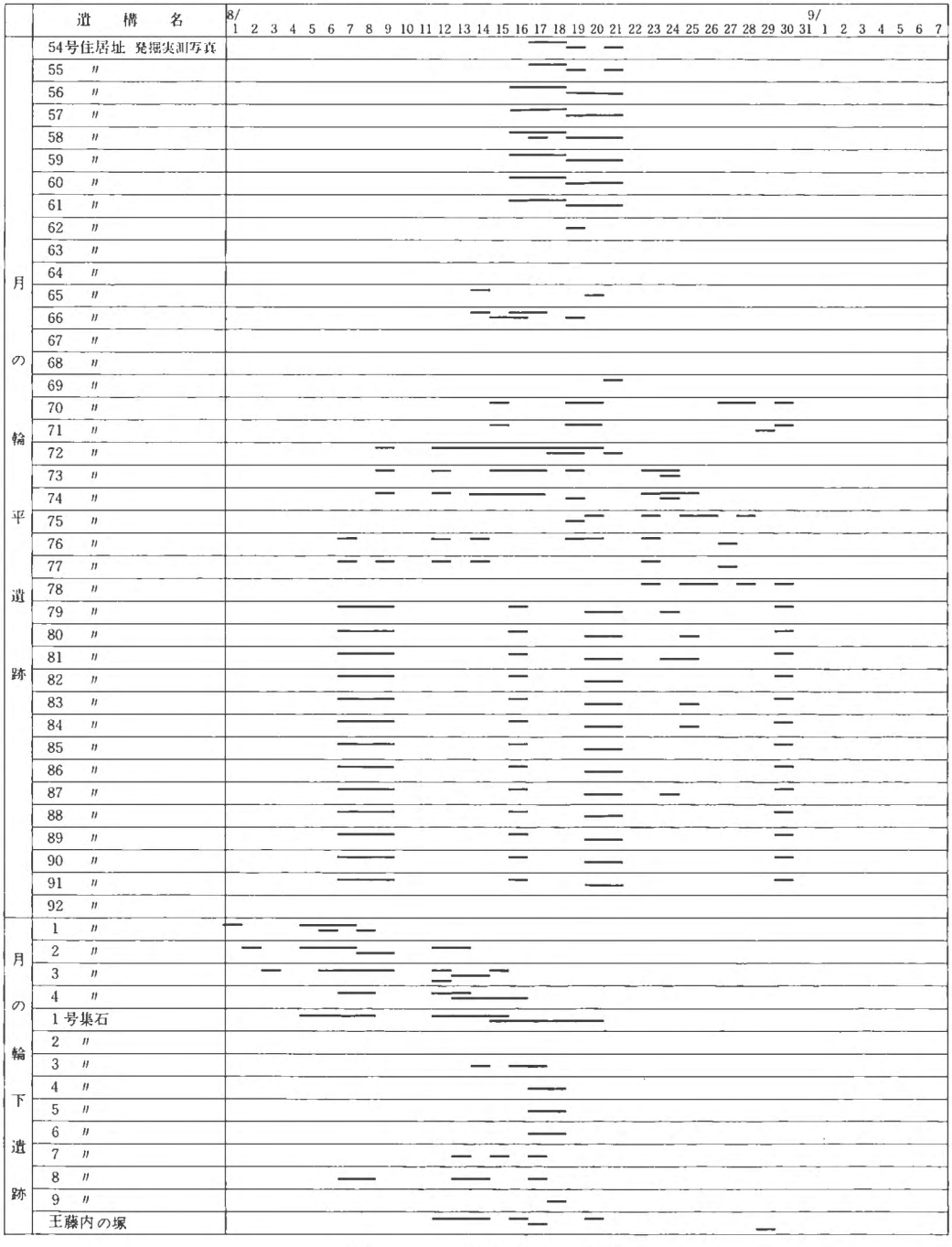


第４次調査――昭和46年



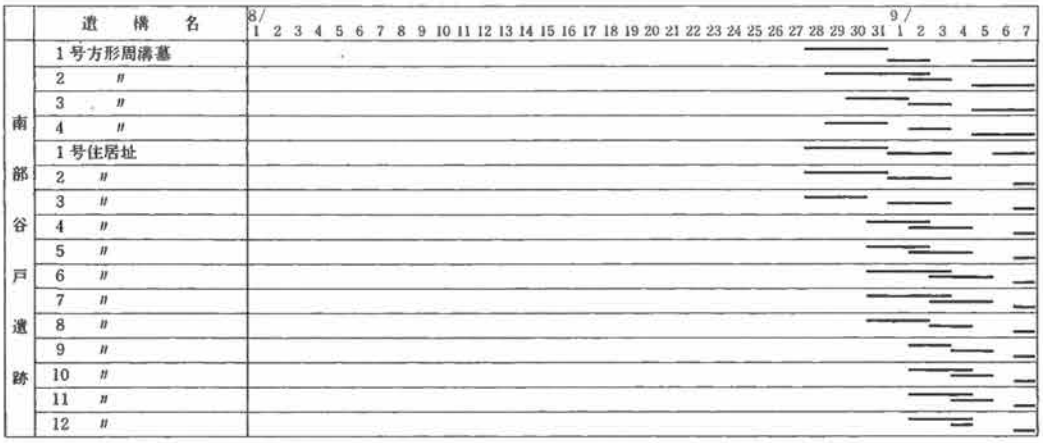
第２表　発掘調査経過一覧(2)

第５次調査――昭和47年

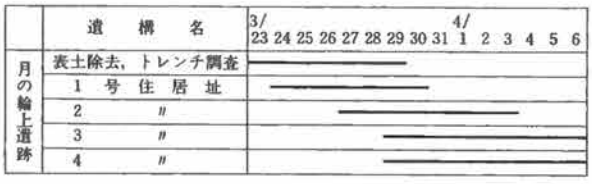


第３表　発掘調査経過一覧(3)

第５次調査――昭和47年



月の輪上遺跡調査――昭和52年



第４表　発掘調査経過一覧 (4)

II　環　境

1　自然環境

(1)　地　形

本地域は，富士宮市の南部に位置し，北は潤井川，南は富士川にはさまれ，南北につらなる星山谷によって星山丘陵と明星山丘陵に分けられる。

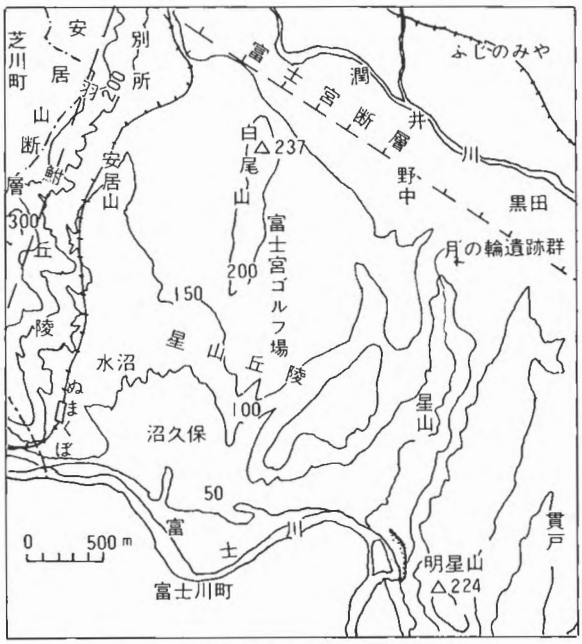
富士宮市南部においては，潤井川が富士山麓斜面の末端となり，この区域とは不連続になり，大きくは星山丘陵として独立した地域である。

これは古富士集塊質泥流の噴出後大宮断層が形成され入山瀬―山本―黒田―大中里の線で南北に切断され北部の富士山側が約200ｍぐらい沈下したためである。

星山谷は大宮断層の形成前は，潤井川北側と連続し，現在の潤井川が流れこみ星山谷を形成した。現在の星山谷を見るといまのような状態ではこれだけの大きな谷が形成される要因は見出されない。

古富士集塊質泥流面が大宮断層により切断され，潤井川に面して断層崖が形成されたため潤井川は星山谷に入ることができず大宮断層崖下を入山瀬方面に流路を移動し，星山谷は空谷となった。

潤井川の低地には，段丘は発達していないが，星山谷には３段の河岸段丘があり遺跡は河岸段丘面にある。



第３図　地形図

これは大宮断層に切断され，大宮断層以北は，富士山の噴出と関係がある地域となり，断層形成後新富士山の噴出があり熔岩や噴出物が堆積したため河岸段丘は形成されなかった。

月の輪平遺跡は，星山谷が蛇行し攻激斜面側に舌状に形成された河岸段丘上にある。

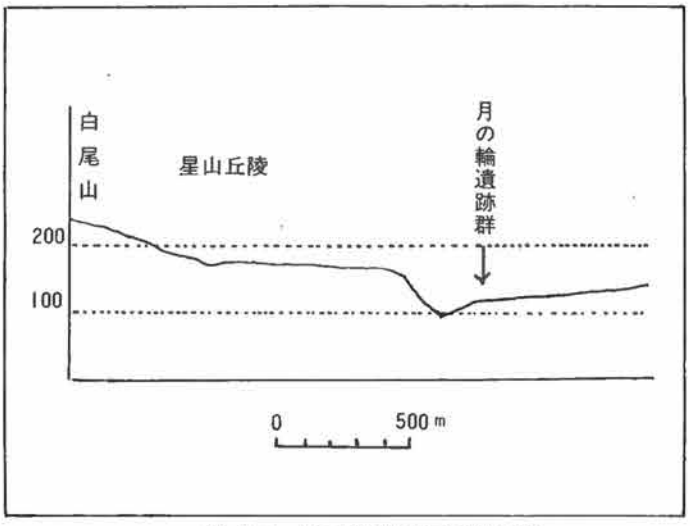
星山丘陵は，羽鮒丘陵より約100ｍ位低く，最高標高230ｍ余である。その北東縁は潤井川の谷に臨んで約25度内外の急傾斜を成し，羽鮒丘陵東縁の急斜面の南東延長にあたっている。

星山丘陵は北東―南西方向に走る数条の谷に略平坦な面を残している。この面は侵蝕面であるが，古富士集塊質泥流によって構成されている。

(2) 地　質

潤井川によって地形上，北部の富士火山山麓部と南部の丘陵地域とに分けられ，潤井川の右岸(南岸)に沿って大宮断層が走っている。富士山麓斜面は西南に約20分の１の勾配で広がる緩傾斜地であり，斜面の末端に潤井川の沖積地で終っている。

南部の丘陵は，潤井川と芝川および富士川下流との間にはさまれ，約３㎞の巾をもって北西から南東に連なっている。



第４図　月の輪遺跡群東西断面図

この丘陵は北西側に位置する標高200m前後の羽鮒丘陵と標高150m前後の星山明星丘陵とのふたつに安居山谷で分けられる。さらに星山明星丘陵は，星山谷によって星山丘陵と明星丘陵とに分けられている。

本地域の基盤層は別所礫層である。別所礫層は潤井川南側に出現し，羽鮒丘陵の東斜面において帯状に，また星山丘陵の富士川岸の崖下に見られる。

星山谷南部において富士川工業用水隧道工事の際に崩れやすく工事の進行をさまたげた。この層は主に５㎝内外の円礫と中粗砂からなる砂礫であり，下部層付近では砂層，泥層，凝灰岩層を含み，また貝化石，植物化石を含む露頭も確認されている。時代的には第三紀末鮮新世に属している。

別所礫層の基盤岩が形成された後，洪積世の終り頃になると古富士火山が噴火した。この噴出物である古富士集塊質泥流は，この火山噴出物が局部的には火山灰砂層をはさんで層理を示すが，一般には主として玄武岩質の種々雑多の熔岩塊と火山灰泥との不規則な混合堆積物である。

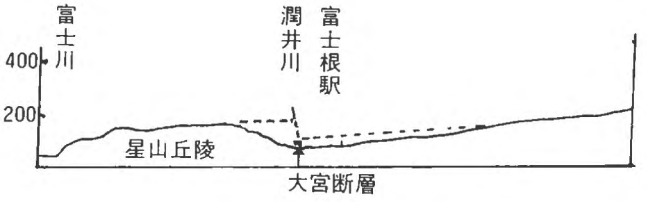
星山明星丘陵においては，集塊質泥流は岩渕火山群噴出物及び別所礫層を不整合におおい洪積期段丘礫層，火山灰及び富士熔岩流によって不整合的におおわれている。

集塊質泥流は別所礫層が堆積し多少の変位を受けた後，洪積期段丘層が堆積する前，或いは堆積しつつある途中，したがってまた最旧期の富士熔岩類が流下する前に生成されたものと考えられる。

集塊質泥流は，大宮断層，安居山断層などによって変位させられている。

即ち星山明星丘陵の集塊質泥流面は，大宮断層により富士山本体とは切断され，島状に残された。この結果星山谷に流れていた河川は大宮断層崖下を流れざるをえなくなり，入山瀬方面に流れ星山川は水無川になった。

星山谷，貫戸谷には，現在の谷底から約25m以上の高さに明瞭な３条の段丘が発達している。



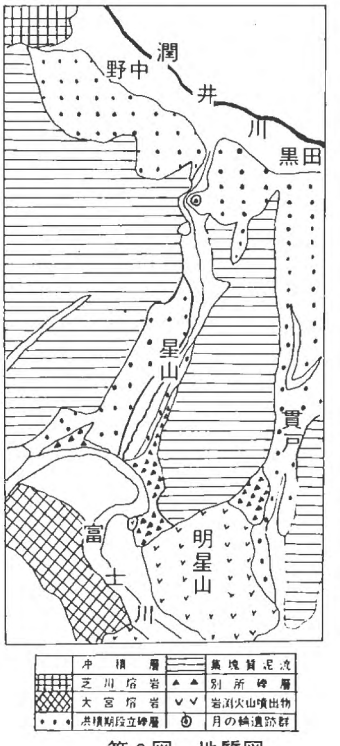
第5図　大宮断層図

これらの段丘は一般に主として礫層によって形成されている。

星山段丘礫層は，岩渕火山群噴出物，別所礫層，集塊質泥流等を不整合的におおい，星山谷においては，少くとも40mの厚さを有する。その大部分は，礫によって構成されているが，上部に薄い粘土層及砂層がはさまれている。礫は多角状でしばしば直径1mに及ぶものもある。そしてその礫の大多数は集塊質泥流を構成する玄武岩塊に類似している。したがって星山段丘礫層は集塊質泥流の噴出後，富士熔岩流の噴出前に堆積したものである。

また大宮断層形成後に堆積したものと考えられる。その後富士山が古富士噴火口付近より噴出し熔岩流を山麓に流下した。しかし星山谷は大宮断層崖のため熔岩の流入をふせいだ。そのため星山谷には，熔岩流が存在せず，噴火の際の火山灰，砂が堆積しただけである。

本遺跡群の表面は火山灰，砂で構成され，下に星山段丘礫層，さらに集塊質泥流，別所礫層と続いている。(塩川)



第6図　地質図

	活動期	火山灰区分	噴出物のタイプ			火山地形の発達
			降下火砕物	火砕物	熔岩流	
現在 5千年前	新期富士	新期富士降下火砕層	中	中	中	成層火山発育 寄生火山噴出
	活動静穏期	富士黒土層	少	なし	なし	山体の浸食と山麓に扇状地形成
1万年前	第二期古富士期		少	少	多	熔岩流の多い成層火山発育，現火山の原形できる
5万年前	第一期古富士期	古期富士降下火砕層	多	中	中	山麓で浸食と断層運動，火砕物の多い大型成層火山

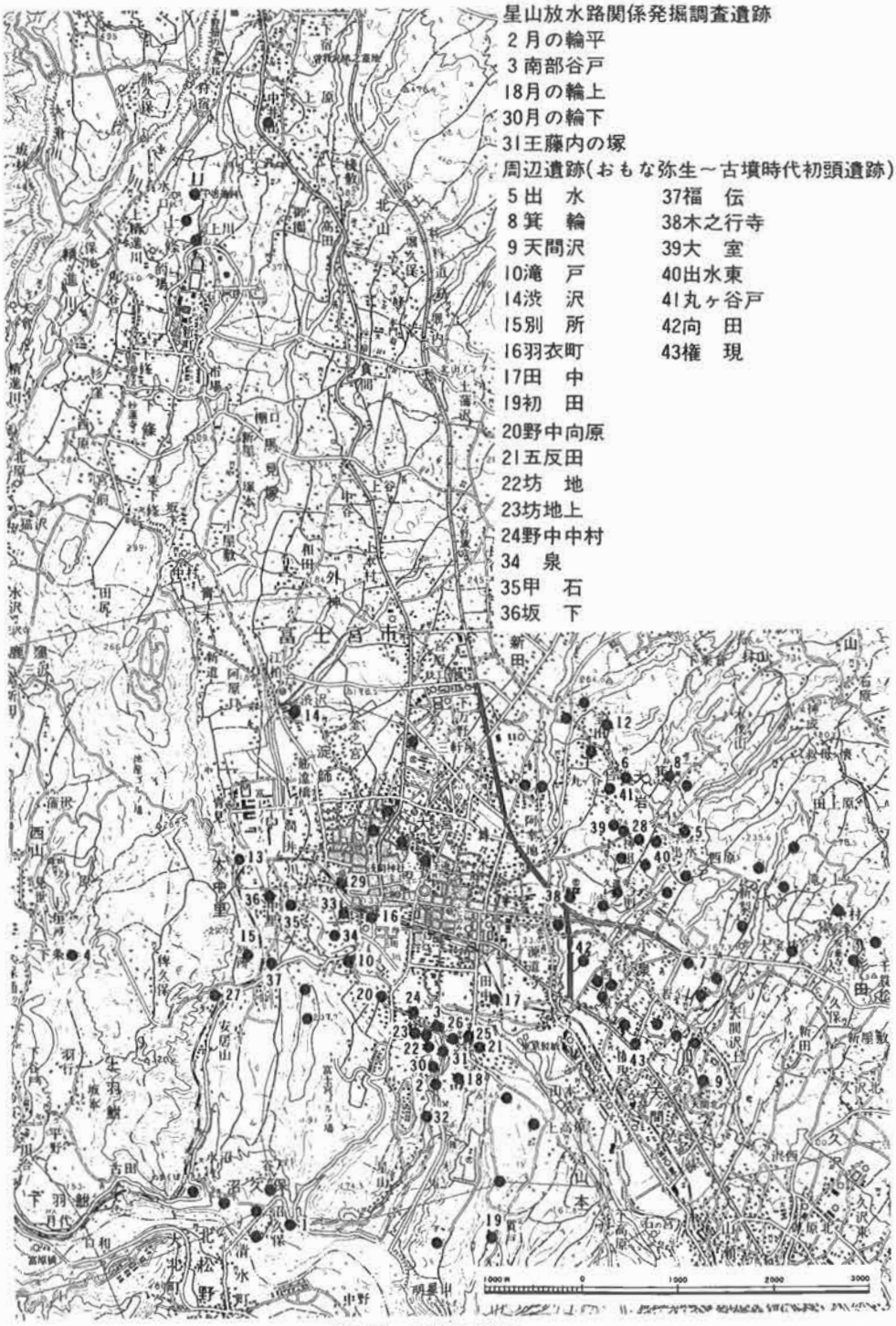
第5表　富士山の活動史（町田洋）

2　周辺の遺跡

本遺跡群が所在する星山丘陵を含めた富士西南麓一帯は原始，古代より現在にいたるまで，富士山によって自然および人文環境を大きく左右されている。富士山の成立は小御岳，古富士，新富士の３火山からなることが知られ，小御岳が数10万年前に，古富士が約５万～１万５千年前に噴火が想定されている。古富士にはⅠ期，Ⅱ期の火山活動が認められ，Ⅰ期噴出泥流が現地形の基盤を形成し，Ⅱ期の活動によってより現地形に近いものとなり，以後１万年位の間，大きな火山活動はなくして新たな新富士の出現となった（町田　1964，津屋　1969)。

本地域の人間活動の開始は古富士第Ⅱ期火山活動中の後期旧石器時代より認められることから，それは人間活動を不可能ならしめるほどではなかったことが推察される。占地は沼久保坂上(１)，星山周辺の月の輪平(２)，南部谷戸遺跡(３)等に認められるように，いずれも古富士の溶岩流のおよばなかった羽鮒，星山丘陵～富士市鷹岡地域にかぎられる，という特徴を示すが遺跡規模は貧弱であり，芝川町小塚Ａ遺跡(４)，(小野他　1972) 以外は包含層の確認はない。

縄文時代にいたると，遺跡は中期中葉～後期前葉に盛隆するが，早期～前期，後期以降は貧弱な感をぬぐえない。早，前期の遺跡占地は基本的には旧石器時代同様の分布をしめすが，富士山麓側，いわゆる富士根地域にも若干の発展をみせ，木島式土器を出土する大岩出水(５)，峰石(６)の両遺跡，昭和53年より発掘調査が実施されている小泉代官屋敷遺跡(７)の前期末葉に比定されている住居址等が認められる。しかし，いずれにしても貧弱であり資料的にも断片的である。本地域に特筆的な事実は前述したように中期中葉～後期前葉にかけての爆発的な遺跡の増加であろう。これはひろく，中部山岳地方一帯に共通する普遍性ではあるが，縄文時代84遺跡のうち，大半の58遺跡が属する状況は富士西南麓一帯が縄文時代中期～後期遺跡といわざるを得ない。こうした分布状況から植松は半径３㎞の生活圏を５群想定し，それが中期社会にいたると旧来の生活圏を半径1.5㎞，面積７㎢の小遺跡圏が分割，発展していく過程をみいだし，そうした傾向が中期社会の歴代有力遺跡を中心に分村という形態で移っていく軌跡であり，社会が発展していくと群そのものが大きく移住して，過去の生活圏をうちこわしていくという縄文文化発展の普遍性につらなっているとし，歴代有力遺跡を大岩箕輪(８)，富士市天間沢(９)，黒田滝戸遺跡(10)にもとめている（植松　1971)。前述した例を内容の明らかな遺跡にもとめれば，黒田滝戸遺跡（植松他 1977，1978）と上野千居遺跡(11)（小野編　1975）にみとめられる。黒田滝戸遺跡は内容の不明な大岩箕輪遺跡をのぞけば，富士，富士宮をふくめた岳南地域において富士市天間沢遺跡とならび称される歴代有力遺跡である。その存在は古くより知られ（静岡県　1935)，昭和51，52年の発掘調査にいたって縄文早期～弥生，古墳時代と続く歴代遺跡であることが確認された。上野千居遺跡は昭和45，46年に発掘調査が実施され，縄文時代中期後半の20棟前後から成ることが想定される集落址と，集落廃棄直後に配された帯状および環状配石群の存在が確認されている。はたして上野千居遺跡の基地的集落がいかに，という問題はのこるとしても，分村的集落（単独遺跡）がいとなまれ，調査者が推察するように富士山の噴火等による自然現象の変化で集落が廃棄され，


星山放水路関係発掘調査遺跡
2月の輪平
3南部谷戸
18月の輪上
30月の輪下
31王藤内の塚
周辺遺跡(おもな弥生～古墳時代初頭遺跡)
5出　水
8箕　輪
9天間沢
10滝　戸
14渋　沢
15別　所
16羽衣町
17田　中
19初　田
20野中向原
21五反田
22坊　地
23坊地上
24野中中村
34　泉
35甲　石
36坂　下
37福　伝
38木之行寺
39大　室
40出水東
41丸ヶ谷戸
42向　田
43権　現
富士宮市
1000m
0
1000
2000
3000

第7図　周辺の遺跡

直後にたぶんに富士山を意識した配石がなされたとするならば，そこに中期社会の発展と退潮の現象をみいだせられるとともに，本地域における諸遺跡と富士山とのかかわりを考えざるを得ない。なお，上野千居遺跡は昭和50年6月に国指定史跡となった。

以後，遺跡は急激におとろえ，わずか数遺跡にすぎなくなる。この停滞現象について，海岸部の魚撈文化の発展が内陸部の文化の発展をさまたげたと考えられているが原因をあきらかにするまでにはいたっていない。晩期の遺跡も大岩辰野(12)，黒田滝戸，大中里(13)の3遺跡がみとめられるにすぎず，また時期も前葉にかぎられることから弥生時代をむかえるまで文化は中断される。

本地域の弥生時代は中期丸子式土器，石包丁等を出土した淀師渋沢遺跡(14)より開始される。淀師渋沢遺跡は西側に潤井川，東側に湧水地をのぞむ台地上に占地し，前面にひろがる湿地帯での農耕が想定されるが，石鏃等狩猟具の出土から狩猟，採集の必要性があったことが感じられ，細片資料であるが安居山別所遺跡(15)をそれにくわえれば，遺跡占地状況はやはり潤井川をのぞむ台地上であり，極く初期の農耕生産力では生活を維持できず，狩猟，採集に依存せざるを得なかったことが推測される。両遺跡以降になるとふたたび，その内容は不明瞭となることから，渋沢等でそだった農耕技術がしだいに向上して，面積もひろく生産性のたかい富士市浮島沼付近に移動していったことが考えられるとしている（植松　1971)。後期前半をむかえるとふたたび本地域に遺跡がみられるようになり，泉遺跡(34)があげられる。後期後半になると遺跡は活発化して，星山丘陵東辺をとりかこむ潤井川自然堤防上（あるいは富士山側からの扇状地の末端部）に大宮羽衣町(16)，黒田田中(17)等の遺跡の進出がみられる。従来，こうした傾向は農耕生産力の向上が遺跡を台地上部あるいは台地先端部から沖積地内部へ下降させ，かつ，発展させたと理解されているが，本地域にかぎれば大宮羽衣町，黒田田中といった後期後半遺跡は以後，継続，発展することなく廃絶してしまう。そこには本地域の沖積地内部遺跡の発展をさまたげたなんらかの特徴的な要因をもとめねばならぬが，さきに，近年資料が増加している後期末葉遺跡をあげれば，前述滝戸遺跡および昭和52年に発掘調査が実施された月の輪上遺跡(18)の集落址の存在の確認，これに旧知の貫戸初田(19)，野中向原(20)等の遺跡を加えることができる。その占地は貫戸初田遺跡をのぞけばいずれも星山丘陵東辺の台地中央部，ないしは先端部といった沖積地より奥まった地であり，後期末葉にいたっても沖積地進出の糸口さえつかむことができなかった遺跡占地状況を示している。逆にいえば台地占地が一般的であったと指摘するほうが適切であるかもしれない。こうした本地域の遺跡の占地傾向を考えたとき，本来の弥生集落の生業が湿地帯内農耕であったとするならば，潤井川湿地帯の存在をみのがす訳にはいかない。潤井川は西岸を羽鮒，星山丘陵に，東岸を富士山扇状地末端地形によってせりだされているため南北に細長い構造をとらざるを得ない。しかも大宮断層上を流路としているため一種の溺れ谷的性格をもち，現在でも洪水がくりかえされている状況である。こうした状況を当時に設定できるならば，遺跡の発展は考えがたく，また後期末葉遺跡が台地占地にはしるのは，そうした災害からの逃避現象であると理解することもできる。しかし反面，弥生時代における高地性集落の発展を考えあわせたとき，一概に自

然ならびに地形条件の不利を設定するだけでは説得力にかけ，その他諸要因が相まってなした現象であるはずであり，ここで結論づけることはできない。が，しかし本地域の弥生時代遺跡に湿地帯内部での発展が認められないのは事実である。

上述の過程を経て古墳時代初頭にいたる。その文化は前述の縄文時代中期の爆発的な盛隆に匹敵するほどであり，旧来の遺跡分布地図では弥生時代遺跡の確認されていない富士根地域でも湧水地点を中心に縄文時代遺跡＝古墳時代初頭遺跡といっても過言ではない状況となる。まして潤井川湿地帯を望む星山丘陵東辺ではさらに濃密となり，表面採集による調査では遺物が連続して正確な遺跡数をつかむことさえできない。あえて周辺遺跡をあげれば，黒田五反田(21)，同坊地(22)，同坊地上(23)，星山月の輪上，野中向原，黒田滝戸，同中村(24)の諸遺跡が認められ，一部には前述したように弥生時代終末期から継続する遺跡も存在する。筆をもどすようになるが，古墳時代初頭遺跡が潤井川湿地帯内部に確認されない現在，古墳時代初頭の爆発的な文化の盛隆の源をこうした台地上あるいは台地先端部に占地した遺跡群がなした技であったならば，弥生時代終末期より存続した諸遺跡内で培われていた内陸生産手段（それが主生業とは思われないが，）が諸要因と相まって比較的スムーズに遺跡を内陸部へ進出させたことが爆発的な遺跡増加につながっていったとする本地域の特徴的な分布形態であるのかもしれない。したがって，現在，弥生時代遺跡の確認がない富士根地域における古墳時代初頭の遺跡増加も，遺跡分布調査者が指摘するように弥生式土器と認め得る資料があったとすれば，やはりそこにも爆発的な遺跡増加をうながした萌芽期の存在を想定せざるを得ない。

しかし，こうして盛隆をきわめた古墳時代初頭遺跡も，それ以降にいたると急激に衰退して内容もわずかな土器片の確認にとどまり不明な点が多い。この時期の遺跡（集落）数が古墳数に代表されるとするならば，隣接の富士市や沼津市にくらべても勝るとも劣らなかった古墳時代初頭遺跡が，古墳数をくらべた場合，10分の１にも満たない状況は遺跡占地の変化を考え合せても，それはあきらかに本地域の遺跡の減少を示すものであろう。

本地域の古墳はいずれも後期に属し，星山丘陵東辺に塚本古墳(25)，南部谷戸古墳群(26)，安居山に別所古墳群(27)，対岸の富士根地域に三ツ室古墳群(28)というように小規模な古墳群を形成し，その数は現在まで14基が認められている。占地を観察すれば，いずれも古墳時代初頭遺跡より前面，もしくは標高を低く保っており，古墳構築が古墳時代～律令制時代にかけての集落より標高を高位，もしくは同標高に求めたとすれば，同時代の遺跡は必然的に古墳より前面におしだされるはずであり，市立貴般小学校校庭(29)より出土した土師器片や遺跡分布図がしめすように，その占地を安定しはじめた潤井川両岸の微高地が想定されよう。とすれば，その部分は現在の市街地にあたり，遺跡の発見が困難であったと理解されるが，いずれにしても古墳数を考えると，それは他地域にくらべて貧弱な遺跡分布でしかなかったと思われる。（馬飼野）

3　遺構と土層との関係

本遺跡群の遺構検出過程にみられた層位観察について述べよう。いずれの遺跡もその基本層序は共通するといえるが，もちろんそれぞれに若干の変化はみられた。

(1)　月の輪平遺跡の土層

まず，月の輪平遺跡における様相から述べる。第８図に掲げたものは，全体図（第10図）に示したA—B・C—Dの土層断面図である。

（Ⅰ）　表土層

黒色有機質土からなる表土層で，その上半部は耕作土となる。

（Ⅱ′）　含スコリア黒色有機質土層

黒色を呈するスコリア質土層で，次にのべるⅡ層が流出してⅠ層と混じたものとみなし得る。いわゆる flow の状況といえる。本土層上面での遺構検出はきわめて困難で事実上不可能であった。

（Ⅱ）　褐色スコリア質土層

緻密なスコリア粒が堅固なマサ層をつくる。いわゆる大沢ラピリ層で，本地域では縄文時代後～晩期ごろに堆積したものと推定される。本住居址群はこの上面が遺構検出面となる。ただし，純粋に fall な状況とはいいがたいものかも知れないが，ここではかなり堅固といえる層を認めた。いわば，遺構検出の可能なスコリア層と理解しておくことにする。

（Ⅲ）　栗色土層

比較的よくしまり，赤色スコリアが散在する部分もみられる。ここでは上下２層の変化をもつように観察されたが，上半部は漸移層というべきであろう。ただし，この地域では一般にⅡ層との間に極暗褐色土層が薄く挾まれる例が多いが，ここではそれは明瞭ではなかった。上半部漸移層に含まれた状況とみなし得よう。本土層が縄文時代中～後期の包含層となる新期富士の降火物である。

（Ⅳ）　黒色土層（極暗褐色土）

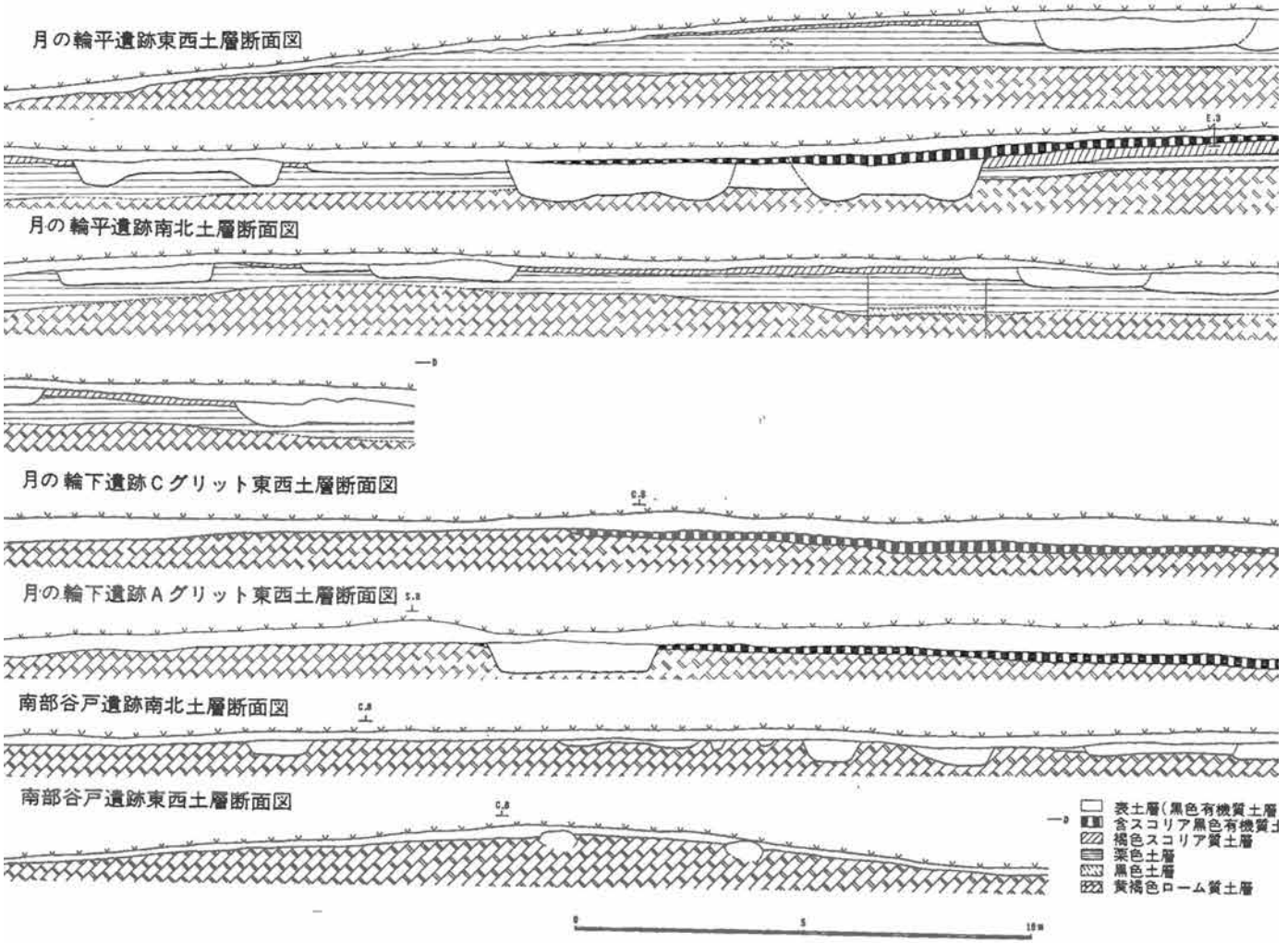
緻密な黒色土ないし極暗褐色土からなって，いわゆる富士黒土層に比定できる。縄文時代早～前期の包含層となるもので，新期富士の静穏期にあたる。

ところで，本層のⅢ層との分離は観察上かなり困難であった。したがって，ほぼ中心部にあたる２～３ｍほどを掘り下げて確認し図示しているが，他の部分ではⅢ層に含めてある。ここでは，基本的にⅣ層が存在することを認めておこうと思う。

（Ⅴ）　黄褐色ローム質土層

黄褐色を呈するローム質土で，いわゆる休場層にあたるものである。無土器文化終末に相当する

以上が，月の輪平遺跡における層序観察であるが，こうしたあり方は，市内黒田の滝戸遺跡や富士市天間の天間沢遺跡の状況と共通して，本地域における普遍性を有するものと認めておきた



第8図　月の輪遺跡群東西土層断面図

い。こうしたなかで，本遺跡の古墳時代集落は，大沢ラピリ層(II)の上面を検出面とする層序関係が確実であったが，わずかに認められた縄文時代遺物についてはその層序関係を明確にし得る資料を得ることはできなかった。

(2) 月の輪下遺跡の土層

本遺跡では第8図に示したようにII～IV層の流失がめだった。表土層(I)の下は，直接に黄褐色ローム質土層(V)となっていたが，それでも，山手よりにあたる南側地点では，かなり厚い(II′)層の堆積が認められた。黒色有機質土を基本にスコリアをやや薄く含んだ土層で，山手傾斜面からの流入土としてもよいものであった。台地前より部が流失，奥よりに上部からの流入を含めて堆積した結果と理解してよいものであろう。

(3) 南部谷戸遺跡の土層

本遺跡は残丘ともいうべきその台地の状況から，大礫を含む(V)層の上部には表土層(I)が存するのみであった。よって，縄文時代早期の資料も(I)層の下部から発見されるのみで，古墳時代遺物との層位分離は事実上不可能であった。

(4) 月の輪上遺跡の土層

本遺跡の場合には，宅造工事によって，表土層(I)がほとんど乱されていたが，それでも，遺構確認面は大沢ラピリ層(II)であった。ただし，調査範囲内に認められた大沢ラピリの大部分は，いわゆるflowによるものらしく，外見上遺構内覆土との識別はかなり難しかった。その下はやや薄い暗褐色土を経て栗色土層(III)に達する。すなわち，大沢ラピリの下部で，先に栗色土層(III)に含めておいた黒色土層が，比較的明瞭に認められたのであった。 (植松)

本　編

Ⅰ　月の輪平遺跡

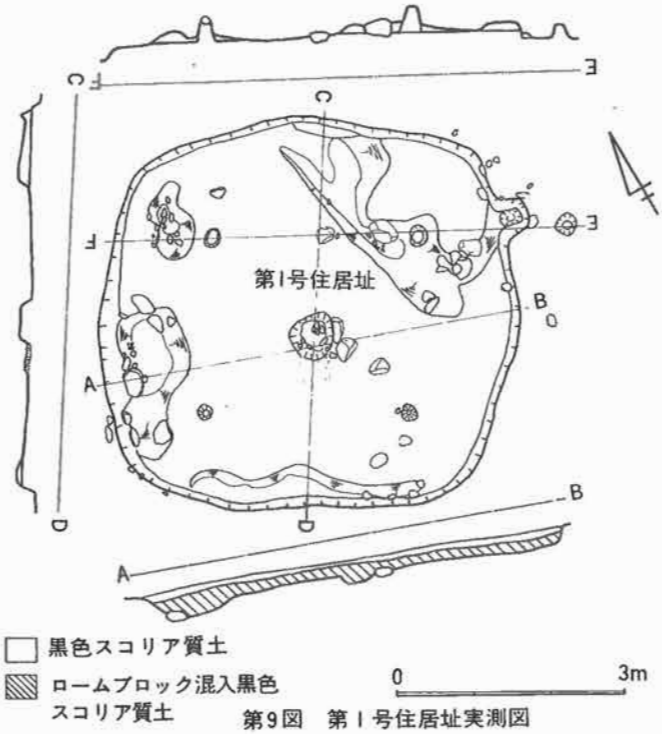
1　遺　構

本遺跡の主な遺構としては，竪穴住居址86基，掘立柱建物址２基，特殊遺構２基があり，ほかにいわゆる中世土坑14基もあった。

(1)　住居址

86基の住居址の中には，確実に住居址とは断定しがたいものがあるが，ここでは住居址にほぼちかい条件を備えたものは含めて扱った。また記述には，住居址ナンバー順を基本としたいが，その際重複関係を有するものはグループで一括して扱い，便を期したい。

第Ｉ号住居址　（第９図，図版第３・４）



第９図　第Ｉ号住居址実測図

本住居址は調査区北西部にあって，主としてＢＩ・ＢII区に属する。重複関係を有せずに単独で存し，隅丸方形プランを呈するが，その東壁の北側コーナーよりに方形状張り出し部を付設し，その中央部に柱穴状ピットがみられた。

床面中央部南よりに焼土を有し炉と認められ，その西端に炉石１個を有する。柱穴は４本で，

床面の二重構造もみられたが，本住居址は予備調査において発掘された例で，その当時調査者は床面の二重構造についての認識をもたなかった。したがって土器出土面の下にも覆土があり，その除去後はかなり激しい凹凸を有する床面を調査したのであるが，第Ⅰ次調査の成果から後に二重構造と断定する状況であった。

本床面上にはきわめて多量な土器が重なりあう状況であり，それは本遺跡中第1の出土量といえた。また土器の下面には礫もかなりあってそれは床面上の一部に属されたものである可能性も指摘できるが，断定的判断はできない。

本住居址の東側北よりの方形状張り出し部外側に柱穴状ピット1本がみられた。本住居址に伴うものかも知れない。

第2号住居址(第11図，図版第6)

調査区北西端部にあって，その北西コーナーが第3号住居址と接するが，重複関係はもたない。

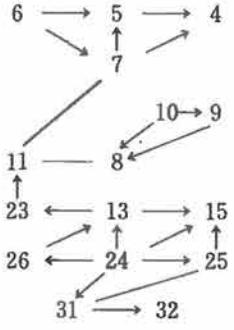
東壁には類ベット状遺構がみられて，本住居址最大の特徴をつくる。北半部では巾80～100cm前後，南半部では50cm前後で，高さ20cm前後を測って壁検出面よりわずかに低くなる状況であった。ただし，本地点は地山が高くなって，遺構内外に多くの礫がみられ，耕作による攪乱の影響もあり，壁との比高もわずかであったので，確定には若干の躊躇がある。よって類ベット状遺構として扱いたい。

柱穴状ピットは8本あり，うち4本を柱穴と認めた。

床面中央部に炉があるが，床面の二重構造はみられない。

第3号住居址　(第11図，図版第6)

第2号住居址の北西に隣接する小形住居址で，炉・柱穴・床面の二重構造はみられない。



「旧→新」
「―不明」

第4・5・6・7・8・9・10・11・13・15・23・24・25・26・31・32号住居址

(第12～14図，図版第7～14・23・24)

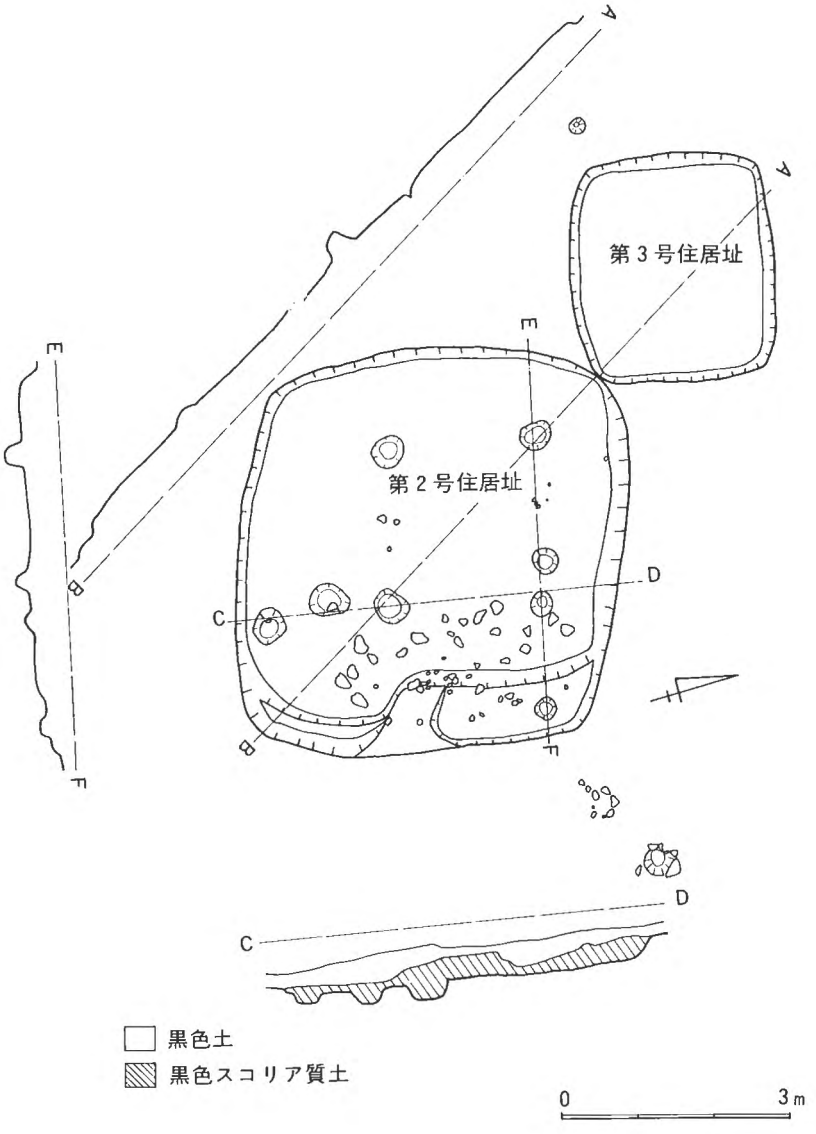
調査区中央の北半部に重複しあう住居址群があり，16基までを数えた。その新旧関係を図示すると次の通りであるが，第7・8・10・11号住居址と重複する第10号西隣のものについてはその痕跡がきわめて狭小であったので考慮に入れていない。状況からすれば，本群のなかで最古のものに含め得るかも知れない。

第4号住居址

本グループの最北端にあって，第5号住居址の東側に位置する。第5・7号住居址と重複して，その両者を切ってより新しい。

床面はきわめて軟弱で，貼床といえる状況ではない。中央部には焼土があって，炉址と認めら

第10図　月の輪平遺跡全体図



第11図　第２・３号住居址実測図

れた。いわゆる柱穴はみられないが，中央部には柱穴状ピット１があった。二重構造はＢ類タイプに属する。

床面の二重構造については，Ａ・Ｂ・Ｃ類に分けて検討してみた。その区別については「考察編Ⅲ住居址床面の二重構造について」を参照。

第５号住居址

第４号住居址の西隣で，それより古く，第７号住居址を切ってより新しい。遺構検出面での東西巾は２ｍ前後しかみられないことになるが，第４号住居址の西端部に発見された溝状部分を本

住居址床面掘り方の一部と認めてプランの大略を推定した。

床面はきわめて薄弱で，覆土と掘り方との差違も明瞭とはいえず，炉・柱穴も発見できなかったが，高杯出土面におけるわずかな変化から断定してみた。掘り方は比較的深い例で，第4号住居址との重複から若干複雑にみえたが，基本的にはB類タイプで壁周縁に平坦部を残していた。南壁側には土橋的構造もみられて，その中央部には柱穴状ピットが認められ本住居址に伴うものといえるが，それは柱穴に含め得るものではない。

第6号住居址

第5・7号住居址によって，その大部分を破壊された住居址で，わずかに90×80cm前後の範囲が残っている。床面は軟弱で確定する根拠に乏しく，そのため二重構造の有無もあまり明瞭ではなかった。

第7号住居址

第4･5号住居址の南端に接してその両者に切られてより古い。第11号住居址とも重複するが，その関係は不明である。それは，本住居址発掘の時点では第11号住居址の存在には気づいていなかったため，層位関係の配慮なしに掘り下げ，後刻になって，より高いレベルでしかも二重構造をもたない第11号住居址を発見したのであった。したがって，その床面ないし覆土が本住居址の上面に及んでいたかどうかについては未検討で終わってしまったのである。ここに調査上の不手際を明らかにするとともに，その前後関係については不明としておきたい。

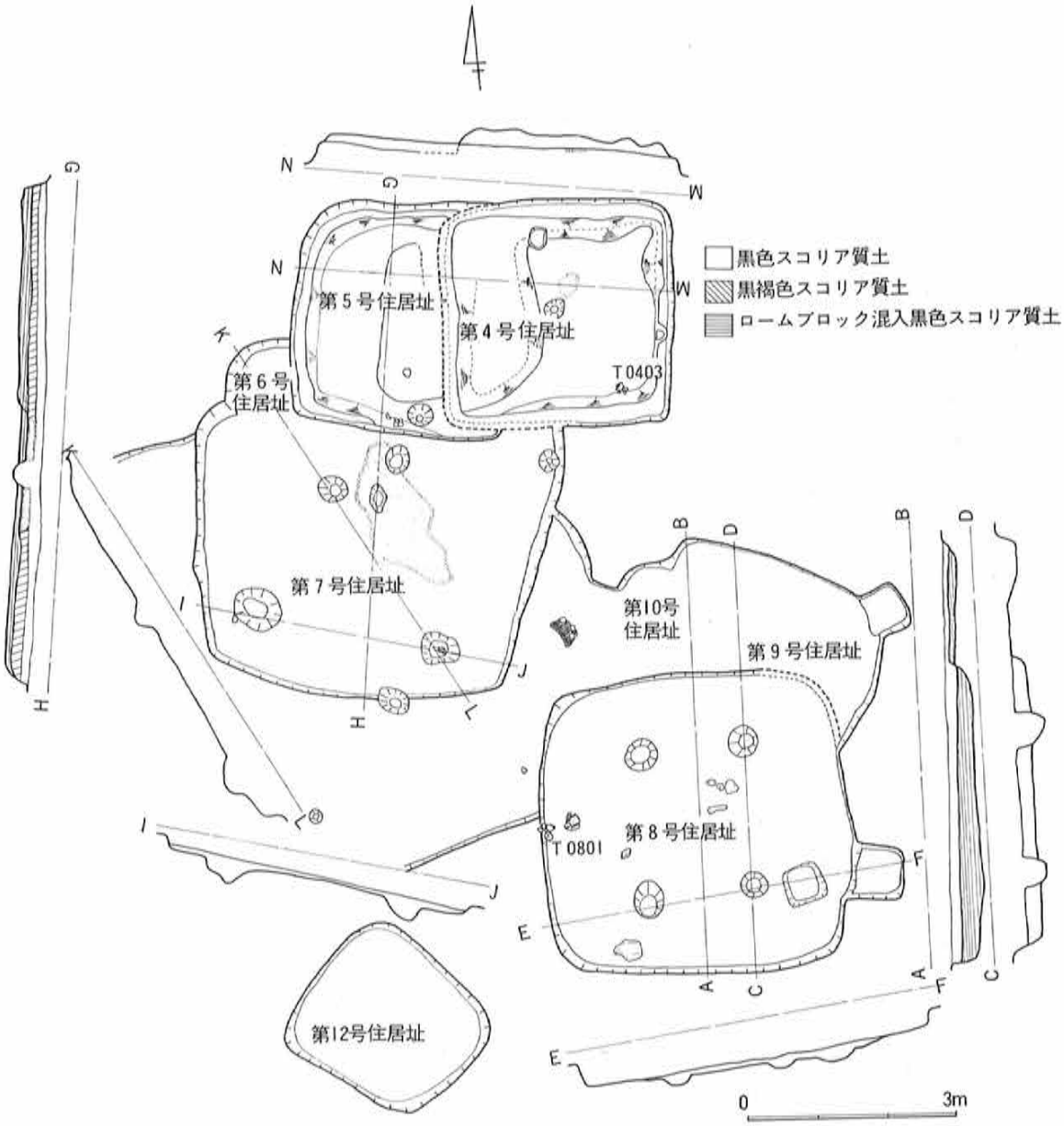
床面は比較的軟弱であるが，それでも厚さ数cmの貼床が認められ，その中央部には良好な焼土があって炉と認定された。本床面の二重構造は断面皿形ともいうべきもので比較的少い類例に属した。柱穴状ピットとしては4本があったが，その位置関係からすれば南側の2本は本住居址に伴う柱穴といえる。

第8号住居址

第4・5・7号住居址の南隣でやや東側にあって，やはり中央部北端よりのグループに属する。第9・10・11号住居址と重複するが，第9・10号住居址の床面を確実に切ってより新しい。第11号住居址とは不明である。

本住居址プランの特徴としては，その東側に方形状張り出しピットがみられた。0.8×0.7mほどでやや長方形にちかい。底面は床面レベルに等しいタイプであった。

床面はやや軟弱で，貼床といえる状況はみられず，炉もなかった。それでも二重構造を有するタイプであって，それはCタイプであった。柱穴は4本で位置関係も良好であった。なお，その東南隅にあたる柱穴と張り出しピットの中間に，51×57cmで深さ15cmほどの方形ピットがあったが，覆土等からして本住居址に属するものではなく，より新しい時期の所産といえた。



第12図　第4・5・6・7・8・9・10・12号住居址実測図

第9号住居址

中央部北端グループの1で，第7号住居址の東側において，第8・10号住居址と重複する。その南側部分を第8号住居址によって失うが，ほぼ3分の2前後が残存する。重複関係は，第10号住居址を切ってより新しく，第8号住居址に切られてより古い。

本住居址北東隅に方形状張出しピットがある。床面は比較的軟弱で明白な貼床はみられなかったが，二重構造はC類で方形状張出しピットも同様であった。柱穴・焼土とも発見されていない。

第10号住居址

中央部北端グループのうち，第９号住居址の西側にわずかにその北西隅の部分を残した住居址である。重複関係は，第７・11号とは不明であるが，第８・９号に切られてより古い。たぶん，本グループ中最古の住居址となるものであろう。

第11号住居址

中央部北端グループのほぼ中央にあって，第７・８・23号住居址と重複するが，その関係は，第７・８号住居址とは不明で，第23号を切ってより新しいものであった。

規模としては，長径7.98ｍを測る大型であるが，床面の二重構造・柱穴・焼土等はみられず，地山を床面としていた。

第13号住居址

中央部北よりのほぼ中心に位置して，第23・26・24・15号住居址と重複するが，それは第23・15号に切られてより古く，第26・24号を切ってより新しかった。この関係においては，より古い住居址がその掘り方の一部を残す状況がめだった。

本住居址には，その北隅から北壁にかけて最大巾30cm前後を測るテラスが確認されたが，基本的にはＡ類に属する二重構造であった。柱穴は発見されなかったが，北側には55×58・63×68cmの規模を測るピット２があった。その位置関係からしても本住居址の柱穴とは認めがたい。床面のほぼ中央部に，礫を伴う焼土があり，炉址と認められた。

第15号住居址

本調査範囲のほぼ中央部にあって，第13・24・25号住居址と重複し，そのすべてを切ってより新しい。第31号住居址とは層位的重複関係はみられないが，同様であろう。

床面は比較的良好な貼床であったが，柱穴は発見されなかった。東壁側には最大径で１ｍ前後を測る焼土が数ケ所にわたってあり，火災の痕跡と判断された。床面の二重構造はＣ類であった。

第23号住居址

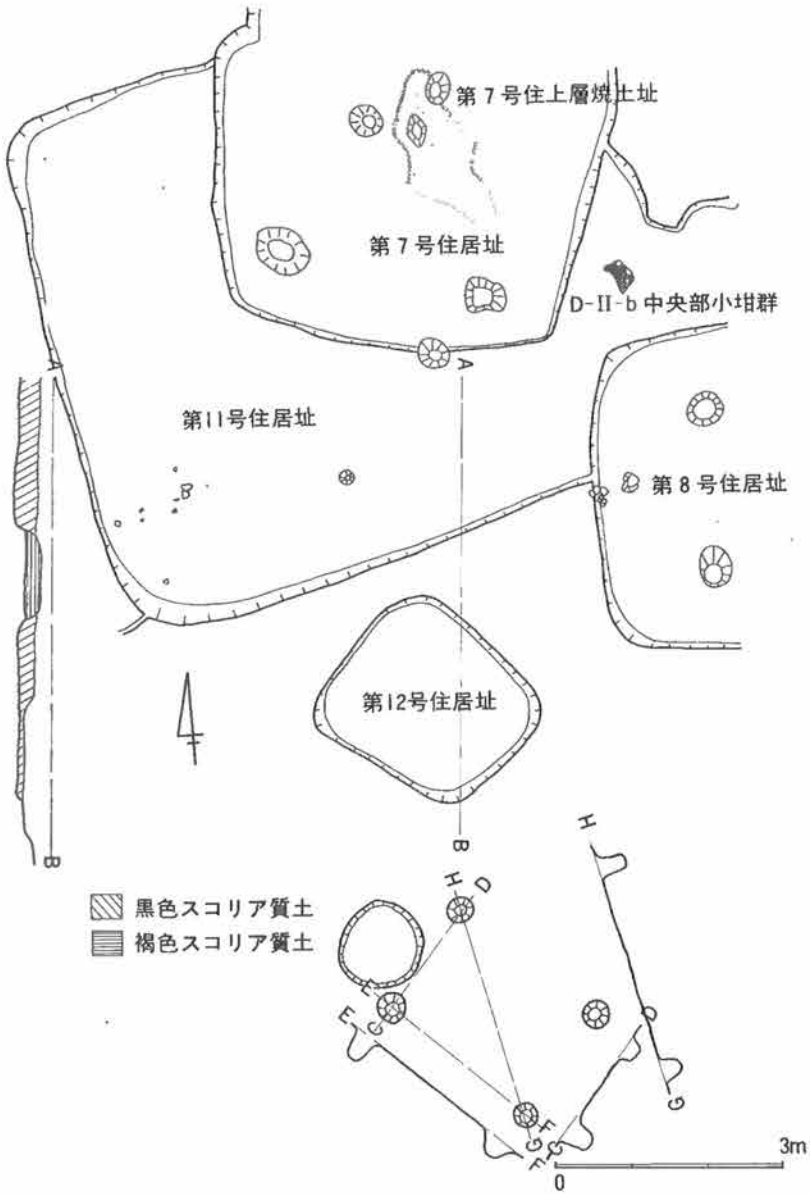
調査区の中央部やや北側にあって，第11・13号住居址と重複している。第11号に切られてより古く，第13号を切ってより新しかった。

床面は若干軟弱で良好とはいいがたく，柱穴等も検出されなかったが，二重構造はＣ類に属した。

第24号住居址

調査区中央部にあって，第15号住居址の西側に巾約１ｍほどが残存した住居址である。第26・13・15・25・31号住居址と重複するが，そのすべてに切られてより古かった。本遺跡内で最古に属する例といってよい。

床面は堅固な貼床で，二重構造はＣ類であった。



第13図　第11号住居址および第１号掘立柱建物址実測図

第25号住居址

調査区中央部で，第15号住居址の東と南側にわずかに残存する住居址である。第15・24・31号住居址と重複するが，第15号住居址に切られて確実により古く，第24号住居址とはその南端部で重複がみられてより新しいと思われたが，第31号住居址との関係はそれが浅いこともあって技術的に明確な把握ができなかった。状況からすればたぶん本住居址がより新しいものであろうが，一応保留しておきたい。

床面は比較的軟弱であったが，壁付近のみの残存状況からすれば当然といえよう。二重構造はA類と判断された。

第26号住居址

調査区中央部のやや西よりにあって，第13号住居址と重複する。第13号住居址の床面より低い位置に，本住居址の床面と掘り方とが確認されたことから本住居址がより古いものと判断された。

床面は堅固な貼床であるが，柱穴4本が検出された。掘り方も良好で，A類タイプに属することが明瞭な例であった。

第31号住居址

調査区中央部の南よりにあって，第15・24号住居址と第32号住居址とに挟まれている。重複関係では，第24号住居址より新しいが，第15・32号住居址に切られてより古く，第25号住居址とは不明瞭であった。

床面は比較的良好で，調査範囲内では柱穴はみられないが，二重構造はC類であった。

第32号住居址

調査区中央部の南端にあって，第31号住居址を切ってより新しい。本住居址の西南側の約3分の1ほどは消失していた。

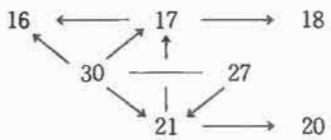
床面はやや軟弱で，柱穴は4本がみられたが，うち北壁側の2本は床面で発見されたが，南側の2本はすでに床面・掘り方の確認できない状況のなかで，わずかにその痕跡を発見したのみであった。なかでも，西南側のそれは位置関係からしても若干疑問が残るものといえる。なお，壁の周辺にはかなりの小焼土・炭化材等がみられた，火災を被った可能性を認めるべきであろう。

第12号住居址　（第12図，図版第12）

本調査区の中央部北よりに単独で存在する住居址である。本集落中で最小規模に属するものの1で，形状もやや歪んでいる。床面は地山からなっていて，二重構造，柱穴ともみられない。

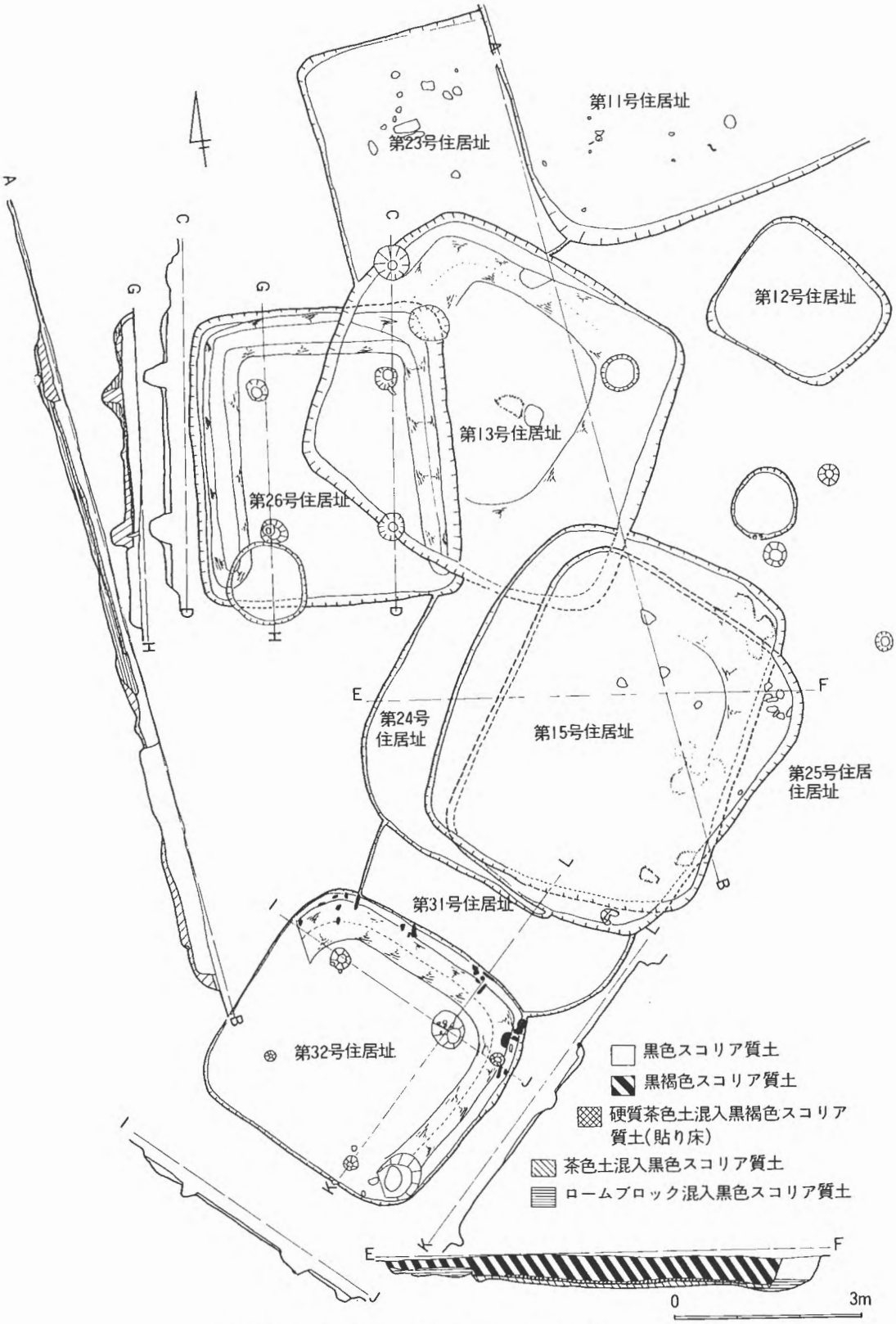
第16・17・18・20・21・27・30号住居址（第15・16図，図版第15～20）

本調査区の中央部やや東よりにおいて，重複する6住居址で，その重複関係を図示すると次の通りである。

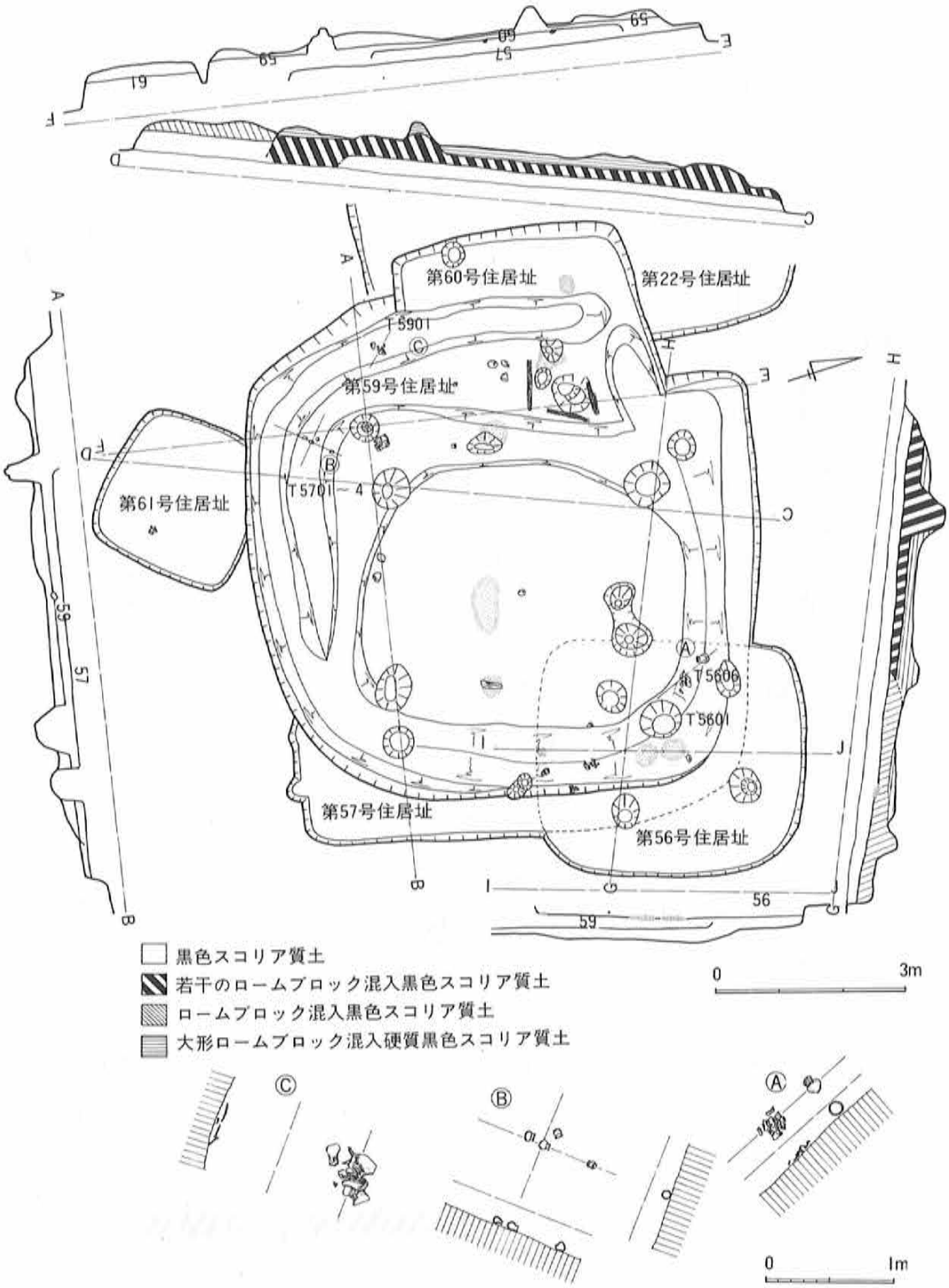


第16号住居址

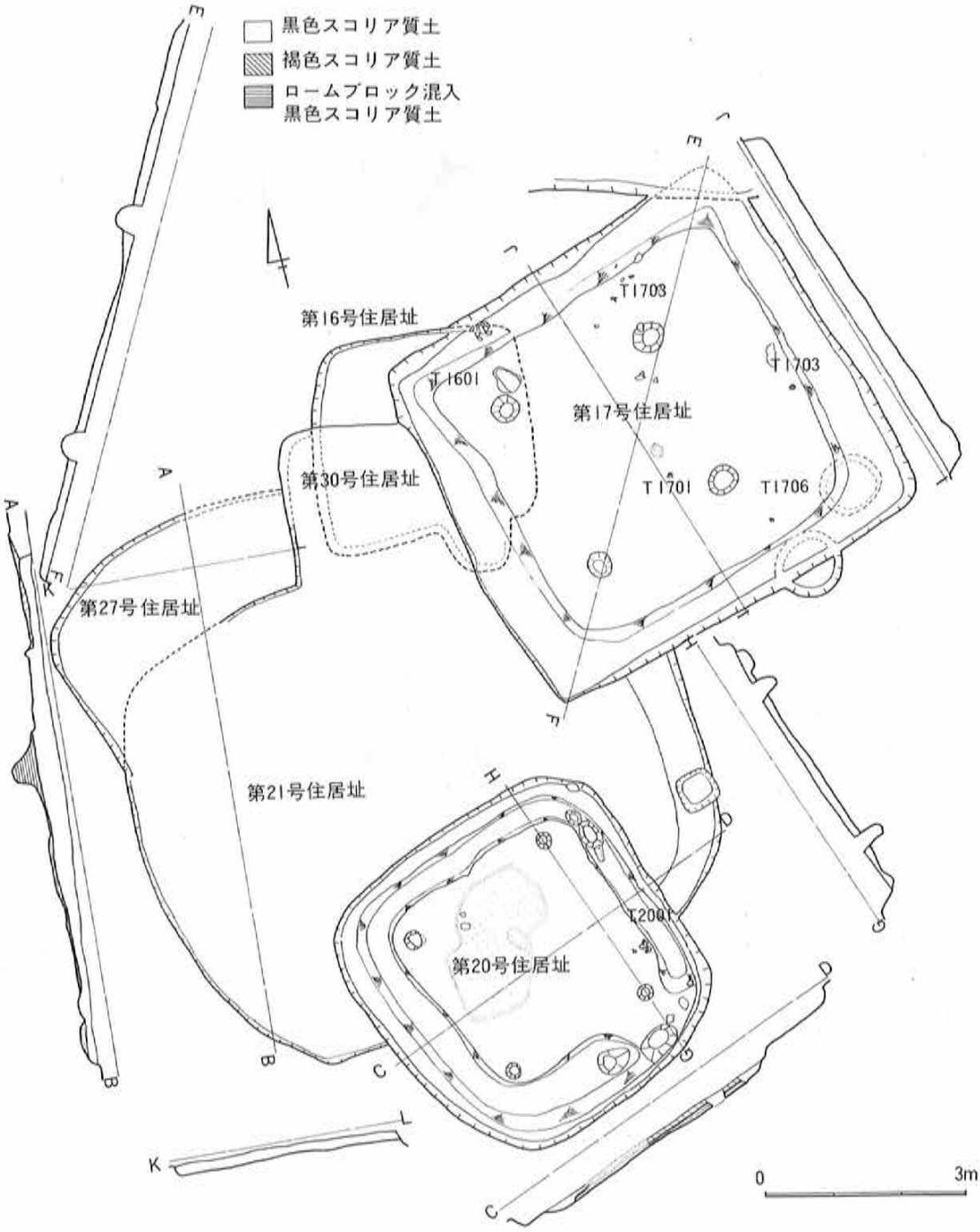
調査区中央部東よりグループの中央にあって，第17・30号住居址に重複している。調査の結果，



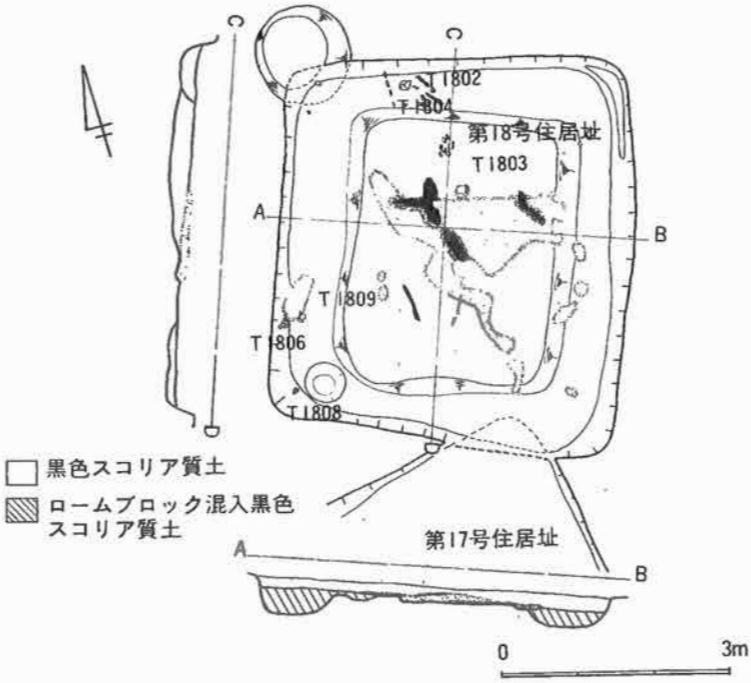
第14図　第13・15・23・24・25・26・31・32号住居址実測図



第22図　第56・57・59・60・61号住居址実測図



第15図　第16・17・20・21・27・30号住居址実測図



第16図　第17・18号住居址実測図

は２～３軒が重複しているものであろうと観察して，床面を除去してみた。しかし，その結果，重複しあう掘り方の残存は認められず，柱穴等の検出も不明瞭であった。よって，ここで確実となし得たのは，Ｃ類タイプの二重構造を有する住居址があることのみといえる状況であった。その後の検討によって，１基の大型住居があり，それが重複等によって破壊されたものと推定してみたが，不確実な要素は残っている。

第27号住居址

調査区中央部東よりグループの中央北側にあって，第30・21号住居址と重複する。第30号住居址を切ってより新しく，第21号住居址より古い。

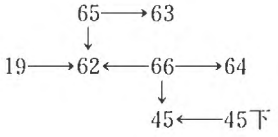
本住居址も，重複によって，その約３分の１ほどが残存した状況で全体の把握はできない。床面は比較的堅固であるが，二重構造はＣ類タイプであって，柱穴・炉址の発見はなかった。

第30号住居址

本調査区中央部東よりグループのほぼ中央にあって，第16・17・21・27号住居址と重複し，そのいずれよりも古い。わずかに0.5×2ｍ前後の床面範囲を残すのみであるが，本集落中最古期に属するものであろう。床面の二重構造は不明瞭で，柱穴・炉址等の検出もない。

第19・45・45下・62・63・64・65・66号住居址（第17～20図，図版第29・38～42）

本調査区北東よりに重複したグループで８住居址を数える。その重複関係を図示すると次の通りである。



第19号住居址

グループの西端に位置する本住居址は，大沢ラピリ層をわずか７～８cmほど掘り込んで，わずかに栗色土層に達した遺構で，しかも本地点の大沢ラピリ層がかなり不明瞭な状況にあったので，その把握はきわめて不確実であった。壁面も北壁のほぼ全体と西壁の一部をそれと判断できたのみで，南・東壁はほとんど不明であった。第62号住居址と重複し，より古いと観察してみたが，それも，東壁が把握できないための推定であって，それ以上の根拠はもたない。床面も軟弱で貼床・二重構造はもたず柱穴ももたない。床面中央部付近に炉址と思われる焼土があって住居址であろうと判断された。北壁ちかくに比較的多量な土器片の出土があり，大きく２群に分けて把握された。以上によって，一応住居址に含めておくが，その取り扱いは慎重を要しよう。

第45号住居址

グループの南端にあって第66号住居址を切ってより新しい。また，本住居址の掘り方調査中に第45号下住居址を発見し本址より古いものと断定した。

床面は堅固な貼床で，床面上ではその中央部に炉址と思われる焼土を発見したのみであるが，Ｃ類タイプをなす床面掘り方の検出作業において柱穴状ピット５本を確認した。うち４本は確実な柱穴としておくが，東南隅の１本は性格不明である。また，本掘り方には西南壁に巾50cm前後で長さ240cm前後の溝状をなす変化が認められた。二重構造掘り方の部分的変化と考えておきたい。

第45号下住居址

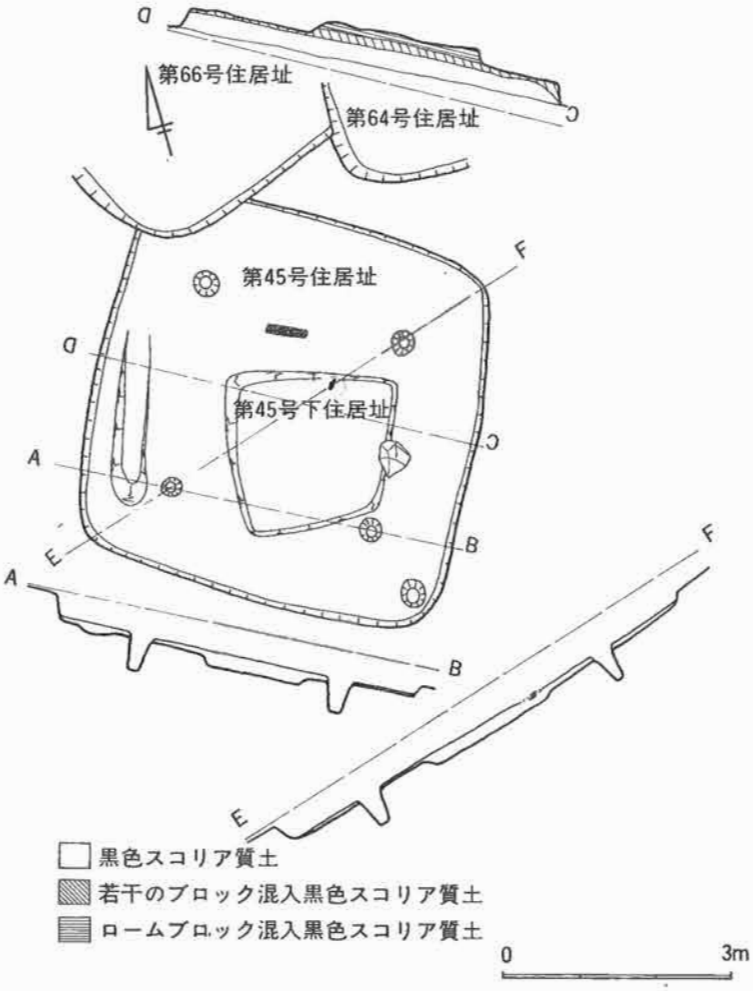
第45号住居址の床面掘り方検出中に発見したもので，その床面下に埋没していたことから，より古いものと断定した。

床面は貼床等をもたない地山からなる例で，二重構造はみられない。柱穴・焼土もない。形状はやや歪む方形で，住居址と断定できる条件は欠くが一応住居址番号を付して扱っておく。

第62号住居址

本調査区東北よりグループの北端に位置して，第19・65・66号住居址と重複するが，そのいずれをも切ってより新しい。また，中世土坑３基が本址上にあった。

床面は堅固な貼床で，その中央部に礫を伴う焼土があって，炉址と炉石に認め得た，本床面上



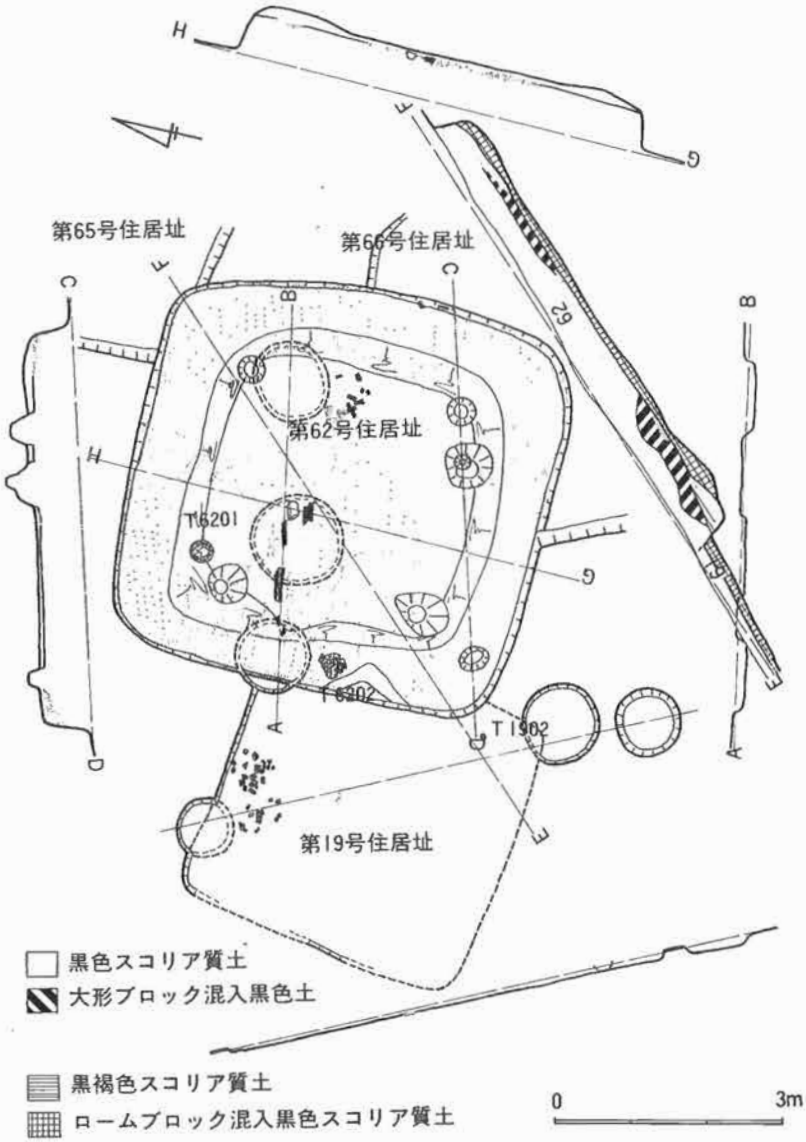
第17図　第45・45号下号住居址実測図

には，きわめて厚い焼土塊が全面にあって，そのなかには，炭化材や炭化カヤ類を多量に含んでいたので，典型的な被火災住居址といえる。床面の二重構造は典型的なA類タイプで，柱穴4本の他に南東隅壁際に1本の柱穴状ピットがあった。

第63号住居址

本調査区北東よりグループの北端部にあって，第65号住居址と重複し，より新しい。

床面は比較的良好な貼床で，炉・柱穴はみられない。床面は二重構造で，壁際に若干の平坦部をもつB類タイプであるが，その北壁中央部から北東隅にかけて比較的大きな土橋的構造を有する。かなり特徴的な掘り方と認めてよい。また，本住居址のほぼ南半側の壁外に，5本の柱穴状ピットがあった。やや規則性に欠ける状況もみられ，本址に伴うものと断定はできないが，あるいは柱穴を欠くことと関連するものかも知れない。

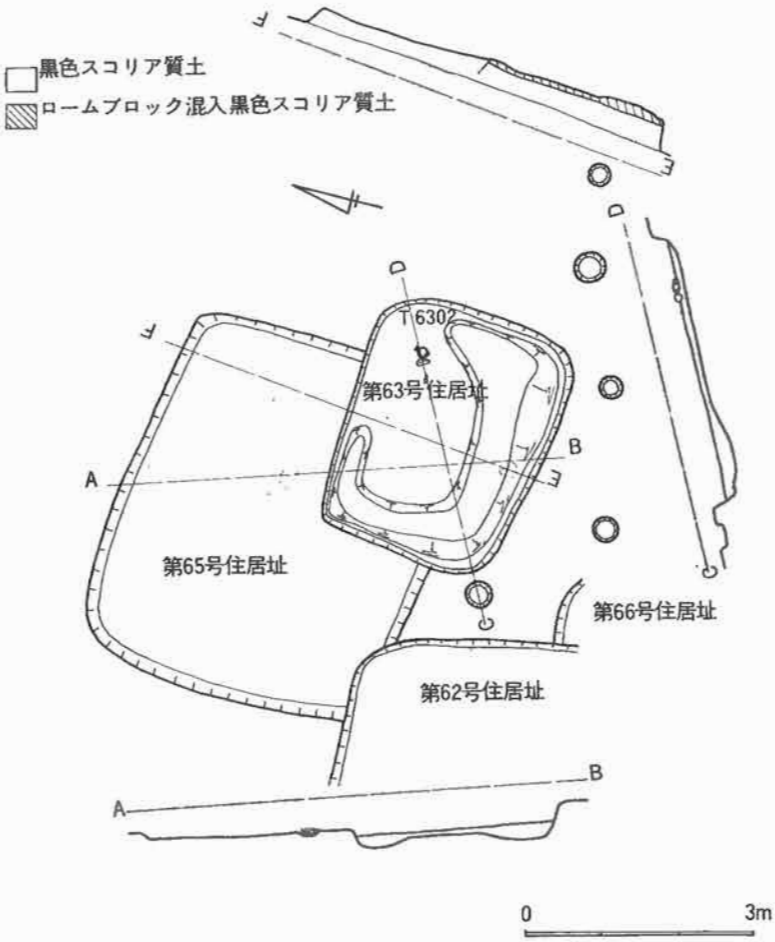


第18図　第19・62号住居址実測図

第64号住居址

本調査区北東よりグループの中央部東端にあって，第66号住居址と重複するが，それを切ってより新しい。

床面は良好な貼床で，中央部にやや大きい炉址を有するが，柱穴はない。床面上の各壁際に焼土ブロックが点在して，あるいは被火災住居址かとも思われたが断定はできない。床面の二重構造も特徴的で，壁際に狭い平坦部と中央部に台状部を残してＢ類タイプと思われるが，Ｂ類のなかでは周濠状掘り方が巾広く，そのうえ北・南側の中央付近にはやや浅く掘られた構造が認められた。



第19図　第63・65号住居址実測図

第65号住居址

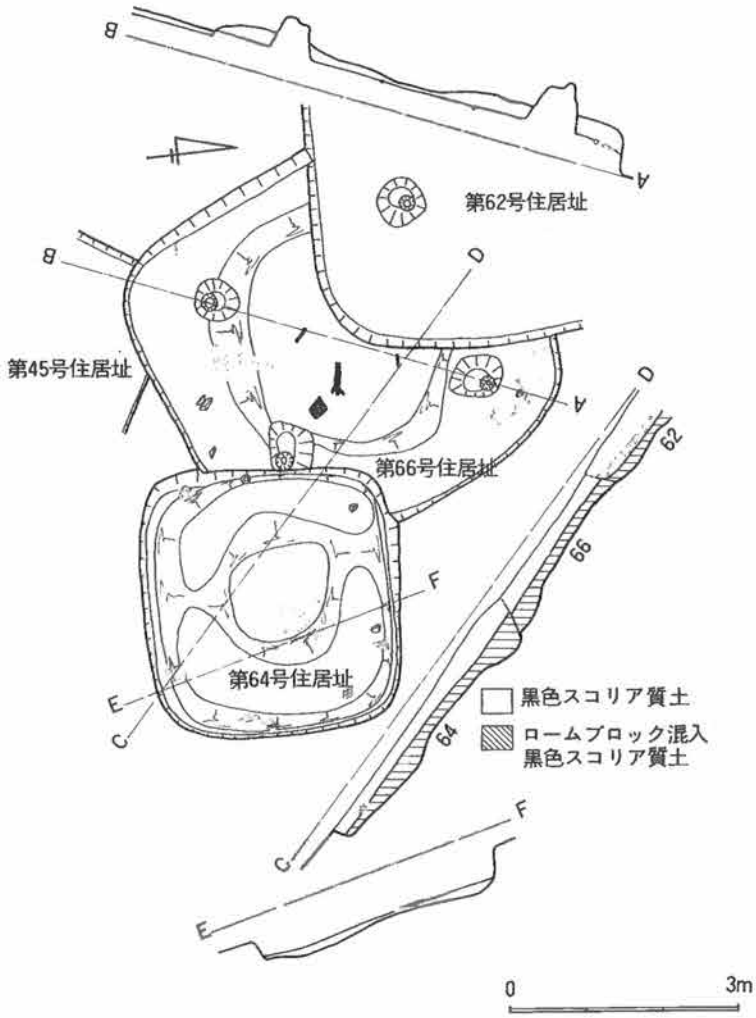
本調査区東北よりグループの北端に位置する。第62・63号住居址と重複し，その双方に切られてより古い。

床面は地山からなって二重構造はみられない。中央部に焼土をもってやや小さいが炉址と認め得た。柱穴の発見もない。

第66号住居址

本調査区北東よりグループのほぼ中央部に位置し，第62・64・45号住居址と重複するが，そのすべてに切られてもっとも古い。

床面はやや軟弱な貼床で，A類タイプの二重構造を有する。焼土は中央部と壁周辺にあって，床面上にはかなり多量の炭化材もみられた。よって被火災住居址と判断してよかろう。中央部の焼土は範囲厚さ等から炉址とみなし得る。柱穴は4本で，60×55cm前後の大きさの内に，径15～20cmほどの小ピットが認められた。掘り方と柱穴とが検出できたものといえよう。



第20図　第64・66号住居址実測図

第22・56・57・59・60・61号住居址（第21・22図，図版21・22・34～37）

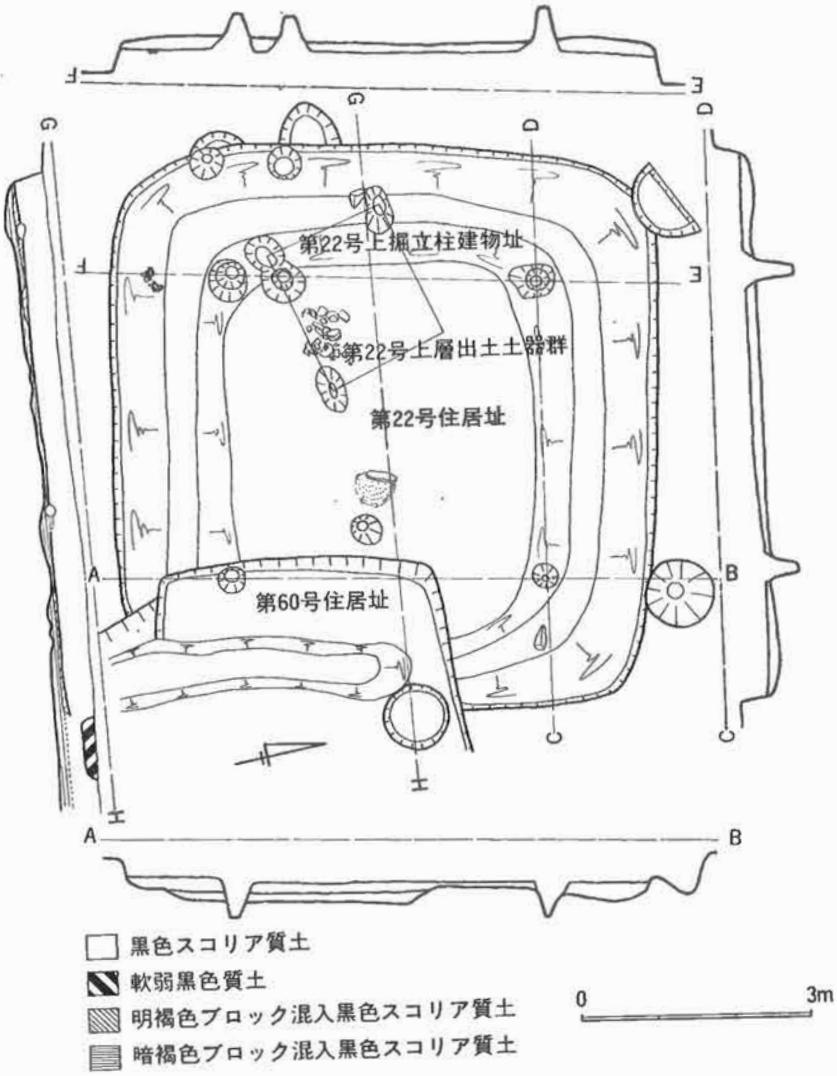
本調査区中央部東よりのグループで，6住居址が重複する。その新旧関係を図示すると次の通りである。

22←60→57→56
↑
59←61

第22号住居址

本調査区中央区東よりグループの西端に位置する。第60・59号住居址と重複するが，それらはいずれも，本住居址の貼床下部にあって，本址がより新しい。

床面は良好な貼床できわめて堅固につくられていた。中央部やや東よりに礫を伴う焼土があっ



第21図　第22号住居址および第22号上掘立柱建物址実測図

て，炉址と認められた。柱穴状ピットはすべてで11本あって，多くは掘り方発掘中に発見された。うち4本を柱穴とみておくが，残り7本のなかで西壁際の南隅側にあった2本が注目された。あるいは本住居址の入口構造等を反映するものである可能性を求め得る状況にあった。その他のなかには副柱としてよいものもあるが，あるいは別の遺構となる可能性も否定できない。

本床面の二重構造はA類タイプであったが，第60・59号住居址との重複により破壊されていた。それでも本住居址の貼床がそれとの部分に延びていたことは確実で前述の新旧関係を断定したが，その壁を把握することは困難な状況にあった。

第56号住居址

本調査区中央部東よりグループの東端に位置する。第57号住居址と重複し，それを切ってより

本住居址は第17・30号住居址の上部にあってより新しいものと判断されたが，発掘過程においては土層観察のきわめて困難な状況のために，本住居址のプランを確定することなく掘り下げざるを得なかった。したがって，その東壁を確実に把握することはできなかった。

床面は地山からなって二重構造はもたなかったが，南壁の中央部東側に方形状張り出しピットがみられた。柱穴は発見されなかったが，東壁の中央部北よりにほとんど壁に重複する状況で柱穴状ピットが検出された。

第17号住居址

調査区中央東よりグループの中心を占める大形住居址で，第18・16・30・21号住居址と重複する。このうち，第18・16に切られてより古く，第30・21号住居址を切ってより新しい。

床面は堅固な貼床をもつA類タイプの二重構造で，柱穴と認め得る4本のピットもあるが，とくに東よりの2本がやや西側にずれている。本住居址の柱穴は床面検出時には発見できず，掘り方面で確認したものである。また，各住居址との重複個所はいずれよりも深く，掘り方発掘によってプランを確定できたものである。なお，床面の一部には，若干の炭化粒もあった。

第18号住居址

調査区の中央部東よりの重複グループのうちで，北端に位置する。わずかにその南端部で第17号住居址と重複するが，その上部にあってより新しい。

床面は比較的良好な貼床で，全面に厚い焼土塊を敷きつめ，炭化材もみられる。火災を被った状況がきわめて顕著な1例である。炉と思われる焼土は床面中央部にあるが，柱穴は西南隅に1本確認されたほかは発見できなかった。床面の二重構造は顕著でA類となるが，中央部ではほぼ床面に等しいレベルをもつタイプである。

第20号住居址

調査区中央部東よりグループの南端に位置する。第21号住居址と重複するが，その床面を切ってより新しい。

床面は堅固な貼床で，その東北よりを中心にかなり厚い焼土塊があって被火災住居と認められた。貼床面における柱穴等の検出は不可能であったが，炉址は認められた。掘り方はB類タイプで，壁周辺に若干の平坦面を残して，その内側にやや巾狭く浅い周溝状遺構をつくり，中央部はほとんど貼床を除去できる程度であった。柱穴4本を発見し，他に，東・南壁の周溝状遺構付近に柱穴状ピット4があったがその性格は不明である。

第21号住居址

調査区中央部東よりグループのほぼ中央にあって，第27・30・17・20号住居址と重複する。第27・30号住居址を切ってより新しく，第17・20号住居址に切られてより古い。

調査の過程においては，状況把握がきわめて困難で，かなり広範囲に比較的良好な貼床が認められ，一部には重複しあう可能性を有する壁が残存している様相であった。そのため調査段階で

新しい。その位置関係からすれば，第57号住居址とも重複関係を有する状況にあるが，調査過程でそれを判断することはできなかった。

本床面は比較的軟弱で良好とはいえなかったが，中央部に焼土２があって炉址と判断されたので，そのレベルを床面としてみた。柱穴は４本としておくが，位置がやや歪んでいて不安は残る。二重構造はＣ類タイプであった。

第57号住居址

本調査区中央部東よりグループのほぼ中央に位置する。第60・59・56号住居址と重複するが，第56号住居址に切られてより古く，第60・59号住居址を破壊してより新しい。

床面は堅固な貼床で，第59号住居址のそれとレベルや状況においてほとんど区別できなかったが，掘り方における層位観察によってより新しいものと判断された。そのため，重複する部位においては，壁の下場はきわめて不明瞭であり図示していない。それでも，掘り方調査によって，Ｂ類タイプの二重構造をもつ独立した住居址であることが確実となった。

床面の中央部には炉址と思われる焼土があり，柱穴とし得るピット４本があるが，北西隅よりにはさらに１本が加わる。いわゆる副柱といわれる類である。

第59号住居址

本調査区中央部東よりグループのほぼ中央部に位置し，第22・60・57・61号住居址と重複するが，前３者のすべてに切られてより古く，第61号住居址を切ってより新しい。

床面プランにおいては，壁と貼床とがごく一部が残った状況にすぎなかったが，その掘り下げにおいて，周濠状掘り方が，第57号住居址のそれと重複しながらもほぼ完全にちかい状況で発見された。これによって，本住居址のプラン・規模等が明らかとなり，柱穴４本も確実といえた。

第60号住居址

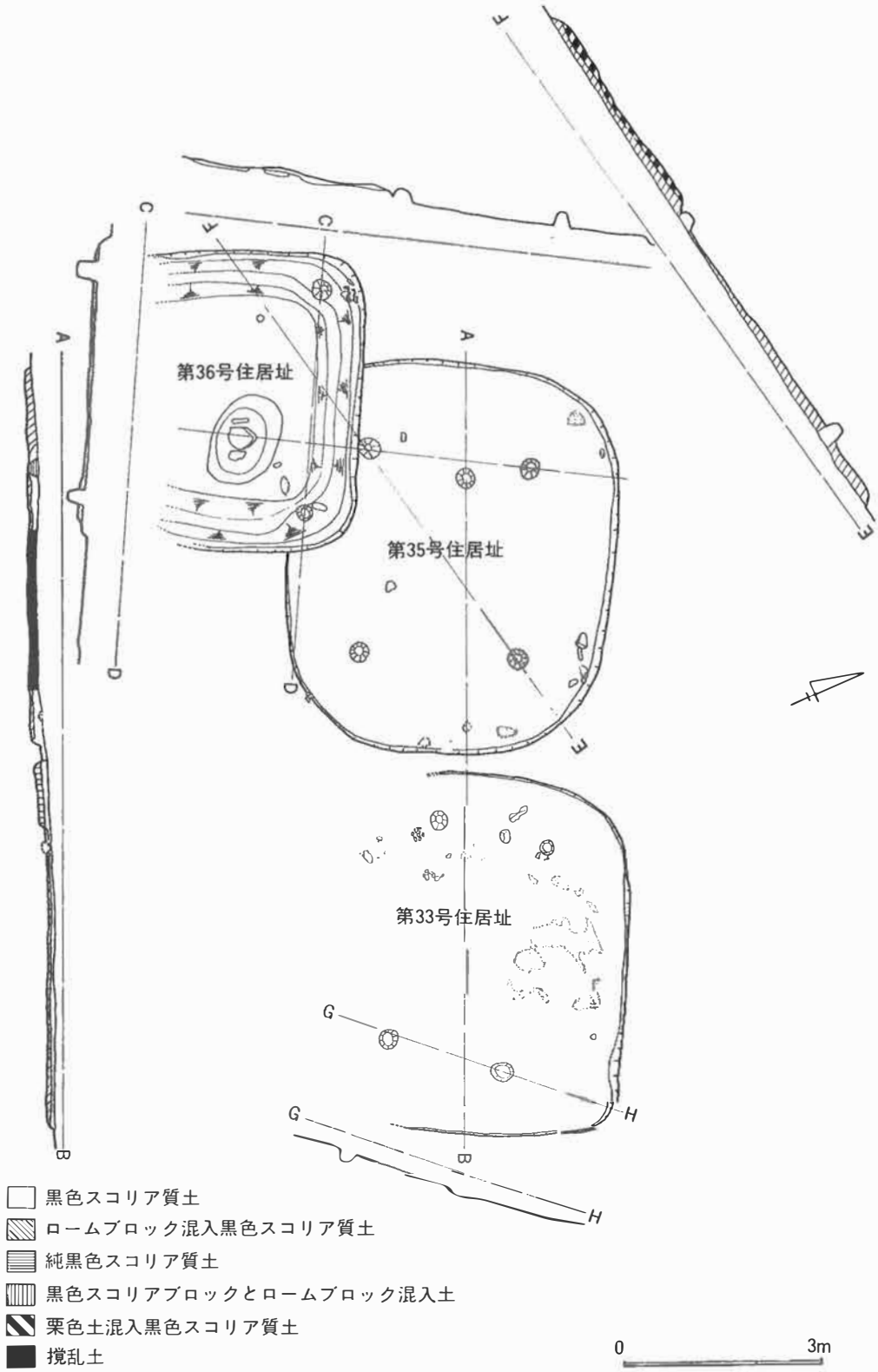
本調査区中央部東よりグループのほぼ中央部において，全体の約２分の１ほどが残った住居址で，第22・57・59号住居址と重複するが，第22・57号住居址に切られてより古く，第59号住居址を切ってより新しい。

床面は比較的良好な貼床で，中央部に焼土を有して炉址と認められたほか，周辺部にも焼土や炭化材が多くカヤ類も含まれていた。被火災住居址であろう。床面の二重構造は，Ｃ類タイプであったが，その東側の限界は第57・59号住居址の掘り方がより深いため明らかにはできなかった。それでも，第57号掘り方の中央台状部には及んでいないようであった。

第61号住居址

本調査区中央部東よりグループの南端に位置する。第59号住居址と重複するが，本住居址の床面が切られた状況でより古い。

床面は比較的軟弱であるが，中央部に焼土を有して炉址となる。柱穴は発見できなかったが，Ｃ類タイプの二重構造を有する。



第23図　第33・35・36号住居址実測図

第33号住居址　（第23図，図版第25）

本調査区中央部のやや西よりにあって，単独で存在する。南側の約３分の１ほどを欠失する。

床面は比較的軟弱な貼床で，そのほぼ全面に焼土が散在して，火災を被ったものといえる。炉址はみられないが，柱穴は４本で，Ｃ類タイプの二重構造を有する。

第35・36号住居址　（第23図，図版第26）

本調査区中央部の西よりにあって，２基が重複している。その重複における新旧関係は次の通りである。

35 ⟶ 36

第35号住居址

重複する２基のうち北側にある住居址を第35号住居址とした。第36号住居址がより低く，本住居址を切っていることから，より古い。

床面は堅固な貼床で，４本の柱穴をもつ。炉址と判断できるものはみられないが，壁周辺には若干の焼土塊があって，あるいは被火災住居址である可能性もある。床面の中央部のやや西よりに，柱穴状ピット１本があったが，その性格は推定しがたい。

なお，本住居址の覆土最上面のうち，第33号住居址に接近する位置に，焼土塊がみられる。

第36号住居址

第35号住居址の南西隅を切っている住居址で，より新しい。南半部を欠失する。

床面はやや軟弱な貼床で，炉址はなく，柱穴２本が北側に検出された。中央部東よりに，141×96cmほどのピットがあり，礫を伴っていた。床面の二重構造はＢ類タイプに属する。

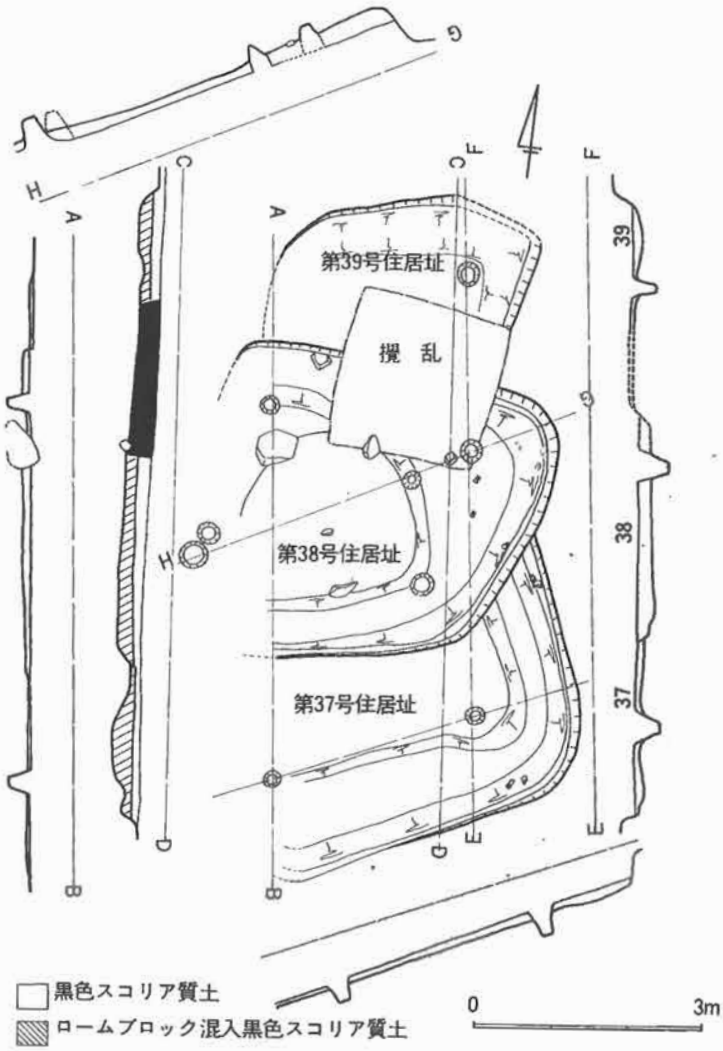
第37・38・39号住居址　（第24図，図版第26）

本調査区西北隅にちかく，３基の住居址が重複していた。いずれも，地形の傾斜と耕作とによってその西壁と床面の一部を失っている。床面調査の段階では，基数・前後関係とも明瞭ではなかったが，掘り方調査によってそれらを確定した。前後関係を図示すると次の通りであるが，その位置関係から重複することになる第37・39号住居址の関係は攪乱坑もあって不明である。

第37号住居址

重複３基のうち，最南端にある。第38号住居址に切られて，北側を欠失するが，より古い。

床面は堅固な貼床で，炉址はみられないが，柱穴４本がありうち２本は第38号住居址内にある。



第24図　第37・38・39号住居址実測図

B類タイプの二重構造となる。

第38号住居址

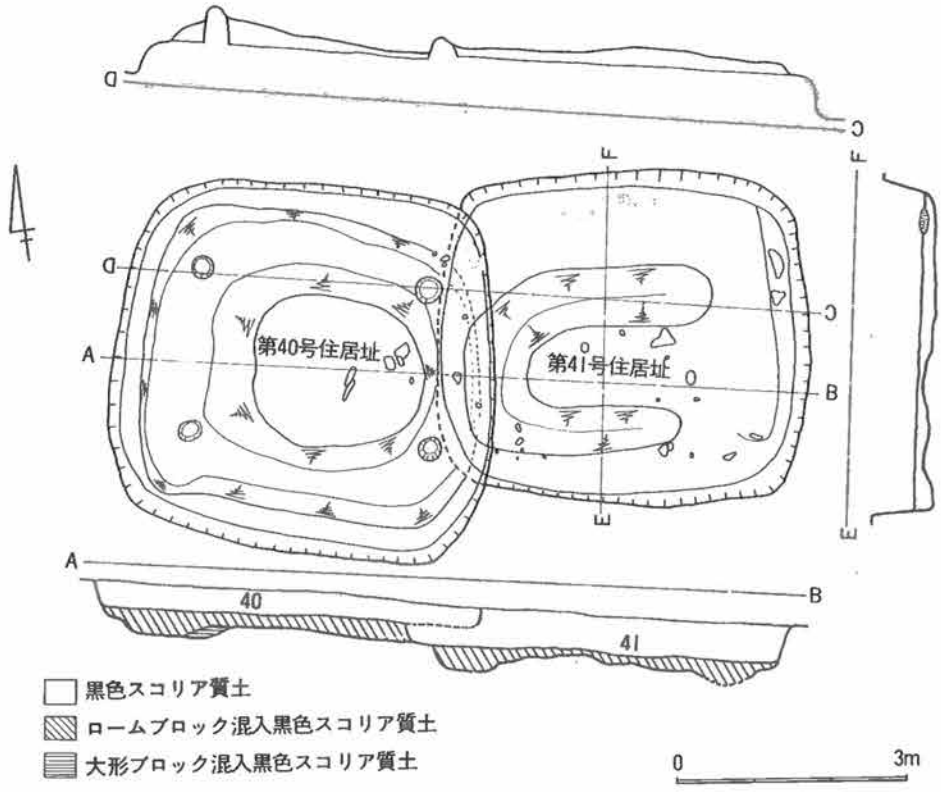
3重複住居址の中央部にあり，第37・39号住居址を切ってより新しい。

床面は堅固な貼床で，中央部南よりに礫を伴う焼土があって炉と判断された。柱穴は4本で，B類タイプの二重構造を有する。東北隅の一部に，焼土塊が認められたが，火災とするにはあまりに少ない。

第39号住居址

本グループの北端にあって，第38号住居址に切られてより古い。

床面は堅固な貼床で，柱穴と認め得るのは1本である。第38号住居址にまたがって大きな撹乱



第25図　第40・41号住居址実測図

坑がある。北壁側の掘り方からすれば，A類タイプの二重構造となるものであろう。

第40・41号住居址　（第25図，図版第27）

本調査区中央部の北端にあって，2基が重複する。その前後関係は次の通りである。

41 ⟶ 40

第40号住居址

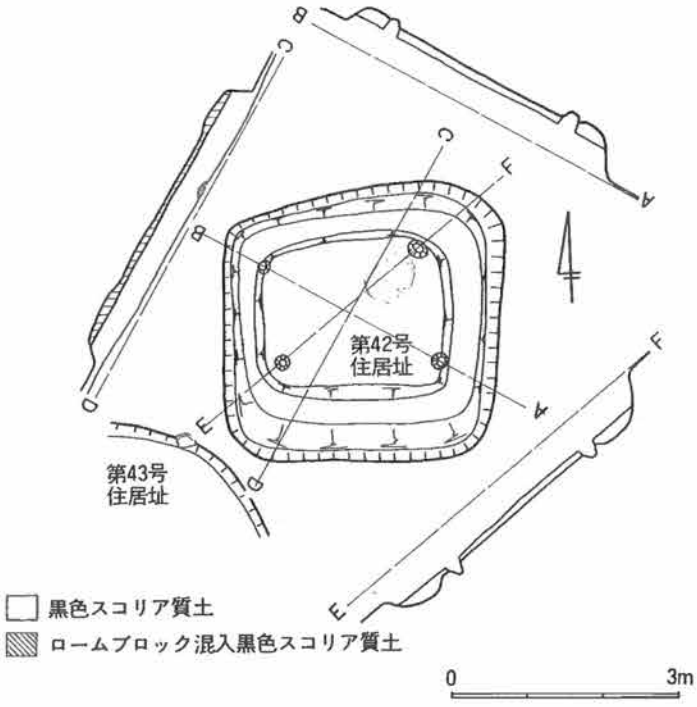
2基のうち西側にあるもので，第40号住居址を切ってより新しい。

床面は堅固な貼床で，柱穴4本をもつが炉址はない。典型的なB類タイプの二重構造を有する。

第41号住居址

東側にある住居址で，第40号住居址にその西壁を切られて，より古い。

床面は堅固な貼床であるが，炉址・柱穴ともみられない。北壁と東壁の一部に焼土塊があるが，その性格は判定しがたい。掘り方の西端を第40号住居址によって攪乱されているが，東側に土橋的部分をもつB類タイプとみてよかろう。



第26図　第42号住居址実測図

第42号住居址　（第26図，図版第33）

本調査区中央部南よりに，単独で存在する。

床面は堅固な貼床で，炉址はない。柱穴４本の検出はいずれも掘り方調査での段階であった。中央部北よりの焼土は，床面のものではなく，覆土最上面にあった。Ａ類タイプの二重構造を有する。

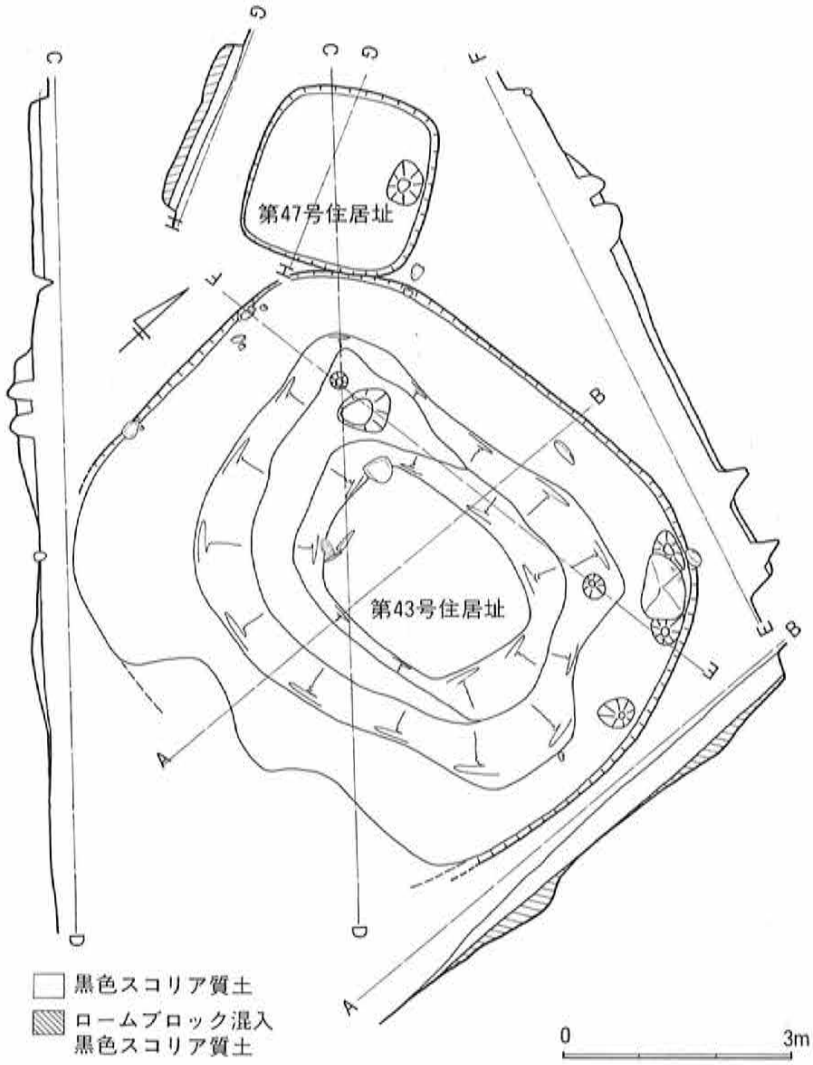
第43号住居址　（第27図，図版第28）

本調査区の南端部中央にある。位置関係からすれば，第48号住居址と重複するが，その関係を確認できないので，単独として扱った。

床面は堅固な貼床であるが，南壁と床面の一部を欠失する。その中央部付近に，やや小規模な焼土があって礫２を伴い，炉址と認められた。柱穴は，北西壁よりに２本が発見され，うち１本には副柱を伴った。注目されるのは，北隅から北東壁にかけて認められた３本の柱穴で，いずれも壁に接していた。その性格は断定し難いが，とくに北隅の２本は地山に含まれた大礫の両端に接する状況であった。床面の二重構造は，西南壁側にやや巾広い床面を残すが，北西壁・北東壁にはそうした構造はない。広義のＢ類タイプに属するものとしておこう。二重構造の定型化する以前の状況といえるかも知れない。

第44号住居址　（第28図）

本調査区南端部の中央西側に，単独で存在する。



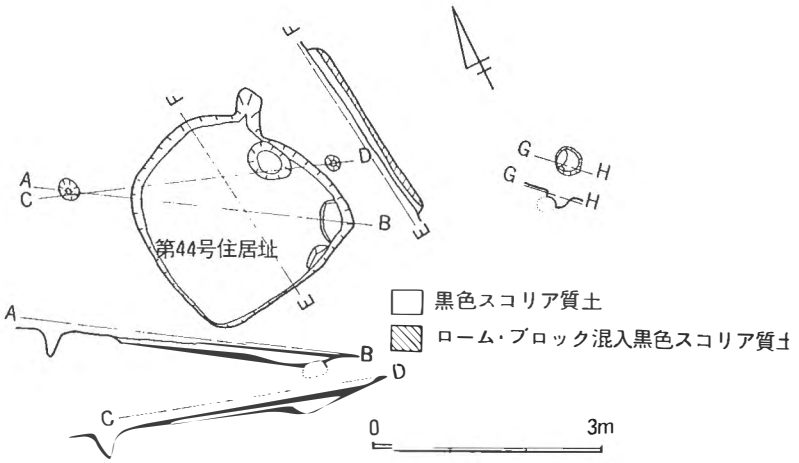
第27図　第43・47号住居址実測図

形状はかなり歪んだ隅丸方形で，床面はきわめて軟弱で，貼床といえる状況はない。わずかに覆土となる黒色スコリアとは区別できる含黄褐色土ブロックの黒色スコリアを床面および掘り方と認めた。炉址はみられず，柱穴状ピットも床面では北東壁のほぼ中央ちかくに１本のみであった。壁外には，最大で３ｍ余も離れるものを含んで３本の柱穴状ピットがあったが，いずれも本住居址に伴うものとはいえない。床面の二重構造はＣ類タイプであった。

第47号住居址　（第27図，図版第31）

東調査区の中央部南端にあって，第43号住居址の西北隅に接する状況で位置する小形住居址である。

床面はかなり軟弱であるが貼床を認め得た。北壁中央部に柱穴状ピット１本が発見されほか，

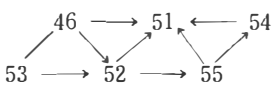


第28図　第44号住居址実測図

炉址・柱穴はない。二重構造は比較的良好で，C類タイプに属した。

第46・51・52・53・54・55号住居址　（第29図，図版第29・30）

本調査区西端のやや南よりにあって，6基の住居址が重複する。地形の傾斜が南西よりにかなり強くなる地点で，プランの確定に困難な状況であったので，不確実な要素が多い。その重複における前後関係は次の通りである。



第46号住居址

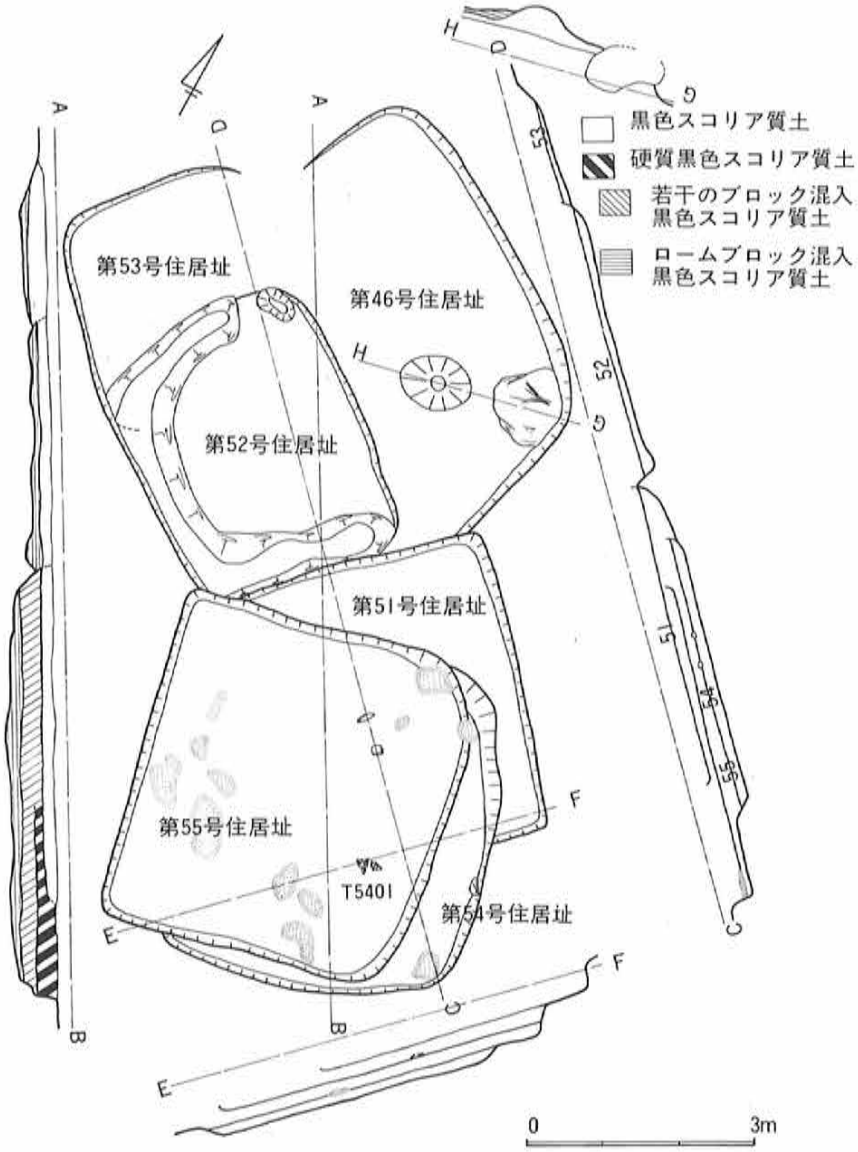
本グループ最北端にあって，第51・52・53号住居址と重複する。その前後関係は第51・52号住居址に切られてより古いが，第53号とはともに重複部分の壁を欠失して不明であった。

床面はやや軟弱な貼床で，炉，柱穴ともにみられない。中央部東よりにかなり大形といえる柱穴状ピットがあったが，その性格は不明である。また，東北隅には地山の大礫が露出していたが，床面の二重構造はC類タイプであった。

第51号住居址

本グループ北より東側にあって，第46・52・55・54号住居址と重複する。その前後関係は，第46・52号住居址を切って，第55・54号住居址の上に床面を張っていることから，すべてより新しい。

床面は本グループ内では比較的良好な貼床であるが，その南半を流失して，プランの全体は把握できない。柱穴・炉址ともみられず，二重構造も有しないようであった。



第29図　第46・51・52・53・54・55号住居址実測図

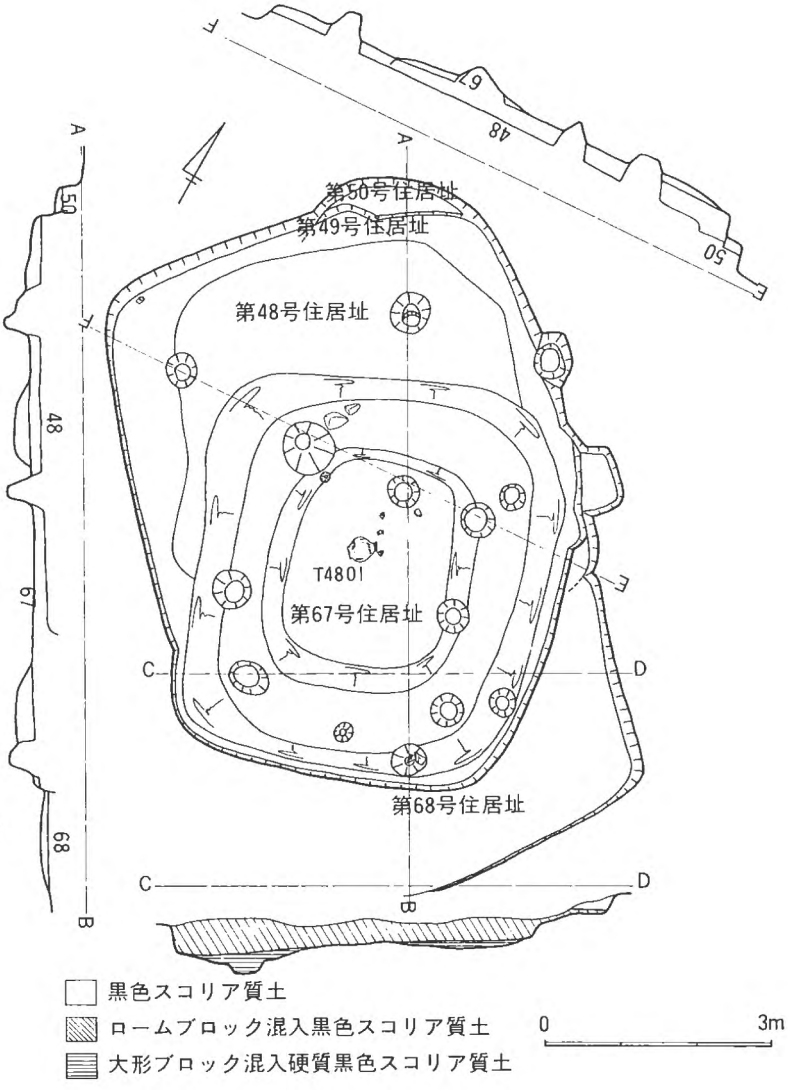
第52号住居址

本グループ西より南側に位置する。第46・53・51号住居址と重複するが，前２者を切ってより新しく，後者に切られてより古い。

床面は比較的良好な貼床で，東北隅に１本の柱穴状ピットを有する。掘り方は北壁側にみられないが，それでもＡ類タイプと認めておこう。

第53号住居址

本グループの西南端にあって，第52・46号住居址と重複する。前者には切られてより古く，後



第30図　第48・49・50・67・68号住居址実測図

者とは壁の流失により認定の根拠がない。

床面はやや良好な貼床で，炉址・柱穴ともみられない。二重構造はＣ類タイプと認めた。

第54号住居址

本グループ東北端に発見された住居址で，第51・55号住居址と重複する。それは，第55号住居址の覆土を掘り込んでその上部に構築することからより新しく，第51号住居址が本住居址床面の上部に床面を張ることからより古い。南側の大半を流失して，北より一部を残すのみにすぎない。

床面はやや軟弱な貼床で，炉址・柱穴ともみられないが，東北隅の壁際に焼土塊を残している。二重構造はＣ類タイプであった。

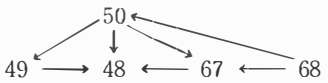
第55号住居址

本グループ東より南側に位置する。第51・54・52号住居址と重複するが，第52号住居址を切ってより新しく，第51・54号住居址の下部にあってより古い。

床面は，比較的良好な貼床であるが，炉址・柱穴とも認められない。床面のほぼ全域にちかく，焼土塊が散在する。あるいは火災の可能性を認めてよいかも知れない。二重構造はC類タイプに属する。

第48・49・50・67・68号住居址　（第30図，図版第32・33）

本調査区中央部東よりの南端に位置するグループで，第48・49・50・67・68号住居址が重複する。東南隅は一部流失しているが，その前後関係は次の通りである。



第48号住居址

本グループの西半に位置する。第49・50・67号住居址と重複する。第49・50号住居址を切り，第67号住居址の上にのって，そのすべてより新しい。

床面は比較的良好な貼床で，中心部に礫2があってあるいは炉石かと推定されたが焼土はみられない。柱穴は4本で，二重構造はC類タイプであった。

第49号住居址

東グループ西端にあって，第50・48号住居址と重複する。第50号住居址を切ってより新しく，第48号住居址に切られてより古い。わずかに西北隅のごく一部が残存するのみで，堅固な貼床を残すが，他のすべてを失う。

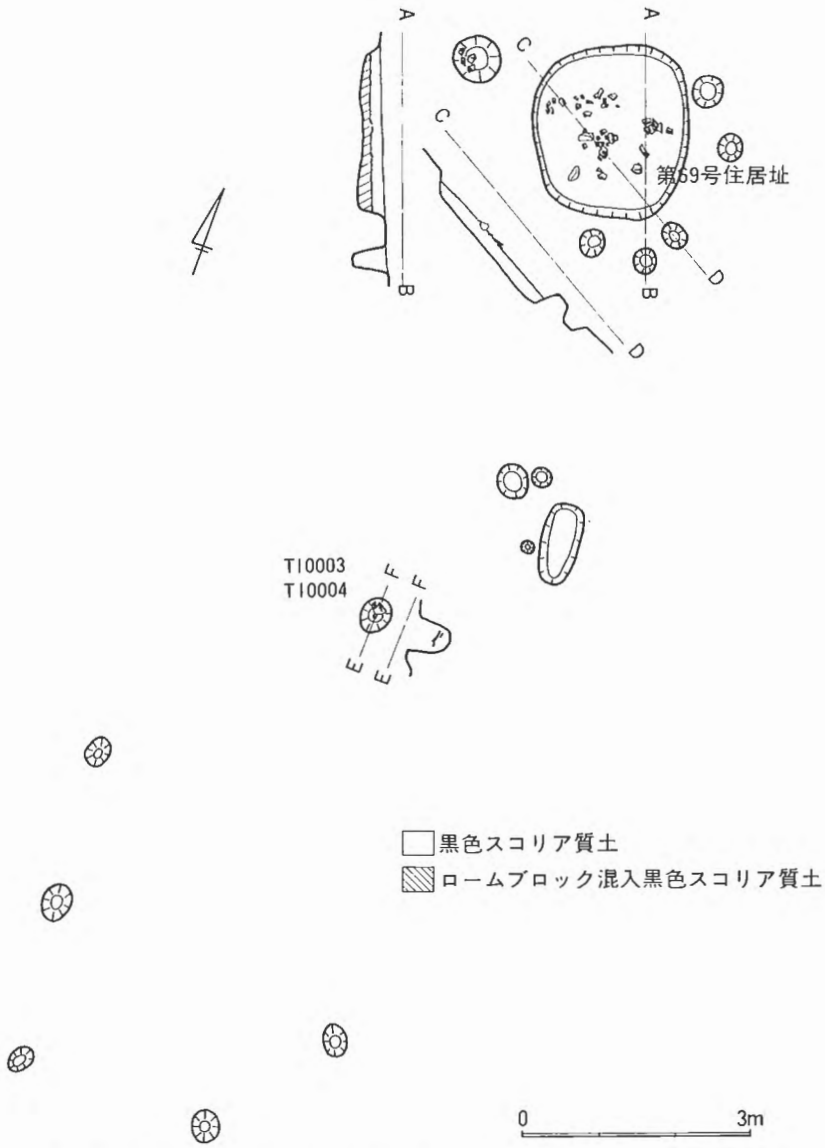
第50号住居址

本グループ西端にあって，わずかに西北隅と東北隅を残すのみであるが，方形状張り出しピットが伴う。第49・48・67・68号住居址と重複する。第49・48・67号住居址にいずれも切られてより古いが，うち第67号住居址とは確実な層位観察を得ていない。状況からすれば，本住居址が切られているとみてよいものであった。第68号住居址については，本住居址が切ってより新しいものと観察し得たが，重複部分がきわめて小範囲であることから若干の疑問は残る。それでも，一応調査時の所見に従っておく。

床面は堅固な貼床であるが，それは東北隅と，方形状張り出しピットにのみ残存する。他のすべては欠失している。

第67号住居址

本グループの中央部に位置する。第48・50・68号住居址と重複するが，第68号住居址を切って



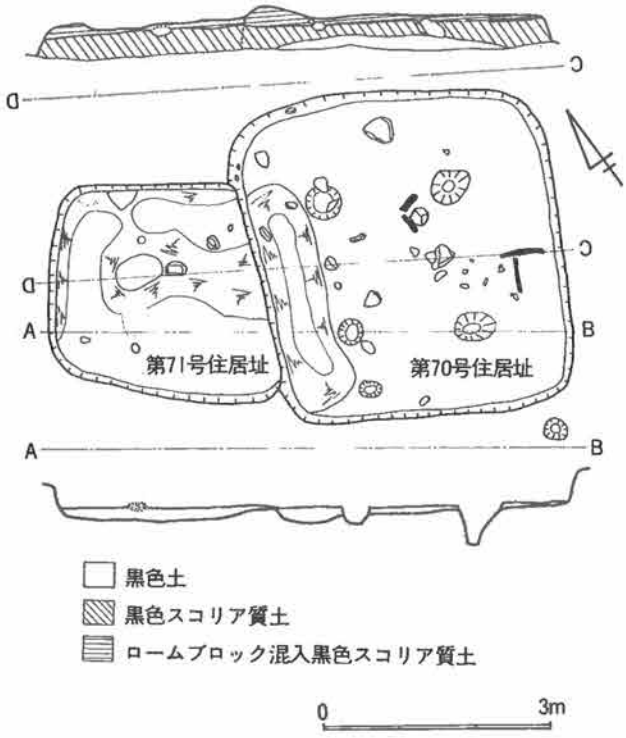
第31図　第69号住居址および東端部ピット群実測図

より新しく，第50号住居址とは前述のように新しいようで，第48号住居址の床面の下部に本住居址の床面をもつことからより古い。

床面は比較的良好な貼床で，柱穴４本も認定できたが，炉址は失われていた。なお，本住居址内に大小５本の柱穴状ピットがあるが，本住居址に伴うかどうかは明らかでない。床面の二重構造は，典型的なＡ類タイプといえる。

第68号住居址

本グループの東端部にあって，南壁を流失し，西半部を第67号住居址に切られてより古い。第



第32図　第70・71号住居址実測図

50号住居址とも重複するが，それにも切られているらしい。

床面は，堅固な貼床で，掘り方はC類タイプと思われる。炉址・柱穴等は明らかでない。

第69号住居址　（第31図，図版第42・43）

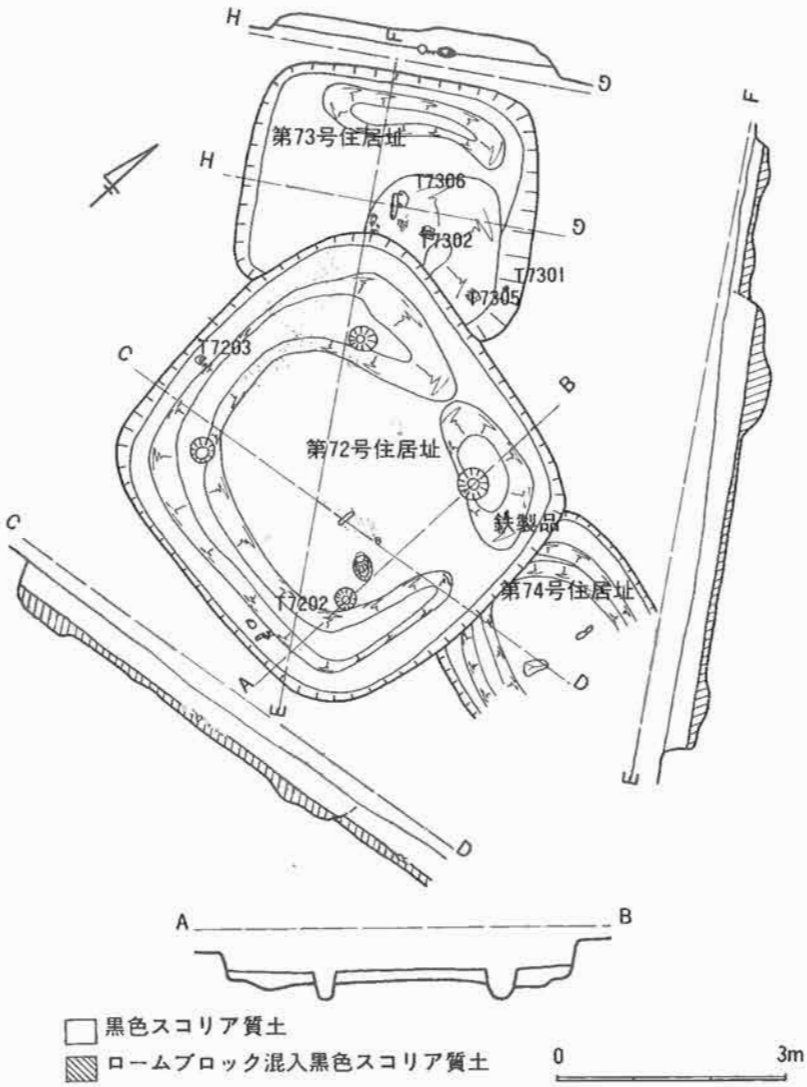
本調査区の東北端に位置し，単独で，重複しあう住居址群とは離れている。径2mに満たない胴張隅丸方形プランで，必ずしも住居址となし得るかどうか疑問な例である。

床面は軟弱であるが，C類タイプの掘り方を有する。炉址はなく，柱穴も内部にはないが，壁外周辺に計6本の柱穴状ピットがみられる。近辺に土坑状ピットと柱穴群とがあるので，あるいはそれに関係したものが含まれる可能性もあるが，少くとも，東よりにある5本は本遺構に伴うものかも知れない。なお，本床面上からは，かなりの土器群が出土している，あるいは本址の性格を反映するものである可能性も認めておきたい。

第70・71号住居址　（第32図，図版第44）

本調査区の東南端に位置し，他の重複住居址群とやや離れる位置にあって，2住居址が重複する。その前後関係は次の通りである。

71 ⟶ 70



第33図　第72・73・74号住居址実測図

第70号住居址

東側にあって，第71号住居址を切ってより新しいと判断されたが，その層位観察はきわめて不明瞭で明確に断定できる状況ではない。それでも，プランその他の状況からしてまず過りはないものと考えている。

床面はきわめて軟弱で，覆土との区別はほとんどできなかったが，炭化材の他の遺物の存在からそれと判断した。柱穴は４本で，他に南壁にちかく西よりに１本の柱穴状ピットがあり，たぶん本住居址に伴うものといえよう。明瞭に炉址といえるものはないが，かなりな炭化材が散在していたので，あるいは火災を想定できるかも知れない。床面二重構造はＣ類タイプであるが，西壁側には巾広い周濠状掘り方が認められた。若干の部分変化をもつ例といえる。

第71号住居址

第70号住居址の西隣にあって，本住居址が切られてより古い。東壁と東北隅を失っている。

床面は，第70号住居址同様に，きわめて軟弱であるが，中央部南よりに焼土があって炉址と判断されたところから床面を確定した。柱穴等は検出できなかったが，土橋的構造を有するA類タイプとみてよいものであった。

第72・73・74号住居址(第33図，図版第45・46)

本調査区の東南隅にちかく，3住居址が重複する。その前後関係は次の通りである。

73 ⟶ 72 ⟵ 74

第72号住居址

本グループの中央部にあって，第73・74号住居址と重複するが，その両者を切ってより新しい。

床面は堅固な貼床で，中央部南よりに，焼土があって炉址と判断され，炉石1を伴っていた。柱穴は4本で，東南隅のものは副柱1本を有していた。したがって，柱穴は5本となる。床面の北西隅よりに100×150cm前後の範囲をもつ焼土塊があって，若干の炭化材・カヤ類等を含んでいた。他の部分にも若干の焼土はみられて，火災の可能性を認めてもよい。二重構造は，東北隅側に土橋的構造をもつB類タイプであった。

第73号住居址

第72号住居址の西北隅側に重複する住居址で，明らかにより古い。

床面は良好な貼床で，中央部東よりに焼土があって，炉址と認められ，炉石1を伴った。柱穴は検出されない。二重構造は，北西壁と南東隅側をやや深くするが，B類タイプに属する。

第74号住居址　第34図，図版第47)

第72号住居址の東側に重複してより古く，その東壁側を調査区外に延ばしている。

床面は良好な貼床で，中央部の北・南よりに2個所の焼土をもち，ともに炉址と判断されたが，各1の炉石も伴った。柱穴は発見されなかったが，床面の二重構造はB類タイプであった。

第75・78号住居址

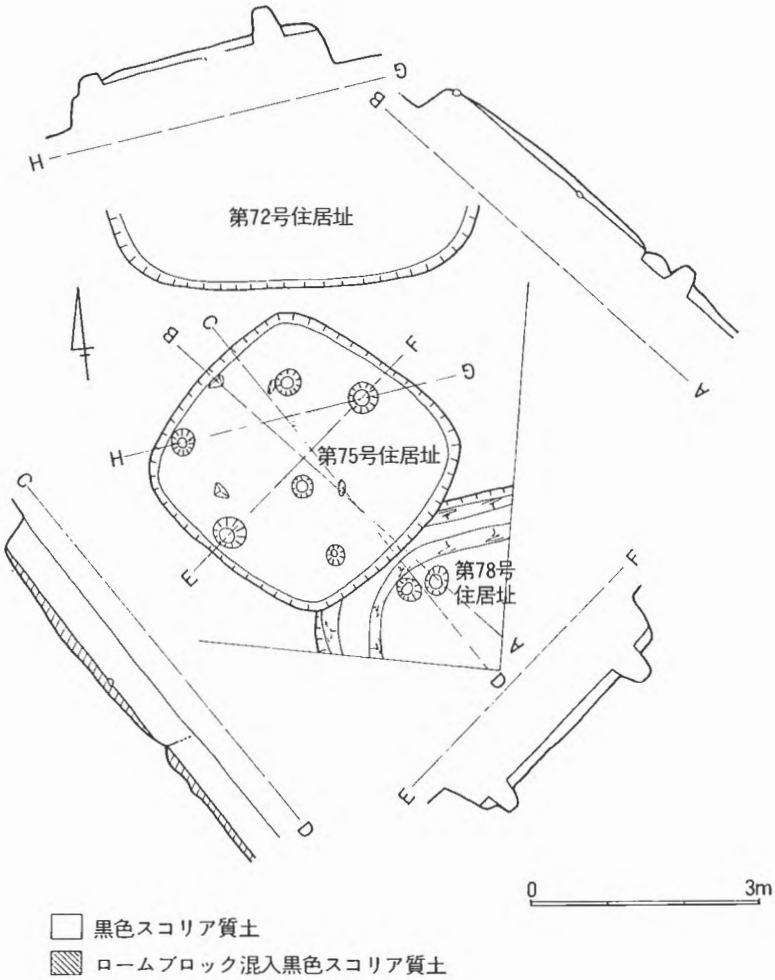
本調査区の東南端にあって，第75・78号住居址が重複するが，後者の大部分は調査区外に延びていた。その重複における前後関係は次の通りである。

75 ⟵ 78

第75号住居址

北よりにある住居址で，明らかに第78号住居址を切ってより新しい。

床面は堅固な貼床で，中央部北よりに焼土を有して炉址と判断された。柱穴状ピットはすべてで6本を数えるが，規則性にやや欠ける。位置関係からすれば，西南隅の1本を認めてよかろう



第34図　第75・78号住居址実測図

が，全体の状況から保留すべきかも知れない。二重構造はC類タイプに属する。

第78号住居址

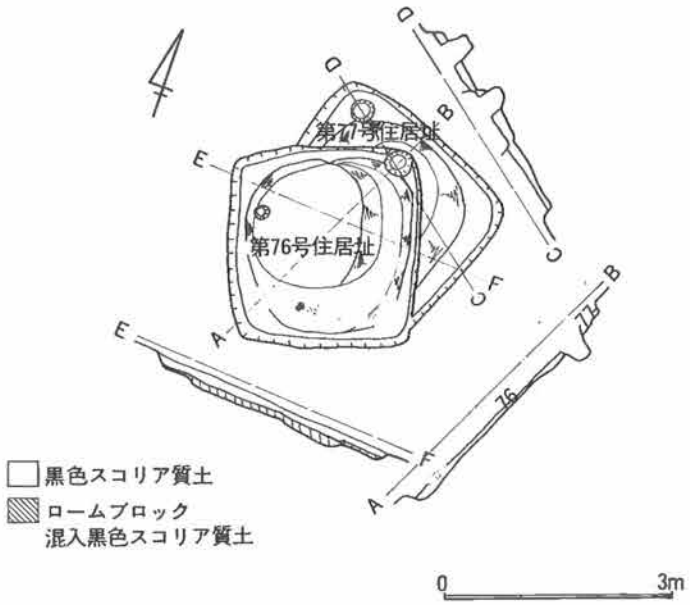
第75号住居址の東南側に重複して，より古いが，その大部分を調査区外に置く。

床面は堅固な貼床で，調査範囲内では柱穴状ピット２本を伴う。北西隅に位置する主・副柱穴となり得る。二重構造はA類タイプであった。

第76・77号住居址　（35図，図版第48）

本調査区の東南側の中央よりに位置するもので，２住居址が重複する。その前後関係は次の通りである。

76 ←― 77



第35図　第76・77号住居址実測図

第76号住居址

南よりの住居址で，第77号住居址を切ってより新しい。

床面は比較的良好な貼床である。ほぼ全面にちかい状況で，焼土塊が散在するが，なかでも南半部に比較的大きなものが集中している。火災の可能性を十分に認め得るが，そのため，炉址の認定に困難を感ずる状況にある。あるいは有しなかった可能性もあろう。東北隅の壁際と，中央部西北よりに各1の柱穴状ピットがあるが，確定できる状況にはない。掘り方はB類タイプに属する。

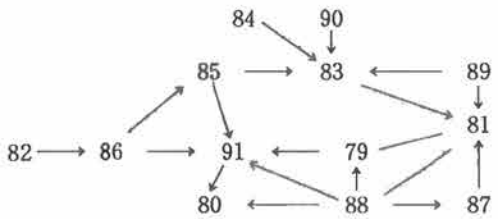
第77号住居址

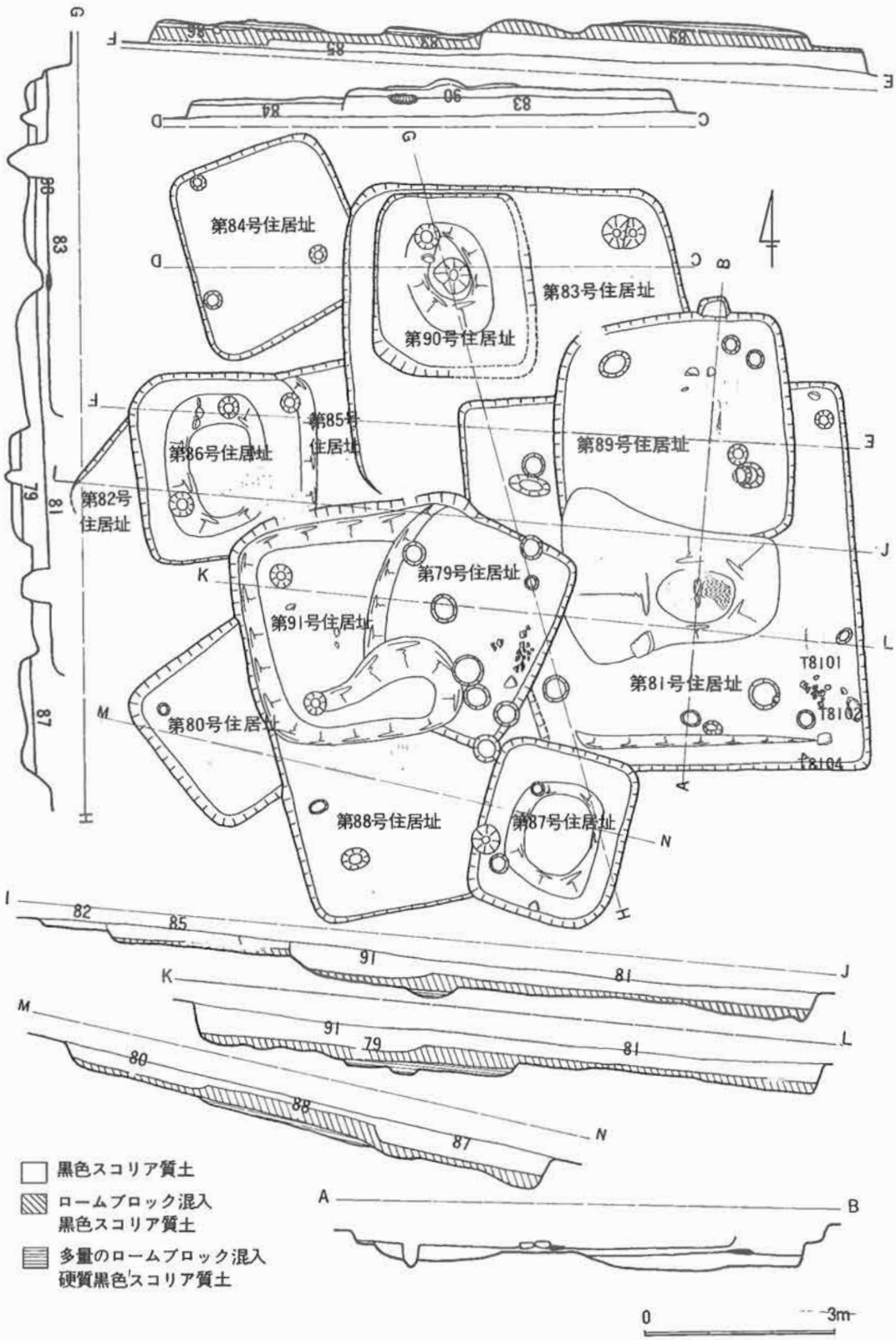
第76号住居址の東北側に重複する本住居址があってより古く，過半を失う。

床面は，やや軟弱な貼床で，炉址はなく，柱穴状ピット1本が北隅にある。B類タイプの二重構造を有する。

第79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91号住居址　（第36図，図版第49～54）

本調査区東南端よりにあって，第79～91号住居址の13基が重複する。きわめて複雑な前後関係となるが，それは次の通りである。





第36図　第79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91号住居址実測図

第79号住居址

本グループのほぼ中央にあって，第91・81・88号住居址と重複するが，第91号住居址の下部にあってより古く，81・88号との関係は確認不能であった。約4分の3を残存する。

床面はやや軟弱な貼床で，一括の土器群を有する。二重構造はC類タイプで炉はもたない。柱穴はすべてで8本を有するが，認定しうるものはない。

第80号住居址

本グループ南よりの西端に位置する。第91・88号住居址と重複するが，その両者に切られてより古い。約4分の3を残存する。

床面は比較的良好な貼床で，西壁よりに炉址が認められた。柱穴は北西隅に1本のみであるが，掘り方はC類タイプであった。

第81号住居址

本グループの中央部東端にある。第89・83・91・79・88・87号住居址と重複するが，第89・87・83号住居址の上部にあってより新しい。他との関係は不明であった。約2分の1を残存する。

床面は堅固な貼床で，中央部に灰を高く積む焼土があって炉址と認められ，炉石2を伴った。柱穴状ピット8本を検出したが，良好な状況で認定できるものはない。掘り方はB類タイプであった。

第82号住居址

本グループの中央部西端に位置するが，東側を第86号住居址に削られ，南側を流失して，約8分の1ほどが残るにすぎない。

床面はやや軟弱な地山で二重構造はもたない。炉址・柱穴ともなく，北西壁と一部の床面から認定したにすぎない。

第83号住居址

本グループの東北側にある。第84・90・89・81・91・85号住居址と重複する。第90・89号住居址の上部にあってより新しく，第84・85号住居址を切ってより新しく，第81号住居址より古い。また，第91号住居址との関係は不明であった。約4分の3ほどが残存する。

床面は，比較的良好な貼床で，中央部北西よりに礫を伴う焼土があって，炉址と認められた。柱穴状ピットは東北隅に重複する例が認められたのみで，他は明瞭でない。また，主に壁の周囲に焼土の散在が認められた，あるいは火災の可能性を考慮できるかも知れない。掘り方はC類タプに属する。

第84号住居址

本グループの西北端に位置するが，第83号住居址にその東南隅を切られて，より古い。

床面はやや軟弱で，炉もないが，柱穴状ピット3本が検出されている。位置不良で，1本のみ

が可能性を残す。掘り方はＣ類タイプである。

第85号住居址

本グループの中央部北よりにあって，第86・83・91号住居址と重複するが，第86号住居址の上にあってより新しく、第83・91号住居址に切られてより古い。

床面はやや軟弱な貼床であるが，二重構造については断定しにくい。炉址・柱穴等は不明である。

第86号住居址

本グループの北より西側にあって，第82・85・91号住居址と重複する。第82号住居址を切ってより新しく，第85号住居址を上にのせてより古く，第91号住居址に切られてより古いものであった。

床面は良好な貼床で，北西側に焼土があって炉と認められたが，礫３を伴っていた。また，中央から東南側にかけて，焼土の堆積が厚く，被火災住居址と認めてよかろう。柱穴状ピット３本をもつが，うち２本は位置関係もよい。二重構造はＡ類タイプといえる。

第87号住居址

本グループ南端部東よりに位置する。第88・81号住居址と重複するが，前者を切ってより新しく，後者の下部にあってより古い。

床面は良好な貼床であるが，炉はなく，柱穴状ピット２も位置関係不良である。Ａ類タイプの二重構造を有する。

第88号住居址

本グループの南端部西よりにあって，第80・91・79・87・81号住居址と重複する。うち，第81号との関係は不明であるが，他のすべてに切られたり，下部にあることからより古い。

床面は堅固な貼床で，中央部北よりに焼土をもって炉址といえる。柱穴の可能性をもつピットは３本あるが，位置関係では２本が良好となる。Ｃ類タイプの二重構造を有する。

第89号住居址

本グループの東北端部にあって，第81・83号住居址に重複するが，その両者の下部にあってより古い。

床面は良好な貼床で，中央部東よりに礫１を伴う焼土があって炉と認められた。柱穴状ピットはすべてで５本あるが，うち３本を主柱穴，２本を副柱とみることも可能な状況であった。掘り方はＣ類タイプである。

第90号住居址

本グループの北端部中央にあって，第83号住居址の下部におさまってより古い。

床面はやや軟弱な貼床で，炉址はないが，柱穴は北西隅よりの１本のみが伴うらしい。掘り方

はA類タイプとなる。

第91号住居址

本グループの中央部西よりにあって，第85・86・80・88・79・81・83号住居址と重複する。うち，第79号住居址の上部にあってより新しく，第85・86・88号住居址を切ってより新しいが，第80号住居址の下部にあってより古い。その他との関係は不明である。

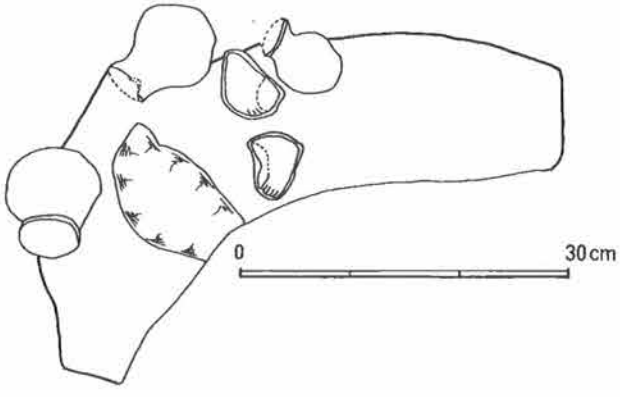
床面は堅固な貼床で，炉址はないが，柱穴は西側に2本あり，他に第79号内からも拾えそうである。二重構造はC類タイプであった。

(2) 掘立柱建物址 （第14・21図，図版第55）

本遺跡において掘立柱建物址として扱った例は2棟分である。うち，遺跡のほぼ中央部にちかい第15号住居址東北よりの1棟は現地調査の段階で認めた例であるが，遺跡の中央部南端の第22号住居址内に発見されたそれは資料整理の過程で3本の柱穴を認定しようと試みたものである。よって，前者（第1号）については確実といえるが，後者（第2号）には若干の疑問が残ることを断っておきたい。

第1号掘立柱建物址は，1間×1間で，その絶対値は160×230cmほどを測る。長軸方位を西北～東南方位にするが，その検出状況は良好で，周辺の検討によれば，両辺とも2間になり得る可能性はまったくない。4本柱建物址と認めておく。

第2号(第22号住居址上)掘立柱建物址は，すでに述べたように3本柱をかなり無理に認定してみたものであるが，これを除去することによって第22号住居址内のピットを合理的に理解できるようになる。1間×1間で，それは160×200cm前後を測って，第1号掘立柱建物址の規模にほぼ一致する。



第37図　第1号特殊遺構

(3) 特殊遺構 （第37～39図，図版第57）

ここで特殊遺構と呼んだものは，大きく３種類の遺構を含んでいる。それは，

① 第７号住居址付近で発見された坩群一括と焼土塊の組合わせ遺構（第１号特殊遺構）

② 第22号住居址覆土最上面で発見された土器群一括を伴う遺構（第２号特殊遺構）

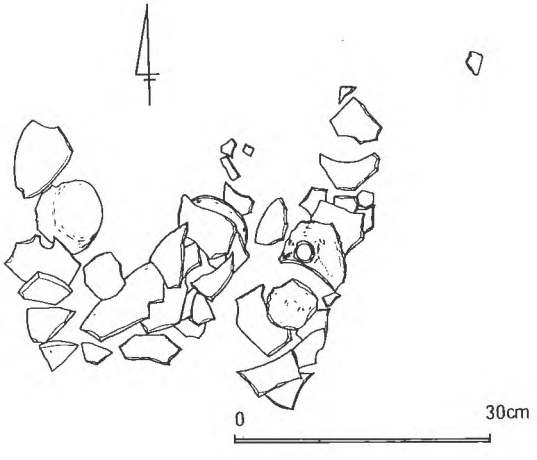
③ 第１号住居址北よりで第２号住居址の東壁にちかく発見された礫を配列した遺構で，２基ある。(第３・４号特殊遺構）である。なかには遺構とすることが適正であるかどうか疑問な例も含むが，そうしたあり方に注目する意味でとりあげてみた。以下各別に述べよう。

第１号特殊遺構としたものは，径40cm前後の粘土床の外縁部に小型坩４個を半円形に並列した遺構と，それから約1.5mほどの空間をおいて，220×110cmほどの規模を測る厚い焼土塊とが認められた。両者が積極的に単一の遺構であるという証拠はないが，同一レベルで周辺に他の遺構等がみられないことから一括して扱っておくことにする。粘土床の南半部は耕作による攪乱で失われていたが，こうした遺構の性格については後に検討してみることとしたい。

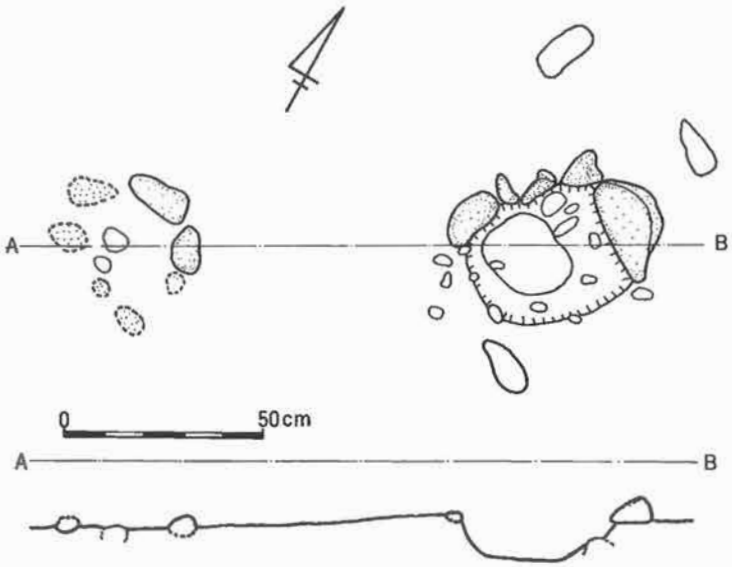
第２号特殊遺構としたものは，第22号住居址覆土最上面で，60×70cmほどの長方形の範囲に一括で発見された土器群のまとまりである。高杯・甕形土器片等で，器形も比較的類例の少いものであった。なお本土器群については，かなり詳細な検討にもかかわらず伴うといえる遺構を明らかにすることはできなかった。なお，前節で述べた第２号掘立柱建物址との関係では，その区画内に含み得る点のみを述べておこう。

第３・４号特殊遺構は，礫をほぼ円ないし楕円形に配したもので，相互の中心間距離は1.1mである。第３号特殊遺構は，30×35cmの長方形で，深さ15cmほどの浅いピットが認められ，その周縁部北半にのみ礫を配している。第４号特殊遺構としたものは，ピットといえる状況はないが，わずかに残された数個の礫と，調査時の移動に際してその痕跡が残存していたと判断された状況から，径20cm前後の円形プランを認めてみた。

こうした遺構のあり方は，何らの遺物を伴わないことも加えて，人為的遺構と認めるべきかどうか大いに困惑した。確かに本遺構付近は，遺構検出面が，前述した休場層でこれには地山礫がかなり含まれていた。したがって，自然的現象を誤認したのではないかという批判は出てくるかも知れない。それでも，本遺構の上部には住居址内覆土とまったく同質といえる黒色スコリア質土が堆積していることから，住居址群とほぼ同期で何らかの関係を有する遺構と



第38図　第２号特殊遺構



第39図　第3・4号特殊遺構

判断してみた。もちろん，その性格・住居址との関係などを推定する資料はまったくないが，今後の問題提起として記述しておくこととする。

2　遺　物

本遺跡の主な遺物としては，土器類・鉄器類・石器類がある。

(1)　土器類(第40～57図，図版第85～96)

月の輪平遺跡

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T0101	甕 A4	15.3 23.2 10.2	胎土　砂粒を多く含む。石英，金雲母を比較的多く含む 焼成　良 色調　暗黄褐色	外面は口縁ヨコナデ（胴のハケの後)。胴下半を2回にわけてハケを施した後上半のハケを施す。脚斜位の短いハケ以下ナデツケ(？) 内面は口唇かすかな凹部が見られる。接合部はヘラズリ，後全体に横コナデ胴上半，明瞭なオサエ，脚オサエと軽いナデ，下端折り返し（8本／1cm）	スス胴最大径付近，口唇に付着二次加熱あり 完形 脚，深沢氏のネームあり
T0102	甕 A3	21.0 30.6 10.5	胎土　粒の大きい砂，石英，長石を含む。金雲母は少ない 焼成　普通 色調　茶褐色	外面は口唇ヨコナデ，胴下から右下りのハケが3回胴上半は左下りのハケ，後に口縁のナデと胴の横線を施している。脚斜位の短いハケ，以下ナデツケ。 内面は口縁口唇に凹線が巡る。 胴上半オサエ，脚明らかなオサエ，下端折り返し（6本／1cm）	内外面剥落著しい（ハケの上下関係は必ずしも定かでない） ほぼ完形，二次加熱
T0103	甕 A4	14.6 23.3 9.7	胎土　細かい金雲母，長石を含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面は口唇ヨコナデ，胴下から上に3回のハケ（後に口唇のナデ) 脚斜位の短いハケ（ナデツケの後）内面は口唇ナデ接合部ケズリ 胴上半オサエ，胴底ケズリ，脚オサエ，下端折り返し（9本／1cm）	スス（最大径以下，口唇）付着 ほぼ完形
T0104	甕 A3	20.7 30.7 10.2	胎土　金雲母，石英，長石，砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面口唇ヨコナデ，胴下半ナナメハケ上半の左ナナメハケの後横線，更に口唇のヨコナデを施す。脚斜位の短いナナメハケ 内面の口縁接合部ヘラケズリ後ヨコナデ胴下半オサエ以下ナデ脚オサエナデツケ接合部粘土充塡下端折り返し	胴上半の一部にスス付着 二次加熱 胎土若干砂質 残存口縁胴½欠損
T0105	甕 A2	14.4 21.9 8.5	胎土　砂粒かなり含むが粘土が細かい 焼成　普通(甕Aとしては脆弱) 色調　暗橙褐色	外面は胴下からタテハケ(2目)右ナナメハケ，左ナナメハケを施した後櫛描横線文を施す。更に口唇のナデ，口唇ヨコナデ，脚斜位の短いハケ 内面口唇接合部のハケの後ヨコナデ，胴上半オサエ（4本／1cm） 胴下半ヨコハケ，下端折り返し，脚オサエとナデツケ	二次加熱 ほぼ完形 T0101と類似
T0106	甕 A4	14.6 — —	胎土　砂粒比較的多く含む。長石，金雲母をかなり含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面はナデ胴下から3回右下がりのハケ，その上は左下がりのハケ，後に口唇のナデ（7本／1cm） 内面は口唇凹部がめぐる。段の部分も沈線的。ヨコナデ以下オサエ	スス（口唇最大径付近）かなり付着 残存胴下半以下欠損
T0107	甕 A2	16.4 — —	胎土　砂粒多く含むが金雲母は少ない 焼成　良 色調　黄褐色	外面は口唇ナデ，胴下からタテハケ後右下がりのハケ後，左下がりのハケ後に口唇のナデ(7本／1cm) 内面は口唇面取りか？　口縁ヨコハケの後ヨコナデ胴オサエ	スス(胴最大径付近)若干付着（砂粒が多いのに特徴あり） 残存胴½脚欠損
T0108	甕 A4	14.3 — —	胎土　微細な雲母，長石をかなり多く含む 焼成　良好 色調　茶褐色から暗茶褐色	外面は口唇ナデ。胴下から右下がりのナナメハケ。胴上半左下がりのナナメハケ。(6本／1cm) 内面は口唇ヨコナデ，以下オサエ。胴部下半ナデ	二次加熱 外面はスス付着

第6表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
0109	甕 A4	12.9 — —	胎土　金雲母，砂粒を多く含む 焼成　良 色調　赤褐色	外面は胴ハケの後口唇ヨコナデ凹部を造り出すためヘラのようなもので沈線(？)を施す。後ヨコナデ(13本／2cm) 内面は口縁ヨコナデ，胴ケズリ後に軽くオサエ	スス付着（比較的少ない） 残存口縁完形 胴下半欠く
T0110	甕 A4	13.9 — —	胎土　砂粒，石英，金雲母多し 焼成　良 色調　橙褐色	外面は胴の後口縁ヨコナデ（8本／1cm） 内面は口唇ヨコナデ	外面スス付着 ¼存
T0111	甕 A5	13.0 — —	胎土　砂粒，石英，金雲母を比較的多く含む 焼成　良 色調　橙褐色	外面は口唇凹部を沈線をひくようにして造りだしヨコナデ，胴ナナメハケ（12本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ，口唇凹線のような凹部がめぐる 胴オサエかなり顕著	ススの付着が著しい ¼存
T0112	甕 A4	15.0 — —	胎土　金雲母，砂粒，長石を比較的多く含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面は口縁ヨコナデ，胴下より右下がりのハケ，左下がりのハケ，口縁のナデの順（7本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ，接合部ヘラズリの上にナデ 胴オサエ	スス(口唇～胴上半) 付着　¼
T0113	甕	— — —	胎土　長石多く，雲母，砂粒若干含む 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面はタテハケ，ナナメハケ，一部ナデ？　で消されている 内面はナナメ，及びヨコハケ（10本／1cm）	二次加熱 内面剥落あり 残存甕部なし 脚¼
T0114	小型壺 D	12.2 — —	胎土　非常に良く精選される 焼成　良好 色調　明黄灰色	外面はヨコヒラガキ。 内面はヨコヒラガキ。肩部近くナナメガキ。	残存口縁¼ 以上欠損
T0115	壺 E	11.8 — —	胎土　多くの長石，細かい石英が多い。若干の雲母，細かい砂粒若干含む 焼成　普通 色調　器表淡橙褐色，器壁青灰色	外面は口縁オサエ 内面は口縁オサエ，ヨコハケ一部あり。胴上半オサエ 口縁接合部にオサエ。接合痕顕著	残存口縁完形以上欠損 在地典型タイプ
T0116	壺 D2	13.3 — —	胎土　砂粒比較的多いが粘土質 焼成　普通 色調　黄灰色	外面は口唇ナデ。口縁細いタテハケ（10本／1cm）一部粗いタテハケ（7本／1cm）。胴タテヘラミガキ主に一部ヨコヘラミガキ 内面は口縁肌あれ，胴ヨコハケ（粗い）（7本／1cm）	残存，口縁のうち口唇大半欠く 以上完形 胴上半 > 半欠損 下半
T0117	壺	— — 7.5	胎土　砂粒多し，石英若干緻密 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面ナデか(？)底木葉痕 内面はヨコハケ（6～7本／1cm）	若干肌あれ 在地典型タイプ
T0118	壺	— — 13.0	胎土　多量に砂粒を含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は胴(上)ナナメヘラミガキ(主として)胴(下)ヨコ又はナナメヘラミガキ 底部接合部タテハケの後ヘラミガキ（11本／1cm） 内面は口縁肌あれ，胴剥落	内外剥落激し 口縁欠損 胴部以下ほぼ完形

第7表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T0119	小型壺E	10.0 (復) 13.4 6.6	胎土　細かい砂粒を含みわりと精選されたもの 焼成　良好 色調　淡黄褐色（少し赤っぽい）	外面は，口縁部，細かくていねいなタテのミガキ。胴部細かくていねいなヨコのミガキ 底面，接合部タテのケズリ。 底面，木葉痕があるがナデていねいに消している 内面は口縁部ヨコハケの後細かいヨコのミガキ(10本／1cm）胴部ハダ荒れ激しい	口縁部及び胴部半欠
T0120	壺	— — 7.8	胎土　かなり多くの砂粒を含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色（少し赤っぽい）	外面はナナメのヘラミガキ。底との接合部タテのケズリ，底面木葉痕 内面は胴部のナナメのハケ（6本／1cm）底部肌あれ激しい	底部完存
T0121	壺	— — 9.3	胎土　少し大きめの砂粒をかなり含む 焼成　普通 色調　黄褐色	外面は肌あれ底木葉痕 内面は剥落激しい	底部完存
T0122	壺	— — 9.2	胎土　細かい砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面は底近くにタテハケ，底木葉痕 内面は肌あれ激しい	胎土の質は砂質（在地典型タイプ） 残存底完全以上を欠く
T0123	壺	— — 7.3	胎土　大きめの砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面は胴ヨコヘラミガキ，接合部ヘラケズリ 底木葉痕 内面は剥落激しい	残存底部完形
T0124 T5tubiとフロホーンとが伴る	小型壺	— — 4.0	胎土　細かい長石等を含み比較的精選されている 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面は口縁（胴との接合部)(12本／1cm）胴部肌あれ激しい 底部肌あれ。内面は口縁（胴との接合部）ヨコヘラか(？) 肩部ヨコハケ。胴部ナナメのヘラかエグリ。胴部下方ヨコのヘラかエグリ	胴部下半に1孔
T0125	小型壺	— — 4.8	胎土　若干長石，砂粒含むが粘土っぽい 焼成　普通 色調　淡褐色	外面はナデツケ 内面は剥落激しい	底部完形
T0126	小型高杯A	— — —	胎土　微細な長石，雲母を含むが良く精選されている 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面はタテヘラミガキ。3孔（外から内へ穿孔） 内面は回転させたヘラケズリ。孔の端を削りとる	残存　孔以下は大半欠損 杯部欠損
T0127	高杯	— — —	胎土　砂粒を含む粘土質の強いもの 焼成　良好 色調　黄褐色	外面はたての太目のヘラミガキ。3孔 内面は上部オサエとナデ付け。下部ヨコハケ(15本／1cm）	
T0128	小型高杯A	— — —	胎土　微細な長石，金雲母等のみを含み精選されたもの 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は杯部ヘラミガキ（比較的細かいもの)。接合部たてのケズリ 脚部，たてのケズリガキ（荒いもので接合部のケズリのあとに成形された） 内面は，杯部細かくていねいなヘラミガキ。脚部回転させる荒いケズリ	接合部完存 器面，外面の剥落が比較的多い。

第8表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T0129	小型器台	— — 13.4	胎土　微細な雲母，長石を含むが良く精選されている 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面はタテヘラミガキ。下端ヨコヘラミガキ 内面は回転させたヘラケズリ。下半ヨコハケの上ヨコナデ（4～5本／1cm）	2孔は確認できる（角度から4孔かも） ⅙存
T0130	小型丸底土器C	10.5 9.4 4.4	胎土　細かい長石，砂粒を含む。良く精選されている 焼成　良好 色調　淡黄褐色	外面は口唇ヨコナデ（ハケの後）。口縁細かいハケ。胴ヘラ調整か？ 内面は口縁ヨコハケ。胴部ヘラ調整（ハケ16本／1cm）	内外一部剝落 ½存
T0131	小坩A	5.8 — —	胎土　石英，長石，砂粒含む。胎土あらめ 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面は口唇オサエ以下タテハケ（10本／1cm） 内面は口縁ナデ。胴，ヨコハケ	内面，肩部付近に明瞭な接合痕 口縁部～胴部上半½存
T0132	小坩	— — 3.0	胎土　長石，多く砂粒を含む。若干砂っぽい 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外，内面共にタテハケ（9本／1cm）	残存，底部一部欠
T0301	壺	— — 13.0	胎土　長石，金雲母を少量，砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色	内外肌あれ	底部⅙存 底部木葉痕 在地典型タイプ
T0401	甕 D_2	13.8 — —	胎土　細かい長石，小石を含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面は口唇ナデ以下細かいナナメハケ（15本／1cm） 内面はヨコハケ	胴部の破片はススが相当付着。 砂質の粘土 口縁部⅓，胴部⅙（接合できず）
T0402	甕	— — —	胎土　微量の長石，砂粒若干，少量の小石を含む 焼成　普通 色調　暗褐色	外面はナデツケ？　一部にナナメハケ（細かい） 内面は粗いヨコハケ（6本／1cm）	脚接合部⅓存
T0403	小型高杯B	12.3 9.6 6.9	胎土　長石，砂粒を多く含む 焼成　やや不良 色調　暗黄褐色	外面は杯部タテハケの後，口唇ヨコナデ。脚タテハケ 内面は杯部ヨコハケの上に粗いタテヘラガキか。（1本／1cm） 脚ヨコハケ。接合方法，ソケット式3孔口径（小さいもの）外から内へ穿孔	粘土の質は地の壺と同質 完形
T0701	甕 D_2	22.7 — —	胎土　少し大きめの砂粒，細かい長石を多量に含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は口唇の一部ヨコハケ以下細かいタテハケ。胴ヨコハケ（12本／1cm） 内面は口縁～胴ヨコハケ	外面の一部ススが付着 内外かなり剝落 口縁部～胴部上半⅓存。
T0702	小型壺D	12.4 — —	胎土　微量の金雲母，若干の砂粒を含む 焼成　良好 色調　灰褐色（？）	外，内面共にハケの上にヨコナデ（20本／1cm）	内外共赤彩 外面剝落あり 口縁部⅓存。

第9表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T0801	甕 D_3	14.5 23.2 8.6	胎土　小石，石英，金雲母を含む 小石は器面に表出している 焼成　普通 色調　明黄褐色	外面は口縁タテハケの後ヨコナデ（6本／1cm）脚タテハケ 胴下から主としてタテ，ナナメ，ヨコ，ハケの順(但し切り合いではない) 内面は口縁ヨコナデ，胴ヨコハケ下半ヘラミガキ(のような調整）脚ヨコハケ	スス（胴最大径付近口縁に付着） 残存口縁3/4を欠くが他は完形
T0802	壺 C	14.3 — —	胎土　微量の長石，砂粒多量に含む 焼成　普通 色調　橙褐色	外面は肌あれ 内面はなめらかなので，ミガキか？	1/3存 典型タイプ
T1101	甕 A_5	17.7 — —	胎土　石英，金雲母をやや多く含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴左ナナメハケ(7本／1cm)ハケの後ナデ 内面接合部ケズリ，口唇凹線をめぐらすこの後ヨコナデ 胴オサエ	1/4存
T1102	甕 A	— — —	胎土　細かい石英，金雲母をかなり含む 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面は胴接合部ヘラでオサエ付けているからミガキのように見える。 脚ナデツケ 内面は胴ヨコヘラケズリ 脚粘土をつめたあと指によるオサエ	スス（胴の内外）付着 接合部完存 その他欠損
T1103	——	12.1 — —	胎土　大粒の石英，長石をかなり含む 焼成　良好 色調　淡黄褐色	外面は口縁タテハケの上にヨコヘラミガキ。胴肌あれ 内面はナナメヘラミガキ。胴ヨコナデ	1/4存
T1301	甕 A_4	11.4 (復) —	胎土　細かな金雲母，長石等をかなり多く含む 焼成　普通 色調　暗褐色	外面は胴部の右下がりのナナメハケ→肩の左下がりのナナメハケ→口唇のナデ（6本／1cm） 内面は口縁部ヨコナデ，接合部ケズリ，胴部オサエとナデ(ツケ)	1/3存 二次加熱 ※口径もう少し大きくなるかも内面カーブ典型と異なる
T1302	甕 A_4	13.4 — —	胎土　金雲母，長石，石英など微細なものを多く含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面は口縁胴のハケの後ヨコナデ(5～6本／1cm)(ナデは三角の隆帯より下には及んでいない) 内面は接合部ヘラケズリの後口縁ヨコナデ	二次加熱 スス付着 1/2存
T1303	小型丸底土器 A	13.8 — —	胎土　長石などの非常に微細なものを含む 精選されたもの 焼成　良 色調　茶褐色	外面は口縁タテの細かい丁寧なヘラミガキ。(杯のケズリの後，口縁のミガキ) 杯部ヘラケズリ。接合部はミガキの前にヘラでくびれ部を沈線をひくようにして，造りだしている。 内面は口縁左ナナメの丁寧なヘラミガキ。杯部ナデ(ヨコ)	内面は剥落がかなりある。 1/2存
T1501	高杯 A	21.4 — —	胎土　石英，金雲母少量含む。小石をやや多く含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面はタテハケの後，タテヘラミガキ。 (6～7本／1cm）ハケメほぼ残る。 内面はヨコハケの後，タテ又はナナメヘラミガキ	杯部略完存 内，外剥落かなりある
T2301	壺	— — 6.5	胎土　長石，砂粒が多い 焼成　普通 色調　黒褐色	外面は肌あれ 内面は肌あれ。底木葉痕	底部完存 木葉痕あり。

第10表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T2401	甕	— — —	胎土　石英粒，小石を多く含む 焼成　良 色調　暗黄褐色	外面は部分的にハケ，後にオサエ 内面はカメ，ヨコハケ，底は向心のハケ 脚ハケ上端はオサエ（7本／1cm）	½存 カメ内面スス付着
T2601	小型土器D	8.0 3.5 2.9	胎土　長石，砂粒を多く含む。大粒の小石も若干含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面は一部ハケ 内面は部分的にヨコハケ	肌あれが激しい ほぼ完形
T3201	甕 A_3	16.8 — —	胎土　金雲母，長石，石英をかなり多く含む 焼成　良 色調　暗褐色	外面は口縁ヨコナデ，胴左ナナメハケの後櫛描横線 内面は口縁ヨコナデ，接合部ヘラケズリの後ヨコナデ 口唇にかすかな凹線がめぐる。胴オサエ(上半)以下ケズリ横線6本	⅙存 スス(外面)付着
T3202	甕 A	15.2 — —	胎土　金雲母，石英，長石など微細なものをかなり含む 焼成　普通 色調　暗茶褐色	外，内面共にヨコナデ 内面の口唇わずかな凹線がめぐる	⅙存 スス(外面)付着
T1601	甕 A_5	15.2 — —	胎土　微細な金雲母，長石，石英をかなり含む 焼成　良 色調　明茶褐色	外面は胴にハケを施した口縁ヨコナデ，更に涌稜の上面をヘラでヨコに巡らし鋭い稜にしている（6本／1cm） 内面は接合部ヘラケズリ後ヨコナデ。胴ヨコハケの上にオサエ。口唇凹部が巡る（11本／1cm）	¼存
T1602	甕 A	— — 8.3	胎土　微細な金雲母，長石を含む非常に精選されている 焼成　良 色調　赤褐色	外面は胴粗いタテツケ。脚ナデツケ。(6本／1cm) 内面は胴ヨコハケ。脚オサエ。下端折り返し。接合方法ソケット法	½存 脚の角度がもう少し外側に開くかも
T1603	壺 C_3	18.6 (復) — —	胎土　細かい長石を多く含む。シルト的なもの 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面はヨコナデ。折り返し接合部はナナメハケ。 内面は口唇ナデ。S字状結節の縄文	⅙存
T1604	高杯A	— — —	胎土　微細な石英，砂を含むが精選されている 焼成　良好 色調　茶褐色	外面は接合部付近タテケズリ。全体に入念なタテミガキ。 内面は接合付近，ヨコの方向にケズリ。孔以下ケズリの上にナデか。 3孔外から内へ穿孔。穿孔後内面のふちをケズリとる。	内，外面にスス付着特に内面に著しい。 脚のみ½存
T1701	甕 A	— — 7.3	胎土　長石，石英，金雲母を比較的多く含む 焼成　良 色調　暗褐色	外面ナデツケの後斜位の短いハケ（6本／1cm） 内面ナデツケ。下端折り返し	残存脚完全以下欠損 外面の一部スス付着 二次加熱
T1702	小型高杯A	— — —	胎土　砂粒を若干含むが，かなり精選されている 焼成　良 色調　橙褐色	外面は杯底面ヘラミガキ。脚タテヘラミガキ。 内面はヨコのヘラケズリ	残存図の部分のみ完全，他欠損 内，外共に剥落が激しい

第11表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T 1703	小型器台A	9.9 — —	胎土　微細な金雲母，長石などをかなり良く精選されている 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面は口縁ヨコナデ。底丁寧なヘラケズリ。 内面は口縁ヨコナデ。底放射状の粗いヘラミガキ	一部にスス付着 残存脚部欠損 図上のものは完形
T 1704	小型器台	— — 12.9	胎土　砂粒，微細な長石，金雲母を含む。非常に精選されている 焼成　良好 色調　明茶褐色	外面はやや粗めにタテヘラミガキ 内面はヨコに回しながらヘラケズリ。下端近くはヨコナデ 孔は 2孔まで確認される。外から内へ穿孔。周囲ケズリとり	¼存 内，外共に肌あれが相当あり
T 1705	小型丸底土器A	14.8 7.7 3.0	胎土　微量の小石と長石，砂粒を若干含むが比較的精選されている 焼成　良 色調　赤褐色	外面は口縁ヨコヘラミガキ。底部中心に向うヘラミガキ。底若干上げ底 内面は口縁ヨコヘラミガキ。底部中心に向うヘラミガキ くびれ部は，外面に凹線をめぐらし造り出す	内，外スス付着 完形
T 1706	小型土器F	— — 3.8	胎土　砂少々含むが，良く精選されている 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外，内面共に手により造る	剝落面に木葉痕あり 残存上半欠く以下ほぼ完形
T 1801	甕 A_4	15.8 — —	胎土　長石を多く，金雲母を少量含む 焼成　堅緻 色調　茶褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴右ナナメハケの後左ナナメハケの上半に 1 条のナデ 内面は口縁ヨコナデ。口唇内側わずかに面をもつ 胴オサエ下部ケズリ（6 本／1 cm）	¼存 スス(外面)に付着
T 1802	甕 A	— — 9.6	胎土　砂粒，細かい金雲母，長石を多く含む 焼成　普通 色調　黄褐色	外面は胴部ケズリの後ハケ（9 本／1 cm）更に指等のオサエ 脚部ナデツケ 内面は胴ヨコのケズリ。脚指頭によるオサエ。下端折り返し	二次加熱あり (器面が砂でザラザラする) 残存脚完全
T 1803	甕 A_4	13.7 — —	胎土　微細な雲母，長石をかなり含む。砂質的 焼成　良 色調　明茶褐色	外面は口縁三角の稜の両脇はヘラで面をナデ稜をきちんと造りだす 口唇ヨコナデ。胴下から順にタテ右ナナメ左ナナメのハケを施す（9 本／1 cm） 内面は接合部ヘラケズリ直下はオサエ口縁ヨコナデ胴ナデツケ	完形(脚欠損) 二次加熱 内，外の剝落が激しい
T 1804	甕 A_4	12.6 — —	胎土　細かい石英，長石，砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴右ナナメハケの後左ナナメハケ 内面は口縁ヨコナデ。接合部ヘラケズリの後ヨコナデ 胴オサエ(上半)以下ナデツケ（8 本／1 cm）	スス(外面の一部)付着 二次加熱
T 1805	壺	— — 7.4	胎土　若干小さな砂粒をいくらか含む 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面はタテハケ（8 本／1 cm） 内面はヨコハケ（8 本／1 cm）ナデ肌あれ	完存
T 1806	壺 C_3	— — —	胎土　小さい砂粒をかなり多く含む。シルト的なもの 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は口縁部ナデ。肩部にS字状結節をもつ縄文と円形浮文(5 ケ) 胴部不明 内面は口縁部ナデ。肩部痕 3 本ありその上をオサエ 胴部かるいヨコハケ	⅓存 外面一部にスス付着

第12表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T1807	小型高杯A	— — —	胎土　かなり細かめなものを含み良質なもの 焼成　良好 色調　茶褐色	外面は細かいタテヘラミガキ。3孔 内面上部はヘラケズリ。下部はヨコヘラケズリ	
T1808	小型丸底土器A	12.7 6.2 —	胎土　微細な長石，雲母等を含むがよく精選される 焼成　良 色調　暗橙褐色一部暗褐色	外面は口唇ヨコナデ，以上は細かく粗いタテヘラミガキ 底器面の荒れが著しく観察不可能 内面は口縁ナナメハケ（12本／1cm）の後右下がりのタテミガキ 底ヘラミガキだが，剥落が著しい	内，外にスス付着 完形 註（外面のヘラミガキはあまり入念ではない）
T1809	小坩B	6.9 8.9 4.0	胎土　微量の石英，砂粒を含む 焼成　良 色調　暗茶褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴部分的にタテハケその上に粗い軽く力を入れたヘラミガキ 内面は口縁ヨコナデ。接合部指によるオサエ。胴ヨコハケ（8本／1cm前後）	完形 底部木葉痕
T2001	甕	— — 11.2 （復）	胎土　細かな砂粒をかなり含む 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面は下半にヨコハケ。その後少しナナメのタテハケ（6～7本／1cm） 内面はヨコハケ。接合部オサエ	大略残存 接合方法に注意
T2002	小型器台	— — 13.6	胎土　砂粒，石英，長石を多く含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面はタテヘラミガキ。孔，外から内へ穿孔 内面はヨコヘラケズリ。孔，周囲けずりとり	肌あれ激しい ¼存
T2003	—	5.5 4.4 6.6	胎土　砂粒，微細な長石，金雲母などわりと含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は杯，ハケの後ヨコナデ。脚タテハケの後粗いタテヘラミガキ 内面は杯，ヨコハケの後ヨコナデ。脚一部ハケ，その後ヨコナデ	完形
T1901	小型土器A	7.3 — —	胎土　微細な長石をかなり含む。小石も若干含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面は一部にハケ。肌あれ（11本／1cm） 内面は胴部分的にヨコのケズリ。他肌あれ	⅓存
T1902	小型土器F	— — 3.1	胎土　砂粒，金雲母，長石を多く含む。小石若干含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面はヘラケズリの上に粗いヘラミガキ(タテ) 下半部的にハケ 内面はオサエ	手づくね 完形 スス（外面の大部分付着　部分）
T4501	甕 A_5	16.8 28.6 10.2	胎土　細かめの金雲母や砂粒をかなり多量に含む 焼成　良 色調　暗褐色	外面は口縁部ヨコナデ。胴部最大径付近の右下がりのナナメハケ（5～6本／1cm）その後上部の左下がりのナナメハケと下部の少しナナメのタテハケ 脚部胴下部のタテハケの方向を少し変えたナナメハケと，その後ナデでその一部を消す 内面は口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。脚オサエとナデ	大略完形 外面スス付着顕著
T4502	小型高杯A	— — 18.2	胎土　微細な石英，長石，雲母等のみを含む。よく精選されたもの 焼成　良好 色調　橙褐色	外面はヨコナデ(端部)の後，タテのミガキ 内面はヨコのヘラを回転させるケズリとヨコナデ シボリ痕あり	⅓存(洗いに弱い) 3孔

第13表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T4503	高杯	— — —	胎土　大きめのも混じえてかなり多く砂粒を含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面はタテのミガキ 内面は孔より上，オサエとナデ 下はヨコハケ（10本／1cm）	残存部完 3孔
T4504	小型土器B	7.2 (復) — —	胎土　細かな砂粒，長石等をかなり多く含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴部主にタテのハケ（8本／1cm） 内面はナデ	½存
T4505	小型土器C	9.2 (復) — —	胎土　微細な雲母，長石等のみを含む。よく精選されたもの 焼成　堅緻 色調　暗赤褐色	外，内面共に細かいが少し雑のヨコミガキ。	1/10存 赤彩
T4506	小型土器F	4.8 3.9 3.4	胎土　微細な雲母や小砂粒のみを含む。よく精選されたもの 焼成　良好 色調　暗黄褐色	外面は口縁オサエ。胴部ハケ（6本／1cm） 内面はナデ(ツケ)	大略完形(口唇⅔欠)
T6201	甕 A_5	16.4 — —	胎土　細かい金雲母，長石，砂粒をかなり多量に含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は胴中央の右下がりのナナメハケ(8本／1cm) 胴下半のタテハケ 胴上半の左下がりナナメハケ。口縁部ヨコナデ ハケの前に少しナナメのヨコケズリがあるらしい 内面は口唇に凹線。口縁部ヨコナデ	残存部完形
T6202	甕 A_4	18.1 31.1 10.7	胎土　細かな金雲母や砂粒をわりと多く含む 焼成　良好 色調　黄褐色	外面は胴部中央の右下がりのナナメハケ(6本／1cm) 下半の少しナナメのタテハケ。およびタテのハケ。 その後胴上半の左下がりのナナメハケ。そして口縁部ヨコナデ。脚部タテのケズリの後ナデか？　内面は口縁部ヨコナデ。胴部肌あれ折り返しあり	ほぼ完形 片面のみ胴最大径～下半に二次加熱あり スス付着
T6203	壺A	22.4 (復) — —	胎土　細かな金雲母，長石や砂粒を含む。わりときめ細かなもの 焼成　良好 色調　暗黄褐色	外面は細かく丁寧なタテのミガキ。その後クシ状具による刻目(2段) 内面は細かく丁寧なタテのミガキ	⅓存
T6204	壺A	23.4 — —	胎土　細かな雲母，長石等を混じえたわりときめの細かいもの 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外，内面共にナデ 外面はその後刻目（クシ状具による）2段	1/8存
T6301	甕	— — 9.1	胎土　細かな金雲母，長石等のみを含むシルト的なもの 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面はタテハケの後一部ナデか 内面はヨコハケ（7本／1cm）	脚部大略完存
T6302	甕 D_3	17.9 (復) — —	胎土　砂粒や長石をかなり多量に含むシルト的なもの（金雲母あり） 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は口唇部ヨコハケの後，口縁部のタテハケ。胴部タテハケ 内面はヨコおよびナナメのハケ（8本／1cm）	⅓存

第14表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T6303	甕 D2	21.8 (復) — —	胎土　細かな雲母，長石や砂粒をかなり含むもの 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面はタテハケ 内面はヨコハケ（6本／1cm）	⅙存 外面一部スス付着
T6304	壺	— — —	胎土　細かな砂粒のみをかなり含む。わりときめ細かなもの 焼成　良好 色調　淡黄褐色	外面は口縁部タテハケの後ミガキ。接合部クシによる刺突文。胴部ミガキ 内面は口縁部ヨコのハケ（6本／1cm）胴部ケズリか(？)　肌あれ	頸部¼存
T6305	小型土器B	9.0 (復) — —	胎土　小石や砂粒をかなり多量に含むもの 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は接合部タテハケの後口縁部ヨコナデ。胴部ナナメハケ（8本／1cm） 内面は口縁部ヨコナデ。接合部ヨコのナデ	¼存
T6401	甕 D2	16.5 (復) — —	胎土　細かな雲母，長石等のみを含む。わりときめ細かなもの 焼成　良好 色調　暗(黄)褐色	外面は頸，胴上半のナナメハケ（5本／1cm）の後口唇のヨコナデ 内面は口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのナデ	⅙存 外面口縁下半以下スス付着 少し異質な感じ
T6402	甕 D3	14.8 (復) — —	胎土　細かな雲母，長石や砂粒を含む。わりときめの細かいもの 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面はナナメのハケ（7本／1cm） 内面は口縁部ヨコハケの後ヨコナデ。胴部ナナメのナデ	⅙存
T6403	甕 C	14.2 — —	胎土　小石を混じえて，黒雲母等や砂粒の細かいものを含む 焼成　普通 色調　暗茶褐色	外面は口縁部，胴部上半右下がりのナナメハケ。その後，口唇のヨコナデ 内面は口縁部，胴部上半ヨコハケ（10本／1cm）	口縁部完存 外面スス付着
T6404	壺	— — —	胎土　小石を比較的多く含む 焼成　普通 色調　橙褐色	外面はハケ	底部½破片
T6405	壺 D3	— — —	胎土　細かな砂粒を多く含む。比較的きめ細かなもの（粘土質強） 焼成　良好 色調　淡黄褐色	外面は口縁部～胴上半，タテのミガキ。その後口唇のヨコのミガキ 内面は口縁部～胴部接合ヨコのミガキ。胴上半肌あれ。	口縁半欠　頸完存 精製土器的。内外面剝落
T6406	小坩	— — 4.1 (復)	胎土　細かな砂粒をかなり含む 焼成　普通 色調　黄褐色	外面は粗いタテのミガキ 内面は胴部ナデ。底面接合部ハケ状沈線あり（3本／1cm）	底面⅓欠 胴⅔欠
T6407	小型土器	— — 2.4	胎土　小石や砂粒，細かな長石，雲母などをかなり多く含む 焼成　普通 色調　黄褐色	外面はタテのハケ（8～9本／1cm） 内面はナデ	胴半欠 口唇全欠

第15表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の方法	備考
T6408	小型土器F	— — 3.5	胎土　微細な長石，雲母等を含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外，内面共にナデ	
T6601	壺C	18.4 (復) — —	胎土　細かな砂粒や長石を含む 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面は折り返しのところヨコナデ。口縁部ヨコハケ（9本／1cm）肌あれ 内面はヨコハケ有。口唇にクシの刺突による網目文（9～10本／1cm）	⅓存 在地ツボ典型タイプ
T6602	壺	— — —	胎土　小砂粒を含むがわりと良い 焼成　良好 色調　黄褐色	外面ナナメハケ（8本／1cm）の後タテヘラミガキ 内面ヨコのミガキ 内面上半と外面を赤彩	頸部⅓存 同一個体の胴部破片多数あり
T6603	小型土器A	8.6 (復) — —	胎土　小さめの砂粒と細かな長石雲母をわりと多く含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は口縁部ヨコナデ。胴部上半不明。胴部下半タテのハケ。(10本／1cm) 内面は口縁部ヨコナデ。胴部ナデ	⅓存
T2201	甕A	— — 11.2	胎土　細かな長石，石英，雲母等をかなり多く含む 焼成　良好 色調　暗黄褐色	外面は脚部ナナメの短いハケ（8本／1cm） 内面は脚部ナデツケ	二次加熱あり 脚⅓存 典型のもの
T2202	甕A	— — 9.2	胎土　細かな金雲母，長石等を含む 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面はナナメの短いハケ 内面はナデ	二次加熱あり 略完存
T2208	小型高杯A	13.3 12.0 19.8	胎土　微量な砂粒を含むが，よく精選されている 焼成　堅緻 色調　(赤)茶褐色	外面は杯部，細かくあらいタテヘラミガキ。口唇ヨコナデの上にミガキ。脚部，ケズリの上に丁寧なタテミガキ 内面は杯部中心に向うナナメのミガキ。脚部，接合部付近はヨコのケズリ。以下はケズリの上にヨコナデ。3孔外から内へ穿孔後内面の粘土ケズリとる	杯部内面剝落 ½存
T2209	小型高杯A	— — —	胎土　微量な砂粒を含むが，よく精選されている 焼成　堅緻 色調　(赤)茶褐色	外面は杯部，細かく丁寧な放射状ヘラミガキ。接合部タテのケズリ 脚部細かく丁寧なタテヘラミガキ。内面は杯部，細かく丁寧な放射状ヘラミガキ（肌あれ激しい）ヘラを回転させたケズリ	杯部，内面剝落激しい
T2210	高杯	17.4 (復) — —	胎土　微細な雲母，長石等のみを含む。よく精選されたもの（シルト的） 焼成　良好 色調　(赤)茶褐色	外面はタテの少し雑なミガキ 内面はミガキ(？)で口唇はヨコ(？) 杯部はナナメ(？)	⅓存
T2212	小型器台A	10.1 — —	胎土　微細な雲母や長石を含み砂粒などをとり除いたような比較的精選されたもの 焼成　良好 色調　明黄茶褐色	外面は杯部，たちあがり部ケズリのあとヨコナデ。脚部5㎜前後の幅のタテのヘラケズリ。底部13㎜前後の放射状のケズリ(あらい)　内面は杯部，たちあがり部ケズリのあとヨコナデ。脚部，回転させるケズリ。接合部ヘラケズリ。底部，放射状の細かくて丁寧なヘラミガキ。3孔内側から外へ穿孔か(？)	残存部は完形

第16表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T2203	甕 A	— — 10.7 (復)	胎土　微細な金雲母，長石等をかなり多く含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色(少し赤っぽい)	外面は脚部ナデ。一部分にナナメのハケ（7本／1cm） 内面は脚部ナデ。	二次加熱あり 脚⅙存
T2204	甕 A	15.0 (復) — —	胎土　微細な金雲母，長石，石英等を含む 焼成　良 色調　暗橙褐色(少し赤味をおびる)	外面は口唇ヨコナデ。口縁ナナメハケ 内面は口縁ヨコナデ	二次加熱あり ⅙存
T2205	甕 A	— — 11.3 (復)	胎土　細かな金雲母，長石等を含む 焼成　良好 色調　暗褐色	外面は脚部ヘラ調整か（剥落激しい） 内面は脚部ナデ。オサエ(？)	二次加熱によるスス付着 脚部⅙存
T2206	甕 D_1	14.3 (復) — —	胎土　微細な砂粒，長石を含む 焼成　良好 色調　(赤)茶褐色	外面は口唇部おしびき文様（8本／1cm)。口縁ハケの上に部分的ナデ(ヨコ) 内面は口縁ヨコハケ？（表面に比べて細かいハケ）	口縁部⅙存
T2207	壺 D_3	15.3 (復) — —	胎土　若干の金雲母と砂粒を含む 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面は口縁ケズリの上に部分的にハケ，ナデ（？）(20本前後／1cm) 内面は口縁ヨコナデか	口縁部⅙存
T2211	高杯	17.5 (復) — —	胎土　金雲母を若干含む，かなり精選されたもの 焼成　堅緻 色調　明黄茶褐色	外面は口縁ヘラミガキ(タテ) 内面は口縁ヨコのヘラミガキ（洗いが激しい為ブラシの痕がきつい）	杯部⅙存
T2213	小型土器C	9.3 (復) — —	胎土　比較的精選されたもの 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面は口縁部一部にヨコハケ（6本／1cm）胴部一部にヘラケズリ 内面は口縁部ヨコナデ。一部ヨコハケ	二次加熱によるスス付着 ⅙存
T5601	甕 A_2	12.6 — —	胎土　小石を混じえて石粒や金雲母をかなり多く含むもの 焼成　良好 色調　暗(茶)褐色	外面は口縁部ヨコナデ。胴部下半のタテハケ，中央の右下がりのナナメハケ（5本／1cm) 上部の左下がりのナナメハケ最後に櫛描横線(9本) 内面口縁部ヨコナデ，接合部ヨコハケ。胴中央にオサエのような痕あり	胴下半⅔欠 ハケのタッチが強い 胴中央のみ薄くする 外面にスス付着
T5602	甕	— — 19.1	胎土　小さめの砂粒と細かな長石雲母等をかなり含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は接合部オサエ。脚部タテハケ（10本／1cm）脚端部ヨコハケ。全体にナデ 内面は上半ナデ(ツケ)。下半ヨコハケ	残存脚大略完存
T5603	甕	— — 10.3	胎土　小石を混じえて砂粒をかなり多く含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は少しナナメのタテハケ（7本／1cm） 内面は接合部オサエ。脚部ヨコハケ	¼存 二次加熱あり (土器もろくなっている)

第17表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T5604	小型壺	— — —	胎土　細かな砂粒，長石，雲母等をかなり多量に含む 焼成　良好 色調　黄褐色	外面はタテのミガキ 内面はヨコのハケ（6本／1cm）	½存
T5605	小型壺D	9.2 (復) — —	胎土　細かな長石，雲母等のみを含む。よく精選されたもの 焼成　良好 色調　(淡)橙褐色	外面は口唇ヨコナデ。　口縁タテのミガキ，その後胴部タテのミガキ 内面は口唇ヨコナデ。口縁部タテのミガキ。胴部ヨコのハケ（13本／1cm）	⅕存 在地壺典型タイプ
T5606	小型壺D	9.1 13.6 6.9	胎土　細かな砂粒及び長石，雲母石英等を多く含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色～橙褐色	外面は口縁部ヨコナデ。頸部胴上半右下がりのナナメハケ（7本／1cm） その後一部ナデ。胴下半左下がりのナナメハケ。接合部ケズリ又はオサエ 内面は口縁部ヨコハケの後ヨコナデ。胴部ヨコハケか。肌あれ	口縁部のみ一部欠 外面，胴部下半にス ス付着(顕著) 口縁部4孔（穿孔内から）
T5901	大型壺B	26.9 — —	胎土　小石，砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調　(淡)橙褐色	外面は口縁部ヘラ描沈線6～7本×4で肌あれ。複合部上面，下面ヨコハケ。接合部ナナメハケ 頸～肩粗い少しナナメのタテハケ(？) 内面は口縁部ヨコハケ。頸部以下肌あれ	⅔存 口縁部内面にスス付着 17112の修正
T5902	小坩	— — 4.5	胎土　細かな砂粒をかなり多く含む（シルト的なもの） 焼成　良好 色調　淡橙褐色～淡黄褐色	外面，内面共に肌あれ	底部完存
T5701	小坩A	4.6 7.4 4.0	胎土　細かな雲母，長石等のみを含む。わりときめ細かなもの 焼成　良好 色調　淡橙褐色～黄褐色	外面は胴上半タテのケズリ。その後口縁部ヨコナデ胴下半は主にナナメのハケ（16本／1cm） 内面は口縁部ヨコナデ。胴部ナデ	接合痕2本完形
T5702	小坩A	4.9 7.5 3.2	胎土　微細な長石，雲母等を含むわりときめの細かいもの 焼成　普通 色調　淡～暗黄褐色	外面は胴部主にタテのハケ（10本／1cm）その後一部にナデ。口縁部ヨコナデ 内面は口縁部ヨコハケの後ヨコナデ。胴部ヨコハケその後一部にナデ	
T5703	小坩A	4.5 5.6 4.8	胎土　細かな石英，長石，雲母等をかなり多量に含む 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面は胴部タテハケの後（6～7本／1cm）口縁部ヨコナデ 内面は口縁部ヨコナデ。胴部下半ヨコハケ，その後上半のナデ	接合痕2本完形
T5704	小坩A	4.6 7.2 5.5	胎土　細かな石英，長石，雲母等をかなり多く含む 焼成　良好 色調　淡～暗黄褐色	外面は主にヨコハケ。その後ナデ 内面は口縁部ヨコハケ（8本／1cm）その後ヨコナデ 接合部ヘラ。胴部ナデ(？)	完形
T6101	甕A	— — 8.4	胎土　細かな金雲母，石英等をかなり多量に含む 焼成　普通 色調　暗(黄)褐色	外面はナナメの短いハケ（7本／1cm） 内面は少しナナメのハケ	脚部完存 接合方法に注意

第18表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T(22) −(56) 01	甕 D_2	— — —	胎土　かなり精選されたもの 焼成　良好 色調　褐色	外面は口唇部，縁ナデ 内面は外面に比べ頸部〜胴部に向かうにつれて細かいハケがはっきりしてくる（20本／1cm）	外面スス若干付着 口縁部⅓存
T(22) −(56) 02	甕 A_2	— — —	胎土　微細な雲母，長石等のみを含む。よく精選された，若干シルト質のもの 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面は口唇部ヨコナデ。頸部ヘラ描き沈線。肩左下のナナメハケ上半に櫛描直線文6本。肩下半部右下のナナメハケ 内面は口唇ヨコナデ。頸部ハケ。胴部ナデ （4本／1cm）	外面スス付着 ハケが粗い 口縁部⅙存
T(22) −(56) 03	壺 B	— — —	胎土　小石を若干多く含む 焼成　良 色調　淡橙褐色	外面は口縁ヨコハケ。胴部タテハケ，下部オサエ。 内面は口縁ハケ。胴部ヨコナデ（下方部はハケ） （9本／1cm）	成形横の部分は貼付したもののようである 口縁〜胴部（口唇部はなし） 典型タイプ　⅙存
T(22) −(56) 04	小型高杯A	13.6 (復) — —	胎土　比較的細かい砂粒を含む（ザラついている） 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外，内面共に肌荒れ激しく成形調整不明	内側に二次加熱によるスス付着 杯部(？)　⅙存
T3301	甕 A_5	16.1 — —	胎土　細かい長石，石英，金雲母をかなり含む 焼成　良好 色調　茶褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴ハケ（7本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ。口唇明らかな凹線が巡る 接合部ヘラケズリの後ヨコナデ。胴オサエ	½存（胴ほとんどなし） スス胴部外面に付着 二次加熱
T3302	甕 D_2	10.6 — —	胎土　微量の砂のみ含む 焼成　普通 色調　暗褐色	外面は口縁ハケの上にヨコナデ。胴粗い目のハケ（5本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ。胴ヘラによる調整（ケズリよりミガキに近い）	½存 剥落若干あり
T3501	甕 D_1	22.2 — —	胎土　砂粒，石英をやや多く含む 焼成　普通 色調　明茶褐色	外面は口縁タテハケ。胴タテハケ一部ヨコ方向のミガキ(？)(14本／1cm) 内面は口縁ヨコハケ。胴ヨコ方向のケズリ 刻目はヘラによる押し引き（上から下へ）	⅓存 内，外共に肌あれ
T3502	甕 D_2	15.5 — —	胎土　細かい長石をやや多く，砂粒を多量に含む 焼成　脆弱 色調　暗赤褐色	外面は口縁タテハケの後ヨコナデ。 胴細かくうすいタテ又はナナメハケ（9本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ。胴オサエ一部ハケ	½存 二次加熱 外面の剥落若干あり
T3503	壺	— — 8.4	胎土　小石をやや多く含むが，精選されている 焼成　良 色調　淡黄褐色	外面はハケの上に粗いヘラミガキ 内面はナナメハケ（11本／1cm）底部ヘラミガキ	¼存 内面剥落が激しい 残形丸底に粘土板を貼付する方法
T3504	小壷A	5.1 9.0 3.3	胎土　砂粒をわりと多く含む 焼成　良 色調　黄褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴上半ヘラミガキ。胴下半ハケの上にミガキか（9本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ。胴ナデツケ	ほぼ完形 赤彩 (外面全面口縁内側)

第19表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T3701	甕 A_5	20.9 — —	胎土　金雲母，長石，石英，砂粒を多く含む 焼成　良 色調　暗茶褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴左ナナメハケ(7本／1cm) 内面は口縁ヨコナデ。接合部オサエ。口縁1条の凹線巡る	⅓存 外面スス付着 二次加熱
T3702	甕 D_2	13.2 — —	胎土　微細な砂を多く含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面はヨコナデ 内面はヨコハケの後ヨコナデ。接合部ヨコのケズリ(8本／1cm)	⅓存 外面スス付着
T3703	壺 C_2	15.6 — —	胎土　砂粒，小石を多く含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外，内面共に剥落(肌荒れ)ハケの痕あり	⅓存
T4001	壺	— — 9.2	胎土　細かな砂粒を少し含む，粘土質の強いもの 焼成　普通 色調　淡橙褐色（内面は灰褐色）	外面は肌あれ。底面木葉痕あり 内面は底面ケズリ	⅓存 典型タイプのもの
T4002	壺 D_2	15.5 (復) — —	胎土　細かな砂粒をかなり多量に含む 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面は折り返し部ヨコナデ，その下はナナメハケ(6本／1cm) 頸部は荒いタテのミガキか 内面は縄文(2段)でその重なる所に円形浮文2ケ 下位にヨコハケ（この方が新しいかも）	⅓存 在地典型タイプのもの
T4101	壺	— — —	胎土　長石，砂粒多し。雲母若干	外面の胴部無文部は，ヨコヘラミガキ。若干のハケメを残す 頸部2段LR縄文（きわめて小粒） 内面は頸部ヨコハケ。胴部オサエ。下端ヨコナデ	在地典型タイプ ⅓存
T4102	壺	— — 9.0	胎土　細かめの砂粒を多く含むシルト的なもの 焼成　良好 色調　淡橙褐色	外面底接合部ヘラ底面木葉痕 内面はヨコハケ（7本／1cm）	底完存 在地典型タイプ
T4103	壺 C_2	15.8 — —	胎土　小さな砂粒を多量に含み，粘性が弱いもの 焼成　普通 色調　淡橙褐色（暗赤褐色）	外面はナナメのハケ（10本／1cm） 内面は口縁部ヨコハケ。接合部タテハケ	口縁部完存 赤彩 在地壺タイプ
T4104	小甕B	— — —	胎土　小さめの砂粒をかなり多く含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は頸部タテハケ，その後胴上半のタテのミガキ 胴下半はヨコのミガキ 内面は胴上半オサエの後ナデ。最大径の付近はオサエの後ヨコハケ（8本／1cm） 胴上半ナデ（上部）とヨコハケ（下部）	½存 内面肌あれ
T4201	甕 A	18.6 (復) — —	胎土　細かい金雲母，石英，長石をかなり多く含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は胴部上半の左下がりのハケ（7本／1cm）の後口縁部のヨコナデ 内面はヨコナデ	⅛存 二次加熱あり

第20表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T4202	甕	— — 10.3 (復)	胎土　微細な長石，雲母，石英等を多く含む。シルト的 焼成　良好 色調　暗(黄)褐色	外面は少しナナメのタテハケ（11本／1cm） 内面はヨコハケ	¼存 二次加熱あり
T4203	壺C	20.4 (復) — —	胎土　金雲母，長石等の細かいものをかなり含む 焼成　良好 色調　(黄)茶褐色	外面はナナメのハケ（7本／1cm）の後折り返し部のヨコナデ 内面はヨコハケの後荒いヨコのミガキ	⅛存
T4204	椀A	11.0 (復) 8.0 6.7	胎土　小さな砂粒をかなり含む 焼成　普通 色調　明黄褐色	外面は口唇ヨコナデ。胴部ヨコのミガキ。底部タテのケズリ 内面は胴部ナデ。底部オサエ	口縁～胴部半欠
T4301	甕A1	14.2 — —	胎土　大きめのものを混じえてかなり多く砂粒を含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面は口縁部ヨコナデ。胴部ナナメ→ヨコ→ナナメ（上から順）　①　②　③ 口縁部にハケ状具による刻目 内面は口縁部ヨコナデ②　接合部ヨコハケ①　胴部ナデ	¼存 外面スス付着顕著 (特に口唇と胴最大径付近)
T4302	甕	— — —	胎土　細かな砂粒をかなり多く含む。少しシルト的なもの 焼成　普通 色調　淡青灰色	外面は接合部オサエ。脚部肌あれ 内面は各方向のハケ。脚部ヨコハケ（8本／1cm）	
T4303	甕	— — —	胎土　砂粒をかなり多く含む 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面はタテハケ 内面は胴部ヨコ及びナナメハケ	
T4304	甕D1	14.9 (復) — —	胎土　細かい砂粒を含む（多くはない） 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面は口唇ヘラの押しビキによる刻目。口縁～胴部タテのハケ（8本／1cm） 円面はヨコのハケ。接合部はその前にオサエ	⅓存
T4305	甕C	16.7 (復) — —	胎土　細かな長石，雲母等をわりと含むもの 焼成　普通 色調　暗褐色	外面は折り返しはナデ。その下はハケ（タテ及びヨコ） 内面はヨコハケ（14～15本／1cm）	⅛存 外面スス付着
T4306	壺	— — 9.0 (復)	胎土　小さな砂粒を若干含む粘土質の強いもの 焼成　良好 色調　外面淡橙褐色　内面青灰色	外面は肌あれ（少しあらめのタテのミガキか） 内面は胴部ヨコハケ	¼存 在地典型タイプ 外面赤彩かも
T4307	壺	— — —	胎土　小さな砂粒をかなり含む粘土質の強いもの 焼成　良好 色調　淡橙褐色	外面の接合部オサエ又はケズリ 内面はナナメハケ（9本／1cm）	底完存

第21表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T4308	小型壺C	9.6 (復) — —	胎土　小さな砂粒をかなり多く含むシルト的なもの 焼成　良好 色調　淡橙褐色	外面は口唇部に沈線，折り返しにオサエの痕 頸部肌あれ 内面は肌あれ	⅓存 在地の典型タイプ
T4601	小型壺D	13.1 (復) — —	胎土　微細な砂粒のみを含む，粘土質の強いもの 焼成　良好 色調　淡橙褐色(その下は淡青灰色)	外，内面共に肌あれ	⅙存 在地典型タイプの特徴を示す
T4602	壺	— — 8.1 (復)	胎土　少し大きめの砂粒を含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面はヨコのミガキ。底面木葉痕あるかも 内面はナナメのハケ（10本／1cm）	⅓存
T5401	甕 D_2	19.0 — —	胎土　細かな砂粒をかなり多く含む 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面は胴部最大径付近のヨコハケ。その後口縁部～胴部上半のナナメハケ（12本／1cm） 内面は口縁部ヨコハケ。その後胴部タテのハケ	⅓存 外面全体にスス顕著に付着
T5402	甕 D	17.2 — —	胎土　雲母，長石などの細かなもののみを含む 焼成　良好 色調　茶褐色	外面はタテ又はナナメのハケ（7本／1cm）の後ヨコナデ 内面はヨコのハケの後ヨコナデ	⅓存 内面にスス付着
T5403	甕 D	20.4 (復) — —	胎土　細かな砂粒および長石，雲母等を含む。少しシルト的なもの 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面はタテハケ（8本／1cm） 内面はヨコのハケの後ナデ	⅓存
T5404	壺	— — 8.0 (復)	胎土　大きめのものを混じえてかなり多く砂粒を含む 焼成　良好 色調　淡黄褐色	外面はヨコのケズリ。底面木葉痕の上をケズリ 内面はナデ 底面は肌あれ	½存 木葉痕
T5405	壺	— — 11.1 (復)	胎土　小石を混じえたかなり多量の砂粒を含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面はタテハケ（13本／1cm）の後ヨコのミガキ 底面は木葉痕の上をかるいミガキ 内面はハケ（7本／1cm）	½存 木葉痕
T5406	壺	— — 7.0 (復)	胎土　大きめのを混じえてかなり多くの砂粒を含む 焼成　良好 色調　暗赤褐色	外面はヨコのミガキ。底面は一方向のミガキ 内面は肌あれ	½存
T5407	小型壺D	— — —	胎土　小石を少し混じえて細かめの砂粒をかなり含むもの 焼成　良好 色調　(淡)黄褐色	外面は口唇ヨコナデ。口縁部タテのケズリ。胴部一部タテのハケあり 内面は口唇ヨコナデ(？)。口縁部ヨコのケズリの後ヨコのハケ（12本／1cm） 接合部オサエ	⅓存 赤彩らしい

第22表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T5408	小型壺	— — 4.1	胎土　砂粒をかなり多量に含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面はヨコのミガキ（底面は不明）肌あれ 内面はヨコハケ(？)　底面ハケ（10本／1cm）	底部完存
T4801	甕 D3	18.0 31.5 9.7	胎土　細かな長石，雲母や砂粒を比較的多く含む 焼成　普通 色調　(暗)茶褐色	外面は口縁部ヨコハケの上をヨコナデ。接合部タテハケ 胴部各方向のハケ。接合部ケズリ。脚一部にナナメハケ 内面はヨコハケ（10本／1cm）	口縁部半欠 胴部スス付着顕著 二次加熱あり
T4802	甕	— — 9.4	胎土　小さな砂粒と細かな長石をかなり多量に含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は脚上半ナデツケ。下半タテハケ(13本／1cm) 内面は接合部オサエ。その他ヨコハケ，その後ヨコナデ。	脚完存
T4803	高杯	— — 10.0 (復)	胎土　細かな砂粒を多く含むシルト的なもの 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面はタテのヘラ（荒いミガキか） 内面は接合部エグリ又はナデツケ。他肌あれ	半欠
T6901	壺C	20.3 — —	胎土　砂粒をかなり多く含む 焼成　あまり良くない 色調　暗黄褐色	内，外面共ナナメハケ	⅙存
T6902	壺 C1	18.0 — —	胎土　石英，砂粒を多く含む 焼成　良 色調　暗橙褐色	外面は口縁ナナメハケの上にミガキ（肌あれ方向不明）肩6本の櫛描横線，その下に竹管の円刺突1対は3ケか，何対か不明。内面は口縁ハケの上にミガキ（1部にハケが残る）口縁上半にヘラによる綱目文様。その下に3ケ，1対の竹管刺突 現存は5対だが，実際は6対らしい（12本／1cm）	口縁ほぼ完形 内，外全面赤彩 綱目文様壺，
T6903	壺	— — 8.6	胎土　砂粒をかなり多く含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面は胴肌あれ。底近くの胴オサエ。 内面は胴上半肌あれ。胴下半ヨコハケ(12本／1cm) 底貼り付け底部	½存 木葉痕
T6904	小型壺	— — 5.9	胎土　微細な長石，石英を多く含む 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面は口縁～胴上半ヨコナデ。胴上半以下ナナメ又はタテハケ一部その上にオサエかナデツケ（7本／1cm） 内面は口縁ヨコハケの後ヨコナデ。胴上半オサエ 底部木葉痕。上半以下ヨコハケ（2種類） （7本／1cm)(16本／1cm）	胴完形 底上げ底
T6905	高杯A	18.8 — —	胎土　砂量やや多く含む 焼成　良 色調　赤彩　黄褐色	外，内面共にミガキ（肌あれ，方向不明）	杯部ほぼ完形 脚欠損 赤彩(内外全面)
T7001	甕 D2	18.8 — —	胎土　砂粒，長石，金雲母を微量に含む 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面はナナメハケ（8本／1cm） 内面はヨコハケ（8本／1cm）	外面スス付着 二次加熱 ⅙存

第23表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T7002	小型高杯A	13.4 — —	胎土　微細な長石等を含む。精選された良質のもの 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は細かな入念なタテヘラミガキ 内面はナナメヘラミガキ	口縁⅓存
T7003	甕 D3	10.4 (推) — —	胎土　小さな砂粒と細かい長石を含む 焼成　堅緻 色調　明黄褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴タテハケ（7本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ。ハケ（8本／1cm）	外面スス付着 ⅓存
T7004	小型土器下	10.4 — — 3.4	胎土　若干の小石，細かな長石を含む 焼成　良 色調　暗赤褐色	外面は一部タテハケ（9本／1cm） 内面は胴オサエ。底ヘラケズリ	残胴⅓存 底完
T7101	甕	— — 10.8	胎土　長石，石英，金雲母，小石を少量含む 焼成　普通 色調　黄褐色	外面はタテハケ後にオサエられたようになり消えている所が多い（6本／1cm） 内面はヨコハケ。上半はナデツケ（6本／1cm） 胴ヨコハケが一部あり	脚½存
T7102	壺 C	14.4 (推) — —	胎土　小さな砂粒を多く含む。小石も若干あり 焼成　良 色調　淡黄褐色	外面はタテハケ（9本／1cm）口唇に2孔あり（対になっている） 内面は肌あれ	¼存
T7103	小型器台	— — —	胎土　微細なもののみを含む精良なもの 焼成　良好 色調　黄褐色	外面は粗いタテヘラミガキ 内面はヘラケズリ	接合部完存
T7201	甕 D2	17.6 (推) — —	胎土　長石，砂粒をかなり含む。小石も若干見られる 焼成　良好 色調　茶褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴右下がりのナナメハケ（6本／1cm） 内面は口縁ヨコナデ。胴ナナメ方向のナデツケ	⅙存 外面一部にスス付着
T7202	甕 D2	19.2 — —	胎土　砂粒，長石多く，雲母も含む 焼成　普通 色調　暗茶褐色	外面は全面ハケ（6本／1cm）口縁ナデか。 おそらく胴下半ナナメハケ（下から上へ）胴上半タテハケ（上から下へ） 内面は全面ヨコハケ。おそらく（下から上へ）口縁部内側は一部ナデで消す	口縁⅚存 胴部⅓存 全面スス付着
T7203	甕 D2	18.6 (推) — —	胎土　砂粒をかなり多く含む粘土質のもの 焼成　良好 色調　(赤味をおびた)黄褐色	外面はタテ又はナナメハケ（6本／1cm） 内面は口縁ヨコハケ（6本／1cm）胴ヘラケズリか	口縁⅙存
T7204	壺	— — 6.8 (推)	胎土　砂粒やや多く含む 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面はオサエかナデツケ 内面はヨコハケが一部に見られるが剥落が著しい	底部木葉痕あり 底部完

第24表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T7205	小型土器A	7.0 (推) — —	胎土　よく精選され緻密 焼成　良好　硬質 色調　黄茶色	外面は細かいナナメハケ（10本／1cm）の後ヘラミガキ 口縁部，櫛描横線文（5本） 内面は口縁部横ハケ付ヘラミガキ。胴部入念なナナメヘラミガキ	⅔存底部を欠く
T7206	小型土器D	7.2 (推) 3.0 2.9	胎土　砂粒，長石を含む 焼成　普通 色調　暗茶褐色	外面はタテハケの上をヨコヘラミガキ。口唇にもハケが残る 内面はヨコハケ，ヨコナナメヘラミガキでほぼ全面的に消す	底部　⅓存
T7301	甕	— — 9.5	胎土　砂粒，長石，雲母を多く含む 焼成　普通 色調　暗黄褐色（内面茶褐色）	外面は基本的にタテハケ 内面はヨコハケ。⅔まではナデで消してある	底部完存
T7302	甕	— — 7.8	胎土　砂粒，長石，雲母多し 焼成　良 色調　暗茶褐色	外面はナナメハケ（8本／1cm） 内面はヨコハケ一部残る	脚部完形 T7305と同一個体の可能性あるが，接合不良
T7303	甕	— — 10.4 (推)	胎土　砂粒，長石多し，雲母を含む 焼成　良 色調　淡黄褐色 （内面若干赤味強し）	外面は全面タテハケ 内面はヨコハケ	⅙存
T7304	甕 D2	13.8 — —	胎土　砂粒，長石，雲母多し 焼成　普通 色調　暗茶褐色	外面は全面ヨコヘラミガキ（一部ナナメもある） 一部にハケが残る。(ただし口縁部はおそらく）ヘラミガキ 内面は口縁内側ヨコヘラミガキ（一部ハケ残）。頸部下半以下ハケミガキ	口縁部⅔存 胴部⅙存
T7305	甕 D2	13.3 — —	胎土　砂粒，長石，雲母多し 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面は口唇ナデ。全面タテハケ（8本／1cm） （おそらく上から下の順） 内面は 口縁・頸部 ＞ ヨコハケ，胴部ナデ，胴下半ヨコハケ ②　①　②	脚部を欠く T7302の脚と同一個体の可能性強し。ただし接合せず。全面にスス付着
T7306	壺	— — 10.8	胎土　砂粒，長石，雲母多し。若干あらい 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面は全面ハケ（基本的はハケ）→（7本／1cm） 底部ケズリ 内面は肩及び胴下半ヨコハケ。	胴⅙存 底部完形で残存
T7307	壺	— — 7.7 (推)	胎土　砂粒，長石，雲母多し 焼成　普通 色調　暗褐色	外面は一部にハケを残す。 内面はヨコハケをナデ(？)で消す。	底部½存
T7501	甕 D	— — —	胎土　小石がかなり多い 焼成　不良 色調　暗褐色	外面は口唇ナデ。タテハケ（8本位／1cm） 内面はヨコハケ	口縁⅛存

第25表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T 7502	壺	— — —	胎土　石英，砂粒多い 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面は上半方向不明のヘラミガキ。下半ヘラミガキヨコ 内面はヨコハケ（7～8本／1cm）	底部½存
T 7801	壺 C2	16.4 — —	胎土　石英，砂粒を多く含む 焼成　良好硬質 色調　淡橙褐色(断面暗青灰色)	外面は口縁折り返し，折り返し下端から横がき，櫛線まではナナメハケ（12本／1cm）の上に若干のヨコヘラミガキあるか？　肩に櫛による横線（4本／5mm）と波状文。　内面は口縁おそらくヘラケズリによって半面部分を作る。頸部ウラヘラミガキ。肩から下オサエ（たぶん指による）	オモテ(全域)ウラ(肩まで) 赤彩 在地壺典型タイプ
T 7802	壺 D1	14.5 — —	胎土　砂粒，長石多し 焼成　良好硬質 色調　橙褐色(断面は青灰色)	外面は頸部より下はタテヘラミガキ 内面は口唇部から頸はハケをヨコヘラミガキで消す 肩より下ヨコハケ	口唇，肩の大部分が焼成時のヒブクレをうけている。そのため口唇部のほとんどがわずかな剥落をうけると共に口縁の肥厚する部分もあり在地壺典型タイプ
T 8101	甕 D2	23.7 (推) — —	胎土　長石を若干含む 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面は全面にハケ（上部タテ，下部ヨコ） （5本／1cm)(16～8本／1cm) 内面は口唇ウラ，細いハケ①，その下ナナメ荒ハケ②，この間をナデル③，その下ヨコハケ②，その下ナナメハケ①	調整デタラメ 口縁部⅙存
T 8102	甕 D2	18.0 — —	胎土　砂粒多く若干あらい 焼成　良好 色調　暗黄灰色	外面は全面にハケ（7本／1cm） 基本的には，上からタテ，ヨコ，タテ 内面は全面にヨコハケ	胴部½存 全面にススが付着厚し
T 8103	甕 C	17.2 (推) — —	胎土　砂粒多く，長石も含む。若干あらい 焼成　普通 色調　淡黄灰色	外面は全面ハケ。口唇口縁折り返し部ヨコハケ 折り返し部より，下部はタテハケ（10本／1cm） 内面はヨコハケ	口縁⅙存
T 8104	小型土器	7.4 5.3 3.5	胎土　多くの砂粒を含む。若干の雲母を含む。 焼成　普通 色調　(暗)淡黄褐色	外面は頸部タテハケをナデで消している。胴下半にヘラケズリあり。 内面は頸部ヨコハケ。胴部から下はオサエ	完形
T 8301	甕 D2	16.0 — —	胎土　砂粒，雲母多し。石英は若干緻密 焼成　良好硬質 色調　赤褐色	外面は口縁部下ナデ。頸部タテハケ。肩部ナナメハケ 内面は口縁内側ヨコハケの上にナデ。口縁下端ヨコハケを残す① 肩内側ナナメハケ②	口縁部⅕存
T(82) −(85) 01	甕	— — —	胎土　長石等の小さめのものを多く含む。砂質のもの 焼成　良好 色調　外暗赤褐色　内暗橙褐色	外面は下半部ヨコハケ。上半タテハケ(10本／1cm) 内面は右下がりナナメハケ（6本／1cm）をクラ等でオサエ	脚¼存
T(82) −(85) 02	甕 D1	— — —	胎土　砂粒多し 焼成　普通 色調　(黄)茶褐色	外面は口唇部刻目ヨコハケかも，その上をヨコナデ 内面はヨコハケ（6本／1cm）	接合部でわれている 口縁⅙存

第26表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T(82) −(85) 03	甕 D_3	— — —	胎土　石英を少量含む 焼成　普通 色調　外茶褐色〜明暗茶色 内暗褐色	外面は口唇部ヨコナデ。胴部タテハケ（8〜9本／1cm） 内面は右下がりナナメハケ	二次加熱 口縁⅙存
T(82) −(85) 04	甕 C	— — —	胎土　砂粒，小石を多量に含む（表面に露出目立つ） 焼成　普通 色調　明褐色	外面はところどころにハケ（肌あれが激しい） 内面はヨコのヘラミガキか	口縁⅙程度存
T(82) −(85) 05	小型壺 D	— — —	胎土　砂粒をかなり含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は口唇部各方向にハケ（9本／1cm） 内面はヨコヘラミガキ	口縁⅙存
T(82) −(85) 06	高杯	— — —	胎土　かなり精選された感じで，長石等の細粒を含む 焼成　良好 色調　（黄）茶褐色	外面はタテヘラミガキ 内面はヨコミガキか？	穿孔3 脚部½程度存
T(82) −(85) 07	小型高杯A	— — —	胎土　長石，石英，雲母等の微細なものだけをわりと含んだもの 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面，内面共にタテヘラミガキ	杯部⅙程度存
T 10001	小型壺 E	— — 19.2 （復）	胎土　石英粒，金雲母，小石をわずかに含むが，精選されたもの 焼成　堅緻 色調　明茶褐色	外面は脚部ヨコナデの上にタテヘラミガキ 内面は脚部ヨコナデ	3孔か （外から中にむけての孔）
T 10002	壺 D_1	11.5 — —	胎土　かなり精選されたもの 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は折り返し部ヨコミガキ。胴部タテミガキ（下へゆくにしたがって右ナナメ） 内面は口頸部ヨコミガキ。胴部ヨコハケ 胴部最大径付近オサエ	上半部⅓存
T 10003	壺	17.2 （推） — 9.4	胎土　砂粒かなり含む 焼成　良好 色調　淡黄褐色	外面は口縁ヨコナデ。胴下半ヘラミガキ。以下タテハケ（9本／1cm） 内面は口縁ヨコハケ（9本／1cm）の上に軽いタテヘラミガキ 胴下半ヨコハケ（12本／1cm）	赤彩 底部木葉痕 胴上半欠損
T 10004	壺	— — —	胎土　石英粒，小石を比較的多く含む 焼成　普通 色調　橙茶褐色	外面は右下がりナナメハケ（5本／1cm） 頸部付近，刺突櫛による調整の上をミガキか 内面はハケの上ミガキか（剝落が著しく判然としない）	頸部付近⅙存
T 10005	甕	5.3 — —	胎土　若干の石英粒を含む 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面はヨコナデ胴部最大径付近オサエ。下方部分的にハケ（4〜5本／1cm） 内面はヨコハケ（7本／1cm）	口縁部¼存

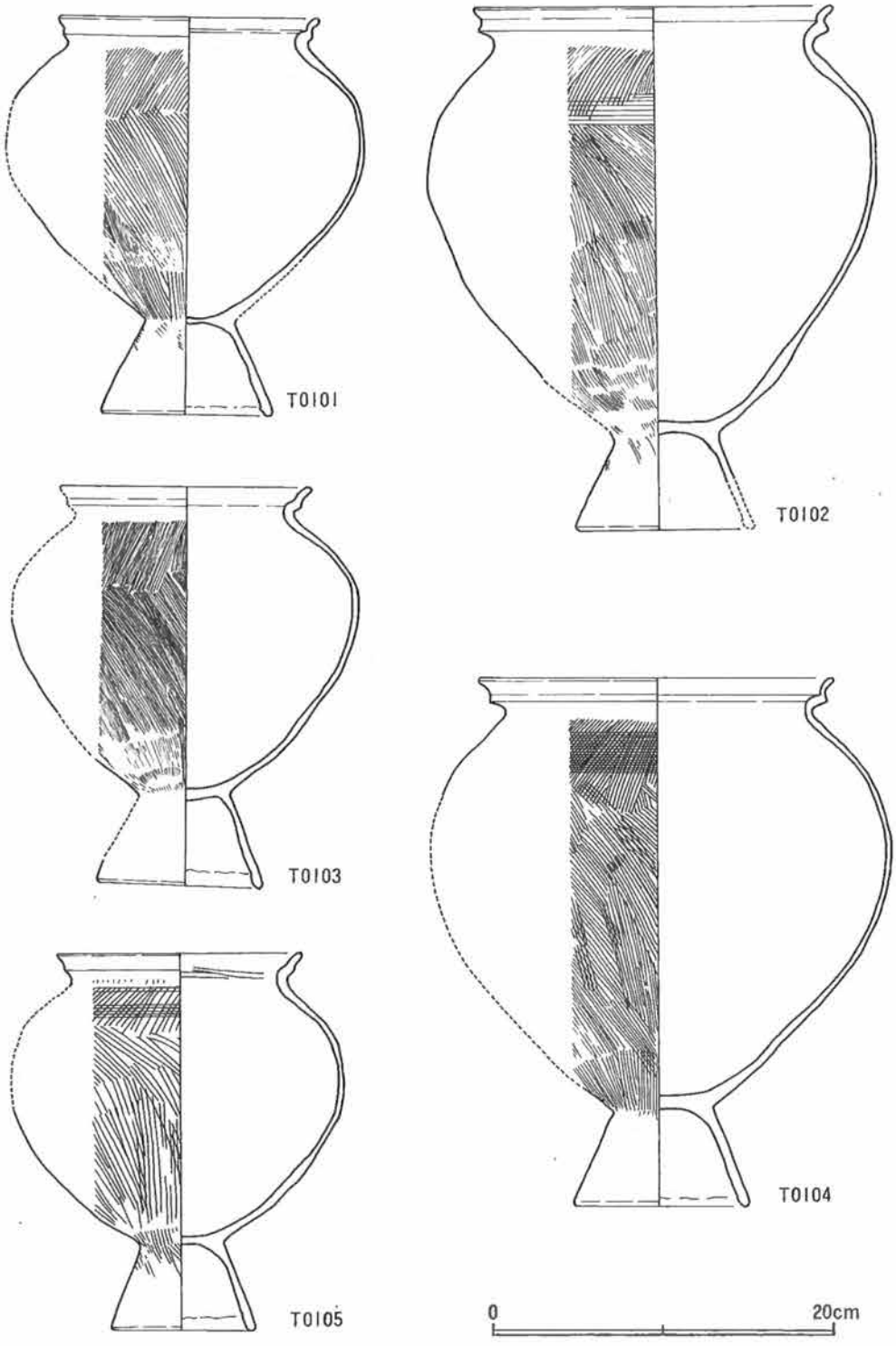
第27表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T 10006	小坩A	5.4 6.4 3.6	胎土　細かい砂粒をかなり多く含む 焼成　普通 色調　淡橙～淡黄褐色	外面は口縁部タテヘラか，胴部肌あれ激しい 内面は口縁部ヨコヘラ，胴部オサエ	底部ほとんど欠き½存
T 10007	小坩A	4.6 7.7 3.5	胎土　口唇部に若干の砂粒が表出しているものの全体としてはかなり精選されたもの 焼成　良好 色調　淡黄褐色(少し赤っぽい)	外面は胴部ヘラケズリのあと部分的にハケ 内面は剥落が激しい　輪積み(？)	胴の一部に二次加熱によるものと思われるススが付着，口縁，胴部上半½を欠く
T 10008	小坩A	4.8 6.6 3.2	胎土　器面にかなり多量の小石が表出している。微量の石英粒を含む 焼成　良 色調　明褐色	外，内面共に洗いすぎのため表面の剥落激しい	完形
T 20001	甕 D_2	— — —	胎土　小石多い，長石，黒雲母若干含む 焼成　普通 色調　明褐色	外面は右下がりナナメハケ（9本／1cm） 内面はヨコハケ	口縁部½存
T 20002	甕 D_3	— — —	胎土　砂粒をいくらか含み，金雲母をほんの若干含む 焼成　良 色調　橙褐色	外面はヨコナデ，胴部ハケ　タテ（8本／1cm）右下りナナメ 内面はヨコナデ，ヨコハケ	口縁½存
T 20003	—	— — —	胎土　小石多い，長石，黒雲母若干含む 焼成　良 色調　茶褐色	外面はケズリ→ヨコナデ左→右 タテ右下がりナナメハケ（9本／1cm） 内面はヨコナデ	口縁部ススが付着 口縁½存
T 20004	—	12.8 — —	胎土　微細な長石，雲母等のみを含む。よく精選されたもの 焼成　良好 色調　暗茶褐色	外面は右下がりナナメハケの上をナデル（4本／1cm） 内面はヨコナデ	脚部
T 20005	高杯	— — —	胎土　微細な長石，雲母等を含む精選されたもの 焼成　良好 色調　暗橙褐色	外面は脚ヘラミガキ，杯底部ナデ 内面は杯底部ウラナデ，下半あらいハケ（4本／1cm）	脚部½存
T 20006	小型器台	— — 7.2	胎土　微細な長石，雲母等を含む精選されたもの 焼成　良好 色調　明黄茶褐色	外面は脚部ヘラケズリ　杯底部ヘラミガキ 内面ナデ	脚部½存
T 20007	小型器台A	— — —	胎土　石英粒を若干含み純粘土に近い 焼成　良好 色調　赤褐色	外面はヨコナデ，内面はハケの上にミガキ 脚部は放射状にミガキ 杯孔あり，脚部2孔現存	3孔

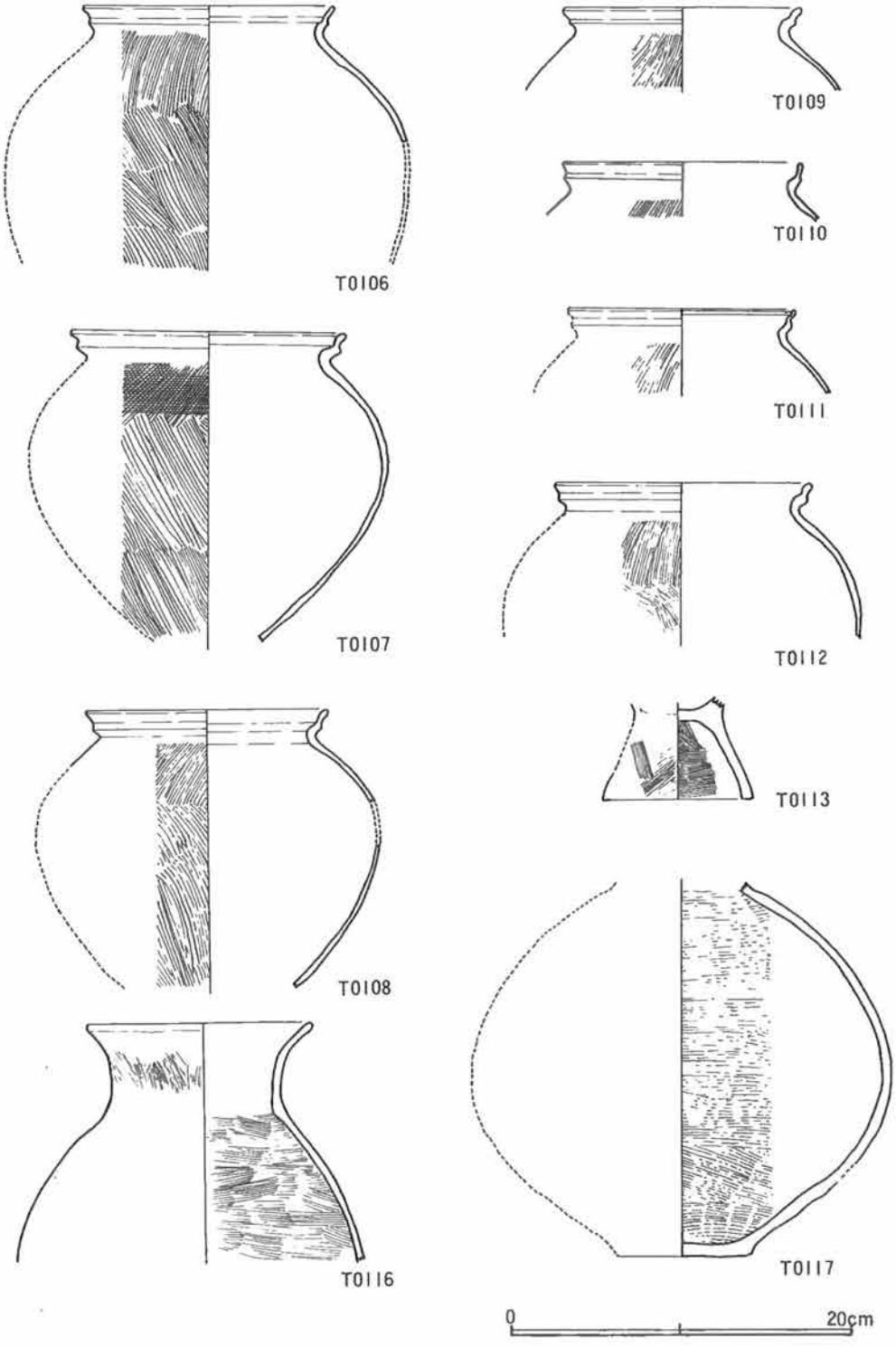
第28表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
T 20008	小型器台	— — —	胎土　砂粒をわずかに含む 焼成　良好 色調　明褐色	外面はタテ方向の細かいミガキ 内面はヘラケズリ 杯孔あり。上段の円孔2，下段の円孔1現存	
T 20009	甕 D_1	— — —	胎土　若干の石英粒を含む 焼成　良好 色調　明褐色	外面はハケ 内面はヘラミガキ 口縁部は櫛による押しビキ	
T 20010	小型壺D	— — —	胎土　砂粒をかなり多量に含む 焼成　良 色調　明褐色	両面とも磨耗が激しく不明 輪積み 口縁部に内面から外面へ3孔あり	
T 20011	壺C	— — —	胎土　若干の石英粒と多量の小石を含む 焼成　良好 色調　橙褐色	外面は口縁部ヨコナデ。口縁下段ハケ 内面は剝落が著しい 口縁上部に右回りの四本歯の櫛描波状紋あり	
T 20012	小型土器B	6.6 — —	胎土　砂，石英，長石を含む 焼成　良好 色調　黄褐色	ヘラミガキが剝落で不明 内面ハケの痕らしきものが観察されるが明確でない	
T 20013	小型土器D	— — —	胎土　小石をかなり含む 焼成　普通 色調　暗褐色	所々にハケが残る	

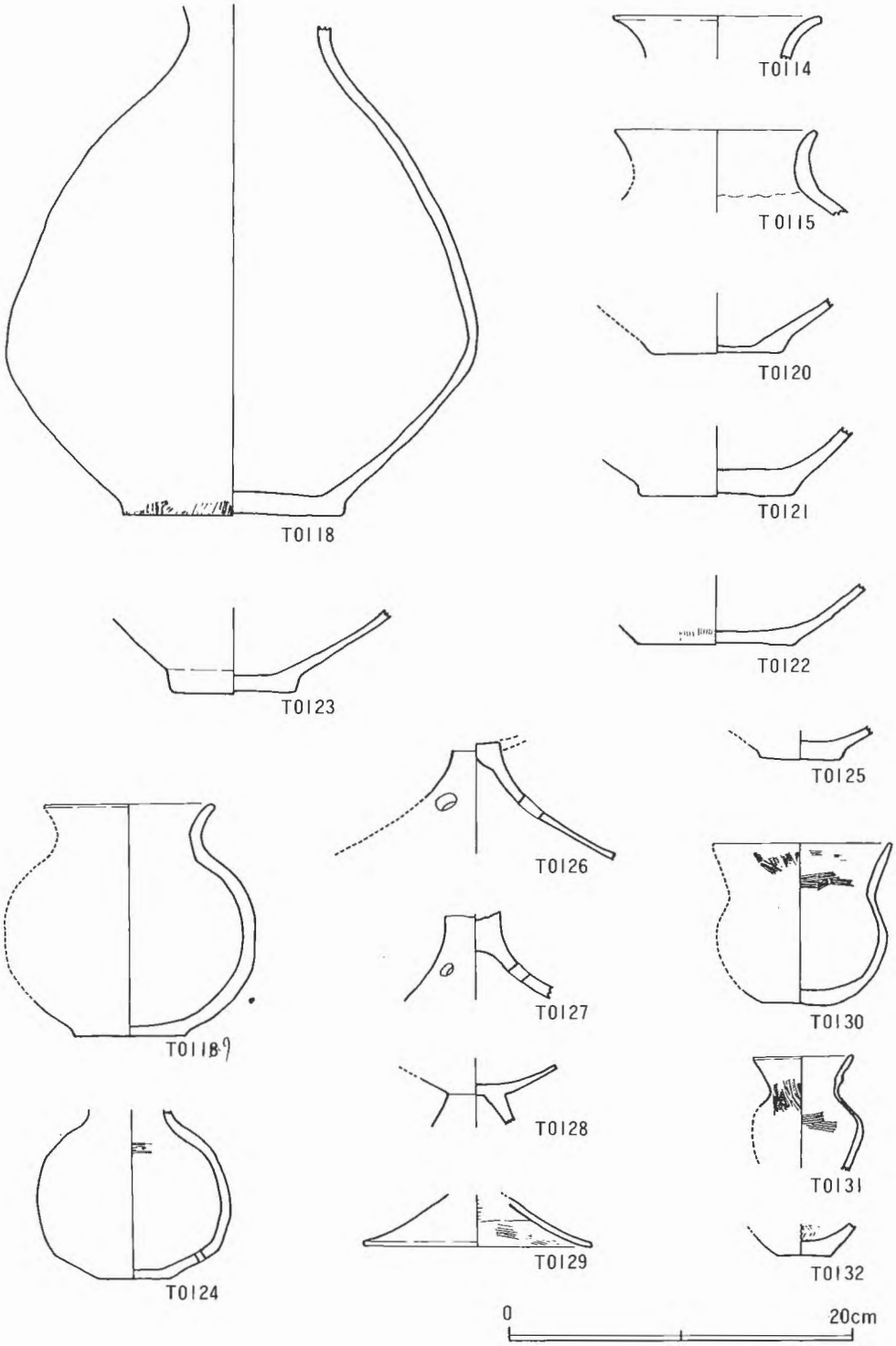
第29表　土器一覧表



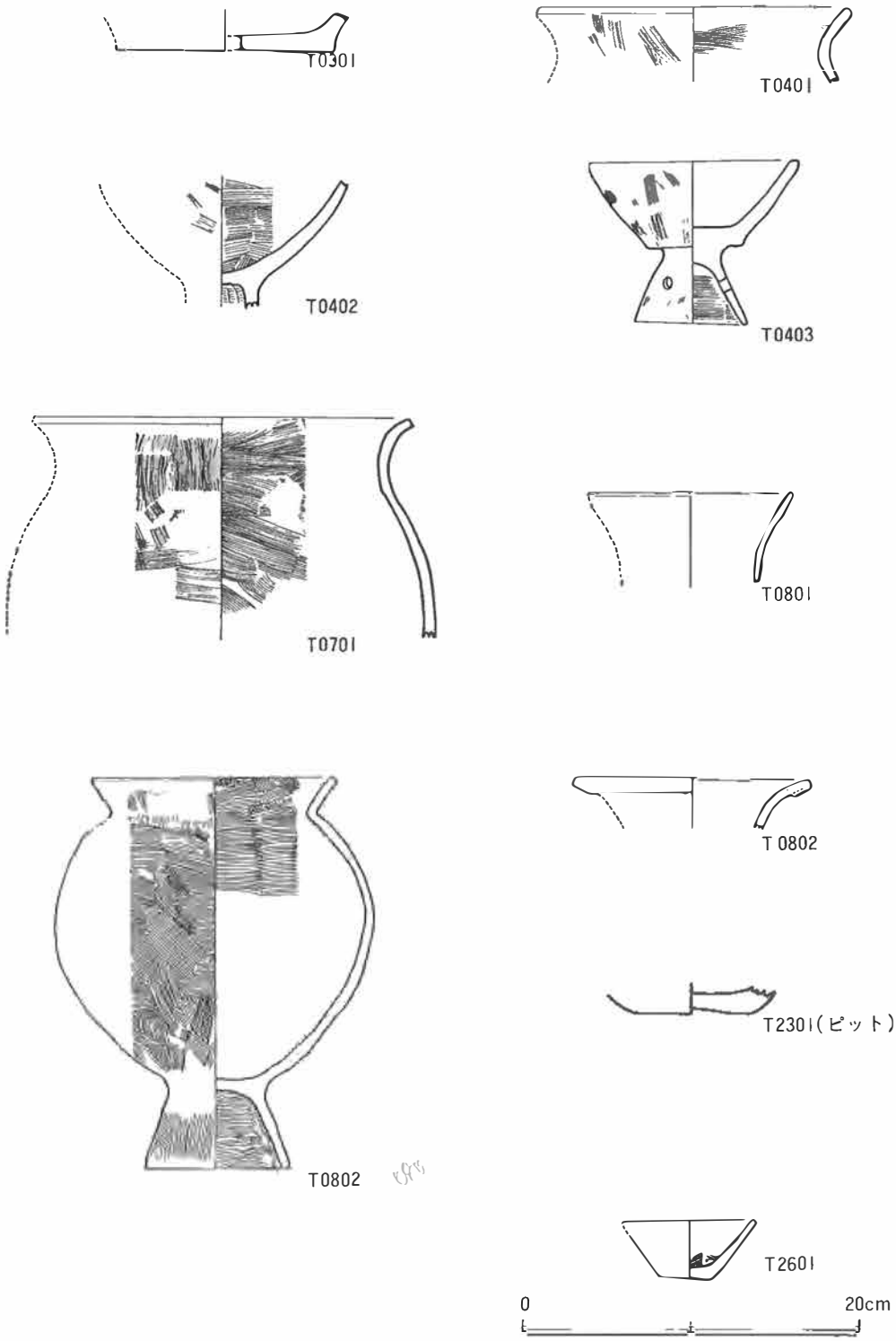
第40図　土器実測図


T0106
T0107
T0108
T0116
T0109
T0110
T0111
T0112
T0113
T0117
0
20cm

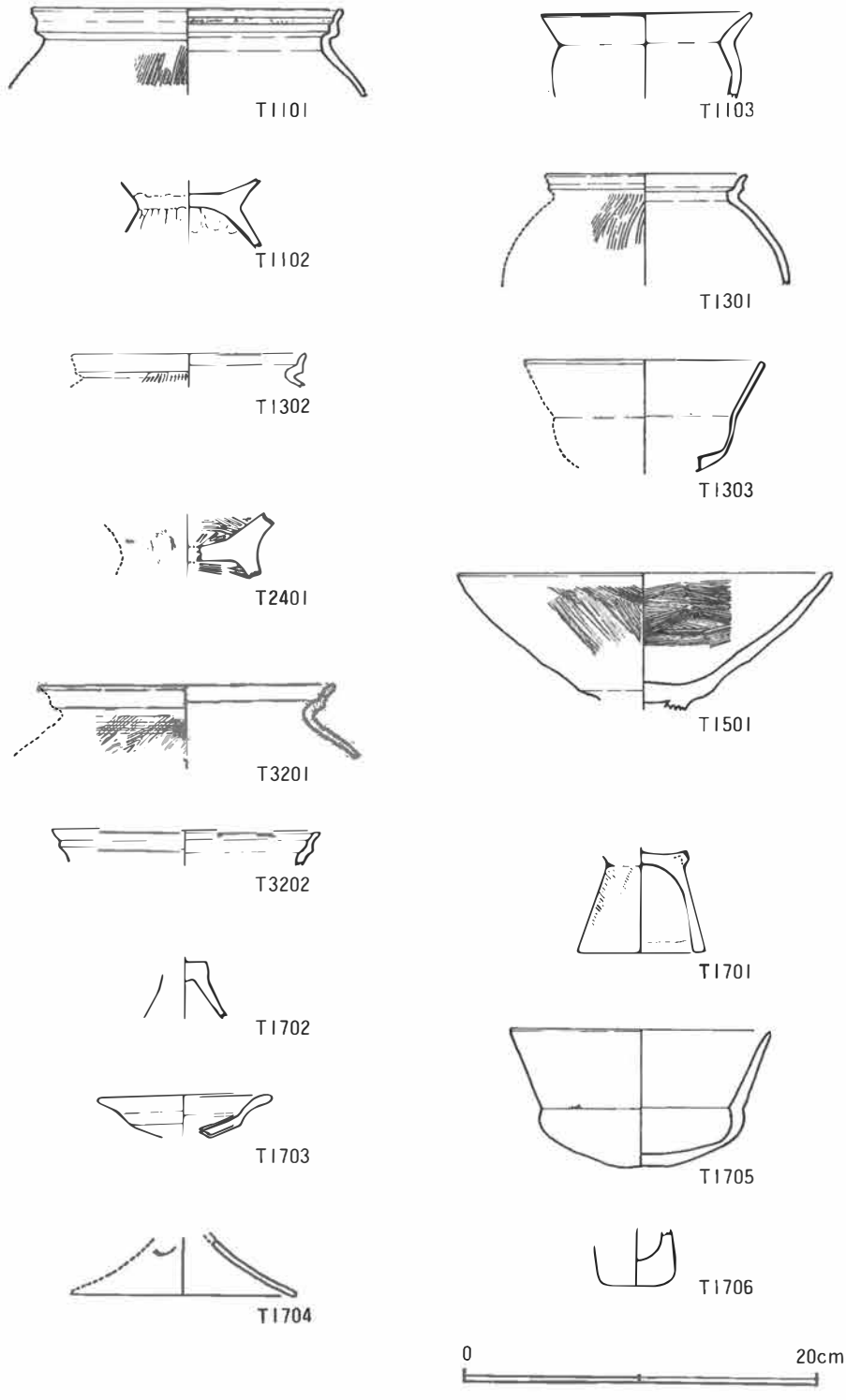
第41図　土器実測図


T0114
T0115
T0118
T0120
T0121
T0122
T0123
T0125
T0126
T0118-9
T0127
T0130
T0128
T0131
T0129
T0132
T0124
0
20cm

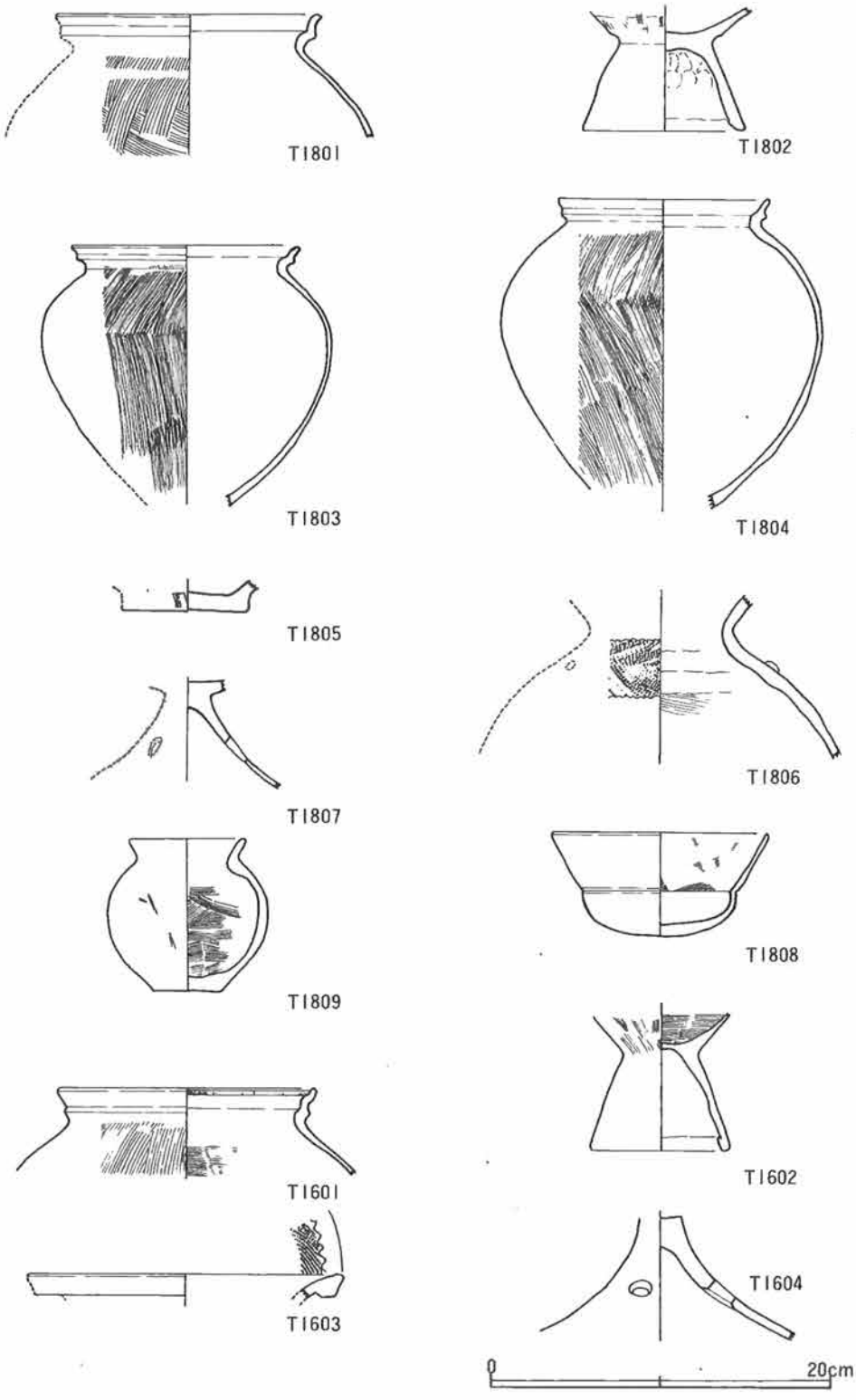
第42図　土器実測図


T0301
T0401
T0402
T0403
T0701
T0801
T0802
T0802
T2301(ピット)
T2601
0
20cm

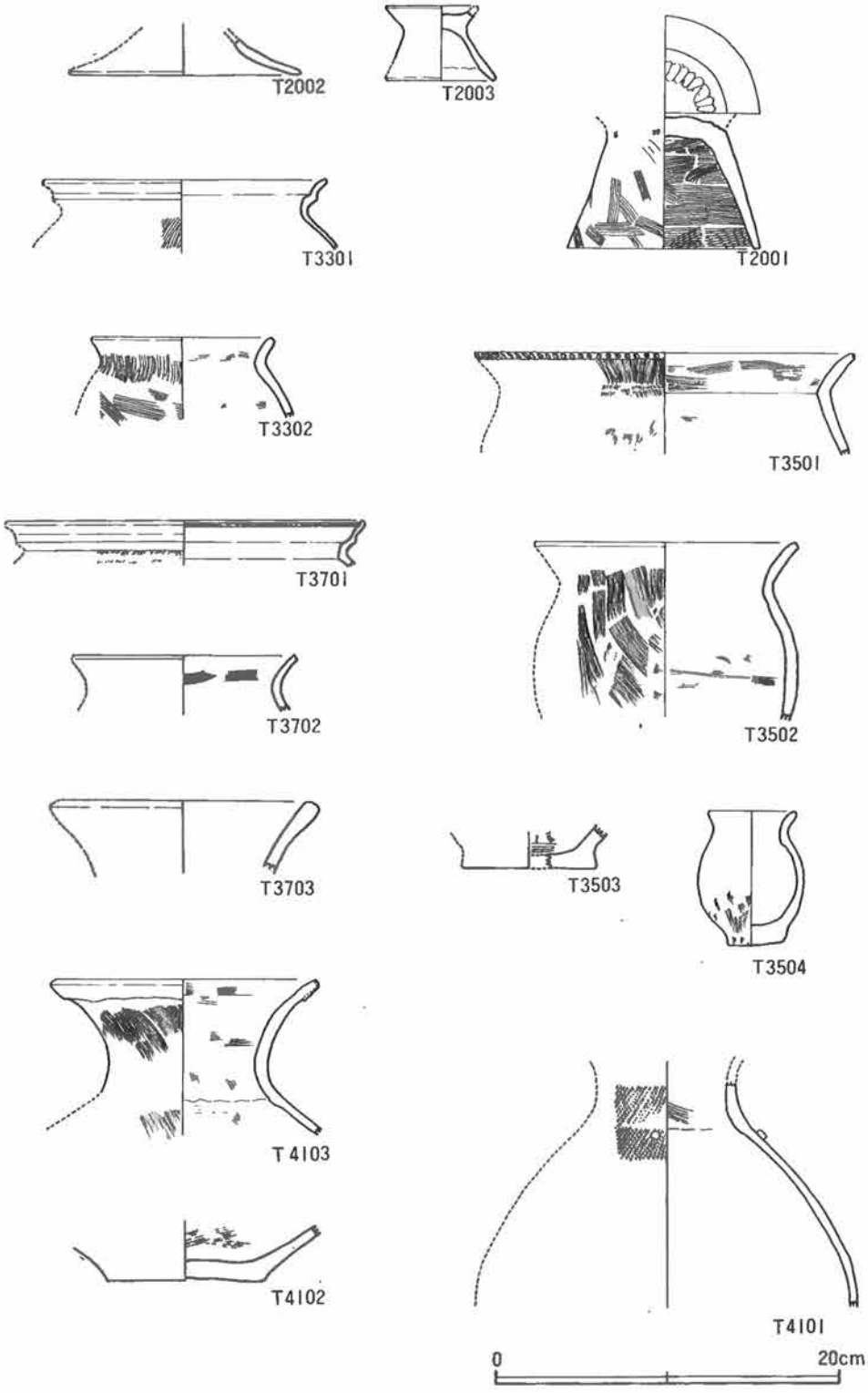
第43図　土器実測図


T1101
T1103
T1102
T1301
T1302
T1303
T2401
T1501
T3201
T3202
T1701
T1702
T1705
T1703
T1706
T1704
0
20cm

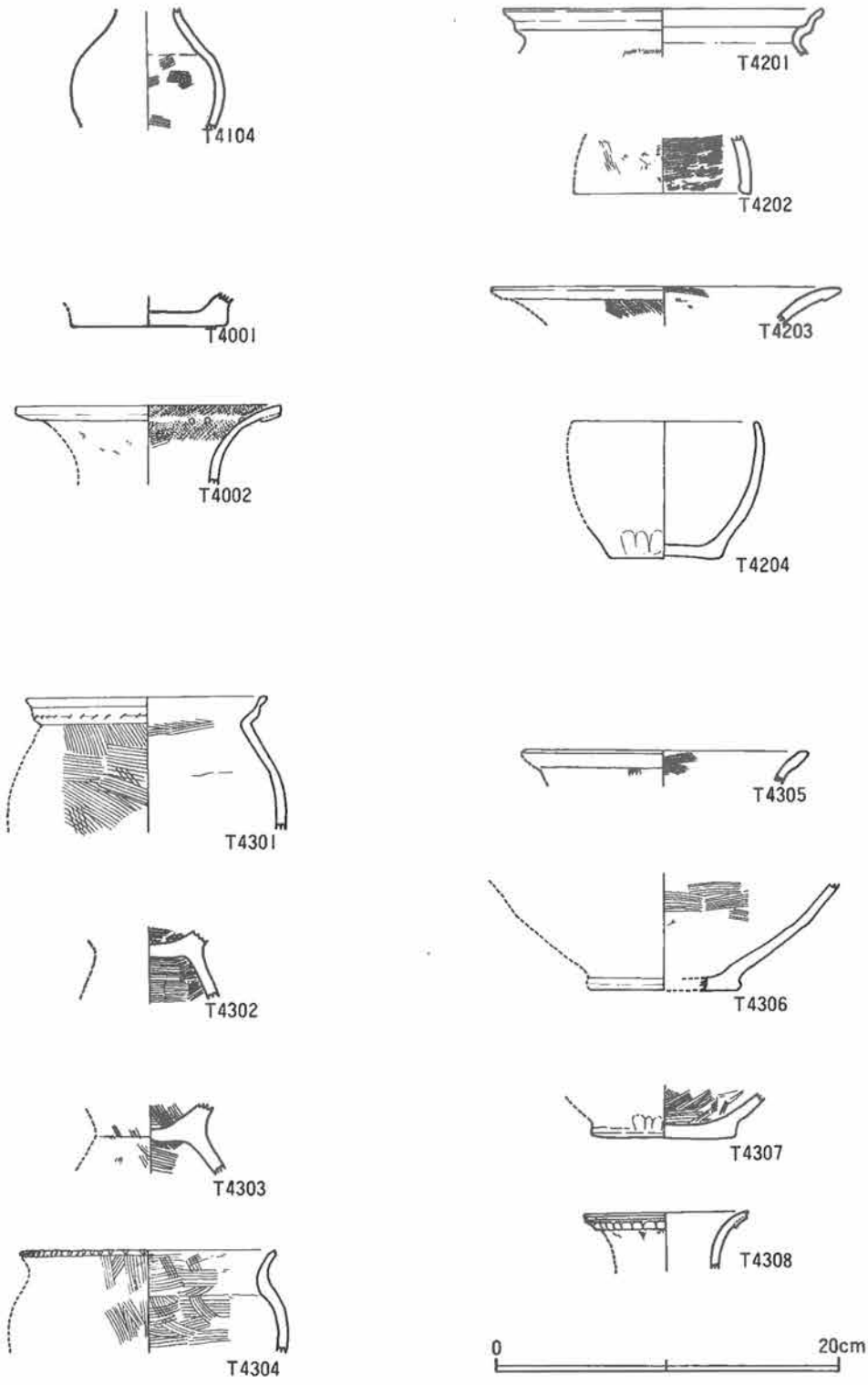
第44図　土器実測図


T1801
T1802
T1803
T1804
T1805
T1806
T1807
T1808
T1809
T1601
T1602
T1603
T1604
0
20cm

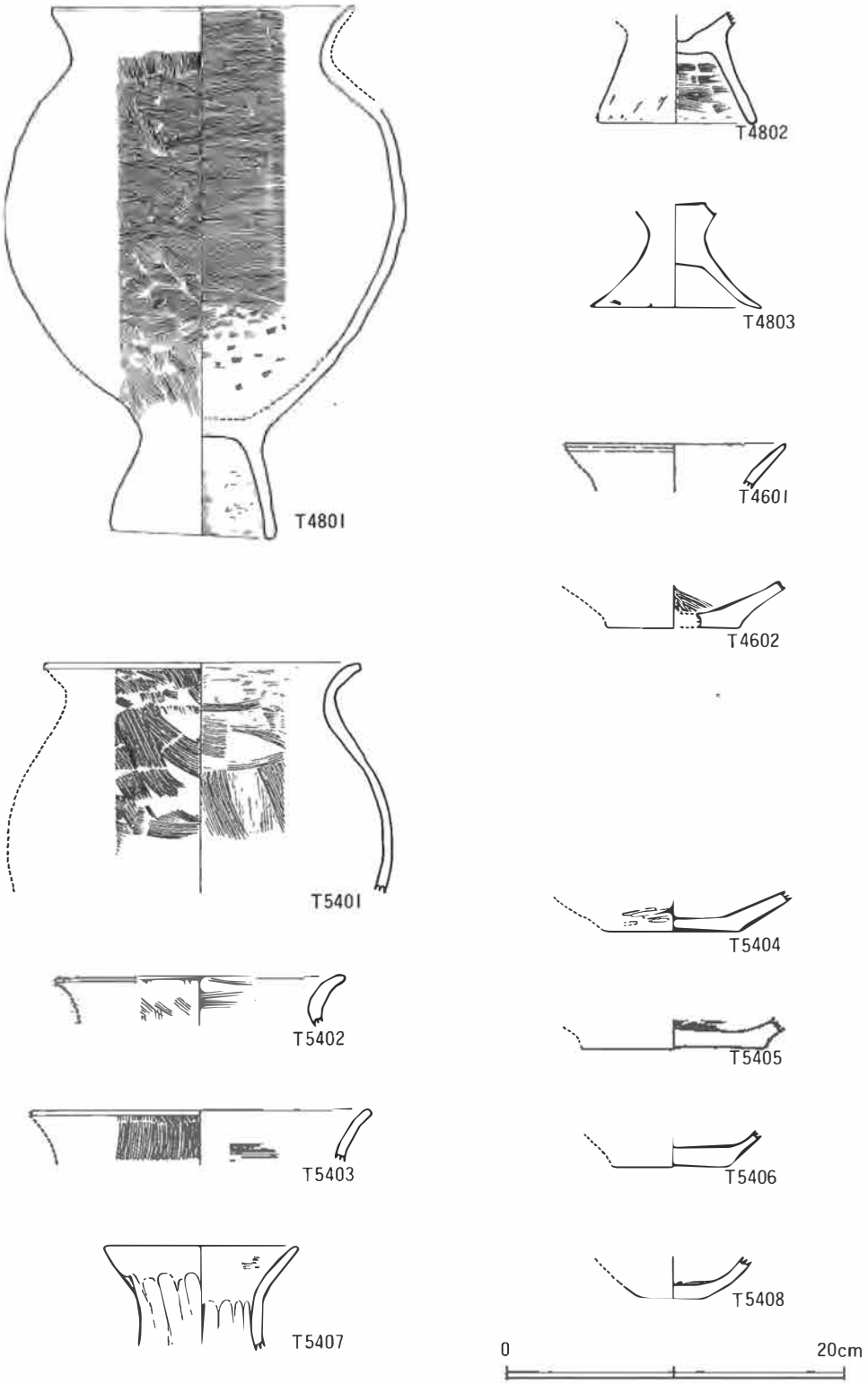
第45図　土器実測図


T2002
T2003
T2001
T3301
T3302
T3501
T3701
T3702
T3502
T3703
T3503
T3504
T4103
T4102
T4101
0
20cm

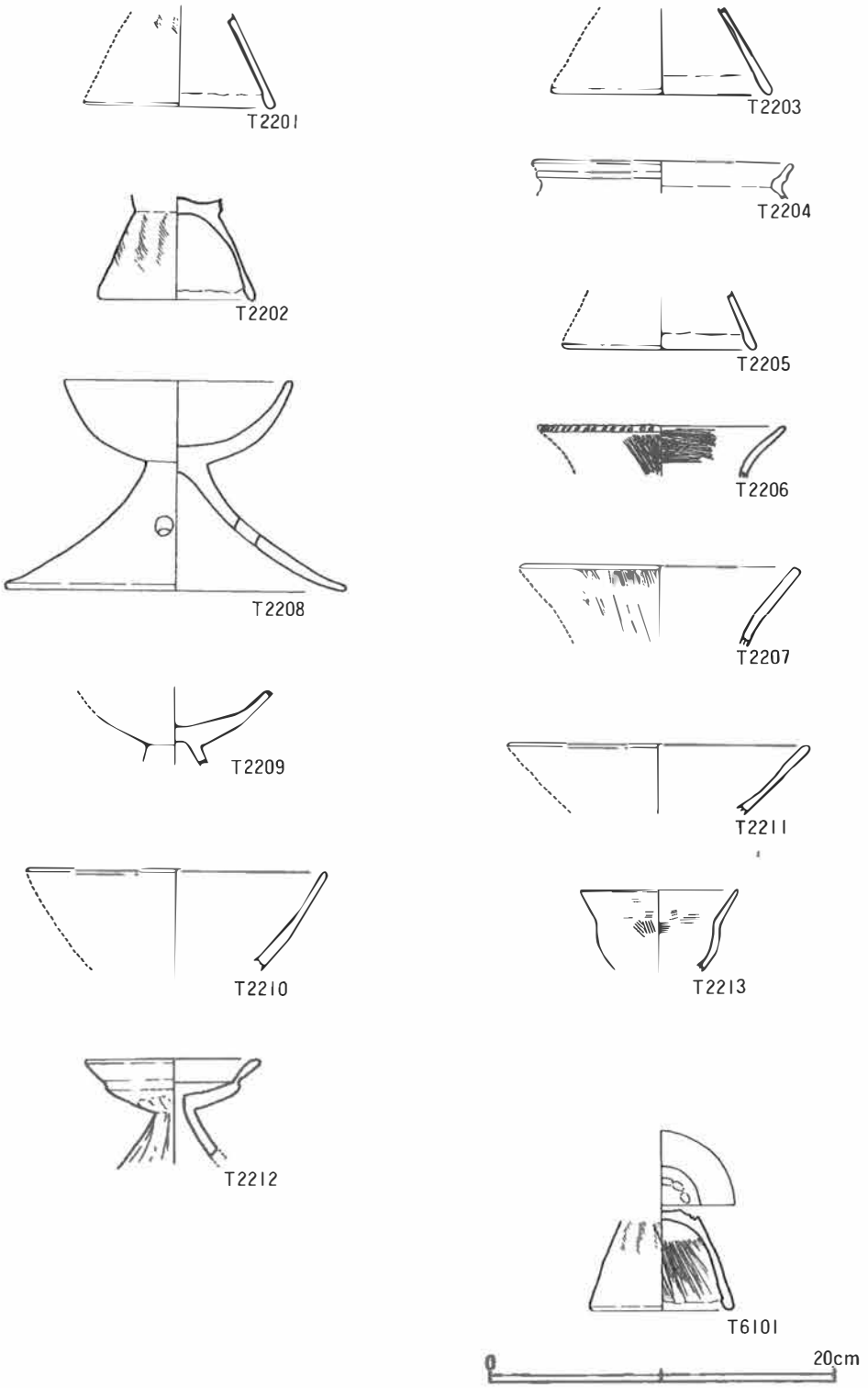
第46図　土器実測図


T4104
T4001
T4002
T4301
T4302
T4303
T4304
T4201
T4202
T4203
T4204
T4305
T4306
T4307
T4308
0
20cm

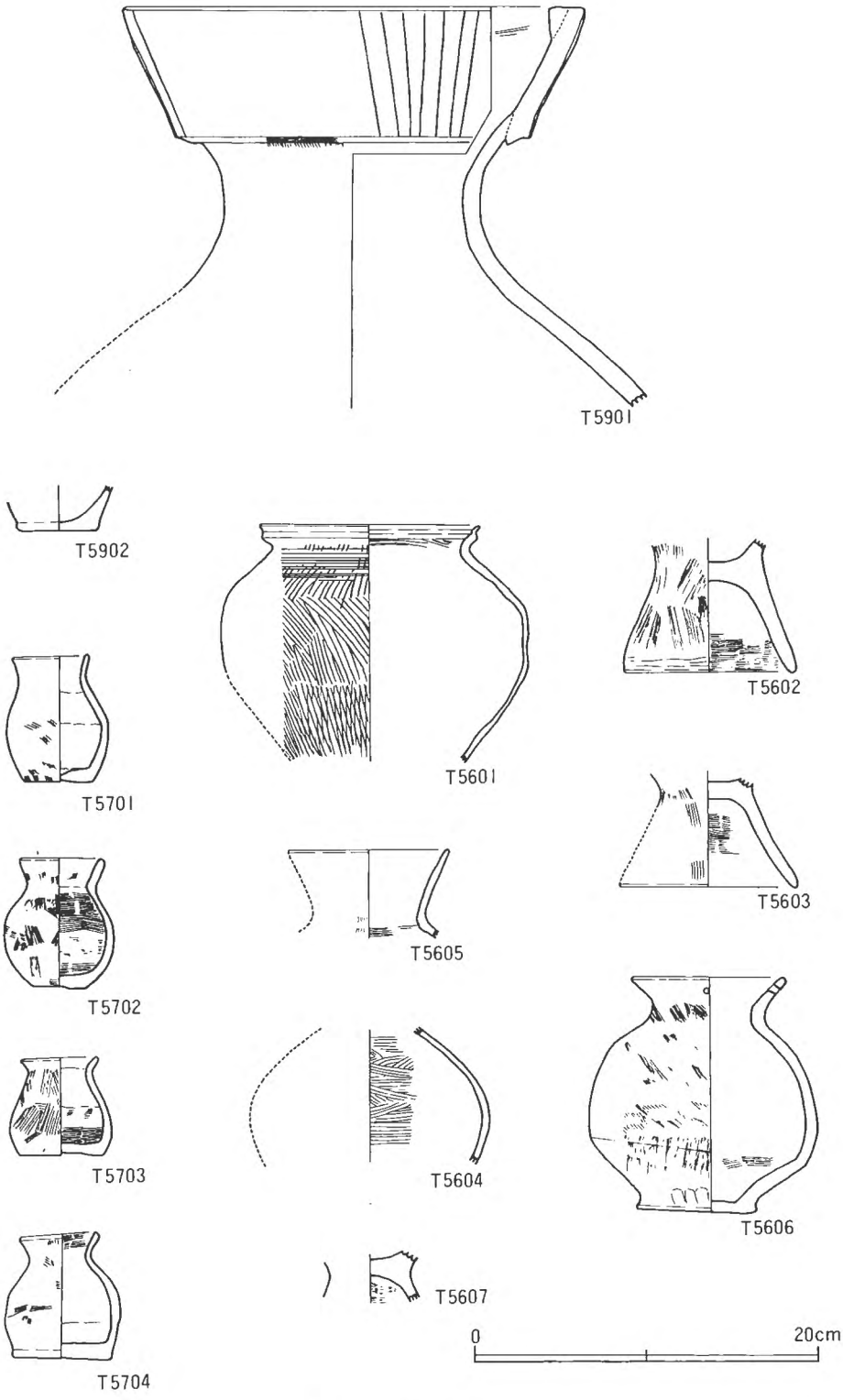
第47図　土器実測図


T4801
T4802
T4803
T4601
T4602
T5401
T5402
T5403
T5404
T5405
T5406
T5407
T5408
0
20cm

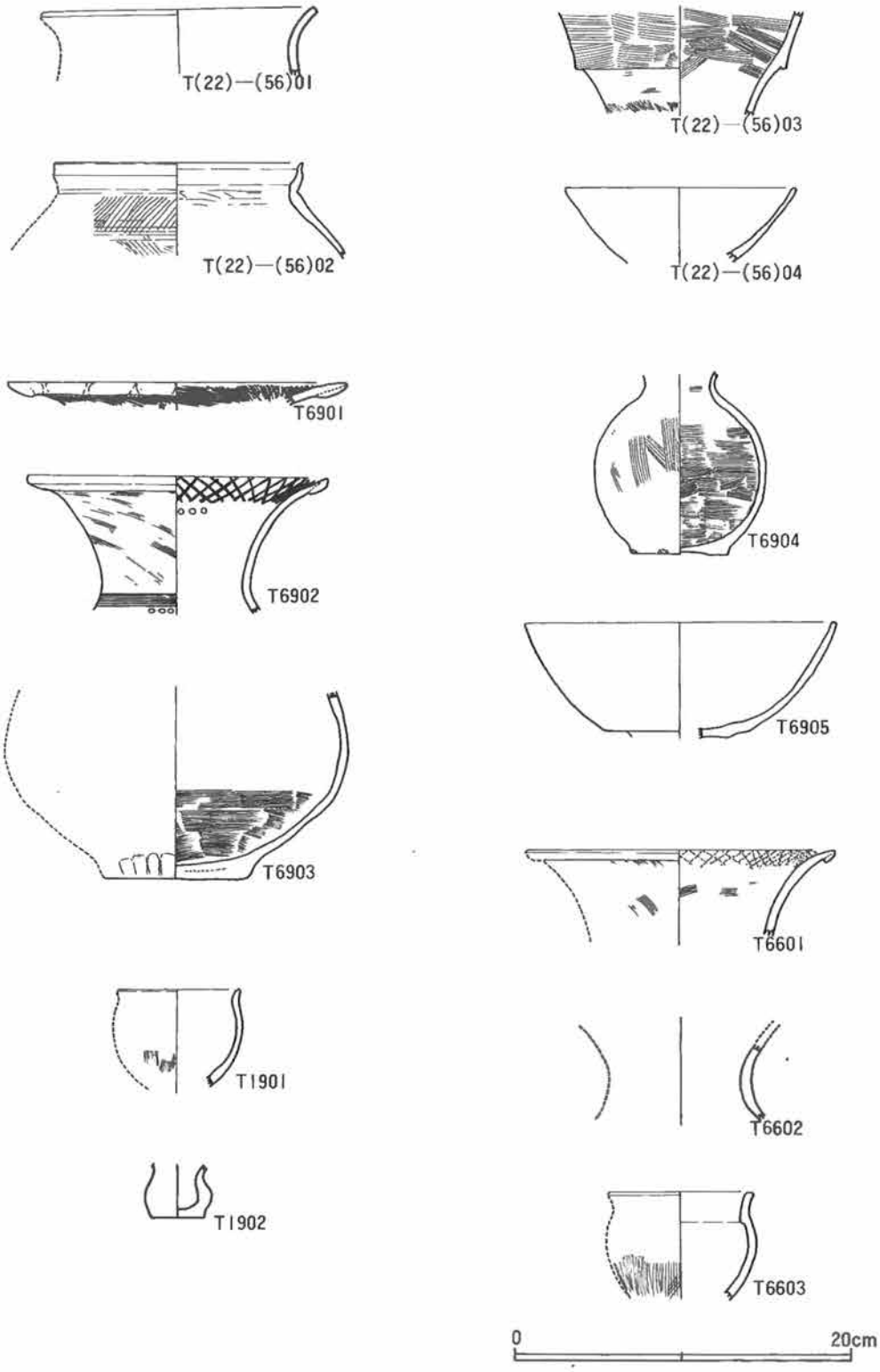
第48図　土器実測図


T2201
T2203
T2204
T2202
T2205
T2206
T2208
T2207
T2209
T2211
T2210
T2213
T2212
T6101
0
20cm

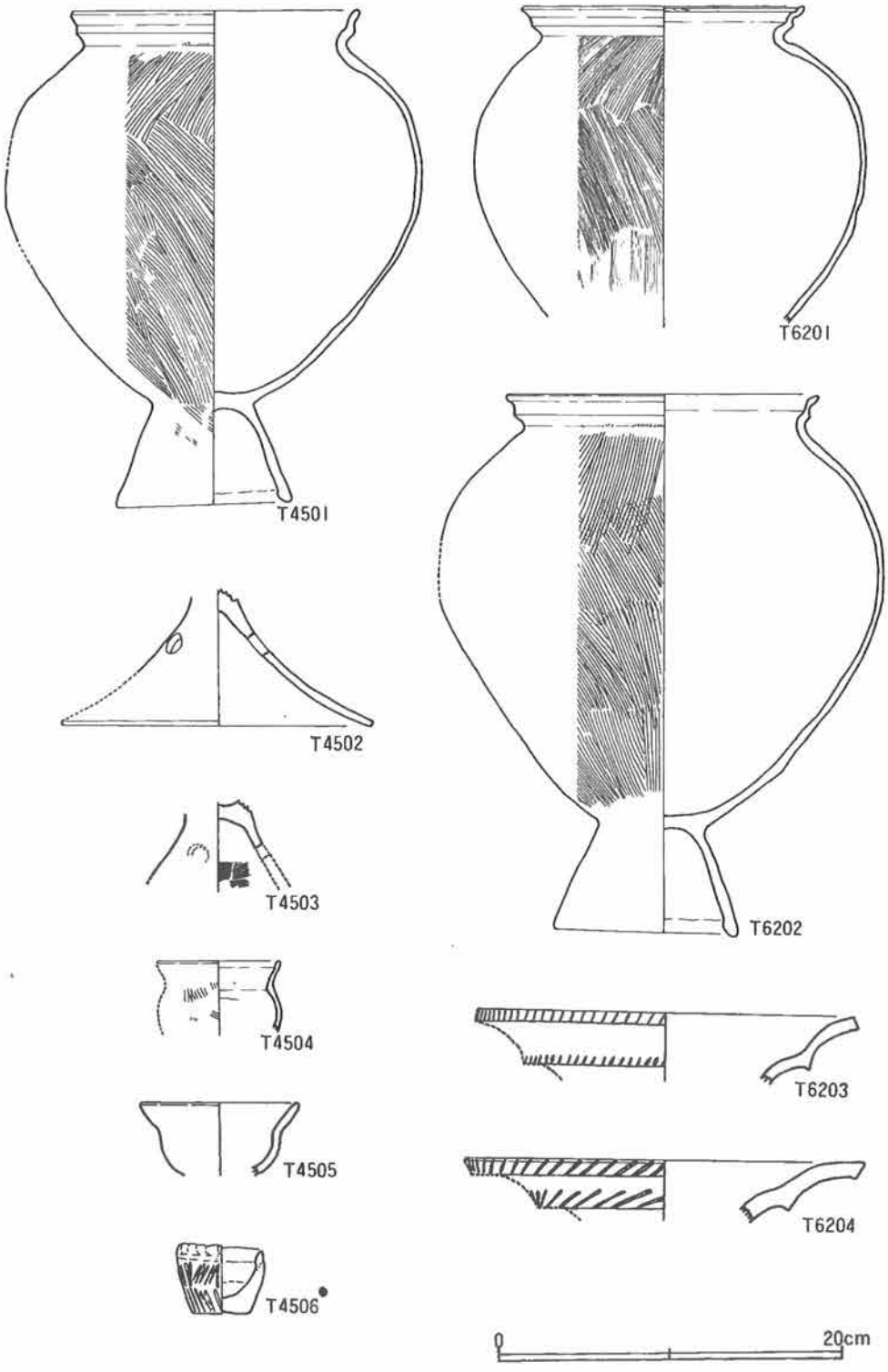
第49図　土器実測図


T5901
T5902
T5601
T5602
T5701
T5603
T5605
T5702
T5604
T5606
T5703
T5607
T5704
0
20cm

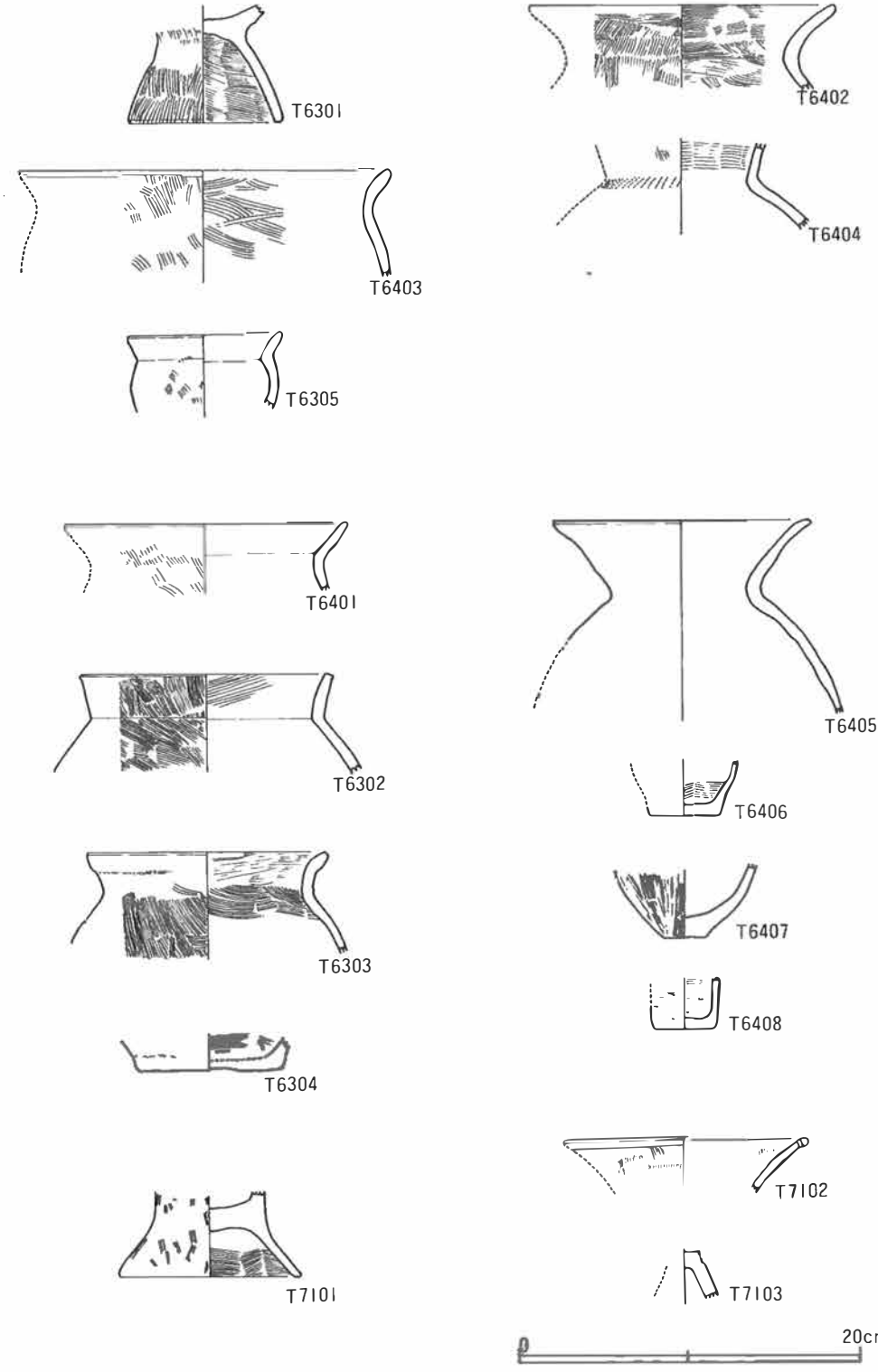
第50図　土器実測図


T(22)—(56)01
T(22)—(56)03
T(22)—(56)02
T(22)—(56)04
T6901
T6904
T6902
T6905
T6903
T6601
T1901
T6602
T1902
T6603
0
20cm

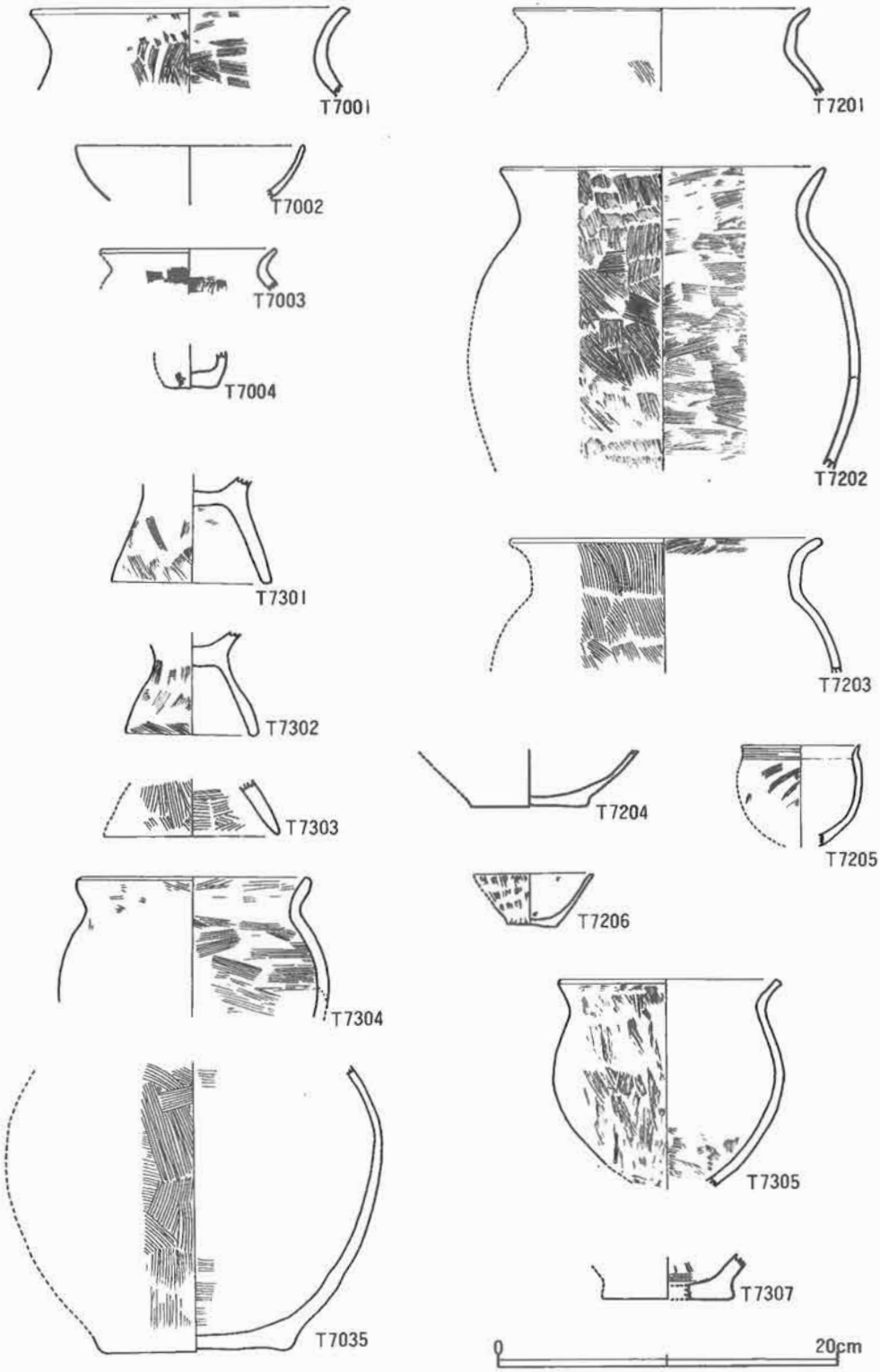
第51図　土器実測図


T4501
T4502
T4503
T4504
T4505
T4506
T6201
T6202
T6203
T6204
0
20cm

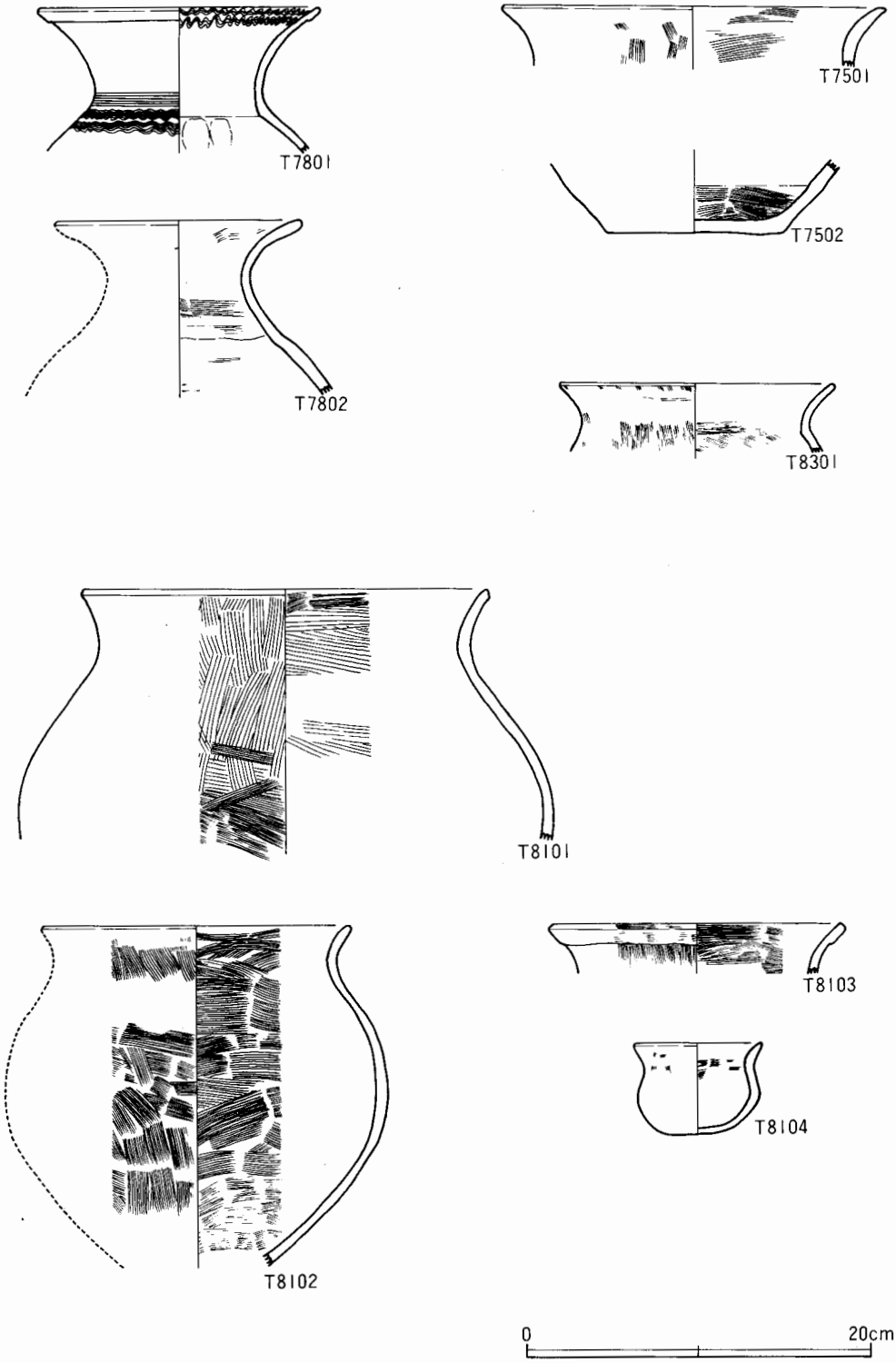
第52図　土器実測図


T6301
T6402
T6403
T6404
T6305
T6401
T6405
T6302
T6406
T6303
T6407
T6408
T6304
T7102
T7101
T7103
20cm

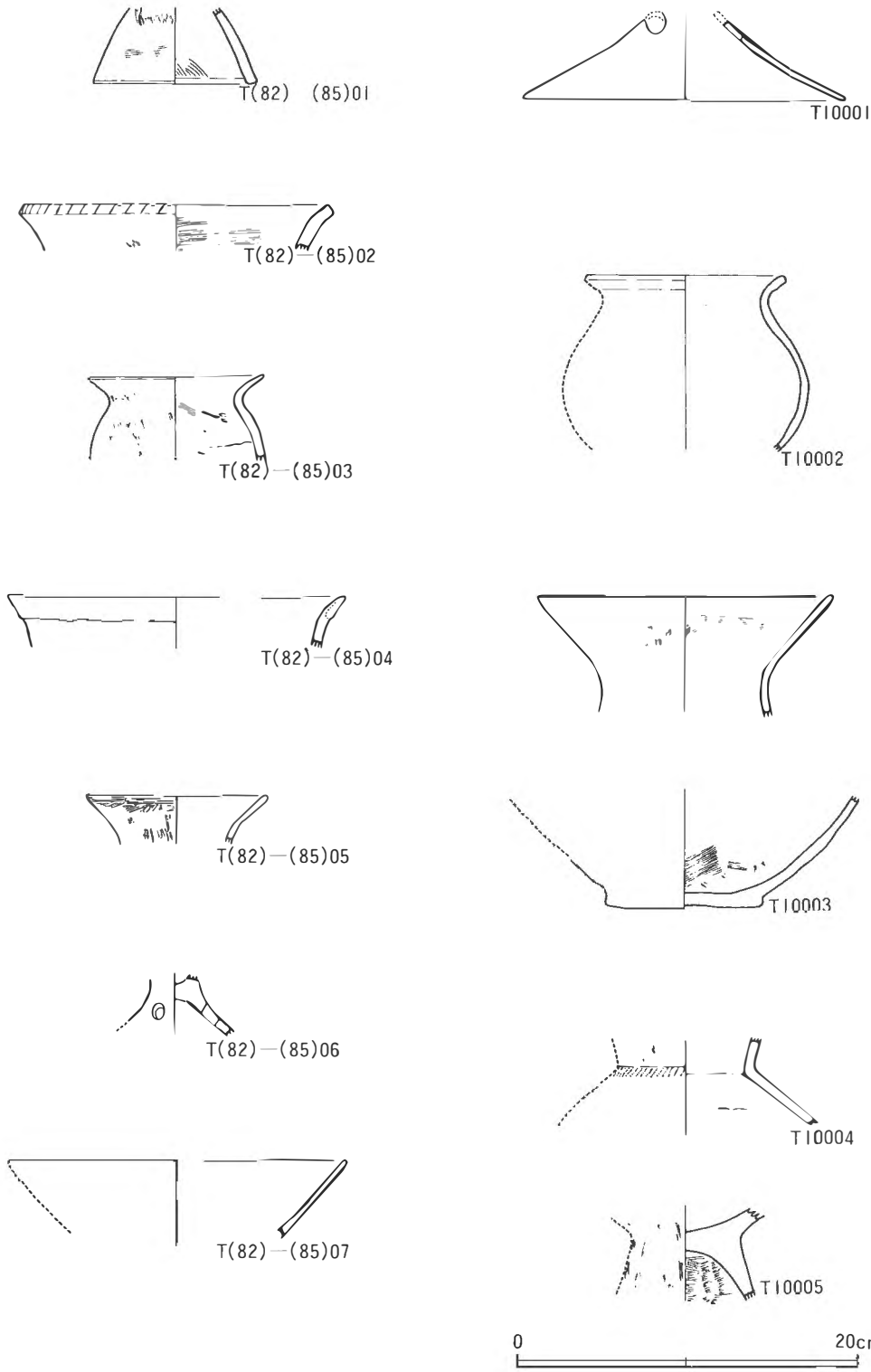
第53図　土器実測図


T7001
T7002
T7003
T7004
T7301
T7302
T7303
T7304
T7035
T7201
T7202
T7203
T7204
T7205
T7206
T7305
T7307
0
20cm

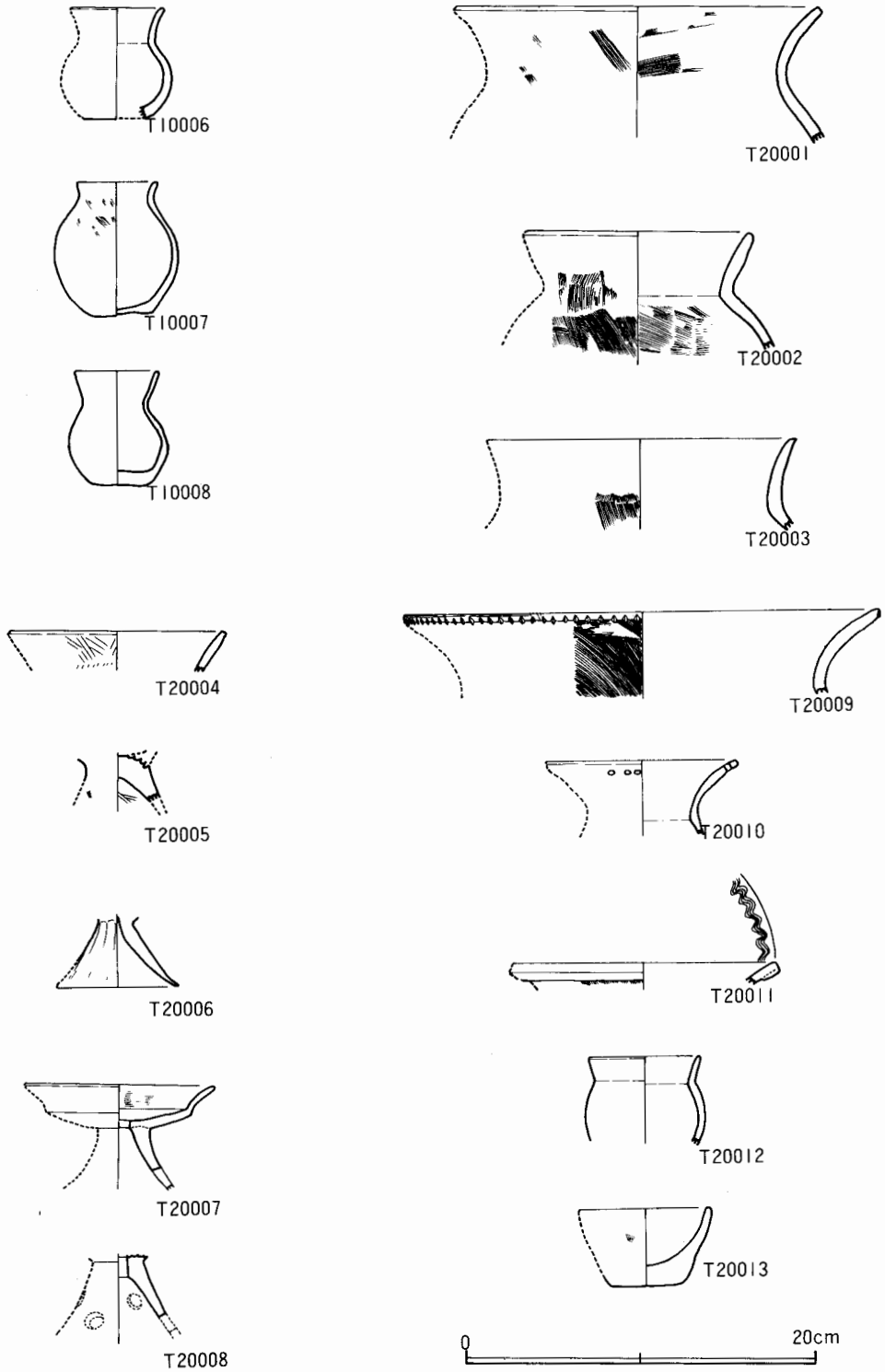
第54図　土器実測図


T7801
T7501
T7502
T7802
T8301
T8101
T8103
T8104
T8102
0
20cm

第55図　土器実測図


T(82) (85)01
T(82)—(85)02
T(82)—(85)03
T(82)—(85)04
T(82)—(85)05
T(82)—(85)06
T(82)—(85)07
T10001
T10002
T10003
T10004
T10005
0
20cm

第56図　土器実測図


T10006
T10007
T10008
T20004
T20005
T20006
T20007
T20008
T20001
T20002
T20003
T20009
T20010
T20011
T20012
T20013
0
20cm

第57図　土器実測図

(2) 砥石（第58図，図版第102）

本遺跡からは，５点の砥石が出土した。このことは，当然，現存しにくい鉄器類の存在を裏づけるものであり，この観点から出土した砥石について検討してみたい。なお，砥石各部の名称については，実際に刃を研ぐ部分を「砥面」，とぎおろした痕跡が認められる部分を「砥頭」，砥石の手前を「砥尻」とした。また砥面が一面とはかぎらなく，多面にわたる場合は，説明上右方向に回転させ順に１から４面とした。

砥石１

第47号住居址出土，石質は硬質砂岩である。砥面は中砥程度の細かさをもつ。全長34.8cm，最大巾9.4cmを測る。４面とも砥面として使用されている。

１面

中央部巾６cmを測り，摩耗が著しく凹形を呈していて，１面すべてが砥面として使用されている。

２面

中央部巾５cmを測り，摩耗が著しく凹形を呈している。中央部のみが砥面として使用されているだけで，両端に自然面を残す。

３面

中央部巾5.5cmを測り，摩耗が著しく凹形を呈していて，３面すべてが１面と同様に砥面として使用されている。

４面

中央部巾７cmを測り，中央部が凹形を呈しているが，他の面に比較して，砥面の長さは，18.5cmと短かく，両端に自然面を多く残す。

砥石２

第１号住居址出土，石質は硬質砂岩である。砥面は中砥程度の細かさをもつ。全長25.7cm，最大巾11.7cmを測る比較的長方形を呈する砥石である。

１面

砥面の巾9.5cmを測り全面が砥面として使用されている。また，この面の片方の先端でとぎおろした痕跡が認められるのでここを砥頭とした。また砥面の中央部が砥石と直角方向にやや凹んでいる。

２面

砥石の巾８cmであるが，砥面は巾4.5cmだけで，長さ15cmを測り，残り半分は自然面である。またこの面の先端にとぎおろした痕跡が認められるのでこの方向を砥頭とする。

３面

砥面の巾6.3cm，長さ17.4cmを測り，丸み状に凹んでいる。

４面

４面は，ほとんどが自然面であるが，砥石の面と平行に巾1.5cm，長さ10cmの１条の溝状の砥面が見られる。

砥石 3

第70号住居址床面より出土，石質は硬質砂岩である。全長22.2cm，巾6.3を測り，1面のみに砥面の痕跡が認められる。

砥石 4

第62号住居址壁面から出土，材質は凝灰質砂質頁岩であり砥面は非常に微細である。砥石中央部で欠損しているので全容は不明であるが，全長7.5cm，最大巾2.6cmを測る小形の砥石である。4面とも砥面として使用しており，いずれも中央部の摩耗が著しく凹形を呈している。

砥石 5

第46号住居址床面直上より出土，石質は砂質頁岩で砥面は非常に微細である。砥石の両端が欠損のため全容は不明であるが，巾4.5cmの断面長方形を呈する砥石である。

1面

全面が砥面であり巾4.5cmを測る。

2面

巾10cmを測り，自然面のなかに砥面として使用した痕跡が若干見られる。

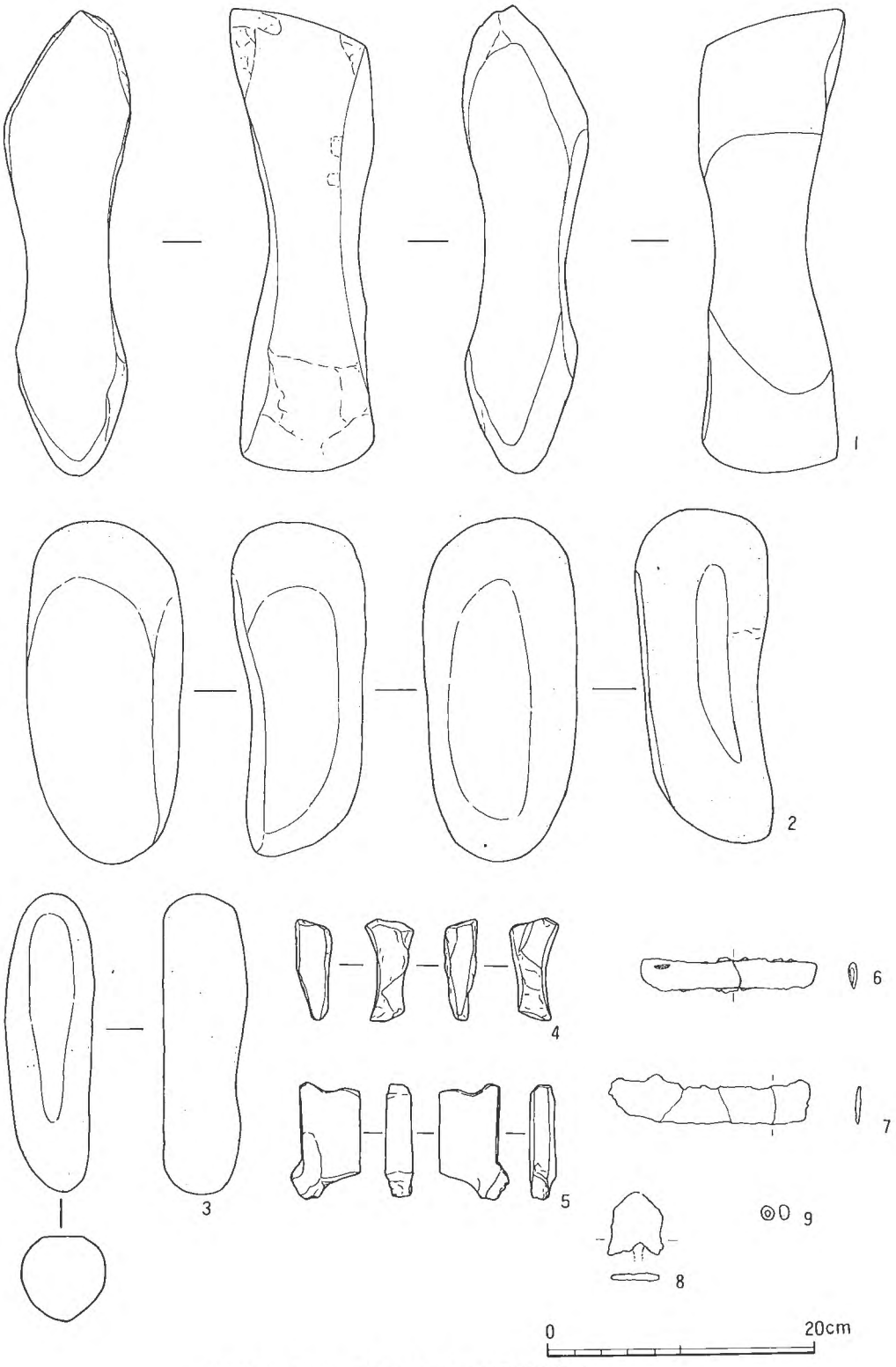
3面

全面が平らな自然面である。

4面

巾1.8cmと狭いが全面を砥面として使用している痕跡が見られる。

以上各砥石について記述したが，砥石1については，1・3面が全面，2・4面が両端に自然面を残して凹状を呈しているが1から4面とも摩耗の仕方は基本的には同じであると思われ，このことより全面中央部が摩耗しており，この部分に重点的に力が加えられるとともに，砥面が砥石の長軸に対して直角方向に平らであることは，少くとも砥石の巾より長い鉄器類を研いだことを想定して良いと思われる。砥石2については4面とも砥面のあり方が異なるので，兼用ないしは部分の研ぎに用いたものであろう。とくに1面については，とぎだしの痕跡が認められるので，その方向を砥頭とし，砥石の中央が砥石の長軸に対して直角方向で凹状を呈しているので，砥石の巾より狭い鉄器類を想定して良いであろう。このことは2面のあり方からも想定されよう。3面は，砥面の削痕状態が本砥石の他面や他の砥石の砥面とは異なり石と石をすり合わせた様な摩耗の仕方であり，鉄器類以外の物を想定した方が良いのではないだろうか。4面については，巾1.5cm，長さ10cmの一条の溝状の砥面であるが，3面と異なり砥面の状況は良好であり，この溝の巾に入る小型の鉄器で先端を研ぐような状況を想定して良いのかもしれない。砥石3については，砥面が一面であり，砥石の巾より広いものを研いだものと思われる。砥石4については，小形であり，据置いて使用するには不向きであり，砥石自体を動かしたことと思われる。また削痕が砥面に対して斜め方向より入り，砥面がその方向に平らで，へり方が一様であり，現在の鎌の砥石に非常に類似している。このことより，明らかに砥石の巾より長く，しかも細身の鉄器類を想定して良いと思われる。砥石5については，出土した砥石の中で最も砥面が微細であり石質も硬い。



第58図　砥石，鉄製品および玉類実測図

しかも砥面はほぼ平らであり，現在の仕上砥的存在を考えて良いであろう。かなり鋭利な刃をつけるために使用したことが想定できる。（佐藤）

(3) 鉄製品（第58図，図版第103）

本遺跡からは刀子２点，鉄鏃１点が出土している。

6（第62号住居址壁面出土）　平造り合わせ鍛造の刀子である。木柄痕を有する。

7（第72号住居址床面出土）　平造りの刀子である。銹がひどくもろくなっている。

8（第90号住居址出土）　平造り逆刺五角形鉄鏃である。箆部が欠損しているものと思われる。中央部が銹によりふくれている。

(4) 玉類（第58図，図版第103）

コバルト色のガラス玉(9)がＤⅣ-d区，第17，21，22号住居址付近の黒色スコリア層より出土している。これは径６㎜で厚さ3.2㎜・径２㎜の円孔を有し，表面には擦痕が観察される。（渡辺）

II　月の輪下遺跡

1　遺　構

本遺跡で発見された遺構は，竪穴住居址４基，不定円形土坑１基，集石遺構11個所と，いわゆる中世土坑と呼称されている土坑48基，さらに地元で「王藤内の塚」と伝えられていた近世墳墓である。うち,「王藤内の塚」については第Ⅵ章に一括して記述している。

(1)　住居址および不定円形土坑　(第60～62図，図版第60～62)

４基の住居址は第１・２・４号住居址が調査区北側に不定円形土坑を囲むように，ほぼ等間隔に並んでおり，第５号住居址のみ南西端に位置する。これらの住居址群はいずれも方形を呈するが６本の柱穴を持ち，床面の二重構造がみられないことなど，本遺跡群の中では特異なグループであり，また第１・２・５号住居址が廃棄された後，その竪穴内に集石を築いていることも含めて特殊な性格を有する領域として位置づけ得る可能性がある。

第１号住居址

本住居址は調査区中央のやや北側のＤ－Ⅲ区に位置する。ほぼ方形の平面プランを呈し，柱穴といってよい小形のピットが，南西壁，北東壁に併行に３本づつ並び６本検出された。床面は直接地山であり，その中央に炉址とみられる焼土が検出された。

また，本住居址竪穴内から第10号集石とした集石遺構が検出されたが，床面から10～20cm浮いた状態であったことから，廃棄後ある程度覆土が埋没した時点で竪穴の平面を意識しつつ築いたものとみてよかろう。

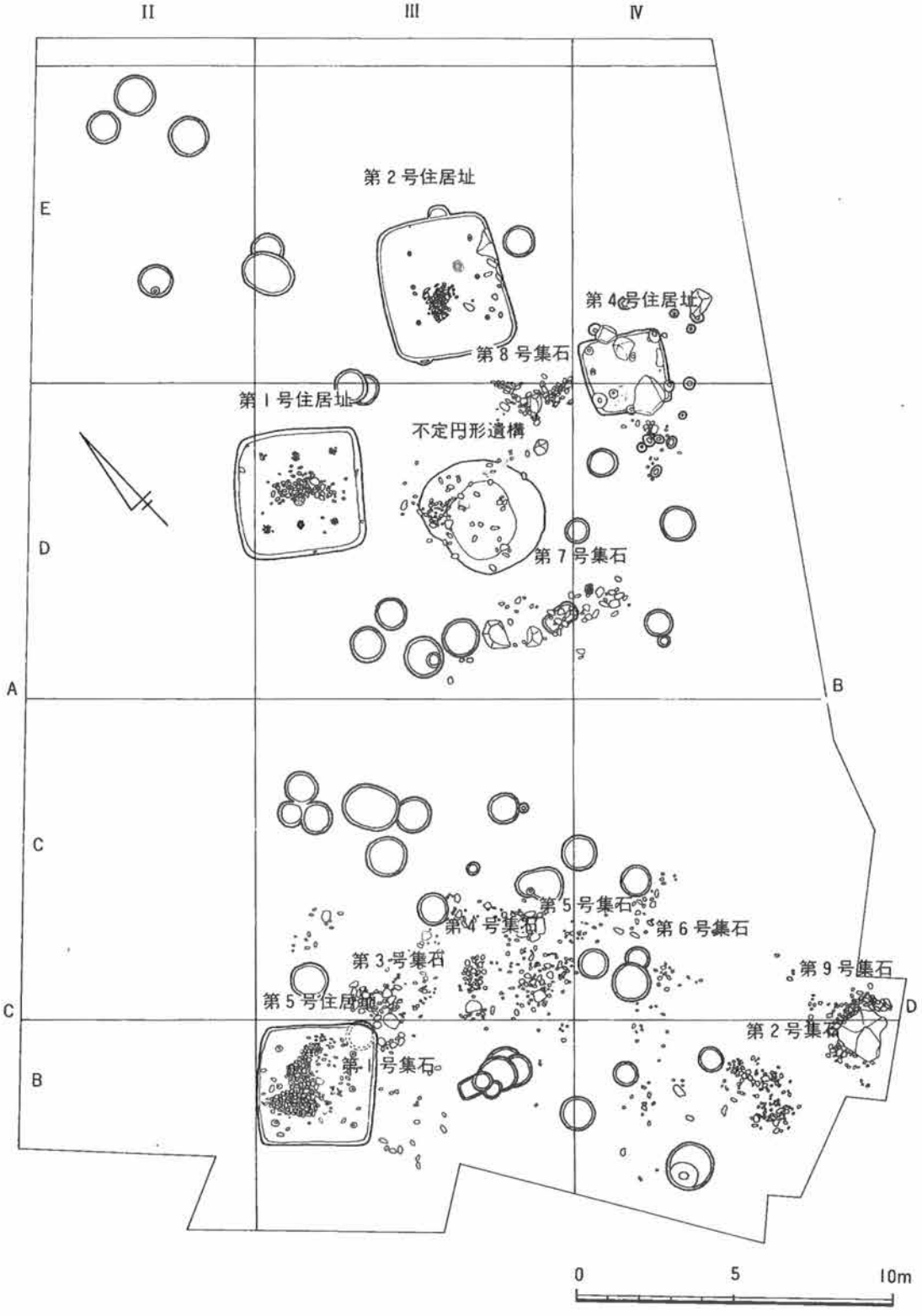
第２号住居址

調査区東端部から発見された。北西壁と南東壁がやや張り出しており，本住居址も６本の柱穴状ピットを有しているが,その並びは第１号住居址とは90°異なることから上屋も同様かとみられる。床面は二重構造をもたず，直接地山であり，その中央やや東側に焼土がみられ炉址と判断された。

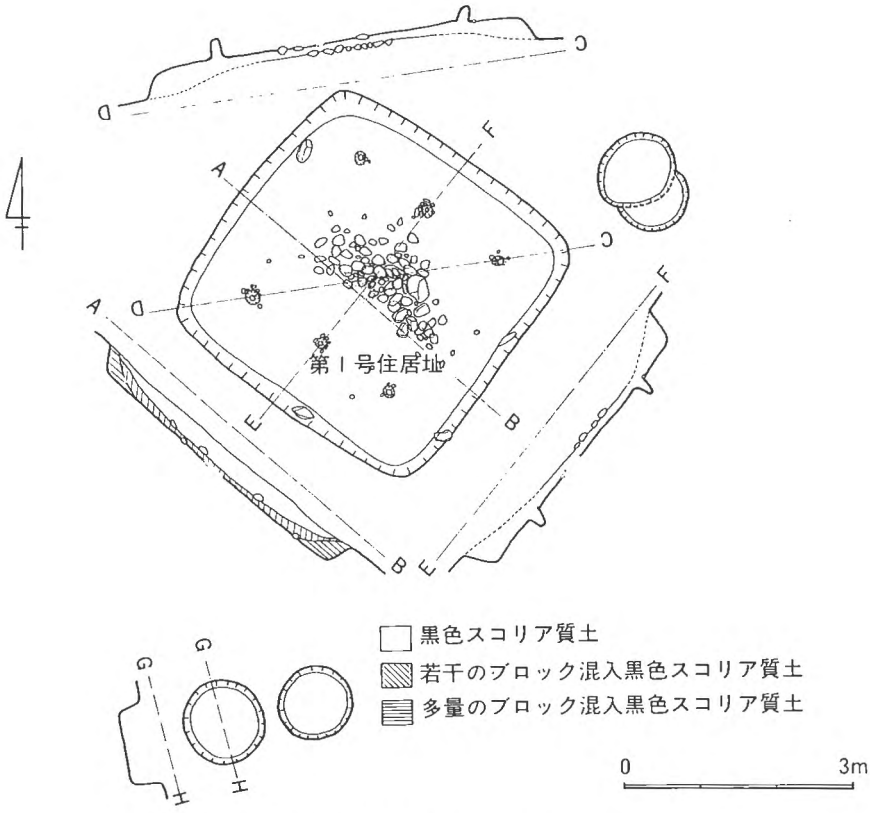
本住居址内からも第11号集石とした集石遺構が検出されたが，本例の場合はとくにある程度覆土が埋没した時点で土坑を掘って集石を築いており，その底部は床面をも掘りぬいていた。

第４号住居址

第２号住居址の南側に位置しており方形を呈しているが，南西壁，北東壁にそれぞれ大形の地山礫が露出している。ピットは８本検出されたが北西壁，南東壁に併行するピット列が柱穴とみられ，ほぼ第２号住居址に併行していたようである。焼土は西側コーナー付近に重複して２ヶ所



第59図　月の輪下遺跡全体図



第60図　第１号住居址および土坑群実測図

に検出されたが，上面の焼土は住居址廃棄後のものとみられ，下層の焼土が炉址と判断できた。また覆土中から部分的に木材やカヤ状の炭化物が出土した。

第５号住居址

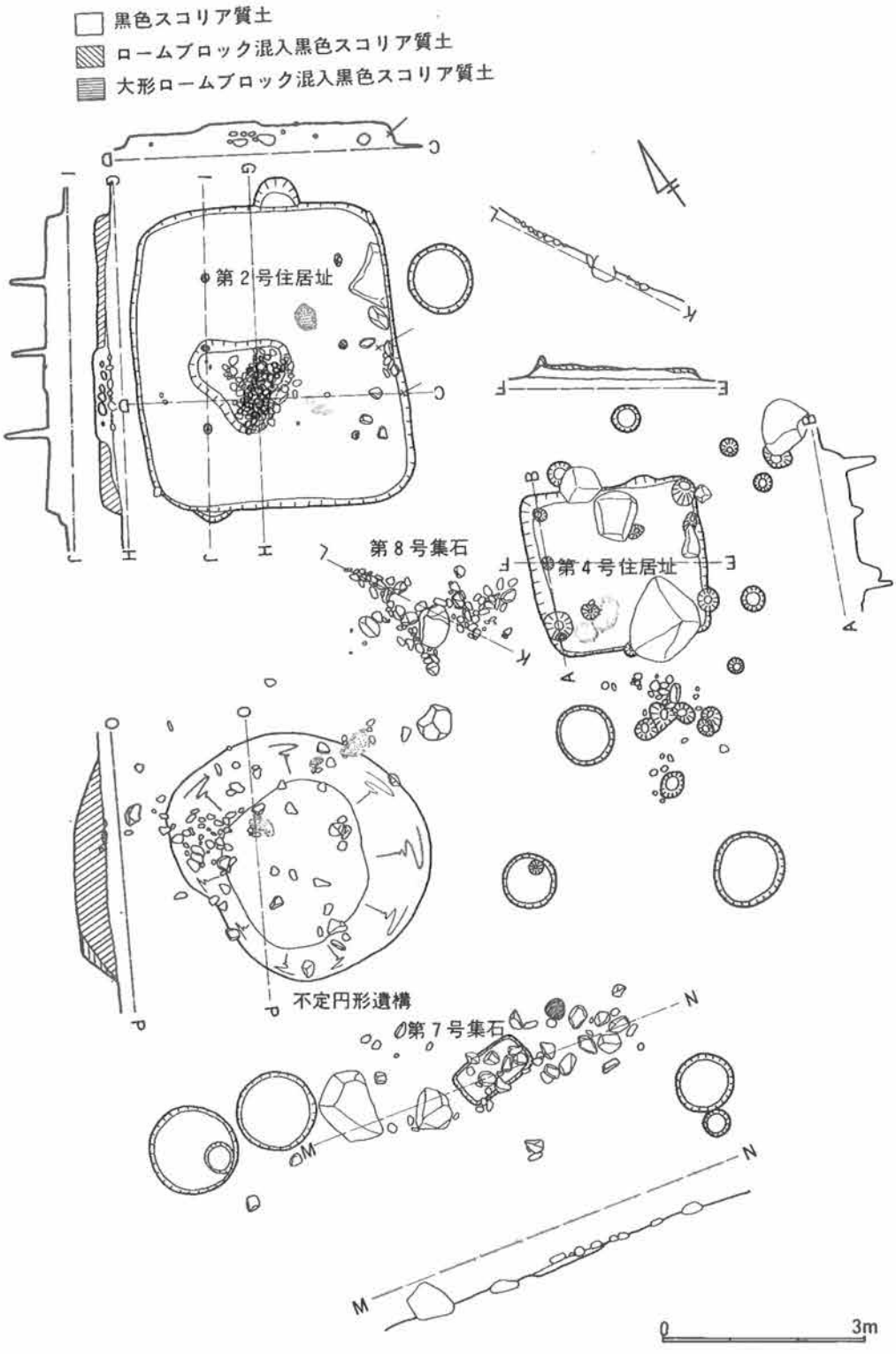
調査区西端に単独で位置している。方形の平面プランを呈しており，北西壁，南東壁に併行する３本のピット列があり，柱穴とみられる。床面は二重構造を有せず，この中央やや西側から非常に良好な焼土が検出され，これが炉址と判断できた。

本住居址内からも第１号集石とした集石遺構が検出された。本例も同様に床面から 10 ～ 20 cm の覆土上に築かれているが，さらにこの集石が埋没した上に，新たに集石を築いているようであり，この集石は明らかに２枚に分離できる。

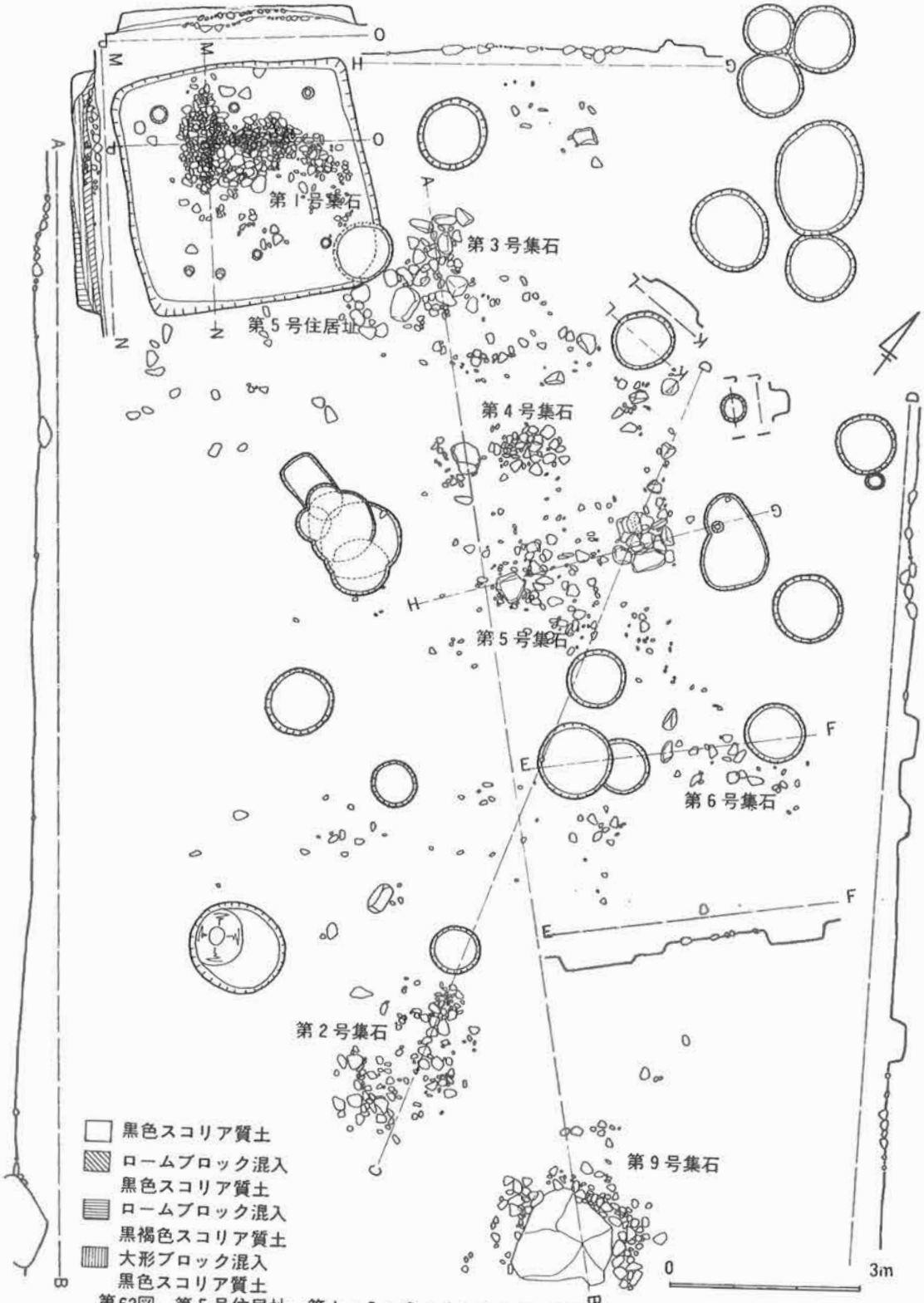
不定円形土坑

第１・２・４号住居址に囲まれた位置に径3.5m 前後の擂り鉢状の断面形状をした不定円形の土坑があった。埋土内に多量の礫を含んでおり，覆土上面には２ヶ所に焼土が厚く堆積しており，木材，カヤ状の炭化物も多量に含んでいた。

本土坑内から同時期と判断できる土器片が１，２点出土しており，ほぼ住居址群および集石遺構と同様期のものとしてよかろうが，その性格や用途は不明といわざるを得ない。　（平林）



第61図　第2・4号住居址，不定円形土坑，第7・8号集石および土坑群実測図



第62図　第5号住居址，第1・2・3・4・5・6・9号集石および土坑群実測図

(2) 集石遺構（60～62図，図版第62～65）

調査区のほぼ全域に玄武岩質の地山礫が集積する個所がみられ，ここには住居址群と同時期と判断される土器片などの遺物が認められたことから，これをほぼ同時期の集石遺構とし11個所の群を認めた。これらの集石遺構は，分布状況からほぼ中央で南北に分割できるようであり，北半は個々の集石がほぼ一定の間隔をおいているのに対し，南半部分はほとんど礫のとぎれがなく散在しており，全体として配石を構成しているかのようにもみえる。この11ヶ所の集石を第1～11号集石と命名したがもちろん見方によってはその分割を再編し得る可能性は残る。これらをその形状から大別すると次のようになる。

①礫が散在する状態の第6・7号集石

②礫を敷きつめた状態の第2～4・8号集石

③礫を積み重ねた状態の第1・5・9・10・11号集石

このうち第1・10・11号集石は第5・1・2号住居址が廃棄された後にたぶん竪穴の形状が残存する状況で集石を築いたと理解してよいものと思われる。なかでも第1号集石では上・下2層の集石が認められ，下層の集石が埋没した時点で上層の集石が築かれたようである。重ねてそこを占地する何らかの制約の存在を推定し得るかもしれない。また，第9号集石は，その中央部で地山中に包含されて露出したきわめて大形の自然礫を利用してその周辺を集積するという特徴を有した。なかでも第7・12号集石下から，たぶんそれに伴うらしい不定形の浅いピットが検出されたが両例ともいわゆる土坑とは言い難いものであった。その他，これらの集石遺構の性格を明確に判断できる材料はなかった。（植松）

集石名	規模	方向	形態	位置	備考
第1号	約2.9×2.0m	南北	略不定楕円形	第1号集石住居址内	第1号集石住居址上面，礫を積み重ねている。
第2号	2.8×1.5	南北	不定楕円形	6号の南東	さらに2群に分割可能か？
第3号	2.8×2.1	南北	楕円形	1号の東	第1号に連続して
第4号	4.0×1.2	南北	楕円形	3号の東	第1号に連続して
第5号	3.0×2.2	南北	楕円形	4号の東	第1号に連続して
第6号	2.4×1.2	南北	楕円形	5号の東	第1号に連続して
第7号	4.8×1.4	東西	楕円形	不定楕円形遺構の南	集石中粘土塊2個所あり，礫下に不定形ピットあり
第8号	2.6×1.6	東西	不定楕円形	不定楕円形遺構と第4号住との中間	不定形遺構・第4号住居址との併存不能
第9号	3.0×2.5	東西	半円形	2号の北東	1.7×1.4mの地山の礫を中心にして
第1号住居址内	2.0×1.0	特になし	半円形	第1号住居址内	第1号住居址の上面
第2号住居址内	1.3×1.0	特になし	三角形	第2号住居址内	第2号住居址上面，東壁側にも配礫，礫群下に不定形ピットあり

第30表　集石遺構一覧表

2　遺　物

本遺跡の主な遺物としては，土器類・鉄器類および石器類がある。

(1)　土器類（第63図，図版第96）

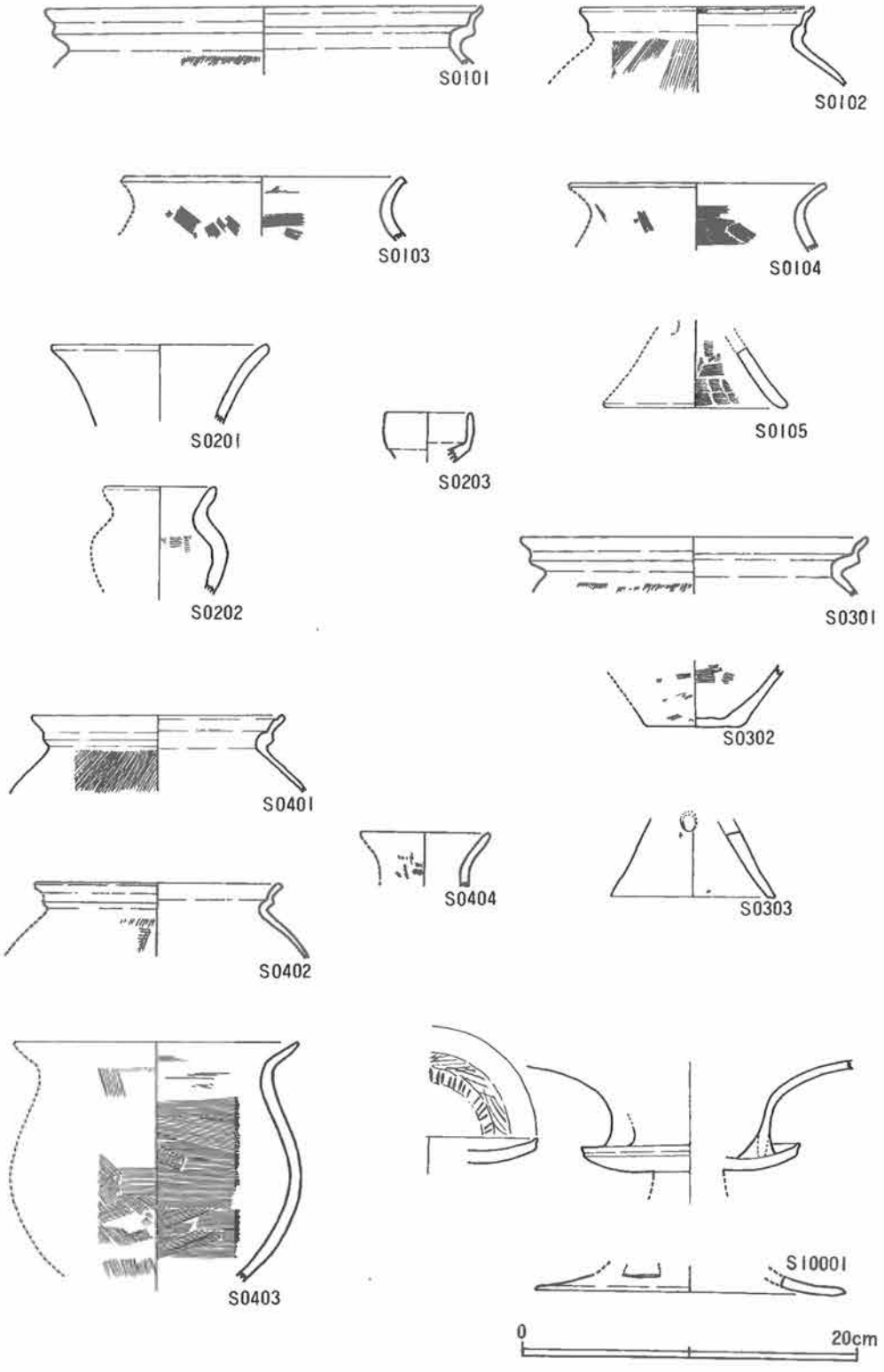
月の輪下遺跡

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
S0101	甕A4	— — —	胎土　石英，石粒，金雲母多い 焼成　良 口唇～頸 色調　淡黄褐色～暗黄褐色	外面は口唇ヨコナデ。胴部左下ナナメハケ（6本/1cm） 頸部オサエ 内面はヨコナデ。胴部口縁部の接合部に指先でおさえた痕跡	口縁　1/10存 内面　頸部にススつ付着
S0102	甕A4	13.2 — —	胎土　砂粒，石英，金雲母多し 焼成　良好 色調　赤褐色	外面は口縁ヨコナデ。肩部左下がりのナナメハケ（6本/1cm） 内面はナデ。胴部口縁部の接合部に指先でおさえた痕跡	口縁部　1/8欠けている
S0103	甕D2	— — —	胎土　長石多い砂粒若干の金雲母を含む 焼成　良 (外)　(内) 色調　暗茶褐色　暗褐色	外面は右下ナナメハケ（18本/1cm） 内面は口縁ナデ。頸部ヨコハケ。胴部右下ナナメハケ	外にススつ付着 1/8存
S0104	甕D2	— — —	胎土　金雲母，長石等を含む砂質のもの 焼成　良好 (外)　(内) 色調　茶褐色　黄褐色	外面は口唇部～頸，ヨコナデ。頸部～肩部右下がりナナメハケ（10本位/3mm） 内面は口縁部～頸，ヨコナデ。頸部～肩部，胴部，口縁部，接合部の指先の痕跡の上をヨコハケ。肩部右下がりのナナメハケ（9本/1cm）	口縁部　1/7存
S0105	高杯	— — —	胎土　大きめの砂粒や長石を多量に含む 焼成　普通 (外)　(内) 色調　暗橙褐色　暗赤褐色	外面はタテナデ 内面はヨコハケ（10本/1cm）	1/4存 2孔現存
S0201	壺D	▲ — —	胎土　砂粒多し 焼成　普通 (外)　(内) 色調　淡橙褐色　淡青灰色	外面はタテハケ（8本位/1cm） 内面はヨコハケ（6本/1cm）	口縁　1/6存
S0202	小甕B	— — —	胎土　細かい砂粒を若干含む 焼成　良好 色調　暗黄褐色	外面は口縁ヨコヘラミガキ。肩タテヘラミガキ。胴ヘラケズリ 内面は口縁ヨコヘラミガキ。胴ヨコハケの上を指でおさえている	1/3存
S0203	小型土器F	— — —	胎土　小石を含む 焼成　普通 口縁　胴 色調　橙褐色　暗橙褐色	外面は肌あれ激しく，タテハケかも 内面は肌あれ	二次加熱あり 1/4存 在地典型タイプ

第31表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
S0301	甕A	— — —	胎土　石英，砂粒多い。金雲母多く含む 焼成　良好 色調　暗褐色	外面はヨコナデ，肩左下がりナナメハケ（6本/1cm） 内面はヨコナデ，オサエ	外面にスス付着 口縁部　⅛存
S0302	壺	— — 5.65	胎土　細かい砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　㊥茶褐色で一部暗褐色 ㊦暗褐色	外面はヨコハケ，左下がりナナメハケ(5本/1cm) 上半タテヘラミガキ，ハケの上ナデ 内面はヨコハケ，ヘラケズリ	底部完形
S0303	高杯	— — —	胎土　砂粒多し，石英粒若干含む 焼成　普通 色調　赤褐色	外面はワラ等の繊維によるオサエ？　肌あれ 内面はヨコハケの上にワラ等のオサエ(10本/1cm)	二次加熱あり 穿孔　1
S0401	甕A	14.3 — —	胎土　石英粒，小石多し，金雲母若干 焼成　良好 色調　黒褐色	外面はヨコナデ（7本/1cm）　左下がりのナナメハケ 内面はヨコナデ，接合部指のオサエ	外面スス付着 口縁部　⅙存
S0402	甕A	14.8 — —	胎土　金雲母，長石等を含む砂質のもの 焼成　良好 色調　㊥赤茶褐色　㊦黄褐色	外面はヨコナデ，左下がりのナナメハケとヨコハケ（8本/1cm） 内面は口縁沈線あり。ヘラケズリの後ヨコナデ	口縁　⅓存 外面スス付着
S0403	甕D	17.0 — —	胎土　砂粒，石英を含む 焼成　普通 色調　黒褐色	外面は各方向のハケ（8本/1cm）　ハケの上にヨコナデ 内面はタテ以外の各方向のハケ	外面スス付着 ¼存
S0404	小型壺 D	8.7 — —	胎土　比較的細かな砂粒をかなり含むもの 焼成　良好 色調　黄褐色	外面のヨコ以外の各方向のハケ（12～13本/？） 内面は細かなヨコハケ　ナデ	口縁　⅓存

第32表　土器一覧表


S0101
S0102
S0103
S0104
S0201
S0105
S0203
S0202
S0301
S0302
S0401
S0404
S0303
S0402
S0403
S10001
0
20cm

第63図　土器実測図

III　南部谷戸遺跡

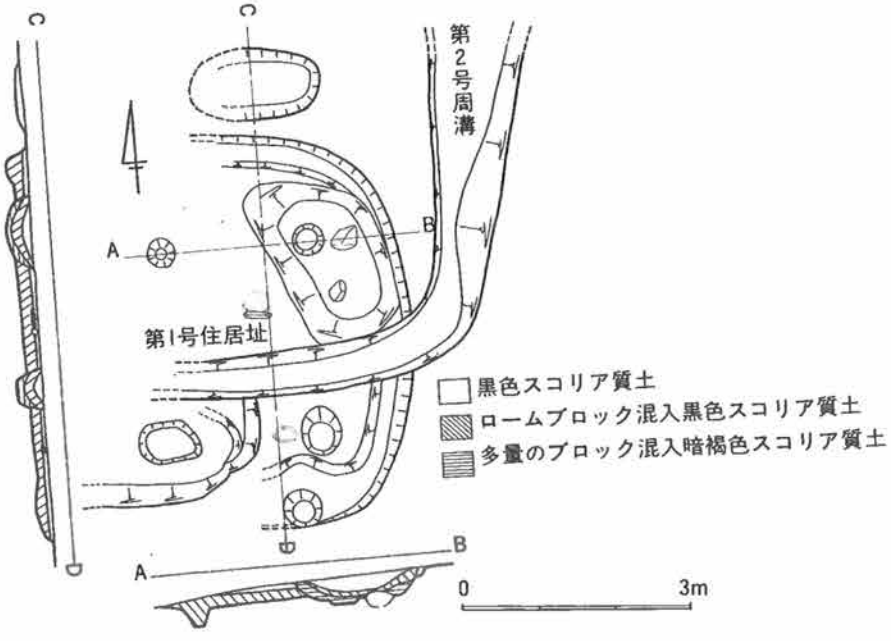
1　遺　構

本遺跡で発見された遺構は，住居址12基，方形周溝墓４基とそれらに伴う数基のピット状遺構である。その重複関係は方形周溝墓が住居址群を切ってより新しいことが，層位関係から確実であった。

(1)　住居址

住居址は12基を数えたが，傾斜地であり，かつまた表土が浅いことから，いわゆる流失といわれる状況が多くみられ，さらに住居址間や方形周溝墓との重複関係がはげしく，住居址の全容を明確に知ることのできた例は少ない。このため各住居址にはいくつかの不明確な部分がある。

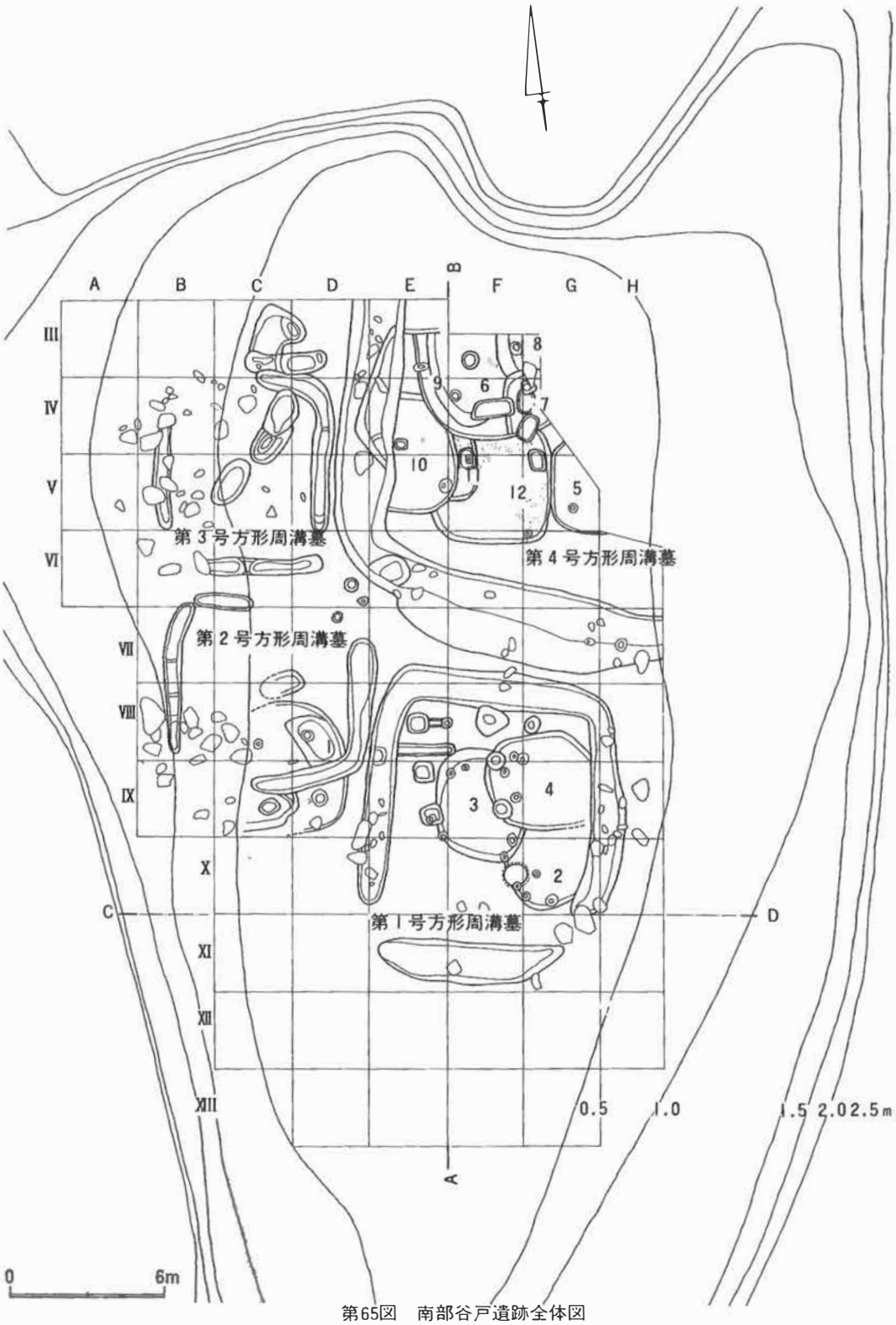
第１号住居址　(64図，図版第74)



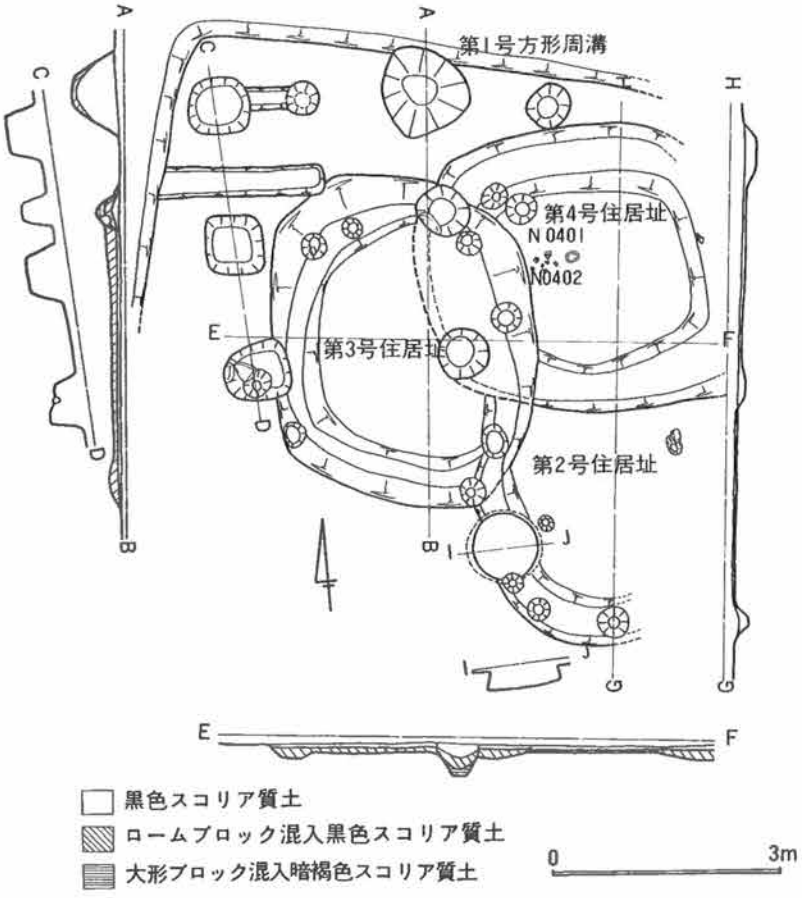
第64図　第１号住居址実測図

調査区南西側の第２号方形周溝墓の南溝によって南北に２分されているが他の住居址との重複関係は有していない。

胴張りの隅丸方形の平面プランをもつようであるが西半が流失してしまっており明確でない。



第65図　南部谷戸遺跡全体図



第66図　第２・３・４号住居址実測図

柱穴状ピットは規則的に４本あり，流失部分からも検出された。また東壁と南壁際に土坑が２基みられた。床面は二重構造をしており，掘り方は周溝状に一周するようであり，床面上に２ヶ所に焼土がみられるが，中央部に礫を伴った良好なものが炉とみられる。

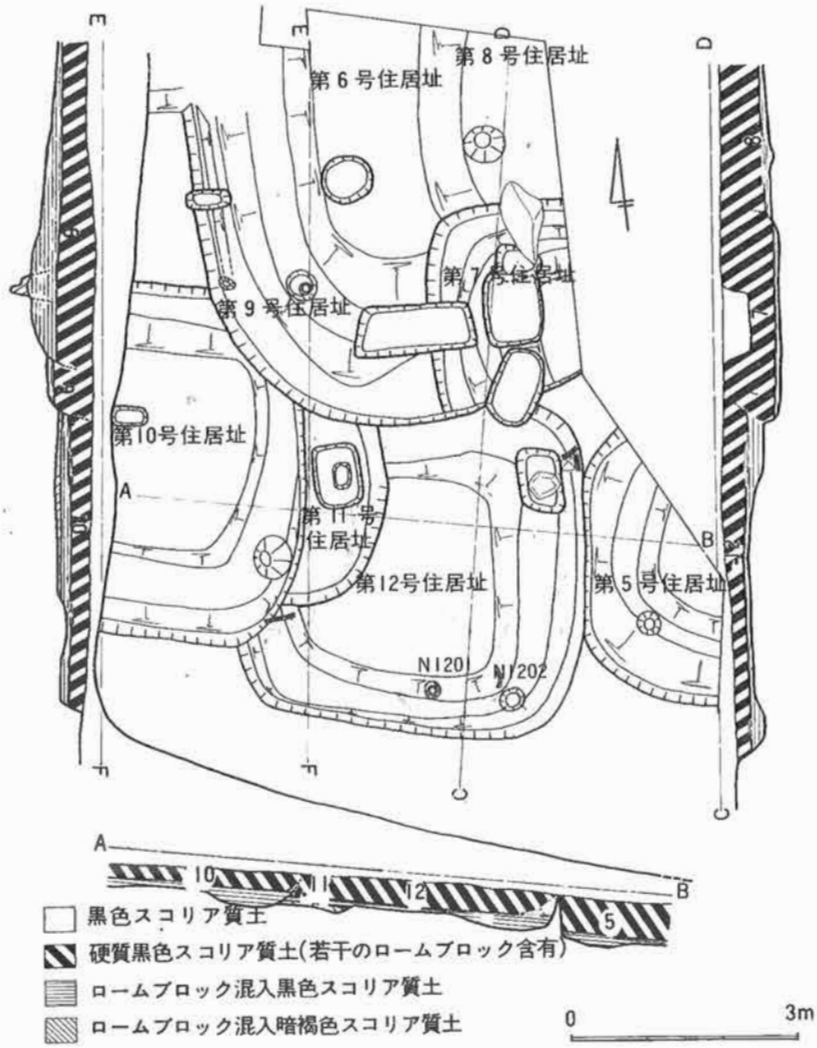
第２・３・４号住居址　(66図，図版第74・75)

調査区南東側の第１号方形周溝墓に囲まれ，３基が重複しあって存在する。この重複関係は第３・４・２号住居址の順序で新旧がみられる。

平面プランはすべて胴張りの隅丸方形とみられるが，主軸方向が第３号と第４号住居址では90°異なる。各々の住居址は何基かのピットを有するが，明らかに柱穴と判断できるものはない。またとくに第２号住居址の西壁を切って袋状のピットがあったが，この住居址に所属するものであろうか。床はすべて二重構造をもっており，周溝状に一周するようである。炉址は第４号住居址のみ中央に炉石をもつ焼土がみられたほかは確認されなかった。

第５・６・７・８・９・10・11・12号住居址（第67図，図版76～78）

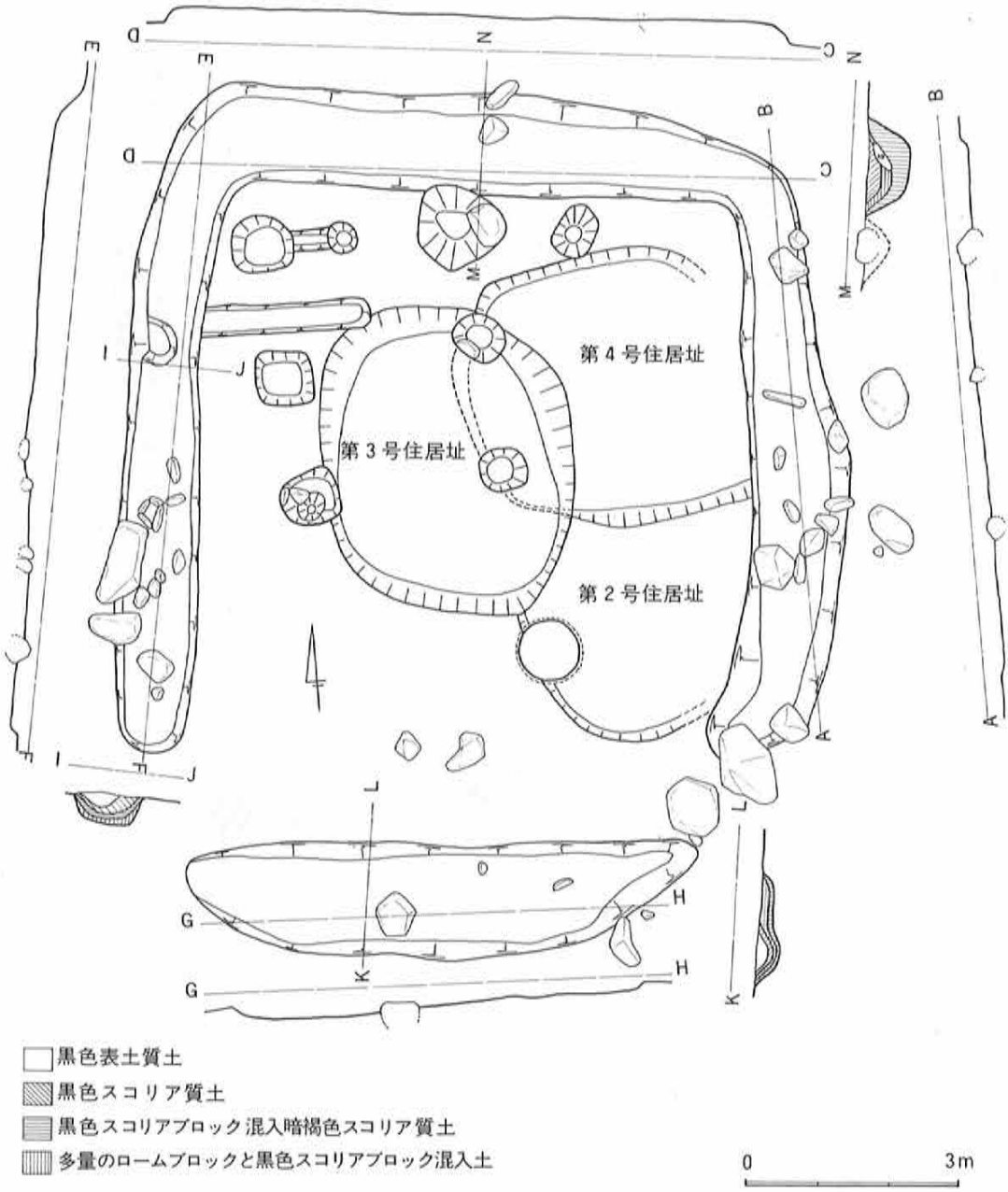
本住居址群は調査区北東側の第４号方形周溝墓に囲まれて過密な重複関係をもち分布している。



第67図　第5・6・7・8・9・10・11・12号住居址実測図

これらの新旧関係は，第5号住居址が，第12号住居址と接しているのみで重複関係を有しないが，これ以外は第7・8・6・9・10・12・11号住居址の順序で新旧関係が知られた。

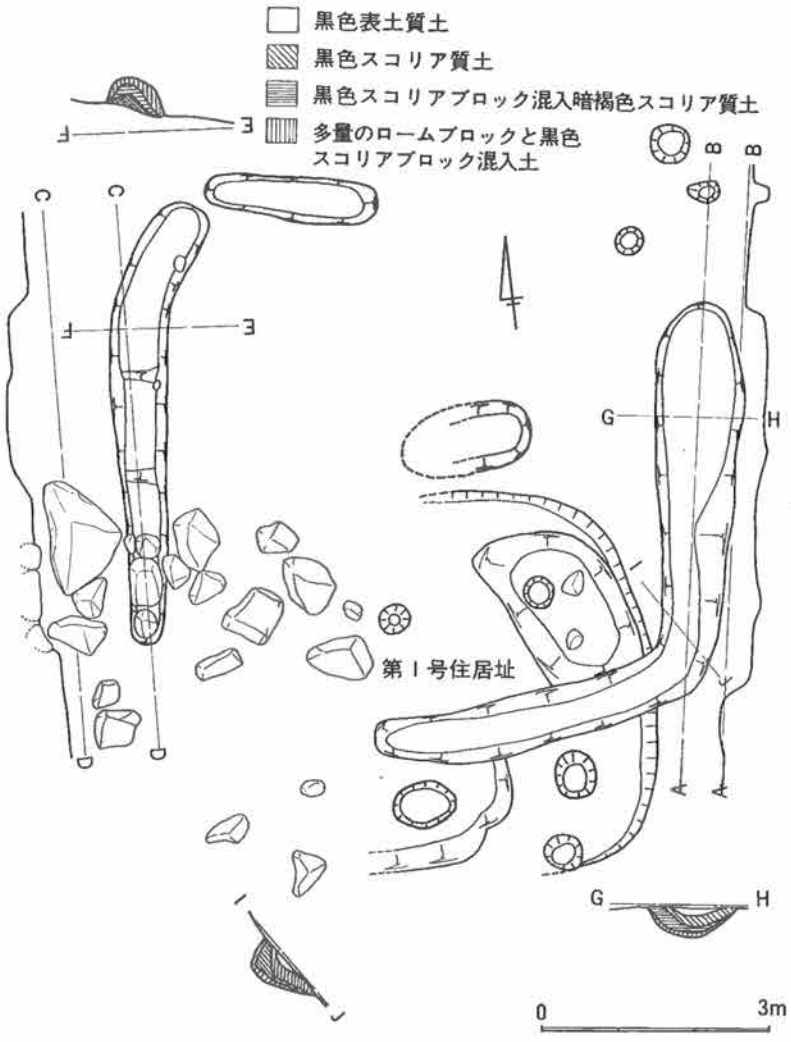
第5～8号住居址は北東側の発掘区外にのびており，また第10号住居址は第4号方形周溝墓に切られていることから全様を握むことができなかったが，ほぼすべての住居址が胴張りの隅丸方形の平面プランを有するようである。また1～2基のピットをもつ住居址もみられたが明らかに柱穴と判断できる例はない。すべての住居址の床面は二重構造をもっていたようであるが，第11号住居址のみ残存部が少なく確認できなかった。また第7・9号住居址は，周溝の掘り方を壁から数10cmあけて掘っており他と異なっていた。明らかに炉とみることができたのは第5・10号住居址の炉石を伴った焼土だけであった。第8・12号住居址の床面上に焼土が広く堆積しており，とくに第12号住居址は炭化物の出土も多く火災の可能性が強い。



第68図　第1号方形周溝墓実測図

(2)　方形周溝墓

本遺跡から方形周溝墓4基を発見したが，これらは残丘状に残った本遺跡北側よりに，主軸をほぼ南北，東西方向に合せ，4基が接するように整然と並んでいたが第4号周溝のみ，その大部分が発掘区外に出ていたことから未調査部を残している。



第69図　第2号方形周溝墓実測図

第1号方形周溝墓（第68図，図版第69）

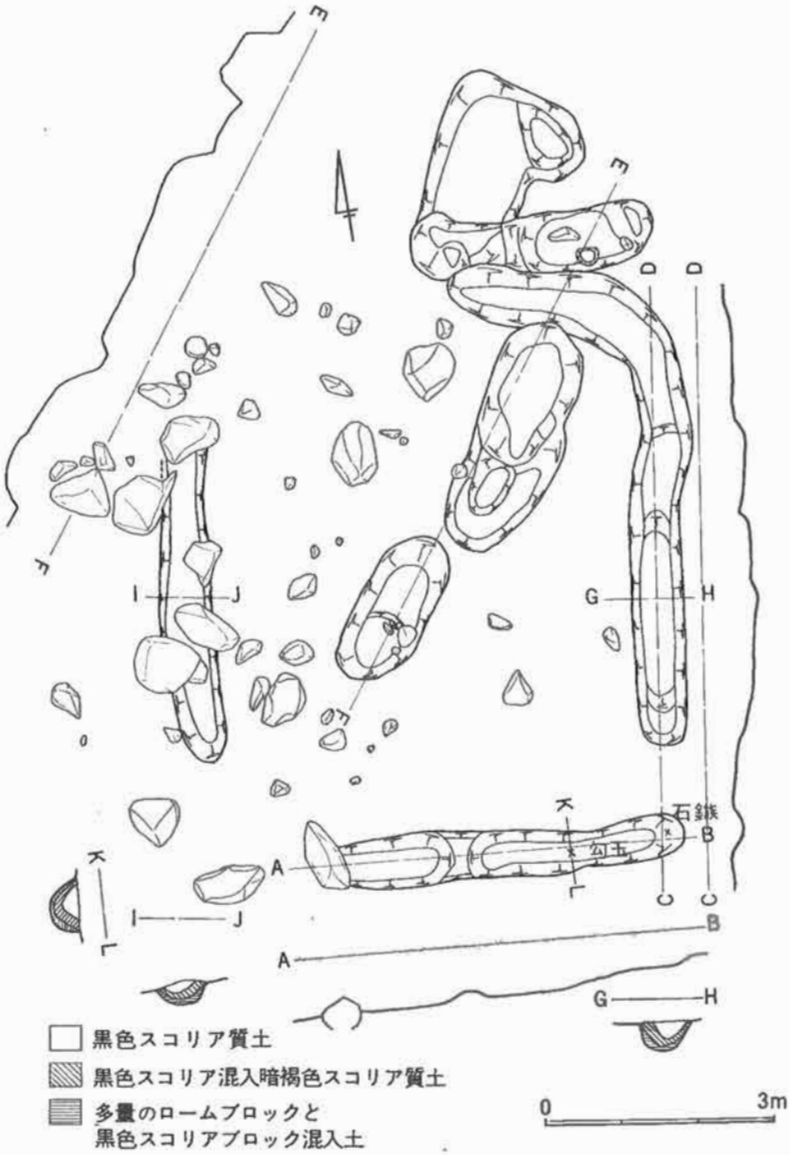
調査区南東部に第2・4号住居址を切って位置する。最大巾12.1mを測るやや大形の方形周溝墓であり，南東側，南西側コーナーに土橋的構造をもつが，本遺跡は特に大形の地山礫が部分的に多く，地山が掘り難く，周溝も浅いことから，流出してしまった可能性もあろう。主体部とみられる土坑も検出されなかった。流出したのであろうか。

第2号方形周溝墓（第69図，図版第70）

調査区南西部に第1号住居址を切って検出された。最大巾8.3mを測り，北東側と南西側に広い陸橋をもっている。中央に舟底状の土坑があり，これが主体部とみられる。

第3号方形周溝墓（第70図，図版第70・71）

第2号方形周溝墓北側に位置しており，最大巾8.0mを測る本遺跡のうちで最小の方形周溝墓

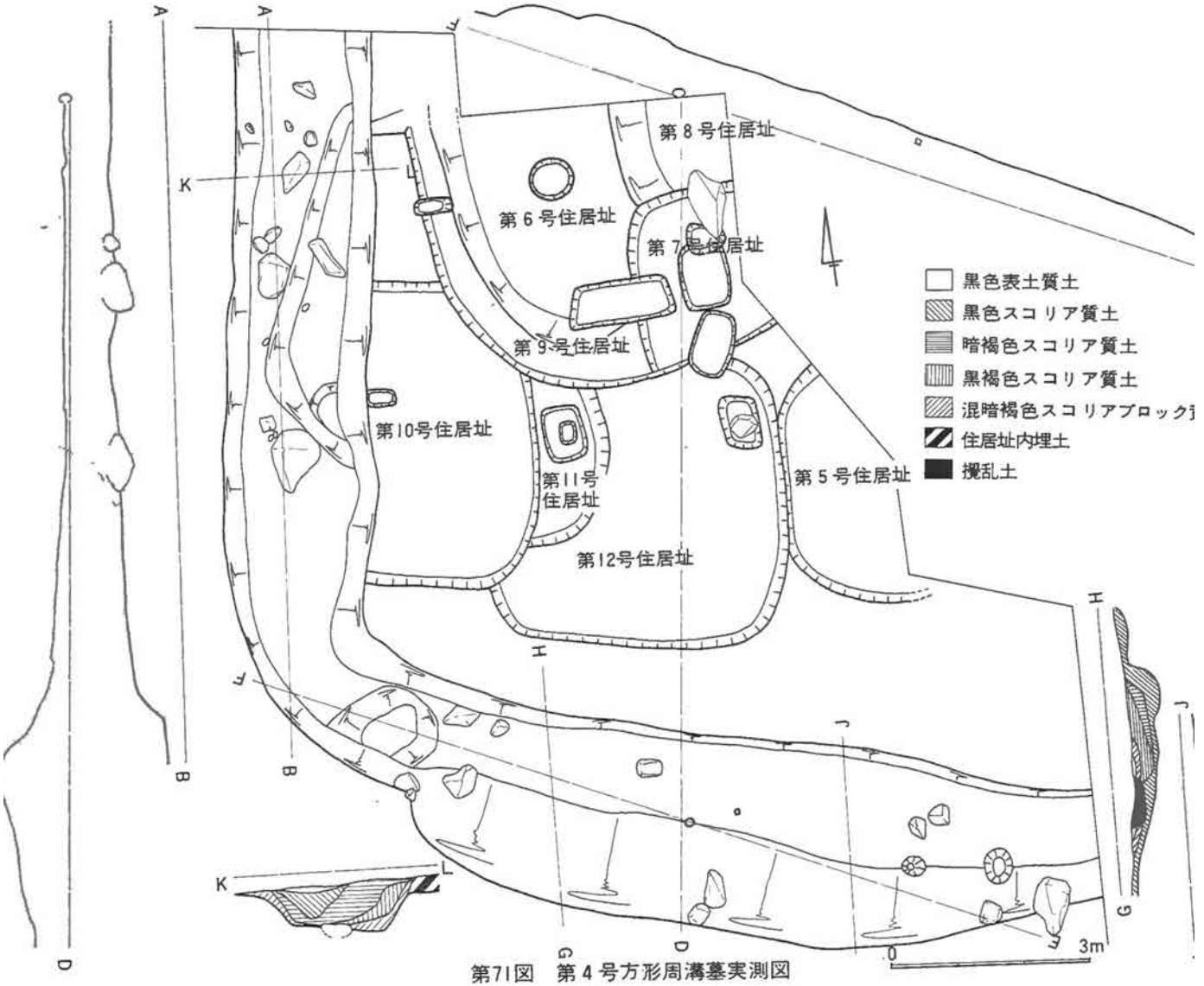


第70図　第３号方形周溝墓実測図

である。陸橋は北西側，南東，南西コーナーの３ヶ所にある。舟底状の土坑が南西から北東方向に２基並んで検出されており，これが主体部とみられる。また南溝内覆土上面から硬玉製の勾玉，磨製石鏃が出土した。

第４号方形周溝墓（第71図，図版第69・72・73）

調査区北東部から第10号住居址を切って，本遺跡最大の方形周溝墓が検出されたが，北東側が調査区外にのびていたことから全体のほぼ３分の１ほどを調査したにすぎない。土橋的構造は発掘区でみるかぎりなく，また本周溝墓はとくに他とは異なり，地山を削り出して中央部分を高くし



第71図　第4号方形周溝墓実測図

ているようである。周溝に囲まれた部分の第5～12号住居址を切って土坑が5基分布していたが，主体部は明らかでない。

(3) その他の遺構

E・F—Ⅷ・Ⅸ区に，南北3基ずつ2列並ぶ大形のピット6基が分布している。南東側ピットのみ，その埋土が異なっていたとのことであるが，あるいは別時期の掘立柱建物址であるかもしれない。（平林）

2　遺　物

本遺跡の古墳時代遺物としては，土器類・鉄器類・玉類がある。

(1)　土器類(第72・73図，図版第96・97)

南部谷戸遺跡

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
N0101	壺	— — (8.5)	胎土　細かい砂量をかなり多く含むきめの細かいもの 焼成　普通 色調　(淡)黄褐色	外面は肌あれ，上半 タテのヘラミガキ。下半 ヨコのヘラミガキ？ 内面は肌あれ，下半 ヨコのハケメ？	底部1/6　胴下部 1/4存 在地ツボ典型タイプ
N0301	甕	— — —	胎土　細かい砂粒を混じえるが，そんなに多くはない 焼成　普通 色調　(外)淡褐色　(内)淡橙褐色	外面はタテハケ（9本/1cm)。一部 磨耗する 内面，底面はナデか。脚部 ヨコハケ	1/2存 二次加熱あり
N0302	壺C	40.6 — —	胎土　細かい砂粒を多量に混じえる 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外，内面共に肌あれ激し	口縁部　1/6存 在地ツボ典型タイプ
N0401	甕	— — 7.7	胎土　細かい砂粒をかなり多く混じえる 焼成　普通 色調　暗赤褐色	外面は粗いタテハケ（7本／1cm)の上に上半 に細かいヨコハケ（15本/1cm) 内面は脚部 内面は細かいヨコハケ，その上に一部ナデあり（15本/1cm) 胴部 は粗いヨコハケ（7本／1cm)	脚部 略完存 二次加熱あり
N0402	壺	— — 12.2	胎土　細かいもの(多)と小さいもの(少)の両者があるが全体にかなり多く砂粒あり 焼成　普通 色調　(外)淡橙褐色　(内)灰白色	外面は肌あれ 内面は底面「クモの巣状」のヨコハケ(12本/1cm) 胴部下半 は右下がりのナナメハケ（9本/1cm)	底部 1/3存 外面スス付着　底面木葉痕 在地ツボ典型タイプ
N1201	甕B	17.5 28.1 8.5	胎土　きめの細かいものに少し大きめの砂粒を混じえる 焼成　普通 色調　淡黄褐色	外面は口縁部右下がりのナナメハケ（9本1cm)であるが，端部はナデで面取りする 胴部は少しナナメのヨコハケであるが，下半に少しナナメのタテハケを施す 脚部も同じ（少しナナメのタテハケ) 内面は全面に少しナナメのヨコハケを施す ただし底面付近だけは右下がりのナナメハケ	口縁部から胴部上半 1/2欠 脚部も1/2，外面にスス付着 脚部 の欠加熱，端部 面取り
N1202	甕B	20.7 — —	胎土　きめの細かい精選されたもので細砂のみを混じえる 焼成　(比較的)良好	外面は胴下半にヨコハケ（粗いが強くない5本/1cm）を何回か重ねて施した後，口縁部から胴部全体にタテハケをつけ，最後に口縁部を横にナデて仕上げる 内面は胴部，指頭によるオサエの後，丁寧にナデて平滑にする 口縁部はヨコハケを施した後端部のみをヨコナデ	胴下半 以下欠 端部 面取り 外面スス付着
N1203	甕F	— — 4.5	胎土　比較的きめ細かいものに大きめの砂粒をかなり多く混じえる 焼成　良好 色調　(外)黄褐色～黄(茶)褐色 (内)黄褐色～暗褐色	外面は底部 付近はヨコハケ（12本/1cm)，その上はヘラ調整か 内面はナデで平滑に仕上げる	底部 完存 円環貼付けの平底手法 内外面スス付着

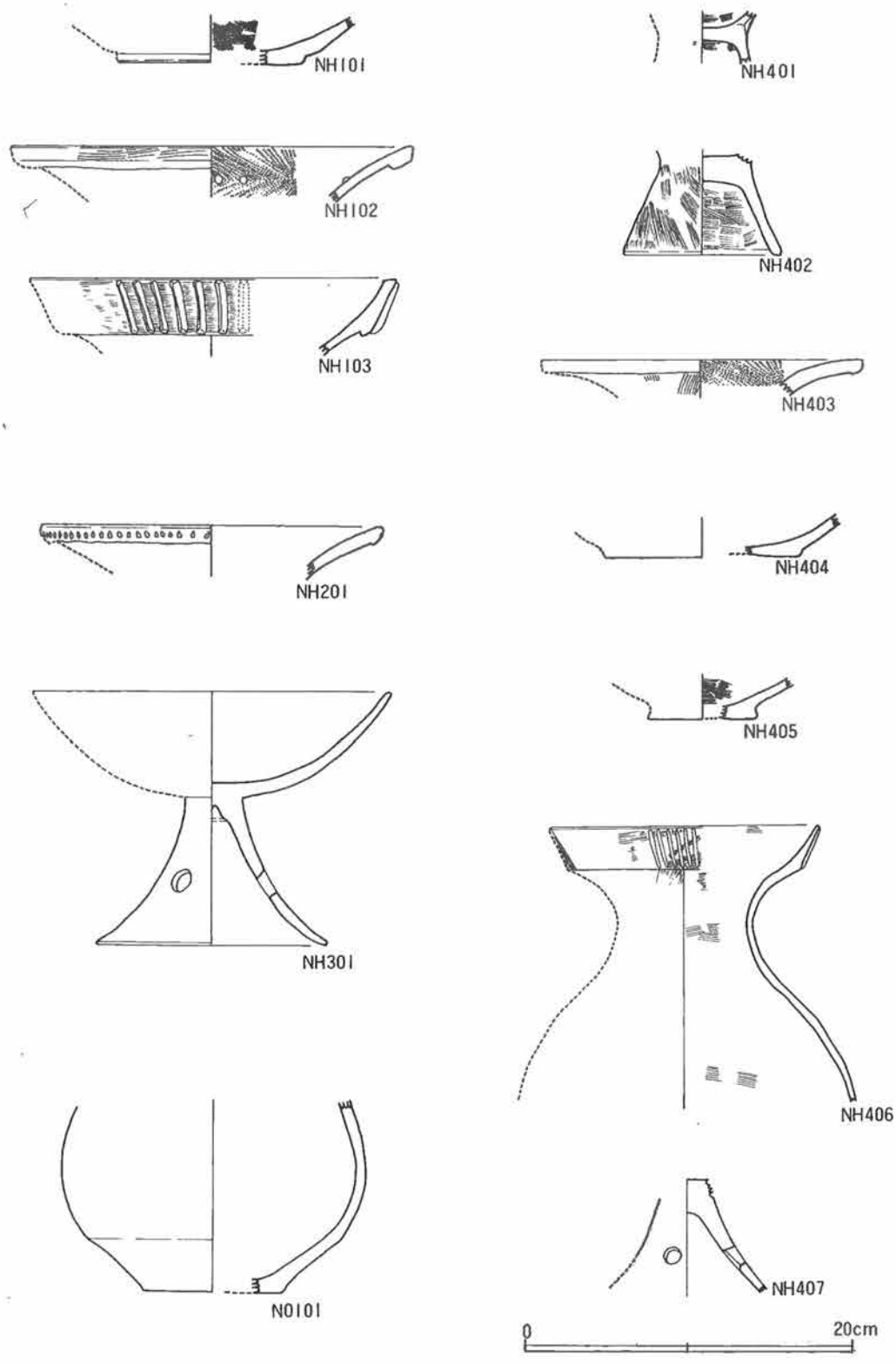
第33表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
N(05) —(12) 01	甕	— — —	胎土　細かい砂粒をかなり混じえる 焼成　普通 色調　㊥黄褐色～暗褐色 ㊦胴部は暗褐色，脚部　は淡茶褐色	外面はタテハケを重ねる（6～7本/1cm） 内面は胴部　は各方向のハケ後ナデ 脚部　はヨコハケの後ナデ。底面ナデ	接合部　1/3存 二次加熱あり
N(05) —(12) 02	甕D2	15.4 — —	胎土　細かい砂粒を多量に混じえる 焼成　普通 色調　暗橙褐色	外面はタテハケ。口縁端部　にヨコハケ 内面はヨコハケ（10～11本/1cm）	口縁部　1/8存 二次加熱あり
N 20001	高杯	— — —	胎土　細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成　普通 色調　㊥暗橙褐色　㊦淡青灰色	外面は肌あれ 内面は肌あれ。脚部　はヘラケズリ？	接合部　付近 完存
NH 101	壺	— — 11.5	胎土　細かい砂粒を多量に混じえる 焼成　普通 色調　㊥(淡)橙褐色　㊦白灰色	外面は肌あれ 内面はヨコハケ（10本/1cm）	1/4存 在地ツボ典型タイプ 木葉痕あり
NH 102	壺B3	24.5 — —	胎土　細かい砂粒を多量に混じえる 焼成　普通 色調(淡)橙褐色	外面は肌あれ，端部　にヨコハケの痕跡 内面は羽状 細縄文(単節)＋円形 浮(2個以上)	1/6存 在地ツボ典型タイプ
NH 103	壺　B	22.4 — —	胎土　細かな砂粒を多量に含む 焼成　普通 色調(暗)黄褐色	外面は下位の器体は右下りのナナメハケ(7本/1cm)の後ヨコヘラミガキ，この上に幅広の粘土帯を重ねた上位の器体はヨコハケの後，棒状 浮文をナデて上につける 内面は肌あれ一部　にヨコハケの痕をみせる	1/6存 内外面赤彩らしい 棒状 浮文は7本以上
NH 201	壺　B	20.9 — —	胎土　小さな砂粒をかなり多く混じえたシルト的なもの（粘土質の強い） 焼成　普通 色調　淡橙褐色	外面は肌あれ，口縁端部　に刻み目(ヘラ 内面は肌あれ	口縁部　1/6存 在地典型タイプ
NH 301	高杯B	21.9 15.4 14.0	胎土　細かな砂粒のみを混じえるよく精選されたもの 焼成　普通 色調　黄褐色-橙褐色	外面，内面，杯部　は端部　ヨコナデの後かく丁寧な放射状のヘラミガキ 外面，脚部も端部　ヨコナデの後，細かく丁寧なタテのヘラミガキ 内面、脚部　はヨコヘラケズリの後端部　をヨコにナデる	脚部　略完存杯部は2/3欠 3孔
NH 401	甕　B	— — —	胎土　小さな砂粒を多量に混じえる。シルト質の強いもの 焼成　普通 色調　暗(黄)褐色	外面は肌あれ 内面胴部　はヨコハケ脚部　は接合部　を指頭でオサエた後ヨコハケ（12本/1cm）	接合部　完存
NH 402	甕　B	— — —	胎土　細かい砂粒を多量に含みシルト質の強いもの 焼成　普通（やや不良） 色調暗(黄)褐色	外面は右下りのナナメハケ（8本/1cm） 内面はヨコハケ。胴部，脚部　の接合部　には指頭による圧痕を残す	脚部　完存

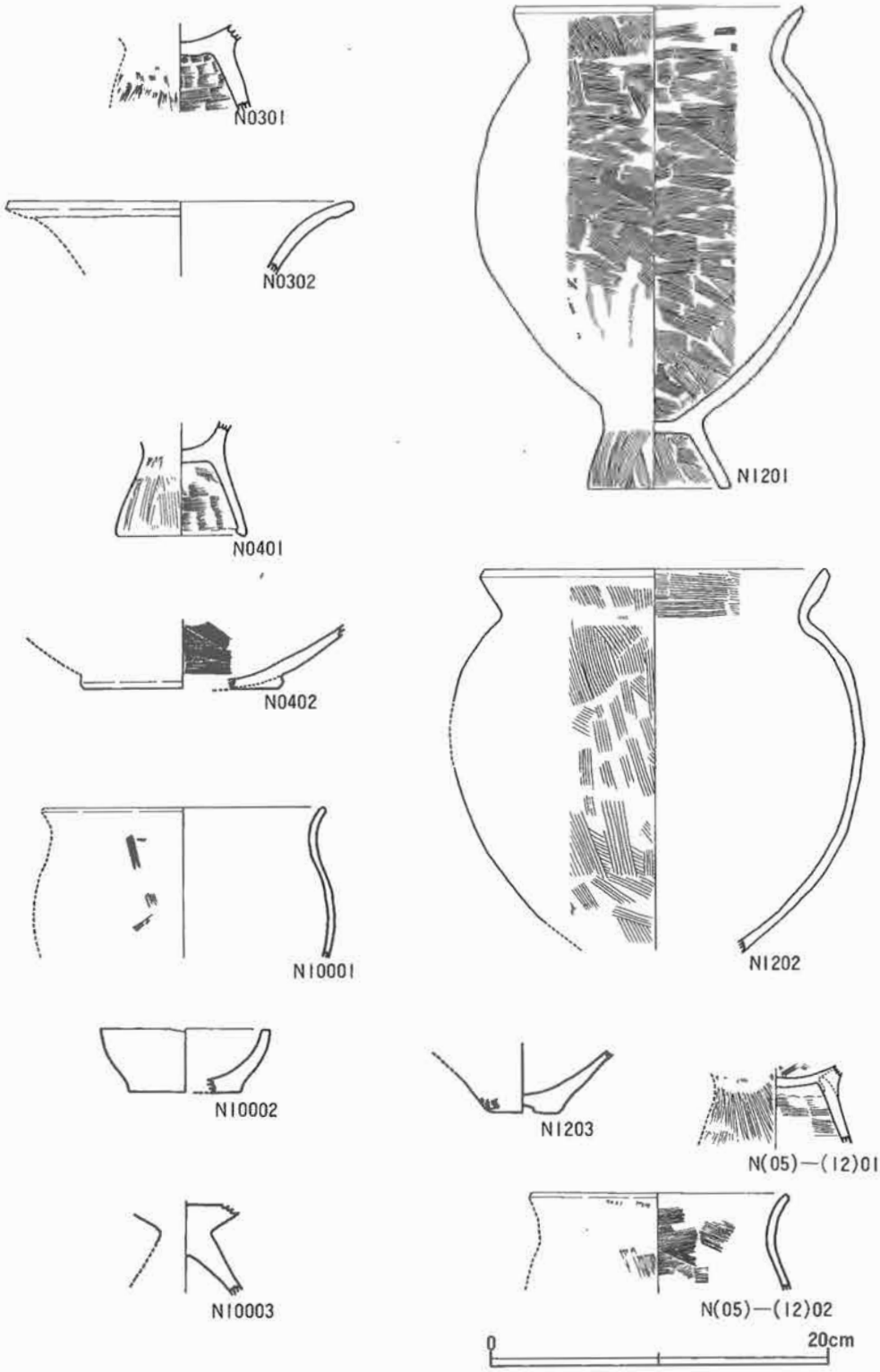
第34表　土器一覧表

土器番号	器形	口径 器高 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
NH 403	壺B3	19.6 — —	胎土　細かい砂粒をかなり混じえる 焼成　普通 色調　淡橙(黄)褐色	外面はタテハケ（6本/1cm） 内面は右下りの斜行縄文	口縁部　1/6存 在地ツボ典型タイプ
NH 404	壺	— — —	胎土　小さな砂粒を多量に混じえる 焼成 �外　㋔ 色調　淡黄褐色　青灰色	外面は肌あれ 内面は肌あれ	底部　1/3存 在地ツボ典型タイプ
NH 405	壺	— — 6.7	胎土　細かい砂粒を混じえるがそんなに多くはない 焼成　普通 色調　暗黄褐色	外面は粗いヨコのヘラミガキ 内面はヨコおよびタテのハケ（9本/1cm）	底部　1/8存 底面木葉痕
NH 406	壺B	16.6 — —	胎土　細かい砂粒を多量に含む少しシルト質のもの 焼成　普通 色調　表面は(淡)黄褐色，断面は白灰色	外面は口縁部下半にタテハケ（7～8本/1cm)上半はヨコハケ，なおヘラ描沈線（6本×4）あり，頸部以下は全体に肌あれ，(一部にヘラケズリらしい痕あり） 内面は肌あれが激しいが全体にヨコハケが認められる	半欠 在地ツボ典型タイプ
NH 407	高　杯	— — —	胎土　細かい砂粒を多量に含むいく分シルト的な感じのもの 焼成　良好 色調　暗黄褐色	外面は肌あれ（粗いタテのヘラミガキ？） 内面は上半ヘラケズリ（ヨコの)，下半はヘラ調整（？）	端部全欠 2孔現存，3孔か

第35表　土器一覧表


NH101
NH401
NH102
NH402
NH103
NH403
NH201
NH404
NH405
NH301
NH406
NH407
N0101
0
20cm

第72図　土器実測図


N0301
N0302
N0401
N0402
N10001
N10002
N10003
N1201
N1202
N1203
N(05)—(12)01
N(05)—(12)02
0
20cm

第73図　土器実測図

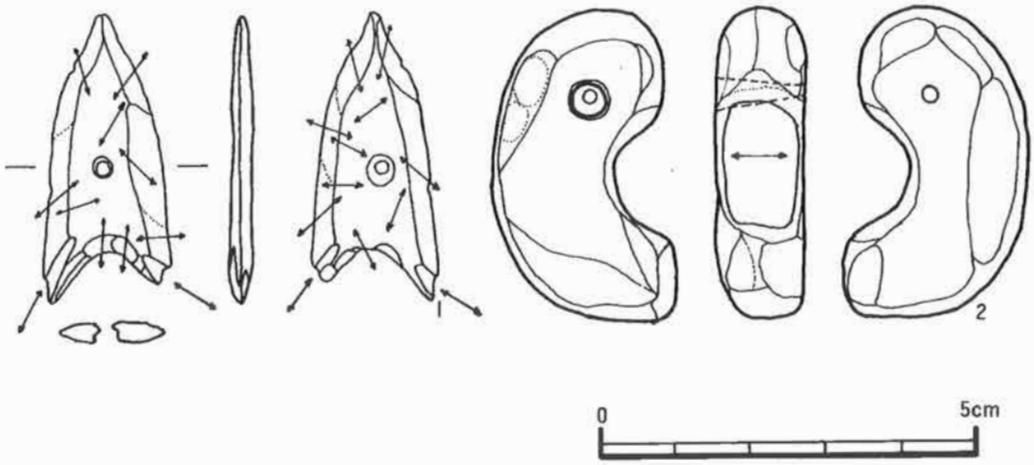
(2) 石器類（第74図，図版第103）

本遺跡の石器類としては第３方形周溝墓南東コーナーから出土した磨製石鏃（第74図１）１点がある。

径４㎜の円孔を有する全面磨製の石鏃である。脚部表裏にそれぞれ１条づつ，計４条の陥入条痕を有する。これは基部から先端部にかけての磨製作業ののちに溝状に磨って造り出されたものである。古墳時代の所産である。

(3) 玉類

本遺跡の玉類としては第３周溝内より出土した硬玉製勾玉（第74図２）がある。それは平砥石によると思われる，全面磨製品である。表面の加工擦痕は不明瞭であったが，湾入部には巾約0.5㎜の15条ほどの溝状加工痕が連続平行して観察できた。これは，砥石の稜部による加工痕であると思われる。（渡辺）

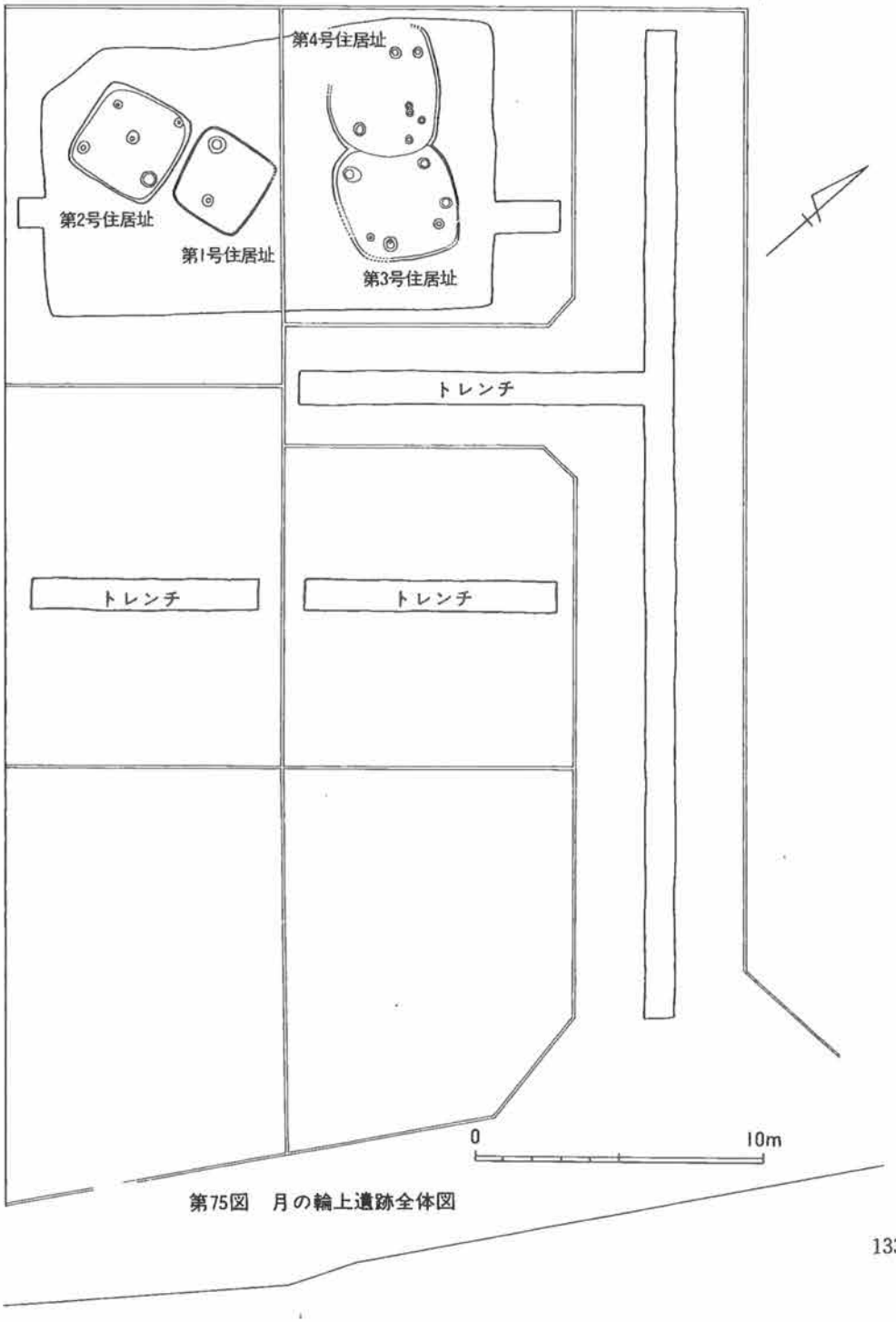


第74図　石器実測図

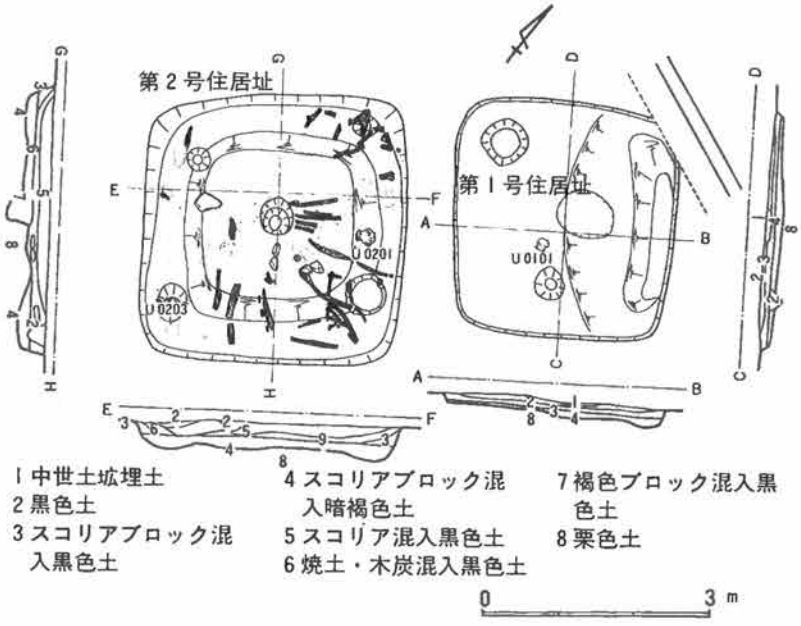
Ⅳ　月の輪上遺跡

1　遺　構

本遺跡の主な遺構としては，住居址4 基がある。



第75図　月の輪上遺跡全体図



第76図　第１・２号住居址実測図

(1)　住居址

４基の住居址のうち，第３・４号住居址は重複関係を存するが，その新旧関係は不明瞭であった。

第１号住居址　（第76図，図版第79・80）

調査範囲のほぼ中央部に発見された住居址で，北東隅を工事による攪乱でわずかに失うほか，完形にちかい。

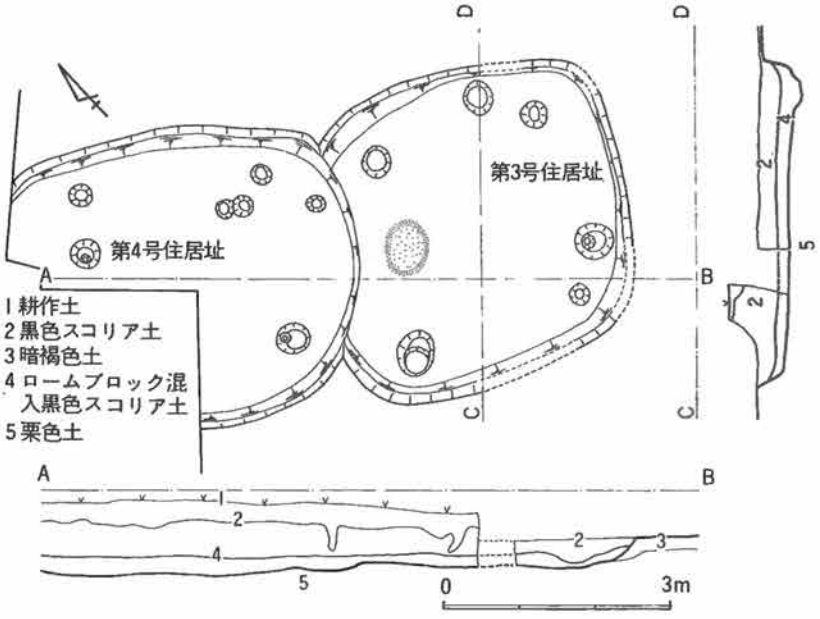
覆土は，栗色ブロックを含む黒色スコリア土で，そのほぼ中央部には80×60cmの楕円形プランを呈して，きわめて柔かい黒色土を主体とする落ち込みが認められた。いわゆる中世土坑と思われたが，その深さは５cm前後であり，痕跡を残す程度といえる。

床面はやや軟弱であるが，やや大きめの暗褐色土類が敷かれた状況で，覆土とは明瞭に区別された。その中央やや南よりに，小型壺１が発見されたが，炉址はみられない。ピットは，北西隅よりと中央部南よりに各１が発見されたが，前者はいわゆる貯蔵穴で58×56cm・深さ28cm前後であり，後者は径40cm余の柱穴状ピットである。その状況・位置からすれば，柱穴とは認めがたい。床面下には二重構造が認められたが，それは大きなスコリアブロックを含む暗褐色土で，その類型はＣ類タイプと認めてよい。

第２号住居址　（第76図，図版第80・81）

第１号住居址の南隣にあって，それよりやや大きく，長軸方位も若干西よりとなる。

この付近での土層堆積状況からすれば，表土下の大沢ラピリ層が遺構検出面となるのが基本で



第77図　第３・４号住居址実測図

あるが，本住居址の北東隅側の約４分の１ほどは大沢ラピリ下の暗褐色土層がプラン検出面となっていた。

床面は識別が比較的容易であって，全域に多量の炭化材・炭化カヤ・焼土等を載せている。明らかに火災を被った状況であった。炉址は床面中央部の南東よりにあって，わずかに床面を低くしたかのようにも観察できた。また，礫３個を伴って炉石と判断されたが，うち２個は西端に，１個は東端にあった。北東壁にちかい中央より床面上に，横位になった壺形土器が発見された。胴下半部に大きな穿孔を有して，口縁部を欠く特徴ある器形といえた。床面の二重構造は良好でＣ類タイプと認めておくが壁周辺を若干深くしてＡ類にちかい状況も見受けられた。

ピットはすべてで５個所が検出されたが,いずれも異なった様相を示した。中央部のピットはいわゆる２段堀りで，その上部には焼土・炭化材（カヤ類を含む）等がかなり厚く堆積していたが内部の覆土は黒色スコリアでそれらをまったく含まないことから，本ピットは火災時には埋没していたものと判断された。北隅および西隅のピットは，覆土に黒色スコリアを有して，その状況からすれば柱穴とできる可能性がつよいが，北隅のものについてはその位置関係からして本住居址のものとはいいがたい。東隅の径50cm前後を測るピットは，２本の炭化材が壁に密着していたことから，確実に火災時の開口を認め得る。南隅のピットは，その底部に高杯(杯部のみ)と壺形土器破片を置いているが，その上部には焼土を有してあるいは火災時に埋没していた可能性もあるが，それを断定し得る条件はない。

第３・４号住居址　（第77図，図版第82）

第１号住居址の北隣でやや東よりにあって，第３・第４号住居址が重複するが，その関係は明

確になし得なかった。層位観察によれば，両床面ともレベル差はほとんどもたずに、覆土には攪乱も目立つ状況であったことから，可能性としては4号住居址がより新しいかも知れないが，断定は避けておこうと思う。

第3号住居址

東よりにあって，床面はかなり軟弱であるが，床面下の掘り方埋土は，黒色スコリアに栗色土ブロックを含んで，上部の黒色スコリアからなる覆土とは明瞭に区別された。その中央西よりにやや薄手の焼土が認められて，炉址と判断された。柱穴状ピットはすべてで6本あって，うち4本を本住居址に伴う柱穴とみてよかろう。二重構造はC類タイプとしてよいものであろう。

第4号住居址

第3号住居址と重複する西よりにあって，それより深い掘り方底面を存する。西隅側の約4分の1ほどと北西壁の大部分が未発掘である。

床面は比較的良好で堅固につくるが，壁ちかくでは軟弱に変化する。柱穴状ピットはすべてで7本あるが，うち3本は本住居址に伴う可能性がある。多くは栗色土ブロックを含む覆土を有して，人為的に埋め込まれた状況といえるようであった。炉址は発掘範囲では確認できていない。

本住居址の北東壁の中央部やや東よりの外側に60×70cmほどの規模を存する長方形ピットがみられた。深さ45cmほどで，覆土には栗色土ブロックを含む黒色スコリアを有して，明らかに住居址とほぼ同時期のものといえたが，その性格は不明である。（植松）

2　遺　物

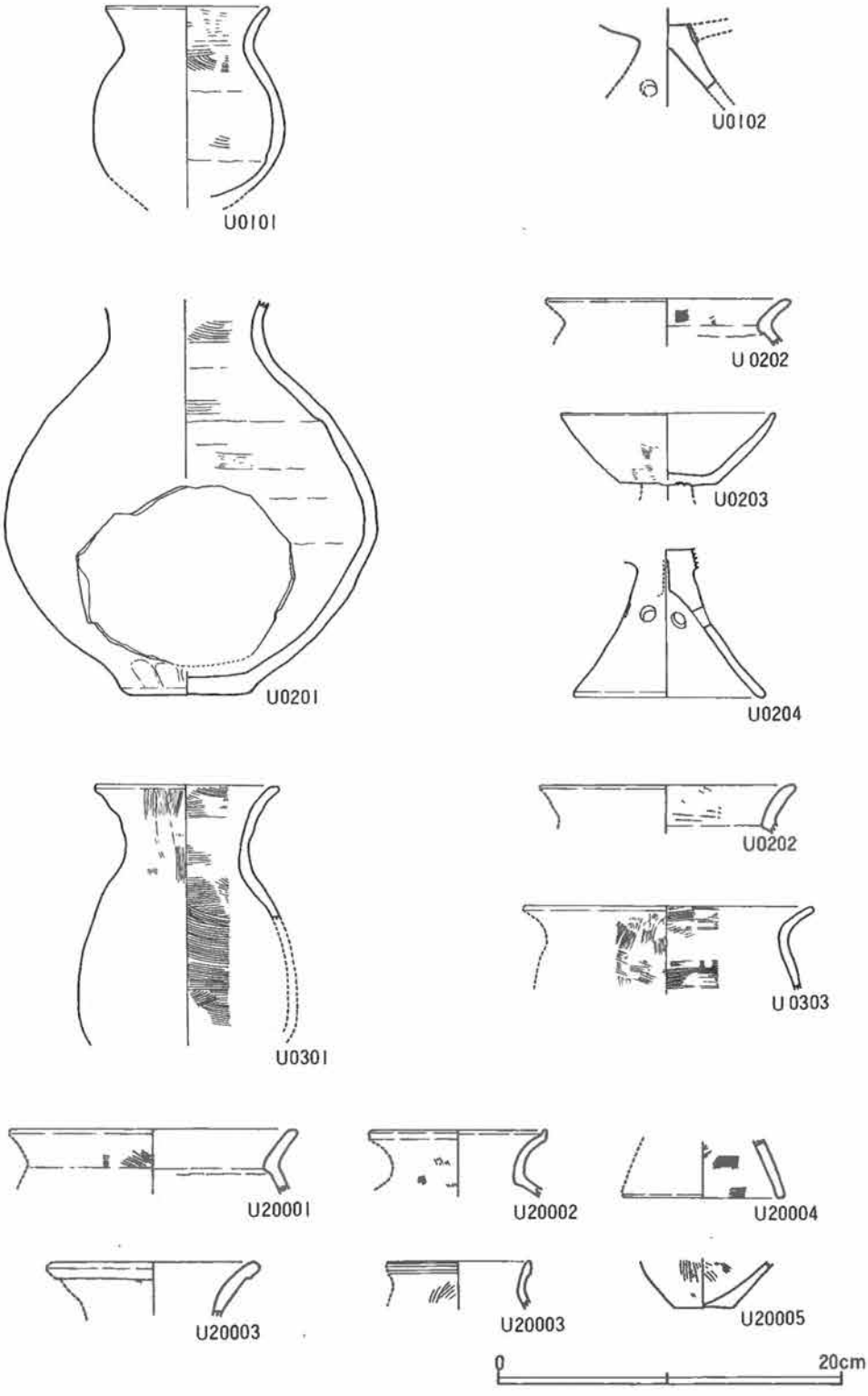
本遺跡の遺物としては，土器類のみである。

(1)　土器類

月の輪上遺跡

土器番号	器形	口径 器形 底径 cm	器形の特徴	整形の手法	備考
U0101	小型壺 E	9.6 — —	胎土　よくうめこまれている比較的精選されたものらしい 焼成　普通 色調　茶褐色～暗黄褐色	外面　頸部にオサエか軽いヘラケズリをした後，口縁部はヨコのヘラミガキ，体部はタテのヘラミガキ 内面　口縁部はヨコのヘラミガキ，体部はヨコハケ(6本/1cm)の後ヨコナデ	口縁部　⅙欠 体部上半　½欠
U0102	高杯脚部	— — —	胎土　よく精選されたもの 焼成　良好 色調　やや赤味を帯びた黄褐色	外面　杯部は細かく丁寧なナナメのヘラミガキ 脚部は細かく丁寧なタテのヘラミガキ，杯部と脚部の接合部タテのケズリ 内部　杯部は細かく丁寧な各方向のヘラミガキ 脚部はヨコ方向に回転させながらのヘラケズリ	3孔 杯部と脚部の接合法に注意
U0201	壺体部	— — 7.0	胎土　細かな砂粒を多量に混じえる 焼成　普通 色調　(外)淡黄褐色(暗)橙褐色　(内)	外面　頸部に少しナナメのタテハケを施した後，頸部～体部上半にタテのヘラミガキ 体部下半に少しナナメのタテヘラミガキ 内面　体部は板ナデ（5本/1cm）頸部はヨコハケ（7本/1cm）の後ヨコのヘラミガキ	体部完存 体部下半に焼成後穿孔（縦11.8×横12.9） 二次加熱有，外面スス付着
U0202	甕D3 （口縁部）	14.3 — —	胎土　細かな砂粒をかなり混じえる 焼成　在地甕では良好 色調　(外)茶褐色　(内)淡茶褐色	外面　ヨコナデ 内面　ヨコハケの後，ヨコナデ（7本/1cm） 体部と頸部との接合部は断続的なヨコのヘラケズリ	⅙存 外面スス付着
U0203	小型高杯Aa類 （杯部）	12.5 — —	胎土　比較的精選されたもの 焼成　普通 色調　橙褐色	外面　ヨコハケ（10本/1cm）の後タテヘラミガキ 内面　放射状のヘラミガキ	杯部略完存 杯部と脚部の接合法に注意
U0204	高杯 （脚部）	— — 11.3	胎土　よく精選されたもの 焼成　普通 色調　暗黄褐色～淡茶褐色	外面　杯部との接合部を，ヨコナデし，脚部タテハケの後，タテヘラミガキ，ただし端部付近は，ヨコヘラミガキ 内面　裾部は軽いヨコハケか何かを使ったナデ 上端に細く深い孔あり	脚部完形 4孔 外面スス付着 杯部と脚部との接合法に注意
U0301	小型壺D	10.7 — —	胎土　細かな砂粒を多量に混じえる 焼成　普通 色調　(明)黄褐色	外面　タテハケ（7～8本/1cm）の後，胴部はヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケの後，口頸部をナデ（？）	口縁部　½ 外面と口縁部内面に赤彩の痕あり
U0302	甕D3 （口縁部）	15.0 — —	胎土　細かな砂粒をかなり混じえる 焼成　在地甕では良好 色調　茶褐色	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	⅛存 外面スス付着
U0303	甕D2 （口縁部）	17.0 — —	胎土　細かな砂粒を多量に混じえる 焼成　普通（あまい） 色調　表面が淡黄褐色～淡橙褐色で断面が白灰色	外面　タテハケ（10本/1cm） 内面　ヨコハケ（口縁部10本/1cm　体部14～15本/1cm）	¼存 外面一部にスス付着 胎土・焼成・色調は在地壺典型タイプと酷似

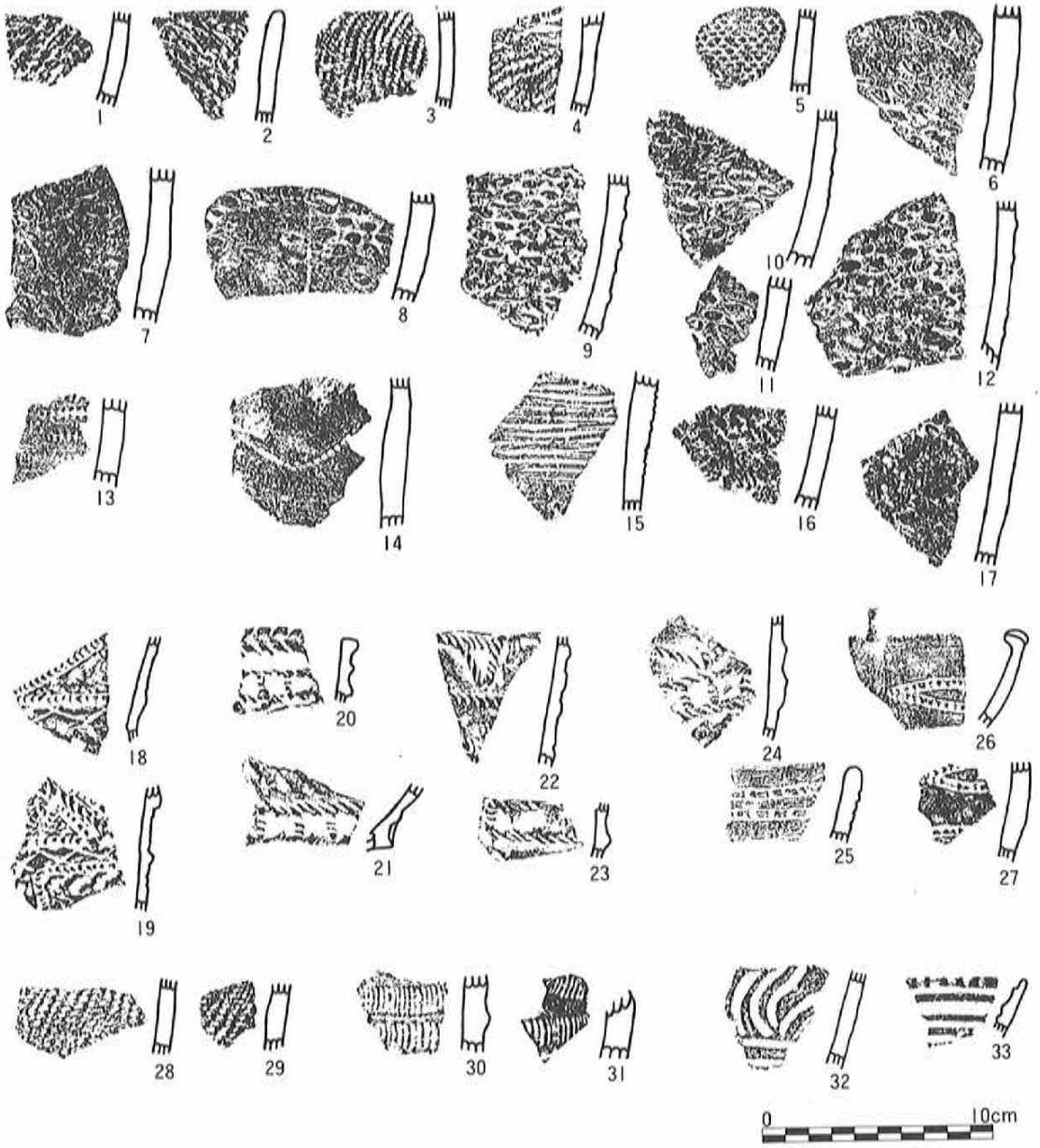
第36表　土器一覧表


U0101
U0102
U0201
U 0202
U0203
U0204
U0301
U0202
U 0303
U20001
U20002
U20004
U20003
U20003
U20005
0
20cm

第78図　土器実測図

V　縄文時代の遺物

1　土器類



第79図　縄文式土器拓影

本遺跡群からは，若干の縄文土器を得た。月の輪平，南部谷戸両遺跡で，とくに南部谷戸遺跡の出土量は比較的多かったが，それを層位的に確認することはできなかった。

ここでは，それらを一括して扱うことにするが，それは縄文時代早期から後期まで各時代のものが50点ほどあった。これらは本来の遺物包含層から出土したものはなく，すべて古墳時代初頭期の住居址・方形周溝墓等の攪乱層とみなすべき層位に含まれていたものや，あるいは表面採集されたものであり，またこれらの土器に伴うような縄文時代の遺構の発見もなかったことから本遺構は縄文時代の遺物散布地でしかないことが理解される。

このように少量な縄文土器ではあるが，そのなかで状態の良好なもの33点を第79図に図示した。また次に各時期に分け，分類を試みた。

早期土器

両遺跡のⅠ群土器のなかで最も量が多いものは早期土器であるが，それらは撚糸文土器から条痕文土器まで雑多な種類で構成されている。

1・2は二段R<$^{L}_{L}$縄文を原体とした撚糸文，3・4は二段L<$^{R}_{R}$縄文を施した土器であり，4点共その胎土には植物繊維を含む。

5～12はすべて楕円押型文土器であり，胎土には植物繊維を含むが，楕円粒の小さな5と，非常に大きな6～12に分けられる。

13は絡縄体圧痕文土器とみられるが，その原体は明確でない，しかし，その比較的細かな原体を横方向に何段も施文し，胎土には植物繊維は含まないようである。

また，条痕文系の土器が何点かあるが，貝殻縁で刺突した14，荒く条痕を施した15，あるいは軽く条痕を施した16・17があり植物繊維はすべてに含まれるようである。

以上，早期土器は各種みられるが，なかでも押型文土器は楕円押型文土器しかなく，その楕円粒の大きなものが多いことや胎土の植物繊維の含入を考慮すると押型文土器群のなかでも最終末に近い時期のものとして捉えられる。近年，本地方においては押型文土器や撚糸文・縄文土器が従来考えていた以上残存するようであり，特に楕円押型文の大粒な例と同様なものが，本遺跡群に近い奥山地遺跡から採収されており，これを田戸下層期に比定している（小野　1975）が，あるいは絡縄体圧痕文土器と併行する時期まで残るのかも知れない。

また条痕文系の土器は，貝殻縁を刺突する施文方法など田戸期前後の要素を残すものや，茅山式土器の範疇に入るもの，あるいは入海系土器とみられるものに分けることができそうである。

前期土器

前期土器は10点ほどを数えるが，18・19，20～24，25，26，27はそれぞれ1個体づつとみられ，4個体分である。

これらは竹管文を主体としているが，前2個体は器壁も薄く，地文に縄文をもち，かつ隆帯を文様構成上の中心にしているが，後2個体は器壁も厚く，明らかに異質である。

前者はその器壁あるいは施文方法から初頭の木島式土器に類似するが，そのものではないようである。また後者は諸磯A式とみてよかろう。

中・後期土器

28～31は中期の土器とみられ，特に30・31は明らかに勝坂式土器の竹管文としてよいようである。

32・33は後期土器としたが，33は加曽利Ｂ式期の精製土器の口縁とみられるが，32は明確でない。堀ノ内式土器の範疇のものであろうか。（平林）

縄文土器出土地点			
1	南部谷戸第３号住居址内	18	南部谷戸第５～12号住居址内
2	月の輪平Ｆ－Ⅲ－Ｃ区	19	南部谷戸第５～12号住居址内
3	月の輪平第41号住居址内	20	月の輪平ピットNo.30内
4	南部谷戸第１号方形周溝墓内	21	南部谷戸第４号方形周溝墓内
5	南部谷戸表採	22	南部谷戸第４号方形周溝墓内
6	月の輪平ピットNo.30内	23	南部谷戸第４号方形周溝墓内
7	南部谷戸第４号方形周溝墓内	24	南部谷戸表採
8	南部谷戸第４号方形周溝墓内	25	月の輪平第63号住居址
9	南部谷戸Ｅ－Ⅷ区	26	南部谷戸第４号方形周溝墓内
10	南部谷戸Ｅ－Ⅷ区	27	南部谷戸第５～12号住居址内
11	南部谷戸表採	28	月の輪平第66号住居址内
12	南部谷戸Ｅ－Ⅷ区	29	月の輪平Ｆ－Ⅲ－Ｃ区
13	南部谷戸第４号方形周溝墓内	30	月の輪平第32号住居址内
14	南部谷戸表採	31	月の輪平Ｄ－Ⅳ－Ｃ区
15	月の輪平ピットNo.30内	32	月の輪平第54号住居址内
16	南部谷戸Ｄ－Ⅸ区	33	南部谷戸表採
17	南部谷戸第４号方形周溝墓内		

第37表　縄文土器出土地点一覧表

2　石器類

本遺跡群においては月の輪平・南部谷戸遺跡の縄文土器に伴って，若干の石器類が得られた。土器類と同様に，両遺跡例を一括して扱うことにする。

月の輪平遺跡からは，有舌尖頭器1点，打製石斧6点，打製石鏃5点，磨製石器1点が出土し，南部谷戸遺跡からは，尖頭器2点，石匙1点，掻器1点，打製石鏃5点が出土している。以下，遺跡ごとに，出土した石器について所見を述べてみる。

実測図では，装着痕あるいは使用痕と考えられる部位，即ち，石器の辺縁に肉眼観察できた白斑状の「叩き状磨耗」部位を⟷で，その面的投影を▨で，さらに稜が円滑化・鈍化している磨滅部位を⟷で，その面的投影を▦でそれぞれを区別しておいた。特に打製石斧については，着柄使用を考慮し，ⓐ面を着柄面に想定している。ⓑ面は，その面に使用による磨滅面が観察される面である。

月の輪平遺跡出土石器（第80・81・82図，図版第103）

1．有舌尖頭器，（DⅣ－a区出土）風化が著しい有舌尖頭器である。基部に両面から加工を加え，舌部を造り出している。

打製石斧

2．（AⅡ－d区出土）　撥形打製石斧で基部が欠損している。ⓑ面刃部中央に2ヵ所の磨滅面が観察される。刃部は円滑化している。横斧である。

3．（CⅡ－a区出土）　短冊形打製石斧であり，基部が欠損している。刃部は孤状を呈し，磨滅している。ⓐ面に広く自然面を残し，ⓑ面刃部中央に磨滅面が観察される。両長辺には叩き状の白斑痕がみられ，縄等による装着痕であると考えている。横斧である。

4．（CⅣ－a区出土）　撥形打製石斧であり，完形である。特に長辺部に入念な加工が施され，その部分が鈍化している。これが，直接使用痕を示すものか，あるいは装着痕を示すものかは判然としない。

5．（17号住居址内出土）　短冊形打製石斧である。刃部を欠損する。長辺に一部，刃部から基部に向っての連続剥離作業が認められる。また両長辺には，叩き状の白斑痕が観察される。

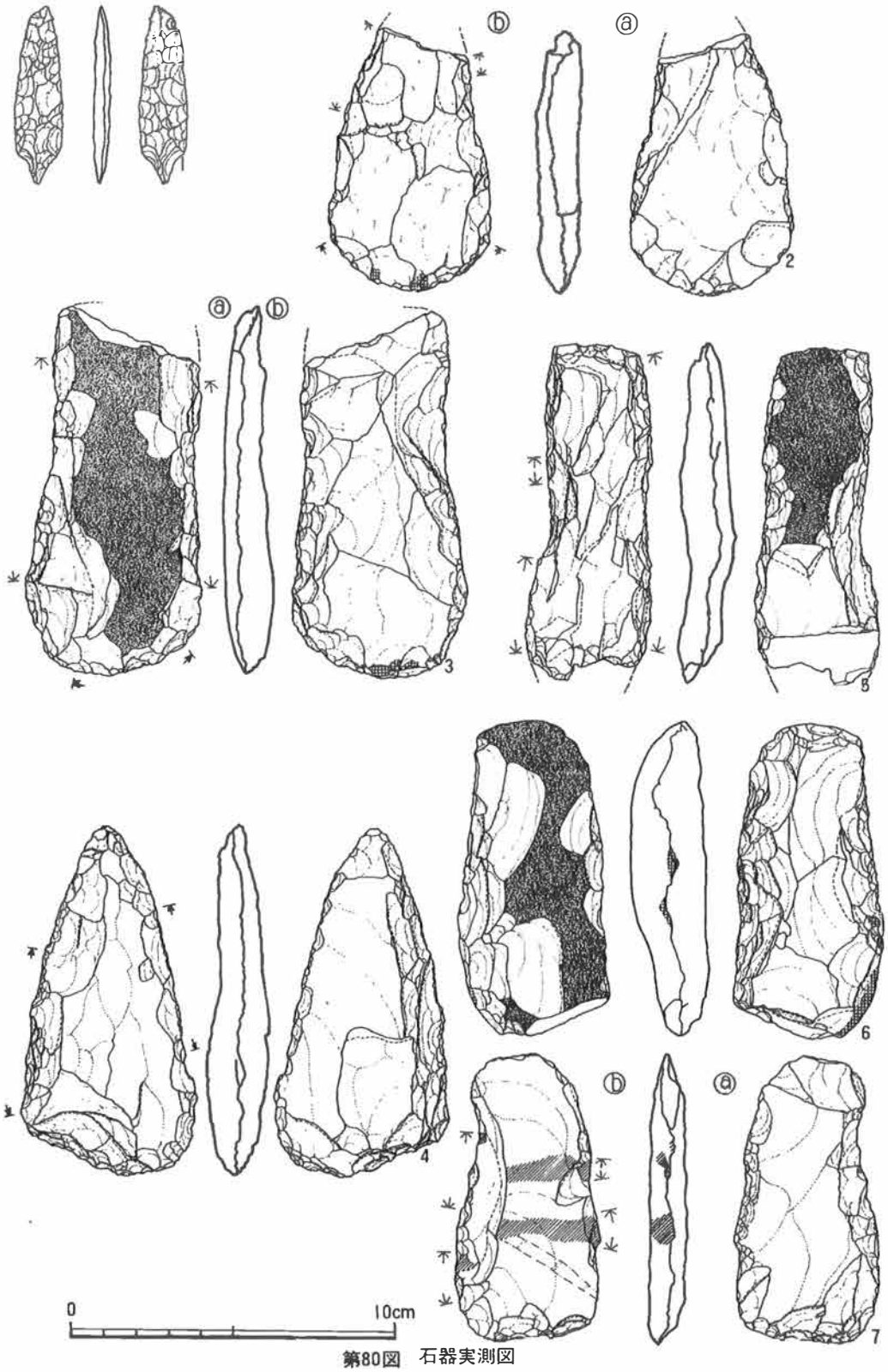
6．（22号住居址内出土）　短冊形打製石斧である。短辺部に節理面を大きく残し，また，そこが欠損とは考えられず，さらに長辺部に磨滅面が観察されることから，着柄使用せず長辺部を叩き石のように使用したものと考えている。

7．（66号住居址周溝内出土）　短冊形打製石斧であり，明瞭な2条ないし3条の白斑状装着痕がⓑ面に観察される。横斧である。

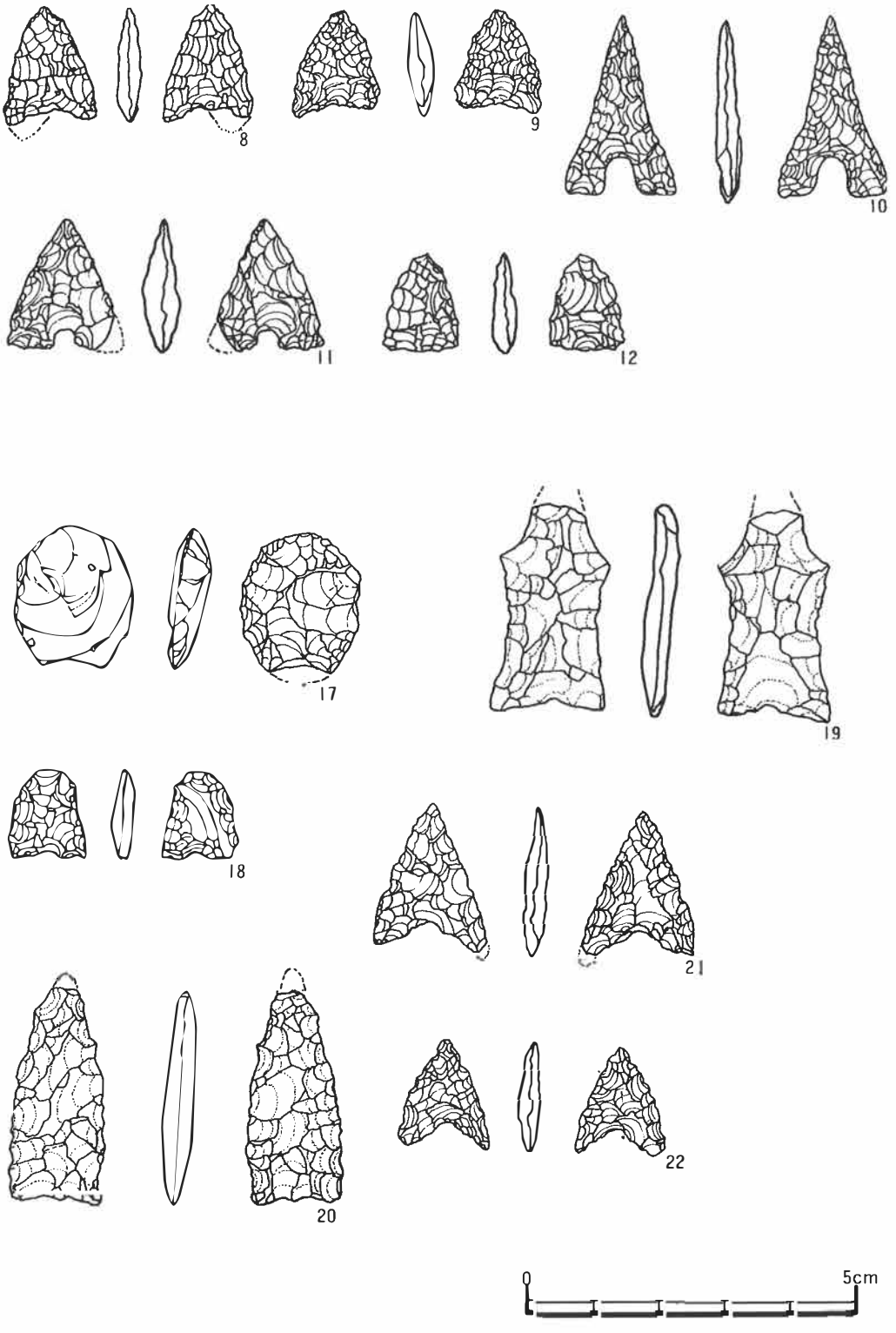
総じて，これらの打製石斧は縄文時代中期の所産であると考えられ，同市内滝戸遺跡出土の中期打製石斧群の中に類例が求められる。

打製石鏃

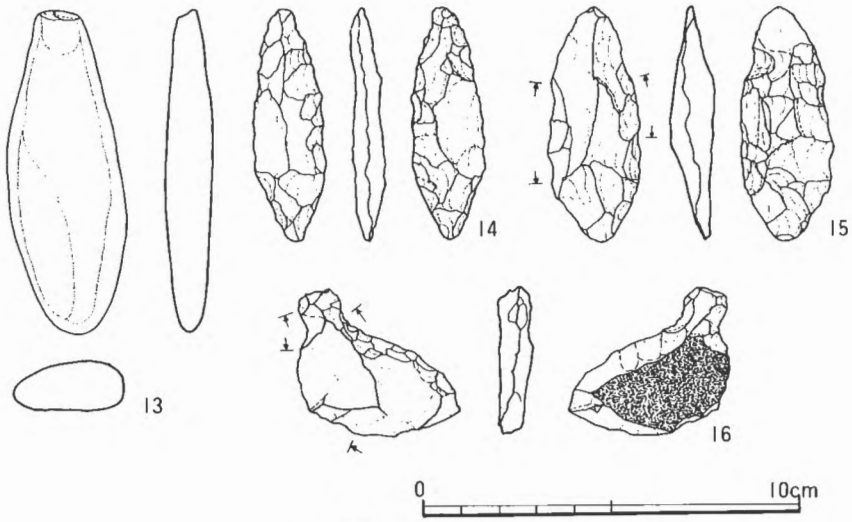
凹基無茎石鏃（8〔AⅠ－b区出土〕，9〔DⅡ－b区出土〕，10〔EⅣ－a区出土〕，11〔44号住



第80図　石器実測図



第81図　石器実測図



第82図　石器実測図

居址内出土〕)と平基無茎石鏃（12〔2号住居址覆土中出土〕）の計5点が出土しており，すべて黒燿石製である。8・11は脚部が欠損している。各々の石鏃とともに，調整剥離は基部（湾入部）と先端部とから行なわれ，斜辺に最終剥離部が数ヵ所観察できる。

13　磨製石器（18号住居址覆土中出土）用途不明石器である。全面が磨かれ，中央部が微弱ながら溝状に凹んでいる。表面には幾条もの波状の磨滅痕が長軸に直交する形で観察される。

南部谷戸遺跡出土石器（第80・81・82図，図版第103）

14　尖頭器（E—11区出土）ローム層直上の出土であり，表面の風化が著しく，パティネーション化が進んでいる。比較的粗雑な作りの葉形ポイントである。先土器時代の所産の可能性もある。

15　尖頭器(第4号周溝墓南側出土)風化が著しく，全体がパティネーション化している。両側辺部には稜が鈍化している部位がある。

16　石匙(第4号周溝墓南側出土)全体がパティネーション化している。粗雑な作りであるが，肩の部分に集中して加工痕がみられる。

17　掻器（表採）　黒燿石製。一部欠損している。片面加工のラウンドスクレイパーであり，ほぼ全周にわたって刃こぼれ状の微細な剥離が観察される。類例が，函南町上原遺跡の採集品のうちにみられる（秋元・1968)。 先土器時代の所産である可能性もある。

打製石鏃（18はF8グリッド，ローム直上出土。他は表面採集品。)

19は東北から関東地方にかけての早前期にみられる，所謂星形五角形鏃であり，先端部を欠いている。18，21，22は黒燿石製であり，18，19は反時計廻り，22は時計廻りの加工面があり，共に斜辺に最終剥離面が数ヵ所観察される。18は平基無茎鏃，21，22は凹基無茎鏃である。20は平基長三角鏃であり，先端部を欠いている。

以上，本遺跡出土の石器はその主体を縄文時代早・前期に置くことができると思われる。

（渡辺）

挿図	No.	遺跡名	地点名	名称	長×巾×厚(cm)	重さ(g)	備考
58	1	月の輪平	47号住居址	砥石	34.8 ×9.4×10.4	4120	完形
	2	月の輪平	1号住居址	砥石	25.7 ×11.7×10.2	3890	完形
	3	月の輪平	70号住居址	砥石	22.2 ×6.3×6.4	1250	完形
	4	月の輪平	62号住居址	砥石	(7.5)×2.6×3.7	(64.6)	欠損あり
	5	月の輪平	46号住居址	砥石	(8.7)×4.5×1.8	(116.4)	欠損あり
	6	月の輪平	62号住居址	刀子	(6.7)×1.2×0.3	(3.9)	欠損あり
	7	月の輪平	72号住居址	刀子	(7.7)×1.4×0.2	(5.9)	欠損あり
	8	月の輪平	90号住居址	鉄鏃	(2.6)×2.0×0.25	(2.2)	欠損あり
	9	月の輪平	D—Ⅳ—dグリッド	コバルト色ガラス玉	0.6 ×0.32	0.1	完形
74	1	南部谷戸	3号方形周溝墓	有孔磨製石鏃	3.9 ×1.5×3.0	1.85	完形
	2	南部谷戸	3号方形周溝墓	硬玉製勾玉	4.2 ×1.7×1.2	23.1	完形
80	1	月の輪平	17号住居址	有舌尖頭器	5.5 ×1.4×0.5	4.6	完形
	2	月の輪平	A—Ⅱ—dグリッド	打製石斧	(8.1)×5.0×1.3	(57.9)	欠損あり
	3	月の輪平	C—Ⅱ—aグリッド	打製石斧	(11.3)×5.5×1.5	(100.7)	欠損あり
	4	月の輪平	C—Ⅳ—aグリッド	打製石斧	10.9 ×5.5×1.8	92.8	完形
	5	月の輪平	17号住居址	打製石斧	(10.3)×3.8×1.6	(71.2)	欠損あり
	6	月の輪平	22号住居址	打製石斧	9.7 ×4.5×2.2	131.1	完形
	7	月の輪平	66号住居址	打製石斧	8.9 ×4.2×1.1	59.7	完形
81	8	月の輪平	A—Ⅰ—dグリッド	打製石鏃	(2.9)×1.3×0.35	(0.6)	欠損あり
	9	月の輪平	D—Ⅱ—bグリッド	打製石鏃	1.8 ×1.6×0.4	0.65	完形
	10	月の輪平	E—Ⅳ—aグリッド	打製石鏃	2.9 ×1.7×0.4	0.95	完形
	11	月の輪平	44号住居址	打製石鏃	(2.1)×1.7×0.5	(1.1)	欠損あり
	12	月の輪平	A—Ⅰ—dグリッド	打製石鏃	(1.5)×1.2×0.35	(0.55)	欠損あり
82	13	月の輪平	18号住居址	石製模造品	8.5 ×3.1×1.2	50	完形
	14	南部谷戸	E—Ⅱグリッド	葉形尖頭器	6.2 ×2.0×0.8	9.2	完形
	15	南部谷戸	4号方形周溝墓	葉形尖頭器	6.2 ×2.5×1.1	16.1	完形
	16	南部谷戸	4号方形周溝墓	横型石匙	4.0 ×3.8×8.5	11.0	完形
81	17	南部谷戸	1号方形周溝墓	(ラウンド)スクレーパー	(2.1)×1.75×0.6	(2.2)	欠損あり
	18	南部谷戸	1号方形周溝墓	打製石鏃	1.4 ×1.2×3.0	0.4	完形
	19	南部谷戸	表採	打製石鏃	(3.2)×1.7×4.0	(2.3)	欠損あり
	20	南部谷戸	表採	打製石鏃	(3.2)×1.4×0.5	(2.2)	欠損あり
	21	南部谷戸	表採	打製石鏃	2.4 ×1.7×0.35	0.7	完形
	22	南部谷戸	表採	打製石鏃	1.8 ×1.2×0.35	0.45	完形

第38表　石器計測表

( )は欠損

Ⅵ　王藤内の塚

1　遺　構

王藤内とは，駿河記によれば，「平家の士，妹尾太郎藤保に与する」人物で，曾我兄弟の仇討ちの際，工藤祐経と「酒宴して居たりけり，其夜曾我兄弟に祐経と同じく殺されけると云う」，すなわちまきぞえにあって殺害されたというのである。昭和14～15年ごろ，市内の郷土史家寺田良彦氏が，その墓地に標識として常葉樹木の白椿が植えられたという伝承によって，本墓地をそれに埋葬した。そのため，墓地の所有者曾根徳一氏は「王藤内之塚」の墓碑を建立して供養し，以後近隣の人々の参詣をうけてきた。

その調査前の状況としては，径4.5mほどを測る円形で高さ20cmほどのマウンド状盛土があって，その頂部に径25cmほどの白椿の根株が枯れて数年という状況でみられた。その側には，寛文，寛政年間銘をもつ平石塔と前記「王藤内之塚」碑とがあった。

敷石遺構

マウンド状盛土部を地形測量ののち，調査はその表土除去から始められた。表土直下には礫群がみられて，その規模は2.0×2.5mほどの長方形プランを呈する人頭大円礫の敷石がみられた。本礫群の特徴的状況としては，礫が積み上げられて群となっていたといえる痕跡はまったくみられず，ただ一列の平面形に敷きつめたとする指摘が可能であった。本礫群を〝敷石遺構〟と命名した所由である。

本遺構の下部から土坑4基が発見された。

第1号土坑

1.5×0.7mの長方形プランを呈して，敷石遺構面から底面までの深さは0.5mほどであったが，プランの一部が敷石遺構内に含まれる状況で，大半は外にあるといえた。遺物はまったく発見されなかった。

第2号土坑

本土坑は第3号土坑に南隣する位置にあって，その大半を敷石遺構内に納めているが，敷石に伴う土坑とするのにはやや不自然といえよう。1.1×0.85mの長方形プランで，敷石遺構から底面までの深さは0.9mを測ってもっとも深い。

本土坑内には，頭骨，上下顎骨，四肢骨等が残存して，麻紐に通した寛永通宝6枚も発見された。いわゆる六文銭を伴う土葬人骨と判断された。また，小鉄片2もあって，鉄釘類の残欠であろうと思われた。

第3号土坑

第2号土坑の北西側にあって，敷石遺構のほぼ中央部直下に位置する。1.25×1.0mの楕円形プランを呈し，敷石遺構から底面までの深さは0.65mを測る。

本土坑内の南壁よりに四肢骨の一部が残存していたが，他に遺物の発見はない。

第4号土坑

第1・3号土坑から約0.8mほど北よりにあって，確実に敷石遺構の外域に位置する。0.95×0.85mの隅丸方形プランで，敷石遺構から底面までの深さは0.55mを測る。

遺物の出土はみられないが，中央部と北壁にちかい部分の床面上に，人頭大礫各1が発見されている。

2　遺　物

人骨・寛永通宝6枚があった。人骨には頭骨・上下顎骨，歯，四肢骨等がみられたが，残存状況はあまり良好とはいえない。寛永通宝は，麻紐を通したいわゆる六文銭であった。これらの遺物の大部分は，移転した曾根家墓地に納めた。他に表土内から錫杖を得たがその出土状況からすれば本遺構の経営時に伴うものとはいえない。

3　まとめ

以上によって，本墓地の特徴を列記すると次の通りである。

①円形をなすマウンド状盛土が認められたこと

②その墳頂部にあたる付属の表土直下には2.0×2.5mの長方形プランの敷石遺構が存したこと。ただし，礫には積み上げた痕跡はみられず平面的であるという特徴を有した。

③盛土・敷石遺構の下部には4基の土坑が認められた。その位置関係からすれば第3号土坑が敷石遺構・盛土に伴うものといえるようであった。

④時期的には伴出した六文銭がすべて寛永通宝であることから確実に近世といえよう。

要するに，本墳墓は，若干の盛土塚に長方形プランの敷石を伴う外部施設を有する近世土坑墓であるといえる。

ここで，こうした類例を新めて比較検討を試みることにしたいが，県東部には明確な報告例はみられない。県内全域では，方形プランの礫群に若干の盛土を有する例として，

白井墳墓　榛原郡相良町白井（池谷1968）　大原墓地　磐田市大原（池谷1968）

宗行卿塚　榛原郡金谷町（望月・池谷1969）　日明遺跡　天竜市船明（池谷・平野1977）

の4例をあげることができるが，これらすべてが鎌倉時代に属するものであった。すると，本例とはかなりな時間差を有するので，それぞれの状況について比較する意味はもたないとみてよい。

それでも，これらの礫群に共通する特徴としては，礫がいずれも厚く60～70cmから1mにちかく積み上げられている点にある。本来中世のこうした礫群はその中心部に蔵骨器を安置する例が多く，そのために厚い礫群をもってこれを保護したと考えることも可能かも知れない。

本墳墓の礫群はきわめて平面的な敷石にすぎないが，一般に中世墳墓では時期が下るほど多くの礫で囲まれる傾向がある（池谷　1968）と指摘されている。もちろん，本例が土葬墓であるために蔵骨器が伴わないことから礫が少ないことは当然であるが，それでも，近世土葬墓にそうした中世墳墓の伝統が継承されている点に注目しておきたい。

一般に，県東部地域における中世墳墓の様相は，ここに例示した状況とは異なる。すなわち，いわゆる中世土坑と称されるピット類が群在して発見されることが多いが，いずれも土葬であってほとんど遺物もない。きわめて特殊な遺物例として，南伊豆町日詰遺跡の和鏡出土（南伊豆町教育委員会　1979）があげられるが，他に盛土・礫群等の特徴的な遺構例はみられない。

こうした地域の中で，本例はきわめて特殊な構造をもつが，それは火葬墓の影響のもとに，他と区別して特殊な意味を与えるにたる被葬者が存在したことの反映とみることが可能であるかも知れない。いずれにしても，4土坑中，最末といえるのがたぶん第3号土坑で，それが敷石と盛土を伴ったのであるがその位置関係，副葬品によって，その特殊な地位を言述する条件はみられない。

（野村・植松）

住居址No.	プラン（　）推定 長径と短径（床面/壁上面）cm	長軸方位	床面積（㎡）	残存状況	平面形	ピット 柱穴	ピット その他	焼土 炉	焼土 その他焼土	床面の二重構造	重複関係（旧→新 －不明）	備考
1住居址	516 × 483 550 × 508	N-59°-W	24.92	完形	隅丸方	4	3	有（炉石）中央	無	A	無	多量の土器を出土
2住	502 × 469 525 × 506	N-71°-W	23.54	完形	隅丸方	4	4	有 中央やや北西	無	無	無	ベッド状遺構？
3住	272 × 240 300 × 266	N-78°-W	約 6.53	完形	隅丸方	無	無	無	無	無	無	
4住	314 × 309 332 × 327	N-87°-W	9.7	完形	隅丸方	無	1	有 中央やや北	無	B	5→ 4 7→	
5住	296×(284) 328×(314)	N-85°-W	8.4	2/3	隅丸方	無	1	無	無	B	6→ 5→4 7→	
6住											6→5	計測不能
7住	496×(400) 498×(410)	N-83°-W	約20.94	9/10	隅丸方	2	5	有？中央？	中央部	C	→4 6→7→5 −11	中央の焼土は他の遺構にともなう可能性もある
8住	411 × 427 442 × 443	N-89°-W	17.54	完形	隅丸方	4	1（張り出しピット）	無	無	C	9→ 8 −11 10→	
9住					隅丸方					C	10→9→8	計測不能
10住											→8 10 →9	計測不能
11住	786 × 678 798 × 686	N-73°-E	53.29	3/4	方形	無	1	無	無	無	−7 23→11 −8	大型住居址
12住	234 × 201 243 × 220	N-44°-W	4.83	完形	不定隅丸	無	無	無	無	無	無	
13住	565 × 520 520 × 490	N-40°-W	25.48	2/3	隅丸方	無	2	有（炉石）中央	無	A	24→ →15 13→23 25→ →26	
15住	568 × 450 590 × 475	N-16°-E	25.56	完形	隅丸方	無	無	無	東壁部分散在	C	13→ 24→15 25→	火災の可能性有り
16住	294 × 282 333 × 303	N-7°-E	7.99	1/2	隅丸方	無	1	無	無	無	17→ 16 30→	
17住	610 × 552 631 × 589	N-71°-E	33.67	完形	方形	4	無	有 中央部	焼土，炭化粒全面	A	→16 17 →18	火災の可能性有り？
18住	470 × 421 496 × 468	N-10°-E	19.79	完形	隅丸方	1	無	有（炉石）？中央？	焼土 炭化材全面	A	17→18	被火災住居址
19住	380×(380)	N-4°-E	(14.00)	1/4	方形	無	無	有 中央	無	無	19→62	浅い住居址で壁の確認が困難であった

第39表　月の輪平遺跡住居址一覧表

住居址No.	プラン（　）推定					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新 －不明）	備考
	長径と短径（床面／壁上面）cm	長軸方位	床面積（m²）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
20住	467 × 447 484 × 456	N-22°-W	20.94	完形	隅丸方	4	4	有 中央	北半部	B	21→20	
21住	838 × 656 848 × 666	N-76°-E	54.97	4/5 推定	胴張 隅丸方	無	1	無	無	C	→17 21→20 →27	大型住居址
22住	710 × 688 732 × 709	N-73°-W	49.75	4/5	隅丸方	4	7	有 （炉石） 中央西	無	A	59→ 22 60→	上層に掘立柱建物址の想定が可能か？ 大型住居址
23住	385 × — 400 × —			3/4	方形	無	無	無	無	C	13→23→11	
24住					胴張 隅丸方					C	→13，15 24→25，26 →31	計測不能
25住		N-31°-E			隅丸方					A	→15 24→25－13 －31	計測不能
26住	453 × 378 478 × 417	N-55°-E	17.12	完形	方形	4	無	無	無	A	→13 26 －24	
27住				1/3	隅丸方					C	30→27→21	計測不能
30住											→16，17 30 →21，27	計測不能
31住					胴張 隅丸方					無	→15 24→31→32 －25	計測不能
32住	405×(400) 428×(420)	N-42°-E	17.12	1/2	隅丸方	4	2	無	北半部 散在	B	31→32	火災の可能性有り？
33住	563×(490) 542×(500)	N-62°-W	26.26	1/2	隅丸方	4	無	無	全面 散在	C	無	被火災住居址
35住	574 × 476 585 × 493	N-60°-W	27.32	9/10	胴張 隅丸方	4	1	無	北半部 点在	C	35→36	埋土上部に焼土有り33号住居址の焼土か？
36住	446 × — 452 × —	(N-60°-W)		1/2	隅丸方	2	無	無	無	B	35→36	
37住	(500×450)	N-70°-E	(22.50)	1/4	隅丸方	4	無	無	無	B	37→38	
38住	(430)×385 (470)×400	N-89°-W	16.66	3/4	隅丸方	4	無	有 （炉石） 中央	東北部 点在	B	37→ 38 39→	
39住	320×(300)	N-87°-W	(9.6)	1/3	隅丸方	1	無	無		A	39→38	
40住	478 × 452 500 × 475	N-79°-E	21.6	完形	隅丸方	4	無	無	無	B	41→40	

第40表　月の輪平遺跡住居址一覧表

住居址No	プラン（　）推定					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新 ー不明）	備考
	長径と短径（床面 壁上面）cm	長軸方位	床面積（㎡）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
41住	462 × 404 488 × 440	N-86°-E	18.66	完形	隅丸方	無	無	無	北半部点在	B	41→40	
42住	327 × 325 361 × 351	N-88°-E	10.63	完形	隅丸方	4	無	無	無	A	無	住居址埋土上に焼土が存在
43住	746 × 680 765 × —	N-80°-E	48.49	4/5	胴張隅丸方	2	3	有（炉石）中央	無	B	無	大型住居址
44住	240 × 220 260 × 240	N-6°-E	5.28	完形	不整形	1	3	無	無	C	無	
45住	495 × 492 513 × 510	N-56°-W	24.35	完形	隅丸方	4	1	有 中央	無	C	45下→ 45 66→	
45住下	220 × 200	N-74°-W	4.4	完形	不整形	無	無	無	無	無	45下→45	
46住	480 × — 500 × —	N-70°-W		1/2	隅丸方	無	1	無	無	C	→51 46→52 —53	
47住	221 × 219 238 × 232	N-38°-W	4.82	完形	隅丸方	1	無	無	無	C	無	
48住	556×(530) 573×(530)	N-50°-W	(29.50)	1/2	隅丸方	4	無	無（炉石）? 中央	無	C		
49住											50→49→48	計測不能
50住											→48 68→50→49 →67	計測不能
51住	400×(380)	N-36°-W	(15.20)	1/3	方形	無	無	無	無	無	46, 52→ 51 54, 55→	
52住	375 × 288 — × 305	N-50°-W	10.80	完形	隅丸方	無	1	無	無	A	46→ →51 52 53→ →55	
53住	300×(270)	N-45°-W	(8.10)	1/2	隅丸方	無	無	無	無	C	—46 53 →52	
54住	450×(400)	N-12°-W	(18.00)	1/5	隅丸方	無	無	無	東北部散在	C	55→54→51	火災の可能性有り？
55住	410 × 388 438 × 411	N-10°-W	15.90	完形	方形	無	無	無	全面散在	C	→51 52→55 →54	火災の可能性有り？
56住	310×(270)	N-19°-E	(11.40)	1/3	隅丸方	4	無	有（炉石）2 中央	無	C	57→ 56 59→	
57住	750×(700)	N-15°-E	(52.50)	1/3	方形	4	1	有（炉石）中央東	無	B	59→ 57→56 60→	大型住居址

第41表　月の輪平遺跡住居址一覧表

住居址No.	プラン（　　）推定					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新 －不明）	備考
	長径と短径（床面／壁上面）cm	長軸方位	床面積（㎡）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
59住	760×(780)	N-83°-W	(57.50)	1/3	胴張隅丸方	4	2	有 中央	無	A	→56 61→59→57 →60	大型住居址
60住	352×(350) 380 × 380	N-10°-E	(11.30)	1/2	隅丸方	3	無	有 中央	周辺部焼土，炭化材	C	→22 59→60 →57	被火災住居址？
61住	235 × 223 250 × 240	N-47°-W	5.24	4/5	隅丸方	無	無	有 中央	無	C	61→59	
62住	528 × 518 550 × 534	N-3°-W	27.35	完形	隅丸方	4	1	有（炉石）中央	全面焼土，炭化材	A	19→ 65→62 66→	被火災住居址
63住	317 × 242 331 × 258	N-83°-W	7.67	完形	隅丸方	無	無	無	無	B	65→63	
64住	337 × 316 348 × 335	N-85°-W	10.56	完形	隅丸方	無	無	有 中央	周辺部点散	B	66→64	火災の可能性有り？
65住	455 × 382 492 × 415	N-85°-W	17.38	3/4	方形	無	無	有 中央	無	無	→62 65 →63	
66住	458×(500) 485 × 520	N-9°-W	(22.90)	3/4	隅丸方	4	無	有 中央南	周辺部散在	A	→45 66→62 →64	火災の可能性有り？
67住	525 × 469	N-18°-W	24.62	完形	隅丸方	4	5	無	無	A	50→ 67→48 68→	その他の柱穴5は他住居址のものか？
68住				1/5	方形	無	無	無	無	C	→50 68 →67	
69住	200 × 189 225 × 202	N-19°-W	3.78	完形	不整形	無	6	無	無	C	無	多量の土器出土
70住	406 × 381 420 × 406	N-46°-W	15.46	完形	隅丸方	4	1	無	周辺部炭化材	C	71→70	炭化材のみが検出され火災の可能性が有るか？
71住	290 × 258 310 × 280	N-49°-W	7.48	4/5	隅丸方	無	無	有 中央	無	A	71→70	
72住	495 × 458 525 × 487	N-86°-W	22.67	完形	隅丸方	4	1	有（炉石）中央	西半部散在	B	73→ 72 74→	火災の可能性有り？ 刀子出土
73住	335×(290) 388×(310)	N-53°-E	(9.70)	3/4	隅丸方	無	無	有（炉石）中央	無	B	73→72	
74住	280 × — 265 × —			1/2	隅丸形	無	無	有（炉石）2 中央南北	無	B	74→72	
75住	318 × 318 336 × 344	N-43°-W	10.11	完形	隅丸方	無	6	有 中央北	無	C	78→75	6本のピットのうち，いずれかが柱穴になろうが，規則性に欠ける。
76住	247 × 235 262 × 252	N-16°-W	5.80	完形	隅丸方	2	無	無	全面焼土，炭化材	B	77→76	被火災住居址

第42表　月の輪平遺跡住居址一覧表

住居址No.	プラン（　）推定 長径と短径（床面／壁上面）cm	長軸方位	床面積（m²）	残存状況	平面形	ピット 柱穴	ピット その他	焼土 炉	焼土 その他焼土	床面の二重構造	重複関係（旧→新 －不明）	備考
77住	254 × — 279 × —			1/3	隅丸方	1	無	無	無	B	77→76	
78住				1/4	隅丸方	2	無	無	無	A	78→75	調査区外に主体部が存在し計測不能
79住	315×(275) 337×(300)	N-24°-E	8.66	3/4	隅丸方	8	無	無	無	C	→91 88→79 －81	柱穴８本は他住居址のものであろう
80住	238×(250) 272×(250)	N-51°-E	(6.00)	3/4	隅丸方	1	無	有 西南	無	C	88→ 80 91→	
81住	595 × 578 606 × 590	N-4°-W	34.39	1/2	方形	4	4	有 (炉石) 中央	無	B	87, 89, 83→ 81 79, 91—	
82住				1/8							82→86	計測不能
83住	515 × 480 537 × 480	N-87°-W	24.72	3/4	隅丸方	2	無	有 (炉石) 北西	周辺部 点　散	C	84, 85→ 89, 90→83→81 91—	火災の可能性有り？
84住	246 × 277 267 × 295	N-22°-W	6.65	4/5	隅丸方	3	無	無	無	C	84→83	
85住				1/10							86→85→83 －91	計測不能
86住	275 × 290 289 × 290	N-89°-E	7.98	4/5	隅丸方	3	無	有 (炉石) 北西	南北部 全　面	A	→85 82→86 →91	火災の可能性有り？
87住	248 × 205 277 × 230	N-15°-E	5.10	完形	隅丸方	1	1	無	無	A	88→87→81	その他のピット１は88号住居址の柱穴
88住	398×(400) 427× —		(16.00)	1/2	隅丸方	3	無	有 (炉石) 中央	無	C	→79, 80 88 →87, 91	
89住	348 × 331 376 × 358	N-84°-W	11.52	4/5	隅丸方	3	2	有 (炉石) 中央東	無	C	→81 89 →83	鉄鏃出土
90住	227 × 261 251 × 288	N-2°-E	5.92	2/3	隅丸方	1	1	無	無	A	90→83	その他のピット１は83号住居址の柱穴
91住	350×(370)←推定 —×370←	N-86°-E	(13.00)	2/3	隅丸方	2	無	無	無	C	79, 85→91→80 86, 88→ －81 －83	

第43表　月の輪平遺跡住居址一覧表

月の輪下遺跡

住居址No.	プラン（　）推定					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新 ー不明）	備考
	長径と短径（床面 壁上面）cm	長軸方位	床面積（m²）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
1住	374 × 366 410 × 407	N-49°-E	13.69	完形	方形	6	無	有 中央	無	無	無	
2住	420 × 378 445 × 394	N-35°-W	15.88	完形	隅丸方	6	無	有2 中央東	無	無	無	
不定円形	——— 372 × 330		12.276	完形	不定円形	無	無	無	周辺部点散	無	無	
4住	223 × 230 258 × 238	N-61°-E	3.13	完形	方形	6	無	有 中央西	周辺部点散	無	無	
5住	367 × 365 384 × 380	N-46°-E	13.40	完形	方形	6	1	有 中央西	無	無	無	

第44表　月の輪下遺跡住居址一覧表

南部谷戸遺跡

住居址No.	プラン（　）推定					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新 ー不明）	備考
	長径と短径（床面 壁上面）cm	長軸方位	床面積（m²）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
1住	497 × — 512 × —			1/2	胴張隅丸方	4	2	有 （炉石） 中央	無	A	無	
2住	(350)×(350)		(12.25)	1/3	胴張隅丸方	5	1	無	無	A	3→ 4→ 2	
3住	425 × 350	N-5°-W	14.88	完形	胴張隅丸方	7	2	無	無	A	3→4	
4住	378×(430)	N-90°-E	(16.25)	2/3	胴張隅丸方	2	無	有 中央	無	A	3→4→2	
5住	370×(370)		(13.70)	1/3	胴張隅丸方	1	無	無	無	A	無	主体が調査区外に存在するため確認不能
6住				床面周濠	胴張隅丸方	1	無	有 中央	無	A	7→ 8→ 6→9	壁面を流出
7住				1/4	胴張隅丸方	無	無	無	無	B	7 →6 →8	
8住				1/8	胴張隅丸方	無	無	無	周辺部点散	A	7→8→6	火災の可能性有り？
9住				1/4	胴張隅丸方	2	無	無	無	B	6→ 7→9 8→	
10住	431×(400) 461×(400)	N-10°-W	(17.20)	1/2	胴張隅丸方の可能性大	無	無	有 中央北	無	A	9→10 →11 →12	

第45表　南部谷戸遺跡住居址一覧表

住居址No.	プラン（　）推定					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新－不明）	備考
	長径と短径（床面／壁上面）cm	長軸方位	床面積（m²）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
11住				1/6	胴張隅丸方	1	無	無	無		10→ 11 12→	
12住	440×(480)	N-82°-E	(19.80)	3/4	胴張隅丸方	1	無	無	全面焼土，炭化材	A	10→12→11	被火災住居址

第46表　南部谷戸遺跡住居址一覧表

南部谷戸遺跡方形周溝墓

遺構名	規模(m)	土坑	遺物	備考
第1号方形周溝墓	10.3×12.1	不明	土器片	墓域内に複合する3住居址
第2号方形周溝墓	8.3× 7.2	2	土器片	南半部に1住居址
第3号方形周溝墓	6.9× 8.0	2	壺1，硬玉製勾玉1 有孔磨製石鏃1	北溝外に張り出しあり
第4号方形周溝墓	12.7×14.0 現存	1	高杯脚1，甕底部1 壺1	墓域内に複合する9住居址，明瞭な封土あり

第47表　南部谷戸遺跡方形周溝墓一覧表

月の輪上遺跡

住居址No.	プラン					ピット		焼土		床面の二重構造	重複関係（旧→新－不明）	備考
	長径と短径（床面／壁上面）cm	長軸方位	床面積（m²）	残存状況	平面形	柱穴	その他	炉	その他焼土			
1住	299 × 280 311 × 291	N-35°-W	8.4	ほぼ完形	隅丸方	2	無	無	無	A	無	
2住	342 × 323 354 × 346	N-37°-W	11.05	完形	隅丸方	5	無	有（炉石）中央北	全面焼土，炭化材	A	無	被火災住居址
3住	408 × 885 433 × 410	N-66°-W	15.7	ほぼ完形	胴張隅丸方	6	無	有 中央西	無	C	3－4	
4住	(460)×(377) (480)×(405)	N-54°-W	17.3	2/3	胴張隅丸方	7	無	無	無	C	3－4	

第48表　月の輪上遺跡住居址一覧表

考 察 編

I　月の輪遺跡群出土の土器

従来の土器編年の上からみれば後期弥生土器と古式土師器の両者を含み，本遺跡群の出土土器の主体となるものを，一括して取扱う。

1　月の輪遺跡群出土土器の分類

器種としては，甕，大型壺，壺，小型壺，高杯，小型高杯，高杯状器台，小型器台，小型鉢，小型丸底土器，小坩，小型土器，手捏ね土器があげられる。なかでは，甕が多く，壺がこれにつぐ。

(1) 甕

本遺跡群でもっとも多量に出土した器種である。壺と同じく多様な姿相を示すが，その形態によって，台付の甕と平底の甕とに大別できる。台付甕は，口縁部の形態によってさらに，口縁部をŚ字状に屈曲させたいわゆるŚ字状口縁の甕A，口縁端部の外側を削って面取りした甕B，口縁端部の外側に粘土帯を重ねたいわゆる折返し口縁の甕C，単純口縁の甕D，の4種に分けることができる。平底の甕には，底面中央に不整形な凹みをもつ甕Fがある。以上の5種のうちでは，甕Aと甕Dが主体を占める。なお甕は，こうした器形による分類とは別に，大形・中形・小形という，容量にもとづく細分をすることも可能である。

①　甕A

台付甕で，口縁部をŚ字状に屈曲させる，いわゆるŚ字状口縁台付甕である。Ś字状口縁は，口頸部外面に2回，内面に1回，凹線文風のナデを施すことによって造作される。この甕Aには小異があり，A_1～A_5の5類に分けられるが，とくに，Ś字土器として定型化したA_2～A_5とそうでないA_1との間で大きな差異がみとめられる。定型化したŚ字土器とは，すでによく知られているように，①肩の大きく張った無花果形の胴部と，端部を内側に「折り返し」た脚台部を有する。②胴部外面は全体を羽状にハケメ調整し（本遺跡群では下位のタテ→中位の右ナナメ→上位の左ナナメの順が一般的），内面は全体をナデて平滑に仕上げる。ただし肩部内面には胴部・口縁部接合時の指先きでおさえた痕を残すものが多い。③器壁は非常に薄く（主に外面にハケメまたはヘラケズリを施して薄くする），胎土に金雲母や砂粒を多く含み，焼成良好の，良質な土器である。こうした特徴は，胴部破片でさえ，Ś字土器として識別することを可能にしている。

甕Aは，形態による分類とは別に，容量にもとづく区分も可能である。まず完形品についてみると，口径19cm前後で器高28～31cmのT0102，T0104，T4501（他に比べてやや小形品），T6202の4点が大形，口径15cm前後で器高22～23cmのT0101，T0103，T0105の3点を中形として，識別することができる。胴部下半まで知れるものでは，T0106（口径14.6cm）とT6201（口径16.4

cm）を大形，T0107（口径16.4cm），T0108（口径15.2cm），T1804（口径12.6cm）とこれらに比べてやや小形品のT1803（口径13.7cm）とT5601（口径12.6cm）を中形とすることができる。胴部下半までの場合が完形品と比較して口径のバラツキが大きいのは，T0106，T1804，T5601など，他より口頸の窄まりが強いものが存在するからである。

A_1類　肩部の張らない球形の胴部に，屈曲の弱い口縁部をつけたもので，口縁端部内側を削って面とりし，頸部内面にハケメを残し，口縁屈曲部外面に櫛描列点文をもつ。T4301（拓40・拓41）の1点のみである。Ṡ字状口縁をつくる際，口縁部内面の凹線文風ナデを欠くことは，他類と異なる。胴部外面の調整は，粗く強めのハケメを（5本／1cm），上位より右ナナメ→ヨコ→右ナナメの順で施し，定型化したṠ字土器の下位のタテ→中位の右ナナメ→上位の左ナナメのハケメ調整の後肩部の櫛描直線文という順序と相違する。これに器壁が胴部最大径付近で6mmと厚いのも他類と異なる。

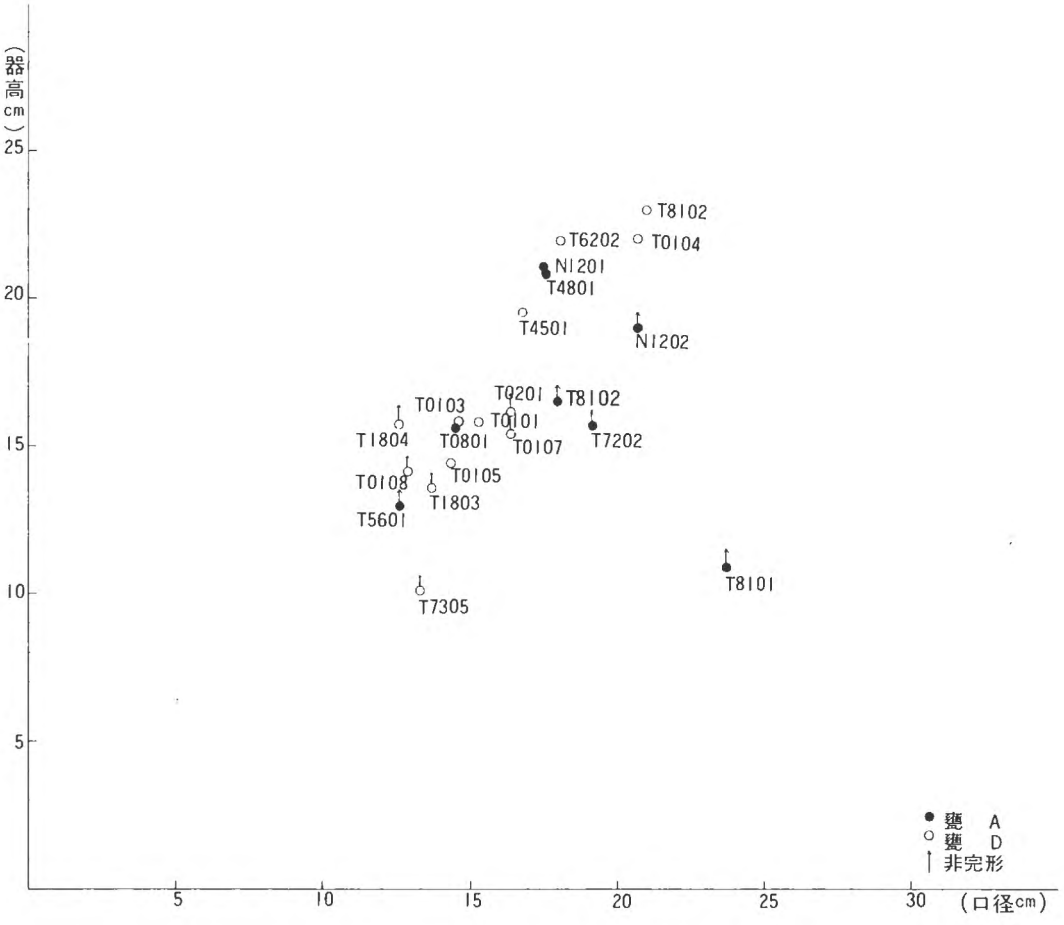
A_2類　口縁屈曲部外面の櫛描列点文はなくなるが，頸部内面のハケメと口縁端部内側の面とりを残し，肩部外面に櫛描直線文を有する。胴部外面の調整は，粗く強いハケメを何回も重ねている（4～6本／1cm）。T0105(拓51)，T0107(拓53)，T5601(拓52)，T㉒—㊻02(拓42・拓43)の4点である。前2者は，黄褐色～暗橙褐色を呈し，胎土に細砂粒を多く含み，焼成のあまい，Ṡ字土器としては粗質の土器である。一方後2者は，暗(茶)褐色を呈し，胎土に砂粒や小石を多量に含み，堅緻に焼き上がっている，本遺跡群の褒Aの中でもとくに良質の土器である。

A_3類　口縁屈曲部外面の櫛描列点文だけでなく，頸部内面のハケメと口縁部内側の面とりもなくなるが，なお肩部外面の櫛描直線文を有する。胴部外面のハケメは，A_2類に比べてやや細かくなるが（6本／1cm），なお強く何回も重ねて施している。T0102，T0104(拓54)，T3201の3点である。T0102の口縁端部内側にはかすかな沈線が，T3201の口縁端部内側にも同様の沈線が部分的に，各1条認められる。色調は暗赤褐色～暗茶褐色を呈し，焼成良好，比較的良質のものである。

A_4類　口縁屈曲部外面の櫛描列点文，口縁端部内側の面とり，頸部内面のハケメに加えて，肩部外面の櫛描直線文をも消失したものである。胴部外面のハケメは，弱く細かくなる（6～9本／1cm）。T0101(拓58)，T0103，T0106，T0109，T0110(拓44)，T0112，T1301，T1801，T1803，T1804，T4501，T6202(拓56)などである。本類は出土数も多く，それだけ個体差がある。たとえば，口縁部の上位と下位とで器壁厚の差が大きいT0101，T0106，T0110，T1804など，口頸部の窄まりが強いT0106，T1804，胴部球形のT0112，T1301，長球形のT1804等々である。焼成は良好であるが，色調が黄褐色～橙・暗橙褐色～赤褐色を呈し，胎土に細砂粒を多く含むなど，A_2類のうちのT0105・T0107と共通する面をもっている。

A_5類　口縁屈曲部外面の櫛描列点文，口縁端部内側の面とり，頸部内面のハケメ，肩部外面の櫛描直線文のすべてを消失しているのはA_4類と同じだが，口縁端部内側に1条の浅い沈線をもつ点がA_4類と異なる。T0111，T1101(拓45)，T1601，T3301，T3701，T6201(拓57)，S0102，S0401などである。胴部は肩の張りが弱い球形を呈するものが多い。外面のハケメはA_4類と同じ

く弱く細かく（6～8・12本／1cm），なかにはハケメの前に施したヘラケズリの痕跡を残すものもある。色調は橙・暗橙褐色～赤褐色～茶・暗茶褐色～黒褐色とバラツキが目立つ。



第83図　甕A・甕Dの器高と口径

脚台　甕の脚台部の資料の中に，調整や胎土・色調からみて，明らかに甕Aに属するものがある。T1102，T1602，T1701，T1802，T2201，T2202，T2203，T2205，T6101などである。これらは，外面に右ナナメのハケメ短線を巡らすT1701，T2201，T2202，T2203，T6101と，それを有さないT1102，T1602，T1802とに区別できる。

②　甕B

口縁端部の外側を削って面とりしている台付甕である。N1201，N1202の2点であるが，形態だけでなく，調整や胎土・色調にも相違がある。

N1201は，2cmほどのやや外上方へ立ち上がる頸部から同じく2cmほどの外上方へひらく口縁部へつづく口頸部と，器高の低い脚台が付された，張りの乏しい長球形の胴部をもつ。外面は口縁部に右ナナメ，胴部上・中位にヨコ，胴部下位～脚台部にタテ，内面は口縁部～胴部中位にヨ

コ，胴部下位に右ナナメの，それぞれ細かいハケメを施す（９本／１cm)。胎土は砂粒・小石を含み，焼きがややあまく，淡黄褐色を呈し，甕Ｃ・甕Ｄと近い特徴をもつ（拓50)。

Ｎ1202は，球形の胴部に，くの字状に外反する口縁部をつけるが，頸部外面に強いナデによって生じた特徴的な凹部が存在して注意される。外面は全体にタテの，口縁部内面はヨコの，粗くやや強いハケメを施し（５本／１cm)，胴部内面はナデて仕上げている。胎土はきめ細かく，焼成良好，色調暗(茶)褐色で，甕Ｃ・甕Ｄとは異質で，どちらかといえば甕Ａに近い（拓49)。

③　甕Ｃ

口縁端部の外側に巾狭の粘土帯を重ねて折返し口縁にした台付甕である。Ｔ4305，Ｔ6403，Ｔ8103，Ｔ(82)—(85)04の４点である。折返し口縁の形状には，巾１cmほどの粘土帯を貼付してはっきり肥厚したＴ4305，Ｔ8103，あまり肥厚せず部分的には折返しを消失しているＴ6403，尖った口唇部のＴ(82)—(85)04と，バラエティーがある。調整は，外面タテ・内面ヨコに細かく弱いハケメを施すのが基本で（10～14本／１cm)，口縁部外面のみ，ヨコナデ（Ｔ6403）やヨコハケメ（Ｔ8103・拓33）するものがみられる。胎土は砂粒を多く含み，吸水性に富む粗質の土器で，甕Ｄと共通する。

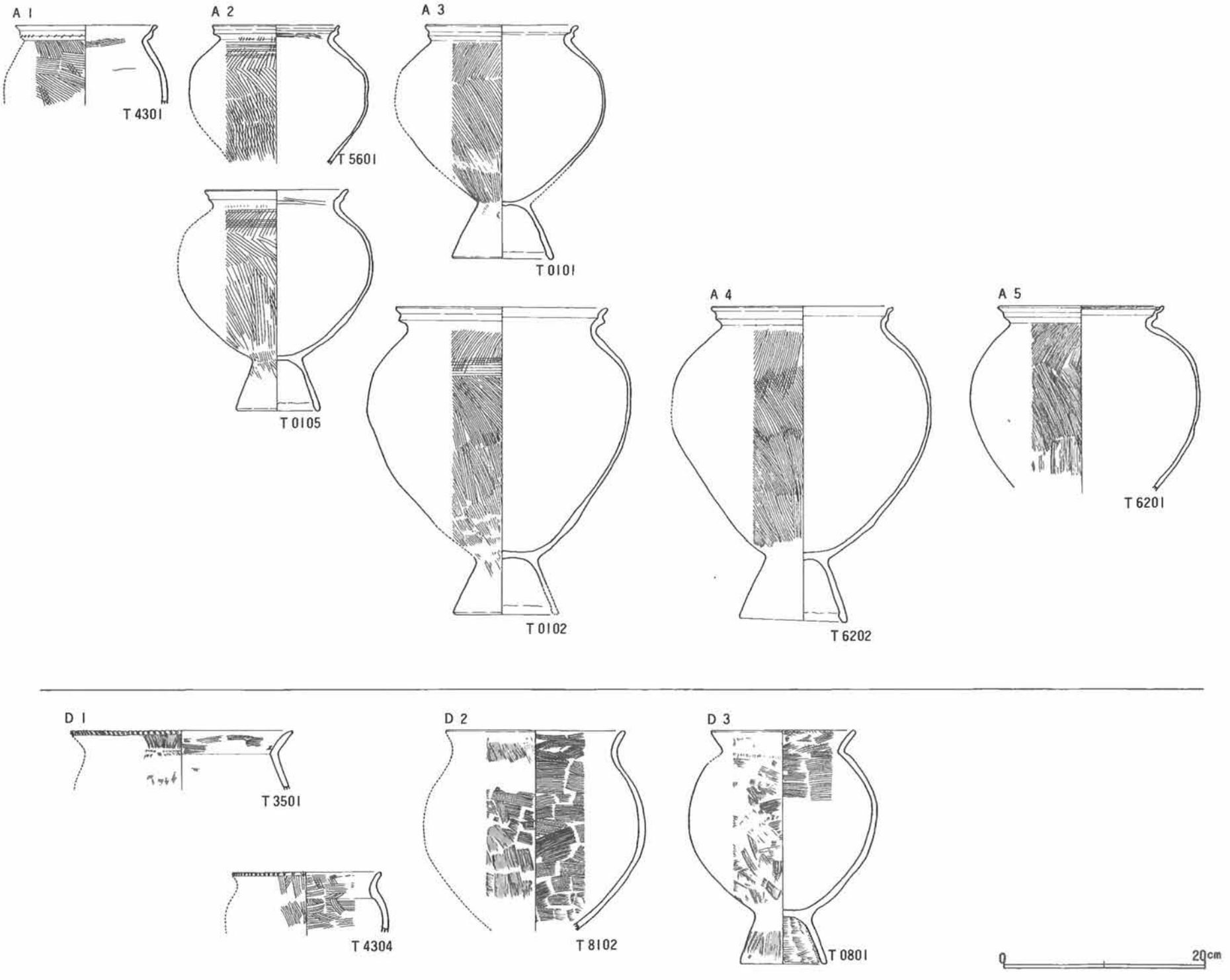
④　甕Ｄ

単純口縁の台付甕である。調整は内面にヨコハケメを施し，外面は全体にタテハケメをつけるもの（Ｔ3501，Ｔ3502，Ｔ4304，Ｔ7201，Ｔ7202，Ｔ7203，Ｔ7305など)，口縁部～胴部の一部にタテ，それ以下にヨコのハケメをつけるもの（Ｔ0701，Ｔ3302，Ｔ5401，Ｔ6402，Ｔ8101)，タテ・ヨコ・タテのハケメを施すもの（Ｔ8102)，短いハケメを乱雑に施すもの（Ｔ0801，Ｔ4801）などの別がある。ハケメは細かく弱い（５～10本／１cmが多いが，なかには12～18本／１cmというようなものもある)。色調は黄褐色～橙褐色か赤褐色～茶褐色を呈し，胎土に細砂粒を多く含み，焼きのあまり良くない，粗質のものが多い。

甕Ｄには小異があり，口縁端部の刻み目の有無，口頸部の形状によって，D_1～D_3の３類に分けられる。また容量にも差異があり，大形破片以上の口径は，11cm以下，13～15cm，18～20cm，22cm以上の区分の中に集中する傾向がみられる。

D_1類　口縁端部に刻み目を有するもので，Ｔ2206，Ｔ3501，Ｔ4304(拓39)，Ｔ(82)—(85)02，Ｔ20009などである。このD_1類は，形態的特徴からさらに，ａ・ｂ２類に細別できる。ａ類は，内上方へ直線的に伸び上がってきた胴部が，頸部で急角度に屈折して，直線的に外上方へひらく口縁部に連なる。Ｔ3501などである。ｂ類は，球形の胴部から，口縁部が外湾しながらひらく。Ｔ4304などである。

D_2類　口縁端部の刻み目がなく，口縁部が緩やかに外反する（外湾する）もので，甕Ｄの中で主体を占める。したがって形態的にも変化に富んでいる。そのなかでは，大形品のＴ8101(拓48)，口縁部が短く強く外方へ折れるＴ5401，やや外上方へ立ち上がる頸部から口縁部が外上方へひらくＴ7201，Ｔ7203(拓46)，くの字状に近くD_3類的なＴ3502，Ｔ6302，Ｔ6401(拓38)，などが注目される。なおＴ6401は，胎土に雲母を含み，焼成良好，色調暗(茶)褐色で，他の甕Ｄと異質な特



第84図　甕A・甕Dの細分

徴をもち，甕BのN1202と同じく，どちらかといえば甕Aに近い。

D_3類　球形の胴部に，くの字状に屈曲して外上方へひらく口縁部を付したもので，T0801（拓47），T4801，T6402(拓37)，T20002，U0302，U20001などである。

脚台　甕Cまたは甕Dの脚台部のみ完存するものとして，T1402，T2001，T4802，T5602，T5603，T6301，T7101，T7301，T7302，N0401，NH402などがある。外面はタテに，内面をヨコにハケメ調整する（6～8本／1cmと11～13本／1cm)。特に器高の低いT7101を除けば，形態の変化はあまりないといえる。

⑤　甕F

中央に不整形な凹みをもつ平底の甕で，N1203の1点のみである。この底部は，尖底状を呈する底に，輪台＝環状の粘土を貼付することによって造作していると思われる。色調黄褐色，胎土・焼成良好で，甕Cや甕Dとは異質である（拓35)。

(2)　大型壺

口縁部の径が25cmを超える大型壺には，複合口縁をなす大型壺Bがある。その複合口縁は，壺Bを大きくした形の口縁端部の内側に，さらに断面三角形の粘土帯を貼付している。T5901の1点だけである。胴部は球形らしく，頸部はゆるやかにひろがって，複合口縁部へつづく。複合口縁部の外面には箆描の棒状沈文を7本1組で4カ所に施している。器壁は約1cmと普通の壺の1.5～2倍近い。胎土は小石・砂粒を多く含み，色調(淡)橙褐色を呈し，壺B・壺C・壺Dのグループに近い。

(3)　壺

甕と同じく多様な姿相を示すが，甕には完形品が多くみられるのに対して，断片が大半を占めるため，全形をうかがい知ることができる資料はほとんどない。これらの壺は，口縁部の特徴により，二重口縁の壺と単純口縁の壺とに大別できる。二重口縁の壺は，その成形・形状によってさらに，二段口縁の壺A，複合口縁の壺B，折返し口縁の壺C，の3種に分けることができる。一方単純口縁の壺は，壺A～壺Cと同じく口頸部が長く，頸部と口縁部との径の差が大きい壺Dと，口頸部が短く，頸部と口縁部との径の差が小さい壺Eの2種に分けることができる。

①　壺A

二重口縁の中で，口縁部が二段に屈曲・外反する，二段口縁と呼ばれているものである。その成形は，外方へ屈折または外反する口縁下位に外反する口縁上位を継ぎ合せることによって造作している。T6203，T6204の2点である。後者はナデるのみで平滑に仕上げているが，前者はさらにヘラミガキを重ねて入念に仕上げている。しかし，ともに口唇部と屈曲部の外面に斜位の刻み目を巡らし，色調明茶褐色で胎土はきめ細かく，比較的良質な土器である。

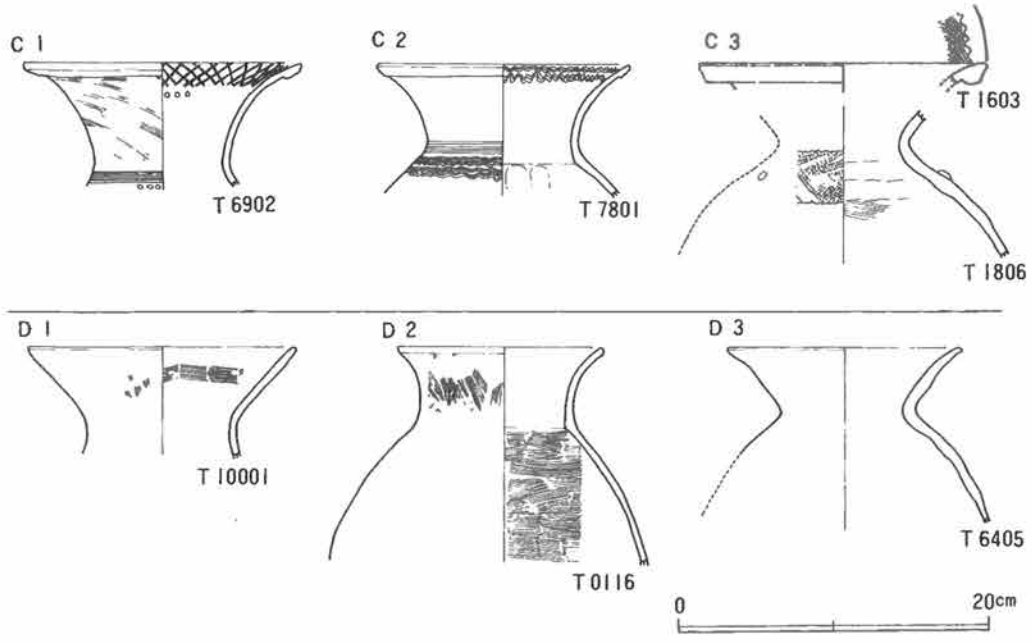
②　壺B

二重口縁の中で，複合口縁と呼ばれるものである。その成形は，外反する口縁下位の外側に口

縁上位（2cm以上の比較的巾広い粘土帯）の一部を重ね合わせることによって造作している。したがって内面は，稜をなすかそうでなくても方向を異にした2面をもつといった方がふさわしい壺A（二段口縁）と違って，ゆるやかな内湾する曲面を呈することが多い。T(22)—(56)03，NH103，NH406(拓6)などである。口縁上位外面には，ヨコハケの後（7～9本／1cm），棒状浮文（NH103)や棒状沈文（NH406･拓6）を加える。色調は淡橙褐色～黄褐色を呈し，胎土に小石・砂粒を多く含み，焼成のあまり良くない粗質の土器で，壺C・壺Dと共通する。

③　壺C

二重口縁の中で，折返し口縁と呼ばれるものである。その成形は，口縁端部の外側に1.0～1.5cmの比較的巾狭い粘土帯のすべてを重ね合わせることによって造形している。したがって口縁端部が他より厚目になるのが一般的である。文様帯は，折返し口縁部に刻み目を施すNH201を除けば，口縁部内面と頸部～肩部外面にあるといえる。そこに施される主文様には縄文のほか櫛描文・篦描文がみられる。斜縄文は，口縁内面では1段（T1603，NH403）か2段（T4002，NH102)，頸部～肩部外面には2段（T1806，T4101）巡らし，2段の場合中央に円形浮文を貼付している。櫛描文・篦描文の場合，口縁部内面には波状文（T7801，T20011）か斜格子文（T6601，T6902）を施し，頸部～肩部外面には直線文＋竹管文（T6902）か直線文＋波状文（T7801）を巡らしている。この他では，NH201が折返し口縁部に刻み目を施し，T4103，T6602，T6902，T7801は口縁部内面と外面全体を赤彩している。T4203，T6901，N0302は無文である。調整は，口縁部外面にタテ～ナナメ・内面にヨコのハケメをつけたものと，さらに同方向のヘラミガキを



第85図　壺C・壺Dの細分

加えて入念に仕上げたものがある。色調は器表が淡橙褐色～淡黄褐色，器壁が白灰色～淡青灰色を呈し，胎土に砂粒を多量に含み，焼成のあまり良くない，粗質の土器が多い。

壺Cには小異があり，壺Dに対応する口頸部が長く頸部と口縁部の径の差が大きいものと，壺Eに対応する口頸部が短く頸部と口縁部の径の差が小さいもの（T6601）とに細別できる。多数を占める前者は，さらに口頸部の形状や口頸部高によって，C_1～C_3の3類に分けられる。

C_1類　細長い頸部から口縁部がゆるやかにひろがってラッパ状をなす。口頸部高はC_2類・C_3類より高い。口縁端部の外側に重ねる粘土帯は薄い。T4101，T6602，T6902などである。

C_2類　窄まった頸部から口縁部が外湾しながら外上方にひらく。口頸部高はC_1類より低い。口縁端部の外側に重ねる粘土帯はC_1類と同じく薄い。T4002，T4103，T7801などである。

C_3類　頸部が「く」の字状にくびれて，口縁部は外上方に大きくひらく。口頸部高はC_2と同じくC_1類より低い。口縁端部の外側に重ねる粘土帯は厚く断面三角形を呈する。T1603，T1806などである。

④　壺D

単純口縁で，口頸部が長く，頸部と口縁部の径の差が大きいものである。調整は壺Cと同様，口縁部では外面にタテ～ナナメ・内面にヨコのハケメをつけたものと，さらに同方向のヘラミガキを重ねて入念に仕上げたものがある。胴部は外面をタテ～ナナメのヘラミガキし，内面にはヨコハケメを施す。文様はとくに有さないのが一般的らしいが，拓4・拓5は口縁部内面に縄文を施し，T10003は器面を赤彩し，またT6304，T10005は肩部外面に櫛描列点文を巡らしている(口縁部上半を欠くため正確ではないが，一応壺Dに入れる)。色調は淡橙褐色～淡黄褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含み，焼成のあまり良くない粗質の土器で，壺B・壺Cと共通するものが多い。

壺Dには小異があり，口頸部の形状や口頸部高によって，D_1～D_3の3類に分けられる。

D_1類　短く内傾して立ち上がる頸部から口縁部が外上方にひらく。口頸部高はD_2類・D_3類より高い。T7802，T10003である。

D_2類　窄まった頸部から口縁部が外湾しながら外上方にひらく。口頸部高はD_1類より低い。T0116である。

D_3類　頸部が「く」の字状にくびれて，口縁部は外上方に大きくひらく。口頸部高はD_2類と同じくD_1類より低い。T6403とT6304，T10005である。なおT6403は，胎土・焼成とも良好の良質なもので，他の壺Dとは異質である。

⑤　壺E

単純口縁で，口頸部が短く，頸部と口縁部の径の差が小さいものである。T0115の1点だけである。口縁部内外面と胴部内面には，成形時のオサエの痕を残す。色調は器表が淡橙褐色，器壁が青灰色を呈し，胎土に細かな砂粒を多く含み，焼成のややあまい土器で，壺B・壺C・壺Dと共通する。

⑥　壺の体部および底部

以上の各種に分類できない壺の体部および底部が多数出土している。これらは，胎土・焼成・

色調からみて，壺B・壺C・壺Dのいずれかに属するものと考えられる。壺体部にはT0117，T0118，T6903，T7306，N0101，U0201などがある。調整は，外面をタテ～ナナメのヘラミガキ，内面をヨコハケメするのが一般的であるが，T7306は外面にもタテハケメを顕著に残している。これらには小異があり，その形状によって，下脹れになるT0118，T6903，N0101と，球形を呈するT0117，T7306，U0201の2者に分けることができる。なおU0201は胴部に，焼成後径10cmほどの穿孔を行っている。壺底部では，底面に木葉痕を残すものと，さらにヘラケズリやヘラミガキを施しているものがある。なおT4306は赤彩している。

⑦　壺の文様　（拓7～拓28）

以上の各種に分類できない，文様を有する壺の胴部破片がかなり出土している。これらは，胎土や色調からみて，壺B・壺C・壺Dのいずれかに属するものと思われる。

拓7～拓12・拓17・拓25・拓26は，櫛描文を主文様とするものである。このうち拓7～拓12は，直線文と波状文を組合せている。拓7・拓8・拓11は粗く，拓9・拓10・拓12は細かい。なお拓7は直線文の間に，拓10は直線文の下に，刺突文を付加している。拓17・拓25・拓26は，列点文の羽状配列（擬縄文）をもつものである。拓25はその上に円形浮文を付加している。拓26は櫛状工具が4本単位の小さなもので，羽状に4段施文している。

拓13～拓16・拓19・拓20・拓22～拓24・拓27・拓28は，縄文を主文様とするものである。このうち拓13～拓16・拓19・拓20・拓22は単方向のものである。拓19・拓20は円形浮文を貼付し，拓14は円形竹管文を付加する。また拓14・拓16・拓19はS字状結節を有する。拓23・拓24・拓27・拓28は羽状配列のものである。拓23・拓27は円形浮文を貼付し，拓28は円形沈文を付加する。また拓23・拓24・拓28はS字状結節を有する。

拓18は箆描文を主文様とするもので，沈文の羽状配列を巡らせている。拓21は無文の上に円形浮文だけを貼付したものである。

(4)　小型壺

器高が20cm未満の壺形を呈するもので，壺と同様に完形品はわずかである。口縁の形態によって，2段口縁に球胴が付される小型壺A，単純口縁の小型壺D，広い頸部から口縁部が外方へ短かく開く小型壺Eの3種に分けることができる。

①　小型壺A

二段口縁を有する小型壺で，T0123の1例が検出されている。口縁部を欠落しており明確ではないが，後記するように本器種に含まれると思われる。

胴部は最大径より胴部高が若干小さい球形が上下に約まり，底部径が4cmと最大径よりかなり小さいため下半は底部より外反して外方へ伸びわずかな稜をなして内湾する中位に続く形態をとる。調整は外面頸部にナナメハケメ，内面胴部上半にハケメ，下半にヘラケズリが施されている。胴部下半に焼成前径4mmの小孔が穿たれている。胎土は精選され，壺B・壺C・壺Dとは異質である。

② 小型壺D

単純口縁で壺D_1類に似て，短く立ち上がる頸部から口縁部がゆるやかに外上方にひらく。T0702，T5407，T(82)—(85)05，T20010，S0404，U0301などである。

調整では口縁部外面にハケメ調整を施すものが多いが，T0702はヨコナデ，T5407はタテヘラケズリである。内面はヨコハケメ調整を施すものが多いが，T0702はヨコナデ，T(82)—(85)05はヨコヘラミガキである。なおU0301は赤彩されている。胎土はいずれも砂粒を多く含み壺B・壺C・壺Dと同様である。

③ 小型壺E

広い頸部より短かい口縁が外方へ開くもので，胴部は球形を上下に約めた楕円形をなす。口縁部に折り返し部を有するT10002，単口縁のT0118・T7304がある。

調整は口縁内外面と胴部外面にヘラミガキ，胴部内面にヨコハケが施されている。胎土は比較的精選されており，壺B・壺C・壺Dの良質のものと類似する。

(5) 高杯

本遺跡では，出土数が少ない器種の一つで，しかも実測図にできたのはわずかである。出土した大部分は杯部口縁，脚部の破片であり細分に耐えるものが少ない。高杯は杯部口径20cm前後のものが一般的であり，杯部の形状によって，A・Bの2種に分けることができる。

① 高杯A

杯部の底部と口縁部との境界に稜を形成し，口縁部が外上方に外反するもので，T1501・T6905がある。T1501は杯部が浅い形態のもので，杯部の屈折も顕著ではない。T6905は杯部の底部と口縁部との境界が鈍く屈折し，T1501より杯部の深い形態のものであるが，小型高坏BのT0403よりは浅い。調整は杯部内外面にタテヘラミガキが施されているが，T1501はミガキ調整が弱く前工程のハケメ調整が残る。T6905は内外面とも赤彩がなされている。胎土は砂粒を多く含むが若干精選してあり，壺B・壺C・壺Dの中では良質のものの胎土と類似する。

② 高杯B

杯部に稜をもたず，口縁部が緩やかに内湾しながら立ちあがる。NH301である。杯部が浅い形態のものでT1501に類似する。脚部は脚部高が器高の⅔ほどを計るため細く高い感がある。

杯部内外面と脚外面はタテのヘラミガキ，脚部裾はヨコのヘラミガキを丁寧に施している。脚部内面は反時計回りのヨコヘラケズリを行った後，裾部にヨコナデ調整が加えられている。黄褐色を呈し，胎土は細かな砂粒のみ含む良好なもので，全体的に丁寧な作りである。

③ 高杯脚部

以上のほかに，分類しえない脚接合部の破片が数点出土している。T0126，N20001，NH407，T4503，U0204などである。NH407，T4503は3孔を有する。U0204の接合部は，脚部より杯部に向けて直径4㎜ほどの細孔が穿たれているが，杯部へは貫通していない。また，脚部上位に外面より4孔を穿っている。調整はいずれも外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリである。

(6) 小型高杯

出土点数が少なく，全形が明らかとなるものはわずかに２例である。しかもこの２点の小型高杯は各々特徴ある器形を呈している。

① 小型高杯Ａ

脚部が大きくひらき，脚部底径が杯部口径を凌駕するものである。この小型高杯Ａは，杯部の形状によってａ・ｂ２類に分けられる。二者とも非常に丁寧な作りであり，胎土も砂粒を微量に含んでいるが良く精選され，焼成も良く堅緻である。胎土，焼成は壺Ｂ・壺Ｃ・壺Ｄとは異質なものである。

ａ類　杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈折し，口縁部が外上方に外反する。Ｕ0203である。内外面ともヘラミガキの仕上げである。

ｂ類　杯部に稜をもたず，丸く内湾して立ちあがる。Ｔ0128，Ｔ2208，Ｔ2209などである。杯部外面は縦位の，内面は縦位または斜位の，脚外面は縦位のヘラミガキ，内面は横位のヘラケズリ調整がいずれもなされている。Ｔ2208の脚内面は裾部～接合部間をヘラケズリで３段階に分けて，反時計回りに１周を１工程でヘラを回転させた調整方法をとり，裾部より接合部に向けて２順次なされている。さらに，裾部はケズリの上にヨコナデ調整がなされている。Ｔ0127，Ｔ2209も脚内面は回転させたヘラケズリの技法をとっているが，後者はハケメを一部にとどめる。

Ｔ2208は剝落が著しく明確ではないが，赤彩が施されていたようである。

脚部　ａ・ｂ２類に分類できない小型高杯Ａの脚部に，Ｔ0126，Ｔ1604，Ｔ1807，Ｔ4502，Ｔ10001などがある。調整は前出のものと同様である。この他には，脚部に文様をもつものがある。拓本１・２・３の脚裾部破片である。裾部がほぼ水平に開いた部分に３段の櫛描き直線文を施し，その間を箆描き鋸歯文で塡めこんで１つの文様帯を構成したものである。色調は暗(茶)褐色を呈する。

② 小型高杯Ｂ

高杯Ａ・高杯Ｂと同じく杯部口径が脚部底径を凌駕するものである。杯部の底部と口縁部との境界線が鋭く屈折し，口縁部が直線的に外上方へ大きくひらく。Ｔ0403で杯部が深い形態のものである。杯部内面は底部を同心円状に，他はハケメ調整の上に横方向にヘラミガキがなされている。外面は縦ハケメの上に粗いタテヘラミガキで仕上げられているがミガキが粗いため，部分的にハケメが残っている。脚外面はハケメ調整の後，それを消す仕上げ（オサエかナデツケ）が，内面はヨコハケメ調整がなされている。３孔を有する。

胎土には砂粒が多く含まれ，焼成も悪く全体的に作りの悪い土器であり，胎土・色調とも在地の系譜をもつ壺Ｂ・壺Ｃ・壺Ｄと類似したものである。

(7) 高杯状器台

杯部の底部と口縁部との境界に鍔状の突帯を有し，大きく外反する口縁部には長円形の透し孔を穿つ。Ｓ10001の1点のみである。鍔状の突帯は，杯部を成形する際に，口縁部を底部の端部より

内側に接合するために生じる。同一個体と思われる脚部破片は，裾部が大きく開き，脚部底径が杯部口径を凌駕する。この脚部にも，3角形，または4角形の透し孔を穿っている。透し孔の個数は，杯部・脚部とも不明である。杯部内外面と脚部外面はヘラミガキを重ね，脚部内面はヨコナデを施し，入念な仕上げがなされる。そして，杯部口縁部内外面，杯部底部と脚部の外面は赤彩されている。胎土精良，焼成良好の良質なものである。

なお，この種の土器にはさまざまな名称が存するが，器台の上に別の器種をのせた形状を一つの土器として作ったものであると考えられている（玉口　1972・佐原　1972)。ここでは便宜的に高杯状器台の名称をとり，部位の呼称も高杯に準じておく。

(8)　小型器台

出土点数が少なく，全形がほぼ明らかなのはわずか１例であるが，器受部の形状によって，２種に分けることができる。

①　小型器台Ａ

器受部の底部と口縁部との境界に稜を形成し，口縁部が外反するものである。器受部に稜をもつもので，境界外面には凹線文風のナデを施す。Ｔ1703，Ｔ2212である。

調整は器受部外面の口縁部にヨコナデ，底部にヘラケズリ，内面口縁部にヨコナデ，底部に向心状のヘラミガキが施されている。脚部外面はタテヘラケズリ，内面は箆を横回転させたケズリ調整がなされている。胎土は長石・砂粒・金雲母など含むが良く精選されており，壺Ｂ・壺Ｃ・壺Ｄとは異質である。

②　小型器台Ｄ

器受部が１cm未満と浅く，稜を有さないもので，器受部口径と脚部底径との差が小さく鼓状を呈する。Ｔ2003の一例だけである。器高が4.4cmときわめて小形で，その大部分を脚部が占め器受部高と脚部高の比は１：３である。

外面の調整は器受部にハケメ調整の後ヨコナデ，脚部にタテハケメ調整の後，粗いタテヘラミガキが施されている。内面は器受部にヨコハケメ調整の後ヨコナデ，脚部は一部ハケメ調整の後ヨコナデ調整がなされている。胎土は微細な砂粒・長石等が混じられ比較的精選されてはいるが，壺Ｂ・壺Ｃ・壺Ｄと同質のものである。

③　小型器台脚部

この他に脚部の部分的破片で全形を知り得ない数点がある。Ｔ4802，Ｔ20006，Ｔ(82)—(85)06などである。Ｔ4802，Ｔ20006は明らかに小型器台Ａ・Ｂと異なる器形である。

Ｔ4802は脚接合部内面に充填した粘土が多く，その粘土下端が脚部中位まで下っている。裾部はゆるやかに外方へ開く形態をとり，孔は穿たれていない。

Ｔ20006は脚が接合部より直線的に外方へ開く形態をなし，外面にタテヘラケズリ，内面にナデ，器受部内面にヘラミガキ調整が施されている。円孔はやはり穿たれていない。

(9) 鉢

底部より内湾しながら立ちあがり口縁部にいたる器形を呈するものであり，口径10cm前後の小形品である。識別できたものはそれぞれ容量・器形を異にしているので細分できる可能性をもつが，出土例が少ないので1類にまとめる。T4202，N10002，T20014である。これらの胎土は砂粒小石を含み壺B・壺C・壺Dと同じである。N10002は他より小さくT4202の約半分の大きさである。T20014は口縁部に粘土を貼付した折り返し口縁をもつ。調整はいずれもナデであるが，T20014の外面体部下位にヘラケズリをもつ。

(10) 小型丸底土器

丸底より内湾して立ちあがる体部は口縁部との間にくびれをなし，口縁はくびれよりほぼ直線的に外上方に開く器形をなす。出土したものは4点で，体部の形態によってA・Cの2種に分けることができる。

① 小型丸底土器A

くびれ部が器高の中位またはそれ以下に位置し，体部最大径より口径がかなり大きい器形をなす。T1303，T1808，T1705で，T1303だけ底部を欠くが，後二者は完形品である。T1303とT1808はほぼ同じ規模の土器だが，T1705はこの二者より一回り大きい。

調整は口縁部内外面にタテ・ナナメヘラミガキ，体部内面にヘラミガキが施されているが，T1303の体部内面はヨコナデ，T1705の口縁外面のヘラミガキは横位と異なる点もある。体部外面はT1305がヘラケズリ，T1705がヨコヘラケズリとやはり相異が見られる。全体的に丁寧な作りである。胎土は微細な長石，雲母を含むがよく精選されており，高杯Aの胎土と類似する。

② 小型丸底土器C

くびれ部が高い位置にあり，体部が球形に近く容量が大きい器形で，壺的である。T0129，U0101の2例だけである。

調整は外面口縁部に細かいハケメ調整の後ヨコナデ，体部にヘラミガキ，内面口縁部に細かなハケメ調整，体部に箆による調整がなされている。丁寧な作りであり，また胎土も砂粒・長石を含むが比較的よく精選されており，壺B・壺C・壺Dの良質のものに類似する。

(11) 小坩

最大径・器高とも10cm以下の壺形を呈するもので，出土土器のなかでは完形品の数が多い器種である。なかには1地点より焼土に数点が伴出する特異な出土状況を示すものもある。小坩は器高・容積の差によって小さいA，大きいBの2種に分けることができる。

① 小坩A

器高7～8cm，胴最大径6～7cmを計るもので，T5903，T5904，T5905，T5906，T3504，T10008がある。前述の一括土器はT10007～T10009の3点である。T5903～T5906も59号住居址より出土したものである。

これらの小坩の大きさはほぼ同一であるが，器形の変化に富む。T5905，T5906は胴部最大径が下位にあり，底部径が口縁部径より大きいフラスコ形の胴部をもち，T10007，T10009，T0130は器高のわりに口縁部が長くその比が⅓にも及ぶ器形をなし，反対にT10008は口縁部が短かい。T0130，S0202は胴部が強く張り出し，最大径が胴部上位にある。

調整は口縁部内外面をヨコナデ，胴部内外面をタテまたはナナメハケメ調整が一般的であるが，T10007は口縁部両面を，T3504は胴部外面をヘラミガキ調整している。胎土はT5904～T5906が細かな雲母，石英等のみを含み，比較的良質のものであるが，他は砂粒を多く含み，全体的に壺B・壺C・壺Dと同質であるといえる。

T3504は外面全域，口縁部内面に赤彩が施されている。

② 小坩B

器高が10cm，胴部最大径10cmほどで，胴部最大径が中位にあり球形をなす胴部に短かい口縁部がつくものである。T1809，T6904である。前者は広頸，後者は細頸である。

調整は口縁部両面にヨコナデ，胴部内面にヨコハケメ調整が施されているが，胴部外面はT1809がヘラミガキ，T6904がオサエと相違も見られる。T6904の内面のハケメ調整は密度の異なる2種類の刷毛を利用している。両点とも底部に木葉痕を有する。胎土は石英・長石を含むが，砂粒が多く壺B・壺C・壺Dと同質である。

(12) 小型土器

最大径・器高とも10cm以下で，小さな底部より内湾しながら外方へ広がる体部にわずかにくびれる頸部から外上方へ広がる口縁がつくものである。従来，椀や浅鉢などに分類されているものである。これらの土器は口縁の長さや開く角度に形態上の相違があり，短かくわずかに開く口縁のA，胴最大径と口径がほぼ同じB，口縁が大きく開くC，底部より直線的に外上方へ開くDの4種に分けることができる。

① 小型土器A

体部に1cmほどの短かい口縁部がつく器形をなし，最大径が体部上位にあるものである。T7205，T1902，T6602，U20003であり，調整・作りは異なっている。

T7205は口縁部を指でつまみあげて造り出され，口唇部は尖がっている。調整は外面に細かいハケメ調整の後ヘラミガキ，内面に入念なヘラミガキが施されている。口縁部外面が文様帯で，5本歯の櫛状具による直線文が巡らされている。胎土は良く精選されており，焼成も堅緻で他の小型土器とはまったく異なる。

U20003は口縁部外面に箆描沈線文が2条巡っている。T1902はT7205と類似した器形だが，あまり丁寧な作りではない。内外面は部分的にヘラケズリ調整がなされている。

T6602はわずかに他より口縁部が長く，頸部内面に稜を有する。調整は外面口縁部にヨコナデ，体部にタテハケメ，内面にヨコナデ調整がなされている。

小型土器Aに分類した土器は壺B・壺C・壺Dと同質の胎土が使用されているが，T7205のみ

は異質である。

② 小型土器B

口縁部の長さが2cmほどで小型土器Aより長く，胴最大径と口径がほぼ同じものである。容量(口径)の大小によってa・bに細分できるが，胎土は壺B・壺C・壺Dと同質である。

a類 口径が8cm前後を計るもので，T6305，T6602である。T6305とT1103は頸部が「く」の字に近く屈曲し，内面は対応した部分に稜をもつ。T1103は一回り大きく，調整はヘラミガキである。T6305は外面体部にハケメ，他はナデ調整である。

b類 口径6cm前後のもので，T4504，T20012である。前者は口縁が長い。調整は外面体部にハケメ，口縁外面・内面全域にナデ調整が施されている。

③ 小型土器C

小さな体部に長さ2cmほどの口縁部が大きく開くように接合されたものである。口縁部・体部の形態上の違いがあり，体部が底部より外上方に開き口縁に続くa類，体部が内湾して立ち上がり頸部で窄まり口縁に続くb類に分けることができる。

a類 T2213，T4505である。前者は胎土は比較的精選されているが，口縁部にナデ，以下はヘラケズリと調整は粗雑である。T4505は内外面とも細かなヘラミガキであり精製されている。赤彩が施されている。胎土は雲母・長石を含む精選されたもので，壺B・壺C・壺Dと異なる。

b類 T8104である。外面は体部上半以上にタテハケメ調整の上にナデ，下半にヘラケズリ，内面頸部にヨコハケメ，以下はオサエの調整がなされている。胎土は砂粒を多く含み，壺B・壺C・壺Dと同質である。

④ 小型土器D

底部より大きく直線的に開くものである。口径は底部径のほぼ2.5倍である。従来,浅鉢に分類されているものである。T2601，T7206，T20013の3点である。いずれも胎土はあまり精選されていないがハケメ調整の後に粗いヘラミガキ調整がなされている。

(13) 手捏ね土器

器高5cm以下の手捏ね成形のもので2種の器形がある。T1901，T4506，T6408などであり，このうちT4506だけが完形品である。T1901は壺形，T4506，S0203は椀形をなす。

調整は各土器ごと異なる。T1901の外面はヘラケズリの上にヘラミガキ調整が，内面はオサエ調整がなされている。T4506の口縁部外面は指頭によるオサエ痕が残存し，胴部は目の粗い刷毛による強い調整が施されている。胎土は微細な長石・金雲母などを含むが少なく脆弱である。T4506，T1706の胎土は精選されたものである。

(14) 台付甕と高杯・器台の接合法

台付甕の胴部と脚台部，高杯・小型高杯・器台の杯部（器受部）と脚部，および高杯状器台器受部の底部と口縁部等の接合方法に関して，いくつかの好資料に恵まれたので，ここにまとめて

整理しておく。

① 台付甕の胴部と脚台部の接合方法

甕AではT1701，T6101，甕B・甕C・甕DではT2001，N(05)—(12)01，NH401などがその資料である。これらは，脚台部の上端が閉じて断面凸形になるもの（T1701，T6101，T2001，NH401）と，脚台部の上端が閉じずに断面/\形になるもの（N(05)—(12)01）に分けることができる。前者の剥離した脚台部上面は，接合面に指頭による圧痕を巡らし，その上下に粘土紐による補強を行っている（T2001，T6101）。後者のN(05)－(12)01は，その断面観察から，生がわき状態の脚台部上端を胴部底に挿入し，接合部の周囲に粘土をつけたして結合したことが知れる。

② 高杯・小型高杯・器台の杯部（器受部）と脚部の接合方法

高杯ではT1501，U0102，U0204，小型高杯ではT1702，T1807，U0203，器台ではT1703，T20007などがその資料である。すべて別つくりの脚部と杯部とを組み合わせてつくったものである。U0204は脚部内面に細い棒を差し込んだような孔が残存している。これは脚部の上端を杯部底に挿入する際，脚部に心棒を入れていたことを示している。T1703，T20007，U0203は脚部が完全に剥離しており，同じく器受部底に脚部上端を挿入して接合したことがわかる。U0102，T1702，T1807は，脚部上端の全体に接合面をもつ。これについては，脚部のみを先につくり，その乾燥がすすんだ段階で杯部を上につぎたしたとも考えられる（関川　1976）。T1501は挿入法によらず，ただ接着させただけで結合している。

③ 高杯状器台杯部の底部と口縁部の接合方法

S10001がその資料である。底部接合面にはハケを施し，その内側では刻み目を巡らして，密着度を高めている。そして口縁部を接合した後，接合部の両側に粘土をつけたして結合している。

(15) 出土土器の組合せ

本遺跡群の出土土器は，これまでみてきたごとく，かなり多彩な内容を有しており，すべてが同一時期の所産でないことは明らかである。しかし，個々の遺構単位でみたとき，土器が量的にまとまって出土した例に乏しいため，各遺構における共伴関係と各遺構間の切合い関係とから，各種土器の相互関係（土器の組成）を知り，その変化の様相を確かめることは容易でない（第51表）。したがってここでは，出土土器のうちでもっとも資料に恵まれ，種類も豊富な甕Aと，他種土器との伴出関係を中心に観察することにしたい。

① 甕A_4・甕A_5に伴う土器群（月の輪新）

まず甕Aの各類（A_1類～A_5類）それぞれの他種土器との伴出関係をまとめると，次のごとくなる。

A_1類　T43で甕D_1・壺C_1と

A_2類　T56で壺D_2と

A_4類　T13で小型丸底土器Aと

　　T18で壺C_3・小型高杯A・小型丸底土器Aと

T45で小型高杯A・小型土器C（小型丸底土器Aのミニチュア的なもの）と

A_5類　T11で小型土器Bと（ただし覆土中）

T16で壺C_3・小型高杯Aと

T33で甕D_2と

T37で甕D_2と

A_4類・A_5類　T62で壺Aと

S01で甕D_2と

A_2類～A_5類　T01で壺D_2・1類下ぶくれと2類球形の壺体部・小型壺A・小型壺E・小型高杯A・小型丸底土器Cなどと

これから甕A_4・甕A_5は，甕D_2・壺C_3・小型高杯A・小型丸底土器Aまたは小型土器Cと結合することが予想できる。

小型高杯Aは他にT22上とU02で，小型丸底土器AはT17において，それぞれ出土している。その出土土器を抽出すると，次のごとくである。

T17　小型丸底土器Aと小型器台A・甕A脚台部

T22上　小型高杯Aと小型器台A・甕A脚台部

U02　小型高杯Aと甕D_3・1類球形の壺体部

これから，T17とT22上にみられて，他に出土例のない小型器台Aも，甕A_4・甕A_5に伴う土器群に加えることができるだろう。

月の輪平遺跡には11軒の被火災住居址があるが，このうちのT15，T18，T20，T33，T62，T64，T72，T76の8軒は，同時に類焼した可能性の高いものである（II参照）。この住居址群には，T18，T33，T62の3軒が含まれていることからみれば，他の5軒の被火災住居址出土の土器も，甕A_4・甕A_5に伴う土器群に含めることができるだろう。そこで各住居址の出土土器を抽出すれば，次のごとくである。

T15　高杯A（杯部が浅い）

T20　小型器台D

T64　甕C_2・甕D_2と甕D_3・壺D_3

T72　甕D_2

以上をまとめると，甕A_4・甕A_5は甕D_2・壺C_3・小型高杯A・小型器台A・小型丸底土器Aまたは小型土器Cと結合することと，この土器群に甕C_2・甕D_3・壺A・壺D_3・高杯A（杯部が浅い）・小型器台Cなどが加わる可能性のあること，を指摘できよう。とすれば，この甕A_4・甕A_5に伴う土器群の編年的位置は，「五領式土器」併行期に特徴的な器種である小型高杯A（市川・岩崎1971）・小型器台（関根1974）・小型丸底土器A（岩崎1973）を組成に含むことから，駿河湾地方の古式土師器である「大廓式土器」に相当するものと考えられる（小野1970・同1972，ただし細部では相違がある）。

②　先行すると思われる土器群（月の輪古）

本遺跡群には，甕A_4・甕A_5に伴う土器群のほかに，これに先行すると思われる土器群がある。しかし，資料が一層断片的で，組成を復原することは困難である。ここでは，可能性のある個々の土器について，少し考えてみたい。

上記したごとく，T43においては甕A_1が甕D_1・壺C_1と伴出し，T56では甕A_2が壺D_2と共伴している。この甕D_1・壺C_1・壺D_2は，甕A_4・甕A_5に伴う例がなく，先行する土器群を構成する可能性が高い。そこでこれらの共伴関係を抽出してみると，次のごとくなる。

T35　甕D_1と甕D_2

T41　壺C_1と壺C_2

T69　壺C_1と高杯A（T1501より杯部が深い）

本遺跡群において同じく甕A_4・甕A_5と共伴せず，したがって甕A_4・甕A_5に伴う土器群に含まれなかった，次のものも先行する土器群を構成する可能性がある。

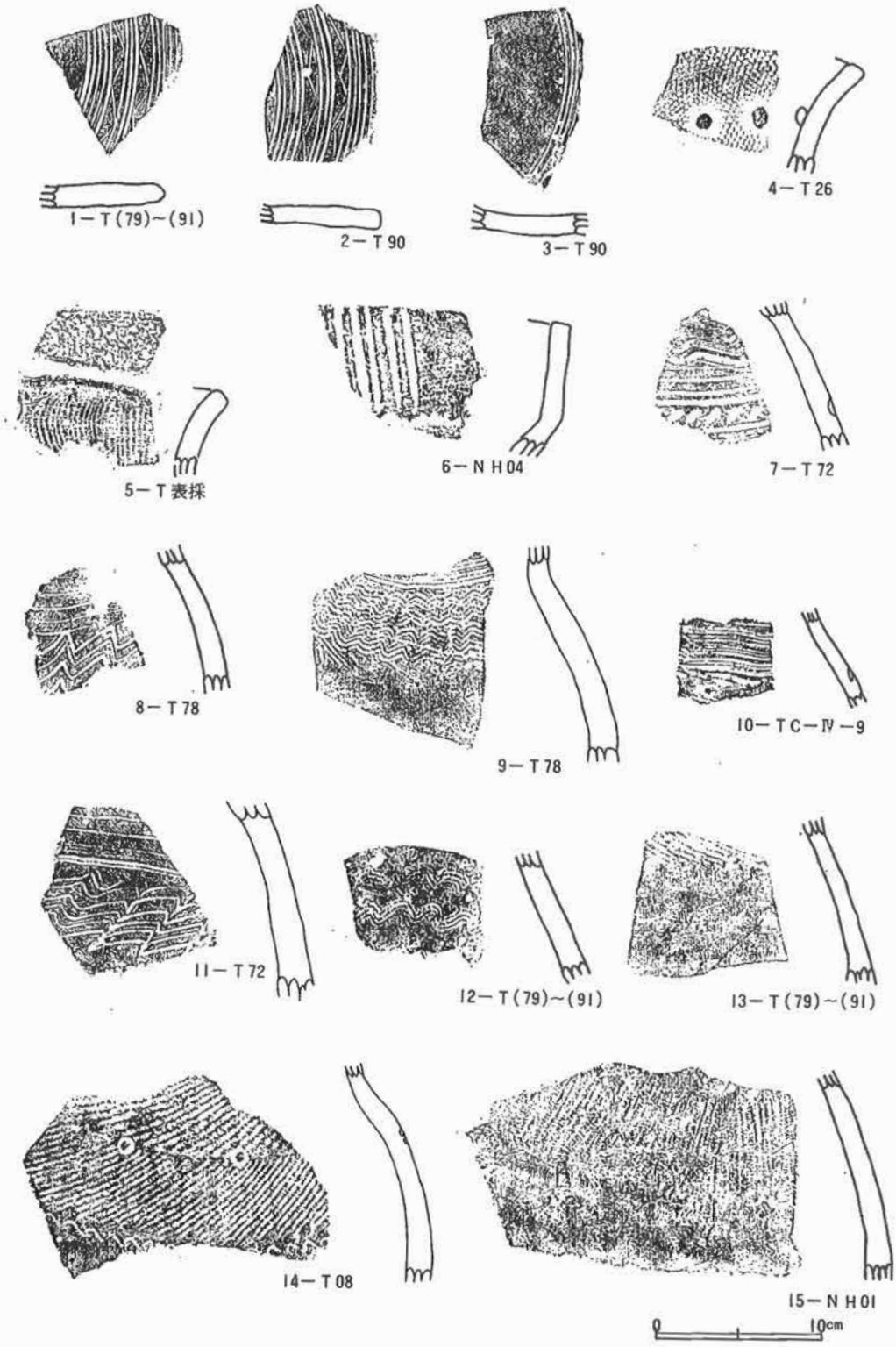
T04　甕D_2・小型高杯B（T1501だけでなくT6905よりも杯部が深い）

T59　大型壺B（T56より古い）

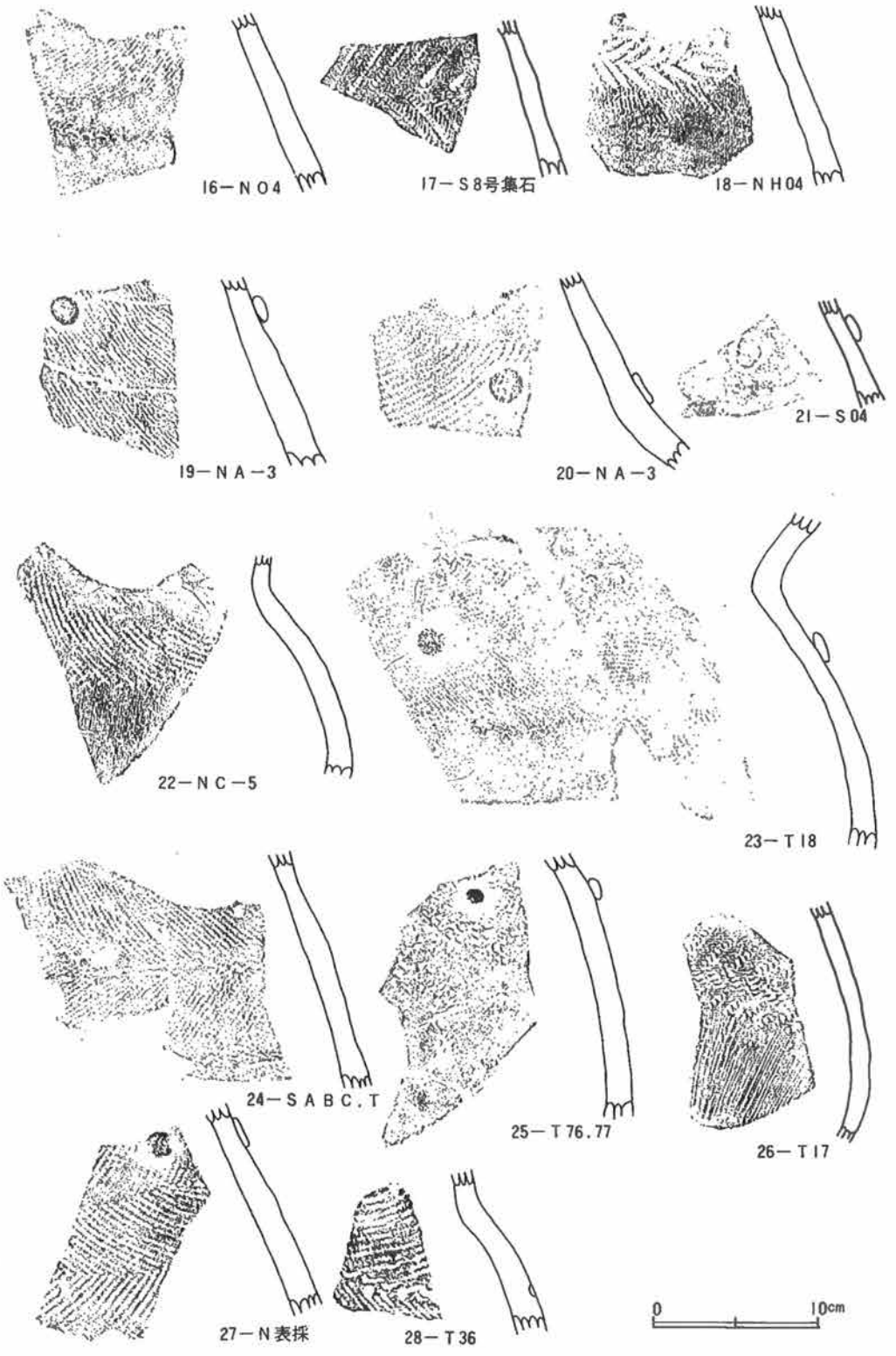
T78　壺C_2・壺D_1

N12　甕B・甕F（T1501と同じく杯部の浅い高杯Bをもつ方形周溝墓群より古い）

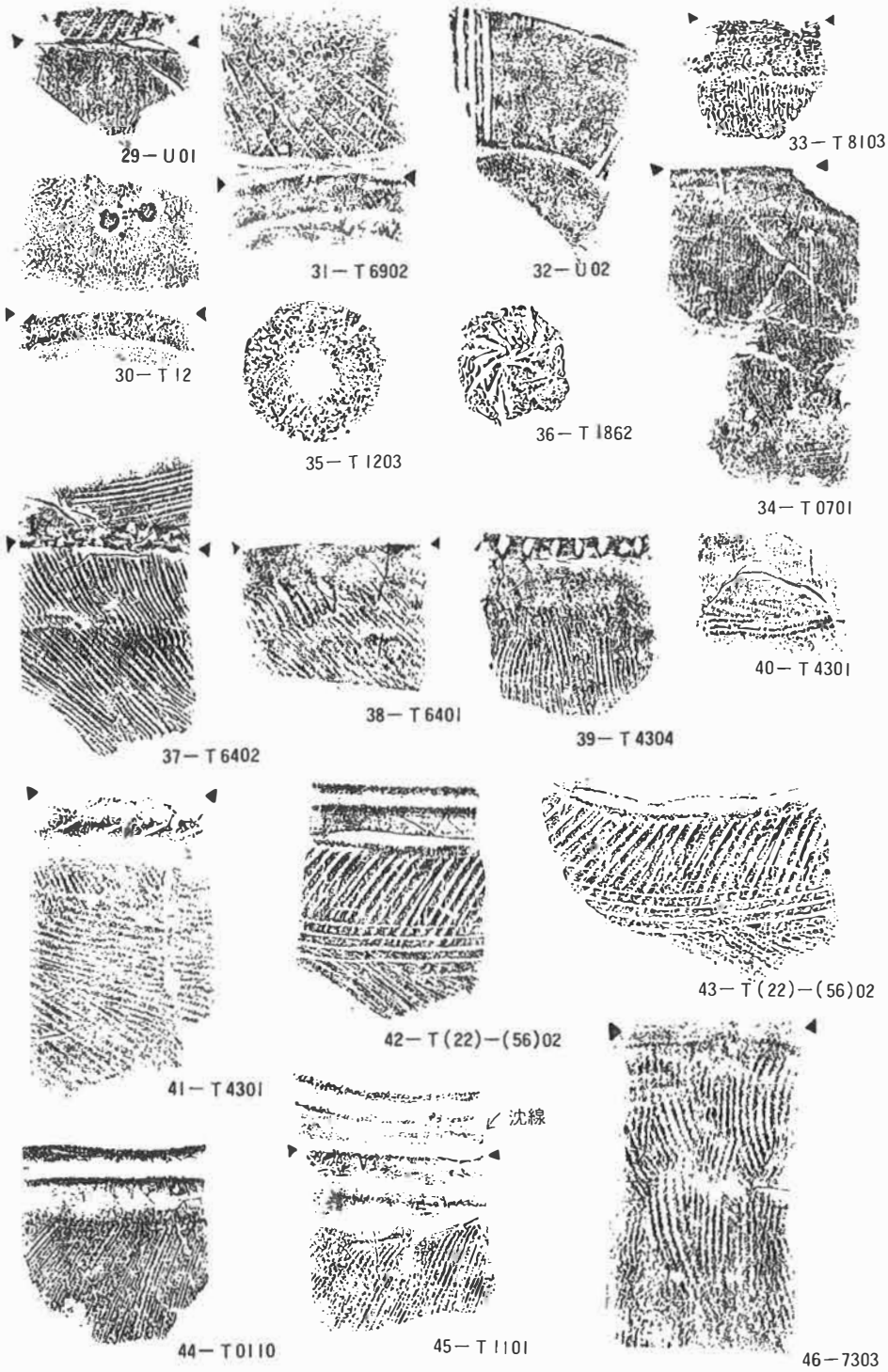
以上をまとめると，「甕A_4・甕A_5に伴う土器群」に先行すると思われる土器群は，甕A_1と甕A_2・甕B・甕D_1・甕D_2・甕F・大型壺B・壺C_1と壺C_2・壺D_1と壺C_2・高杯Aと小型高杯Bなどから構成される可能性が強いといえる。しかし，これらの相互関係をほとんど把握できないため，土器の組合せを正しく復原することは不可能といえる。（湯川）



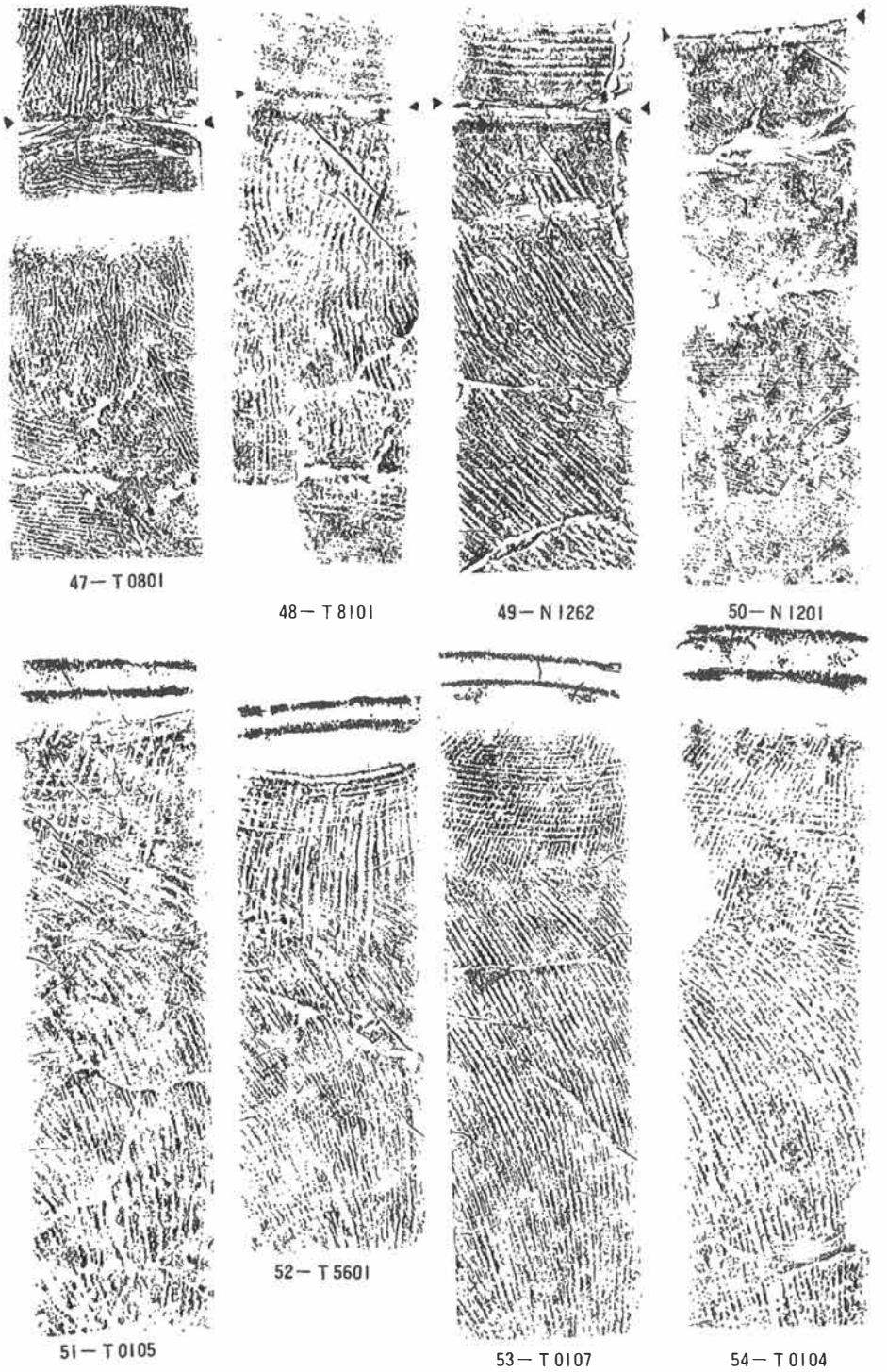
第86図　壺・高杯の文様拓影－1



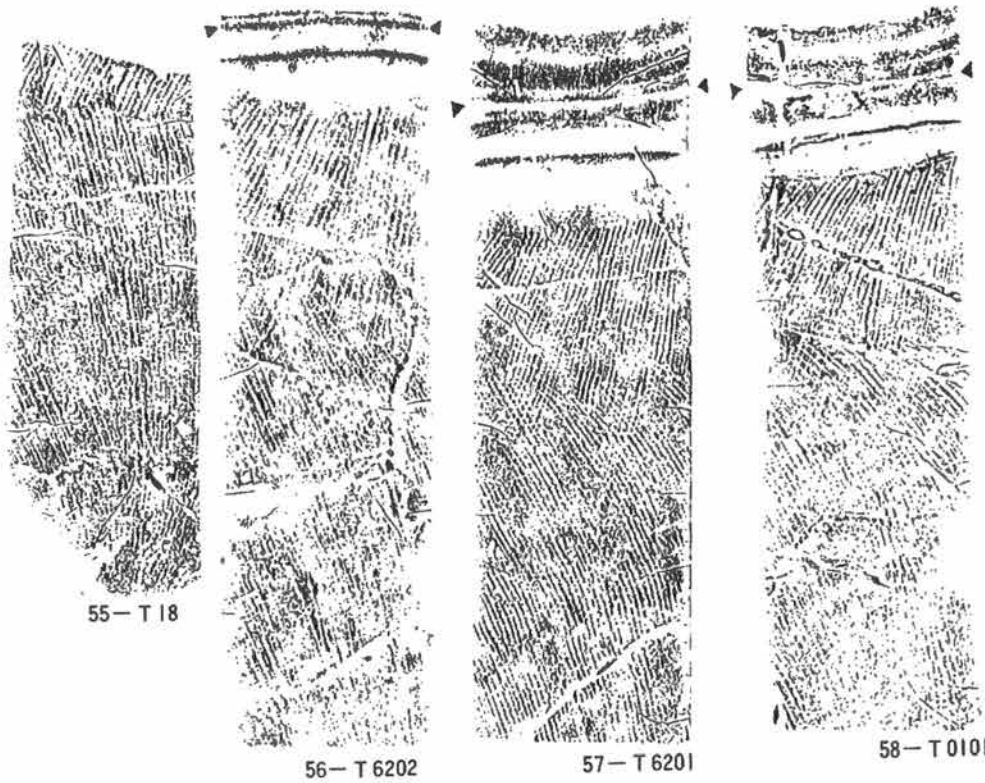
第87図　壺・高杯の文様拓影－2



第88図　壺・甕の調整、施文拓影－1



第89図　壺・甕の調整、施文拓影－2



第90図　壺・甕の調整、施文拓影－3

器種分類

大型甕D　単純口縁の台付甕で，頸部がほとんどしまらず，鉢状を呈する。最大径は口縁部にあり，30cmを越える。本遺跡群では出土していない。

甕A　台付甕で，口縁部をS字状に屈曲させるもの。肩の張った無花果形の胴部と，端部を内側に折り返した台部を有し，器壁がきわめて薄いのが特徴である。

甕B　台付甕で，外反する口縁部の端部外側を削って面とりするもの。

甕C　台付甕で，外反する口縁部の端部外面に粘土紐を貼りつけて折返し口縁にするもの。

甕D　台付甕で，ゆるやかにまたはくの字状に外反する単純口縁をもつもの。

甕E　平底甕で，ゆるやかにまたはくの字状に外反する単純口縁をもつもの。本遺跡群では出土していない。

甕F　底部が外方に突出した小さな平底で，中央に不整形な凹みをもつ。くの字状に外反する口縁部は，端部で上方に突出したり，端部外側を削って面とりする。

甕G　丸底甕で，くの字状に外反した口縁部の端部が内側に肥厚する。球形の体部は内部全体を箆で削って器壁をきわめて薄くする。本遺跡群では出土していない。

大型壺B　口縁部の径が25cmを越える大型品。壺Bを大きくしただけの口縁形態を呈するものもあるが，さらに口縁端部の内側に幅狭い粘土帯を重ね合わせるものが多く，特徴的である。

壺A　二重口縁をつくるに，外反する口縁下位に同じく外反する口縁上位を継ぎ合せることによって造作したもの。二段口縁と呼ばれているものである。

壺B　二重口縁をつくるに，口縁下位の外側に粘土帯の一部を重ね合わせることによって造作したもの。複合口縁と呼ばれているものである。

壺C　二重口縁をつくるに，口縁端部の外側に幅狭い粘土帯をすべて重ね合せることによって造作したもの。折返し口縁と呼ばれているものである。

壺D　単純口縁で，壺A～壺Cと同じく口縁部が長く，頸部と口縁部との径の差が大きいもの。

壺E　単純口縁で，口縁部が短く，頸部と口縁部との径の差が小さいもの。

壺F　長く単純な口縁部がまっすぐ外上方へ延びる，直口縁とよばれているものである。本遺跡群では出土していない。

小型壺A　口縁部の径が15cmに満たない小型品。二段に外反する口縁部と，下半部に小孔を穿つ体部をもつ。

小型壺D　短く立ち上がる頸部に外上方へひらく単純な口縁部をつける。

小型壺E　単純な短くひらく口縁部と，広頸，球形の体部をもつ。

高杯A　杯部の底部と口縁部との境界に稜を形成し，口縁部が外上方へ外反するもの。

高杯B　杯部に稜をもたず，口縁部が内湾して立ち上がるもの。

高杯C　稜をもたずに直線的に外上方へひらく杯部が，端部近くで内湾気味に立ち上がる。本遺跡群では出土していない。

小型高杯A　脚部が大きくひらき，脚部底径が杯部口径を凌駕するものである。この小型高杯Aは杯部の形態によってa・b２類に分けられる。a類は，杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈折し，口縁部が外上方へ外反する。b類は，杯部に稜をもたず，丸く内湾して立ち上がる。

小型高杯B　小型品で，高杯A～高杯Cと同じく，杯部口径が脚部底径を凌駕するものである。

高杯状器台　杯部の底部と口縁部との境界に鍔状の突帯を有し，大きく外反する口縁部には長円形の透し孔を穿つ

器台A　器受部の底部と口縁部との境界に稜を形成し，口縁部が外反するものである。

器台B　器受部の端部が短く立ち上がり，尖り気味に終るものである。本遺跡群では出土していない。

器台C　器受部が内湾気味にひろがって，端部に変化のない小皿状となるものである。本遺跡群では出土していない。

器台D　器台Cと同じく器受部の口縁部に変化がなく開口するものであるが，器受部口径と脚部底径との差が小さく鼓状を呈する。器高は相対的に低い小形品である。

器台E　器台Cと同様の形態をとるが，器高が相対的に高い大形品である。本遺跡群では出土していない。

鉢A　口縁部が短く外反し，体部と口縁部との境界内側に稜を形成する。小平底の小型鉢である。本遺跡群では出土していない。

鉢B　口縁部が二段に屈曲してひらく，丸底の小型鉢である。本遺跡群では出土していない。

鉢C　口縁部の径が10cm前後の小形品で，形態にバラエティーがある。

鉢D　口縁部の径が15cm前後の大形品で，形態にバラエティーがある。本遺跡群では出土していない。

小型丸底土器A　張りが小さく扁平な体部と，外上方へ大きくひらく口縁部をもつ。口縁部径が体部最大径を凌駕する。

小型丸底土器B　半球状で小さめの体部と，外上方へ大きくひらく口縁部をもつ。口縁部径が体部最大径を凌駕するが，差は前者より小さい。本遺跡群では出土していない。

小型丸底土器C　体部が大きく球形をなし，口縁部は小さく外反する。口縁部径は体部最大径に比べて同大かやや大きい。

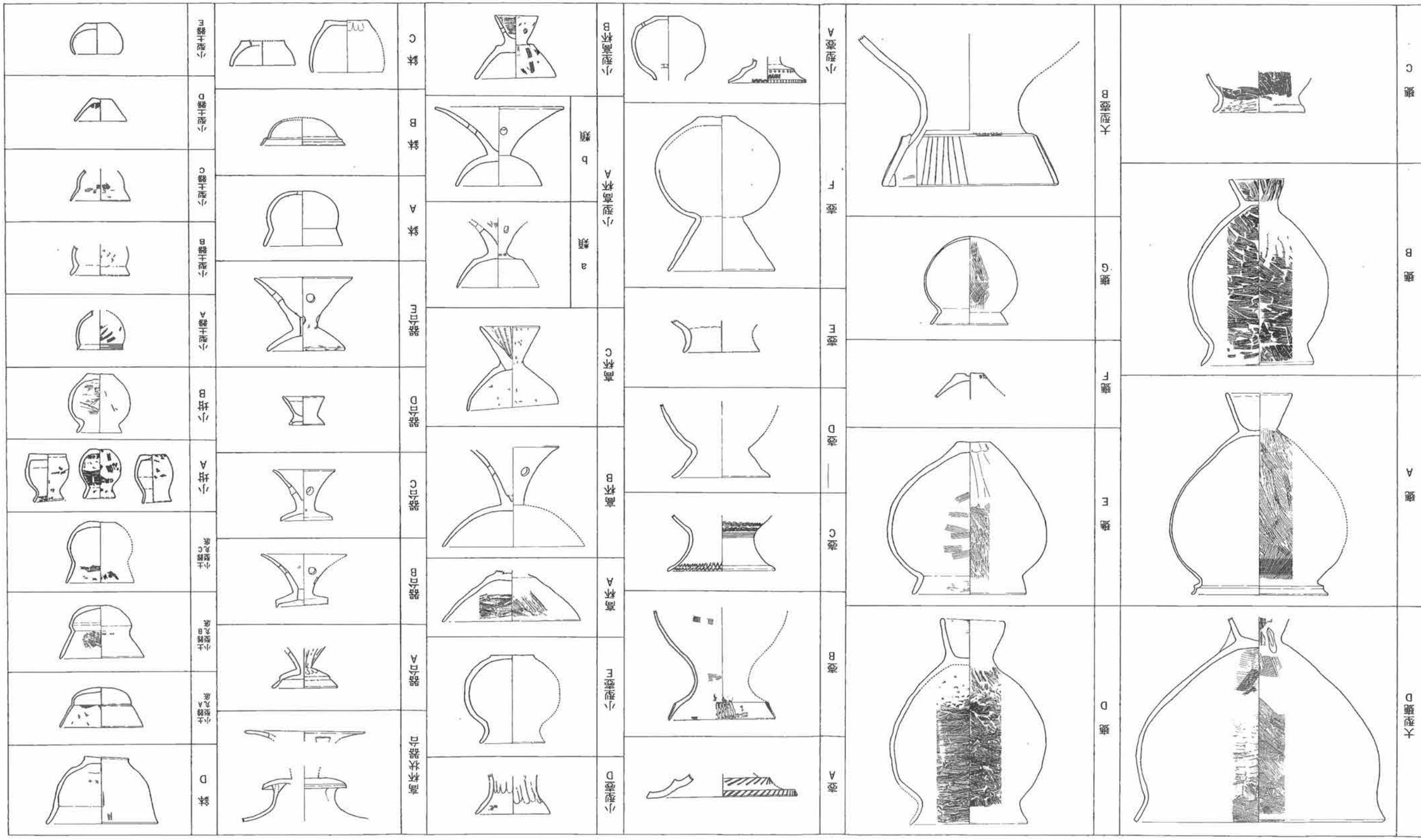
小坩A　器高７～８cm，体部最大径６～７cmの壺形を呈する小型土器で，形態にバラエティーがある。しばしば数個かたまって発見される。

小坩B　器高，体部最大径とも10cmほどで，小坩Aより大形の壺形を呈する小型土器である。

小型土器A　口縁部が短く外反し，体部と口縁部との境界内側に稜を形成する。口縁端部は尖るものが多い。

小型土器B　小型土器Aと似るが，口縁部がやや長い。容量の大小によってa・b２類に細分できる。鉢Aに似た形態の小型土器である。

小型土器C　小型丸底土器に似た形態の小型土器で，半球状の体部と外上方へひらく口縁部をも



大型甕D

甕A

甕B

甕C

甕D

甕E

甕F

甕G

大型壺B

壺A

壺B

壺C

壺D

壺E

壺F

小型壺A

小型壺D

小型壺E

高杯A

高杯B

高杯C

小型高杯A

a類

b類

小型高杯B

高杯状器台

器台A

器台B

器台C

器台D

器台E

鉢A

鉢B

鉢C

鉢D

土器A 小型丸底

土器B 小型丸底

土器C 小型丸底

小坩A

小坩B

小型土器A

小型土器B

小型土器C

小型土器D

小型土器E

第91図　器種分類図

つａ類，球形の体部と小さく外反する口縁部をもつｂ類に分けられる。

小型土器Ｄ　底部から外上方へ直線的にひらくものである。

小型土器Ｅ　大きめの平底から内湾しながらひろがるものである。

手捏ね土器　器高５㎝以下のきわめて小型な手捏ね成形のもので，壺形と鉢形の２者がある。

2　出土土器の編年的位置(1)―月の輪新について―

本遺跡群の出土土器は，前項でみたごとく，古式土師器の「大廓式土器」(注１）に相当すると考えられる甕A_4・甕A_5に伴う土器群（月の輪新）と，これに先行すると思われる土器群（月の輪古）とに分けることができる。しかし後者は，土器の出土量が乏しく，セットも不完全で，その時期の比定に微妙なものがある。そこで，本遺跡群において中心的位置を占める前者について先に検討し，その後で後者の編年的位置を考えてみたい。

(1)　主要遺跡の大廓式土器

大廓式土器は，沼津市大廓遺跡出土の土器を標式とするが，同漆畑遺跡，同目黒身遺跡，同広池遺跡，駿東郡清水町矢崎遺跡などのほか，最近では沼津市藤井原遺跡からまとまった土器が検出されている。以下，大廓式土器の器種構成と特色を明らかにするため，主要遺跡の出土土器を，甕Ａと小型精製土器群を伴うものを中心に概観する。

①　沼津市大廓遺跡Ａ住居址

本住居址出土の土器には，大型甕Ｄ，甕Ａ・Ｄ，壺Ｃ，小型壺，鉢Ｄ，高杯Ａ・Ｂ，小型高杯Ｂ，小型土器(?)が出土している。甕Ａには，A_1の口縁部破片と，A_4の台部と口縁部の過半がある。３個体出土した甕Ｄは，さまざまな器形を呈するが，いずれも平縁のD_2である。壺Ｃの口縁部破片は，端部外側にやや厚手の粘土帯を重ねており，内面には単節斜縄文と円形浮文がみられる。鉢Ｄは２個体出土した。体部と口縁部との境界内面に稜を作り，短い口縁部が外傾してのびる。

②　同Ｂ住居址

本址出土土器には，甕Ｄ・Ｅ，大型壺Ｂ，小型壺Ａ，高杯Ａ，小型高杯Ａ，小型土器Ａ・Ｂがある。甕Ｄは，いずれも口縁端部の刻み目がみられないD_2である。小形品の３個体は，口縁部径と胴部最大径がほぼ同大で，頸部のクビレを手で絞って作る。甕Ｄから台部をとった形の甕Ｅは２点出土しているが，ともに小形品である。小型壺Ａは，頸部が直立し，口縁部が屈折して開くａ類である。口縁端部に刻み目を連続させ，その下に細かく弱い櫛描波状文を重ね，中央の稜線上部には竹管文を囲繞させる。口縁部内面には外面同様の波状文をめぐらす。内外面とも丁寧に箆で磨いた精良品。小型高杯Ａは，杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈折し，口縁部が外上方へ外反するａ類である。

③　沼津市漆畑遺跡住居址

大型甕Ｃ，甕Ａ・Ｄ，大型壺Ｂ，壺Ｃ，小型壺Ｅ，小坩Ｂ，高杯，器台Ｅ，小型丸底土器Ｂ，小型土器Ｅ，それに甑(?)がある。大型甕Ｃは，端部を「折返し口縁」に作り，他遺跡の例と異なる。大型壺Ｂも，口縁端部の内側に幅狭い粘土帯を重ね合わせることなく，他遺跡の例と異なる。甕Ａは，肩部外面に櫛描直線文がなおみられるA_3であり，甕Ｄは，刻み目のないD_2である。壺Ｃは，ともに無文で，口縁部が大きく外上方へ外反し，端部外側に厚手のしっかりした粘土帯を重ね合わせる破片と，窄まった頸部から口縁部が短く外湾しながら広がる完形品とがある。後者は

単純口縁の壺Eに対応するものであろう。なお壺の胴部破片には，羽状縄文と円形浮文，連鎖文を組み合わせたものがある。小型土器Eは，大きめの平底から内湾しながらひらいた体部が，そのまま内傾する口縁部につづく。

④　沼津市目黒身遺跡第1号方形周溝墓

大廓式土器は，住居址の半数近くと，方形周溝墓，井戸址その他の遺構から出土したという。しかし，このうちで具体的なセットを知ることができるのは第1号方形周溝墓のみである。同周溝墓の周溝内からは，甕A，壺D，鉢C，高杯脚部，器台Aが出土している。甕Aは，肩部外面に直線文を巡らすA_3である。壺Dは，口縁部が外湾しながら広がるD_2である。鉢Cは口縁部が折返し口縁になる。

⑤　沼津市広池遺跡

住居址など遺構と思われるものは発見されていない。出土した土器片は，比較的新しい土師器や須恵器も認められるが，大半が大廓式土器という。器種には，甕A・D，大型壺B，壺C・D，高杯，小型高杯A(?)などがある。甕Aには，肩部外面に櫛描直線文を巡らすA_3と，施さないA_4とがある。甕Dは，球形の体部と短く外反する口縁部を有するD_3で，口縁端部に刻み目をもたない。壺Cは，口縁部が大きく外上方へ外反し，端部外面に厚手のしっかりした粘土帯を重ね合わせるC_3である。内面には単節斜縄文を施している。壺Dも，外上方にまっすぐひらく口縁部をもつD_3である。

⑥　沼津市藤井原遺跡溝SDO

古墳時代初頭の遺構には，竪穴式住居址82基，掘立柱建物状遺構9基，井戸址2基，溝状遺構6条などがある。しかし現在まだ整理中のため，各遺構ごとに器種の組成を把握することができない。ここでは，全長125mまで確認されている溝状遺構SDOの上層より出土した多量の土器から，一部抽出して紹介する。大型甕Dは，鉢状の台付甕で，やや内湾しながら大きく開いた胴部が，頸部でややくびれて，短く外傾する口縁部に移る。台部・胴部の接合部には，支柱状の隆起を3本もつ。甕にはA・D・E・Gの4種があるが，Dが最も多く，Aもかなりある。E・Gは稀である。甕Aでは少なくともA_2・A_3・A_4の3類がある。A_2は稀であり，A_3・A_4がほぼ同量づつある。甕DにはD_2とD_3がある。甕Gは，短く外反する口縁部を有し，端部が内側に肥厚する。体部は球形の胴部に丸い底部をもつ。口縁部の内外面は横になで，体部は外面を刷毛目で調整し，内面を横方向に箆で削る。器壁は非常に薄く，胎土・焼成とも良好。大型壺Bは1個体以上存在することが確かめられているが，復原できない。壺にはA・B・C・D・Fの5種があるが，Cが主体を占める。壺Aでは，直立した頸部が上方で水平に広がり，さらに口縁部が外反するa類と，口縁部が二段に屈曲して外上方にひらくb類とがある。前者は底部を焼成後に穿孔しており，後者は口縁部の内外面に羽状の櫛描列点文を加えている。壺Bは，内傾して立ち上がる頸部が上方で横方向に広がり，さらに口縁部が外上方にひらく。外観が壺Aa類と類似する。肩部外面に斜縄文(2段)と連鎖文，円形浮文からなる文様帯をもち，口縁部外面には箆描の棒状沈文を加える。壺CにはC_1・C_2・C_3の3類があり，C_2・C_3が主体を占める。口縁部高が相対的に低くなっており，

口縁端部に重ねる粘土帯は厚手のものが目につく。無文の例もあるが，肩部外面と口縁部内面とに，単節斜縄文と連鎖文，円形浮文からなる文様帯をもつものが多い。壺Dは形態変化に富んでおり，口縁部がやや外湾してひらくもの，まっすぐ外上方にひらくもの，内湾気味に立ち上がるものなどがある。このうち内湾気味に立ち上がる例では，口縁端部を内側に面とりする。壺Fは，長い口縁部がまっすぐ外上方にひらく直口縁壺で，頸部は細くしまり，体部は球形・平底である。鉢Cは形態の変化に富んでおり，いろいろな種類が指摘できる。たとえば折返し口縁を呈するもの，大きめの平底から内湾しながらひらいた胴部が，そのまま口縁部につづくもの，くの字状に長く外反する口縁部の端部が内側に肥厚するもの，口縁部がS字状に屈曲するものなどである。高杯も，同じく多様な形態をみせるが，杯部の底部と口縁部との境界に弱い稜をつくる，高杯Aが主体を占める。この高杯Aは，胎土，色調，調整手法によって大きく2類に分けられる。精良品のa類には，口縁端部の内側を箆で直線的に切取って面とりするものがみられる。高杯Cは，稜をもたずに直線的に外上方へひらいた杯部口縁部が，端部近くで内湾気味に立ち上がる。やや粗質のもので，後期弥生土器とされる資料に例品が多い。この他では，特殊なものとして，丸く内湾して広がった杯部が接合部で一旦くびれて，大きく外反する口縁部へ移るもの，杯部が底部から口縁部へ屈折して移行し，大きく外反する口縁部の端部外面にわずかな凹部を形づくるものなどがある。器台には，少なくともA・B・C・Eの4種がある。器台Aは，器受部と口縁部との境界が明瞭な稜をつくり，口縁部は外湾しながらひらく。器台Bは，水平に近くひらいた器受部が，端部で上方に突出する。器台Cは，器受部が内湾気味にひらいて皿状となるもので，出土量はもっとも多い。この器台Cには，器受部中央に貫通する孔を穿ったものと，貫通孔のない両者がある。器台Eは，器台の中では大形品で，器高が高杯に近い。器受部は外上方に直線的にひらく。小型丸底土器にはBがある。口縁部は外上方に大きくひらき，頸部がくの字状にくびれて半球形の胴部に移り，小さな平底で終る体部をもつ。口縁部径は，胴部最大径より大きいものが多いが，小型丸底土器Aに比べるとその差は接近している。他に，小型高杯A・B，小坩A・B，小型土器A・B・Eなどがある。

⑦ 駿東郡清水町矢崎遺跡

本遺跡出土の土器は，層位により矢崎Ⅰ式から矢崎Ⅴ式まで分類されている。このうちの第3層最上部より出土した矢崎Ⅴ式が，大廓式土器に相当する。出土土器には，甕A・D，壺，高杯A，小型高杯A，小型器台A，小型土器E，手捏土器などと，特殊なものとして手焙形土器がある。甕Aは肩部外面の櫛描直線文がなくなったA_4，甕Dは口縁部がくの字状に外反するD_3が多いらしい。壺には肩部外面に羽状文をもつ例がある。手焙形土器は小さな平底である。

(2) 大廓土器の器種と器種構成

ここでは，各遺跡別に出土土器を概観した結果をもとに，大廓式土器を構成する器種・器形についてまとめてみたい。そして，その器種・器形のそれぞれに関して，系累と性格を確かめることで，大廓式土器の器種構成の特色も，あわせて明らかにしてみたい。

① 甕

容量の点から，まず大型甕と甕とに区別できる。大型甕にはC・Dの2種があるが，Dが主体を占めるらしい。甕にはA・C・D・E・Gの5種があるが，A・Dが主体を占める。この甕は，基本的形態よりすれば，台付甕のA・C・D3種と，平底甕E・丸底甕Gに分けられる。また，胎土・焼成・色調や調整手法から観れば，甕A（Ṡ字状口縁台付甕）と甕G（口縁端部が内側に肥厚する丸底甕）が，他の3種（甕C・D・E）と大きく異なる。

大型甕　口縁部の径が30cmを越える大型甕には，C・Dの2種がある。折返し口縁の大型甕Cは，普通の甕と同じく，最大径が胴部にある。一方単純口縁の大型甕Dは，最大径が口縁部にあり，頸部はほとんどしまらず，鉢状を呈する。胴部・台部の接合部には，支柱状の隆起を3本もつ。静岡県下では，浜名郡舞阪町浜名湖弁天島海底遺跡と浜松市村東遺跡にDが見られる。相模湾地方では，伊東市内野町遺跡にC，神奈川県持田遺跡にC・Dの類例がある。しかし，駿河湾地方の後期弥生土器には，今のところ類例が乏しく，静岡市登呂遺跡のCがあるのみである。

甕A　この種の土器は，近畿地方から関東地方にかけて広く分布するが，その中心が伊勢湾地方にあることは疑いない。伊勢湾地方のṠ字状口縁台付甕は，非常に薄手ではあるが内面箆削りの痕跡がなく，内面をなでて平滑に仕上げている。一方，外面には独特の粗く強い刷毛目を何回も重ねて，器壁を薄くしている。色調は黄灰色～灰褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含み，堅緻に焼き上がっている。月の輪平遺跡第56号住居址と藤井原遺跡溝状遺構ＳＤＯ出土の甕A_2は，こうした伊勢湾地方のものと近似した特徴を保持しており，伊勢湾地方で製作されて，この地にもたらされた可能性が大きい。しかし月の輪平遺跡第1号住居址出土の甕A_2や，出土例の大半を占める甕A_3～A_5は，尾張などのものと明らかに異なる点があり，伊勢湾地方からもたらされたものとは見做し難い（注2）。甕Aに特有の胎土・色調と硬い焼きは，おそらく器壁を薄くつくる技法と，それに随伴する他の器形と異なった焼成法の結果であろう（注3）。したがって，製作地の問題は他の面から考えなければならない。甕A_4～A_5は，器面の刷毛目が細かくかつ弱くなって，共伴する甕Dの刷毛目に類似する。また，刷毛目の重複も少なくなって，下に外面箆削りの痕跡をみせるものさえ出現する。この原因の一つは，器壁を薄くつくるための役割が，刷毛目から外面箆削りへより移った結果に違いない。しかし，甕Aの胴部に無花果形のほか球形を呈するものが出現し，甕Dに球形とともに無花果形の胴部をみることと，相通じる現象でもあろう。この地で受容製作された可能性も考慮する必要があると考える。

Ṡ字状口縁台付甕の細分は，すでに大参義一・安達厚三によって試みられている（大参1967，同1968，安達・木下1974）。それゆえ，甕Aの各類とそれらとの対応関係を確認しておきたい。A_1は，安達分類のⅠ類，大参分類の欠山期a類に当る。A_2は，安達分類のⅡ類に相当する。A_3は，安達分類のⅢ(A)類～Ⅲ(B)類，大参分類のb類に当り，A_4・A_5は，安達分類のⅢ(B)類～Ⅳ(A)類に相当すると思われる。

甕G　藤井原遺跡溝状遺構ＳＤＯから出土した甕Gの特色は，(1)体部内面全体を箆で削って器壁を薄くし，体部外面は刷毛目で調整する。(2)球形の胴部に丸い底部をもち，くの字状に外反した

口縁部の端部が内側に肥厚する。(3)淡褐色を呈し，胎土・焼成は比較的良質である。近畿地方の「布留式土器」に普遍的な甕と，明らかに共通する特徴を保持している。したがって，大和など近畿地方で製作されて，当地へもたらされた可能性が大きい（注４）。ところで，従来「布留式土器」と汎称されてきた一群の土器については，大和の資料をもとに，編年的細分を試みた研究がいくつか発表されている（安達1969，安達・木下1974，関川1976）。それらによれば，この甕Ｇは，「布留式土器」の中でも比較的古い段階のものに相当するらしい。

甕Ｃ・甕Ｄと甕Ｅ　この３種の甕は，形態・容量だけでなく，胎土・色調や調整手法まで近似する。駿河湾地方の後期弥生土器との系累が容易に看取できる，お互い関係の深い一群のものといえる。この３種のうちでは，甕Ｄが主体を占める。甕Ｄには小異があり，D_2とD_3とに細別することができる。しかし，いずれも平縁で，刻み目は消滅している。甕Ｅでは，大形品が少ない。単純口縁台付甕は，当地方の後期弥生土器においても，最も一般的な器形である。一方折返し口縁台付甕は，後期弥生土器においても類例が乏しく，富士宮市滝戸遺跡や静岡市登呂遺跡などに，いくつか知られるのみである。大廓式土器において，甕Ｄが甕Ａとともに主体を占めて，甕Ｃの出土例が少ないことは，当地方の後期弥生土器における両者の関係と，相通じる現象に違いない。また，平底甕Ｅの出現は，東日本におけるこの時期前後の甕の推移を通観するならば，平底の甕が一般的となる次の時期への第一歩と評価できる。結局この一群の甕は，後期弥生土器の甕と「和泉式」併行期の甕との間に位置するにふさわしい内容からなっているといえよう。

②　壺

容量の点から，まず大型壺，壺，小型壺に区別できる。大型壺にはＢがある。壺には，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの６種がある。このうち，壺Ａ～壺Ｃが二重口縁を呈するのに対し，壺Ｄ～壺Ｆは単純口縁をなす。壺の主体を占めるのは壺Ｃである。小型壺にはＡ・Ｄ・Ｅの３種があるが，出土量は多くない。

大型壺Ｂ　これには，壺Ｂを大きくしただけの口縁形態を呈する漆畑遺跡例もあるが，さらに口縁端部の内側に幅狭い粘土帯を重ね合わせるものが多く，特徴的である。静岡県下では，浜名郡舞阪町浜名湖弁天島海底遺跡，榛原郡川崎町白鬚遺跡，藤枝市下藪田遺跡，清水市寺崎Ｉ遺跡などに見られる。隣接する地方では，長野県下蟹河原遺跡，神奈川県持田遺跡に類例がある。この他には，遠く離れた奈良県纒向遺跡に，壺Ｂ・壺Ｃとともに例がある。分布状態から観ても，駿河湾地方に特徴的な，独自性の強い口縁部をもつ，大型壺といえる。

壺Ａと小型壺Ａ　佐原真は，「畿内第Ｖ様式」の二段口縁壺に関して，口頸部の発達に２つの系統があることを指摘している（佐原1968）。すなわち，短く立ち上がる部分と屈折して外方へひらく部分とにわかれる形態の頸部に口縁部を付加したａ類と外湾しながら単純にひらく形態の頸部に同様の口縁部を付加したｂ類とである。そしてこの口頸部の２つの形態は「大廓式土器」の壺Ａにも認められる。月の輪平遺跡第62号住居址出土の壺Ａｂ類は，茶褐色を呈し，口縁端部と屈折部の外面に刻み目を巡らす。類品には，島田市旗指３号墳，千葉県北作１号墳出土の壺Ａａ類，藤枝市下藪田遺跡の壺Ａがある。また，刻み目の代りに櫛描列点文を施したものには，伊東市内野町

遺跡，神奈川県特田遺跡，および愛知県下渡遺跡，奈良県纒向遺跡出土の壺Ａｂ類がある。藤井原遺跡溝状遺構ＳＤＯ出土の壺Ａｂ類は，茶褐色を呈し，口縁部上半の内外面に櫛描列点文を羽状に施す。伊勢湾地方において，従来「柳ケ坪型」と呼ばれてきた壺と類似している（杉崎1953）。

大廓遺跡Ｂ住居址出土の小型壺Ａａ類は，淡褐色を呈し，口縁部上半の内外面に櫛描波状文，口縁端部に刻み目，屈折部直上に竹管文を配した，装飾性豊かなものである。佐原真によれば，こうした装飾は，近畿地方「庄内式土器」の壺・高杯に特徴的であるという（佐原1968）。ところで，この例品としてよく挙げられる大阪府庄内遺跡出土の小型壺Ａは，体部下半に小さな穿孔を有する。近畿地方の類似資料としては，奈良県有井池遺跡，同纒向遺跡の小型壺Ａがある。東日本でも，富士宮市丸ヶ谷戸遺跡，東京都中田遺跡（ミニチュア土器），埼玉県水窪遺跡，千葉県三ツ堀遺跡，同阿玉台北遺跡，同神門４号墳などの小型壺Ａがあり，注目される。月の輪平遺跡第１号住居址出土の小型壺は，口縁部を欠くが，体部下半に小さな穿孔があり，この一群のものと考えられる。

以上のことにより，二段口縁の壺Ａ・小型壺Ａは，他地方の土器と強い関連性のもとにあり，特に近畿地方や伊勢湾地方の影響を強く受けた土器であるといえよう。

壺Ｂ・壺Ｃと壺Ｄ　この３種の壺は，形態・容量だけでなく，胎土・色調や調整手法まで類似する。駿河湾地方の後期弥生土器の伝統を受け継いだ，類縁の濃い一群のものといえる。壺Ｂの全体に占める割合は，現状では，後期弥生土器より小さくなるらしい。これは，壺Ｄの割合が大きくなり，壺Ａが出現することと関係するだろう。壺Ｃは，口縁端部の外側に重ねる粘土帯が厚手となり，口縁部内面と肩部外面に斜縄文と円形浮文・連鎖文を組み合わせた文様帯をもつものが多い。この壺Ｃは，特に口頸部の形態的な特徴から，C_1・C_2・C_3の３類に細別できる。C_1・C_2の例品は，藤井原遺跡溝状遺構ＳＤＯにある。しかし，その藤井原遺跡溝状遺構ＳＤＯを含めて，出土例の大半はC_3である。なお，漆畑遺跡住居址出土の壺Ｃは，口頸部高が一段と低く，頸部と口縁部との径の差も大きくない。単純口縁の壺Ｅに対応するものであろう。壺Ｄは，同じく口頸部の形態的特徴から，D_2・D_3の２類に細別できる。ただし，出土例はD_3がほとんどである。

壺Ｅ　口頸部が短く，頸部と口縁部との径の差が大きくない壺は，数は少ないが，静岡市登呂遺跡，沼津市目黒身遺跡など，後期弥生土器にも類例がある。また，漆畑遺跡住居址例など，壺Ｃの中にも対応するものが見られる。胎土・色調や調整手法から観ても，壺Ｂ・壺Ｃと壺Ｄの３種の壺と，関係が深いものといえる。

壺Ｆ　長い口縁部がまっすぐ外上方へ延びる直口縁の壺・坩は，近畿地方や伊勢湾地方の後期弥生土器に多い長頸壺に祖形があり，「和泉式」併行期に盛行する坩・小型坩につながるものと考えられる。近畿地方では，「布留式土器」にいくつか例品があり，伊勢湾地方でも，三重県大畑遺跡に該当品がある。関東地方においても，神奈川県子ノ神遺跡，同上谷本第二遺跡，埼玉県平林寺遺跡，同上郷遺跡，同弥藤吾遺跡，千葉県阿玉台北遺跡，同東寺山石神遺跡などに類例がある。

③　高杯

佐原真は，高杯が「主要器種となるのは，およそ伊勢湾沿岸・中部高地・北陸までである。東

北地方を除けば，東日本においては，弥生時代を通じて，高杯は多くはならなかった。」という(佐原1976)。これに関連して，静岡市登呂遺跡や田方郡韮山町山木遺跡の器種構成に，高杯が欠けているという指摘が注目される（杉原1958，大塚1961)。駿河湾地方において，高杯が主要器種として登場するのは，この大廓式土器が最初のことであったらしい。

容量の点から，まず高杯と小型高杯とに区別できる。高杯にはA・B・Cの3種があるが，Aが主体を占める。小型高杯にはA・Bの2種があるが，脚部底径が杯部口径を凌駕する，小型高杯Aの存在が顕著である。

高杯Aと高杯B　高杯Aは，胎土・色調や調整手法によって，大きく2類に分けられる。a類は，淡褐色～黄褐色を呈し，胎土精良・焼成良好であって，いずれも器壁が薄く，入念に箆磨きが行なわれている。この類には，口縁端部の内側を箆で削って，面とりする例がしばしば見られ，注意される。この高杯や長頸壺の口縁端部内側を面とりする手法は，伊勢湾地方の「欠山式土器」の特徴的傾向として，同地方に広く見られる（大参1968)。高杯Aa類は，伊勢湾地方との関連を考えさせる土器といえる。一方高杯Ab類は，高杯Bとともに，その胎土や色調が，駿河湾地方の伝統を受け継いだ一群の壺（壺B・壺Cと壺D）の良質品に近い。

高杯C　数は多くないが，沼津市尾ノ上遺跡，伊東市内野町遺跡や，東京都神明上遺跡，千葉県中和倉寒風遺跡などに見られる。一般に，在地性の強い古い様相を留めた土器，とされるものである。

小型高杯A　脚部が大きくひろがる小型高杯Aは，「五領式」併行期に特徴的な器種の一つである(市川・岩崎1971)。胎土精良・焼成良好で，器面を入念に箆で磨いた精製品がほとんどである。この小型高杯Aは，杯部の形態によって，一応a・bの2類に分けられる。a類は，杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈折し，口縁部が外上方へ外反する。奈良県平城宮跡下層，愛知県元屋敷遺跡，同南木戸遺跡など，近畿地方の「布留式土器」，伊勢湾地方の「元屋敷期」に類例がある。関東地方では，埼玉県諏訪山遺跡，同加倉遺跡，同駒堀遺跡，千葉県三ツ堀遺跡，同諏訪原遺跡などの住居址，千葉県堤台遺跡の方形周溝墓，それに千葉県小田部古墳，同神門4号墳，栃木県駒形大塚古墳の各古墳等，多数の例が知れる。b類は，杯部が稜をもたずに，丸く内湾して立ち上がる。大阪府上田町遺跡，奈良県纒向遺跡など，近畿地方の「庄内式土器」に，すでに多くの類例がある。伊勢湾地方では，愛知県元屋敷遺跡に例をみる。関東地方では，千葉県諏訪原遺跡，同東寺山石神遺跡，同北作1号墳などに見られる。

小型高杯Aの変遷過程に関しては，近年，何人かの見解が発表されている(関根1974，上野1977，田中1977)。しかしこの小型高杯Aは，脚部にもいくつかの形態が認められ，杯部の形態と合わせれば，相当にバラエティーに富む土器といえる。この点から観て，小型高杯Aの型式変化には，かなり複雑な過程のあったことが予測できる。ここでは，次の3点だけを確認して，問題の解決を将来に残したい。(1)a類とb類の両者は，少なくとも東日本では，必ずしも時間的先後関係を示さない。(2)b類の中では，諏訪原22号址例・北作1号墳例から月の輪平22号址上層例への，型式変化がある。(3)文様をもつ月の輪平90号址例や小田部古墳例は，伊勢湾地方との関係を示唆す

る。この場合a類が普通らしい（注5）。

④　器台

器台には，A・B・C・D・Eの5種がある（注6）。このうちの器台A～器台Dがいわゆる小型器台であるのに対し，器台Eは器高がやや高い大形品である。出土例は，Cが最も多く，Aがこれに次ぐ。

器台A　器受部の底部と口縁部との境界が明瞭な稜をつくる器台Aは，器受部の形態によって，さらにa・bの2類に分けられる。器受部の深いa類は，奈良県纒向遺跡，三重県大畑遺跡，愛知県南木戸遺跡，静岡県村東遺跡，同内野町遺跡，神奈川県子ノ神遺跡，同上谷本第二遺跡，埼玉県吉野原遺跡，千葉県諏訪原遺跡などに見られる。器受部の浅いb類は，愛知県下渡遺跡，長野県堂垣外遺跡，同下蟹河原遺跡，神奈川県子ノ神遺跡，群馬県石田川遺跡などに類例が知れる。伴出するṠ字状口縁台付甕の型式より観れば，a類からb類への型式変化も考えることができる。

器台B　器受部の端部が短く立ち上がり，尖り気味におわる器台Bは，近畿地方の「布留式土器」に盛行する。伊勢湾地方では，三重県大畑遺跡に類例があり，東日本でも，長野県堂垣外遺跡，千葉県諏訪原遺跡，埼玉県五領遺跡，同武良内遺跡や栃木県駒形大塚古墳など，しばしば見られる器形である。

器台C　器受部が内湾気味にひろがって小皿状となる器台Cは，伊勢湾地方では，愛知県下渡遺跡，同元屋敷遺跡に類例がある。関東地方においては，神奈川県持田遺跡，埼玉県大谷遺跡，千葉県飯合作遺跡や同北作1号墳の器台の主体を占めるほか，広く各地に見られ，最も出土量の多い器形である。ただしこの器台Cは，なおいくつかの形態に分けることができそうで，資料の蓄積をまって，再検討する必要があろう。

⑤　鉢

容量の点から，大型・小型に区別できるが，ともに出土量は多くない。形態も様々であるが，近畿地方の「纒向3式」を特徴づける口縁部が短く外反する小型の鉢Aや，「布留式」に特徴的な口縁部が二段に屈曲してひらく小型鉢Bは，今のところ出土例がない。ただし周辺諸地方においては，前者が神奈川県持田遺跡，同三殿台遺跡に，後者が浜松市村東遺跡，長野県下蟹河原遺跡，神奈川県王子台遺跡（注7）に，それぞれ類例がある。

⑥　小型丸底土器

小型丸底土器は，特に形態的な特徴から，A・B・Cの3種に分けられる。

小型丸底土器A　ごく小さな平底か丸底で張りが小さく扁平な体部と，外上方に大きくひらく口縁部をもつ。しばしば口縁部と体部との境界外側に凹線を巡らすのが特徴である。類例は，千葉県諏訪原遺跡，同飯合作遺跡にある。

小型丸底土器B　外上方に大きくひらく口縁部と，半球形で小さめの体部をもつ。神奈川県子ノ神遺跡に近い例がある。

小型丸底土器C　体部が大きく球形をなし，口縁部は小さく外反する。口縁部径は体部最大径に比べて同大かやや大きい。埼玉県西台遺跡と同水窪遺跡に類例がある。

⑦ 小坩と小型土器

小坩には，A・Bの2種がある。また，小型土器には，A・B・C・D・Eの5種がある。なかでは，小坩Aと小型土器B・Cが特徴的である。

小坩A　関東地方でも，東京都鞍骨山遺跡，埼玉県鍛冶谷・新田口遺跡，同諏訪山遺跡（やや大形品で小坩B的），千葉県復山谷遺跡にそれぞれ，月の輪平遺跡や藤井原遺跡と同様の数個かたまって発見された例があり，注目される。それによって，何か特異な用途が暗示されていると思われるからである。

小型土器B　口縁部が短く外反し，体部と口縁部との境界内側に稜を形成する。本遺跡群では刷毛目を残すものが多い。

近畿地方の「庄内式土器」には，小さな平底か尖り底で，短く外反する口縁部をもつ，小型の鉢がある。この小型鉢は，関川尚功によれば，「纒向3式」では薄手で尖り底か丸底のものとなり，器形に斉一化がみられるという（報告書でいう鉢D_2）それとともに，細かい篦磨きを加え，明るい色調の，胎土精良・焼成良好のものが多くなるらしい。そしてこの土器は，定型化した小型器台とセットで用いられた可能性が強く，小型精製土器3種（鉢B・小型丸底土器と小型器台）と似た機能をもっていたと考えられている（関川1976）。一方関東地方でも，岩崎卓也がすでに，千葉県北作1号墳にみられる鉢Aと小型器台Cの組み合わせに，これと類似する関係を想定していた（岩崎1963）。この鉢Aは，神奈川県持田遺跡，同三殿台遺跡，東京都前野町遺跡，同椚田第II遺跡，千葉県臼井南渡戸遺跡，同飯合作遺跡などに類例がある。小型土器Bは，おそらくこうした鉢Aのミニチュア的なものと思われる。

小型土器C　小型土器Bが鉢Aのミニチュア的なものとすれば，この小型土器Cは小型丸底土器のそれであることが明らかである。調整手法は，なでと篦削りのもの，篦で磨いて赤彩するものと，バラエティーがある。

⑧ 器種構成とその特色

以上記述してきた結果から，大廓式土器の器種構成は，甕A（A_3～A_5）と甕D（D_2・D_3）・壺C（C_3）と高杯Aの共存，それと小型高杯A・小型器台・小型丸底土器など小型精製土器群の盛行としてまとめることができる。

したがって，大廓式土器の器種構成の特色は，新しく普及した小型精製土器群と高杯が，伊勢湾地方の影響を受けて生じた甕Aや，駿河湾地方の後期弥生土器の伝統を受け継いだ甕D・壺Cとともに，主要器種として共存することにある。

(3) 大廓式土器の併行関係

ここでは，近畿地方から関東地方にかけて広く分布し，かつ細かな推移の過程の研究も進んでいる（大参1968，安達・木下1974），Ṡ字状口縁台付甕（甕A）を伴出した土器群を中心に，駿河湾地方の「大廓式土器」と他地方の土器との併行関係を検討してみたい。

① 周辺諸地方の大廓式併行期の土器

富士川以西 層位や遺構ごとに摘出された良好な資料は見当らないため，大廓式土器と対比できそうな3遺跡の出土土器をとりあげる。榛原郡川崎町白鬚遺跡溝状遺構の土器群には，大型壺・壺・甕・鉢・高杯・小坩などがある。壺には，A・B・C・Dと，折返し口縁を造作するにより幅広い粘土帯を口縁端部に重ねる新しい口縁形態のGがあるが，C・Dが主体を占める。壺Cには，C_1・C_2・C_3の3類があるが，C_3が多い。壺Dにも，D_2・D_3の2類があるが，D_3が多い。甕では，A・Dの2種がある。甕Dには，D_1・D_2・D_3の3類があるが，D_3が主体を占める。高杯には，A・Bの2種がある。以上本土器群は，一部に弥生土器的な，複合部が短い壺B，口縁端部外面に縄文や棒状浮文を加える壺C，口縁端部に刻目を施す甕Dなどを混入しながら，主体は大廓式土器に併行するものとして矛盾がなく，伊勢湾地方の欠山式土器より新しい。しかし，壺Cの文様構成に，竹管文がしばしばみられる点，および小型精製土器を欠く点でやや相違するといえる。藤枝市下藪田遺跡出土の土器には，大型壺・壺・甕・鉢・高杯・小型丸底土器・小坩・小型土器などがある。大型壺Bは，体部が球形で，短く直立する頸部と外反する複合口縁部をもつ。肩部外面には羽状縄文・連鎖文・円形浮文を施し，複合部外面に棒状浮文を加える。壺には，A・B C・Dの4種があるが，C・Dが主体を占める。壺Aでは，口縁端部の外面に刻み目を施した例がある。壺Cには，C_1・C_2・C_3の3類があるが，C_2・C_3が主体を占める。なかでは，口縁部の内面に斜縄文・連鎖文を施し，端部外面に棒状浮文を加えたC_1，頸部外面と口縁端部外面とに櫛描波状文を施したC_2など，古式なものや，肩部外面の文様帯の円形浮文を竹管文に換えた例が注意される。壺Dにも，D_2・D_3の2類があるが，D_3が多い。甕には，A・B・C・D・Eの5種があるが，Dが主体を占める。甕Aは，肩部外面に櫛描直線文を施すA_3類が多い。甕Bは，外湾気味にひらいた口縁部が，端部で上方にわずかに突出する。甕Dには，D_2・D_3がある。平底の甕Eは，1点のみの出土である。高杯には，A・Bの2種があるが，Bが多い。脚部は，裾部において内湾傾向を示すものと，そのまま下方にひろがるものとの，2者がある。小型丸底土器には，A・Bの2種がある。また，小坩にはB，小型土器にはA・Eがある。以上の本遺跡出土土器は，流水により運ばれてできた包含層からのもので，その伴出関係を一つの様式として把握するには困難がある。事実，口縁端部外面に櫛描波状文を施したり，棒状浮文を加えた壺C，外湾気味にひらいた口縁部が，端部で上方に突出する甕B，脚部の裾が内湾傾向を示す高杯など，現状の大廓式土器より古い様相をとどめるものも多い。しかし，主体は大廓式土器と併行するものとして矛盾がない。ただ，小型器台がみられないことと，肩部外面の文様帯において円形浮文を竹管文に換える例のあることが，大廓式土器と異なる。清水市寺崎I遺跡出土土器には，大型壺・壺・甕・高杯・器台・小坩・双口土器などがある。壺には，B・C・Dの3種がある。壺Cは，C_2が多く，重ねる粘土帯も薄手のものが多い。肩部外面と口縁部内面には，竹管文や櫛描簾状文を施し，さらに口縁端部外面にも，竹管文や刻目を加えたものもある。壺Dには，D_2・D_3の2類があるが，D_3が多い。甕には，A・C・D・Eの4種がある。甕Aは，肩部外面の櫛描直線文がなくなったA_4である。甕Cには，口縁端部に刻目を有するものがある。甕Dには，D_2・D_3の2類があるが，D_3が多い。高杯には，A・Bの2種がある。器台は，Cが1個体のみ出土した。本遺跡の土器群

も，包含層の出土であり，大廓式併行期の資料を確実に含むが，一括性には疑問がある。これまでの検討から，富士川以西の土器群は，壺の文様に竹管文がしばしばみられることをのぞけば，大廓式土器と類似する内容をもつことが予測できる。

富士川上流　この地域では，長野県下蟹河原遺跡と山梨県京原遺跡で，大廓式併行期の良好な資料が出土している。下蟹河原遺跡の，約3m四方の部分を中心に，礫群を伴って整然と出土したという土器群には，大型壺・壺・小型坩・甕・鉢・高杯・器台・小型丸底土器などと，長胴甕・多孔の有孔土器がある。大型壺Bは，下藪田遺跡出土例と同一の形態をとる。壺Dは，D_2の月の輪平1住例に近い。調整も，箆磨きを施すものと，箆削りで終るものがある。甕Aは，肩部外面の櫛描直線文がなくなったA_4である。鉢には，口縁部が二段に屈曲してひらくBがある。口径13cmで，内外面を丁寧に箆磨きした良質の土器である。高杯Bは，駿河湾地方のものとやや異なり，類品が長野県堂垣外遺跡にみられる。器台Aは，月の輪平22住例に近似する。小型丸底土器Aは，形態にバラエティーがあるが，いずれも外面を箆で削る。他には，より新しい時期のものらしい，小型坩，長胴甕や，小型の鉢形で単純口縁・多孔の有孔土器もみられる。京原遺跡第2号住居址の出土品には，甕・高杯・小型丸底土器と，口縁部が端部で上方に突出する器台(?)がある。甕には，A・Dの2種がともに2個体ある。甕Aは，肩部外面に櫛描直線文を施すA_3，甕Dは，D_2・D_3である。高杯には，高杯Aと，小型高杯の杯部がある。小型丸底土器Bは，口径18.5cmの大形品である。同遺跡第4号住居址の出土品には，甕・壺・小型壺・高杯・器台・有孔土器と蓋(?)がある。甕には，A・Dの2種がある。甕Aは，肩部外面に櫛描直線文を施すA_3，甕Dは，D_2である。壺では，壺D_3と，広口や片口の小型壺Eがみられる。広口の小型壺Eは，漆畑遺跡例に類似する。高杯には，高杯Bと小型高杯Bがある。小型器台は，器受部の端部が小さな立ち上がりをもつB，有孔土器は，小型の鉢形で，単純口縁・単孔である。以上，富士川上流においては，利用できる資料が限られるため，特に壺など不明な部分が多い。したがって現在は，大廓式土器との比較，検討が十分できない。ただ，口縁部が二段に屈曲してひらく鉢，小型の鉢形で単純口縁・単孔の有孔土器など大廓式土器の内容を補う器種が存在する点，重要である。

相模湾沿岸　伊東市内野町遺跡第1号住居址で一括資料が出土している。出土土器には，大型甕・甕・壺・小型壺・高杯・鉢・器台・小坩・小型土器などがある。大型甕Cは，くの字状に外反した口縁部の端部に，刻み目を施す。甕には，A・B・D・E・Fの5種がある。ただし，甕Aは発掘調査以前の採集品である。甕Bは，くの字状に外反する口縁端部が，削られて平坦な面をもって終る。中央が小さく上げ底になった平底甕Fとともに，伊勢湾地方，近畿地方などとの関連が考えられるもので，一般には盛行期が丸底甕Gに先行する。類例は，南部谷戸12住にある。甕Dでは，D_1とD_2がそれぞれ1個体，D_3が4個体（うち採集品1）ある。甕Eは，口径30cmを越える大形品で，類例に乏しい。壺には，A・Cの2種がある。壺Aは，肩部外面に櫛描の直線文・列点文を施し，口縁屈折部の外面に列点文を巡らす，b類である。壺Cは，口縁端部の外側に重ねる粘土帯が厚手になった，C_2かC_3である。無文のものと，口縁部内面と肩部外面に斜縄文・連鎖文を施すものがある。高杯には，A・Cの2種がある。高杯Cは，杯部外面に赤彩の痕跡をと

どめる。器台には，器受部の深いＡａ類がある。なお脚部は，２段に３孔を穿つ点で，注意される。鉢には，口縁部が短く外反する鉢Ａと，大形の鉢Ｄがある。小坩はＢ，小型土器はＡである。以上の本土器群は，甕の一部に刻み目がみられ，系譜上では甕Ｇに先行する甕Ｂ，甕Ｆが存在する。そして鉢Ａが存在し，器台Ａがａ類であることなど，明らかに古い様相をとどめている。現状ではまだ不分明な，大廓式土器のより古い段階を暗示させるものがある。他に大廓式土器と対比できそうな資料としては，神奈川県諏訪の前遺跡の包含層出土の第３群土器がある。壺には，Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｇの４種があるが，Ｃ・Ｄが主体を占める。壺Ｃでは，C_1・C_2・C_3の３類があり，無文のものと，口縁部内面と肩部外面に斜縄文・連鎖文・円形浮文を施すものに分けられる。後者には，さらに口縁端部外面にも，刻み目，棒状浮文や斜縄文を加えた，古式の例がある。壺Ｄにも，D_1・D_2・D_3の３類がある。ここでは，伊勢湾地方との関係が考えられる，口縁部が内湾気味に立ち上がるものや，長頸壺風のものが注目される。甕には，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５種があるが，Ｄが主体を占める。甕Ａには，月の輪平43住例と類似するA_1と，A_3がある。甕Ｂは，口縁部が先端で屈曲して，短く立ち上がる。中に箆で直線文・綾杉文を肩部外面に描く例があり，琵琶湖や伊勢湾，近畿地方との関連が窺える。類例は千葉県諏訪原遺跡にある。甕Ｄには，D_1・D_2・D_3の３類がある。D_1の中では，口縁端部を押捺する，古式の例が注意される。甕Ｅは，沼津市瀬戸川遺跡出土品に類似し，大廓式土器のものとは異なる。高杯には，Ａ・Ｂのほか，内湾して広がる杯部体部が頸部でくびれて短く外反する口縁部に移る，古式の高杯がある。後者と関連するものに，端部に折返し状に粘土帯を重ね合わせたり，杯部との接合部に断面三角形の突帯を巡らす，高杯脚部がある。器台にはＣがあるが，鼓形を呈する。他では，鉢Ａ，小型丸底土器，小坩Ａ，小型土器Ａと，手焙形土器，有孔土器（単孔），それに，北陸地方との関連が窺える，やや長く直立する口縁部をもつ小型壺などが注意される。以上の諏訪の前遺跡第３群土器は，後期弥生土器から古式土師器までを含むことが明らかである。そしてその示す様相は，駿河湾地方と類縁の濃厚なことを物語っている。なお報文では，この第３群土器のうちに「20％におよぶ東海系の土器，欠山式土器やその模造品，あるいはなんらかの形でその影響が認められるものが存在する」とするが，事実であるとすれば，異常な高率である。しかし，顕著な実例という複合口縁壺は，伊勢湾地方では類例の乏しいものであるし，壺の頸部に凸帯を巡らす手法は，欠山式土器だけに限らない。慎重なる再検討を要請したい。

古墳出土土器　掛川市春林院古墳では，墳頂部西南隅のピット中から，折返し口縁の壺Ｃが出土している。大廓式土器の壺Ｃより，頸部径が大きく，口縁高は相対的に低くなっており，関東地方の「和泉式」併行期のものに近づいている。島田市旗指３号墳では，北側溝の溝底から，くの字状に外反する口縁部の端面を下方に拡張した壺，溝中の堆積土中からは壺Ａのａ類が，それぞれ出土している。前者は，口縁部内面と口縁端部外面，および頸部凸帯上に，刻み目を羽状に施す。天竜川以西の弥生土器にしばしばみられるものである。後者は，口縁端部と屈折部の外面に，刻み目を巡らす。類例には，千葉県北作１号墳のａ類，藤枝市下藪田遺跡と富士宮市月の輪平遺跡のｂ類がある。藤枝市五鬼免１号墳では，周溝底面から，壺Ａｂ類が出土している。外びらきの

長い頸部の上に，曲折して立つ短い口縁部をのせるもので，千葉県菊間新皇塚古墳例に近い。神奈川県平塚市真土大塚山古墳では，壺Cが出土している。重ねる粘土帯が厚手でしっかりしているのは大廓式土器の壺Cと同じだが，口縁部の内面だけでなく端部外面にも斜縄文を施す点，および肩部ではなく頸部の外面に斜縄文を巡らす点が，大廓式土器のものと相違する。

② 近畿地方との併行関係

近畿地方においては，弥生土器から土師器への移行期に，畿内第V様式→庄内式→布留式の3様式が設定されており，最近では，これらをさらに細分しようとする研究も発表されている（安達1969，都出1974，安達・木下1974，関川1976など）。たとえば木下正史によれば，飛鳥地域出土の古式土師器には，(1)藤原宮内裏東外郭溝ＳＤ527及び包含層→(2)(和田廃寺下層）→(3)坂田寺跡下層→(4)上ノ井手遺跡溝ＳＤ031→(5)上ノ井手遺跡井戸ＳＥ030下層→(6)同上層，という変遷過程が考えられるという。(1)藤原宮跡下層出土土器は，大和における庄内式資料の一つで，共存するＳ字状口縁台付甕は安達II類である。(2)未報告の和田廃寺下層においては，纒向「報告者のいう壺E_2・高杯A_3・小型器台B_3・小型鉢D_2などと共に口縁端部が肥厚あるいは内側に肥厚するいわゆる布留式の甕(本稿の甕Ｇ)を伴う一括資料」が得られたという。そしてこれに，いわゆる庄内式の叩目をもつ甕が全く伴出しないことから，「纒向３式の一括性について疑義をもつのであり，そのかなりの部分は，むしろ広義の布留式として理解すべきもの」とされる(木下1978)。(3)坂田寺跡下層出土土器は，平城宮跡朝集殿下層溝出土の土器と類似し，(4)上ノ井手遺跡溝出土土器は，大阪府小若江北遺跡出土の土器に類似する。しかし，両土器群は，共に小型精製土器群を主要な組成とするもので，基本的には共通した内容をもつ。Ｓ字状口縁台付甕は，平城宮跡朝集殿下層溝で，安達III(A)類が出土している。(5)上ノ井手遺跡井戸下層出土土器の示す最も著しい特色は，小型精製土器３種の組み合わせの崩壊で，小型器台・鉢は全くみられず，小型丸底土器も粗製品が主体となる。

大廓式土器には，口縁端部が肥厚する丸底の甕Ｇがみられ，小型精製土器３種のうち，口縁部が二段に屈曲してひらく鉢Ｂを欠くが，他の小型丸底土器・小型器台の２種がある。一方，奈良県纒向遺跡の辻土坑４下層（纒向３式）に，大型壺Ｂの類例がある．大廓式土器の甕Ａは，A_3～A_5が主体を占める。A_3は安達III(A)類～III(B)類，A_4・A_5は安達III(B)～IV(A)類に相当すると思われ，平城宮跡下層出土のIII(A)類より，新しいものが多いといえる。したがって，現状での駿河湾地方の大廓式土器は，近畿地方の布留式土器のうち，大和では上ノ井手遺跡溝段階，中南河内では小若江北式と，より主要な共有時間をもつといえそうである。

③ 伊勢湾地方との併行関係

伊勢湾地方においては，弥生土器から土師器への移行期に，山中期→欠山期→元屋敷期→石塚期という４期が設定されている（大参1968)。この４期のうち，高杯の推移過程から観れば，山中期は近畿地方の畿内第V様式と，欠山期は庄内式と最も類縁が濃いといえる。元屋敷期は，愛知県一宮市元屋敷遺跡の竪穴状遺構出土土器を標式とする。出土土器中には，甕Ａ，壺Ａ・Ｄ・Ｇ，高杯Ａ・Ｂ，小型高杯Ａ，小型器台Ｃ，鉢Ａと小型土器Ｂ，小坩Ｂなどをみることができる。甕

Aは，ほとんどが肩部外面に櫛描直線文をもち，頸部内面に刷毛目を残すものや，口縁屈曲部外面に櫛描列点文を巡らすものもある。安達Ⅰ類～Ⅲ(A)類で，A_1～A_3に相当する。壺Aは5点あるが，いわゆる「柳ヶ坪型」の類例をみない。壺Dには，D_2・D_3の2類があるが，D_3が主体を占める。壺Gは，3点ある。高杯にはA・Bの2種がある。高杯Aの中では，杯部の深い形態のものがあって注意される。他では，小型高杯A・小型器台C・鉢Aまたは小型土器Bがみられる一方，小型丸底土器と口縁部が二段に屈曲してひらく鉢Bとがともに欠けている。元屋敷期に，定型化した小型精製土器3種が存在した，とはいえないらしい。次の石塚期は，愛知県西春日井郡師勝町石塚遺跡において，土取り工事中に採集されたという一群の資料によって，仮に設定されたものである。尾張で良好な資料に恵まれないいまは，三重県鳥羽市大畑遺跡土坑ＳＫ１出土土器をとりあげてみたい。出土土器中には，甕A，壺A・D・F・G，高杯A，器台A・B，小型丸底土器，鉢などをみることができる。甕Aでは，ほとんどが肩部外面に櫛描直線文をもつことは元屋敷遺跡例と同じだが，口縁屈曲部外面の櫛描列点文をもつ例はなく，頸部内面に刷毛目を残すものも少ない点が異なる。安達Ⅱ類～Ⅵ(A)類，A_2～A_4に相当し，なかでは安達Ⅲ類が主体を占める。壺Aには，いわゆる「柳ヶ坪型」が多量に出現しており，壺Dでは，D_2がなく，すべてD_3である。高杯Aは，元屋敷例と異なって，すべて杯部が浅い形態のものである。器台Aは，すべて器受部の深いa類である。小型丸底土器は，口縁部のひろがりに比べて，体部が小さく扁平である。鉢は，口径14cmで，口縁部がわずかに屈曲しながらひらく。小型精製土器群は，いずれも内外面をていねいに篦磨きした良質の土器であるのが特徴といえる。三重県大畑遺跡出土土器に後続する資料には，愛知県西春日井郡清洲町朝日遺跡群の南部地区旧河道Ｅ出土土器がある。しかし，この資料は，A_3・A_4 2類の甕Aと，長野県下蟹河原遺跡出土品に類似する小型丸底土器Aを含むのみで，内容は不十分である。

以上について，まず近畿地方との関係をみると，元屋敷遺跡出土土器は，小型器台C・鉢Aが，安達Ⅰ類～Ⅲ(A)類の甕Aと共存する。小型精製土器3種がそろっていない点，和田廃寺下層出土土器に類似する。大畑遺跡出土土器は，安達Ⅱ類～Ⅳ(A)類，とくにⅢ(A)類～Ⅲ(B)類の甕Aと，坂田寺跡下層，平城宮跡下層のものと近似した，小型精製土器群を伴出する。したがって，ともに布留式土器と併行関係をもち，かつ上ノ井手遺跡溝，小若江北遺跡の土器群より，古い様相をもつものといえる。そしてこれが正しければ，この上ノ井手遺跡溝，小若江北遺跡の土器群と主要な共有時間をもつ現状での駿河湾地方の大廓式土器は，当然大畑遺跡出土土器より後出的であるといわねばならない（注8）。

④　南関東地方との併行関係

南関東地方においては，弥生土器から土師器への移行期に，久ケ原式→弥生町式→前野町式→五領式の4型式が設定されている。そして，甕Aと小型精製土器群をその組成に含むのは，一般に，このうちの五領式土器であると考えられている。そうであるならば，駿河湾地方の大廓式土器は，この五領式土器と併行関係にあるといえよう。

ところで，上記各型式の内容の理解に関しては，関東地方の研究者の間で混乱が生じており，

改めて編年体系を作り直すべきだとする提言さえなされる現状らしい。上野純司は，高杯の変化をメルクマールとすることによって，この問題を解決しようとした（上野1977）。そこで基準とする高杯の推移過程をみてみると，(I) 稜をもたずに直線的に外上方へひらく杯部が，外面に縄文等の文様をもつ端部近くで内湾気味に立ち上がる（文様をもつ高杯C），(II) ほぼ前期のものと同様の杯部であるが，端部外面の文様が消える（高杯C），(III) 杯部は底部と口縁部との境界に稜をつくってひらくようになり，脚部も杯部口径を凌駕して裾拡がりにひらくものが出現する（小型高杯Aa類），(IV) 杯部は前期のものと同様だが，脚部がハの字状にひらくもの（高杯A）が主体をなし，稜をもたずに内湾して立ち上がる杯部で，脚部が裾拡がりにひらくもの（小型高杯Ab類）も出現する，(V) 細長い柱状部から屈折して裾部へつながる脚部をもつ，(VI) いわゆる「和泉式」の高杯で，杯部は稜をもってひらき，脚部柱状部が中脹らみになる，という変化があるという。以上の推移過程には，第IV期と第V期との境に，容易に画期が求められる。第I期～第IV期は，系累の全く異なる3種の高杯，すなわち高杯C・高杯Aと小型高杯Aの相互関係によって示されている。第1に，「五領式」併行期に特徴的な器種の一つである小型高杯Aは（市川・岩崎1971），杯部の形態によってa・bの2類に分けられる。このうちb類は，近畿地方の「庄内式土器」の中に，すでに類品をみることができる。東日本においては，伊勢湾地方の愛知県元屋敷遺跡にa類とb類の共存が確認されており，南関東地方でも，同じ「元屋敷期」併行期の所産と思われる千葉県小田部古墳と同北作1号墳に，a類・b類それぞれの類例がある。こうした状況下で，小型高杯Aの中にa類→b類という型式的変化を考える上野の見解には，にわかに賛成することができない。第2に，高杯Aには，欠山―庄内期の杯部が深い形態のものから（元屋敷）・石塚―布留期の杯部が浅い形態のものへ，という型式的変化が認められる。「五領式土器」の高杯Aは杯部の浅い形態のものが一般的である点から観て，前記の小型高杯Aとともに，「元屋敷期」併行期以降に広く普及したものであろう（佐原1976）。第3に，高杯Cは，従来は後期弥生土器とされている土器群中に類例が多く，その意味では古い様相をもつ在地性の強い高杯といえる。そしてこの高杯Cには，上野のいうような，文様をもつもの→無文のものという型式的変化のあることが，広く容認されている。しかし大宮台地の場合，吉野原遺跡出土の器台Aや大宮公園内遺跡出土の小型丸底土器（東京都中田遺跡出土品に近似）に，縄文が施されているのが注目される。こうした特色のある地域出土の縄文を巡らす高杯Cと，そうでない他の地域出土の無文の高杯Cとの間に，安易に時間的先後関係を想定する上野の見解には，安心して従うことができない。ところでこの高杯Cは，静岡県藤井原遺跡では高杯Aや小型高杯A・小型器台・小型丸底土器と伴出し，同内野町遺跡では高杯Aや小型器台・小型鉢Aと共伴している。南関東地方においても，東京都神明上遺跡では小型器台と伴出し，千葉県中和倉寒風遺跡では小型鉢Aのミニチュア的な小型土器Bと共伴している。こうした現状において，系累の全く異なる高杯Cと高杯A・小型高杯Aとの間に，気楽に時間的先後関係を推測する上野の見解には，簡単には同意できない。いまもっとも必要なことは，南関東地方の中の旧制の国（あるいはそれより小さな地域）を単位として，系統関係を確かめながら，各器種・器形ごとに型式学的研究を徹底的に進めること，しかしあくまで同時期の器種構成を土器

様式としてとらえ，その変遷過程を総体的に追うこと，である（注９）。

岩崎卓也はかつて「口縁部が大きくひらき，小さな胴部を有する小型丸底土器と，口縁部と胴部の径が一致する小型坩との間には，時間的な先後関係がある。器台との組合せをも考慮するならば，両者が同一系譜に連なるものとは言い難い。」という主旨の発言をしたことがある（岩崎1973）。加藤修司は，この指摘に着目することによって，同じ問題に取り組もうとした（加藤1978）。すなわち，小型精製土器群を伴う小型器台組成(土器)群と，この小型精製土器群の組み合わせが崩壊して，坩と細長い柱状部から屈折して裾部へつながる脚部の高杯を伴う小型坩組成(土器)群とに，大きな変化を認めて，それぞれを位置づけようとしたのである。これに関して，近畿地方の「布留式土器」においても，上ノ井手遺跡溝出土土器と上ノ井手遺跡井戸下層出土土器との間で，同様の変化がみられるのが注目される（安達・木下1974）。この対応関係から，両地方間の併行関係の一端を，まず大雑把にとらえることができよう。次に，奈良県纒向遺跡では，纒向２式に増加する小型器台は，各種の器形をもち，数多くの個体差がみられる。しかし次の纒向３式になると，そうした細かくバラエティーに富む小型器台が，報告でいう器台B_3に斉一化される。そしてこの器台B_3は，定型化した報告でいう鉢D_2と，セットで用いられるようになるという（関川1976，ただし木下1978）。こうした器台と鉢の組み合わせは，伊勢湾地方においても，前述したごとく愛知県元屋敷遺跡で確認できる。関東地方においては，おそらく千葉県北作１号墳出土の土器がこれに相当しよう。その他にも，千葉県小田部古墳で「元屋敷期」の小型高杯Ａが出土し，同神門４号墳にやや古い様相をもつ小型高杯Ａと小型器台がみられる。したがって南関東地方においても，「布留式土器」の和田廃寺下層段階には，加藤のいう小型器台組成群が成立していたと考えられる。以上から，小型器台組成群は，近畿地方の布留式土器（和田廃寺下層期～上ノ井手遺跡溝期）と，ほぼ併行する編年的位置をもつといえよう。ところで，もしこれが正しければ，小型器台組成群に関しての，「東海西部の欠山～元屋敷式の多量の伴出事実に注目しなければならない」といい，また「概して欠山式との関連に注目しなければならない」とする，加藤の発言を問題としなければならない。この場合まず，加藤の指摘する例が，すべて小型器台組成群と共存したものかどうか，疑問である。第２に，個々の土器を取り上げた場合，欠山期のものと，それ以降のものとに，所属を明確に区別できるものかどうか，懸念がある。第３に，加藤が多量という場合，出土比を調べたものか，その算定がいかなる方法によったものか，明確にされていない。たしかに小型器台組成群には，伊勢湾・琵琶湖・近畿地方などにおいて，欠山一庄内期に盛行した特徴をもつ，土器を見出すことがある。例をあげれば，(1)甕の口縁部がＳ字状や受口状を呈し，時に口縁屈曲部に櫛描列点文を巡らす。(2)甕の口縁部が端部で上方に突出したり，端部外側を削って面とりする。(3)甕の底部が外方に突出した小さな平底で，中央に不整形な凹みをもつ。(4)壺の頸部下端に凸帯を巡らす。(5)長頸壺や高杯が口縁端部の内側を削って面とりする。(6)長頸壺の口縁部，高杯の脚部が内湾する。(7)小型高杯の脚部が短い柱状部と屈折して大きくひろがる裾部からなる。しかし，こうした特徴をもつ土器の存在が，ただちに，小型器台組成群と欠山一庄内期との併行関係を証明しているとはいえまい。駿河湾地方においても，北関東地方でも，小型器

台組成群には，型式のより新しいS字状口縁台付甕が，多量に伴出している。また，小型器台組成群の高杯杯部は，通常，（元屋敷）・石塚―布留期と同じ浅い形態のものであって，欠山―庄内期に普遍的な深い形態のものではない。そして，欠山―庄内期には，伊勢湾地方・近畿地方においても，定型化した小型器台はまだ出現していなかったらしい。したがって，加藤のいう小型器台組成群は，なお，欠山―庄内期と一点の時間を共有する可能性は残るが，やはり，元屋敷・石塚―布留期とより主要な併行関係をもつと言わざるをえない。

⑤ 併行関係のまとめ

以上の，駿河湾地方の大廓式土器と，各地方との併行関係をまとめれば，次のようになろう。

<table>
<tr><th colspan="2">南関東地方</th><th>周辺諸地方</th><th colspan="2">駿河湾地方</th><th>伊勢湾地方</th><th colspan="2">近　畿　地　方</th></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td></td><td colspan="2"></td><td>欠山式土器</td><td colspan="2">庄内式土器</td></tr>
<tr><td rowspan="3">五領式土器</td><td rowspan="2">（北作1号墳）</td><td rowspan="2">内野町遺跡1住</td><td rowspan="3">大廓式土器</td><td></td><td>元屋敷遺跡竪穴状遺構</td><td rowspan="6">布留式土器</td><td>和田廃寺下層</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>大畑遺跡土坑ＳＫ１</td><td>坂田寺跡下層</td></tr>
<tr><td></td><td>下蟹河原遺跡</td><td>月の輪新 T18, T22上 T45, T62, T64</td><td>朝日遺跡群旧河道Ｅ</td><td>上ノ井手遺跡溝</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">世田谷区立総合運動場遺跡11住等</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2" rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td>上ノ井手遺跡井戸下層</td></tr>
<tr><td>上ノ井手遺跡井戸上層</td></tr>
</table>

ところで，この時期の土器については，大別と細別の基本方針がかたまっていないように思われる。近畿地方においては，小型精製土器群の組み合わせが崩壊した後も，引き続いて，布留式土器の名のもとに呼ばれている（安達・木下1974）。一方，伊勢湾地方では，同じく小型精製土器群を主要な組成とする土器群が，細別されて元屋敷期・石塚期と呼びわけられている（大参1968）。この時期の土器がもつ最大の特色は，小型精製土器群が，基本的には共通した内容をもって，広く全国的に分布することにある。それゆえ，この小型精製土器群を主要な組成とする土器群は，一つの様式として，大別して考えるのが適当であろう。こうした立場からすれば，駿河湾地方の大廓式土器について，ここでは新しい様相を示す資料を中心に，検討したことになる。なお，ここでいう小型精製土器群には，和田廃寺下層－北作1号墳段階において，定型化した鉢と器台がセットをなすことに大きな意義を認めて（岩崎1963），これをも含めて考えている。　　（加納）

注1　小野真一が，目黒身遺跡の報告書で初めて「大廓式」の名称を掲げ，その型式把握を試みた（小野1970）。また，1972年に駿豆地方における土師器の編年を発表した際，再びその内容に言及している（小野1972）。

注2　安達厚三・大参義一両氏の御教示による。

注3　こうしたことは，近畿地方の庄内式土器の甕でも考えられている（原口1969）。

注4　瀬川裕市郎氏の御教示による。

注5　愛知県下の下渡遺跡，元屋敷遺跡，埋田遺跡，朝日遺跡群などに類品が見られる。

注6　月の輪下遺跡発見の高杯状器台などおそらくこれに加わるものであろう。

注7　関根孝夫氏の御教示による。

注8　愛知県朝日遺跡群の南部地区旧河道Ｅ出土土器が，併行期の伊勢湾地方における内容の一端を

示している。

注9　他地方の土器研究に関して，すでに同様の指摘がされている。たとえば佐原1972，都出1974，木下1978など。

3　出土土器の編年的位置(2)―月の輪古について―

(1)　小野編年の問題点

駿河湾地方においては，弥生土器から土師器への移行期に，沢田式・目黒身式・尾ノ上式・大廓式の4型式が設定されている。そして，この順序による土器型式の推移は漸移的な変化を示し，それらの型式間に他の型式を交えることはないという（小野1969，同1976)。しかし，資料の多い壺の場合は，いわれるようなスムーズな連続を認めがたい。そこで，大廓式に先行するという各型式について，壺に限定して問題点を指摘した後，「月の輪古」の位置づけを検討したい。

①　尾ノ上式の壺

沼津市尾ノ上遺跡出土土器（小野1958）を標式とする尾ノ上式土器は，複合口縁の壺に特徴があるという。すなわち，幅4～5cm位の複合口縁部をもつことは先行型式と同じであるが，複合口縁部の文様の面で，(1)棒状浮文の退潮，(2)箆描の棒状沈文の出現，(3)無文のままとするものの出現，などが異なっている。そして，複合口縁部の幅が広く，端部も厚くなり，個体そのものが大型化するのが，大廓式の特徴とされている。

これによれば，壺Bと大型壺Bとの関係は，尾ノ上式と大廓式の型式的特徴に対応するらしい。この場合，土器の容量は，器形とともに，用途の相違を表現することが多いことに，注意する必要がある（佐原1976)。事実南関東地方では，大型壺B・壺B両者の相当品が，後期弥生土器中に見出される。駿河湾地方においても，複合口縁部の外面に縄文を施す大型壺が，田方郡韮山町山木，沼津市伴名田，富士市的場，清水市石川，静岡市登呂などにある。壺と大型壺には，やはり用途の相違があるらしく，小野のいうような時間的先後関係を示すものとは考えられない。

尾ノ上遺跡の壺Bは，壺C_3・壺D_3と同じく口縁部が〈の字状に外反し，重ねる粘土帯の幅が広い。複合口縁部に棒状沈文を加えるが，肩部は無文である。一方藤井原遺跡の壺Bは，壺A的な口頸部を有し，重ねる粘土帯の幅が広い。複合口縁部に棒状沈文を加え，肩部外面に斜縄文と連鎖文・円形浮文からなる文様帯を配す。この場合，前者を後者より古く考える理由はない。尾ノ上遺跡の折返し口縁壺には，口縁端部の外側に幅狭い粘土帯を重ね合わせた壺Cのほかに，壺Bと同様な幅広い粘土帯を重ね合わせた壺Gがある。この壺Gは，上述のごとく，伊勢湾地方では元屋敷期以後にみられるようになる。南関東地方においては，和泉式土器に一般的となるが，その前の五領式土器には類例が少ない。そして，五領式土器に併行する大廓式でも，同じく一般的ではない。他方壺Cは，単純口縁の壺Dとともに，球形の体部から，口頸部が高くゆるやかにひろがる。壺C_1・壺D_1に類似し，大廓式に通有の壺C・壺Dより古い様相を留める。なお壺以外の甕D_3と高杯Cは，大廓式のものとして矛盾がない。

尾ノ上遺跡の土器は，耕作（まさ打ち）中に出土したもので，その後の調査では，遺構を明確にすることができなかったという。そのためか，出土土器は，大廓式として何ら問題のない壺B・壺G・甕D・高杯Cと，大廓式以前のものとしても矛盾しない壺C・壺Dとに，分離することもできる。こうした基準資料についての不安とともに，(1)尾ノ上式の内容説明が，出土量の少な

い複合口縁壺にみられる特徴のみに依拠していること，(2)用途の相違する壺と大型壺とに，後続する大廓式との差異を考えることなど，小野の型式設定の仕方にも問題があった。したがって，疑問の多い尾ノ上式を設定したままで，大廓式に先行する土器を考察する必要はないと考える。

② 目黒身式の壺

沼津市目黒身遺跡出土土器（沼津市教育委員会1970）を標式とする目黒身式の壺は，大廓式の壺と，かなり密接な関係があるといえる。すなわち，口縁部の形態には，複合口縁・折返し口縁・単純口縁の3種がある。折返し口縁の壺は，口縁部内面と肩部外面に文様帯を有する。文様帯には，多くの場合，斜縄文と連鎖文・円形浮文を組み合わせて施文する。とすれば，後期終末という尾ノ上式を解消して，目黒身式→大廓式とすることで何ら問題がないようにも思えるが，はたしてそうであろうか。

小野真一が作成した「目黒身式の壺形土器集成」(沼津市教育委員会1970）には，実に雑多な形態のものが集められている。この場合，大廓式に先行するという尾ノ上式においてすでに，肩部外面の文様帯がほとんどみられない，と小野が考えていることにまず注意しなければならない。(小野1970)。事実は，大廓式においても，肩部外面の文様帯は健在であったのである。このことは，小野が目黒身式とする壺の中に，本来は大廓式とすべきようなものが，かなり含まれているのではないか，という危惧を抱かせる（注1）。

目黒身式に関して，小野は，沢田式の直後にくるものであるが，大した差異はなく，むしろ沢田式の退化形式というような感が深い，という（小野1958)。そして，沢田式の壺との差異として，次の3点をあげる。(1)擬縄文を含めて櫛描文が衰退し，羽状縄文などの縄文手法が盛行する。(2)連鎖文のある場合は，それが撚糸状の場合は沢田式の特徴として見られ，単なる沈線の場合は目黒身式の特徴として考えられる。(3)壺の下腹部における稜線が比較的不明確で丸味を帯びている。この場合，櫛描文と縄文の併用→櫛描文の衰退と縄文の盛行，という流れを考えることには，いささか問題がある。第1に，沼津市目黒身遺跡第1排水溝出土土器は，形態と文様帯の配置が登呂－沢田期の特徴と酷似しながら，縄文が盛行するということだけで，目黒身式の標式資料とされている（小野1970)。その差は，本当に年代的特色としてとらえうるものだろうか。第2に，静岡市登呂遺跡の例では，頸部～肩部外面に施す櫛描文は，波状文・直線文が圧倒的で，列点文と扇形文・簾状文は少ない（曾野1954)。天竜川以東においては，縄文的効果をもつ列点文が櫛描文の中で特に盛行するが，それは本当に登呂－沢田期のことであろうか。

こうした点から観れば，目黒身式の壺については，明らかに型式内容を再検討する必要がある。しかもそれは，当地方の弥生土器から土師器への移行期の土器を検討するために，不可欠の作業である。

(2) 壺の位置づけ

以上に検討した結果では，小野真一が提唱した当地方後期弥生土器の各型式について，それぞれ型式内容を再検討する必要があることが明らかとなった。しかし，良好な一括遺物の発見が少

ない現在は，そのすべての解決を試みることは不可能である。ここでは，３種の壺について，それぞれの変遷過程をとらえて，本遺跡群出土土器の編年的位置を考えることとする。

① 折返し口縁の壺

弥生土器中期後葉の向原式（注２）には，壺の口唇部に縄文を施す例がみられる。折返し口縁は，元来，この口唇部に厚みをもたせて，そこに文様帯をもったものである（菊池1954)。したがって，頸部～肩部外面と口縁部内面だけではなく，口唇部を肥厚させて縄文を施し，小棒状浮文を貼付するようなものは，明らかに，時間的に先行する要素が強い。こうした類例は，田方郡函南町向原，駿東郡清水町矢崎，沼津市入方，同沢田，同目黒身，富士市的場，清水市石川，静岡市登呂など，駿河湾地方で普遍的にみられる。それらの土器に共通する特徴は，細長くゆるやかにひろがる口頸部と，下腹部の張った無花果形の体部をもつ。口頸部高が相対的に高く，口縁端部に重ねる粘土帯はやや厚手の例が多い。文様帯は，口縁部内面と頸部～肩部外面，および口縁端部外面にある。頸部～肩部外面の文様帯は幅広く，文様を何段も巡らす。文様は，斜縄文と櫛描文（直線文・波状文など)とが併行して行なわれ，小棒状浮文や円形浮文を，文様帯の下端に貼付する。すなわち，従来の後期前葉，登呂式・沢田式の壺の内容と比較的近い。

一方，前にみた大廓式(新)の壺Ｃ(C_2・C_3）は，大きく外上方にひらく口縁部に，球形かやや下脹れの体部をもつ。口頸部高が相対的に低く，口縁端部に重ねる粘土帯は厚手の例が多い。文様帯は，口縁部内面と肩部外面にある。肩部外面の文様帯には，斜縄文を２段に巡らし，連鎖文・円形浮文を配するものが多い。

後者の大廓式の壺を前者の壺（ＴＩ）と比べたとき，形態的相違とあわせて，口縁端部文様帯の喪失，胴部文様帯の縮少などに，大きな違いを指摘できる。しかし両者の間には，系累が容易に看取できる点からも，密接な関係があることも明らかであり，この間の推移過程に，画期的な変化があったとは考えられない。すなわち，後期弥生土器の折返し口縁壺は，ＴＩを大廓式の壺の対極におく組列の中では，漸移的な変化を示すことが予測される。そこでこの組列のなかに，大廓式の壺の特徴と近似するものを新しく，疎遠なものを古くおくことで，折返し口縁壺の相対的位置を問題とすることにする。

本遺跡群出土の壺C_2は，窄まった頸部から口縁部が外湾しながら外上方へひらく。口頸部高は壺C_3と同じく低く口縁端部に重ねる粘土帯は薄手である。Ｔ4002は，口縁部内面に斜縄文を２段に施し，円形浮文を貼付する。Ｔ7801は，口縁部内面に櫛描波状文を施し，頸部～肩部外面に櫛描の直線文と波状文を巡らす。壺C_1は，窄まった頸部から口縁部がゆるやかにひろがってラッパ状をなす。口頸部高は，壺C_2・C_3より高く，ＴＩより低い。Ｔ6601は，口縁部内面に櫛の刺突による斜格文を巡らす。Ｔ6902は，口縁部内面に箆描の斜格文と円形竹管文を施し，肩部外面に櫛描直線文と円形竹管文を配する。口縁部を欠くＴ4101は，頸部～肩部外面に斜縄文と円形浮文を施す。沼津市二本松遺跡第１方形周溝墓には，４点の折返し口縁壺がある。窄まった頸部からゆるやかにラッパ状にひろがる口縁部と，やや下脹れか下腹部の張った無花果形の体部をもつ。口頸部高は，壺C_1と同じかやや高い。報告でいう⑽は，口縁部内面に１段と頸部～肩部外面に４段

の櫛描列点文を巡らし，口縁端部外面と頸部～肩部外面に棒状浮文を加える。(11)は，口縁部から，胴部にかけて，赤彩の痕を残す。(20)は，口縁部内面に斜縄文と連鎖文，頸部～肩部外面に櫛描列点文と連鎖文を巡らし，口縁端部外面に刻み目を施す。(35)は無文である。以上に記した土器の特徴からすれば，まず，二本松遺跡第1方形周溝墓例を，ＴＩと大廓式の中間的要素をもつものとして，ＴIIとすることができる。そして，本遺跡群出土の壺C_1はＴIIに近く，壺C_2は大廓式に近い位置を与えることができよう。

② 複合口縁の壺

弥生土器の中期後葉には，口縁部の先端を短く直立させる，受口状口縁の壺がある。複合口縁は，こうした土器の系譜上に出現したものであろう。なおその複合口縁は，駿河湾地方でもしばしばみられるが，南関東地方の後期弥生土器において，特に盛行した二重口縁手法である（関根1974）。

ＴＩ段階の類例は，駿東郡清水町矢崎，沼津市沢田，同目黒身，富士市的場，清水市石川，静岡市登呂などにみられる。形態は，折返し口縁の壺と類似し，複合口縁部の幅が比較的狭いものが多い。複合口縁部の外面には，縄文・櫛描文を施し，棒状浮文を加える。頸部～肩部外面の文様帯は幅広く，縄文・櫛描文を何段も巡らす。ＴII段階の沼津市二本松遺跡第1方形周溝墓例(7)は，やや下脹れの体部から，口頸部が高くゆるやかにひろがる。複合口縁部の幅は広く，外面に棒状浮文を加える。器体外面には，口縁部から胴部中央にかけて，赤彩の痕が残る。大廓式(新)のものとしては，前述した，沼津市藤井原，同尾ノ上の例がある。口頸部高が相対的に低くなり，幅の広い複合口縁部の外面には，棒状浮文・棒状沈文を加える。肩部外面は，前者が斜縄文を2段に施すが，後者は無文である。以上の組列の中で，南部谷戸遺跡第4号方形周溝墓出土の壺Ｂ（Ｎ 406）は，いかに位置づけられようか。Ｎ 406は，やや下脹れらしい体部から，頸部が短く立ち上がり，外反する口縁部へ移行する。口頸部高は相対的に低い。幅のやや狭い複合口縁部の外面には，棒状沈文を6本1組で4個所に加える。肩部外面は無文である。ＴII段階のものより新しく，大廓式(新)のものに近い位置が考えられる。

大型壺は，沼津市伴名田のほか，富士市的場，清水市石川，静岡市登呂などに，ＴＩ段階の類例がある。伴名田例は，ゆるやかにひろがる口頸部と，下腹部の張った無花果形の体部をもつ。口頸部高は相対的に高い。複合口縁部の外面には，縄文を施し，棒状浮文を加える。頸部～肩部外面にも，羽状の縄文を，幅広く何段も巡らしている。大廓式(新)のものも類例は多く，複合口縁部の端部内側に，幅狭い粘土帯を重ね合わせるのが特徴的である。ただし形態の知れる例がないいまは，藤枝市下藪田，長野県下蟹河原の類品を参考する。体部は球形で，短く直立する頸部と，外反する複合口縁部をもつ。口頸部高は相対的に低い。複合口縁部の外面には，棒状浮文を加える。肩部外面には，前者が羽状の縄文を巡らすが，後者は無文である。月の輪平遺跡第59号住居址出土の大型壺Ｂ（Ｔ5901）は，球形らしい体部と，壺C_1・壺D_1的な口頸部をもち，口頸部高が相対的に低い。複合口縁部は，端部内側に幅狭い粘土帯を重ね合わせ，外面に棒状沈文を7本1組で4個所加える。大廓式(新)のものに近いが，やや古い様相をとどめる。

③ 単純口縁の壺

TⅡ段階の沼津市二本松遺跡第1方形周溝墓出土品には，バラエティーがある。第1類は，やや下脹れの体部と，短く立ち上がる頸部に外上方へひらく口縁部をもつ。口頸部高は，次の第2類より高い。報告のいう(4)は，肩部外面に斜縄文を1段巡らす。(2)と(5)は，胴部に赤彩の痕がみられる。(3)と(8)は無文である。第2類は，やや下脹れの体部と，外湾気味に外上方にひらく口縁部をもつ。口頸部高は，大廓式のものと同じく低い。(1)は，口縁部内面と肩部外面に，斜縄文を2段・羽状に施す。(9)は，器体外面に赤彩の痕が残る。(12)と(34)は無文である。第3類は，球形の体部と，細長くゆるやかにひろがる口頸部をもつ，大形品の(33)である。口頸部高は相対的に高い。頸部～肩部外面に斜縄文を2段に巡らし，中間に円形浮文を5個1単位で5個所に配する。

本遺跡群出土の壺D_1は，短く内傾しながら立ち上がる頸部と，外上方にひらく口縁部とからなる，口頸部をもつ。T10003は，外面を赤彩している。二本松遺跡第1方形周溝墓の第1類に類似している。

④ 櫛描文と縄文

小林行雄は，駿河湾地方の後期弥生土器に，次のような2段階を考えている（小林1938)。すなわち，縄文または櫛描文がそれ自身の個性を最も自然に発揮させている段階と，櫛描文と縄文とがただ一つの装飾的効果のために用いられて，櫛描文の縄文的表現と縄文の羽状配列とが，最も普遍的なものとして喜ばれる段階とである。そして小林は，後期弥生土器を通じて，櫛描文と縄文との併行する事実を，駿河湾地方における特異な伝統として，注目している。

一方小野真一は，同じ後期弥生土器の中に，次のような2時期を想定している（小野1969等)。すなわち，櫛描文の縄文的表現である羽状の列点文を含めて，櫛描文が縄文と並んで行なわれた時期と，櫛描文が衰退して，縄文と連鎖文・円形浮文を組み合わせた文様が，多用されるに至った時期とである。小野によれば，当地方の後期弥生土器には，櫛描文と縄文の併用から縄文の盛行へという推移があり，小林説は認められないことになる。

大廓式(新)の壺においては，既述したごとく，縄文手法が盛行する。この事実は，一見小野説の有利を思わせる。ところが，TⅠ段階の静岡市登呂遺跡出土品を整理した曾野寿彦は，頸部～肩部外面に施される櫛描文中，圧倒的に多いのは波状文・直線文であり，縄文的効果をもつ列点文は少ないという（曾野1954)。そして，TⅡ段階の沼津市二本松遺跡出土品には，口縁部内面と肩部外面に，縄文的効果をもつ櫛描列点文を施す壺Cが見られる。また，TⅡ段階以降の月の輪平遺跡出土土器には，口縁部内面に櫛の刺突による斜格文を施す壺C_1（T6601)，口縁部内面と肩部外面に櫛描の波状文・直線文を巡らす壺C_2（T7801)，肩部外面に櫛描の列点文を配する壺D_3（T6304）がある。富士川以東の駿河湾地方が，元来，縄文手法の卓越する地域であることを考えると（小野1969等)，こうした類例の存在は，小林説にも耳を傾ける必要があることを示して十分である。

(3) 高杯と甕の位置づけ

高杯と甕の資料は，壺と比べて個体数が少ないために，器形別の変化の流れを把えきることがむつかしい。したがって，この設問に解答を与えるには，より多くの推定を加えて検討せざるをえない。

① 高杯

伊勢湾地方においては，欠山期以降の高杯に，杯部の口縁部が順に外開きとなり，かつ杯部が浅目になるという変化がある。T0403は，杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈折し，口縁部が直線的に外上方に大きくひらく。杯部が深い形態のもので，欠山期の高杯杯部に近い。ただし脚部は，ひらきが直線的になっていて，欠山期の内湾してひらく脚部とは異なる。T6905は，杯部の底部と口縁部との境界が鈍く屈折し，口縁部が内湾しながら外上方に大きくひらく。T0403より杯部が浅く，元屋敷期のものに近い。T1501は，杯部が浅い形態のもので，杯部の屈折も顕著でない。石塚期以降のもので，明らかに大廓式土器に属する。

② 甕

甕A Ṡ字状口縁台付甕の細分は，すでに大参義一・安達厚三によって試みられている（大参1968，安達・木下1974）。本遺跡群出土の甕A_1（T4301）は，安達分類のI類に当り，大参分類の欠山期a類と近似した特徴をもつ。甕A_2（T5601とT(22)−(56)02）は，安達分類のII類に相当する。この安達II類は，伊勢湾地方においては欠山期〜元屋敷期に，近畿地方では庄内式土器〜布留式土器（和田廃寺下層段階）と，伴出する例が多い。

甕B と甕F 駿河湾地方では類例の少ないもので，ともに南部谷戸遺跡第12号住居址から出土した。甕F（N1203）は，底部が外方に突出した小さな平底で，中央に不整形な凹みをもつ。これは，尖底状を呈する底に，輪台＝環状の粘土を貼付したものである。こうした平底手法は，近畿地方の畿内第V様式の甕や，庄内式の一部の甕にみられる特色である。しかし，体部外面には叩き目があるのが普通である。

甕B（N1201とN1202）は，ḋの字形に外反する口縁部の，端部外側を削って面とりしている。近畿地方の庄内式土器の甕には，口縁端部を上方に突出させるもののほかに，削って平坦な面をもって終るものがある。ただし，体部外面に叩き目があり，台はつかないのが普通である。伊勢湾地方の欠山期の甕にも，口縁端部が丸味を帯びて終るもののほかに，外側に平坦な面をもって終るものがある。これは粗い刷毛目調整の台付甕が普通であるが，平坦面には櫛描列点文を巡らすことが多い。N1202は，体部外面を粗い刷毛目で調整し，頸部外面に強く横なでした結果の凹部がみられる。伊勢湾地方のものと類似する。N1201は，欠山期の甕と同じ低く直線的にひらく台がつくが，体部内外面を細い刷毛目で調整している。伊勢湾地方のものとはやや相違する。

東日本の伊東市内野町遺跡と千葉県諏訪原遺跡には，欠山−庄内期より新しい時期の，甕B・甕Fの例がある。内野町遺跡出土の甕Bは，体部内外面を細い刷毛目で調整する。甕Fも，体部内外面を細い刷毛目で調整し，口縁部はḋの字状に外反する。諏訪原遺跡出土の甕Bは，体部外面を細い刷毛目で調整する。甕Fは，口縁部に変化があり，ḋの字状に外反するもの，内湾気味に大きくひらくもの，中位で屈曲して有段となるものなどがある。体部外面の調整も様々であり，

細い刷毛目を施すもの，粗い刷毛目を施した後に下半を箆でなでるもの，箆削りするもの，肩部外面に箆描斜格文を加え内面を箆削りするものなどがある。

以上本土器は，欠山－庄内期に，伊勢湾地方・琵琶湖地方・近畿地方などにおいて盛行した特徴をもつ。しかし東日本においては，大廓式土器(古)に相当する時期に属す例があり，時間的にやや幅をもたせた位置づけを考えねばならない。

甕D　ＴＩ段階の静岡市登呂遺跡の台付甕には，大別して２つの形がある。その１つは，中位で屈曲して稜をつくる胴部と短く外反する口縁部をもつもので，口縁部径が胴部最大径よりも大きい。他の１つは，口頸部が緩やかにひろがるD_1・D_2で，胴部最大径がやや上位にあるものが多い。ＴII段階の沼津市二本松遺跡出土の甕Ｄは，D_2が主体を占め，D_1とD_3は少ない。大廓式土器(古)に相当する伊東市内野町遺跡出土土器には，D_1とD_2がそれぞれ１個体，D_3が４個体ある。大廓式土器(新)の甕Ｄは，漆畑遺跡と大廓遺跡にD_2の，広池遺跡にD_3の類例がある。藤井原遺跡溝状遺構では，D_2とD_3が見られる。したがって，すべて平縁のもので，刻み目は消滅しているといえる。

以上の甕Ｄの推移過程より観れば，本遺跡群出土のD_1は，大廓式土器より古い時期のものとしてよいだろう。またD_3は，大廓式土器に属すものとみなすことができる。しかしD_2については，かなりの時期的幅をもたせた位置づけを考える必要がある。　(加納)

注１　たとえば,「目黒身式の壺形土器集成」中の（２)(３)(10）などは,明らかに大廓式のものである。
注２　田方郡函南町向原遺跡溝状遺構出土土器を標式とする（小野・秋本・藪下・原1972)。

遺跡名	遺　　跡　　名	文　　献	(年)
静岡県	浜名郡舞阪町浜名湖弁天島海底遺跡	舞阪町教育委員会	1972
	浜松市村東遺跡	向坂鋼二	1959
	掛川市春林院古墳	春林院古墳調査委員会	1966
	榛原郡川崎町白鬚遺跡	島田高校郷土研究部	1954
		久永春男	1955
	島田市旗指3号墳	静岡県考古学会	1978
	藤枝市下藪田遺跡	藤枝東高校郷土研究部	1956
	藤枝市五鬼免1号墳	静岡県考古学会	1978
	静岡市登呂遺跡	日本考古学協会編	1949
		日本考古学協会編	1954
		杉原荘介	1958
	清水市石川遺跡	静岡県教育委員会	
	清水市寺崎1遺跡	清水市教育委員会	1971
	富士宮市丸ケ谷戸遺跡	富士宮市	1971
	富士宮市滝戸遺跡	富士宮市教育委員会	1977
		富士宮市教育委員会	1978
	富士市的場遺跡	静岡県教育委員会	1965
	沼津市漆畑遺跡	静岡県	1930
		小林行雄・杉原荘介編	1968
		沼津市教育委員会	1970
	沼津市沢田遺跡	小野真一	1958
	沼津市入方遺跡	小野真一	1958
	沼津市伴名田遺跡	小野真一	1958
	沼津市尾ノ上遺跡	小野真一	1958
	沼津市大廓遺跡	小野真一・笹津備洋	1969
	沼津市瀬戸川遺跡	沼津市教育委員会	1970
	沼津市目黒身遺跡	沼津市教育委員会	1970
	沼津市広池遺跡	建設省沼津工事事務所 静岡県教育委員会，沼津市教育委員会	1971
	沼津市藤井原遺跡	沼津市教育委員会	1975
		沼津市教育委員会	1976
		沼津市教育委員会	1977
		沼津市教育委員会	1978
	沼津市二本松遺跡	瀬川裕市郎・山内昭二・小野真一	1978
	駿東郡清水町矢崎遺跡	小野真一	1963
		小野真一	1964
	田方郡函南町向原遺跡	小林行雄・杉原荘介編	1968
		小野真一・秋本真澄・藪下浩・原茂光	1978
	田方郡韮山町山木遺跡	韮山村	1962
		大塚初重	1961
		韮山町教育委員会	1969
		韮山町教育委員会	1976
		韮山町教育委員会	1977
	伊東市内野町遺跡	伊東市教育委員会	1962
東日本	長野県堂垣外遺跡	桐原健・御子柴泰正	1969
	長野県下蟹河原遺跡	藤森栄一	1939
	山梨県京原遺跡	山梨県教育委員会	1974
	神奈川県諏訪の前遺跡	小田原市教育委員会	1971
	神奈川県真土大塚山古墳	本村豪章	1974
	神奈川県持田遺跡	逗子市教育委員会	1975
		逗子市教育委員会	1975

第49表　遺跡一覧表

	遺　　跡　　名	文　　献	
東日本	東京都前野町遺跡	杉原荘介	1940
		杉原荘介	1961
	東京都世田谷区立総合運動場遺跡	世田谷区教育委員会	1970
		世田谷区教育委員会	1974
	東京都中田遺跡	八王子市中田遺跡調査団	1968
	東京都鞍骨山遺跡	八王子市谷野遺跡調査団	1971
	東京都椚田遺跡	八王子市椚田遺跡調査団	1977
	東京都平山橋遺跡	東京西線及び北八王子変電所遺跡調査団	1974
	東京都神明上遺跡群	立正大学文学部考古学研究室	1971
	埼玉県大宮公園内遺跡	大宮市役所	1968
	埼玉県吉野原遺跡	大宮市役所	1968
	埼玉県諏訪山遺跡	埼玉県遺跡調査会	1971
	埼玉県加倉遺跡	日本道路公団・埼玉県・埼玉県遺跡調査会	1972
	埼玉県平林寺遺跡	日本道路公団・埼玉県・埼玉県遺跡調査会	1972
	埼玉県西台遺跡	埼玉県遺跡調査会	1970
	埼玉県五領遺跡	杉原荘介	1971
	埼玉県駒堀遺跡	埼玉県教育委員会	1974
	埼玉県大谷遺跡	金井塚良一	1973
	埼玉県武良内遺跡	埼玉県教育委員会	1977
	埼玉県上郷遺跡	栗原文蔵・横川好富	1961
	埼玉県水窪遺跡	岡部町教育委員会	1976
	埼玉県弥藤吾新田遺跡	埼玉県遺跡調査会	1976
	千葉県三ツ堀遺跡	野田市郷土博物館	1957
	千葉県堤台遺跡	下津谷達男	1965
	千葉県中和倉寒風遺跡	松戸市教育委員会	1963
	千葉県諏訪原遺跡	松戸市教育委員会	1974
	千葉県北作1号墳	金子浩昌・中村恵次・市毛勲	1959
	千葉県復山谷遺跡	千葉県文化財センター	1978
	千葉県臼井南遺跡群	佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会	1975
	千葉県叙合作遺跡	千葉県文化財センター	1978
	千葉県東寺山石神遺跡	千葉県文化財センター	1977
	千葉県小田部古墳	古墳時代研究会	1972
	千葉県菊間新皇塚古墳	千葉県都市公社文化財事務所	1974
	千葉県神門4号墳	田中新史	1977
	千葉県阿玉台北遺跡	千葉県都市公社文化財事務所	1975
	栃木県駒形大塚古墳	三木文雄・関根顕英・岩崎卓也	1972
	群馬県石田川遺跡	尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治	1968
西日本	愛知県下渡遺跡	一宮市	1967
	愛知県元屋敷遺跡	一宮市	1967
	愛知県南木戸遺跡	一宮市	1967
	愛知県石塚遺跡	大参義一	1968
	愛知県朝日遺跡群	愛知県教育委員会	1975
	愛知県埋田遺跡	津島市教育委員会	1970
	三重県大畑遺跡	鳥羽市教育委員会	1972
	奈良県平城宮跡下層	安達厚三	1969
	奈良県纒向遺跡	桜井市教育委員会	1976
	奈良県藤原宮跡	安達厚三・木下正史	1974
	奈良県坂田寺跡下層	安達厚三・木下正史	1974
	奈良県上ノ井手遺跡	安達厚三・木下正史	1974
	奈良県有井池遺跡	末永雅雄	1941
	大阪府上田町遺跡	原口正三	1969
	大阪府小若江北遺跡	坪井清足	1956
	大阪府庄内遺跡	森本六爾・小林行雄	1938
		田辺昭三・田中啄	1977

第50表　遺跡一覧表

○床面上面出土　⊙完形土器　○埋土内出土

	大型甕	甕							大型壺	壺					小型壺		高杯			小型高杯	高杯状器台	器台					鉢			小型底部土器			小壺		小型土器				手捏土器	その他	備考
	D	A	B	C	D	E	F	G	B	A	B	C	D	E	F	A	D	E	A	B	C	A	B	A	B	C	D	E	A	B	C	D	A	B	C	A	B	A	B	C	D	E		
T01		⊙											○	○		○		○				○												○	○							壺体部2	古2～新
T03		2～5											2																													壺底部1	
T04																							⊙																				古1
T07					2												○																										
T08					2																																						古2～新
T11					⊙							○																															
T13		○			3																						○					○											新
T14		5																																									
T15		4																																								壺脚部1	
T16		○																	○																								新
T17		○										○																															新
T18		5										3										○											⊙										古2～新
T19		⊙										○										○											⊙										新
T20		4										3																															
T22上																										○																壺脚部1	古2～新
T22		○																				○																					新
T24					○								○																														
T26					1																																					壺脚部1	
T30																																											
T32																																										高杯脚1	
T33		○																																									古2～新
T35		3																																									新
T37		5			○																																						古1
T40		○			1.2								○																														
T41		5			2																																					壺底部1	
T42													2																													壺底部1	古1～古2
T43		○																																								壺脚部1	
T45		4			○									○																												壺脚部2	古1
T46		○			1																																					壺底部2	
T48		4																																								壺脚部1	古2～新
T54					⊙																																					器台脚部2	
T56					3																																					壺底部4	
T57		○			○																																						古1～古2
T59		2			2								⊙																													壺脚部2	
T61									○																																		古1～古2
T62		○																																									
T63		4.5								○																																	新
T64					2								○																													壺脚部1	
T66					3								3																													壺底部1	古2～新
T69													○																														
T70													1																													壺体部1	古2
T71					○																	○																					
T72					2.3																																					壺脚部1	
T73													○																													器台脚部1	
T75					○																																					壺底部1	
T78					3								○																													壺脚部1	
T81													2																													壺体部1	
T83					○								1																													壺底部1	
S01					2																																						
S02		○			3																																					高杯脚部1	新
S03		4.5			2																																						
N01		○											○																													壺底部1	
N03		4																																								高杯脚部1	
N04																																										壺体部1	
N12																																										壺底部1	
NH01																																										壺脚部1	
NH02																																											古1～古2
NH03																																										壺底部1	
NH04																																											
U01																																										壺底部1	
U02																																										壺脚部1	
U03																																										高杯脚部1	
大原A	○	○			3																																					高杯脚部1	
大原B		1.4			2								○																														
漆畑	○	○			2		○		○				○			○			○			○																					
目黒身		3			2				○									○																									
広池		○																																									
藤井原	○	3.4			3		○		○				3																													高杯脚部1	
矢崎		2			2.3								2		2.3																												
		1.4																																									

第51表　月の輪遺跡群出土土器組成表

II　月の輪平遺跡の集落構成

月の輪平遺跡から発見された86基の住居址のうち重複するものが圧倒的に多いことは本論に述べられているが，ここで注意したいのは，これらの住居址の出土土器が弥生時代後期後半～古墳時代初頭に限られ，本遺跡が比較的短時期に連続して居住された集落のほぼ全容を示すものと理解されることである。ここでは主に住居址の構造について分析し，遺跡全体（集落）に時間的な変化がみられるか否かを検討していきたい。

1　遺構の分析

(1)　住居址について

規模

規模が測り得る住居址は69基である。それは床面積で3.78m²の第69号住居址から57.2m²の第59号住居址まで巾をもつ。その状況を第A図に示したが，列挙すれば次の通りである。

①　7 m²以下の規模を有する住居址

3，12，44，45下，47，61，69，76，80，84，87，90

②　7～9 m²の規模を有する住居址

5，16，53，63，71，79，86

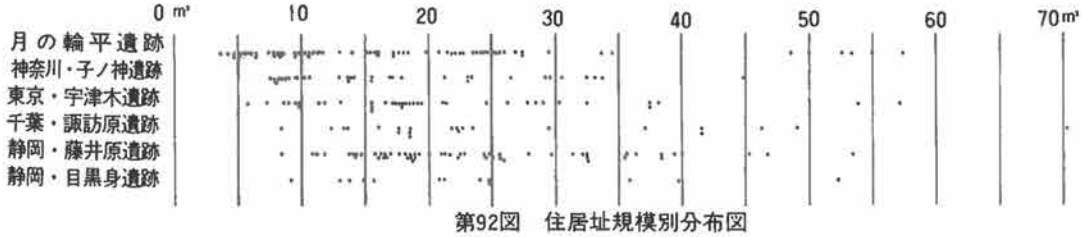
③　9～13m²の規模を有する住居址

4，39，42，52，56，60，64，73，75，89

④　13～35m²の規模を有する住居址

1，2，7，8，13，15，17，18，19，20，23，26，32，33，35，37，38，40，41，45，48，51，54，55，62，65，66，67，70，72，81，83，88，91

⑤　35m²以上の規模を有する住居址



第92図　住居址規模別分布図

11，21，22，43，57，59

以上の5類はその性格によって，以下にのべる大型住居址，一般住居址，竪穴遺構の3種に大別することができる。本遺跡における大型住居址は48m²以上の床面積を有する。第11，21，22，43，57，59号住居址の6基が認められる。30m²台に第17，81号住居址が位置するが，大型住居址とはかなりの断絶が認められ，13～35m²の床面積を有する住居址を一般的な住居址規模（以下，一般住居址）とすれば，そのなかの大形であると理解され，計測値を知り得る一般的住居址は34基をかぞえる。なお，壁の流出や重複によって計測値の不明な住居址の大半も、残存する壁，床面から推測すれば，一般住居址にふくまれ，その実数は増すであろう。裏がえせば，一般住居址に重複住居址が多いことを指摘できるかもしれない。

13m²以下の小形住居址は29基をかぞえ，全住居址の⅓を占める。詳細に観察すれば，9m²，7m²に若干の断絶が認められ，7m²以下の住居址が12基，7～9m²の住居址が7基，9～13m²の住居址が10基にわけられる。

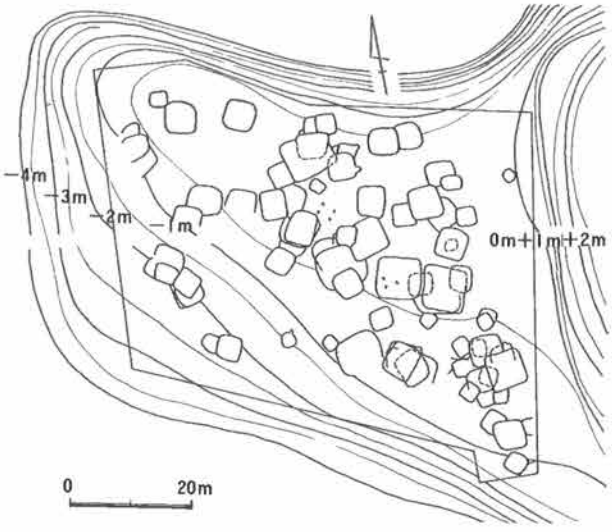
知見の資料にたよって本遺跡を比較，検討すれば，10m²以下の住居址をもつ遺跡は極端に少ない。五領期遺跡の一般的な床面積の分布形態を千葉県諏訪原遺跡（松戸市教育委員会　1974）にもとめた場合，神奈川県子ノ神遺跡（子ノ神遺跡調査団　1978），東京都宇津木遺跡（中央高速道八王子地区調査団　1973）に類似した性格を認めるにすぎない。が，宇津木遺跡の第8区－第5号住居址を除けば，両遺跡ともその分布は7m²以上を示し，しかも炉をともなって住居機能を有している。とすれば，本遺跡において小形住居址と把握した一連の住居址にたいして，7m²以上の規模をもつものは充分に一般住居址と認められる。反面，7m²以下の極小住居址の類例をもたない事実から，その性格づけに困難をともない，一様に住居址と称するには違和感をおぼえ，本項では竪穴遺構として検討していきたい。

形状

本遺跡の住居址の形状は胴張り隅丸形（A類），隅丸形（B類），方形（C類），不整形（D類）の4類に大別できるが，重複が激しいため，明確に形状を把握するには困難がともなう部分もある。したがって，同じ隅丸でも当然，方形，長方形といった形状の差が存在しており，そうした差が上屋構造の変化につながる問題をふくむであろうが，ここでは遺構検出条件の不利から，一様に方形と称することとし，形状差を壁線がしめす湾曲度合からわけることにした（第C表）。

もっとも一般的な存在は隅丸方形住居址（B類）である。竪穴遺構から一般的住居址にいたるまで普遍的に存在し，20～30m²の規模をもつ住居址のうち，第33号住居址を除いたすべてが属し，しかも7～13m²の小形住居址にいたっては他形状が皆無である。大型住居址では第22号住居址が該当し，7m²以下の竪穴遺構にも整形された隅丸方形プランをもつものが7基認められる。これを除けば竪穴遺構はすべて不整形（D類）であり，隅丸方形プランを意識した，第12，44，45号下遺構と胴張り不整形の第47，69号遺構にわけられる。　※発掘調査時，ならびに調査報告では一様に住居址として扱っているが，本章においてはその性格上，竪穴遺構を検討の一部に加えるため，ここでは遺構と称する。

方形（C類）を呈する住居址は30～40m²の規模を有する第17，81号住居址の2基に特徴であり，13～20m²といった一般住居址のなかでも若干，小規模の部類に多いことが指摘される。大型住居址は第11，57号住居址が認められる。



第93図　住居址新旧関係図

胴張り隅丸方形住居址（A類）と認められるのは大型住居址の第21，43，59号住居址と第33号住居址の4基である。他に第27，31号住居址が残存する壁の湾曲度合から可能であるが，その実数は極めて少ない。

このように弥生時代後期～古墳時代初頭にかけて，住居址の形状差が激しいことは周知の事実であり，本遺跡も同様の分布形態を示す結果となったが，ここで形状の規模別分布に視点をさだめると，胴張り隅丸方形住居址（A類）は概して大形の傾向があり，隅丸方形住居址（B類）は普遍的であるが，20～30m²にとくに集中する。いいかえれば，そこに方形住居址（C類）が存在しないことを意味し，規模によって形状が規制される現象が存在する可能性もある。また，方形住居址に限れば，規模，形状の似かよった住居址が集中，もしくは小規模化する傾向は，何らかの規制概念の想定も考えねばならぬが，ここで指摘するには早急であり，限っていえば，胴張り隅丸方形住居址（A類）が出土土器，ならびに重複関係で古い段階に位置し，方形住居址（C類）が比較的新しい段階に位置することが認められる。

個称		竪穴遺構	小形住居址		一般住居址				大型住居址		合計
規模		7m²以下	7～9m²	9～13m²	13～17m²	17～20m²	20～30m²	30～40m²	40～50m²	50～60m²	
住居址数		12	7	10	7	7	18	2	2	4	69
住居址形状	A類						1		1	2	4
	B類	7	7	10	4	5	17		1		51
	C類				3	2		2		2	9
	D類	5									5

第52表　住居址形状一覧表

構築方法

本遺跡の主たる特徴に床面の二重構造があげられる。貼り床施設の一形態であり，詳細な検討は第Ⅲ章で述べられている。したがって，ここでは大略的なものとなる。

二重構造の意味するものは一種の湿気ぬきと考えられ，形態を３分類することができる。二重構造を有する住居址は大型住居址，一般住居址にみられるのは普遍であるが，竪穴遺構のなかにも数基認められる。比率からすれば，15～30m²の規模の隅丸方形住居址にもっとも多いが，住居址数も多いことを考えれば，当然の結果であり主たる特徴とはいえない。頻度は大型住居址がたかい。二重構造の３形態は住居址の規模，形状にきわだった相関関係をもつことはないらしいが，しいてあげれば，方形住居址に二重構造をもたない例が多いことを指摘できる。

炉，ならびに焼土

炉が確認された住居址は24基で，そのうち炉石を有する例は14基である。第62号住居址の場合のように中央部分に細長い礫が検出されているが，火災による焼土の堆積が厚く，一概に炉としがたい状況にあった例や，その他，焼土が点散して炉と区別のつかない住居址はここに含んでいない。

24基の住居址を詳細に観察すれば，大型住居址に確認例が多く，第22，43，57号住居址に炉石を有した炉が，第59号住居址に炉石を有しない炉が，また，一般住居址の大形とされる第17，81号住居址も第17号住居址が炉石を有さず，第81号住居址が炉石を有する。反面，8m²前後の規模を有する第74号住居址が炉石を有している例などを加味すれば，炉石の有無によって規模，形状が制約されるとはいいがたい。

第94図　火災住居址，炉を有する住居址分布図

炉を有する住居址の検出状況をながめると，比較的重複関係の新しい段階に位置しており，こうした現象が重複によって旧住居址の炉が削取されたと理解すれば，重複の少ない大型住居址に炉が残存し，重複の激しい地点の住居址に確認が少ないといえるが，重複関係の新しい段階に位置する住居址にも炉を有しないものもあり，また，炉石を有する炉をもつ住居址と，有さない住居址が併存する状況から，両者に時間的差異を認めるにはいたらない。

炉の規模は炉石の有無をとわず，径30～40cm前後の規模と５cmほどの厚さにおさまるものが多い。概して貧弱である。

炉は多く，１～２個の河原石を置いて炉石とし，１住居址に１基を原則とするが，それは住居址の規模，形状を問わない。ただし，前述した第74号住居址に炉石を有した炉２基が確認され，それが推定規模８m²前後の小規模住居址である事実は，当住居址にたいしてなんらかの特殊性を考えねばならぬであろう。

炉のほかに焼土，炭化物を有する住居址は21基を数える。また，実測図には焼土の記載はないが，火災を認める記述がある第17号住居址を加えれば22基となる。なかでも十分に火災と確認できる住居址は第15，18，20，33，55，60，62，64，66，72，76，86号住居址の12基である。ほかは壁際に少量の焼土が点散する例で，火災と断定するには若干の躊躇がある。また，炉を有しない第32，70号住居址の床面上に焼土をもたずに炭化物だけが散在する例は特異であり，炉を有さずに壁際に焼土が点散する例とあわせて，火災以外の条件を推定せねばならぬであろう。

火災の痕跡をもっとも良好な状況で残すのは第18，62号住居址である。両住居址とも床面全域に焼土が存在し，その下層には炭化したカヤや材木を多量に含んでいる。ここでそれらの炭化材の上部に厚くのる焼土にも注目しておきたい。その量はかなり多いもので，それは周堤の存在(都出　1975）や，アイヌをはじめとする北方民族例から，屋根の上に土をのせたとする例（越田1977）は十分に説得力に富むものである可能性を有する。

柱　穴

柱穴は住居址の重複が激しいうえ，床面の二重構造による掘り方覆土の存在によって，その確認は困難で，明確にしえた住居址は非常に少ない。したがって，柱穴の確認されない住居址が，その構築当時からそれを設けなかったかどうかという断定は保留しておきたい。

こうした制約ある資料からであるが，基本的には4本の主柱穴からなることは確実で（月の輪下遺跡の住居址は6本の主柱穴からなる特徴を有するが，本遺跡には皆無である。）二重構造を有した隅丸方形住居址のうち，一般住居址と称した13～35m²の規模を有する住居址に確認例が多く，しかも，20～30m²住居址に整った形状を示す傾向がみうけられる。小形住居址や竪穴遺構に確認の例はなく，また，方形住居址に確認例が少ないことも指摘できる。規模，形状の違いは，むろん上屋構造や構築方法にも変化をあたえるであろうが，その状況をあきらかにすることはできない。

柱穴の形状は，長円形にふくめてもいい例もあるが，円形が主体であり，極端に規模が大きく，また深いといったものはない。大型住居址の柱穴は一般に大きく，50～60cm，深さ50cmほどを平均して測る。一般住居址は20～40cmの規模と20～30cm内外の深さが普通である。

入口施設（柱穴以外のピット，および張り出し）

住居址の入口をもとめるには，炉の対向に存在する貯蔵穴状ピットや柱穴状ピット（斜行ピット）から推定する例が多い。張り出しについても，床面よりあきらかに掘り窪められた，いわゆる張り出しピットを除いたものも入口施設と考えて，ここに含めたい。なお，静岡県南伊豆町日詰遺跡第5次発掘調査において，第8区の弥生時代後期の住居址のなかに張り出しをもった住居址が確認され，周囲にピットがとりかこむようにして存在するが，張り出し部分には認められず，しかも入口を意識したような対のピット列が確認されている。周囲のピット列が周堤の土止め用杭の痕跡であるか否かは今後の検討によるであろうが，張り出しが入口施設に関連したものである確かな例といえよう（南伊豆町教育委員会1979)。

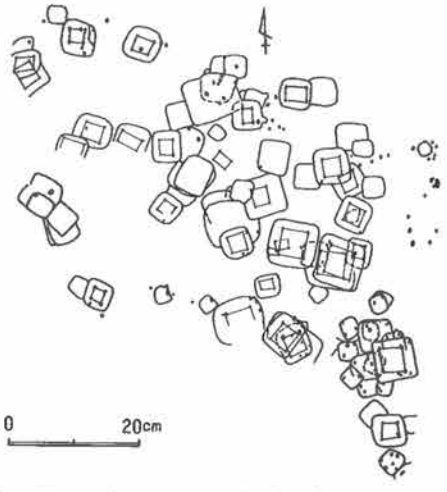
張り出しを有する住居址は第8・9・(16)・59・89号住居址の5基である。第9号住居址が掘り

方まで掘り窪められているほかは，床面と同レベル，もしくは数cmの段をもって張り出されている。そのうち住居址全体の形状が知れるのは第８号住居址だけである。張り出しは壁のコーナー，すなわち柱穴の延長上に位置し，基部に方形状の浅いサラ状のピットが，張り出し前庭部に対の円形ピットが存在している。基部に存在するサラ状のピットを，古墳時代後期住居址に例の多いカマドと対向するピットと性格を同様に考えれば，前述都出の設定する梯子穴の設定も考えられよう。また，第８号住居址の張り出しが柱穴の短軸上に位置することは，住居址の長軸方向と入口方向が異にすることとなり，そうした入口方向の変化の上限が問題化されている現在，一資料を提供することとなるが，当住居址に炉が確認されないこと，他住居址の全容が確認できないことによって，それをあきらかにはできない。

ここで住居址外のピットに視点をむければ，第１・40・70号住居址が認められる。ピットは柱穴状であり，住居址の長軸の柱穴の延長上，もしくは壁のコーナー付近に位置している。確認されるピットは１本で，第８号住居址の一対となるピットとは性格が違うらしい。

住居址外のピットの存在をもとめたとき，奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡と同県東大寺古墳出土の環頭大刀装飾図柄の竪穴住居址があげられる（木村　1975，都出　1975)。この絵に表現されている住居址外のピットは周堤の土止め用と考えられる杭と入口の手すり状木組や突き上げ戸と考えられる扉を支える棒である。とすれば，本資料は周堤の土止め用杭等の設定を考えるより，その性格をそうした入口施設にともなったものと理解するのが妥当と思われる（絵に立体的な表現がないことからピット数を確認できないが)。

次に住居址内における主柱穴以外のピットをさがせば，第22・43号住居址に一対のピットが認められる。第22号住居址の場合，短軸の線上に１本の副柱とすべきピットを設置し，長軸の延長上の壁際に一対のピットが位置するところから，上屋構造がいかなるものかは理解できないとしても，それはあきらかに入口施設を意識したものといえよう。第43号住居址は壁中央部のピットと地山礫をはさんだ一対のピットが存在する。どちらを認めるか判断にまようが，地山礫をはさんだ一対のピットを認めれば，一種の階段施設としての使用も考えられる。



第95図　柱穴，ならびに柱穴以外のピットを有する住居址分布図

さらに住居址内をさがせば，壁際にピットを単独でもつ住居址が比較的多いことに気付く。第1・(2)・18・21・32・45・48・62・70号住居址の９基である。いずれも長軸方向に位置し，第18・21号住居址を除いた住居址が主柱穴をもち，形状は第21号住居址が胴張り隅丸方形のほかは全て隅丸方形である。第57・81号住居址といった方形住居址にも認められるが，重複が激しく，ピットの帰属

が明確でないことからここでは除くものとする。

以上によって，入口施設をともなうといえる住居址は隅丸方形，ならびに胴張り隅丸方形が多い傾向となる。単独ピットはサラ状，柱穴状にわけられ（梯子穴を想定する斜向ピットはない。）一概に梯子穴の変形を想定するには説得力に欠け，他の諸用途も考えねばならぬであろうが，通例のように，それらのピットは炉の対向に位置することから，入口方向の設定には支障をきたさないであろう。なお，炉石を有する炉をもつ住居址の場合に入口と推測する側に炉石が設置される例（第22・37・43号住居址）があることから，炉石の位置によって入口を推定できるといえるかもしれない。

すると，入口施設は第8号住居址という異例を除いて，炉の対向または長軸方向に設定するのが妥当であるといえ，第8号住居址をはじめとする張り出しを有する住居址については資料の制約が多いため，軸方向に規制されない可能性もあるとして，今後の類例をまちたい。

竪穴遺構にも壁際にピットを単独で有する例が多く，あるいは入口施設に関わるものといえるかも知れないが，それらは主柱穴がなく上屋との結合も可能かも知れないので，ここでは検討から除いた。

ベッド状遺構

近年，ベッド遺構を有する住居址の特異性を，方形周溝墓の出現と合致すること，手づくね土器，土製丸玉等の祭祀に関係のある遺物をはじめ，全体に遺物が豊富であること，1集落に1基の存在等から祭祀を司る者，すなわち，集落の意志を代表しうる人物の存在を推定する指摘があって，従来からの大型住居址の性格の検討に疑問をなげかけている（沢田　1967，熊野　1974）。また，上述の例は関東に限ったことであり，関西ではベッド状遺構を有する住居址は普遍的に存在することから，農耕文化の東国進展によって，本来の意味が変形され権力構造のなかの一表象としてとり入れられたのであろう，とするベッド状遺構の性格も論じられてきている(河野1975)。

本遺構でベッド状遺構を有すると考えられる住居址は第2号住居址の1基である。ベッド状遺構は北東隅（200×80cm）と南東隅（160×40cm）にわかれて位置し，両者の間には巾60cmほどのブリッヂが存在する。ただし，一般に遺構群の重複が激しいなかで，本住居址付近は地山が露出して，かなりの攪乱もあった状況なので，確実な例とはいいがたいかも知れない。その立地は本遺跡北西に第3号住居址と壁を接しているが，景観としては独立的な存在である。形状は隅丸方形，規模は一般住居址のなかでは大形の部類に属し，床面構築には二重構造を有しない。したがって，形状，規模については他遺跡のベッド状遺構を有する住居址の性格に類似するが，遺物の出土がないという点からいえば異っている。反面，他住居址に特殊な遺物を出土するものも存在するが，住居址内部に特別な施設が認められる例はない。再々述べるように本遺跡の住居址の重複の激しさや，二重構造という床面構築からすれば，積極的な論拠としてなし得るものではない。

出土遺物

土器は一部の住居址（第1・18・45・48・62・72号住居址）を除けば，一般に少ない。したがって，住居址の性格を反映するであろう土器の器種構成比率を問題にすることや，住居址の重複

を遺物から検討することはかなり困難な操作となる。

特殊遺物は土製勾玉の破片が第15号住居址，胴部穿孔土器が第１号住居址，鉄製品が第72・89号住居址，砥石が第１・22・46・62・70号住居址より出土している。第22号住居址を除けば，全て一般住居址であり，そのうち小規模の部類に属するものや，竪穴状遺構には認められない。出土量がもっとも多い第１号住居址では，胴部穿孔小型壺が発見され，二重構造床面の上部には一部に礫を敷いた痕跡もあって，しかも出土土器は時期差をもつが，建てかえや重複は認められない。これも特殊な住居址に加えてよかろう。第15号住居址では南壁に土製勾玉の破片と高坏の坏部のみとの組み合せがみられたが，出土遺物も少量で，構造上の特徴性はない。他住居址も同様である。

(2) 掘立柱建物址について

本遺跡からは２基の掘立柱建物址が発見された（第22号住居址上層掘立柱建物址は整理途上で認められたものである。－以下，第２号掘立柱建物址)。両掘立柱建物址とも４本柱（１間×１間）である。規模は第１号掘立柱建物址が220×160cm，第２号掘立柱建物址が200×160cmで，柱穴規模は30～40cm内外をはかり，深さは30～40cmと一般住居址の柱穴に比べて深い傾向がある。主軸方位は第１号掘立柱建物址がN－49°－W，第２号掘立柱建物址がN－78°－Eと異にするが，いずれも住居址の主軸方向のもっとも集中する方位を示す。

掘立柱建物址は４本，６本，ならびに８本等が近隣遺跡で確認されている。沼津市藤井原遺跡（沼津市教育委員会　1978)では９棟の掘立柱建物址が確認され，そのうち１間×１間が３基，１間×２間が４基，ほかに１間×３間，２間×３間と多種におよび，その性格を倉庫と推定している。富士市天間沢横道下遺跡（富士市教育委員会　1979）でも１間×１間の掘立柱建物址１基と住居址６基が発見され，また，１間×２間の掘立柱建物址が発見された沼津市目黒身遺跡（小野1970）において，小野は１間×１間の掘立柱建物址と１間×２間の掘立柱建物址を諸遺跡と比較検討し，弥生時代後期には１間×１間の掘立柱建物址が普遍的であり，古墳時代初頭にいたって１間×２間の掘立柱建物址があらわれるとして，形態の変化に時間差をもとめている。が，現実にはそれ以降の発掘調査によって，古墳時代初頭にも１間×１間の掘立柱建物址の存在があきらかになりつつあるように，掘立柱建物址の時期比定はきわめてむずかしい。たとえば藤井原遺跡は五領期，および真間期を主体とする遺跡で，柱穴覆土に五領期の遺物がふくまれていたとしても，その時期比定には若干のとまどいもある。

比較的，単時期に営まれた本遺跡の掘立柱建物遺構２基を住居址の営まれた時期と同時期と認めれば，住居址86基＝２基（43基＝１基）の存在となる。これは静岡市登呂遺跡（日本考古学協会編　1954）における住居址４基に対して倉庫（掘立柱建物址）１基というあり方とは異なる。もちろん本遺跡では遺構の重複が激しく，未発見分が推定できる状況にあるとはいえるが。

住居址と倉庫の関連についての論考は多い。そのなかに，倉庫を有する集落と有しない集落を対比させ，倉庫を有しない集落に対して，被支配的，従属的な共同体の存在を認めようとする立

場がある（広瀬　1977)。これを本遺跡に摘用しようとすれば，本遺跡内の倉庫（掘立柱建物址）を有するグループと他のグループとの間にそうした相違を認めることになるが，この考え方にも疑論が多く（考古学研究第24回総会　1977)，早急な摘用は避け，そうした考え方もあるかも知れないという程度にしておこうと思う。また，倉庫を掘立柱建物址だけにもとめるべきではないという鬼頭清明の示唆もあるが，それでは掘立柱建物址以外になにを倉庫とするかという具体的な提言はない。本遺跡に限れば，竪穴遺構の存在がうかぶ。

(3)　特殊遺構について

特殊遺構としてあげられるのはピット群，焼土址，祭祀遺構，石組み遺構である。

ピット群は第69号住居址を中心として西辺，南辺に配され，しかも住居址が存在しない空間であるから，それなりの性格を有していたことが想定される。なお，そのうちの1ピットは壺口縁部破片2点，壺底部破片1点が確認され，限られた器種の出土に特異性が感じられる。

焼土址は第7号住居址上部に確認される。範囲は220×80cmで不整長円形にひろがる。その性格を示す遺物の確認はないが，南東へ2mほどで坩群が位置していることから，同時の存在を想定すれば，祭祀的な性格も考えられなくはない。

上述の坩群は第11号住居址上部の東よりに，粘土を盛りあげて床を作り，その上部に4個体が半円形に配されていた。残念なことに南側半分を攪乱によって削取され，全体を明らかにはできなかった。坩群が配された時期を判断すれば，第11号住居址が廃棄された後であり（第11号居址は重複関係から新しい段階に位置する。)，第8号住居址という本遺跡中，もっとも新しいとされる住居址に50cmと離れずに配されたとするなら本遺跡の終末期に，祭祀遺構が住居址に隣接せずに，ひろい場を必要としたら本遺跡廃絶後，もしくはそれに準ずる時期が想定される。

ほかに第2号掘立柱建物址の区画内に高杯，器台，S字状口縁台付甕の脚部といった，いずれも外来性の強い器種からなる土器群が確認された。加納の土器編年によれば月の輪新式に認められ，本遺跡の終末期に位置ずけられる。果して掘立柱建物址にともなうものか判断に迷うが，ともなうとすれば，掘立柱建物址の優位性，および収穫に対する祭祀性が感じられる事柄である。

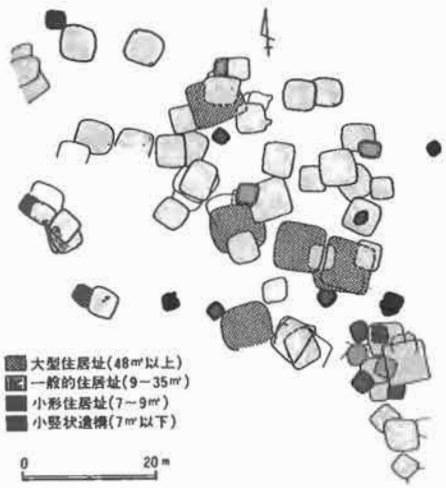
第1号住居址と第2号住居址の間に，拳大の礫を径50～60cmで円形に配したものと，ほぼ長方形にならべ，壁の奥にはとくに大きな礫をおき，その中央を掘り窪めた石組遺構がまとまって3基確認されている。前述藤井原遺跡にも類似した遺構が確認されているが，その性格は不明である。本遺跡に限れば，第1・2号住居址という特異性のある住居址の間の存在から，なんらかの性格を示唆しているかもしれない。

2　集落の分析

(1)　住居址の性格

住居址はその規模から，大型住居址，一般住居址，それに竪穴遺構にわけられた。

一般に，大型住居址の存在がめだってくるのは弥生時代からであり，その範疇は床面積50m²以



第96図　住居址規模別分布図

上（石野　1975）を中心とされるが，その集落のなかで相対的に大形であるか，小形であるかという見方からすれば，本遺跡における大型住居址は，第11・21・22・43・57・59号住居址の6基が認められることはすでに述べた。

弥生時代の大型住居址について検討をおこなった小久保（小久保　1977）によれば，それは，①一般構成員とは異った者の住居，②居住人員の差，③多数の人員の集合する空間，等の異った意味が想定されるという。結論的には，居住空間をはるかに超えた床面積をもつ現象は，そこが居住者以外の多数の人員が集まり得る場所であり，共同体間の交流の場であるという解釈を重視して，その性格は，対内的機能と対外的機能を果す二重構造をもち，それらの機能を主宰するものの住居としている。また，占地としては他の住居址に対して一定の距離を隔てて単独に存在し，眺望性の良い地に位置し，広場を配置するのが基本的パターンであるという。

ここで，本遺跡の大型住居址の占地をみると，南東～北西にのびる舌状台地上の中央平坦面に列状をなして位置しており，占地周辺にはそれなりの空間が認められるようで，重複関係から他住居址を削除すれば，広場の推定も可能となる。要するに，本遺跡の大型住居址の占地は弥生時代のそれを継承しているといえる（第96図）。

特徴的な出土遺物を有する例は，第57号住居址のみで坩群が南西壁寄りにあった。その他では第43号住居址の出土量が若干多いのみで際立った特徴はみられない。

構造的にも，たとえば炉石を有する例は第22・42・57号住居址で，有しない例が第59号住居址，炉が確認されない住居址が第11・21住居址と特殊な変化はみられない。その他の形状，床面構造も一般住居址よりは若干整っていることを指摘できるにすぎない。

時期的変遷を重複関係の新旧，出土土器，形状差等からみると，第43号住居址→第59号住居址→第21号住居址→第22号住居址→第57号住居址→第11号住居址の変遷が想定される。ここで，こうした大型住居址が1時期（1小期）に1棟であるとする見解（田中　1976）が認め得るとすれば，本遺跡では，まずその占地を固定化する傾向はみられないようで，その形状は胴張り隅丸方形（第43・59・21号住居址）→隅丸方形（第22号住居址）→方形（第57・11号住居址）と変化する傾向をとらえることができる。さらに，主柱穴を有する第22・42・57・59号住居址をみると，規模，形状，床面構造の相違はあっても，主柱穴間の巾が，ほぼ同様になる事実が知れる。これを建築用材の再利用も考えられるとして，それにあてれば，第43→59→㉑→22→57→⑪号住居址という流れからは無理だが，第43→59号住居址，第22→57号住居址といった時期的に接近している場合に考えられなくもない。そこには，大型住居址の構築に際しての強い規制，ならびに統一

が考えられ，大型住居址は必然的に大形でなければならぬ，住居址内部からの要求（居住人員の差），住居址外部からの要求，つまり集落を代表すべきものの住居であるがゆえに，という要求や，多数の人員が集らなければならないという必然的な理由がなした技と考えるのが妥当であろう。が，果して大型住居址が集落を代表すべき住居である立証はない。なぜなら，そこには資料的に弱いながらも，他住居址より特異性，優位性に富む第１・２号住居址が存在し，それが階級差であるとして，方形周溝墓の被葬者にあたる人々の住居址として想定されるならば（沢田，態野前述），同時存在も考えられる本遺跡の大型住居址と他住居址より特異性，優位性に富む住居址の関係をいかに理解すればよいか。このように同一遺跡から両住居址の発見をみた東京都鞍骨山遺跡（岡田，服部　1971）では両住居址に中枢的な役割を設定するには不自然であるとして，大型住居址に共同体の集会の場としての性格をあたえている。

確かに，本遺跡の大型住居址に集会の場ではないとする資料はない。炉が配され，破片ながらも甕，壺等の日常汁器とされる遺物が確認されても，そこには集会の場という生活機能があり，１例ではあったが，第57号住居址の坩群は集会の場が祭祀の場であり（甲元　1975），集落内の決議の場であったとすることもできる。とすれば，大型住居址が大型でなければならない必然性や，構築に際しての規制，統一性も理解でき，各時期の存在は集落経営になくてはならないものであり，対外的機能を果すためには眺望性にもすぐれた地に占地しなければならなかったであろう。

しかし，上述を認めるには本遺跡に６時期にわたって存在する集会の場（大型住居址）を経営したであろう住居址をみつけださねばならないが，それと思われる住居址は前述した第１・２号住居址の２基にすぎない。それに土製勾玉の破片と高坏の坏部をセットで出土した第15号住居址を加えても少なすぎる。第15号住居址も遺物出土量が極立って多いとはいえず，住居址の形態にいたっては，本遺跡最大の弱点である重複の激しさと，床面の二重構造による屋内施設の確認の困難も手伝って，それは今となっては不可能である。したがって，集会の場とする大型住居址の性格づけは極めて弱いものであり，それも空論に近いことを認めざるを得ない。

一般住居址と称した９～35m²の床面積を有する住居址は，規模，形状，床面構造の差や，屋内施設の特殊性を有するものがあったとしても，そこには一般的な生活機能が果されていたであろうし，たとえ，そのなかに炉や，甕，壺等の日常汁器の確認や出土がなかったとしても，充分にそこに生活がなされていたことは推測される。

本遺跡の特徴的な事実は７～９m²の床面積を有する小形住居址が19基認められることである。同様な例は東京都宇津木，神奈川県子ノ神の両遺跡にもあって，そこでは炉，甕等の出土があって住居機能をそなえていた。本遺跡にも第71・74号住居址のように炉を有する例もあって，この種の住居址には住居機能を認めてもよいものであろう。

竪穴遺構は規模が明確ではないが容易にその範疇にふくまれるであろう第77号遺構を加えれば13基が認められる。その分布は第12・16号遺構を除けば，集落の周辺に散在するとともに南東部に集中する傾向を示し，そうした傾向が東京都宇津木，神奈川県子ノ神にも共通することから，そこには集落の内部に含まれ得ないなんらかの理由が伺える。

形状は不整形が5基，隅丸方形が7基（＋1基）にわけられる。

隅丸方形状となる7基（＋1基）はほとんどが床面に二重構造を有し，第86号住居址に炉石をともなった炉が，第80号住居址は位置的に疑問を感ずるが，炉といえる焼土が，第76号住居址では火災のため明確ではないが，中央部に厚い焼土があって，認め得るかも知れないというように，炉，ならびに炉と判断し得る焼土を有する遺構は多い。また，平面形も比較的整っており，7～9㎡の小形住居址に対しても遜色はない。主柱穴を明確に確認できる遺構はないが，それは一般住居址にも例はあり，また，古墳時代後期の小型住居址にも一般的であれば，それは上屋構造の相違であって，それを根拠に本類遺構の住居性を否定するものとはいえないであろう。

以上から，本類遺構に生活機能があったとみるべきであり，集落内部へ進入できないという占地のあり方は，集落内におけるある種の規制の結果であり，こうした特殊な地位におかれた人々の存在を反映するものであると認めることも可能かも知れない。

残る竪穴遺構は第12・44・45号下・47・69号遺構であり，その形状は第44・69号遺構が不整隅丸形，第12・45号下・47号遺構が台形と変化に富む。床面積は第44号遺構の5.28㎡を除けば，5㎡以下の規模となる。床面はいずれも二重構造が施されているが，軟弱で日常に使用されたという感じは受けない。炉は皆無で，柱穴も確認されない。屋内の壁際に椀状のピットを有する第44・47号遺構が認められるが，その性格は不明である。第69号遺構の周囲には柱穴状ピット6本があって，上屋構造と関連するものである可能性も認められる。第44・47号遺構外にもピットが1本づつ認められるが，性格は把握できない。遺物は第69号遺構に多く，破片であるが小型土器，壺，高坏等の特徴的な土器群が確認された。その他では遺物の出土はない。

上述のように，これらの竪穴遺構には生活機能を果す状況がみられないことから，それ以外の使用を推定してみたい。ここで，第69号遺構からの土器群が貯蔵用器種であることや，第44・47号遺構の椀状ピットがいわゆる貯蔵穴であるとすれば，前述したように倉庫は掘立柱建物址以外を考えてもよかろう，という鬼頭清明の主張が意味をもつものとなる。しかし，本遺跡には2基の掘立柱建物址がその中央部に占地して存在することから，竪穴遺構が倉庫的遺構であったとすると，異なる2形態の倉庫が併存することとなって，新たな検討が必要となる。いずれにしても，類例をもたない竪穴遺構の性格は今後の資料増加を待つ以外ないが，ここでは日常生活址ではなかろうという点から，倉庫ないしそれに類するものと推定しておきたい。

(2) 住居址の重複

本遺跡に重複住居址が多いことはすでに述べた。ここで，その重複関係を分類すると，重複住居址数16基，13基，8基，7基，5基が各1地点，6基，3基が各2地点，2基が各5地点，他に単独で9基が存在する（第52表）。各重複地点の大略の範囲をみると，重複の激しい場合でも同時に共存しうる住居址は，せいぜい2～3基ほどでしかないようである。

各住居址の重複において，関東地方における五領期集落で同時期内に重複関係を有する例は極めて稀であるが，本地域では本遺跡ほど激しくはないが，沼津市藤井原遺跡，函南町伊豆逓信病

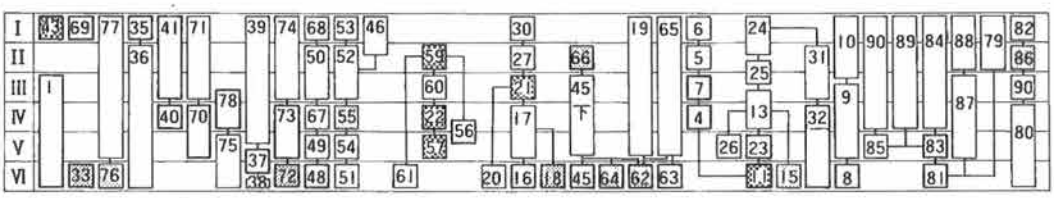
院敷地内遺跡（函南町教育委員会　1978），沼津市目黒身遺跡と重複関係を有する住居址の存在が目立つ。しかも，それらは広域な丘陵上に占地しており，住居址の重複が必ずしも地形的な制約のみによるものではないことを示唆している。

住居址重複数	16	13	8	7	6	5	3	2	1	合	86
地　点　数	1	1	1	1	2	1	2	5	9	計	23

第53表　住居址重複関係一覧表

そうした重複状況は住居を構築してはならない場所，いわゆる空間（広場）とか，逆に住居を構築する場所，いわゆる家地とかといった集落内の規制によったものであると理解することもできるが，本遺跡における重複状況をみると，必らずしも同一世帯が継続して居住したとは判断できない。

そこで考えたいのは，住居址がいかなる理由をもって廃棄され，これ程の重複がみられるかという点である。『三国史』巻三〇，歳伝に，「疾病死亡，輒損棄舊宅，更作新居」とあり，また，アイヌは死者が出ると家を焼いて，新たに建てることがある（越田　前述），というが，こうした事実を本遺跡で証明することはできない。ところで，大型住居址がすでにのべたように6時期にわたって廃棄と新築をくり返す状況はどのように意味づけ得るであろうか。大型住居址が特殊な機能を集落のなかで果すものとすれば，しかもその占地する場所にすべてのタイプの住居址がみられる状況も考慮して，大型住居址を中核とする集落全体の移動とみることが可能かも知れない。たとえば，本遺跡で最終期とされるグループでは，第57号大型住居址から第11号大型住居址の移動にともない，そこに占地していた数基は移動を余儀なくされたであろうし，大型住居址に付随する空間（広場）の設置はそれにも増して住居の移動を促したと思われ，それは集落景観を逆転させるほど大規模な集落の改造であったと推定される。



第54表　住居址新旧関係表

3　集落復原の検討

本遺跡は大型住居址の変遷，一時期に共存し得る住居址の検討によって，6時期の集落設定が可能となった。ここでは集落復原のためにいくつかの方法をあてながら検討していきたい。

被火災住居址にもとずく検討

失火による類焼，争いによる放火等の瞬時におこる火災によって，同時存在の住居址を抽出しようとする方法である。

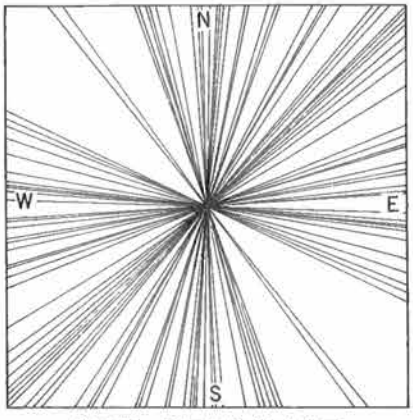
本遺跡では，確実に火災住居址として認め得る例は12基であり，他に壁付近に焼土が置かれたり，炭化物のみが確認される例が7基あるが，それを火災の痕跡として認めるには条件に乏しく，ここでは一応除外しておく。

12基の被火災住居址は，第55・66・86号住居址が集落編年の第II～III期に位置する他は全てが第VI期に位置する。このことから本遺跡には2度の火災の遭遇が指摘できるかも知れない。第VI期被火災住居址は遺跡の中央を東西に列状で分布する第33・15・18・62・64号住居址と，第20・72・76号住居址のように点在するものがある。遺跡中央に分布する住居址は第62号住居址と第64号住居址がその間隔を約5mにもつ以外は，第33・15・20・18・62号住居址とも約10m間隔で配される傾向にある。第20号住居址の位置に特徴をみいだせば，第33・15号住居址と第18・62・64・76号住居址にグループ化される。後に記述するA・Bグループであり，条件のよいBグループを検討すれば，第20・18・62・64・76号住居址が南に向って開口する馬蹄形状の配置を示し，それらはほぼ20mの空間（広場）を有する。

住居址の主軸方位にもとずく検討

住居址の主軸方位を検討することから，単位集団ごとの規制や統一を把握しようとする方法である。古墳時代後期の竪穴住居址や，掘立柱建物址に有効である。

本遺跡のそれを図示（第97図）したが，同一方向性としてとらえれば，7ないし8のグループにわけ得ることになる。ところがそれを時期別に整理してみると，時期変遷によって規制されるのではなくして，各時期（第I～VI期）に分散している結果を得る。したがって，その主軸方位は遺跡中央部，ならびに東西両端に分布する住居址が北に向って縦に，南北両端に分布する住居址が横というように，中央を境に「輪」が2つ，ないし3つ，いわゆる「鎖」状に設定されている。そうした「鎖」状の「輪」のくり返えしが，主軸方位を円的なものになしたであろうし，本時期集落の検討においては，その同一方向性を追うよりもむしろ円的なひろがりをとらえる必要があろうと思われる。



第97図　住居址主軸方位図

主軸方位のもつ意味を以上のようにとらえれば，本遺跡では基本的に大型住居址を台地中央において，東西2グループ，南東部の未発掘地域に1グループ，の3グループの設定が可能であり，それは大型住居址の移動にともなった各「輪」の移動の軌跡の集積であろう。

入口方向にもとずく検討

入口方向の規制のもとに各単位集団のあり方，空間（広場）の設定，集落における道の推定等を行う方法である。

本遺跡では第8号住居址のように主軸と入口方向が異なる例を除けば，入口方向は主軸に規制される結果を得る。したがって，前述したようにそれは円的なものとならざるを得ず，入口を空間（広場）方向に設ける例の少ないことに気付く。また，東西に主軸をもつ住居址には東側に入口を設定する例が多い。これは多分に気象条件を考慮してのことであろう。

というように本遺跡で知り得た結果は入口の設定が，空間（広場）の中心から放射状に設定されるのではなくして，むしろ各単位集団の「輪」にそって入口が設定された可能性が強い。

大型住居址による検討

大型住居址が集落の構造のなかで特殊な性格を有し，各時期にともなって変遷する傾向が指摘できることから，集落の移動を理解しようとする方法である。

本遺跡の場合に，大型住居址の移動の軌跡は前述したとおりであるが，それは遺跡中央部を前後して移動しているので，それにともなった他の住居址の移動は十分に想定できうるにしても，その状況を確実に判別することはできない。

大型住居址のうち第Ⅵ期に属するとして抽出された第11号住居址は，第8号住居址と重複関係を有し，その新旧関係は断面観察より不明ではあるが，第8号住居址の出土土器が加納の設定する月の輪新式のうちでも最も新しい要素をもつことから，それより古い階段に存在した可能性もある。すると本遺跡第Ⅵ期にはあるいは大型住居址を有しないグループが存在したという推定が成り立つかも知れない。

倉庫（掘立柱建物址）による検討

掘立柱建物址を倉庫と理解し，すでに倉庫を中心に住居址が配置されているものとして，位置関係を理解する方法である。

本遺跡の掘立柱建物址は2基認められ，同時の存在であれば2グループ，時間的差違があるとすれば2時期にわたって経営されたものとなるが，この掘立柱建物址を中心にグルーピングしてみれば，第2号掘立柱建物址が第20・18・62・64・76号住居址といった被火災住居址によって作られる空間（広場）の中央に，第1号掘立柱建物址が第32・26・8・40・63・45号住居址等の火災の認められない住居址群の中央に，というようにこの2基が同時に存在していたものではないことが推測される。

炉石の有無による検討

炉に設置される炉石の有無によって，時期的に共通した性格をもとめようとする方法で，縄文時代の石囲い炉等に有効である。

本遺跡の炉には炉石を有する住居址と有しない住居址が存在するが，それを時期的な差として認めるには資料不足であり，第Ⅵ期に限っても第81号住居址は炉石を，第45号住居址はそれを有さず，というように第Ⅵ期以前の住居址をふまえても，それは両者が併存していたとするほうが可能である。また，炉石の有無が住居址の規模によって表われるということもいえない。

その他の検討

他に柱穴をはじめとする屋内施設の分類，柵列，溝，井戸等によって，グルーピングを試みる方法もあるが，本遺跡では不可能であった。

以上，本遺跡の復原への過程をいくつかの方法をもとに，個々の住居址の分析，住居址以外の遺構との関連，さらに遺物との有機的結合を加味しながら述べてきたが，それは重複の激しさ，床面の二重構造等の複雑な状況が分析を困難にし，個々の住居址の把握，集落の変遷過程等，なにひとつ明確にできなかった。したがって，比較的良好に残存する第Ⅵ期に存在可能な住居址31基（竪穴遺構も含む），掘立柱建物址２基を抽出して検討，分析することで，集落復原の手掛りとしたい。

4　集落復原

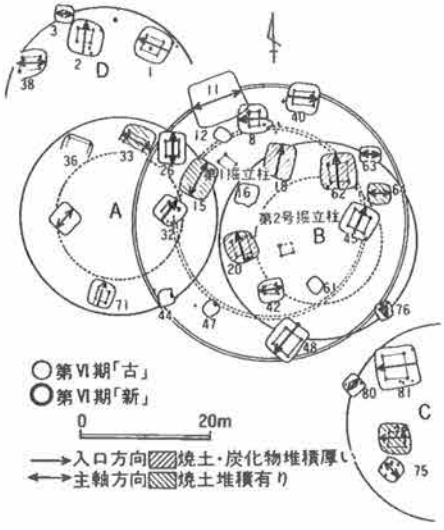
第Ⅵ期に存在し得る竪穴遺構を含めた住居址31基が２小期に分けられるであろうことは，被火災住居址，大型住居址，掘立柱建物址の帰属等の検討から十分に予想できた。

抽出された住居址はまず被火災住居址８基とそれを認め得ない住居址（竪穴遺構を含む）23基にわけられる。ここでは被火災住居址群を瞬時の類焼であると理解し，また前述の結果をもふまえて，被火災住居址群によってなされるグループを第Ⅵ期「古」，それ以降に存在するであろうグループを第Ⅵ期「新」として検討していきたい。

第Ⅵ期「古」

被火災住居址の分布が遺跡中央を境に東西２グループにわかれ，良好な状況で残存するＢグループから，それが約20ｍの直径を有する空間（広場）を中心に住居址が約10ｍの間隔をもって円形，もしくは馬蹄形に配され，空間（広場）中央に掘立柱建物址を有することが知れた。そこには併立する第16・45号住居址という非火災住居址の共存は認めようもなく，第42号住居址が炉と理解するには多量の焼土を有する事実からそれに加えれば，掘立柱建物址の所有の有無が単位集団毎の優劣であるという立場があるとしても，ここでは１単位集団の姿を５～６基の住居址と１基の掘立柱建物址からなる基本的パターンを指摘したい。とすれば，それは富士市天間沢横道下遺跡の住居址６基＝掘立柱建物址１基に摘合し，静岡市登呂遺跡の住居址４基＝掘立柱建物址１基，沼津市藤井原遺跡の住居址８基以上＝掘立柱建物址１基という値いにも近いものとなる。

それを，Ａグループに摘用すれば，非火災住居址である第26・32号住居址を除いた住居址にその配置を伺うことができる。しかもそれは火災の痕跡であるには資料不足であるとして，検討からはぶいた第36・51・70号住居址が認められることである。したがって，そこには類焼の可能性を認めねばならず，火災後の「かたずけ」の行為が一部の住居址には存在したであろうことも考



第98図　最終末期存在可能住居址

えねばならぬ事証である。

上述の配置は第72号住居址に代表されるＣグループにも，その未発掘部分（南東に約10ｍの平坦面を有する。）に十分な可能性がある。しかし，便宜上Ｄグループとした第１・２・３・38号住居址にそうした配置を設定するにはいたらない。それはＤグループの帰属が明確でないこと，重複関係を有さず住居址構造に特徴性がある点等から考えて，そこには特殊なグループの設定を考えておくのが妥当であるかも知れない。

大型住居址は第11号住居址が存在するが，この時期に集落全体が火災に遭遇したであろう事実から，その痕跡が認められないのは偶然か，または火災前にすでに消滅していたと理解する以外ない。大型住居址は第11号住居址を除けば，いずれも一定の空間（広場）を有して移動していたはずであり，しかもＢグループをともなっておこなわれたであろう軌跡が観察できる。そうした大型住居址の変遷が第11号住居址にいたって従来にない移動と，占地形態の変化をなすには，本遺跡の集落構造の変化を考えざるを得ず，そこには大きな社会構造の変化への前兆を設定せねばならぬであろう。

第Ⅵ期「新」

大型住居址，および被火災住居址消滅後，本遺跡には第８号住居址を始めとする最終末期＝第Ⅵ期「新」住居址群が形成される。それが第１号掘立柱建物址を中心に営まれたであろうことは前述した。これに属する住居址は第32・26・８・40・63・45・48号住居址であり，第81・80・75号住居址といった旧来のＣグループを中心にしたグループの設定も可能であるかも知れない。

その配置は円形，もしくは馬蹄形であり，住居址間隔は約10ｍと旧来の配置を継承するが若干その巾は長くなる傾向をみせる。また，規模に相違が表われ，直径約30ｍの空間（広場）を有する。したがって，その配置は旧来のＡ・Ｂ両グループを統合した形となる。そこには集落の再構成というべき事証を認めざるを得ない。

以上から本遺跡は基本的には発生期～第Ⅵ期「古」まで５～６基の住居址からなる２～３の単位集団で構成され，しかもそれは大型住居址の移動にともなって流動的なものであったろう。が，第Ⅵ期「古」に大型住居址の消滅があり，旧来の単位集団のあり方に変化がおこり，集落の再編成にむかっていったと理解したい。

こうした集落構成の発展段階のあり方について，金井塚は大型住居址が消滅して規模が小さく均等化する傾向を，住居址内部における貯蔵穴やベッド状遺構の増大とも結合させて，集落内部に自律的世帯が分立する条件の進行（金井塚　1967）ととらえることから，弥生時代終末期～古墳時代前期前半の小集団から古墳時代前期後半の自立的な単位集団＝世帯共同体への段階と理解

している。本遺跡の第Ⅵ期「新」とよんだ最終末期において，たしかに大型住居址は消滅し，住居址規模の均等化も認められるので，金井塚のこうした理解を基本的には認めてよいかも知れない。

ただし，大型住居址の機能を集落内における集会の場となし得れば，そうした大型住居址の消滅が意味するものは，集落のあり方として，画期的な歴史的段階をむかえたことは確実であり，それが各住居址の自立を意味することは可能であるかも知れない。また，そうした単位集落内における自立化の傾向は，より大きな結合，すなわち各単位集落のいくつかの結合を生みだしていくのではないだろうか。本遺跡の集落検討において，そうした自立的単位集落の広範な結合のあり方を証明することから，古墳時代前期社会の発展的成立を証明することは困難であったが，そうした集落結合の状況がなくしては，古墳時代前期社会の発展はあり得ないであろう。(馬飼野)

III　住居址床面の二重構造について

1　発見とその構造

本遺跡群の住居址調査における構造上のもっともいちぢるしい特徴といえるものが床面の二重構造である。そうした床面の二重構造を明瞭に確認し発見したのは，第２次調査における第18号住居址の調査においてであった。

第18号住居址の調査においても，その着手時には床面下部に確認された覆土を他住居址との重複の結果とみて検討をすすめる状況であったが，床面の切断観察によってそれは明確となった。すると，併行調査していた第４・５号，７号・17号住居址においても，そうした事実が追認できたのであった。前年の第１次調査における第１号住居址の状況も多量の遺物を有する床面の下部に別な床面があって，それはつよい凹凸と傾斜を有して少くとも使用された床面とはいえない状況とまでは理解してきた。そこでは炉址が明確でないこともあって，そうした状況を床面の二重構造として把握するまでにはいたらなかったが，第２次調査の発見からそれが可能となった。

床面の二重構造とは，住居址の構築において，地山を掘り下げた竪穴底面をほぼそのまま生活面（床面）とする一般的方法に反して，発掘底面の上部に多くは数10cmにもおよぶ土砂を埋め戻し，その上端面に多くは堅い貼床と炉址とを設けて生活面とする特殊な構築法である。こうした構造を“床面の二重構造”と命名し，人為的に堅く貼られた生活面を“貼床”その下部の埋土部分を“掘り方”と呼称することとした。

貼床は黄褐色ロームや栗色土に黒色スコリア土を混じて堅く敷きつめる例が一般的であるが，それは床面中央部においてより顕著で周辺にいくにしたがって不明瞭なものが多かった。なかにはこうした貼床と認め得る状況がなく，わずかに炉址や遺物の出土状況から生活面と認める例もあった。柱穴や貯蔵穴等の施設は貼床から掘り方に掘り込むものであるから，しばしば床面上での検出は困難で，掘り方埋土の除去によって確認できる場合が多かった。

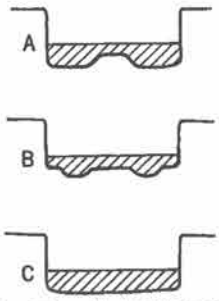
掘り方の埋土には地山を掘りおこした栗色土や黄褐色ロームをブロック状に混ずる例もあったが，多くは黒色スコリア土を敷き込んだ状況がみられた。掘り方の形状には大略して３種が認められ，これをもって二重構造の基本形としてみた。

A類　床面プランの外縁部に巾70～80cmから場合によっては１ｍを越える周濠状掘り込みを基本として中央部を方台状に高く残すタイプである。なかにはその方台状部分をそのまま貼床にする例もある。

B類　床面プランの外縁端部を平坦に残してその内側にA類よりやや巾狭の周濠状掘り方をまわす例で，なかには部分的に土橋が認められたり，中央方台部や外縁部平坦面がほとんど貼床に接したりする例もあった。

C類　床面プラン全域をほぼ舟底状ないし平坦に掘り込むタイプで，底面の凹凸がめだつ例が多い。

2　月の輪平・南部谷戸遺跡の二重構造



第99図　3基本型模式図

本遺跡群のうち，月の輪平遺跡では86住居址中76基に，南部谷戸遺跡では12住居址のすべてに床面の二重構造が認められた。個々の状況は別記したとおりであるが，ここでは第99図および第55表に示してみた。

これによると，さきの３基本型の比率は，月の輪平遺跡ではＡ21：Ｂ22：Ｃ33：無10であり，南部谷戸遺跡ではＡ９：Ｂ２：不明１ということになる。月の輪平遺跡ではＡ・Ｂ類がほぼ等しくＣ類がやや多い状況に比して，南部谷戸遺跡ではＡ類が圧倒的に多くわずかなＢ類を含むということになる。また，住居址規模との比較でみれば，床面積７㎡未満の小住居址においては二重構造をもたないものがかなりめだつといえるようであり，それ以上の規模をもつ中間形・大形住居址においてはこの二重構造が一般的といえる傾向を認め得るが，３基本型のあり方からすればＣ類がやや多いという以外に特徴的状況は指摘できそうもない。

つぎに，掘り方の深さ，すなわち床面から発掘底面までの深さについてもふれておこう。われわれがＡ～Ｃ類の３基本型を設定する場合に困難を感じた状況の１つは，Ａ～Ｃ類ともその中央部が床面に等しくなる例がいくつかみられたことであった。具体的には，とくにＡ・Ｂ類においては中央部が貼床の有無にかかわらず掘り方をもたずあるいはわずか数cmほどの厚さのみで，その周縁に巾広い周濠状掘り方がみられることであった。Ａ類においては４例，Ｂ類では１・２例ほどにすぎなかったが，外見上の相違は大きいものといえた。結局，後に述べるように機能的にもそうした相違はほとんど問題とするには値しないと判断して分類してみた。

（右欄が南部谷戸遺跡）

数別＼床面積㎡		7未満		7～9		9～15		15～30		30～35		35以上		不明		計	
無		3		1		1		3				1		1		10	
二重構造	A	2		2		3	1	7	5	1		2		4	3	21	9
	B			2		3		8		1		2		6	2	22	2
	C	6		2		5		12				1		7		33	
不明															1		1
小計		11		7		12		30	5	2		6		18	6	86	12
計		11		7		13		35		2		6		24		98	

第55表　月の輪平・南部谷戸遺跡住居址別床面構造一覧表

3　二重構造住居址の類例

月の輪平遺跡の昭和45年度第２次調査において，床面の二重構造を発見したことはさきに述べたとおりである。当時，われわれはこうした床面構造を月の輪平遺跡の特殊性とみて，全国的に

も類例をもたないものと理解する状況にあった。ところが，その後の富士南麓地方の弥生後期～古墳前期遺跡においてはむしろ普遍的な傾向である事実を調査によって確認するとともに，昭和35年前後の埼玉県五領遺跡において発見されていたことやその分布が関東・東海地方にかなり一般的と認め得る状況を知った。

ここでは，現状で把握できた資料について若干の比較検討を加えたいが，もちろん資料収集能力の限界性をあらかじめ断っておくこととしたい。

① 滝戸遺跡　富士宮市黒田

月の輪遺跡群から約1.5㎞ほど北方にあって星山丘陵の北端部から連続する舌状台地の先端部に占地する。従来縄文遺跡として知られているが，昭和51・52年の2次にわたる発掘で弥生期最末といえる住居址6を調査した（植松・渡井他　1977・1978)。保存状況は良好ではないが，プランは楕円形にちかい例から方形までを含んで胴張り長方形を主体としていたので，若干の時期差はあるかも知れない。その規模別では，多くは中形に属するが，方形を呈する例は小形であった。

いずれも比較的浅い掘り方が特徴的で，さきの基本型ではC類タイプに含め得る。掘り方埋土は黒色スコリアを主体とし，多くに貼床が認められた。

② 天間沢・天間横道下遺跡　富士市天間

富士山南麓地方に発達する古富士泥流を基盤とする広大な台地上に発達した遺跡で，戦前から天間沢遺跡の名で知られた縄文遺跡である。昭和45年以来数次にわたる発掘調査によって，西側地点を天間沢遺跡，そこから100ｍほど東側地点を天間横道下遺跡として把握してきた。

天間沢遺跡では5，天間横道下遺跡では6の古墳時代前期五領期の住居址が発見されている。天間沢遺跡5例のうち2例は保存状況がきわめて不良であり残り3例には床面の二重構造が認められた。なかには径8ｍ余の大型住居もあって，そこでは床面の二重構造に壁溝がめぐる状況が確認された。天間横道下遺跡ではうち2例に二重構造が認められた。いずれも比較的浅くつくるC類で，黒色スコリア土が埋め込まれていた。

③ 天間代山遺跡　富士市天間代山

天間沢遺跡の南方500ｍほどにある新富士溶岩流を基盤として，三方を崖でかこまれた丘陵上に位置する。昭和50～51年に発掘調査して奈良～平安初期にわたる竪穴住居址9を確認した。(植松他　1977)。規模は径2.5～4.5ｍ前後が多く，1基のみ7ｍ前後を測る例が含まれている。

床面の二重構造は6基に認められたが，うち3基は比較的深い掘り方を有するC類タイプといえた。残り3基のうち，2基は床面の約半分ほどに掘り方をもって他の例には貼床をつくるのみという状況で，さらに1基には部分的な貼床のみが確認された。それらも特殊な二重構造と判断しておこう。

④ 愛鷹山麓遺跡

富士市東部から沼津市を経て長泉町付近にまで連続する愛鷹山麓においては，弥生後期から古墳前期の遺跡が多い。それらのうち，床面の二重構造をもつ住居址が確認された例は少ない。

長泉町上野遺跡の五領期住居址，沼津市八兵衛洞遺跡の弥生後期住居址にそれが確認された。なかでも後者は昭和53年に２次にわたる発掘をうけて，約160基ほどが調査されたが，そのほとんどに二重構造が認められる状況であったという。

その他にも二重構造をもつ住居址といえる可能性を認め得る報告に接することができる。たとえば，沼津市八兵衛遺跡においては，その「一部ではこの土層（スコリア土層のこと……筆者）を竪穴住居の床面に厚く敷いて，床面強化に利用したらしい。」「床に厚くスコリア土を敷いてあり，これを剝がさないと柱穴の発見が困難な場合が多かった。」(小野　1968)とあって，床面の二重構造は確実とみてよい。本地域におけるかなり普遍的な傾向を認めてよかろうと考えたい。

⑤　日詰遺跡　　静岡県賀茂郡南伊豆町

本遺跡は伊豆半島の先端部を西から東へ流れる青野川がその中流域に形成する沖積地に位置する。昭和50～54年度にかけて，第Ⅰ～Ⅵ次にわたる発掘調査が実施されて調査は完了した。

第Ⅰ～Ⅵ次発掘調査における面積は約9000m²ほどに達しているが，ここでは弥生時代後期の住居址および方形周溝墓，古墳時代和泉・鬼高期の集落，歴史時代平安期の遺構等がその中心をなすものであった。

第Ⅳ次発掘調査の概報（平野・佐藤　1978）のうち６区の遺構に，「今回の調査で特に注意を引いたのは」として二重構造についての記述がみられ，「床面下部の掘り込みは①住居平面の大きさそのままに掘り込んでいるもの（ＳＢ617）②住居の縁に近い部分をある程度の巾で掘り込んでいるもの（ＳＢ612）③住居の中央部分のみ円形に掘り込んでいるもの（ＳＢ624)等の別があるが，その差が何に基づくものか，今のところ不明である。」という。この分類は本稿のそれとは若干の相違がみられるようで，①は全面を掘り下げたもの，②は掘り方中央部がほぼ床面に等しくなるもの，といってよいが，掲載された図で検討すれば，ＳＢ612はＡ類タイプ，ＳＢ617も基本的とにＡ類タイプで一部にＢ類的要素を残すとしてよかろう。いずれにしても，６区の住居址数37基のうち二重構造基数の明記はないが，７区では15基中３基にみられて，①が１基，②が２基であったという。

第Ⅴ次発掘調査の概報（平野・植松　1979）においても，同様に二重構造の指摘がみられる。弥生期の遺構にはここでいうＡ・Ｂ・Ｃ類の各タイプがあるが，ＳＢ912の「壁の周囲をやや平坦に残して中央部を皿状に掘りくぼめる形状」に注目しておきたい。時期的な条件によるものかどうかは不明瞭であるが，本遺跡にはこの種のタイプが存することは確実であるといえる。また，和泉期住居址の二重構造も１例であるが注目に値する。

第Ⅰ～Ⅲ次調査分にもたぶんこうした二重構造は存在したものとみてさしつかえなかろう。

⑥　谷原遺跡　　神奈川県相模原市

本遺跡は相模原台地の西側に相模川によって形成された河岸段丘のうちの第２段丘の縁辺に位置する。昭和46年に発掘調査をうけ，古墳群調査がその中心であったが，国分期に属する10基の住居址があわせて調査された。

このうち，１号住居址に床面の二重構造が認められる。竈をもつ床面の下に，「ロームブロックの混入した黒色土が敷かれていた。この貼り床は10～15cmで，最下部は硬ロームの凹凸の厳しい面であった。」というのであり，一部には壁溝も認められた。

本例はＣ類タイプの二重構造としてよいが，他住居址にはそうした例はみられないようである。

⑦　子ノ神遺跡　　神奈川県厚木市

本遺跡は相模川の右岸に発達する洪積台地のうちの１つにあたる尼寺原台地の東縁に位置する。昭和49年の第１次調査の内容が報告されているが，そこでは五領期を主体として弥生中期中葉から国分期にいたる62基の竪穴住居址（杉山・望月　1978）が調査されている。

このうち９～10基の住居址には確実に床面の二重構造が認め得るが，その他にも貼床と推定できそうな記述も多くめだつので，かなりな比率で存在したものとみてよかろう。ほとんどは五領期に属し，第９・37号址のＡ類，第44号址のＢ類をはじめとして，Ｃ類も認め得るようである。詳細な検討はしにくいが，報文によればＡ類が多いということになる。

⑧　上石原遺跡　　東京都調布市

本遺跡は関東平野西部にひろがる武蔵野台地の南縁部にあたる，ここはいわゆる立川段丘とよばれる上面に占地している。昭和50年に，奈良時代を中心とする４基の竪穴住居址が調査された。

このうち４号住居址は全体の４分の１ほどを発掘したにすぎないが，床面下に掘り方が認め得た。壁溝をもつが深さ20cmほどの溝状タイプらしく，たぶんＡ類タイプとみてよいものである。

⑨　平台先遺跡　　千葉県印旛郡印西町

本遺跡の位置は下総台地の北端にあって，それは利根川が曲折する右岸で標高約30ｍほどの台地上にある。昭和48年に緊急調査をうけて，五領期の集落が発掘された。

確実に住居址と判断されたものは10基で，うち８基に床面の二重構造が認められる。なかには竪穴の一部を調査し得たにすぎない例もあるが，その類別はほぼ次の通りとみられる。

Ａ類……第１・３・９号住居址

Ｂ類……第12号住居址

Ｃ類……第５・８・10・14号住居址

このうち，第１号住居址は，東壁側にのみ巾25cm前後のテラスを有していて，Ｂ類的条件をあわせもっていた。また，第12号住居址は，わずかに南壁と南東コーナーを遺存していたにすぎないが，壁際に巾10cm強のテラスを有していた。掘り方底面の状況も，実測図での観察によればかなり雑でいわゆる周濠状掘り方とはいえないが，一応Ｂ類と認めておきたい。

⑩　浜崎遺跡　　埼玉県朝霞市

本遺跡は八王子を中心とする武蔵野台地の最北部に位置する。昭和43年の発掘で，五領期に属する６ケ所10基の住居址その他が調査された。

このうち，第6号住居址群とよばれた個所に5基の重複住居址がみられるというが，その最古と認め得た第6C住居址に床面の二重構造が認められる。隅丸方形プランを呈して長径4.60mを測り，もちろん重複による破壊をうけるが，さきの分類ではA類としてよいようである。

⑪ 諏訪山遺跡　埼玉県岩槻市

本遺跡は大宮・岩槻付近を中心とする大宮台地の1支台にあたる慈恩寺支台の先端部に位置する。1968～69年に約6,000m²前後の範囲が発掘されて，古墳時代の竪穴住居址22のほか縄文・弥生期の遺構も発見されたが，主体は五領期であった。

このうち第35号住居址に明瞭な二重構造が認められる。隅丸方形プランで4.4×3.7mの規模を測り，壁溝を付する。確実なA類タイプで掘り方内には黒色土を埋めたて，掘りおこしたロームをもって貼床を築いていたという。その他にも貼床や堅い床面がみられたり，第31号住居址のようにコーナー付近でピット（主柱穴・貯蔵穴）を囲むような扇形の低い掘り込みが認め得たとの記述もなされているので，若干の二重構造を推定し得るかも知れない。

⑫ 鶴ケ丘遺跡C区　埼玉県川越市

本遺跡は川越市と鶴ケ島町にまたがる広大な範囲を含むが，それは武蔵野台地の北東縁辺にあたる。うち川越市に属するC区は本遺跡の南端を占めて，独立丘的な舌状台地の先端に位置する（埼玉県教育委員会　1975）。

ここから，弥生時代後期17基，歴史時代（国分期）3基の竪穴住居址他が発見・調査された。弥生時代後期住居址は胴張隅丸方形・隅丸方形のプランを呈するが，その調査範囲のほぼ中央部にあたる台地平坦面の先端部に集中する状況で7基の床面二重構造が認められる。本遺跡調査者の二重構造に対する認識は意識性の高いもので，その成果は十分に信頼し得るものとみられるが，その二重構造を分類してみると次の通りである。

A類……第7・18号住居址

B類……なし

C類……第6・9・11・12・13号住居址

このうち，住居址A類とした第7号住居址はC区最大規模で7.4×7.0mを測る胴張隅丸方形で，掘り方は深さ10～20cmほどである。C類とした第11号住居址は若干の形状変化を有し，第12号住居址は部分的な二重構造で「床面とほとんど差がないが，部分的に5cm程度の掘り込みがあり，掘り方としている」状況にあるが，一応C類としてみた。

なお，3基の国分期住居址がみられるが，注目すべきはそのうち2.4×2.0mの規模で長方形プランに壁溝をめぐらす第4号住居址に床面の二重構造が認められる。深さ20cmほどの掘り方を有するC類タイプとなし得る。数少ない歴史時代例といえる。

⑬ 東谷（ひがしやつ）遺跡　埼玉県本庄市

本遺跡は通称「浅見山」(大久保山）と呼ばれる丘陵の北東端の東側緩傾斜面に占地する。鬼高期を主体とする集落址で，和泉期1基・国分期1基を含む合計31基の住居址が調査された。

このうち7基の住居址に床面の二重構造が認められるが，そのタイプ分類は次の通りである。

A類……28・37・38号住居址

B類……なし

C類……9・23・25・30・38号住居址

このうち，25号住居址のみ和泉期の例であるが，他はいずれも鬼高期に含み得る。またA類とした3例はいずれも床面中央部に掘り方を有しなくその周縁にのみ周溝状の掘り方を設けている。

⑭ 諏訪遺跡　埼玉県本庄市

本遺跡は埼玉県の北端で利根川を境に群馬県に接する位置にあって，大きく広がる複合扇状地性の本庄台地上にある。昭和49・50年に発掘調査されたが住居址8軒（五領期1・和泉期2・鬼高期5）と方形周溝墓5基（五領期）とが主な遺構であった。

このうち五領期の住居址に床面の二重構造がみられる。“方囲状”の掘り方が存在してその部分には貼床がみられたという。A類とB類との折衷的様相で双方の要素をもつが，強いて別ければB類的といえるかも知れない。

4　まとめ

以上が現況で把握し得た諸遺跡における状況であるが，そこにみられた二重構造のタイプを時期別に示したのが第56表である。

これによってみると，床面に二重構造をもつ住居址は弥生後期から歴史時代国分期までにみられて，それは静岡県東部から神奈川県・東京都・千葉県を経て埼玉県にまで分布することになる。

詳細な検討を試みるには，きわめて不十分といえる資料しか得られない状況にあるが，それでもいくつかの重要な事項は指摘できそうである。

まず，床面二重構造は弥生時代後期，それも後半期を中心とする住居址にその発生が求められるとしてよい。しかも，それは静岡・埼玉両県の南北両端にともに存するようである。現在の段階でその発生地とその起源を求めることは無理であるが，後にそれが盛行する全地域を包含する状況といえるあり方に注意しておきたいと思う。

二重構造がもっとも盛行する時期は，古墳時代前期の五領期と認めてよいようで，地域的にも各地域にみられる。ただ3基本型でいえば，静岡県の富士・愛鷹山麓地方および神奈川県に各類があるが，他地方ではA類が圧倒的に多いような傾向が認め得る。

古墳時代和泉期から歴史時代国分期までは，そうした遺跡がほとんどみられない静岡県に少くなるのは当然というべきで，遺跡数の多い関東地方ではかなり一般的であるかも知れない。それでも現状の資料で集落内の相対比をもとめて，時期的傾向を推定するのはやや無理とみるべきであろう。

いずれにしても，各地の住居址調査が床面の二重構造を意識的に取り扱った例がきわめて稀少な現資料では，多くのことを述べるのは危険というべきであろう。たしかに，報告には現われてこない事例はかなり多いようで，今後の資料増加を待つ以外ない。

占地についても注目しておきたいが，列挙したなかでは台地・丘陵が圧倒的に多く，沖積地は

（不…不明　他…その他）

遺跡（所在）		時期	弥生	古墳			歴史	
			後期	五領	和泉	鬼高	真間	国分
静岡	月の輪平	富士宮市		A 21 B 22 C 33				
	南部谷戸	〃						
	滝戸	〃	C 6	A 9 B 2 不 1				
	天間沢	富士市		C 3				
	天間横道下	〃		C 2				
	天間代山	〃					C 3 他 3	
	八兵衛洞	沼津市	有					
	上野	長泉町	A B C 多	有				
	日詰	南伊豆町			有			
神奈川	谷原	相模原市		A◎ B C 多				C 1
	子ノ神	厚木市						
東京	上石原	調布市					A 1	
千葉	平台先	印西町		A 3 B 1 C 4				
埼玉	浜崎	朝霞市		A 1				
	諏訪山	岩槻市		A 1				
	鶴ケ丘	川越市	A 2 C 5					C 1
	東谷	本庄市			C 1	A 3 C 4		
	諏訪	本庄市		(B) 1				

第56表　床面二重構造遺構時期別一覧表

静岡県日詰遺跡の1例にすぎない。こうした状況は，弥生後期とくにその後半になると遺跡の多くがそれ以前の低地占地から高燥台地へ移遷する一般的傾向のなかでの現象として当然であるとともに，こうした遺跡の占地のなかで発生した住居址構造の変化として床面の二重構造をとらえることが可能となる。

いまこうした観点から本遺跡の住居址をとらえるとき，その構築において，検出面であるスコリア（大沢ラピリ）層から下部の栗色土層を経て黄褐色をなすローム（休場）層上部にまで達する例が圧倒的に多い。その場合，スコリア層はきわめて透水性に富むが，栗色土層・ローム層は粘性を有して透水性に乏しく，この性格はローム層においてより顕著となる。よって，表土・スコリア層で吸収された降雨水は，一般に伏流水となってとくにローム層上面を流れる状況となる。したがって，住居址が栗色土層・ローム層を切断する状況で構築されると，雨水は湧水のように住居址内に流入する現象が生ずるとみられる。こうした伏流水を防ぐ方法として，ローム層上面より高い床面をつくり，その下部に透水性に富むスコリア土を敷き込んで通水性を保持する構築法が採用されたと判断できる。すると，ロームブロックを混じて堅くつくられた貼床にもこうした機能が認められてよいことになる。

現在では推定の域を脱しきれるものではないが，住居址床面における二重構造の機能をこうした雨水の透水性に関連してとらえ得るとすれば，静岡県日詰遺跡の場合にも河川に接して雨水の

処理に対応する新しい住居構造の工夫が占地の条件であった可能性は十分に肯定できる。

床面の二重構造の果す機能についてはこのように推定できるが，ここで最近，まったく逆の理解も出されてきている。すなわち，柿沼幹雄氏が，『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅲ－下田・諏訪』の考察で示されたもので，防湿効果とともにローム層の表面き裂に表現されるような過度の乾燥を防ぐ効果をも果したのではないかという考え方である。たしかに防湿に対して恒湿ともいうべき後者の推定は意外な感じがないわけでもないが，それぞれの地域の有する諸条件のなかであるいは同一地点でも季節や天候の変化に応じて，ある特定の構造が相反する機能を果し得ることは十分に認めてよいところであろう。（植松）

Ⅳ　南部谷戸遺跡の方形周溝墓について

1　本遺跡の方形周溝墓の特徴

本遺跡からは，4基の方形周溝墓と12基の竪穴住居址が発見されたことはすでにのべた。この方形周溝墓は大形の第4号方形周溝墓を中心にして同一方位のもとに，発掘区をほぼ4分割するかのように整然とならび，そしてこの方形周溝墓群全体が住居址群を切るか内包する形で成立していた。こうした様相から本遺跡方形周溝墓群の特徴をつぎの2点に要約できよう。

第1点は，大形の方形周溝墓を含んで整然と配列された一単位グループとして存在すること。

第2点は，狭い残丘内で，方形周溝墓群が住居址群を切って構築されるという，新旧関係をもち，それぞれに対応する集落と墓群をこの遺跡内にもつとは考えられないこと。

こうした本方形周溝墓の特徴のもつ意味について考察・検討するために，まず東日本各地における方形周溝墓の具体的なあり方を概観していこう。

2　東日本各地の方形周溝墓の概観

①　宮原遺跡　　静岡県韮山町　（静岡県教育委員会　1970）

この遺跡は，東西にのびる比高13～16mの低平な台地で，西と東が高く，その鞍部に占地し，この台地の西端部に8基の方形周溝墓と住居址1基が群在していた。方形周溝墓は2つのグループにわけることが可能であると考えられ，形状をみると，1隅が切れるものが1基，2隅が切れるものが3基で，残りは不明である。規模についてみると，ほぼ正方形で一辺の長さが5～10mのものが2基，長方形で8.2×12.2mのものが1基で，残りのものは完形で確認不能であったため，一辺の長さしか判明していない。その中で，第Ⅳ号周溝墓は住居址と重複する状況で確認されたもので，東西に約21mを測る大きな溝で，西コーナーは住居址を切って掘り込まれていた。この遺跡の方形周溝墓は，弥生後期後半～五領期にかけての時期のものであるとされているが，方形周溝墓あるいは住居址からのもので時期を決定できる資料は出土していない。

②　神崎遺跡　　静岡県韮山町　（韮山町教育委員会　1972）

箱根西麓に舌状に張り出した台地の，先端部近くにおける古い海成段丘の一部と思われる海抜30mくらいの細長い台地の上に存在している。縄文時代住居址3，弥生時代住居址5，平安時代住居址1をはじめ，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝2，円形周溝1，溝状遺構3を確認している。これらのうち，第1方形周溝は，規模18.35×18.30mで南東隅の1カ所が切れている。第2方形周溝は，規模9.45×9.4mで陸橋部がないものである。第1方形周溝は，第1住居址を切って構築され，第2方形周溝は，第3住居址を内包していた。これを時期的にみると，第1住居址は，弥生後期に属するものと思われ，その西溝から出土した壺型土器の古式土

師器からみて古墳時代初頭の第1方形周溝によって切られている状況であった。また，第3住居址は縄文時代後期初頭の所産である。

③　二本松遺跡　　静岡県沼津市（静岡県教育委員会　1968）

本遺跡は愛鷹山麓の中腹，標高130m付近にあり，住居址2基，方形周溝墓11基を検出した。本遺跡の方形周溝墓は，個々が独立したいわゆる単立式のものでなく，相互に一部が複合しあったもので，そしてその連接関係からみれば，1～3号の西ブロック3基と，4～9号の東ブロック6基，10，11号の北ブロック2基に分けることができるようで，この3ブロックの方形周溝墓群のうち，西ブロックは南北14m，東西10.8mの内径をもつ1号をはじめ，比較的規模の大きいものが多く，東ブロックはやや大形のものと小形のものが半々ずつ共存，北ブロックは2基がいずれも小形という特徴を示している。この11基の方形周溝墓はいずれも一隅が切れるタイプのものである。また，方形周溝墓と住居址の切りあいをみると，7号方形周溝墓は第1住居址を切っている状況にあった。方形周溝墓は，弥生時代後期後葉のものであるが住居址からは時期を位置づけるだけの資料が得られなかった。また，第2住居址もその時代は明らかにされていないが，弥生時代後期後葉の1号方形周溝墓に内包されて検出された。

④　伊豆逓信病院敷地内遺跡　　静岡県函南町（函南町教育委員会）　1978）

低平な台地上の丘陵上に占地するこの遺跡では，22基の住居址，7基の溝状遺構が確認された。このうち，2基は円形の溝，1基が方形の溝である。調査区域の関係から完全な形で確認されたものがないため，規模・形状などはっきりしないが，切りあい関係において，第14住居址と第19住居址は，F溝とよばれた方形周溝墓と思われる周溝の上に構築されている。両住居址F溝のいずれも五領期のものであることから，同一土器形式の範疇で重複している。

⑤　日詰遺跡　　静岡県南伊豆町（南伊豆町教育委員会　1978，1979）

青野川の沖積地に占地する本遺跡は，既にⅠ次調査を除いたⅡ～Ⅳ次調査までの概報が出されている。概報によれば，数10基にも及ぶ住居址群と14基の方形周溝墓が確認されている。ここでは，遺構の重複がはげしく，短期のうちに集落の移動が遺跡内で数回行なわれた形跡がある。確認されている14基の方形周溝墓のすべては，住居址と重複している。新旧関係はいずれも住居址の方が古いという結果を得ている。しかし，現在までの報告のなかで，遺物についての詳細な報告が得られていないので，具体的な時期差については今後に待ちたい。

⑥　滝戸遺跡　　静岡県富士宮市（富士宮市教育委員会　1977，1978）

標高120～130mの舌状台地の先端部に本遺跡は占地する。周囲との比高はおよそ12mほどである。この遺跡では，4基の方形周溝墓と2基の円形周溝墓，6基の住居址が検出された。4基の方形周溝墓のうち2号方形周溝墓が規模12.4×17mが確認された以外，調査区の関係からその規模・形状ははっきりしない状況であった。このうち，第5号方形周溝墓は，第6号住居址を切って構築されている。第6号方形周溝墓からは，同じく弥生時代後期後半の小形壺を検出している。いずれにしろ，かなり近い時間の中で，集落から墓地への移行がなされたといえる。

⑦　そとごう遺跡　　神奈川県横浜市（そとごう遺跡調査会　1972）

標高40～50mの台地の南端部に位置する。この台地上には弥生時代中期宮ノ台式期に始まり，後期末にいたる時期の集落跡があった。この遺跡の最南端部で3基の方形周溝墓が発見された。このうち1号墓は，東西14m，南北13.5mで，ほぼ正方形に近い平面形態で，南東部に2ケ所の陸橋部分がある。2号墓，3号墓は遺存状態が悪いが，いずれも7～8mの規模であると考えられる。この3基の方形周溝墓は，その規模が最大の1号墓を北にして，相接するように「L」字形に並列していた。その中で，弥生時代後期後半の1号墓はその北西コーナー付近で3号住居址を一部切って構築されていた。

⑧　宮原遺跡　　神奈川県横浜市　(佐江戸遺跡調査会　1976)

この遺跡は，標高約40mの南北につらなる台地の先端に占地する。この台地上に弥生中期宮ノ台期から後期末にいたる時期と真間・国分期の集落が存在していた。方形周溝墓は，台地南端部で2基が確認されている。このうち，弥生時代後期弥生町式期の42号方形周溝墓は，遺存状態の悪さから½程度確認されただけであるが，規模は一辺約11～12mを測るものと思われる。同じく弥生町式期の44号方形周溝墓は，北東コーナーの一部が確認されたのみであるが，宮ノ台期の45号住居址を切り，真間・国分期の43号住居址によって切られるという状況を呈している。

⑨　清水遺跡　　長野県飯田市　(飯田市教育委員会　1976)

天竜川の氾濫原に占地するこの遺跡からは，弥生時代後期，古墳時代，平安時代，中世の集落跡が確認され，方形周溝墓の検出も9基を数えた。これらのうち，規模，形状がはっきり確認できたのは，方形周溝墓Ⅰと方形周溝墓Ⅲの2基だけである。方形周溝墓Ⅰは南北17.5m×東西18mの隅丸方形に周溝をめぐらし，東溝の中央部より僅かに南によったところに陸橋部分をもっている。方形周溝墓Ⅳは，南北8.3m×東西12.3mの隅丸長方形に周溝をめぐらし，南溝東よりの地点に陸橋をもっている。住居址は，弥生時代後期～中世までのものが乱雑に位置していることから，住居址と方形周溝墓の重複関係も複雑な様相を呈する。しかし，これらを整理すれば，弥生時代後期後半の中島式期のⅡ号方形周溝墓が弥生時代後期中葉の座光寺原式期の2号住居址を中島期後半の7・8・9号住居址を中島期後半のⅢ号方形周溝墓が切るものと，Ⅰ号方形周溝墓と6号住居址，14号住居址，Ⅳ号方形周溝墓と1・12・16・17・18・19号住居址，Ⅹ号方形周溝墓と43号住居址との重複にみられるような，古墳時代中期以降の住居址が弥生時代後期の方形周溝墓上に構築されるものというように2通りのパターンが確認された。

⑩　宇津木向原遺跡　　東京都八王子市　(中央高速道八王子地区調査団　1973)

この遺跡は，標高135m内外の等高線に囲まれた台地で，東北東にのびる舌状台地に占地する。30基あまりの弥生時代後期後半の集落の東側で4基の方形周溝墓と集落をはさんで西側に方形周溝墓1基が確認されている。そしてこの西側の方形周溝墓は，住居址を内包して構築されていたが，先後関係については明らかにされていない。

⑪　番清水遺跡　　埼玉県東松山市　(考古学資料刊行会　1968)

東方に長く張り出した舌状台地の先端に位置する。弥生時代後期～国分期の住居址70基あまり確認され，その西側（台地の西端）で，東西22.15m×南北22.25mで，南西隅に陸橋部をもつ巨

大な方形周溝墓が検出されている。この方形周溝墓は，五領期のもので，住居址3基を切り，同時期の3基の住居址を内包し，また，真間期の住居址がその上にのっていた。

⑫　高畑遺跡　　埼玉県行田市　（埼玉県教育委員会　1977）

この遺跡は，南北にのびる自然提防上に占地し，周囲との比高は約1mをはかる。ここでは，住居址5基，方形周溝墓1基が確認されている。この方形周溝墓は，調査では規模・形状は明らかにされていない。住居址との重複関係をみると，住居址3基が方形周溝墓の廃棄後，方形周溝墓上に造られている。1号住居址は，周溝墓の内側に，2号住居址は，周溝上に営まれ，4号住居址は，周溝墓外から溝上にかけて，周溝墓外壁をわずかに掘りくぼめて床としている。これらの住居址は，和泉期後半から鬼高期にいたる間の所産で，五領期後半の方形周溝墓とは時期の隔りがある。

⑬　東寺山石神遺跡　　千葉県千葉市　（千葉県文化財センター　1777）

標高20～30mの低台地に占地し，その西側先端部に位置する。五領期を中心として弥生時代久ケ原期～古墳時代後期鬼高期までの住居址が確認されている。ここでは，方形周溝墓と古墳の周濠が住居址と重複している状況にある。方形周溝墓である4号墳は，南辺中央部に陸橋部をもつもので，軸長東西10m×南北9.5mの規模で，東側で27号住居址と重複している。覆土断面の観察で，27号住居址が完全に埋没したのちに，本周溝墓が掘り込まれている。時期的には，住居址は五領期前半，方形周溝墓は五領期後半に位置する。

⑭　阿玉台北遺跡　　千葉県香取郡小見川町　（房総考古資料刊行会　1975）

この遺跡は，比較的小規模な台地上に占地する。A地点とB地点にわかれ，A地点では7基の後期古墳と3基の方形周溝墓，3基の円形周溝墓と60数基の住居址が，B地点からは，4基の後期古墳と17基の住居址が確認されている。

A地点では，7基の古墳すべてが，2～5基の弥生後期～古墳時代初頭の住居址を切っている。3基の方形周溝墓は，時期不明だが，古墳時代初頭～前期の住居址のうえに構築されている。3基の円形周溝墓も弥生時代後期～古墳時代前期の住居址を切っている。

B地点では，4基の後期古墳が，古墳時代前期の住居址をそれぞれ1基づつ切り込んで構築されていた。

⑮　菊間遺跡　　千葉県市原市　（房総考古資料刊行会　1974）

この遺跡は，北方を村田川，南方を養老川によって分断された標高20m，幅6.5kmを測る台地上に占地する。小田原期～弥生町期の集落跡が国分期の住居址5基と周溝墓5基とともに検出された。住居址・周溝墓のどちらも発掘区域全面に散在している。このうち，弥生時代後期久ケ原～弥生町期の1号周溝墓は，調査区域の関係から平面形ははっきりしないが，方形を呈すると考えられ，規模は，外縁で東西径約20m，内縁で約17mを推測する。弥生時代中期～後期の住居址5基を切っている。弥生時代中期小田原期の2号周溝墓は，北東－南西の内縁が16m・北西－南東の内縁が15.4mを測り，四隅に陸橋をもつタイプのものであると考えられ，小田原期の住居址4基を切っている。また，円形周溝である弥生時代中期の4号周溝墓は，小田原～宮ノ台期の住居

址を切っている。以上が切りあい関係において周溝墓が新しいものであるが，３号周溝墓（時期不明）と２基の住居址，５号周溝墓と１基の住居址の重複関係にみられるように，同遺跡では，国分期の住居址に周溝墓が切られている例もみうけられる。

⑯　臼井南遺跡　　千葉県佐倉市（佐倉市教育委員会　1975）

標高20～30ｍの南北に連なる平坦な台地に占地する。遺跡は７地点からなり，そのうち，渡戸Ａ地点，渡戸Ｂ地点で方形周溝墓が検出された。この２地点は，台地のほぼ中央部に位置する。このうち，渡戸Ａ地点周溝墓は9.3×9.0ｍを測り，陸橋部をもたない方形周溝墓である。渡戸Ｂ地点では，第Ｉ周溝墓が同じく15.2×12.8ｍの陸橋部をもたない方形周溝墓であるが，第II周溝墓は18.9×16.3ｍで東コーナーに陸橋部をもつ方形周溝墓で，２基の住居址と重複関係をもっている。この方形周溝墓は台地の東端部に位置し，傾斜が強くなる部分にかかるため部分的に平面をとらえることができない状況にある。２基の住居址はいずれも弥生時代後期後半のもので，１基は方形周溝墓に切られ，他の１基は方形周溝墓を切っている。短い時間の中で，集落→墓地→集落という変遷を有する遺跡は，きわめて稀有な例といえる。

⑰　請西遺跡　　千葉県木更津市（房総考古資料刊行会　1974）

標高50～60ｍの丘陵上に16基の住居址と３基の方形周溝墓が所在している。Ａ－１号周溝は周溝が二重にめぐり，二重方形周溝墓と称されるきわめて特殊な方形周溝墓で，外溝は12.7×12.4ｍ，内溝は9.2×９ｍを測る。形状は陸橋部をもたないものである。Ｂ－１号周溝は，16.4×14.5ｍを測る陸橋部をもたない方形周溝墓である。Ｂ－２号周溝も15.6×16ｍを測り陸橋部をもたない。このうちＡ－１号周溝は，住居址と重複関係をもち，古墳時代前期のＡ－２号住居址の上に構築されている。

⑱　飯合作遺跡　　千葉県佐倉市（千葉県文化財センター　1978）

この遺跡は，北側へ突出した台地の一端に位置する。約45,000m²の発掘対象地内から検出された遺構は，弥生時代住居址41，五領期住居址46，鬼高期住居址３，国分期住居址19と古墳４基，方形周溝墓23基である。集落は，弥生時代のものが台地の奥に，五領期のものが中央部に，鬼高・国分期のものが北側の台地北端部に占地する傾向がうかがえる。古墳，方形周溝墓は６～７のグループにわかれる。これらは，大形の古墳あるいは方形周溝墓を中心にして同一方位のもとに整然とならぶタイプ，相互に一部が連結しあってグループを形成するタイプの２つのタイプにわかれる。方形周溝墓23基のうちＤ18が南東コーナーで陸橋部をもつほかはすべて陸橋部をもたないものである。また規模についてみると，５～10ｍの規模をもつものとしては９基，10～15ｍの規模をもつものとしては12基，15～20ｍの規模をもつものとして２基がある。この遺跡では，住居址と古墳・方形周溝墓の重複が数多くみられる。弥生・五領期の住居址の重複関係はすべて集落廃絶後に古墳・方形周溝墓を構築したという結果がでている。また国分期の住居址との重複関係では，方形周溝墓が古墳時代前期の所産であると考えられていることから先後関係は明らかである。

⑲　加茂Ｃ地点遺跡　　千葉県市原市（上総国分寺台遺跡調査団　1976）

この遺跡は，舌状台地の縁辺部に占地する。この台地上で弥生時代住居址３基，方形周溝墓１基を確認している。この方形周溝墓は，北西，南西コーナーに２つの陸橋部をもち，24×24.5mの規模をもつもので，北側に位置する第１号住居址を掘り込んで構築されている。

⑳　大崎台遺跡　　千葉県佐倉市（大崎台遺跡発掘調査団　1973）

標高30mを計測し，水田との比高約15mを測る北総台地上の先端部に占地する。この台地上に弥生時代後期（前野町）から古墳時代（真間～国分期）にかけての住居址が，18基確認されている。また，弥生時代方形周溝墓も２基確認されている。方形周溝墓１号址は４隅に陸橋をもつもので11.6×11.3mの規模をもつ。方形周溝墓２号址は１隅に陸橋をもつものである。方形周溝墓１号址の上に，古墳時代の住居址が構築される例が確認されている。

㉑　歳勝土遺跡　　神奈川県横浜市（横浜市埋蔵文化調査委員会　1975）

この遺跡は，南北につらなる標高45mの台地上にあり，小谷をへだててつらなる北側の台地上に溝をめぐらした集落が存在している。確認された方形周溝墓は26基である。このうちＳ26号は若干地点を異にし，弥生時代後期の集落に附随するものと考えられるほかはすべて弥生時代中期宮ノ台式期に属するもので，形態は二つに大別できる。一つは４隅に陸橋を有するもので16基確認されている。これらの周溝は，一辺９～15mのものまであり大小の差がみられるが，方向においてかなり整然とならんでいる。いま一つは,「コ」の字形，あるいは「Ｌ」字形のもので７基確認されている。

㉒　和田堀公園大宮遺跡　　東京都杉並区（杉並区教育委員会　1971）

この遺跡で確認された方形周溝墓は３基で，同一方位に整然と並んでおり，第１号方形周溝墓と第３号方形周溝墓は溝を共有しあって存在していた。

㉓　朝光寺原遺跡　　神奈川県横浜市（横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会　1968）

標高40mの台地上に溝をめぐらす集落遺跡が確認され，その西方に方形周溝墓群があった。Ｎ地点のものは19基で，方位によりいくつかのグループに分けうるようである。そのうち１号墓，３号墓は４隅に陸橋をもつものである。周溝墓相互の関係は溝を共有する例を含めて，並列するタイプのものである。

㉔　台Ｂ地点遺跡　　千葉県市原市（上総国分寺台遺跡調査団　1976）

国分寺台とよばれる沖積台地に占地する。標高約19mの台地の西端に位置し，下位の沖積平野との比高は約12mである。住居址・方形周溝墓が確認された。概報によって，その一部が紹介されているが，鬼高期の住居址が宮ノ台期の方形周溝墓の上に構築されているものがある。

3　方形周溝墓の単位について

本遺跡の第１点の特徴である大型の方形周溝墓を含んで整然と配列された１単位グループとして存在するということを，東日本各地の方形周溝墓を分析し，比較することによりその位置づけを考えてみたい。

方形周溝墓の形態

方形周溝墓の形態を陸橋の有り方で分類してみると，

Ⅰ　4隅の切れるもの

このタイプとしては，神奈川県歳勝土遺跡㉑の16基，神奈川県朝光寺原遺跡㉓の3基がある。

Ⅱ　通常のもの（1隅～3隅の陸橋をもつもの）

このタイプとしては，静岡県二本松遺跡③4～8号方形周溝墓，長野県清水遺跡⑨の方形周溝墓Ⅸ号，埼玉県番清水遺跡⑪，千葉県臼井南遺跡⑯渡戸B地点第Ⅱ周溝墓，千葉県飯合作遺跡⑱D18は1隅に陸橋をもつものである。静岡県宮原遺跡①Ⅱ号，Ⅴ号周溝墓，静岡県二本松遺跡③1・2号方形周溝墓，神奈川県そとごう遺跡⑦1号墓は2隅に陸橋をもつもの，また，3隅に陸橋をもつものとして，神奈川歳勝土遺跡㉑S7号，神奈川県そとごう遺跡⑥2号墓がある。

Ⅲ　一辺の中央が切れるもの，あるいは前方後方形のもの

このタイプには，阿玉台北遺跡⑭A007，清水遺跡⑨方形周溝墓Ⅰ・Ⅲがある。

分布の分類

方形周溝墓の分布状態を

A－多数が群在するもの

B－数基が群在 { a．1つの単位として，地点を異にする別の単位と共に，より大きな集まりをもつ。
b．1つの単位のみ。

C－単独 { a．地域を異にして，存在する別のものと共により大きな集まりをもつ。
b．単独

としてとらえてみると，

A類としては，神奈川県歳勝土遺跡㉑，神奈川県朝光寺原遺跡㉓がある。

B類のaとしては，静岡県二本松遺跡③，千葉県飯合作遺跡⑱，静岡県日詰遺跡⑤がある。

B類のbとしては，本遺跡，神奈川県そとごう遺跡⑦，東京都和田堀公園大宮遺跡㉒がある。

C類のaとしては，千葉県臼井南遺跡⑯渡戸A地点がある。

C類のbとしては，埼玉県番清水遺跡⑪がある。

時期

方形周溝墓の陸橋の有り方で分類したⅠ類は，弥生時代中期宮ノ台期にみられる。

Ⅱ類は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて多くみられる。

Ⅲ類は弥生時代後期から古墳時代後期にかけてである。

また，分布状況についてみると，

A類は弥生時代中期宮ノ台期にみられる。

B類のaは，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてである。

B類のbは，弥生時代末から古墳時代初頭にかけてである。

C類のaは，古墳時代初頭である。

C類のbは，古墳時代初頭である。

以上のような結果から本遺跡を位置づけてみると，陸橋の有り方でみるとII類で古墳時代初頭にある。また分布状況からみると，B類のbである。

4　方形周溝墓と住居址の重複関係について

本遺跡の第2の特徴である方形周溝墓と住居址との切りあいについてみると，先後関係，時間差で以下の4形式に分類できる。

(ア)重複関係において住居址の方が古い

①接近した時期

②離れた時期

(イ)重複関係において住居址の方が新しい

①接近した時期

②離れた時期

(ア)の①としては，本遺跡をはじめとして静岡県滝戸遺跡⑥，埼玉県番清水遺跡⑪，千葉県東寺山遺跡⑬などがある。

(ア)の②としては，静岡県神崎遺跡②，神奈川県そとごう遺跡(7)，神奈川県宮原遺跡⑧，長野県清水遺跡⑨，千葉県阿玉台北遺跡⑭，千葉県菊間遺跡⑮，千葉県請西遺跡⑰，千葉県飯合作遺跡⑱　千葉県加茂C地点遺跡⑲などがある。

(イ)の①としては，静岡県伊豆逓信病院敷地内遺跡④，千葉県臼井南遺跡渡戸B地点⑯の2例がある。

(イ)の②としては，埼玉県番清水遺跡⑪，千葉県菊間遺跡⑮，千葉県飯合作遺跡⑱，千葉県台B地点遺跡㉔，千葉県大崎台遺跡⑳，神奈川県宮原遺跡⑧，長野県清水遺跡⑨などがある。

以上をもう少し具体的にとらえてみると，(ア)の①にあてはまるものとして，4例を数える。すべて弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての時間の中で，集落から墓地への移行がなされている。このように接近した時間の中での重複関係がこの時期に限定されるといいきるだけの資料が揃っているといいきれないが，この時期になって，この重複関係が出現するのではないだろうか。

(ア)の②にあてはまるものとしては，上記した9例のほか，断定できないが可能性があるものとして静岡県宮原遺跡①，静岡県二本松遺跡③，静岡県日詰遺跡⑤，東京都宇津木向原遺跡⑩の4例があり，これらをあわせると13例を数える。これらの方形周溝墓の時期をみると，弥生時代中期が2例，弥生時代後期が6例，古墳時代前期が3例，古墳時代中期以後が2例となっている。また，これと対比する住居址の時期をみると，弥生時代中期が2例，弥生時代後期が8例，古墳時代前期が2例である。これらの組み合せをみると，弥生時代中期の住居址は，弥生時代中～後期の方形周溝墓に，弥生時代後期の住居址は，弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓に，古墳時代前期住居址は，古墳時代中期以後の方形周溝墓によって切られているという結果が得られる。

この重複関係において住居址の方が古いものは，集落を墓域としたもので，当然，集落と墓地の問題が生じてくる。何故，集落を廃棄して墓地としたのだろうか。(ア)の②では，そこに時間の

隔りがあることから，集落を廃棄するという意識は存在しないことがうかがえる。しかし，(ア)の①はあきらかに，集落を廃棄して墓地にするという意識があったことを考えなければならない。

(イ)の①としては，静岡県伊豆逓信病院敷地内遺跡④と千葉県臼井南遺跡渡戸B地点⑯の2例があるのみである。東日本各地における方形周溝墓と住居址の重複関係をもつ21例の中では10%にも満たないのであるが，墓地から集落への移行として興味深いものがある。

(イ)の②としては，7例を数えた。弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓が，カマドをもつ住居址によって切られていたものである。いずれも方形周溝墓の廃絶後に構築された住居址であるために，そこには，墓地に対する意識の変化をみることはできない。

以上，方形周溝墓と住居址の重複関係において，方形周溝墓を墓地として，住居址を集落としてとらえたとき，時間の隔りをもつ場合をのぞいて，接近した時期の中で行われる集落→墓地，墓地→集落の移行は，そこに意識をもたないであろうと考えられる時間を隔てて移行がなされたものにくらべると極端に数が少ないといえる。この結果が偶然性の強いものでなく，当時の人々の意識の中に墓地に対する神聖化あるいは侵してはいけないという意識が存在していたと考えられないだろうか。これは，接近した時間の中で墓地→集落への移行がわずか2例であることからもいえるのではないだろうか。

5　まとめ

本遺跡の方形周溝墓の2つの特徴を論点の中心に据え検討してきたが，

第1点についてみると，大形の方形周溝墓を含んで整然と配列されて分布するものは，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてみられる。しかし，本遺跡で確認された例のように大形の方形周溝墓を含んで整然と配列される1単位グループが，地点を異にする別の単位と共に，より大きな集まりをもつものである可能性が強いといえる。また，陸橋部の有り方についてみると，本遺跡の場合はかなり普遍的な例であるといえる。

第2点についてみると，集落を廃棄して墓地とする傾向はみられるが，墓地を集落とする例は少ない。これは，墓地に対する意識の中に，それを侵すことのできないものであるという意識がすでに存在していたといえる。（渡井）

V　古墳時代初頭期を中心とした遺跡分布

※主に富士宮市周辺について

1　はじめに

最近この地方では奈良・平安時代の集落址の発掘調査が各地で実施されており，研究者の間でも大きな話題となっている。それに対して何年か前には縄文時代中期，弥生時代後期の遺跡が数多く調査されていたのにもかかわらず近頃では珍しくさえ感ずるようになってきている。このような傾向は開発行為に伴う発掘調査に顕著にみられることから，各年代によって開発行為がその経費等の採算のなかで主体的にむけられる地形・地点があり，それが各時代の遺跡が位置する地形・地点と重複したことによるものとみられている。

このように各時代，時期によって生産手段・自然環境などの相違から生活の営まれる地形・地点が異ることは前から指摘されてきており，各時代，時期の遺跡の位置する地形，地点の傾向を求めるためにいくつかの試みをしている。なかでも，同一地形のなかで海抜差をもって表現する方法は一般的な方法として多用されており，本地方を取り上げたものに小野（1965）の論考がある。これにおいて愛鷹山南麓の各時代，時期の遺跡群を，その南麓断面上に落し，この点の並びをもって縄文時代早期より古墳時代に至るまで徐々に遺跡立地が下降している，としている。この操作で表わされる各時代，時期の大きな傾向は，この地域を限定した場合には認められるが，微細な地形の変化や海浜性な遺跡群と内陸性な遺跡群を比較した場合には同一の尺度で表現されない。

また，縄文時代に限定はしているものの富士宮市周辺の遺跡群を平面的な分布からグループ化した植松（1971）の論考がある。これは早，前期の遺跡群を半径３km，中，後期の遺跡群を半径1.5kmの正円で,いくつかにグループ化し，その範囲内で各時期の移動を考える生活圏を設定している。しかし，早，前期の半径３kmの生活圏の問題を考えても，同一集団が連続して数千年もの長期間，その狭い範囲で営々と留まって生活するとは考えにくい。また，これら早，前期の半径３km，中・後期の半径1.5kmは平面的には各遺跡群共，同一の面積を有するが，しかしその範囲のなかに峻険な山地，あるいは河川の沖積地を大きな割合で含む遺跡群もあり，これを考慮すると純粋な生活圏と判断される面積は各遺跡群の間で大巾に差が出てくる。

2　古墳時代初頭前後の遺跡

前項で述べたごとく各遺跡群の生活圏の検証をするにあたっては，多くの基礎的問題を解決しなければならないが，いまだ試行的な段階にとまっていることから，ここでは月の輪遺跡群と同時代の共通する社会構造及び稲作，畑作など推定される生産の基盤をもった遺跡群のなかで考え

てみたい。

富士宮市内には弥生時代中期の遺跡３ケ所，同後期の遺跡４ケ所，古墳時代初頭とされる遺跡36ケ所，その他の土師器遺跡とされる遺跡15ケ所がある。このように同市内には土師器遺跡が多く，なかでも古墳時代初頭期の遺跡が非常に多いが，この時期以外の遺跡で時期が判断された例は数遺跡が国分期とされるのみで他は時期不明である。

このように弥生時代中期から奈良・平安時代までの遺跡が存在するわけであるが，弥生時代中期の遺跡は，すべて初頭に位置し，同中葉から後期に入るまでの遺跡は発見されておらず，現在では空白期とみている。したがってこの地域で２時期以上連続して居住したことが証明される時期は，同後期から古墳時代初頭にかけてのみであり，これに連続する時期の遺跡は現在のところ発見されていない。ここでは特にこの時期を取り上げて問題としたい。

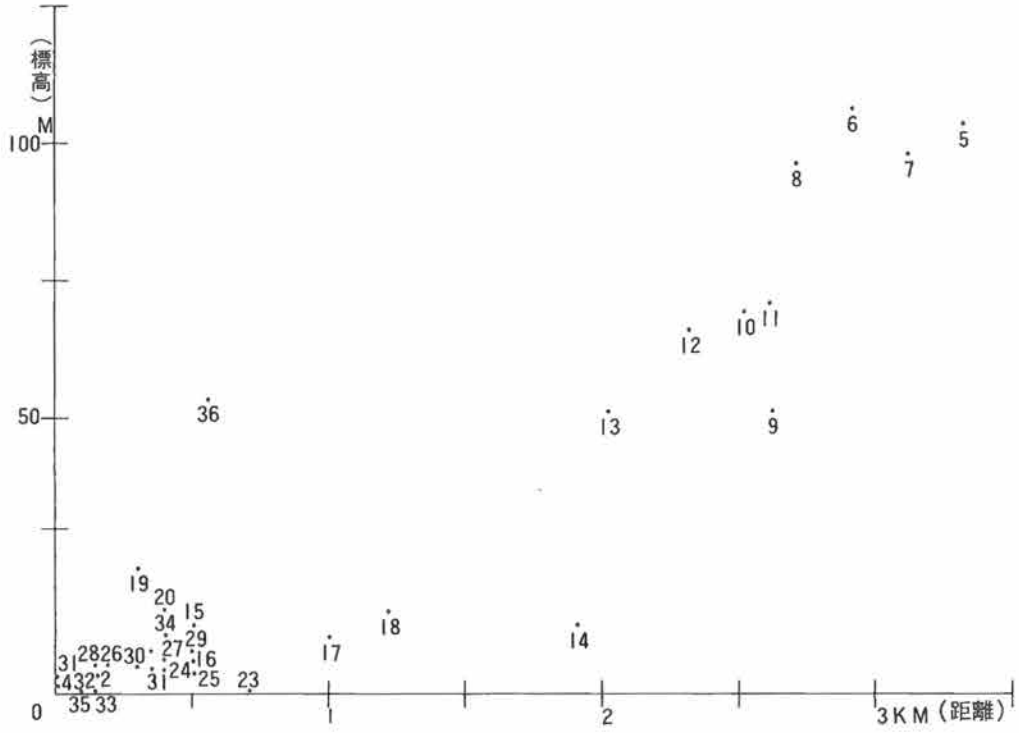
富士宮市街周辺の地形は前章の地形に詳しいが，北東に富士山麓末端が，南西に羽鮒丘陵がせまったその間に潤井川等が細長い沖積地を形成しており，これらの遺跡群はここを水稲耕作等の生産活動の基盤としていたと考えられる。潤井川はこの沖積地の南西寄りを流れており，現在までに市街化された左岸には遺跡の空白地帯が存在し，これらの遺跡群を二分しているかのように両山麓にむかい広がっているが，この空白地帯にも遺跡が存在した可能性は大きいが今では確認しようもない。

3　遺跡占地の各段階

弥生から古墳時代の特に集落遺跡の占地を考える上で，最も重要な問題のひとつに稲作を行ったとみられる水田の位置との関係が上げられる。弥生時代以後，集落の生産活動全体のなかで水稲耕作の占める割合が非常に大きいという原則のなかで，集落とその集落の経営する水田の位置関係は，登呂遺跡の発掘調査結果等からそれは表裏一体をなす。たとえば水田中の集落を想定してきている。しかし，ここに存在する古墳時代初頭前後の遺跡群36ケ所のうち，このかたちを連想することのできる沖積地上に位置する遺跡は３ケ所にしかなく，他はすべて台地上，もしくは台地の端に位置している。さらに，当時の水田地帯と推定される沖積地帯から遠く離れた遺跡もいくつかあり，その遺跡立地にいくつかのパターンがあるように観察される。このような傾向を図表にしたのが第Ａ図であり，横軸はこの沖積地を形成した本流である潤井川からの最短距離・縦軸は潤井川水面と遺跡との等高差を表している。本来は当時の水田面を復原して，その地点から計測することが望ましいが，その水田面が明確にできず，潤井川で代用したが，それに近い傾向は摘出されたと考えられる。

本図表で弥生時代後期の４遺跡を観察すると，明らかに２遺跡づつ，２群に分化しているのがわかる。羽衣町，滝戸の両遺跡は沖積地もしくはそれに接する本流近くの，本流水面際に位置するのに対し，田中・月の輪上遺跡は本流から数10ｍ隔れ，水面上４～８ｍの微高地，あるいは台地の上に位置しており，この違いをもって前者を第１段階，後者を第２段階と考えることとした。

古墳時代に入ると遺跡数も飛躍的に多くなり，それに伴ってか，その遺跡の占地の相違傾向は



第57表　遺跡占地群の各段階

さらに増幅され，第１段階に残る泉・羽衣町・西町・大中里坂下遺跡，第２段階の権現・五反田・月の輪上・月の輪平・月の輪下・坊地南・坊地上・坊地下・南部谷戸・野中中村・野中向原遺跡と，その遺跡数は非常に多くなるが，とくに第２段階では横方向に広く100～700mとその許容範囲が広大する傾向が著しい。また，この時期には第２段階にとまらず，さらに等高差を拡大する１群と，潤井川本流から隔れる１群がある。前者を第３段階のA，後者を第３段階のBとする。第３段階のAには上宿・上高原・奥山地・福伝・別所遺跡があり，これらは水平距離は，ほぼ第２段階の遺跡群と変わらないが，さらに高い地点に登り，10～20mの等高差で表われており，なかでも別所遺跡は50m以上もその差が開く。第３段階のBの遺跡群には蟹入越・向田・天間沢遺跡があり，これらもまた等高差は第２段階と変わらないが水平距離で1000～2000mに広がっている。

また，第３段階のA・B両方の傾向を同時に，あるいは，それ以上に拡大している遺跡が箕輪A・同B・辰野・時田・丸ケ谷戸・出水東・出水・三ツ室遺跡である。これを第４段階の遺跡群とする。

以上，潤井川の沖積地周辺の古墳時代初頭の遺跡群は，第１段階から第４段階の遺跡群までに分化させることができ，弥生時代後期に出現した第１段階，もしくは第２段階の遺跡群は，その

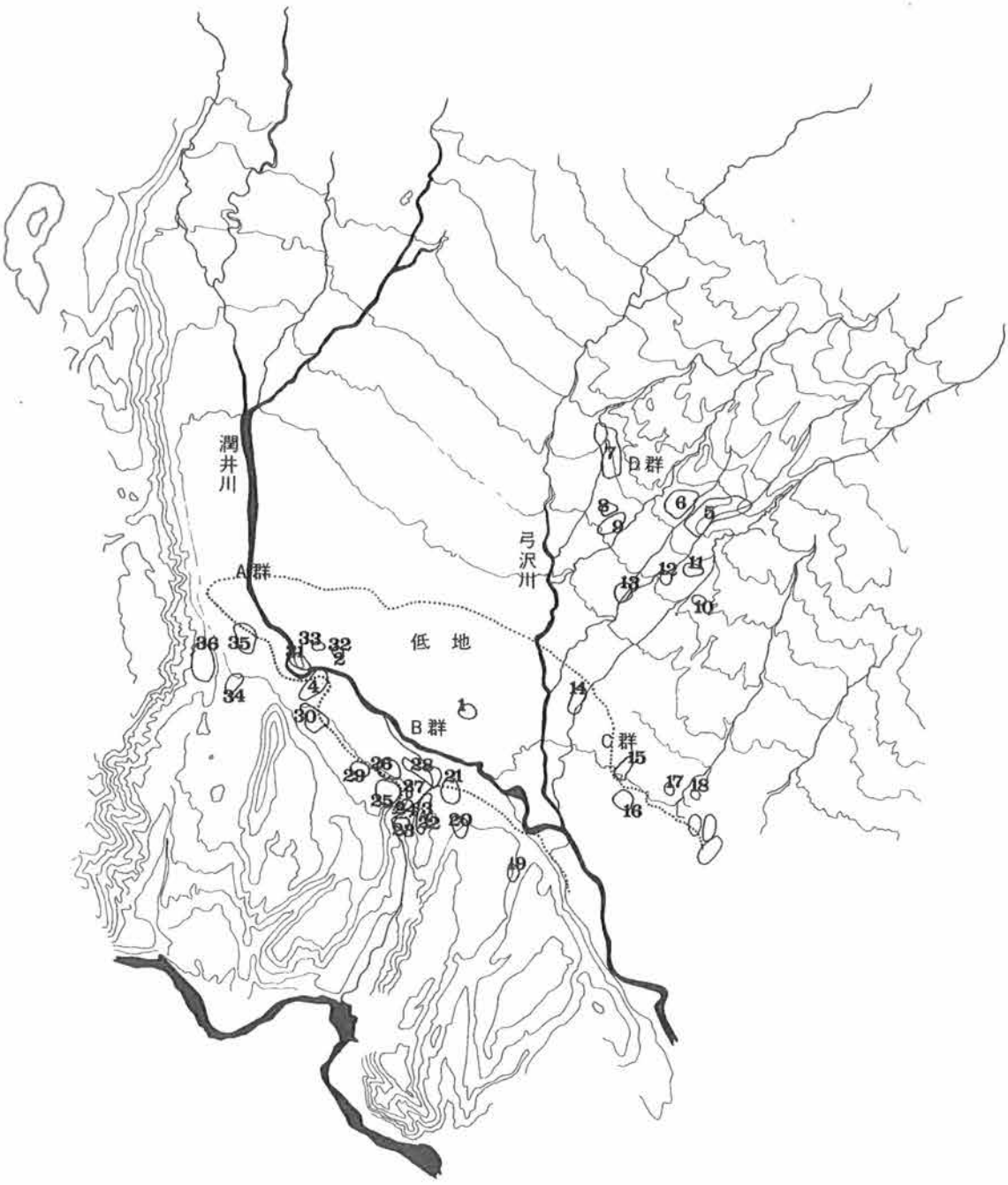
段階での遺跡は残りながらも第３・第４段階へ発展的広がりをもって遺跡が増加してゆく経過がこの図表上で追うことができたが，実際の遺跡群が散布する上ではどのような意味をもつのであろう。

4　遺跡群の生活範囲

第100図の遺跡分布図を観察すると，これらの遺跡群は，径1.5～2kmの範囲をもって４群に分か

	遺跡名	時期	地形	海抜(m)	潤井川からの距離(m)	グループ	
1	田中	弥生・後期	平地	106	400	B	第２段階
2	羽衣町	〃　〃	〃	116	100	A	1
3	月の輪上	〃　〃	台地の上	108	350	B	2
4	滝戸	〃　〃	〃	122	10	A	1
5	箕輪A	古墳・初頭	台地の上	205	3300	D	4
6	〃B	〃　〃	〃	210	2900	〃	〃
7	辰野	〃　〃	〃	195	3100	〃	〃
8	時田	〃　〃	〃	190	2700	〃	〃
9	丸ケ谷戸	〃　〃	〃	162	2600	〃	〃
10	出水東	〃　〃	〃	182	2500	〃	〃
11	出水	〃　〃	〃	186	2600	〃	〃
12	出水西	〃　〃	台地の端	178	2300	〃	〃
13	三ツ室	〃　〃	台地の上	148	2000	〃	〃
14	向田	〃　〃	扇状地	112	900	C	3－B
15	上宿	〃　〃	台地の上	100	500	〃	3－A
16	権現	〃　〃	台地の端	86	500	〃	2
17	蟹入越	〃　〃	台地の上	102	1000	〃	3－B
18	天間沢	〃　〃	〃	106	1200	〃	〃
19	上高原	〃　〃	〃	128	300	B	3－A
20	奥山地	〃　〃	〃	120	400	〃	〃
21	五反田	〃　〃	〃	108	150	〃	2
22	月の輪上	〃　〃	〃	114	350	〃	〃
23	月の輪平	〃　〃	〃	110	700	〃	〃
24	月の輪下	〃　〃	〃	100	400	〃	〃
25	坊地南	〃　〃	〃	118	500	〃	〃
26	坊地上	〃　〃	〃	120	200	〃	〃
27	坊地下	〃　〃	〃	112	400	〃	〃
28	南部谷戸	〃　〃	〃	110	150	〃	〃
29	野中中村	〃　〃	〃	122	500	〃	〃
30	野中向原	〃　〃	〃	122	300	A	〃
31	泉	〃　〃	〃	125	0	〃	1
32	羽衣町	〃　〃	平地	116	100	〃	〃
33	西町	〃　〃	台地の上	118	150	〃	〃
34	福依	〃　〃	〃	142	400	〃	3－A
35	大中里坂下	〃　〃	〃	125	100	〃	－
36	別所	〃　〃	台地の端	180	550	〃	3－A

第58表　遺跡分布表



第100図　遺跡分布図

れることが判断され，これらをそれぞれA～D群とした。A群には羽衣町・滝戸・野中向原・泉・西町・福伝・大中里坂下・別所遺跡が，B群には，田中・月の輪上・上高原・奥山地・五反田・月の輪平・月の輪下・坊地南・坊地上・坊地下・南部谷戸・野中中村遺跡が，C群には向田・上宿・権現・蟹入越・天間沢遺跡がD群には，箕輪A・同B・辰野・時田・丸ケ谷戸・出水東・出水・出水西・三ツ室遺跡がある。

このA～Dの遺跡群を，前項の各段階で分析すると，A群には，第1段階の羽衣町・滝戸・泉・大中里坂下遺跡が，第2段階の野中向原遺跡が，第3段階のAの福伝・別所遺跡があり，第3段階のBに当る遺跡はない。B群には第1段階に当る遺跡はなく，第2段階の田中・月の輪上・五反田・月の輪平・月の輪下・坊地南・坊地上・坊地下・南部谷戸・野中中村遺跡が，第3段階のAの上高原，奥山地があり，なかでも第2段階に当る遺跡が非常に多い。C群には第2段階の権現遺跡が，第3段階のAの上宿遺跡が，同のBの蟹入越・天間沢遺跡がある。また，D群は，すべて第4段階の遺跡である。

この結果のなかで最も注目される事柄に，A～Dの遺跡群は，その順序で，各々，中核となる遺跡が第1段階から第4段階に移行していることが判断されることである。具体的にいうと，A群では，各遺跡の占地する地点が，第1・もしくは第2段階に多く，B群では第2段階の遺跡が圧倒的に多くなり，C群では3段階の遺跡が中心であり，D群では第4段階の遺跡のみである。このようなA～Dの遺跡群の差はどんな意味をもつのであろうか。

5　まとめ

以上，ここでは月の輪遺跡群周辺の同時代前後の遺跡を平面的な広がりのなかでA～Dの4遺跡群に分け，断面的な広がりのなかで遺跡の占地する地点を第1～4までの段階の遺跡に分けた。その結果，それぞれのA～Dの遺跡群の性格が段階的に変化していることが明らかとなったのである。

ここで明らかにしなければならない問題に，第1段階から第2段階の遺跡までの遺跡占地の違いは，それ自体何を意味するのかということである。時期的な問題としては，本遺跡群でも明らかなように羽衣町遺跡群等の弥生時代後期の第1段階の遺跡は，古墳時代初頭にかけて低地集落を残しながらも第2，第3，第4段階の台地上に進出してゆく過程と理解できる。このことから，弥生時代後期の遺跡は低地である第1段階が本来的な占地であり，台地に登る遺跡は新たな発展と判断でき，A～Dまでの遺跡群の主体的な遺跡占地の相違は，この遺跡が増加する過程のなかで各地に出現してゆく分村的発展として捉えることができないであろうか。

このような弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて爆発的な勢いで増加する遺跡はAもしくはB遺跡群の第1段階もしくは第2段階にあたる平地あるいは台地縁辺を埋めつくし，さらに増加の勢いは第3段階，第4段階にあたる，さらに高い，さらに遠方の地点に広がっていったものと考えられ，このAもしくはB遺跡群の分布する地域を開発しつくした時点で，新たにC・D遺跡群に分村していったのではなかろうか。このことはA遺跡群もしくはB遺跡群にはそれぞれに弥生

時代後期から古墳時代初頭までの時期の変遷を追うことができるのに対して，C・D遺跡群には弥生時代を含んでおらず，明らかに新しい時期を中心としている。

以上の傾向はこの地方でも，この富士宮を中心とした地域にのみ顕著に現れるようではあるが，そのような遺跡分布の変遷傾向はこの地方でもいえよう。（平林）

Ⅵ　調査総括

1　月の輪遺跡群調査の成果について

月の輪平・月の輪下・南部谷戸の各遺跡についてその調査内容を詳かに述べてきたが，ここではそれらの成果の主たるものを再度まとめておきたいと思う。

①　月の輪遺跡群の意味

ここで月の輪遺跡群と呼んだ諸遺跡には，月の輪上・月の輪平・月の輪下・五反田・南部谷戸坊地上・坊地下・坊地南の計８遺跡を含めて考えている。位置的には，いわゆる星山谷の北端部付近にあって，その東西両岸をつくる台地上面と谷底部をつくる低位面を含んで，東西・南北とも約700～800ｍ前後の距離を測る範囲に集中するということになる。詳かにみると，両岸にあたる台地上には月の輪上・月の輪平，坊地上・坊地南の各遺跡が，谷底低位面には月の輪下・南部谷戸，坊地下・五反田の各遺跡が存するが，全体としては，星山丘陵上に位置して台地上に占地する遺跡群として，いわゆる沖積地に占地する遺跡群とは異った性格を有するものとして理解するべきである。

本遺跡群の時期としては，すでに述べたように，月の輪平・月の輪下・南部谷戸の各遺跡が古墳時代前期を主体とする時期であった。また，採集資料その他によれば，月の輪上遺跡が弥生後期後半にまでさかのぼることは確実であることから，本遺跡群全体としては，弥生後期から古墳時代前期ということになる。

すると，本遺跡群は広く指摘されているように，愛鷹山麓地方で弥生後期末ごろになって，爆発的な増加をみせる台地上の遺跡群の典型的なグループとみることができる。こうした遺跡群のあり方を，畿内・瀬戸内海地方のいわゆる高地性集落と安易に結びつけて論ずることはもちろんできないが，それでも，広く東海地方に共通した傾向であることは確実であると認められる。問題はこうした遺跡群が，弥生後期から古墳時代前期にかけての時期に，沖積地から台地上に進出する過程で，爆発的な遺跡数の増大をみせることができる，その社会的基盤の変化ということになる。結論的にいえば，そうした契機たりうるものとして台地上の開墾を可能にした社会的発展が推定できるのであるが，それを例えば石器なり鉄器の問題として論ずることは現状では無理というべきであろう。今後の課題としておきたいが，いずれにしても，こうした変化が，弥生社会から古墳社会への発展過程として指摘できることは確かである。

②　古墳時代前期の住居址と集落の問題

月の輪平遺跡では86軒，月の輪下遺跡では４軒，南部谷戸遺跡では12軒の住居址が確認された。

住居址の構造上の特徴としては，月の輪平・南部谷戸遺跡では床面の二重構造が共通していた。こうした床面の二重構造は，東海・関東地方の弥生後期から古墳～歴史時代に広くみられるものであり，その発見例は増加しつつある。機能的には，本地域では地表下の伏流水の湧出を防ぐ役割

が推定できるが，逆に床面の乾燥をふせぐためのものという判断も指摘されている。あるいは,各地域のローム層とその上層の性格によるまったく逆の意味を果した可能性もあるかも知れない。

月の輪下遺跡の住居址には床面の二重構造はみられず，６本柱という特徴で共通していた。同時期の資料のなかではきわめて特殊な状況であるが，それはさらに集石遺構との重複という点でも際立ったものといえた。こうした特徴を非実用的要素と認めていわゆる祭祀性と結びつける理解が許されるかも知れないが，それを積極的に立証することはなかなか困難である。いずれにしても，本月の輪下集落がきわめて特殊な役割，あるいは月の輪平なり月の輪上遺跡に附属するかなり限定できる１時期に形成された特殊な機能を付された集落といえる可能性は残るものとできる。

月の輪平・南部谷戸遺跡では，住居址の重複がきわめて激しかった。そのため，１時期の集落構造を復原するための作業は困難をきわめたが，それでも月の輪平遺跡では６期に分けてその復原を試みた。この結果，各時期とも５～６軒の住居址からなる２～３の単位集団が連続したものと推定できる状況で，しかも多くは大型住居址をその中核におくらしいが，最終末にちかづくとそれが消滅するらしい状況が指摘できるものであった。もちろん，激しい重複関係からすれば，かなり無理な推定であるが，こうした集落址においても，１時期１単位集団の抽出が可能である試みとして重要な意味をもつものであろうし，こうした成果のなかで，弥生後期社会から古墳前期社会への発展の具体相を検討することができるのであろう。

③　方形周溝墓の意味

南部谷戸遺跡に４基の方形周溝墓があり，それは，大型の方形周溝墓を含んで整然と並置する地形的にも確実にまとまりをもつといえる状況であった。

こうした方形周溝墓のあり方は，多く弥生時代後期から古墳時代前期にかけてみられるもので，いわゆる台状墓といわれる単独の例とほぼ並行して存在するらしいことも確かめられつつあるといえる。すると，弥生時代から古墳時代への移行は，群在から単独へといえるほど単純な様相ではないらしく，それらが社会の各側面を反映しつつ共存したことに意味があるらしい。よって，本周溝墓群に示された南部谷戸集落の状況は，単独な“台状墓”的なあり方ではなくて，より共同体的色彩の強い社会を推定することが許されてよいであろう。

本地域において，こうした社会的な多様性を指摘できるかどうかは今後の課題であるが，資料の増加をまつべきであろう。

④　本遺跡群のもつ祭祀性について

月の輪下遺跡では，特殊な住居址構造と集石遺構がみられたこと，それが非実用的な機能を推定する以外になさそうなことはすでに述べた。ここでは，月の輪平遺跡で注目され，本編Ｉ章で，「Ｃ　特殊遺構」として記述された状況についてふれておこうと思う。

列挙された事例は大きく３種類を含んでいるが，①第７号住居址付近で発見された坩群一括と焼土塊の組み合せ　②第22号住居址上面で発見された土器群一括　③第１・２号住居址付近で発見された２基の石組み遺構である。加えて，④第25号住居址の南壁よりに土製勾玉と高杯の杯部

のみが発見された　⑤第59号住居址の床面上に坩群一括が発見された　等となる。

いま，こうした種々の状況を比較検討することはできないが，それでも，以上の事実から，古墳時代前期の集落および住居址内に，祭祀性を指摘し得る条件は以外に多いとできるかも知れない。五領期においては，石製模造品の出土以外その祭祀性を指摘する例は少いと理解される例が一般的かも知れないが，詳かにみると祭祀性を付与できる条件は種々みられるのかも知れない。

⑤　出土土器について

本遺跡群の土器類については，全体としてはかなりな量的まとまりがみられたが，そのセット関係ではやや不十分なものでしかなかった。

それでも，基本的には，各器種の詳細な検討のなかで，主体を占める土器群をṠ字状口縁台付甕のうちより新しいとされるA4・A5に小型高杯・小型器台等の小型精製土器が組み合わさる状況から，いわゆる大廓式土器の範疇のなかでもより新しい時期にあたるものと理解してみた。それを“月の輪新”と呼称してみたが，資料の圧倒的な量がこれに含まれることになる。

月の輪新にしがたいそれ以前の土器を，同様に“月の輪古”としてみたが，これはすでにṠ字状口縁台付甕の分析で明らかにされているように，欠山期に含め得るものと，大廓式のより古い時期とに分類したそれぞれ古Ⅰ・古Ⅱとした。とくに，月の輪平43号住居址で出土したṠ字状口縁台付甕A類は，三河以東で発見された初例にあたるもので，いわゆる定型化以前のものの伝播例として重要な意味をもつものといえる。

要するに，本遺跡群の土器のもつ意味は，大廓式土器のうちより新しい内容を示すものとしてよいものであった。　（植松）

2　月の輪遺跡群の発掘を終えて

「月の輪」という地名は、たぶん星山を北から南に流れる川に、東から岡が突き出し、この突き出した岡が月輪のように半円になっていることからつけられたものなのであろう。そうした地形の上には一般に遺跡があるものなのだろうか、戦後岡山県で発掘された遺跡に月の輪古墳の名が今でも印象的である。

星山の月の輪平には、早くから土器片の表面採集可能な地として知られていた。富士山を裾から見ることのできる眺望のいい所で、ここで採集される土器を用いて生活していた人々とは、どんな人たちであったのだろうかなど、かって好事家の間には関心のあったところであった。

この遺跡の年代であるが、土器等の形状や特質などから一定の推測は先にも述べてあるところであるから省略するとして、この遺跡はどのような地域の歴史の過程の中の一齣なのか、またそうした一齣から、更にどのような飛躍と発展が見られたのかは、それが単なる推測の域を出ないものであったとしても、興味のある点である。

私はこの遺跡と直接かかわるか否かは別として、次の二つのこの地における古代社会の出来事と関連させて考えないわけにはいかないように思っている。

その一つは、月の輪の近くに倭文神社のあることである。この倭文神社は10世紀の初頭におい

て編さんに着手され、その20年代に完成した延喜式の中に諸国の主要神社を調べあげた『神名帳』がある。この『神名帳』によると駿河国富士郡の主要な神社として、浅間神社、富知神社とともにその名が見られたことから、まさにこの地域きっての古い神社であることが知られるのである。しかも10世紀の調査の時突如として出現した神社でない事は明らかであるから、その成立はもっともっと古いものであったと思うのである。

倭文神社はしずり織りを業とする倭文部の祀る神であることは明らかであり、またこの部の発祥は渡来人（帰化人）であるということもよく知られていることである。

この倭文神社に隣接して大悟庵という寺がある。その神社と寺の中間の奥まった山の傾斜地には、毎年大きな布に十一面観音の画像を、お祭りしていることは有名で、この行事は途中何回かの盛衰はありつつも、とにかく今日に伝承されて来た注目すべき行事であって、大きな布、それは倭文部の人々の得意とする技術によってつくられたものであったと推測できることから、倭文部の居た頃からの行事の今日的に変型したものであったのかも知れないのである。

また、いま一つ注目されることは、日本書紀の伝える大生部多の事件である。大生部多の事件というのは、皇極天皇三年（644）富士河の河辺に大生部多が住んでいて、この大生部多は、蚕に似た虫を常世神だと言い、これを拝めば幸福がやって来るのだなどと説き、付近の人々を迷わしていたというのである。

この風聞をきいた秦造川勝は、大生部多はとんでもない事をする男だと言って征伐をしたというのである。なぜ川勝が大生部多をこらしめたのか、それにたぶん大生部多は秦川勝と同じ渡来人秦氏の系統に属する人であったからであろうと言われている。

ところで、その常世神信仰を言いふらし、民衆の人気を一時的にせよ集めることのできた大生部多はどこに住んでいたのか、即ち富士河辺というがそれはどこなのかということが疑問が起るのであるが、倭文神社、倭文部などの事実から大生部多は月の輪遺跡のあった付近に住んでいたであろうことは、論理的にも無理のない推測であると言えよう。

このような二つのこと、つまり倭文神社の存在と、それに関係があるかないかは別として大生部多の存在などは、事の如何にかかわらず中央においてもその存在が知られた事実であってみればこの地の文化的傾向を示すものの一つとして考えていいであろうと思うのである。

このような文化的傾向を示す歴史的事実の存在は、月の輪に住居を営み、きびしい自然と戦いながら、自らの生活の舞台の開拓につとめていた名もない多数の人々によって形成された文化の上に、どのような形で融合し、発展していったのかが、どうしても考えて見なくてはならない課題のように思えるのである。

不幸にして、そうした脈絡を理解する具体的資料をもたないで、その課題の解決はあきらめざるを得ないのであるが、いずれにしても月の輪の遺跡をつくった人々の文化は、やがてそこに移り住んで来たであろう渡来人の中に吸収されるか、または同化されつつ奈良から平安時代えのこの地の文化的発展えの方向性を決定するうえで顕著な役割を担っていた遺跡であったと思うのである。

（若林）

引用参考文献

愛知県教育委員会　1975　『環状２号線関係朝日遺跡群第１次調査報告』

赤澤威・植原和郎　1978　「長野県与助尾根遺跡の統計学的分析」　季刊人類学９－２

安達厚三　1969　「古墳時代溝出土の遺物」　奈良国立文化財研究所年報1969

安達厚三・木下正史　1974　「飛鳥地域出土の古式土師器」　考古学雑誌60－２

厚木市教育委員会　1978　『子ノ神』

池谷和三　1968　『静岡県遠江地方における中世蔵骨器の研究』　静岡県教育委員会

池谷和三・平野吾郎・山下晃　1977　『日明遺跡』　天竜市教育委員会

石神　怡　1977　「池上弥生ムラの変遷」　考古学研究23－４

石野博信　1975　「考古学から見た古代日本の住居」　大林太良編　『家』　日本古代文化の探究　社会思想社

石野博信　1977　「古墳時代の集落構成」　考古学研究23－４

市川富久・岩崎卓也　1971　「古墳時代の様相について」　更埴市教育委員会　『下条・灰塚』

一宮市　1967　『新編一宮市史・資料編２』

岩崎卓也　1963　「古式土師器考―長野県更埴市城の内遺跡出土品を中心として―」　考古学雑誌48－３

岩崎卓也　1973　「古式土師器再考―前期古墳出土の土師器をめぐって―」　東京教育大学文学部紀要・史学研究91

上野純司　1977　「南関東における古式土師式土器編年試論」　史館９

植松章八　1971　『富士宮市史』上巻第Ｉ章　富士宮市

植松章八他　1977　『滝戸遺跡発掘調査（第Ｉ次）概報』　富士宮市教育委員会

植松章八他　1978　『滝戸遺跡発掘調査（次II次）概報』　富士宮市教育委員会

大崎台遺跡発掘調査団　1973　『大崎台遺跡』

大塚初重　1961　「静岡県田方郡韮山村山木遺跡の土器」　小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成・資料編２』

大林太良　1971　「縄文時代の社会組織」　季刊人類学２－２

大林太良　1971　「先史社会組織復原の諸問題」　一橋論叢66－２

大参義一　1967　「Ｓ字状口縁土器考」　いちのみや考古13

大参義一　1968　「弥生式土器から土師器へ―東海地方西部の場合―」　名古屋大学文学部研究論集ＸＬVII〈史学16〉

大宮市役所　1968　『大宮市史第１巻』

岡田淳子・服部敬史　1971　『鞍骨山遺跡』　東京都八王子市谷野遺跡調査団

置田雅昭　1974　「大和における古式土師器の実態―天理市布留遺跡出土資料―」　古代文化26－２

岡部町教育委員会　1976　『水窪・新井遺跡の調査』

尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治　1968　『石田川』　石田川刊行会
小田原市教育委員会　1971　『小田原市諏訪の前遺跡』
小野真一　1958　『駿河湾地方の弥生文化』
小野真一　1963　「駿河矢崎遺跡調査略報―第1次および第2次調査―」　沼津女子高校考古館報3
小野真一　1964　「駿河矢崎遺跡第3次調査略報」　沼津女子高校考古館報4
小野真一　1964　「駿河湾地方における弥生終末への一考察」　立正考古23
小野真一・笹津備洋　1969　「沼津市大廓発見の住居址と土器」　歴史科学20
小野真一　1969　「東海地方東半の弥生文化(1)・(2)」　信濃21－4・5
小野真一　1970　「編年に関する考察」『目黒身』沼津市教育委員会
小野真一　1972　「駿豆地方における土師器の編年」　小田原考古学研究会会報5
小野真一　1972　『駿河小塚』＝静岡県における先土器文化の研究＝　芝川町教育委員会
小野真一　1975　『千居』　加藤学園考古学研究所
小野真一　1976　「入門講座弥生土器―中部・東海東部―」　考古学ジャーナル126・127・129
小野真一・秋本真澄・藪下浩・原茂光　1978　「北伊豆函南町向原遺跡発掘調査報告」　駿豆考古13
上総国分寺台遺跡調査団・千葉県市原市教育委員会　1976　『上総国分寺台発掘調査概要III』「I加茂遺跡C地点の調査」　「II台遺跡B地点の調査」
加藤修司　1978　「小形器台・小形丸底坩の出現をめぐる諸問題―南関東地方における住居址出土例から―」　物質文化29
金井塚良一　1967　「古代集落の構成」　歴史教育15－3
金井塚良一　1973　『大谷遺跡』
金子浩昌・中村恵次・市川勲　1959　「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」　古代33
上谷本第二遺跡発掘調査団　1971　『上谷本第二遺跡A地区・B地区発掘調査概報』
函南町教育委員会　1978『伊豆逓信病院敷地内遺跡調査報告書』
神原英郎　1977　「岡山県山陽町の弥生時代集落の構成」考古学研究23－4
菊地義次　1954　「南関東弥生式土器編年への一私見」　千葉県教育委員会　『安房勝山田子台遺跡』
鬼頭清明　1976　「八世紀の社会構成史的特質」　日本史研究172
木下正史　1978　「書評　橿原考古学研究編『繩向』」　考古学雑誌64－1
木村徳国　1975　「鏡の画とイエ」―建築にかかることばから―　『家』　日本古代文化の探究　社会思想社
桐原　健・御子柴泰正　1969　「長野県伊那市美篤笠原堂垣外遺跡調査概報」　信濃21－4
熊野正也　1974　「弥生時代集落構造の一考察」―ピット状遺構をもつ住居址を中心として―

史館 2
栗原文蔵・横川好富　1961　「埼玉県寄居町発見の古式土師器」　古代36
黒崎　直　1977　「歴史考古学における集落跡と都城研究」　歴史評論331
建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・静岡県長泉町　1976　『陣場上・平畦遺跡』　一般国道246号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・静岡県長泉町　1978　『西願寺遺跡（A地区）　長久保城址（二の丸）』
建設省天竜川上流工事事務所・長野県飯田市教育委員会　1976　『清水遺跡』
建設省沼津工事事務所・静岡県教育委員会・沼津市教育委員会　1971　『駿河広池』
考古学研究第24総会　1977　考古学研究24－1
考古学資料刊行会　1968　『番清水遺跡』
河野真知郎　1975　「初期農耕集落の解明」―ベット状遺構の再検討―　季刊Circum Pacific 1
甲元真之　1975　「弥生時代の社会」　『古代史発掘4　弥生時代』　講談社
小久保徹　1977　「弥生時代の大形住居について」―南関東地方の実態と諸様相―　『埼玉考古』第17号　埼玉考古学会
越田賢一郎　1977　「神之木台遺跡における弥生時代の遺構と遺物」　『調査研究集録第3冊』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
子ノ神遺跡調査団　1978　『子ノ神』　厚木市教育委員会
小林行雄　1938　「駿河湾地方」　森本六爾・小林行雄『弥生式土器聚成図録・正編』
小林行雄・杉原荘介　1968　『弥生式土器集成・本編2』
古墳時代研究会　1972　『千葉県市原市小田部古墳の調査』　古墳時代研究Ⅰ
近藤義郎　1959　「共同体と単位集団」　考古学研究6－1
埼玉県遺跡調査会　1970　『西台遺跡の発掘調査』　埼玉県遺跡調査会報告5
埼玉県遺跡調査会　1971　『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』　埼玉県遺跡調査会報告8
埼玉県遺跡調査会　1976　『弥藤吾新田遺跡発掘調査報告書』　埼玉県遺跡調査会報告29
埼玉県教育委員会　1974　『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』　埼玉県遺跡発掘調査報告書4
埼玉県教育委員会　1975　『日本住宅公団(川越・鶴ヶ島地区)埋蔵文化財発掘調査報告　鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
埼玉県教育委員会　1977　『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集
埼玉県教育委員会　1977　『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告　鴻池・武良内・高畑』　埼玉県遺跡調査報告書第11集

斎藤　忠　1978『墳墓』　日本史小百科(4)　近藤出版社
佐江戸遺跡調査会　1976　『宮原』　横浜市緑区佐江戸町における弥生・土師集落址の調査(下)
桜井市教育委員会　1976　『纒向』
佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会　1975　『臼井南』　千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書
佐々木達夫　1974　「古代村落の変遷過程」　原始古代社会研究会編　『原始古代社会研究』Ⅰ　校倉書房
佐原　真　1968　「畿内地方」　小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成・本編２』
佐原　真　1972　「1971年の考古学界の動向　弥生時代」　考古学ジャーナル68・74・76
佐原　真　1976　『弥生土器』　日本の美術125　至文堂
沢田大多郎　1967　「古墳発生前における社会」　考古学研究14－１
静岡県　1935　『静岡県史』　第１巻
静岡県教育委員会　1965　『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
静岡県教育委員会　1968　『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
静岡県教育委員会・韮山町教育委員会　1970　田方郡韮山町奈古谷遺跡緊急調査概報　静岡県文化財調査報告書第９集
静岡県考古学会　1978　「静岡における４～５世紀の墳墓について」　静岡県考古学会シンポジューム１
島田高校郷土研究部　1954　『白鬚遺跡調査報告』　大井川流域の文化２
清水市教育委員会　1971　『清水市尾羽廃寺・寺崎Ⅰ遺跡・山ノ鼻遺跡発掘調査概報』
下津谷達男　1965　「野田市堤台遺跡」　上代文化35
春林院古墳調査委員会　1966　『春林院古墳』
末永雅雄・小林行雄・中村春寿　1938　「大和に於ける土師器住居址の新例」　考古学９－10
末永雅雄　1941　「北葛城郡盤園村有井池出土弥生式土器」　奈良県史蹟名勝天然記念物調査会抄報２
杉崎　章　1953　『愛知県知多郡横須賀町柳ヶ坪貝塚』
杉並区教育委員会　1971　『都立和田堀公園・大宮遺跡・下高井戸塚山遺跡発掘調査報告書』
杉原荘介　1940　「武蔵前野町遺跡調査概報」　考古学11－１
杉原荘介　1958　『静岡県静岡市敷地登呂遺跡の土器』　小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成・資料編Ⅰ』
杉原荘介　1961　「東京都板橋区前野町遺跡の土器」　小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成・資料編２』
杉原荘介　1971　「五領遺跡出土の土器」　杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成・本編１』
逗子市教育委員会　1975　『持田遺跡発掘調査報告（本文篇）』

逗子市教育委員会　1975　『持田遺跡発掘調査報告（図録篇）』
瀬川裕一郎・山内昭二・小野真一　1978　「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」　沼津市歴史民俗資料館紀要２
関川尚功　1976　「纒向遺跡の古式土師器―纒向１～４式の設定―」　桜井市教育委員会『纒向』
関根孝夫　1974　「遺物についての考察（Ⅲ群土器）」　松戸市教育委員会『諏訪原遺跡』
世田谷区教育委員会　1970　『世田谷区立総合運動場内遺跡調査報告（第１・２次調査）』
世田谷区教育委員会　1974　『世田谷区立総合運動場内遺跡調査報告（第３・４次調査）』
そとごう遺跡調査会　1971　『そとごう』
曾野寿彦　1954　「遺物―土器―」　日本考古学協会編『登呂（本篇）』
田中新史　1977　「市原市神門４号墳とその系譜」　古代63
田中　琢　1965　「布留式以前」　考古学研究12－２
田中義昭　1976　「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」―考古学研究会第21回総会研究報告―　考古学研究22－３
田辺昭三・田中琢　1977　『日本陶磁全集２　弥生・土師器』
玉口時雄　1972　「古式土師器小考―福島県いわき市原高野遺跡調査報告―」　東洋大学文学部紀要25
千葉県都市公社・文化財事務所　1974　『市原市菊間遺跡』
千葉県都市公社・文化財事務所　1975　『阿玉台北遺跡』
千葉県文化財センター　1977　『東寺山石神遺跡』
千葉県文化財センター　1978　『佐倉市飯合作遺跡』
千葉県文化財センター　1978　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』
中央高速道八王子地区調査団　1973　『宇津木遺跡とその周辺―方形周溝墓初発見の遺跡―』考古学資料刊行会
月の輪遺跡発掘調査団　1972　『月の輪平・月の輪下・王藤内の塚・南部谷戸遺跡の概要』
都出比呂志　1974　「古墳出現前夜の集団関係―淀川水系を中心に―」　考古学研究20－４
都出比呂志　1975　「竪穴式住居の周堤と壁体」　考古学研究22－２
都出比呂志　1975　「家とムラ」『日本的生活の母胎』第５章　日本生活文化史１　河出書房新社
都出比呂志　1977　「原始」　『日本歴史26』　別巻３　岩波書店
坪井清足　1956　『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』
津屋弘逵　1964　「富士山についての証言―山の生立ちと地質学的背景」　『科学朝日』８
東京西線及び八王子変電所遺跡調査会　1974　『平山橋遺跡』
鳥羽市教育委員会　1972　『おばたけ遺跡発掘調査報告―第４次―』　鳥羽市埋蔵文化財調査報告２
中井貞夫　1973　「古墳時代後期の集落」　考古学研究20－１

日本考古学協会編　1969　「東京都八王子市宇津木遺跡」『日本考古学年報17』
日本考古学協会編　1949　『登呂（前篇）』
日本考古学協会編　1954　『登呂（本篇）』
日本道路公団・埼玉県遺跡調査会　1972　『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書II』
埼玉県遺跡調査会報告14
韮山町教育委員会　1969　『山木遺跡第２次調査概報』
韮山町教育委員会　1972　『田方郡韮山町神崎遺跡緊急調査概報』静岡県文化財調査報告書第11集
韮山町教育委員会　1976　『山木遺跡第３次調査概報』
韮山町教育委員会　1977　『山木遺跡第４次調査概報』
韮山村　1962　『韮山村山木遺跡』
沼津市教育委員会　1970　『目黒身』
沼津市教育委員会　1970　『駿河瀬戸川』
沼津市教育委員会　1975　『藤井原遺跡発掘調査概報』
沼津市教育委員会　1976　『藤井原遺跡第２次発掘調査概報』
沼津市教育委員会　1977　『藤井原遺跡第３次発掘調査概報』
沼津市教育委員会　1978　『藤井原遺跡発掘調査報告書Ｉ（遺構篇）』
野田市郷土博物館　1959　『野田市三ッ堀遺跡』　野田市文化財調査報告１
橋本　正　1976　「竪穴住居の分類と系譜」考古学研究23－３
八王子市中田遺跡調査会　1968　『八王子中田遺跡・資料篇III』
八王子市谷野遺跡調査団　1971　『鞍骨山遺跡』
八王子市椚田遺跡調査会　1977　『椚田遺跡群―1976年度調査概報―』
服部敬史　1978　「関東地方における古墳時代後期の集落構成」　考古学研究23－４
原口正三　1969　「大阪府松原市上田町遺跡の調査」　大阪府立島上高校研究紀要３
原口正三　1977　「古代・中世の集落」　考古学研究23－４
原口正三　1977　「考古学からみた古代・中世の集落」　日本史研究176
久永春男　1955　「各地域の弥生式土器・東海」　杉原荘介編『日本考古学講座４』
平野吾郎・佐藤達雄　1978　『日詰遺跡（第Ⅳ次発掘調査概報）』　南伊豆町教育委員会
広瀬和雄　1977　「古墳時代の集落型」―西日本を中心として―
藤枝東高校郷土研究部　1956　「下藪田遺跡発掘報告」　釧７・８合併号
富士市教育委員会　1977　『天間代山遺跡』
富士市教育委員会　1979　『天間沢遺跡第７次概報（Ｆ地区）発掘調査概報』
富士宮市　1971　『富士宮市史』上巻
富士宮市教育委員会　1977　『滝戸遺跡発掘調査（第Ｉ次）概報』
富士宮市教育委員会　1978　『滝戸遺跡発掘調査（第II次）概報』
藤森栄一　1939　「信濃下蟹河原における土師器の一様式」　考古学10－11

ふれいく同人会　1971　「水野正好氏の縄文時代集落論批判」　ふれいく創刊号
房総考古資料刊行会　1974　『市原市菊間遺跡』
房総考古資料刊行会　1974　『木更津市請西遺跡群予備調査概報』
房総考古資料刊行会　1975　『阿玉台北遺跡』
舞阪町教育委員会　1972　『浜名湖弁天島海底遺跡発掘調査概報』
町田　洋　1964「Tephrochronology による富士火山とその周辺地域の発達史―第四紀末について―」　地学雑誌73巻５・６号
松戸市教育委員会　1963　『陳ヶ前貝塚・上本郷長者屋敷遺跡・中和倉寒風遺跡・竹ヶ花古墳』　松戸市文化財調査報告１
松戸市教育委員会　1974　『諏訪原遺跡』　松戸市文化財調査報告５
三木文雄・関根顕英・岩崎卓也　1972　「栃木県駒形大塚古墳出土の土師器」　大塚考古10
水野正好　1969　「縄文時代集落研究への基礎的操作」　古代文化21－３・４
水野正好　1970　「なぜ縄文時代集落論は必要なのか」　歴史教育18－３
南伊豆町教育委員会　1978　『日詰遺跡　第II次～第Ⅳ次発掘調査概報』
南伊豆町教育委員会　1979　『日詰遺跡　第Ⅴ次発掘調査概報』
向坂鋼二　1959　「遠江における古式土師器」　考古学手帖８
望月董弘・池谷和三　1969　『遠江宗行卿塚の発掘調査』　金谷町教育委員会
本村豪章　1974　「相模真土大塚山古墳の再検討」　考古学雑誌60－１
森田　悌　1977　「八，九世紀の村落」　信濃29－６
森本六爾・小林行雄　1938　『弥生式土器聚成図録・正篇』
山梨県教育委員会　1974　『京原』
湯川悦夫・加納俊介　1972　「南関東出土の東海系土器とその問題」　小田原考古学研究会会報５
湯川悦夫・加納俊介　1976　「古式土師器の研究Ⅰ―東日本における様相を中心として―」　小田原考古学研究会会報７
横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会　1968　『昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書，朝光寺原Ａ地区遺跡第１次発掘調査略報』
横浜市埋蔵文化調査委員会　1975　『歳勝土遺跡』　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅴ
立正大学文学部考古学研究室　1971　『神明上遺跡群Ⅰ』
和島誠一・田中義昭　1966　「住居と集落」　和島誠一編『日本の考古学』III　河出書房
和島誠一・金井塚良一　1966　「集落と共同体」　近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学』III河出書房
伊東市教育委員会　1962　「内野町市立幼稚園第３分園園庭遺跡」『伊東市史』資料編

月の輪遺跡発掘調査団・協力者名簿

調査団長　若林淳之　（静岡大学教授・現静岡大学教育学部長）

調査員（主任）　中野国雄　（田方郡修善寺町立修善寺中学校教諭・現駿東郡長泉町立長泉中学校教諭）

（主任）　植松章八　（静岡県立吉原高等学校教諭・現静岡県教育委員会文化課指導主事）

（地理）　塩川隆司　（富士宮市立第三中学校長・現富士宮市教育長）

野村昭光　（静岡県文化財保護指導員）

佐藤政次　（富士市立吉原第三中学校教諭・現富士市教育委員会指導主事）

調査補助員　平林将信（現富士市教育委員会）・湯川悦夫（現神奈川県立藤沢高等学校教諭）・加納俊介（現筑波大学大学院博士課程）・馬飼野行雄（現富士宮市教育委員会）・渡井一信（現富士宮市教育委員会）・渡辺康弘（現大阪外語大学）・藤田仁・永井惣一郎・羽畑和義・大川裕己・室伏勝利・森田義治・山本伸二郎・平川昭夫・斉藤嘉久・太田勝久・山田均・小山諭・菅沼燈生・松坂正文・藤野義男・市川富久・立木修・呉地初美・鍵和田篤子・三輪恵子・幡野博之・亀山みよし・渡辺光乃・窪田陽子・甲田友子・鍋島美規・石川寿彦

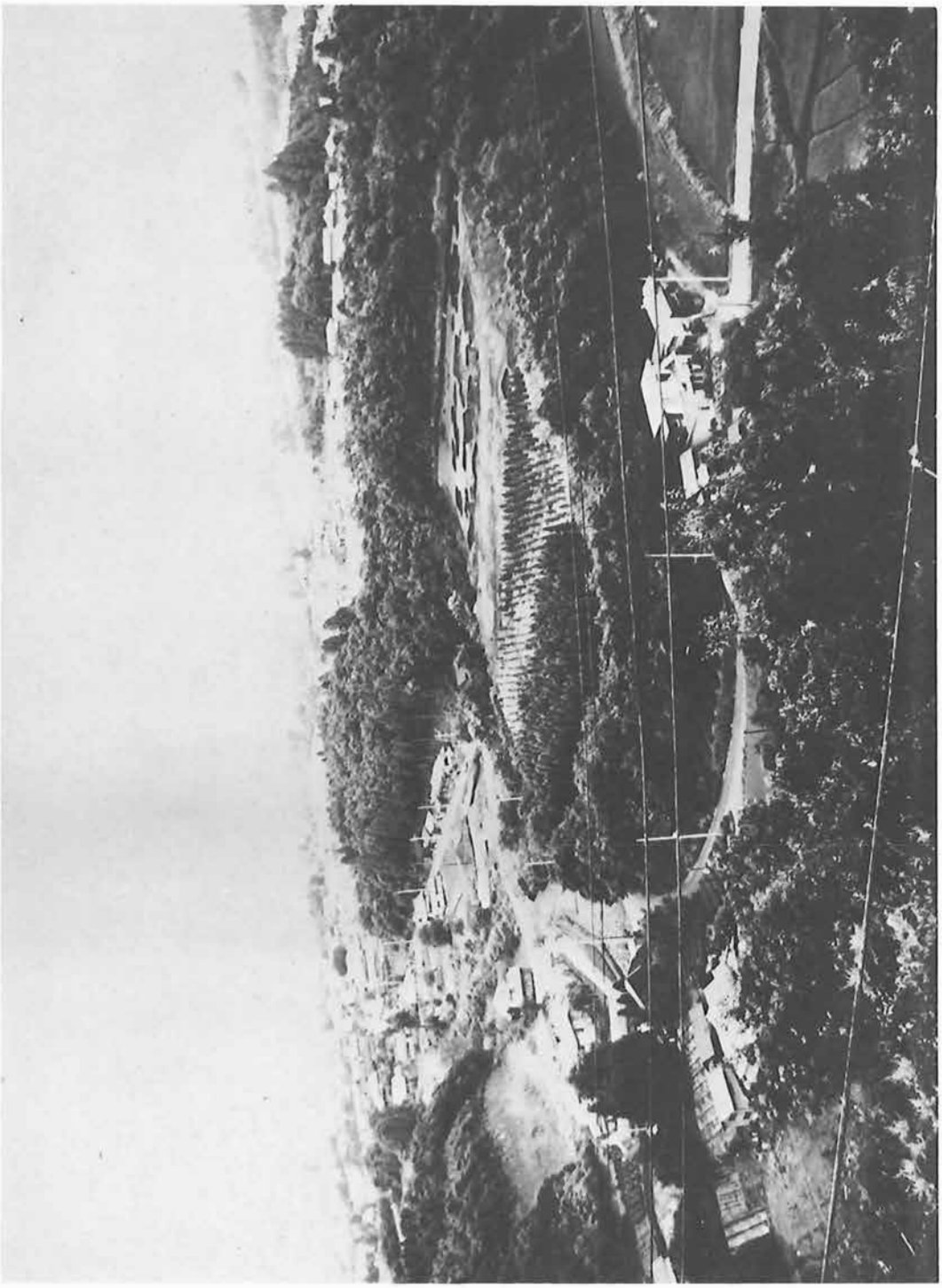
協力者　安達厚三・岩崎卓也・大参義一・木下正史・関根孝夫・小幡幸敬・中村友明・山川安人・秋本真澄・鈴木宏子・竹沢二成・北村欽哉・山田広道・小杉達・高橋正久・末富千橿・浅岡芳郎・友野博

県立富士宮東高等学校郷土研究部・県立富士宮北高等学校郷土研究部・県立富士宮農業高等学校郷土研究部・県立吉原高等学校社会部・県立吉原工業高等学校郷土研究部・県立沼津東高等学校郷土研究部・沼津女子高等学校（現加藤学園高等学校）郷土研究部・日本大学三島高等学校郷土部・県立島田商業高等学校郷土研究部・富士宮市内各小・中学校社会科教員・星山区

事務局　富士宮市教育委員会社会教育課

図　版

図版第１　月の輪平遺跡(1)



A　遠景

図版第２　月の輪平遺跡(2)

A　調査前景(南Ｂ．Ｍより)

B　調査前景(南東より)

図版第３　月の輪平遺跡(3)

A　完掘全景(南中央より)

B　完掘全景(南中央より)

図版第４　月の輪平遺跡(4)

A　第Ｉ号住居址完掘

B　第Ｉ号住居址遺物出土状況－Ｉ

図版第５　月の輪平遺跡(5)

A　第Ⅰ号住居址遺物出土状況－２

B　第Ⅰ号住居址遺物出土状況－３

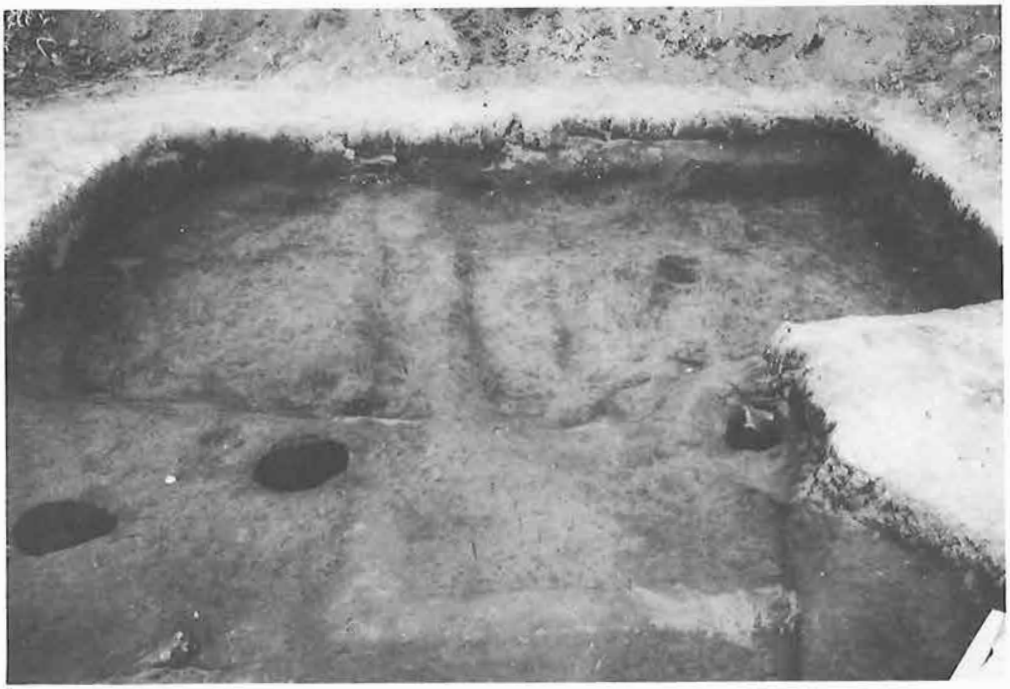
図版第 6　月の輪平遺跡(6)

A　第2.3号住居址完掘

B　第 2 号住居址完掘

図版第７　月の輪平遺跡(7)

A　第4.5号住居址床面



B　第4.5号住居址掘り方

図版第 8　月の輪平遺跡(8)

A　第7.11.23号住居址床面

B　第7.11.13.23号住居址完掘

図版第９　月の輪平遺跡(9)

A　第4.5.7.11.23号住居址床面

B　第4.5.7.11号住居址完掘

図版第10　月の輪平遺跡(10)

A　第8.9号住居址完掘

B　第８号住居址土器出土状況

図版第11　月の輪平遺跡(II)

A　第8号住居址張り出しピット

B　第9号住居址張り出しピット

図版第12　月の輪平遺跡(12)

A　第12号住居址完掘

B　第13号住居址床面

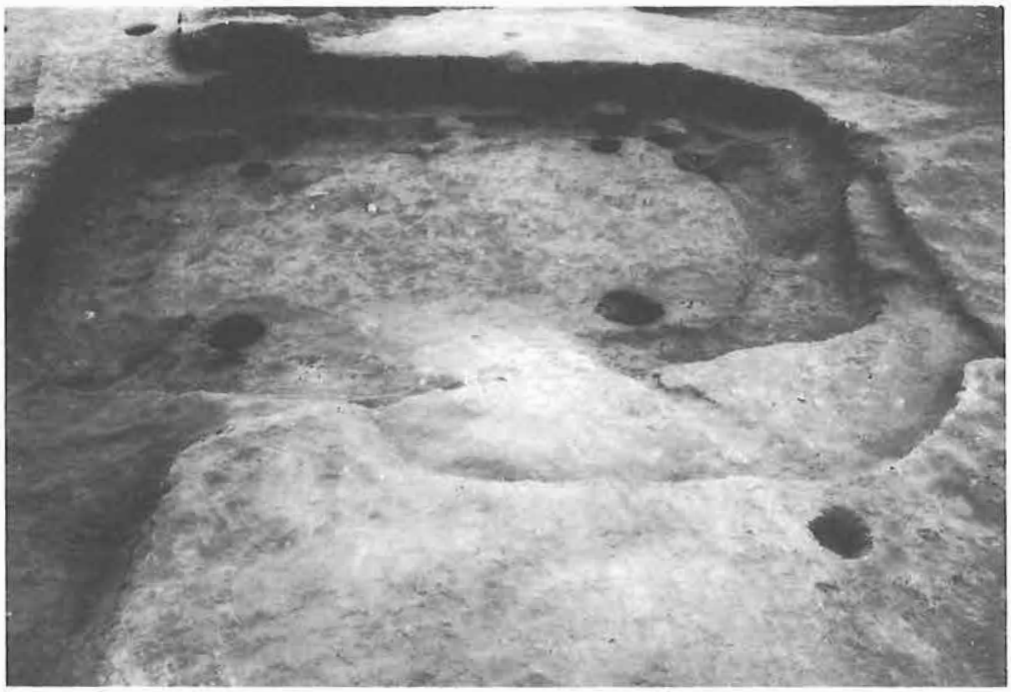
図版第13　月の輪平遺跡(13)

A　第13号住居址掘り方

B　第13号住居址内ピット

図版第14　月の輪平遺跡(14)

A　第15．24号住居址床面



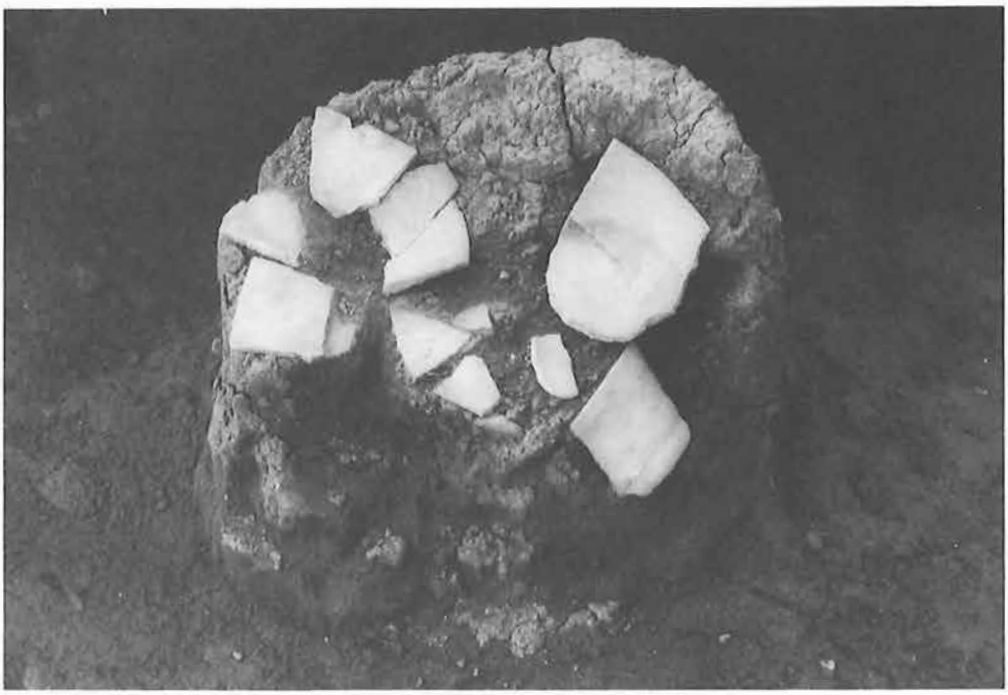
B　第15号住居址掘り方

図版第15　月の輪平遺跡(15)

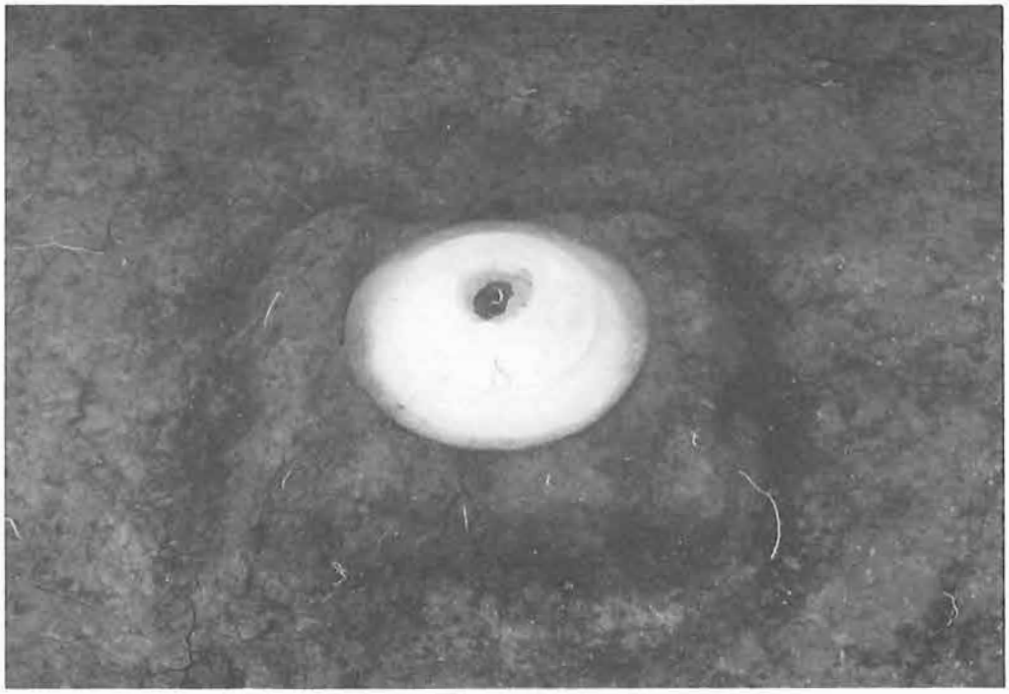
A　第17号住居址床面

B　第17号住居址掘り方

図版第16　月の輪平遺跡(16)



A　第17号住居址出土小型丸底土器



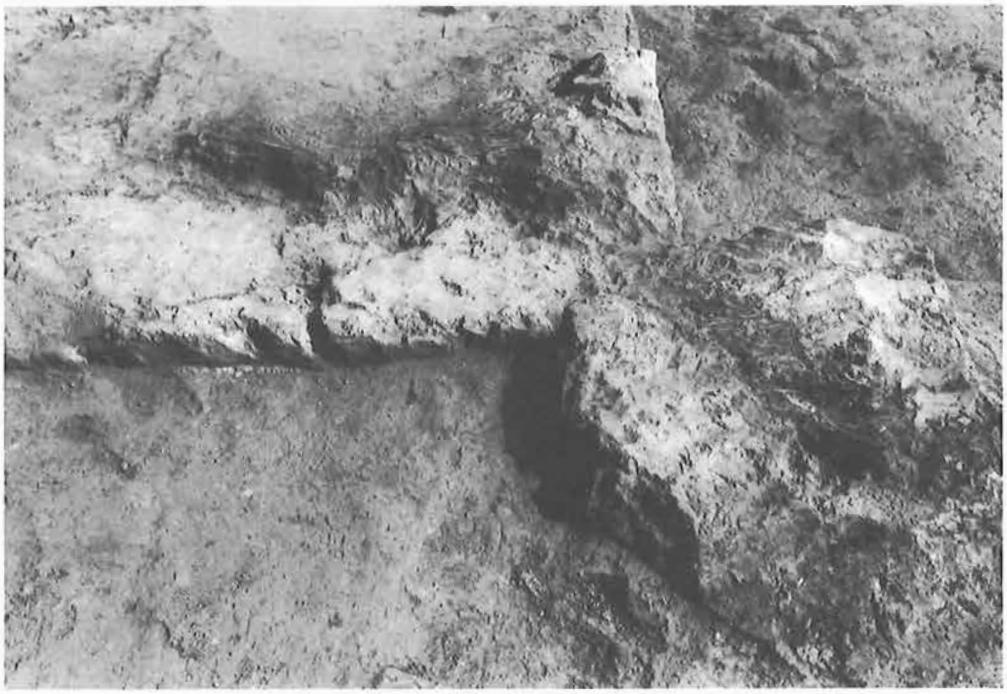
B　第17号住居址出土高杯片

図版第17　月の輪平遺跡(17)

A　第18号住居址床面，および炭化材出土状況

B　第18号住居址半掘状況

図版第18　月の輪平遺跡(18)

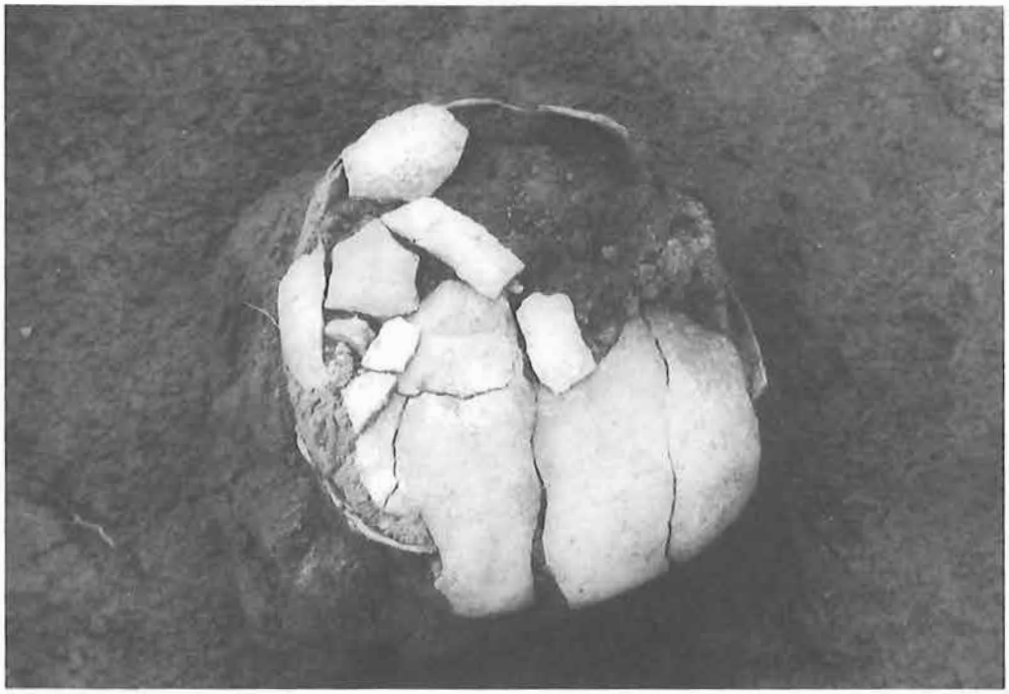


A　第18号住居址炭化材出土状況－1

B　第18号住居址炭化材出土状況－2

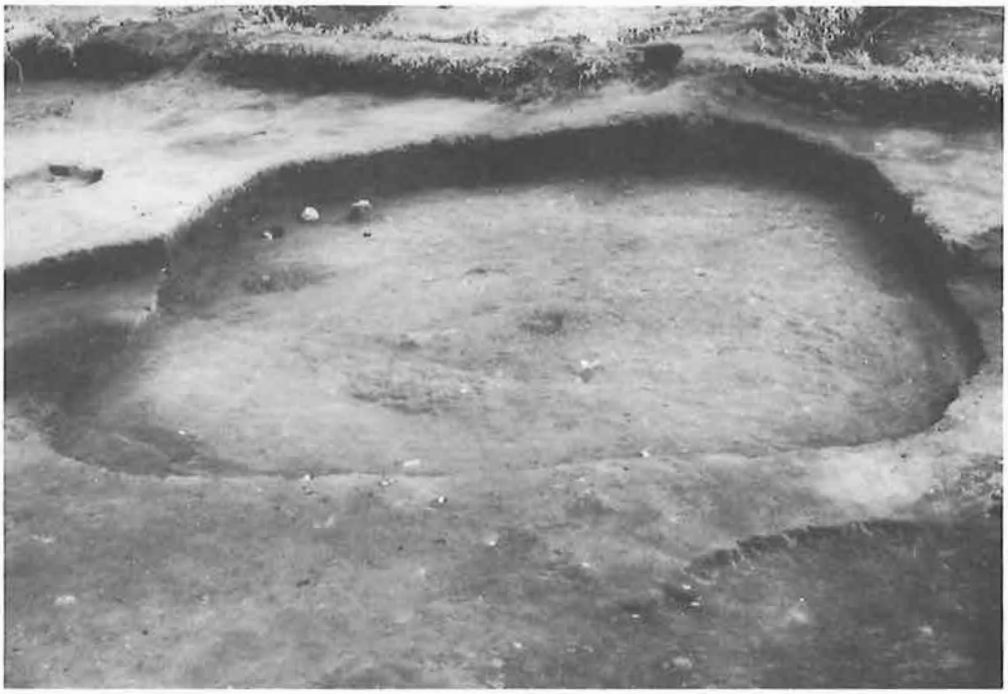
図版第19　月の輪平遺跡(19)

A　第18号住居址土器出土状況－1

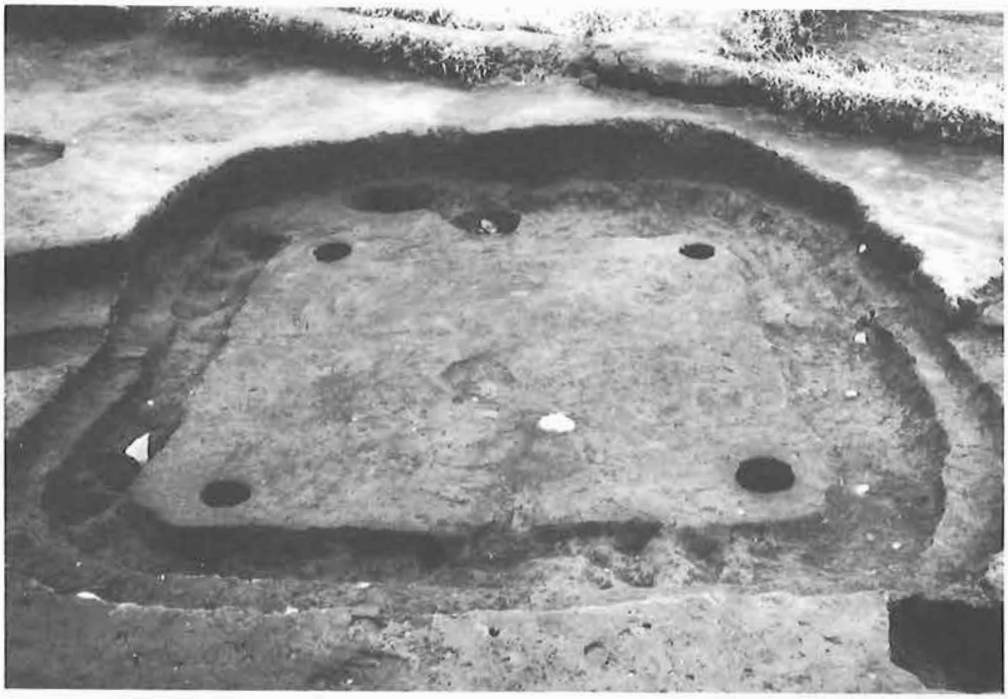


B　第18号住居址土器出土状況－2

図版第20　月の輪平遺跡(20)



A　第20号住居址床面



B　第20号住居址掘り方

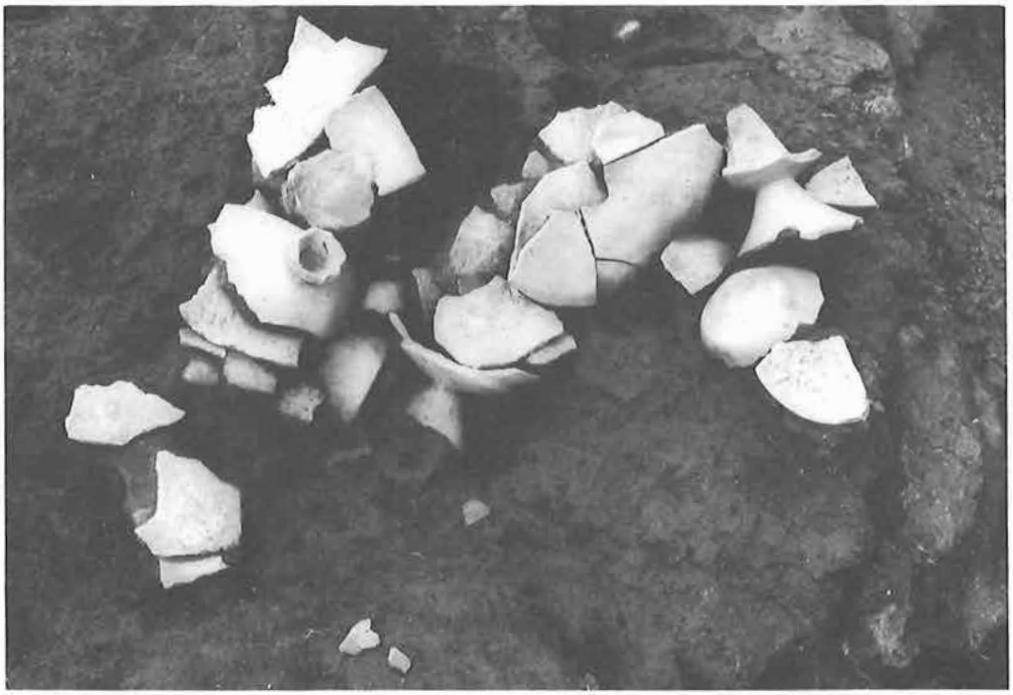
図版第21　月の輪平遺跡(21)

A　第22号住居址床面

B　第22号住居址掘り方

図版第22　月の輪平遺跡(22)

A　第22号住居址内柱穴群



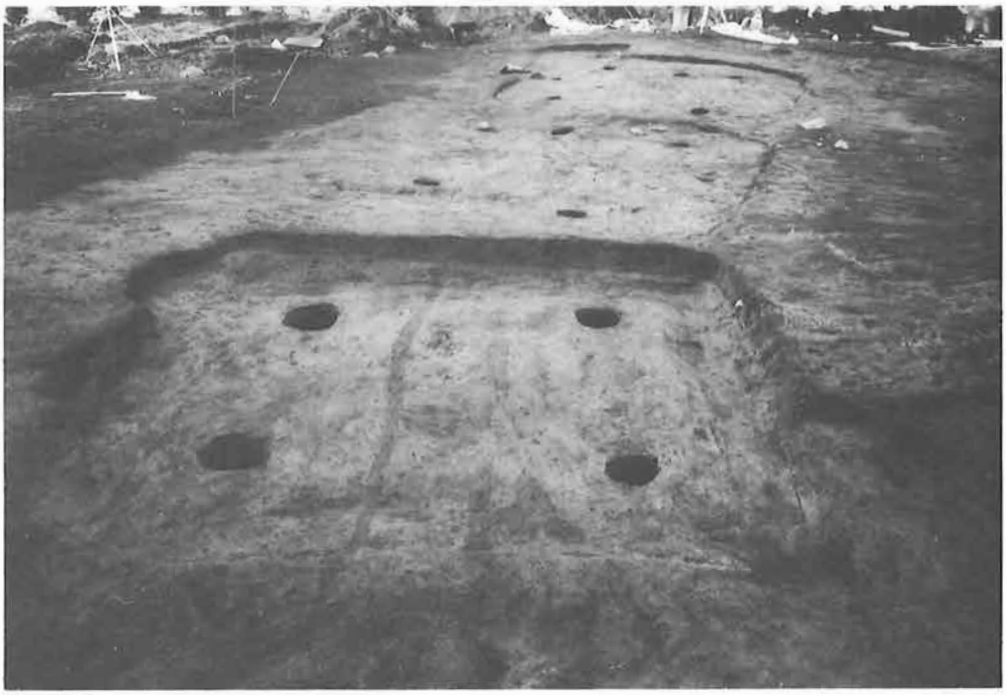
B　第22号住居址上層土器出土状況

図版第23　月の輪平遺跡(23)

A　第23号住居址完掘

B　第26号住居址完掘

図版第24　月の輪平遺跡(24)



A　第26.33.35.36号住居址掘り方

B　第32号住居址掘り方

図版第25　月の輪平遺跡(25)

A　第33号住居址床面，および焼土出土状況

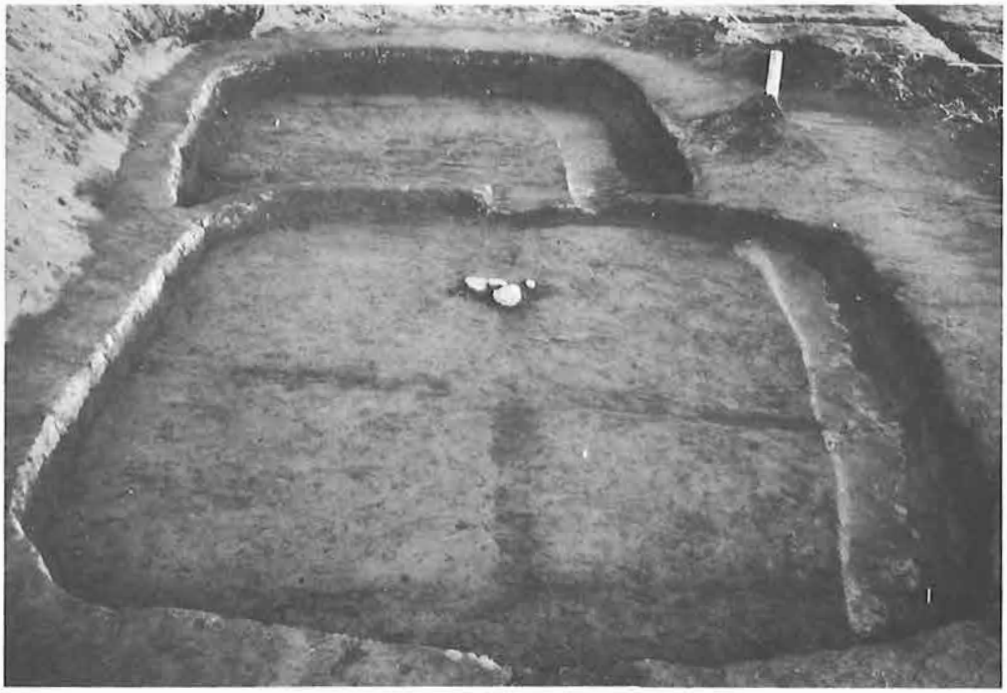
B　第33号住居址完掘

図版第26　月の輪平遺跡(26)

A　第35.36号住居址完掘

B　第37.38.39号住居址完掘

図版第27　月の輪平遺跡(27)



A　第40.41号住居址床面

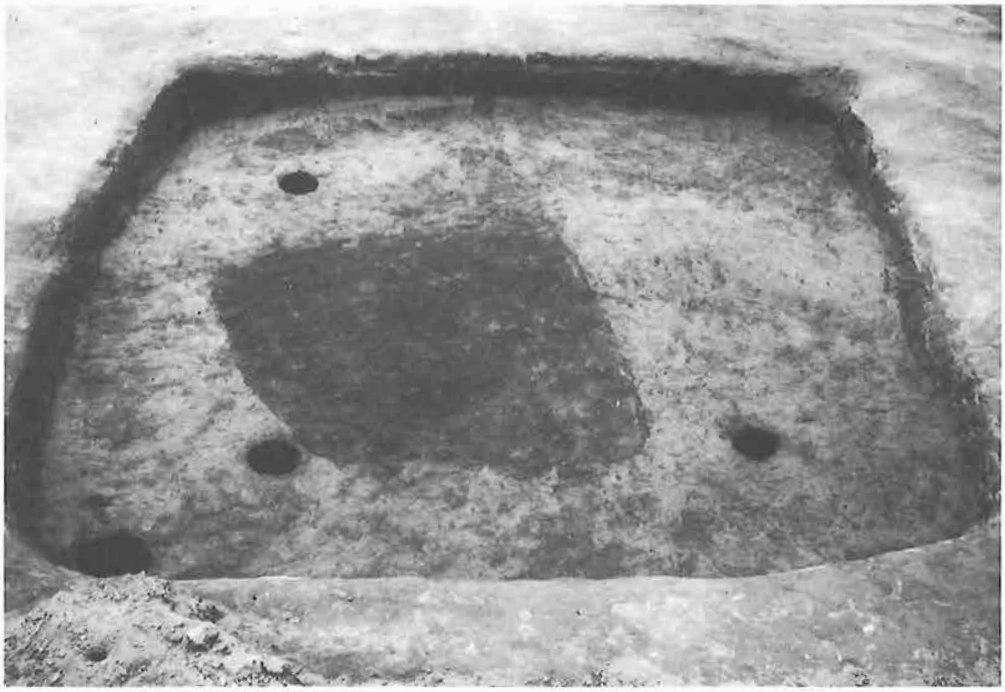
B　第40.41号住居址掘り方

図版第28　月の輪平遺跡(28)

A　第43号住居址床面

B　第43号住居址掘り方

図版第29　月の輪平遺跡(29)



A　第45号住居址完掘(中央部第45号下住居址)

B　第46.52号住居址完掘

図版第30　月の輪平遺跡(30)

A　第46.52.53号住居址完掘

B　第51.54.55号住居址完掘

図版第31　月の輪平遺跡(31)

A　第47号住居址床面

B　第47号住居址掘り方

図版第32　月の輪平遺跡(32)

A　第48～50.67.68号住居址床面

B　第48～50.67.68号住居址掘り方

図版第33　月の輪平遺跡(33)

A　第48号住居址土器出土状況

B　第42.43.47.48号住居址完掘

図版第34　月の輪平遺跡(34)

A　第56号住居址床面

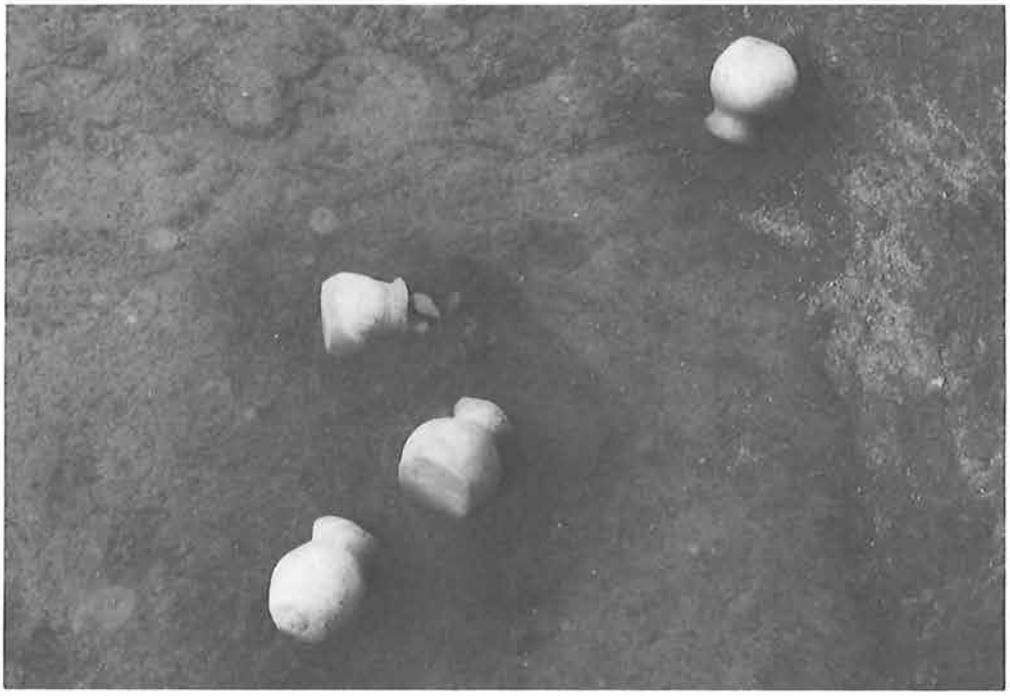
B　第56号住居址土器出土状況

図版第35　月の輪平遺跡(35)

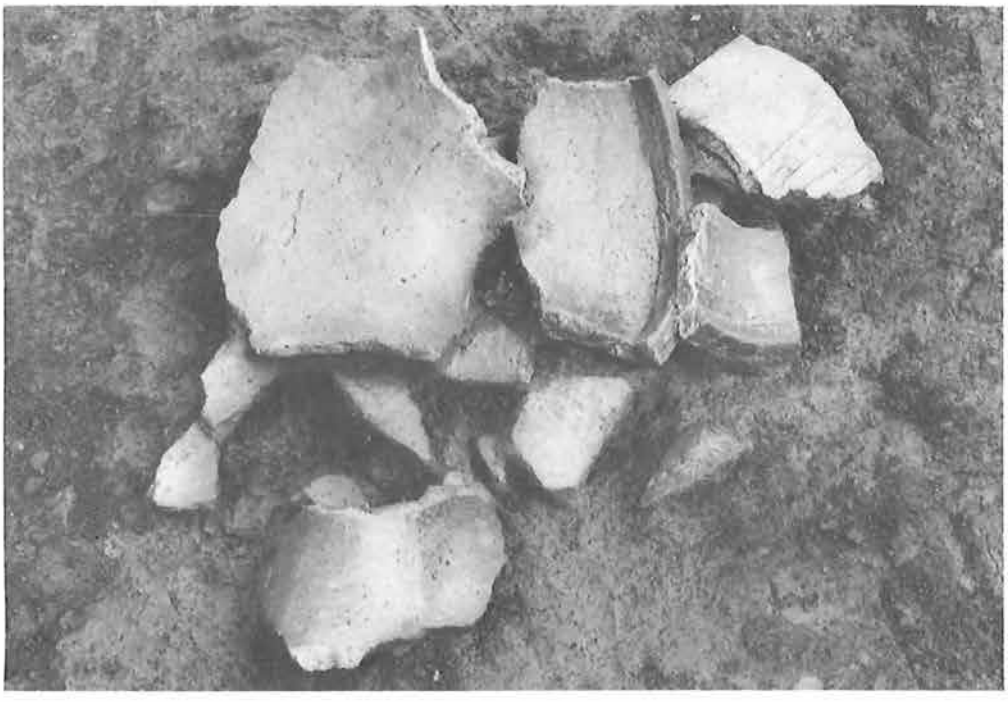
A　第56.57.59.60.61号住居址床面

B　第56.57.59.60.61号住居址掘り方

図版第36　月の輪平遺跡(36)



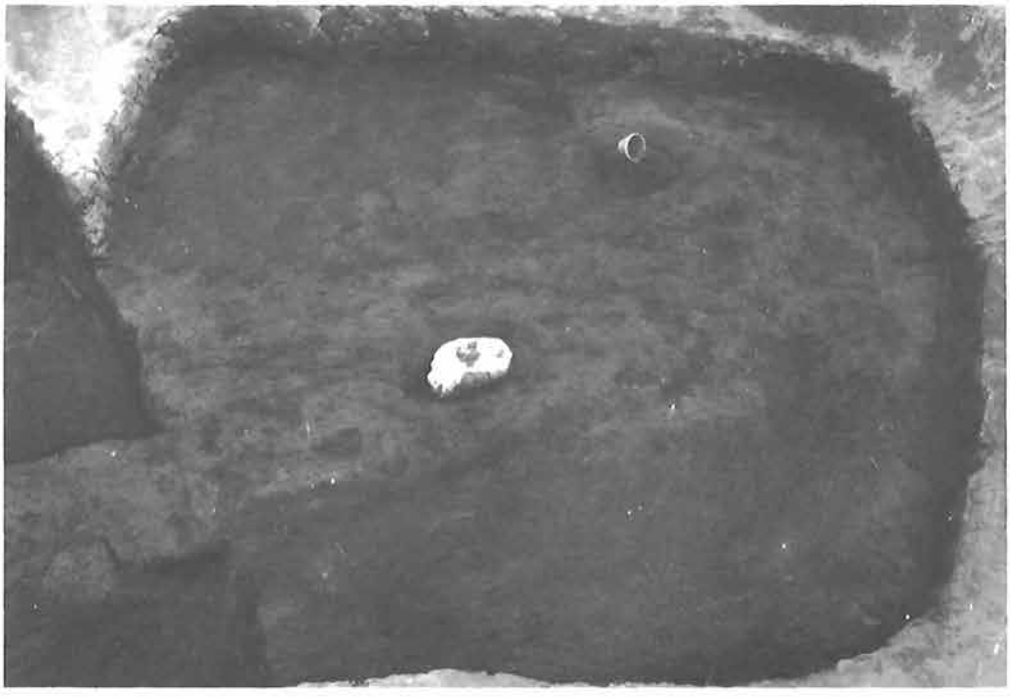
A　第57号住居址出土坩群



B　第59号住居址出土大型壺

図版第37　月の輪平遺跡(37)

A　第60号住居址床面



B　第61号住居址床面

図版第38　月の輪平遺跡(38)

A　第62号住居址焼土，炭化材出土状況

B　第62号住居址床面

図版第39　月の輪平遺跡(39)

A　第62号住居址掘り方

B　第62号住居址土器出土状況

図版第40　月の輪平遺跡(40)

A　第63号住居址床面

B　第64号住居址床面

図版第41　月の輪平遺跡(41)

A　第65号住居址床面

B　第66号住居址床面

図版第42　月の輪平遺跡(42)

A　第66号住居址掘り方

B　第69号住居址床面，および土器出土状況

図版第43　月の輪平遺跡(43)

A　第69号住居址掘り方

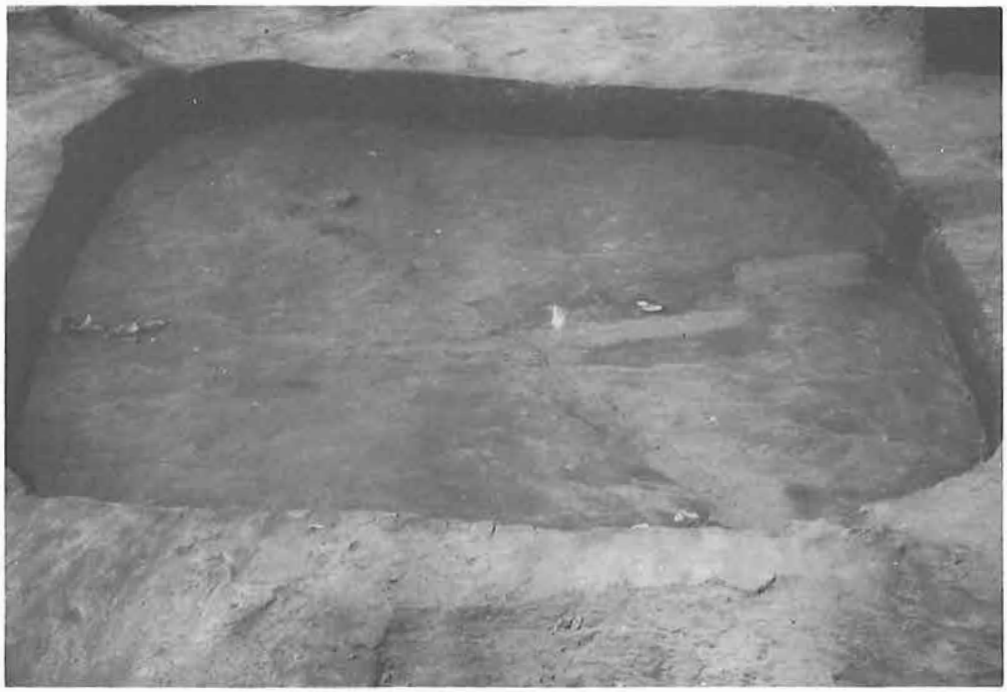
B　第69号住居址土器出土状況

図版第44　月の輪平遺跡(44)

A　第70号住居址掘り方

B　第71号住居址床面

図版第45　月の輪平遺跡(45)



A　第72号住居址床面

B　第72号住居址掘り方

図版第46　月の輪平遺跡(46)

A　第73号住居址床面

B　第73号住居址土器出土状況

図版第47　月の輪平遺跡(47)

A　第75号住居址床面

B　第75号住居址掘り方，第78号住居址床面

図版第48　月の輪平遺跡(48)

A　第76.77号住居址床面

B　第76.77号住居址掘り方

図版第49　月の輪平遺跡(49)

A　第79～91号住居址床面

B　第79～91号住居址掘り方

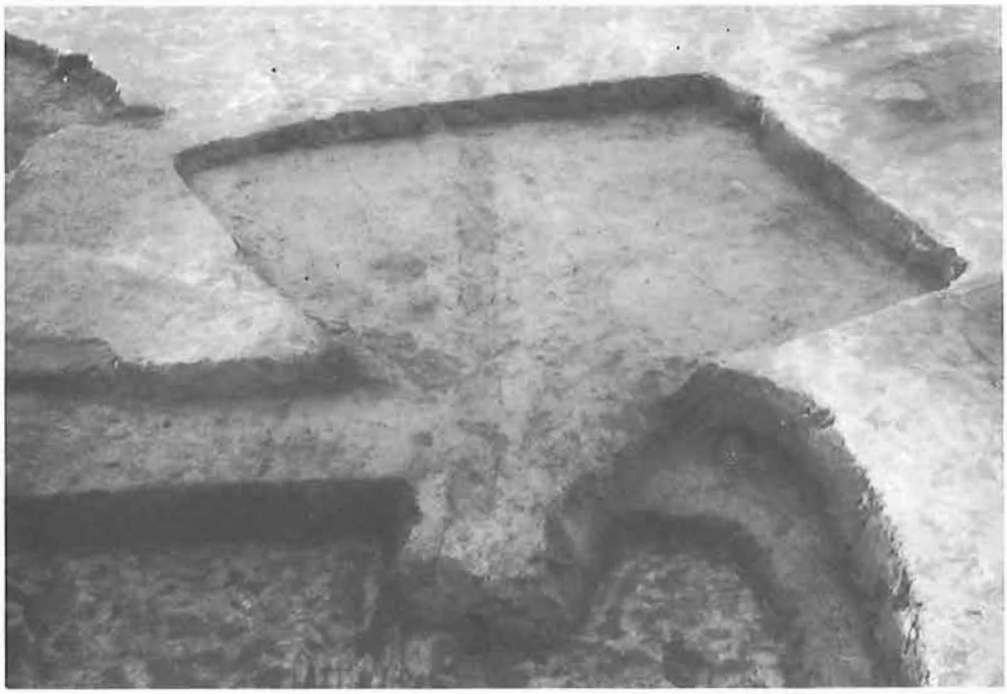
図版第50　月の輪平遺跡(50)

A　第79.81号住居址床面

B　第83号住居址床面

図版第51　月の輪平遺跡(51)

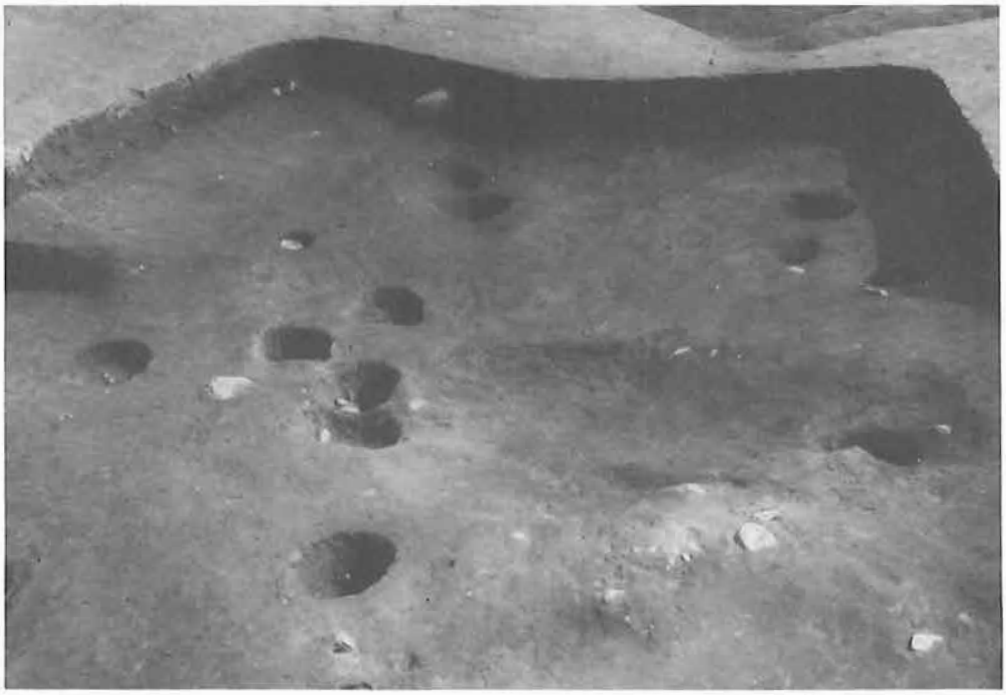
A　第83.84.90号住居址掘り方



B　第84号住居址床面

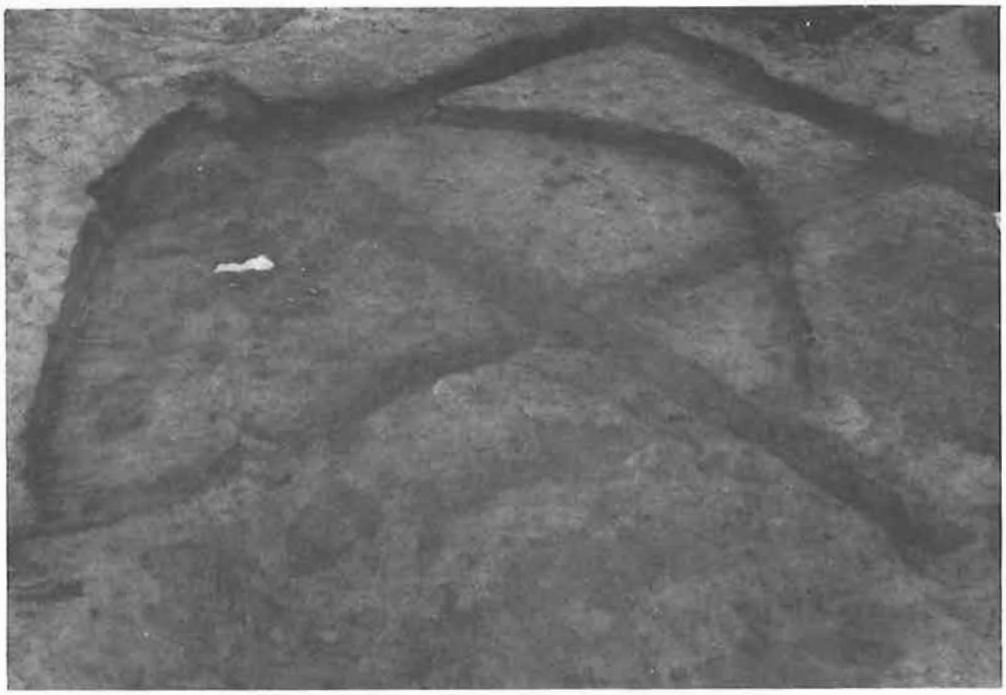
図版第52　月の輪平遺跡(52)

A　第84.85.86号住居址掘り方

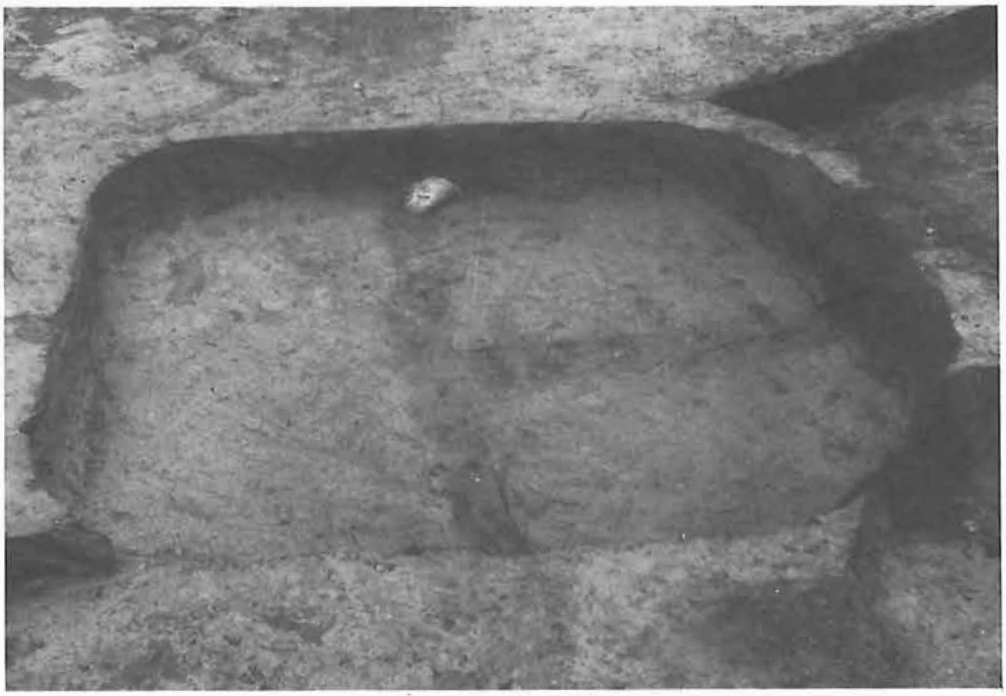


B　第87.88号住居址掘り方

図版第53　月の輪平遺跡(53)



A　第86号住居址床面



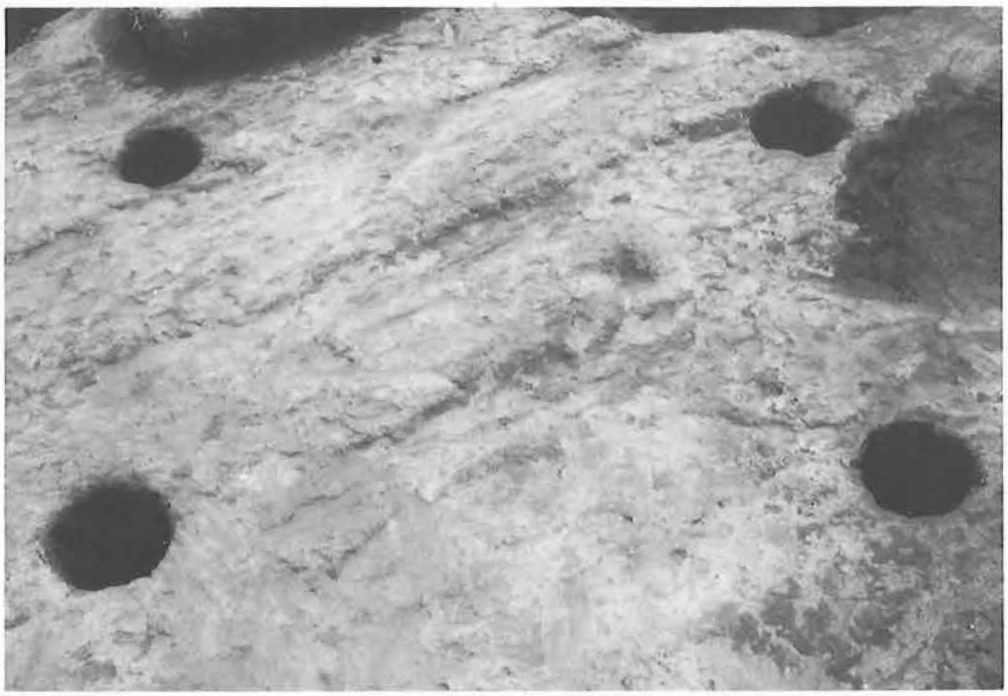
B　第87号住居址床面

図版第54　月の輪平遺跡(54)

A　第89号住居址床面

B　第89号住居址掘り方

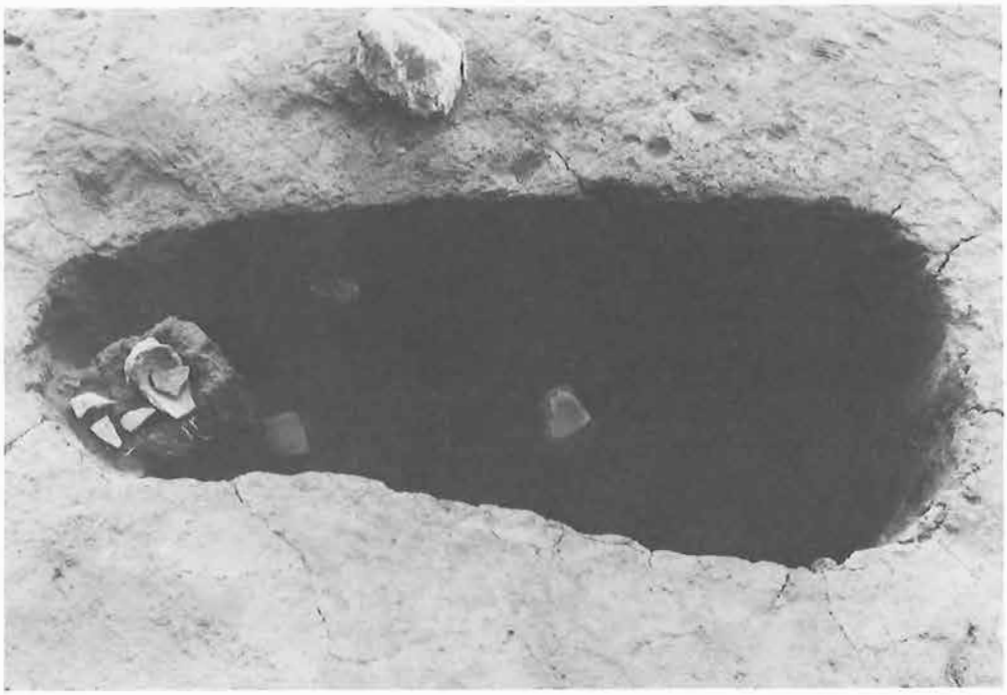
図版第55　月の輪平遺跡(55)



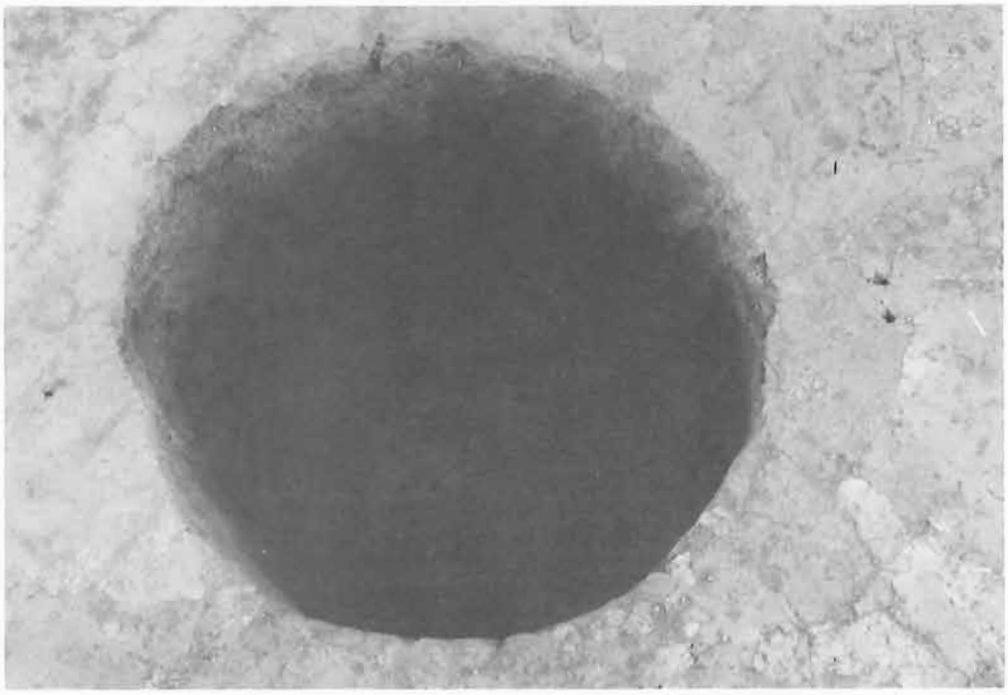
A　掘立柱建物址（No.－Ⅰ）

B　東端部ピット群

図版第56　月の輪平遺跡(56)

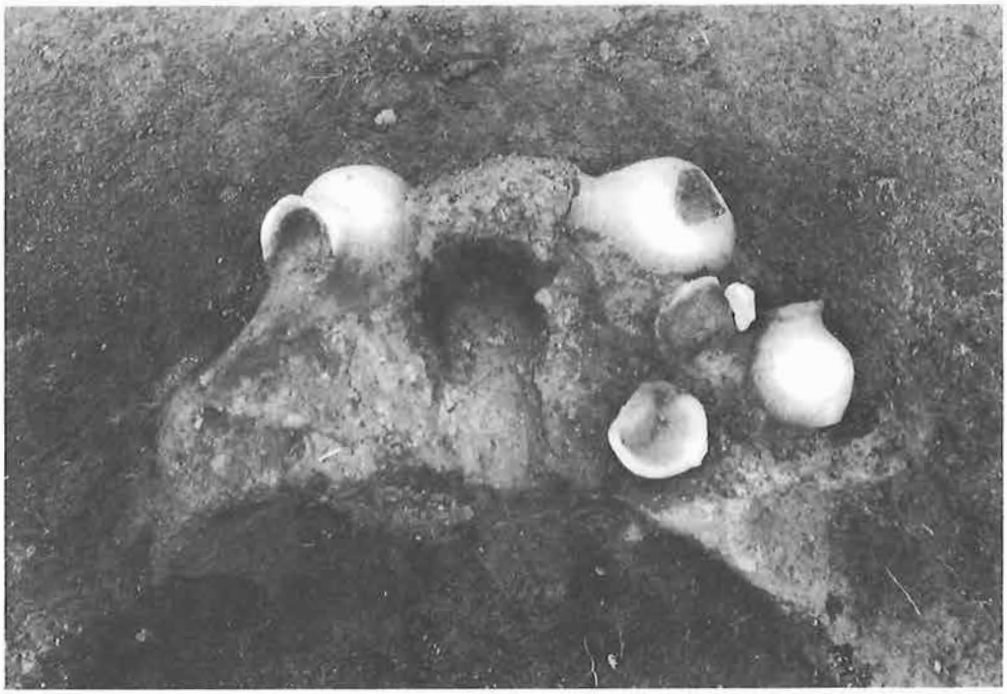


A　東端部ピット

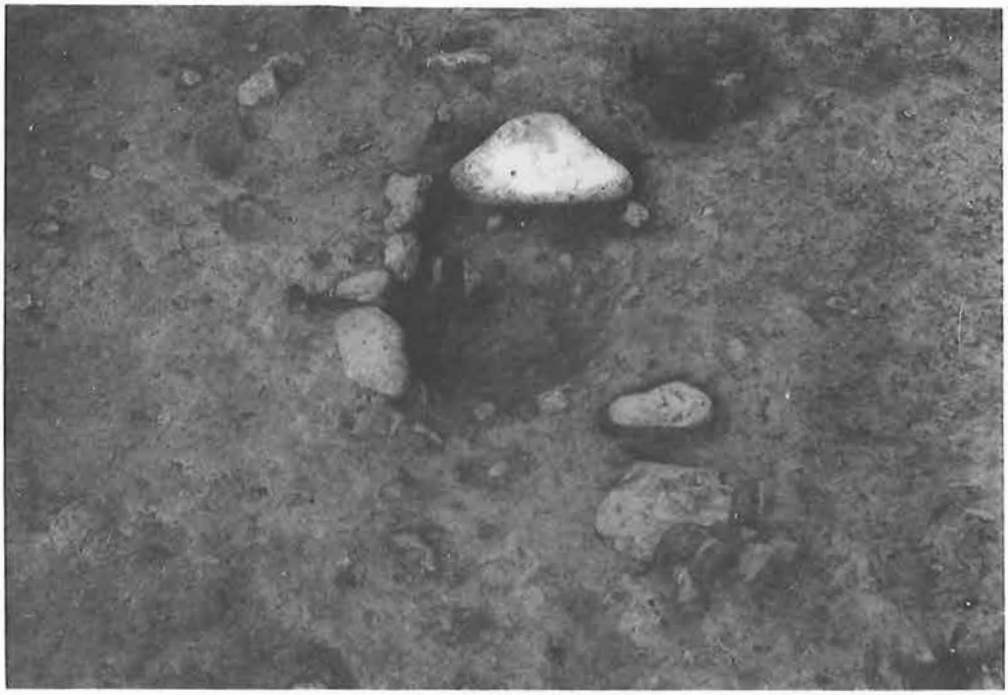


B　中世土坑

図版第57　月の輪平遺跡(57)



A　DII－6グリッド出土特殊坩群



B　第Ⅰ号住居址北側配石遺構

図版第58　月の輪下遺跡(1)

A　完掘全景－1

B　集石全景

図版第59　月の輪下遺跡(2)

A　完掘全景－2

B　第Ⅰ～9号集石全景

図版第60　月の輪下遺跡(3)

A　第１号住居址完掘

B　第２号住居址完掘

図版第61　月の輪下遺跡(4)

A　不定円形土坑完掘

B　第４号住居址完掘

図版第62　月の輪下遺跡(5)

A　第１号集石，および第５号住居址床面

B　第２号集石

図版第63　月の輪下遺跡(6)

A　第3.4.5号集石

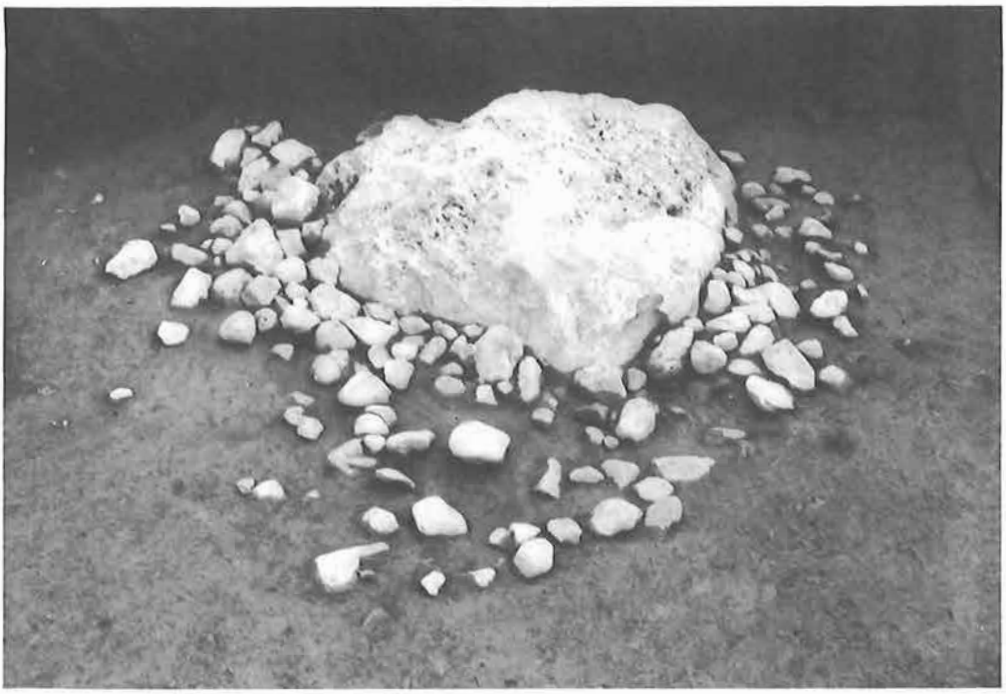
B　第６号集石

図版第64　月の輪下遺跡(7)

A　第７号集石

B　第８号集石

図版第65　月の輪下遺跡(8)



A　第９号集石

B　第２号住居址内集石

図版第66　月の輪下遺跡(9)

A　第９号中世土坑

B　第3.4.5.6.7.47号中世土坑

図版第67　月の輪下遺跡(10)

A　第22号中世土坑

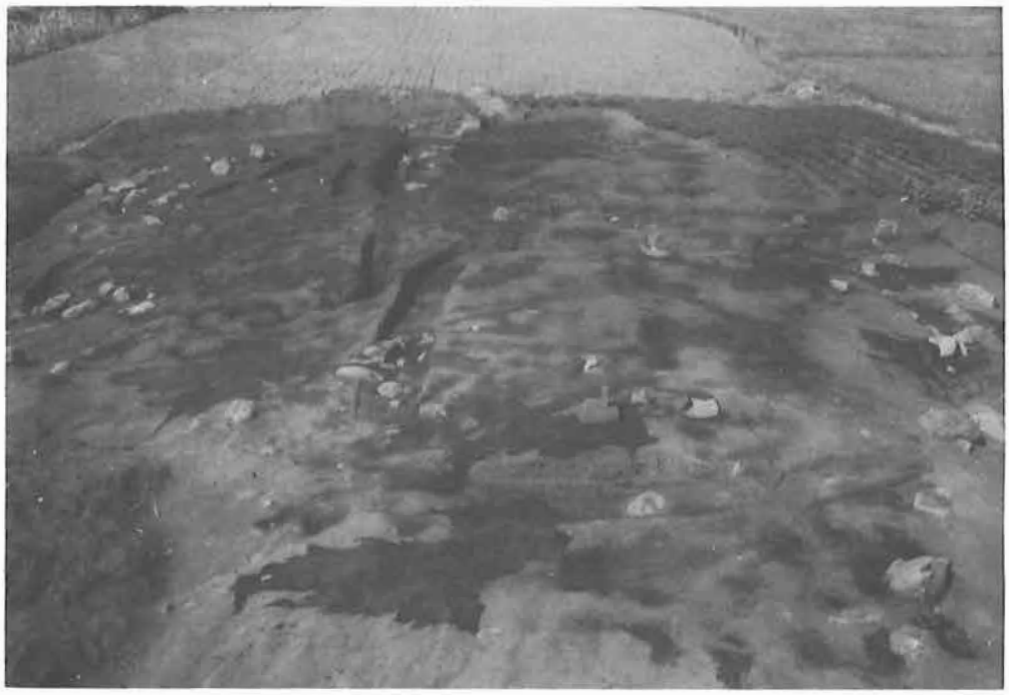
B　第43.50号中世土坑

図版第68　南部谷戸遺跡(1)

A　調査前景－1

B　調査前景－2

図版第69　南部谷戸遺跡(2)



A　方形周溝墓全景

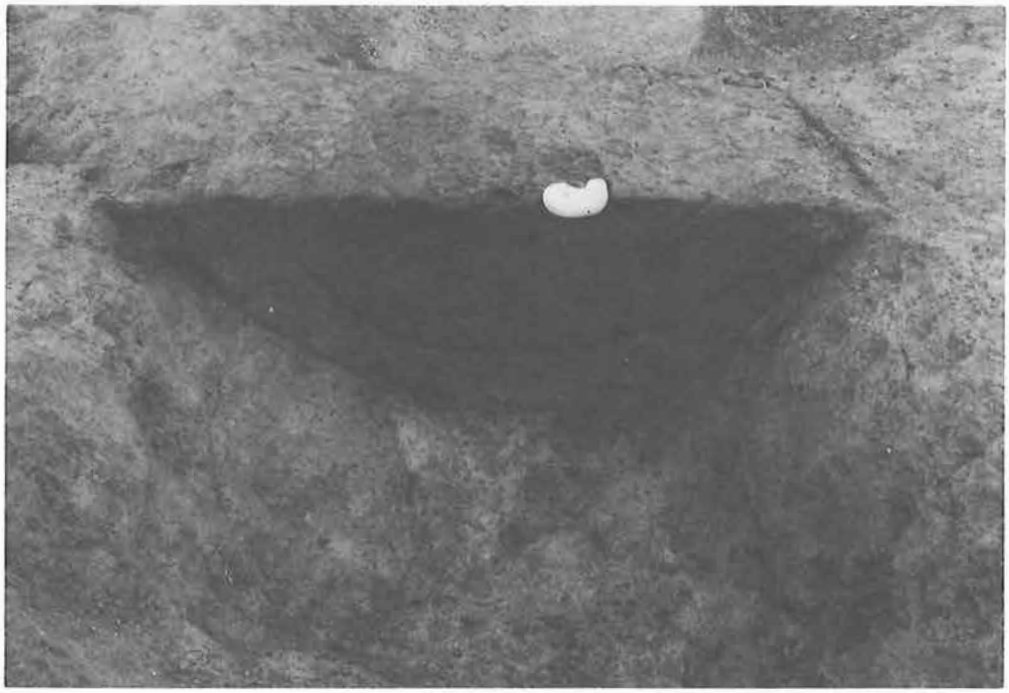
B　第Ⅰ.4号方形周溝墓全景

図版第70　南部谷戸遺跡(3)

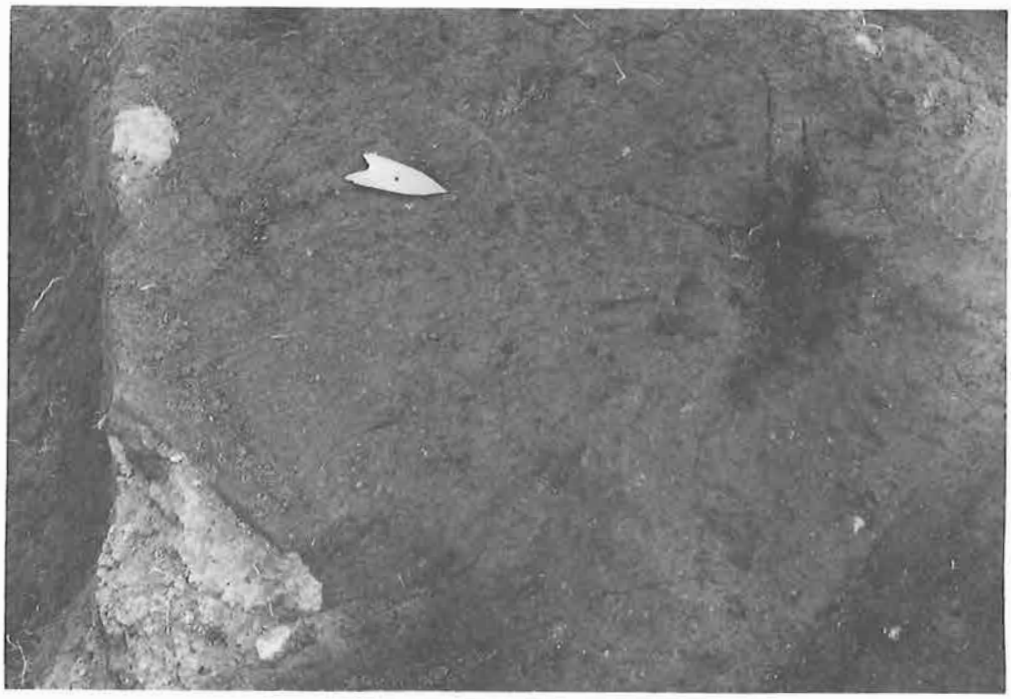
A　第2.3号方形周溝墓全景

B　第３号方形周溝墓内土坑

図版第71　南部谷戸遺跡(4)



A　第3号方形周溝墓土層断面，および勾玉出土状況



B　第3号方形周溝墓南溝磨製石鏃出土状況

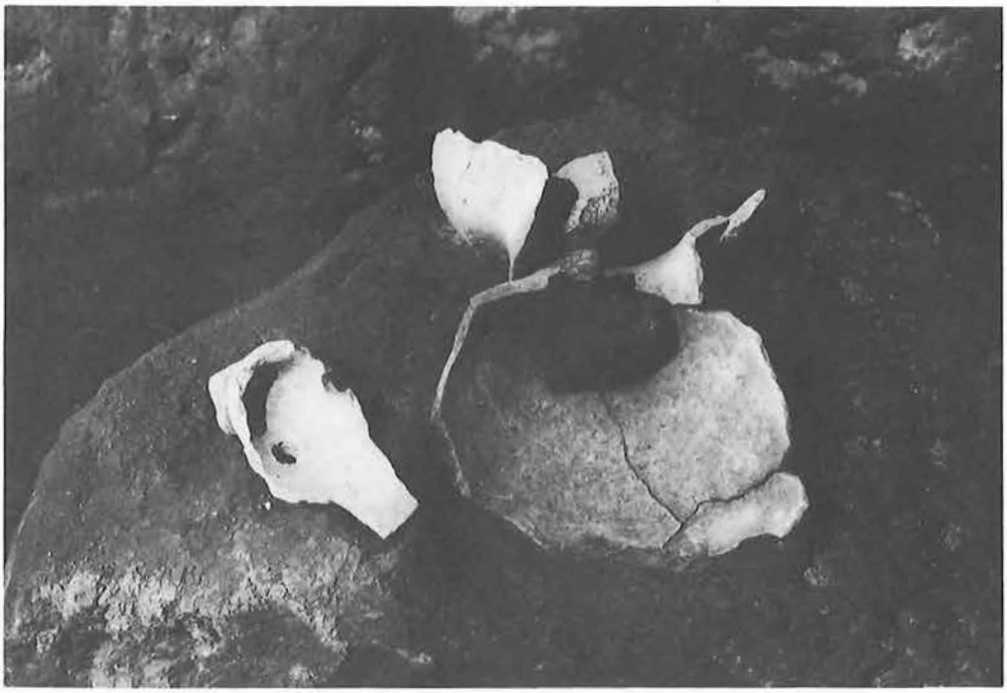
図版第72　南部谷戸遺跡(5)

A　第４号方形周溝墓西溝土層断面状況

B　第４号方形周溝墓南溝

図版第73　南部谷戸遺跡(6)

A　第４号方形周溝墓溝内状況



B　第４号方形周溝墓内土器出土状況

図版第74　南部谷戸遺跡(7)

A　住居址完掘全景

B　第Ⅰ～3号住居址完掘

図版第75　南部谷戸遺跡(8)

A　第4号住居址床面

B　第4号住居址掘り方

図版第76　南部谷戸遺跡(9)

A　第５号住居址床面

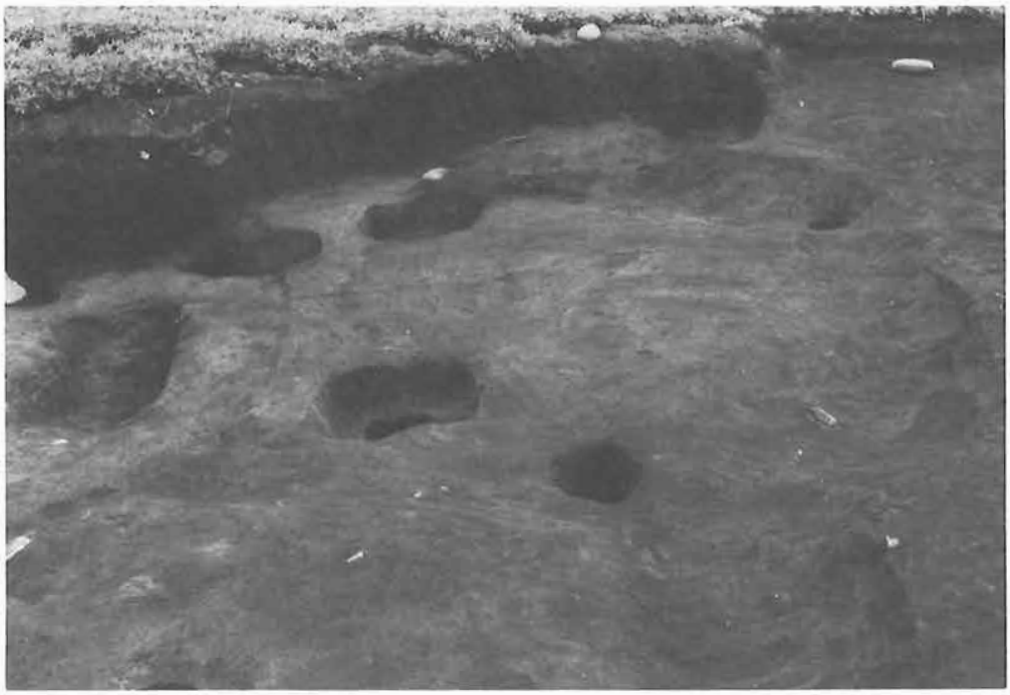
B　第５住居址掘り方

図版第77　南部谷戸遺跡(10)

A　第6.8号住居址掘り方

B　第12号住居址床面，および焼土露出状況

図版第78　南部谷戸遺跡(II)



A　第12号住居址掘り方

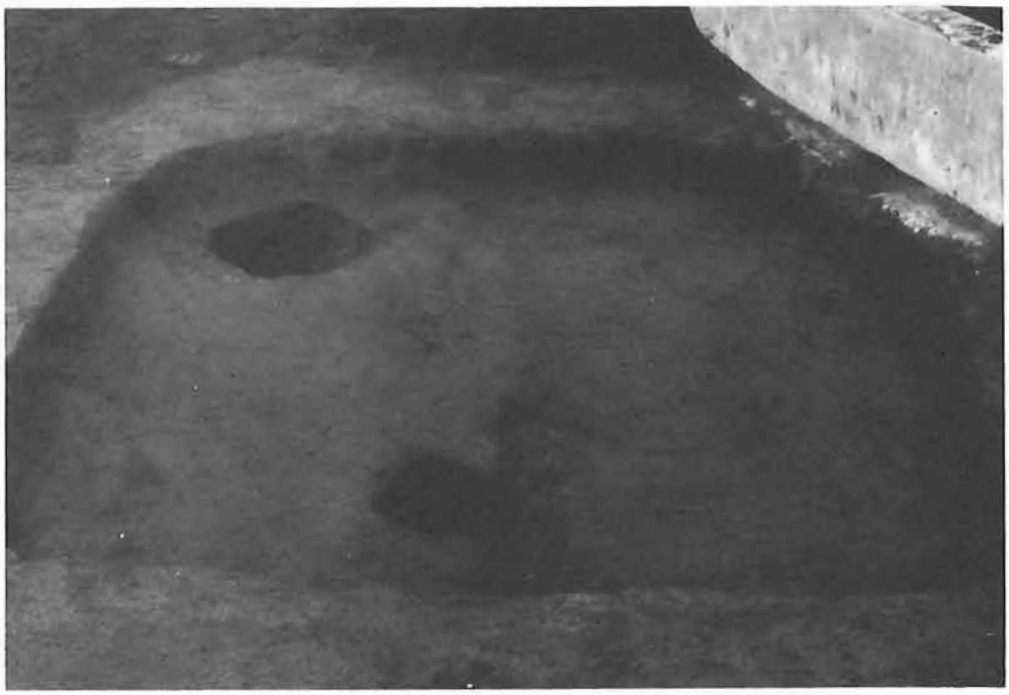
B　第12号住居址土器出土状況

図版第79　月の輪上遺跡(1)

A　調査前景

B　第1号住居址床面

図版第80　月の輪上遺跡(2)



A　第１号住居址掘り方

B　第２号住居址土器，および炭化材出土状況

図版第81　月の輪上遺跡(3)

A　第２号住居址炭化材，および掘り方状況

B　第２号住居址掘り方

図版第82　月の輪上遺跡(4)

A　第３号住居址掘り方

B　第４号住居址掘り方

図版第83　王藤内の塚(1)

A　調査前景

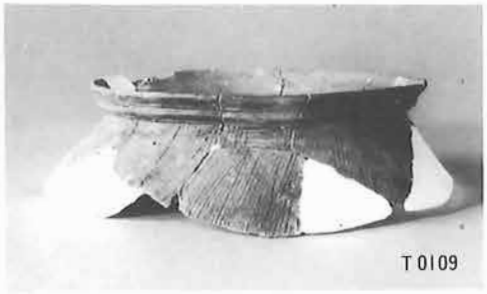
B　石組状況

図版第84　王藤内の塚(2)

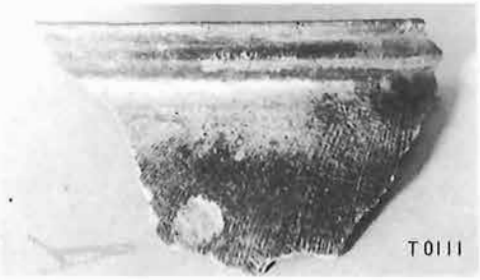
A　完掘全景

B　人骨出土状況

図版第85　出土遺物(1)

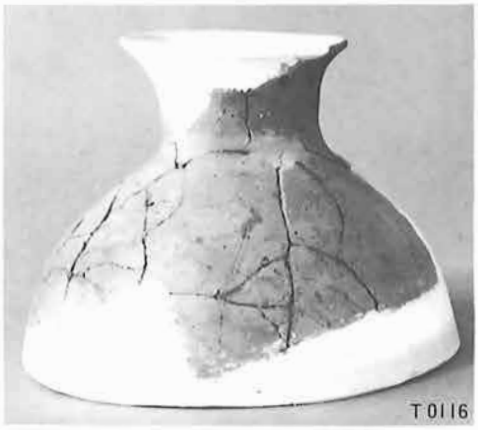


図版第86　出土遺物(2)

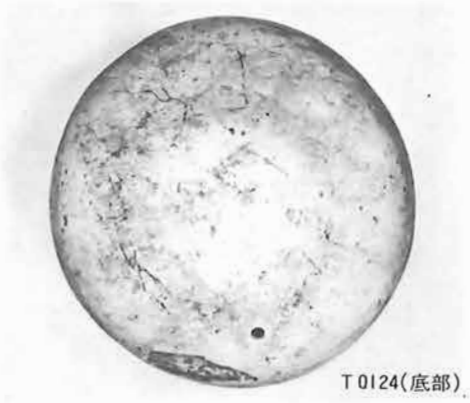


図版第87　出土遺物(3)

T0115


T0116

T0124


T0124(底部)

T0117

T0119

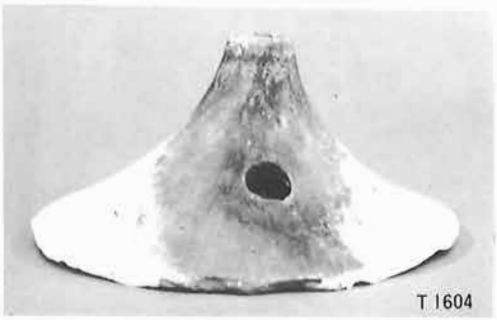
T0403

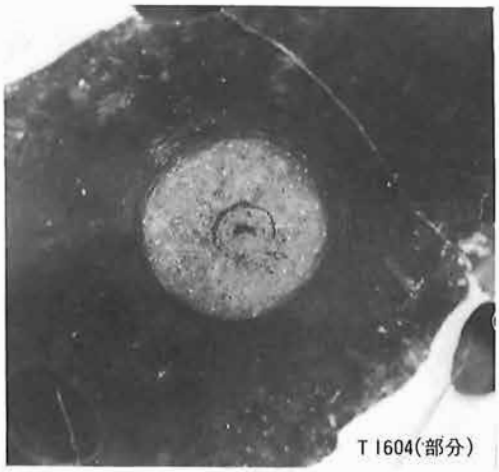
図版第88　出土遺物(4)

T 0801

T 1501

T 1501(部分)


T 1604

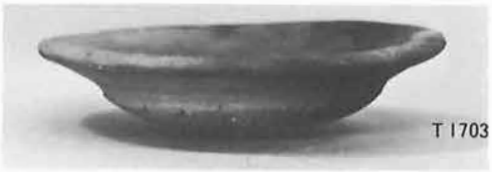

T 1604(部分)

T 1705

T 1701

T 1706

図版第89　出土遺物(5)


T 1703

T 1703(部分)

T 1807

T 1807(部分)

T 1803

T 1804

T 1806

T 1808

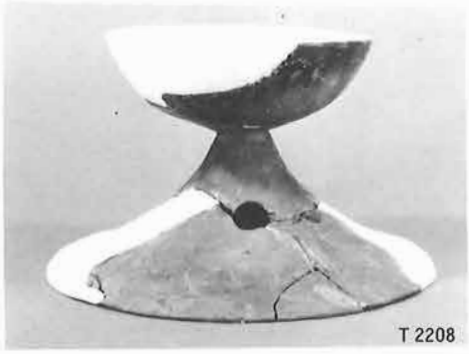
図版第90　出土遺物(6)

T 1809

T 2001

T 2003

T 2001(部分)


T 2208

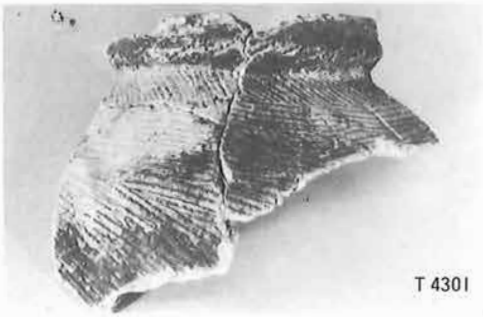
T 2212

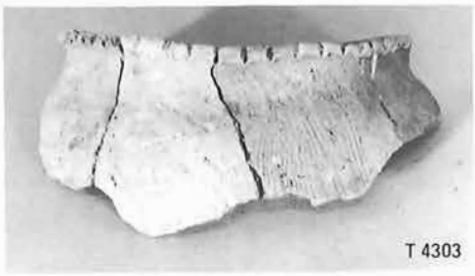
T 2601

T 4103

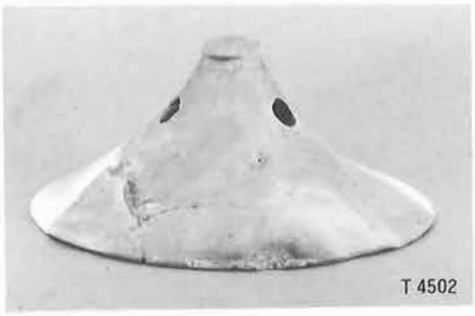
T 4204

図版第91　出土遺物(7)


T 4301


T 4303

T 4501


T 4502

T 4502(部分)

T 4801

T 4802

T 4504

図版第92　出土遺物(8)

T 5401

T (22)-(56)02

T 5601

T 5606

T 5901

T 5701

T 5702

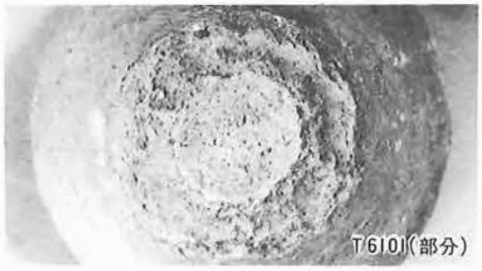
T 5703

T 5704

図版第93　出土遺物(9)

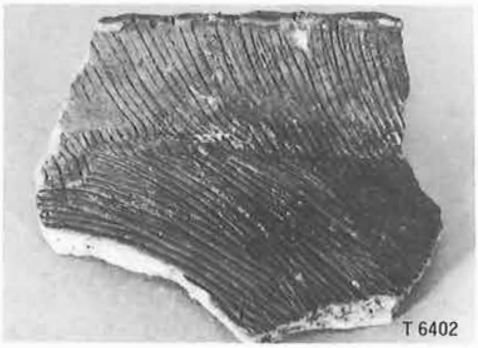
T 5602

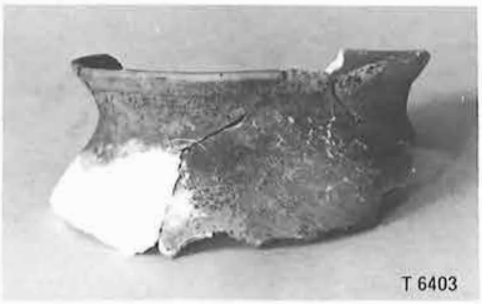
T 6101

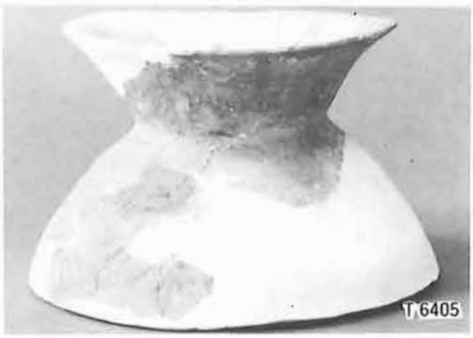

T 6101(部分)

T 6201

T 6202


T 6402


T 6403


T 6405

T 6408

T 6301

図版第94　出土遺物(10)

T 6902

T 6903

T 6902(部分)

T 6904

T 6905

T 7101

T 7206

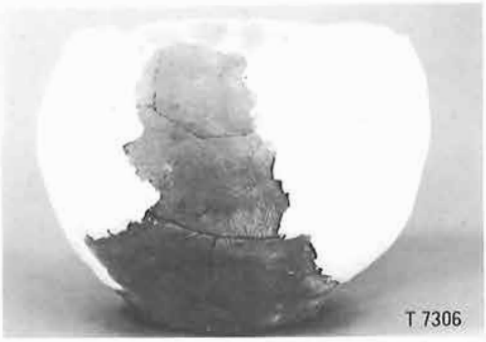
T 7202

図版第95　出土遺物(II)

T 7205

T 7301

T 7302


T 7306

T 7305

T 7802

T 7801

T 7801(部分)

T 8102

図版第96　出土遺物(12)

T 8104

T 10006

T 10007

T 10008

S 0001(接合部分)

S 0202

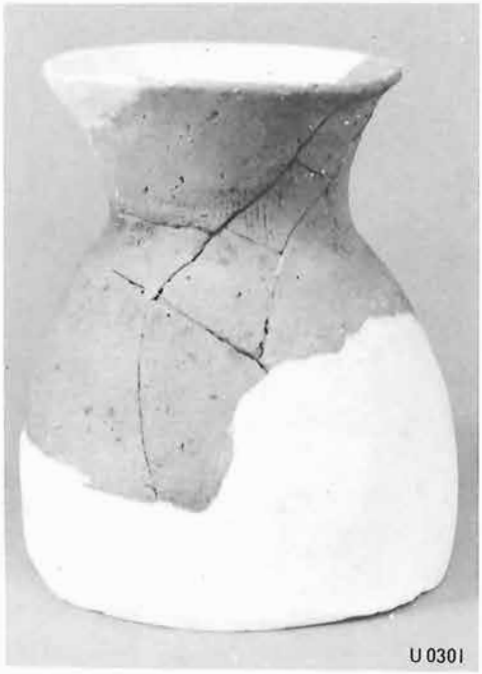
N 10002

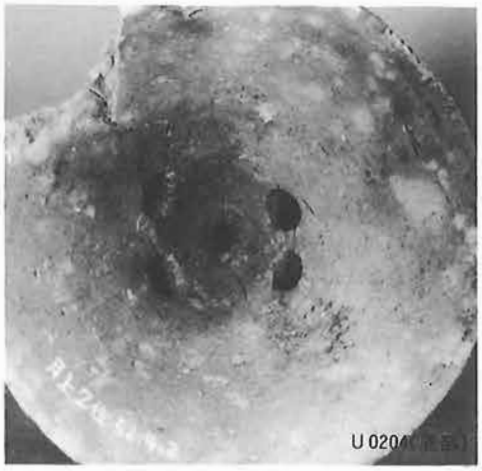
N H 301

N H 406

図版第97　出土遺物(13)

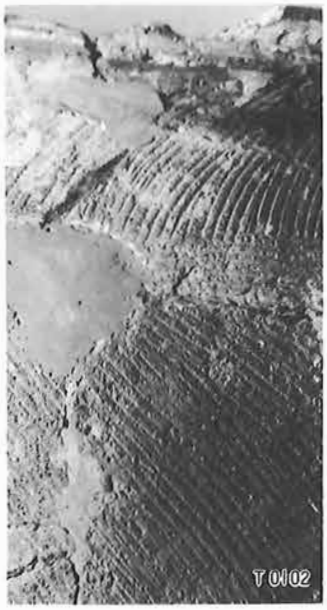
図版第98　出土遺物(14)





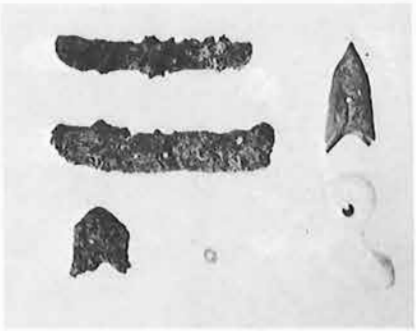
図版第99　出土遺物(15)

図版第100　出土遺物(16)

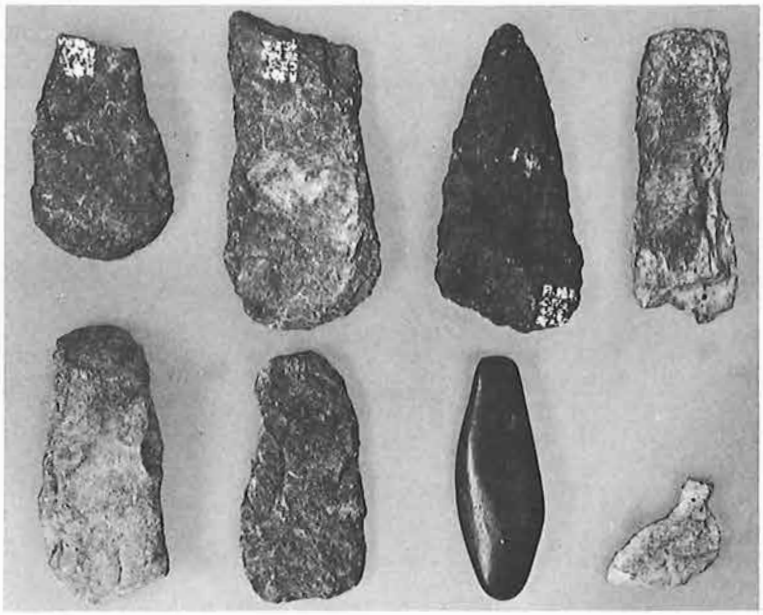


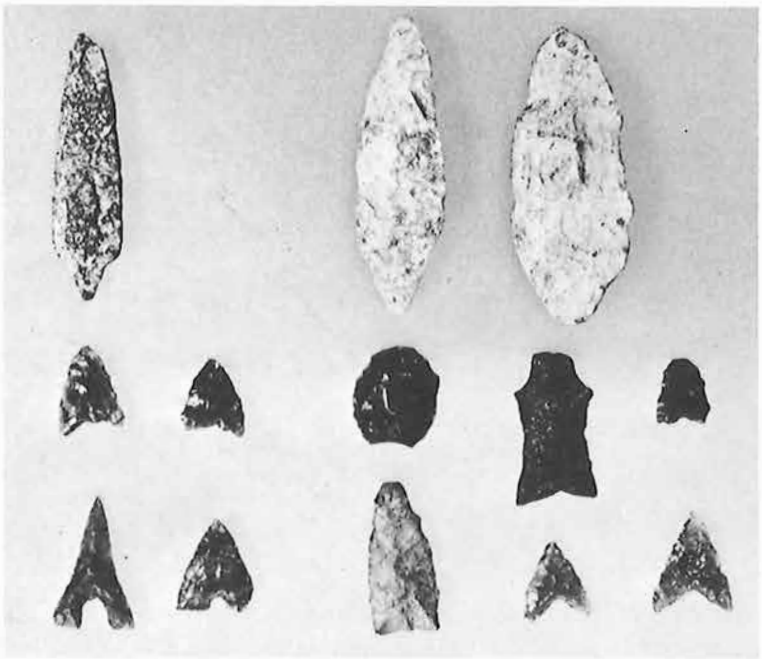
図版第101　出土遺物(17)

図版第102 出土遺物(18)



図版第103　出土遺物(19)





月の輪遺跡群

―星山放水路建設に伴なう発掘調査報告書―

昭和56年3月31日

編　集　月の輪遺跡調査団

発　行　富士宮市教育委員会

静岡県富士宮市元城町1番1号（〒418）

電話(0544)27－3111(代)

印　刷　図書印刷株式会社

沼津市大塚15

電話(0559)66－1111